

---

# 魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

ヨシユキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

### 【Nコード】

N8300K

### 【作者名】

ヨシユキ

### 【あらすじ】

神様の手違いで転生することになった主人公

…それがなげかりリリカルなのはの世界だった

はたして原作道理に進むのか？

## 仮想の未来（前書き）

はつきり言って思い付きの処女作です  
生暖かい目で見守って下さい

## 仮想の未来

……ハア……

オレは今、非常に特殊な状況に陥っている。

なぜなら

真っ白な空間に居るオレ

その目の前には……

土下座している女性らしき人がいるのであって……

あ、なんだろう……

一瞬で状況把握できそうな…

「つまり、神（仮）の手違いで現世でオレは予定外の事故に遭遇し…その…魂だけの存在になったと？」

「…ハイ、本当に申し訳ありません…」

話しによると、この人とは神様の秘書らしい。神様がうっかりミスでオレの寿命を消してしまったと。

…よし、ここはキレても神は許してくれるよね？

あ、その神のせいどころなっただっけ？

「テメエすみませんでしたじゃね〜だろ〜っ！！！！。大体加害者がなんでこね〜んだ ああ！？」

「ヒッ（泣） か、神様は今後の対応の為に、各部署で調整していきます〜〜う」

う、ちょっと脅かしすぎたかな…

「あゝ…済まない。貴女に言っても仕方なかったよな  
とりあえずコレで涙拭いて」

と、何故か普段は持ち歩かないハンカチを渡したのだが…

ヤバイ、泣き顔にちよつとグツと

「チ〜〜〜〜ン、ズズツ！」

…こなかったことにしよう うん

「あゝ そのつまりオレはどうなるのかな？ 今後の対応って…あの世にご案内ってこと？」

やっぱ事故とはいえそうなるだろうな

ああ、人並みな恋愛したかつ「リリカルなのは世界に転生じゃよ」  
たなゝ…って、何っ？

その声の方に振り向くと…

何故がピースをしていたご老人がいた

とりあえず秘書の人が懐から取り出したスリッパでその老人の頭を  
これでもかといづくらい殴打していたのは気のせいでしょう…

## チート設定は計画的に

「ご老人、貴方はもしや神（仮）ですか？」

返事がない…ただのしかばねのようだ…

「って儂はまだ生きとるわいっ！」

あ、復活した。

「ゴホンッ…ご紹介がおくれましたが、こちらが全知全能の神（仮）

…自己紹介がが遅れましたね 私は秘書を勤めている女神スクルド  
です（ニコッ）」

7

スクルドさん…スリッパ片手にその笑顔、微妙っす…

「で、神（仮）様、さっきあんた『リリカルなのは』の世界とか言  
っていたが…」

「儂スリッパで殴られたのにその事スルーっ？」

…まあ よい



うむ、

今回はこちらの手違いでおぬしに迷惑かけてしまったのでな 同じ世界に蘇生っていうのは無理じゃが違う世界：つまり平行世界の一つ『リリカルなのは』の世界に転生させるという事になったのじゃ」

転生については有り難い…が、

「なぜにリリカルなのはの世界なん!？」

「それはじゃな…、

この間見たDVDにハマっちゃった テへ(笑)」

…テへ じゃねえだろ神(仮)

「どつでも良いがその(仮)って何じ「神に見えないっ!てか、どこの世界に秘書にスリッパでしばかれる神様がいる」」

ああ、 隅のほうで神様がドナドナ歌いながらおちこんでるよ…

「か、神様 とりあえず彼に転生について説明をしないと」

スクルドさん ナイスフォロー…かな？

「む…そうじゃった」

復活早っ

「転生に関して特典？」

「うむ 今回はこちらのミスということだし… そなたに特殊能力を付加させるという特典がつくのじゃ」

キタ …… チートフラグ

「その能力って何でもいいのか？」

「まあ 可能な範囲でじゃが… ちなみに制限もないからの… フォフォオ」

「ただだけサービスしてくれるんだ さすが神様、太っ腹」

「じゃあ…」

身体能力、魔力、気、精神力をSSSランクオーバー

あ、勿論不老不死で外見年齢は任意で設定可能、

能力は、知っている漫画やゲーム、アニメの知識の能力、道具等はイメージで具現化できその使用可能。

能力使用のリスクなし、

さらに能力のアレンジも自由自在に

あ、リリカルなのはの世界ならデバイスも欲しいな〜

…インテリジェントデバイスとユニゾンデバイスも追加で〜」

ん？二人ともどうしたの？

「…どんだけチート人間じゃ…」

「ここまで遠慮しない人も稀ですね」

あ、確かにこれはやり過ぎかな（笑）

「まあ…流石に無理「別によいぞ」いいんかいっ！」あ、神様にツッコミをいれてしまった

「デバイスに関しては具体的な案はあるのかのお？ここまで来たら何でもどんと来いじゃー！」

あ、なんか神様もノリノリじゃん

「そうだな」

インテリジェントデバイスは剣タイプかな　男としては自分専用の剣つてのに憧れるし…　形はFFのクラウドが持っていた剣みたいなねがいいかな

能力としてマテリアが使用可能　あ、マテリアは取り外し式ではなく任意でマテリアが変化していくタイプで　マテリアも複数同時使用可能みたいな感じで

勿論カートリッジシステム搭載で

ユニゾンデバイスは…やっぱり女性型がいいかな　（ヘンナイミハナイヨ、

ホントダヨ）外見は17歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方で

ロングヘアーで顔も超美人でっ！」

そこ、石をなげようとししないでっ

「…欲望ダダ漏れですね」

スクルドさん…お願いですからそんな眼でみないで…

「まあよかるっ…」

ちよっと待っとなれ…」

「アル マーッ」

いやいや、それ呪文ちがうし〜っ

「冗談じゃ（笑）

今度はホントに…

カーーーーーッ」

そう言うとオレは光に包まれ…

「ホイ おわったぞい」

早ッ

「これでおぬしは身体能力、魔力（略）になったぞい

後インテリジエントデバイスはこの指輪が待機状態じゃ  
ユニゾンデバイスの方はもう少し待ってくれ

…おぬしの注文がアレな為な」

まあ ユニゾンデバイスは後のお楽しみにとっておくか…

「こちらのインテリジェントデバイスはまだ登録していないのでマスター登録してくださいね」

スクルドさんは指輪を渡してくれた

「マスター登録か…」

どんな名前にするかな…

10時間後

「お〜い まだかの？」

「神様 お茶のおかわりをどうぞ」

…をい 何ちゃぶ台だしてまったりお茶のんでるかな〜

「よしっ 決めた！」

マスター認証

…って あれ？名前が？」

おかしい 自分のなまえが言えない？

「おお、言い忘れておつたが 生前の名前はつかえないからの、  
そうゆう規則なんで自分の名前も改めて決めてくれ」

…だから そゝゆゝ大事な事は早くいってくれ…

さらに5時間経過

「神様 このお笑い芸人、狩野 と同じニオイがしますね」

「2年後に TAってCDデビューしていそっじゃの…寿命刈り  
取るか？」

…だからお笑いテレビ見ながら何しとんじゃい！ 神としての仕事  
どうした!？

「ん？ そつちは書記のアズラエル君がやってくれておるから大丈夫  
夫じゃ〜」

丸投げかよ…

「はあ… よし 名前はこれにするか」

名前も決めたし今度こそ…

「あ、いいでいいまたぎますね」

スクルドさ〜〜ん



名前決定！ ついでにデバイスも

「まったく CMまたぎってこれどっかで放送してるんですか？」

ああ 段々スクルドさんのイメージが…

「まあ 可愛いノリですっ」

「そんな事よりマスター登録しなくていいのかわのう」

あ、そうだった

「それじゃ…三度目の正直っ！」

マスター認証

かみしろ

キョウスケ

神代 恭介

術式

ベルカ主体複数混合ハイブリット…

我がデバイスに個体名称を登録…

愛称【インフィ】 正式名称

【インフィニティ】…」

『登録完了…』

マスターバリアジャケットをイメージして下さい』

そう言われて俺は思い描く…

…黒のロングコートに… 腕にベルトを巻いて… インナーは…黒

にしとくか…ズボンはジーンパン風に…腕には籠手を…まあ  
こんなものか…

「よしっ…インフィニティ Set Up!」

『オーライ マイマスター バリアジャケットSet Up』

おおー スゲー ホントにバリアジャケット展開したよー

「どうかなスクルド？似合うかな」

そうスクルドの方を見ると…

「……………」

アレ？ なんか変だったかな？

「ス、スクルドさん？ どうか変だったかな？」

初めてにしてはまあまあだと思っただけだよ…

「い、いえへんではないですよとても似合ってます……………／／／」

なんだろう？顔が赤いのは風邪かな？

「はあ…ありがとうございます（ニコッ）」

「!!!!!!……//」

さらにスクルドさんの顔が赤くなったよ… 女神でも風邪ひくん  
だなー あ、顔から煙まで…

Side Out

スクルドSide

「はあ…ありがとうございます(ニコッ)」  
ヤバイ…あの笑顔は反則よ…//

私の周りにはいなかったタイプだわ

ああダメっ そんなに見つめられると…  
顔が赤いのが自分でもわかるわっ… ボンっ！ボタン…

Side Out

キョウスケSide

「よし インフィ バリアジャケット解除つと」

そう命令するとインフィは元の指輪に戻った      どうでもいいんですがこの指輪…

「…なあ神様、この指輪つて… どう見てもボンゴレリングにしか見えないんだが…？ しかも大空Verつて…」

そう この指輪 あきらかにボンゴレリングそのものなのだった！

( 枷はずす前 )

「ん〜 この前、下界で拾った本に載っているのを見て気に入ったから」

…だからいいのか？神様それで…

「まあ とりあえずこれで準備は調ったことだし 早速転生してもらうのじゃが…どうした？」

転生はうれしいんだが…

「『リリカルなのは』の世界だよな？」

オレ 多少は知っているが 原作知識穴だらけなんだが」

そう そうなのである。

オレは『魔法少女リリカルなのは』は知っている 知ってはいるが  
知識がかなり穴だらけ てか原作知識か3割位であるわけで…

作者【まあ 私も知識はうる覚えですからね】

…なんだ？ 今変な電波が？

『気のせいですよマスター』

そうなのか？インフィニティ…？

「まあ 必ずしも原作道理にする必要はないから安心せい

あくまでも平行世界の可能性の一つだから別に原作ブレイクしよう  
がハーレムつくろうが問題なしぢやよ フォフォフォ」

いや 人としてハーレムはどうかと思うが…

「…まあ 善処するよ。

確かりリカルなのはって 無印 A s S t r i k e s っであつ  
たけど… やっぱ無印からか？」

無印ってあまり知らないんだよね

「いや 正確には、おぬしには無印とA sの間に逝ってきてもらう  
…じゃ」

「って ちょっとまてい！ 明らかに字が違うよな って何？この  
魔法陣??？」  
そうしてオレはリリカルなのはの世界に転生された…

S i d e O u t

ちなみにスクールは真っ赤になってクネクネしながら倒れたいたのは  
気のせいだと思う… てか思いたいっ

「キヨウスケ君くっくっ／＼／＼／＼」

## 転生先でばったり

「つつ…ここはどこだ？」

目を覚ますとそこは公園だった

…あの神… もっとまともに送らんかいっ

とりあえず現状を確認しないとな…

「インフィ、ここがどこかわかるか？」

まあ あの神が言う所のリリカルなのは世界なのは確定だと思っ  
が…

『…検索結果、どうやら海鳴市内のようです。』

えらくザックリな説明だな

まあ いいが、…ん？ なんか目線がいつもより低い気が…

『マスター どうされましたか？』

「いや なんかいつもより目線が低いな」と思って…」そんなんで  
す なんか周りが高いというか…

『ああ、 現在マスターの年齢が10歳前後になっている為です』

なんだ そうなんだ〜…って

「なにいいいいい？」

僕は急いで近くのトイレの鏡で姿を確認…

ホントだ…orz

元の年齢22歳だったのに これが転生仕様なのか… っ

「あ、たしかチート能力で僕の年齢任意に変えられ『現在その能力だけは一時的にリミッターがかけられています』なにつ？」

リミッターって…神か？ 神のせいか？

それにしても…

「瞳が蒼いつて…」

なぜか瞳が某1stソルジャーみたいな魔晄エネルギーを浴びたよ  
うな蒼い色になっていた

ま、気にしないけどね（笑）

「ん… 子供の姿って… ねえ インフィ、僕の戸籍や住む所とか  
この世界ではどうなっているのかな？」

そう 平行世界に着いたはいいが生活に必要な衣食住が僕にはない。  
お金すら持っていないし子供の姿だからバイトも無理、どうしよ

っ…



『マスター メールが届いています。差出人は…神 となっ  
ていますが いかがしますか？』

え？ 神だつて？

「インフィ メール開いてっ！」

メールには…

【これ生活費にしてねっ あなたのスクルドより】と書いてあった…

…まあ…これでお金は問題ない

…通帳に見たこともない桁の金額が…

経済傾くぞ…多分

それからこの世界での僕の身分は神様が偽造してくれたみたいだ

…子供で一人暮らしって何だか…

だが家がないっ…

まあ 最悪野宿かゝ この年齢じゃホテルに行っても無理だし 警  
察に後厄介になるし…

とりあえずこの世界の情報収集でもするかな

と　　いうわけて今日の前に図書館があります

とりあえずもといた世界とこちらの世界の知識のズレを直さないと

「ん〜　予想はしていたけど　こちらの世界も基本的には変わらない、か…」

あれから1時間で僕はあらかたこちらの世界の事を確認した  
え？なんでそんな短時間で？

まあこっそりインフィに手伝ってもらったからだよ

「とりあえず今日はこのあたりにしてテント買いに行かないと…ハ  
ア」

身体能力もチートだから風邪は引かないと思うが　精神的につら  
いな〜　鬱だ〜

そう考えて手に持った本を返そうとすると…

「…んん〜　とどかへん　もうちよい…」

車椅子に乗った少女が

これが僕と【八神はやて】の出会いだった…

八神はやて(前書き)

原作キャラ設定まぢがっていたらスミマセン

## 八神はやて

はやてSide

私は今図書館にきている。

普通ならこの時間は学校にいつてなかあかのやけど…

そう…【普通なら】

残念な事に私は両足が不十分なんよ…それに私は一人暮らし、両親は私が小さい頃に…っとイカンイカン、なんか湿っぽくなってもうたな

そうゆう訳で私は一人で生活していかなアカンので学校は休学中や。でも一人暮らしとはいえ、私には援助してくれるおじさんがおるんや

ただ、一度も会ったことはあらへんのやけど…

私は唯一の楽しみの一つ、読書をしようと思ってるんやけど…

「…ん〜 とどかへん もうちよい」棚が高くて微妙にとどかへん

よ〜し こうなったら意地でもとつたるで〜 関西人パワー全開や

そう気合いを入れていると

「この本が見たいのかな？」

そう言って本を取ってくれた男の子がおったんや… ただ…

「…綺麗な瞳や…」

つい口にしてしまった／＼

Side Out

キョウスケSide

僕の目の前で本を取ろうと格闘している女の子が…アレ？どっか  
でみたような？

『（マスター、レディが困っているのです 助けてあげましょう）』

とインフィから念話が

「（まあそうだよな） ねえインフィ、このコどっかで会ったこと  
あったっけ？」

『（マスターはこの世界に来て半日もたっていませんよ？お知り合  
いはいないはずですが… ナンパの手段としては古いですよ？）』

ぶっ！こ、こいつ性格変わってきた！？

「（ち、ちがうよ…ただホントに見たことあったからだからっ…  
そりゃ確かに可愛いコだけど）」

『（マスターはあーゆるタイプがお好みですか、確かに将来美人  
確定ですね

ホラ マスター 早く助けないと）』

こ、こいつ いつかマ改造してやる…

えっと 僕は少女に近づき

「この本が見たいのかな？」

僕は彼女が取るうとしていた本を代わりに取ってあげると

「…綺麗な瞳や…」

『（マスター、速攻フラグ確立ですね）』

…っ、否定できない

気をつけよう 名前で呼ぶのは フラグ確定？

「今日からここがキヨウスケ君の家になるんよ。だったら帰って来た時は【ただいま】って言うんやで？」

なんでしょう…この急展開は

同棲フラグ？

『（マスターが大人の階段を「（黙れ潰すよ 物理的に）」… ye  
S M Y M a s t e r（）』

一体どうなったらこんなこと…

数時間前

「へ〜 ほんなら キヨウスケ君はついさっきこの街に着いたばかりなんやね〜

でもびっくりしたで 一瞬外人さんかと思ったわ〜」



僕と八神さんはお互い自己紹介した後 歳が近いということ色々と話しをしています。

…どこかで見たとあると思ったら、このコが原作キャラの一人【八神はやて】と思い出した

確か闇の書…正確には夜天の書の主になる子…

どうやらまだヴォルケンリッターは現れていない時期らしい…あれ？いつ現れるんだっけ？ あ

「よく言われるよ 生れつきこんな瞳をしているからね

あ、そうだ、八神さん。このあたり「キョウスケ君！」ハイ？」

な、なんだ？八神さん なんか急にむくくくってこっち見てるけど？

「…や…んで…や」

え？なに？

「だ、だから…うちの事は【はやて】って呼んでほしいんやけど…駄目？」

グッ…このコは…

はやてSide

「わ、わかったよ はやて（ニコッ）」

「……／／／／／っ」

あかん あの笑顔…反則や 自分でも顔が赤いのがわかるわ

キヨウスケ君 天然でやってるんやろうか？

「そ、それでキヨウスケ君、う、うちに聞きたいことってなんにゆ  
？」

あかん 緊張して噛んでもうた／／／

Side Out

キヨウスケSide

あ、はやて今絶対噛んだな… まあ 気付かないのが紳士の努め…

「あ、このあたりにホームセンターとかないかな？ ちょっとテ  
ントを買いに行きたいんだけど。」

「テント？ どっかキャンプに行くん？」

「あゝいや…住む所が今の所なくて、とりあえず野宿でもしよう

「あかん！！」「うおっ！？」

って どうしたのははやて びっくりした〜

「あかんで！ 野宿なんて 風邪でも引いたらどないすんねん」

いや チート能力のお陰で風邪は引かない…とも言えないしな〜

「それに家族の人も心配するで！」

そついえば言っでなかつたな〜

「あ〜 はやて、僕に家族は（こつちの世界に）いないんだ…」

平行世界にはいないよね〜 元の世界では元気にいるけど

「あ……ごめん……」

あああああ〜！ はやてが分かりやすいくらい落ち込んでる〜っ！

『（当たり前です マスターはKYですか）』

インフィ… ホント初期と性格が違うっス…

「あ、あの はやて 僕はぜんぜん気にしてないから

だからあんまり気にし」「そつや！」「っでなんですか!?!」

なんだろうっ…落ち込んでると思ったら急にキラキラした笑顔でこつ

ち見ているが…

「な、なあ キョウスケ君… よ、よかったら……その……」

私と一緒に住まへん？／／／」

爆弾が投下されました

## 主人公補正でも勝てないもの

と いう訳で前回の冒頭に戻る訳だが…

「ねえ はやて…さすがに出会って半日しか経っていない人を家に招き、しかも一緒に暮らすってのはマズインじゃないかな… それに、はやてのご家族に何て話したら…」

「…わたしも一人暮らしだから大丈夫やー」

あ…忘れてた

確か原作だとヴォルケンリッターたちが現れるまで一人ぼっちだったんだっけ…

『（マスター…本ツ当にダメダメですねー - 100000点です）』

なにその減点方式の基準!?

あ、そうだ

「（インフィ…僕にリミッターかけて魔力反応を0にできるかな?）」

『（…まあ可能ですが…何か不都合でも?）」』

そう、かなり不都合なんです

僕の魔力はSSSオーバーなので、この状態でヴォルケンリッター

達と出会ったりしたら…バリバリ警戒心持たれてしまうのは確実  
時期が来るまでは一般人として振る舞わないと

それに万が一管理局にバレたりしたら… 無理矢理就職 強制労働  
確定だし…

最悪人間ロストログア扱いで永久封印とかもありえる…

まあ 万が一そうなった場合は囑託魔導師になれば永久封印だけは  
免れるが…

めんどいのはないに越したことはないしね

『（分かりました ……リミッター設定完了。これでマスターの魔  
力反応は0になりました）』

これでとりあえずは安心…か

「……………く キ…ウ…ケ……………君  
キヨウスケ君てば！」

S i d e O u t

はやてS i d e

「…わたしも一人暮らしだから大丈夫やー」

そう わたしは一人ぼっちやった…

でも…今は…

「キヨウスケ君？」

…どないしたんやろ？ 考え事？

やっぱ一緒に住むんは嫌なんやろつか…

こんな不十分な足のうちなんて面倒…やろつか…

「…キヨウスケ君？」

ダメや なんかブツブツ言つとるし…

そう思うと急に不安になつてしもつ…

「キヨウスケ君てば！」

あかん！つい大声だしてもうた

Side Out

キョウスケSide

「うわっ！ どうしたはやて？」

びっくりした〜 急に大声で呼ばれるとは思わなかったよ〜

「あ……その……うちと一緒に住むのは…嫌なん？」

うっっ そんな涙目で訴えないで下さい ライフが 残りライフ  
があああ〜

『（はやて嬢の攻撃！ダイレクトアタック！！ マスターのライフ  
は0になりました）』

……まあ これは断れないよな〜

「うっん そんな事ないよ

それじゃ… お世話になります はやて（ニコッ）  
そういつてはやてと握手しました

はやての顔がまた赤くなっていたのは…

気のせい…だよな？



☐ (マスター 少女相手に1ターンキルですか) ☐

ち~~~~が~~~~う~~~~

新婚？生活（前書き）

すみません！

今回の話と次の話 抜けていました！！！！

ゴメンナサイッ

## 新婚？生活

とりあえず、僕ははやての家に住むことになりました。

「さあ、今日はキヨウスケ君の歓迎会や」

腕によりをかけて夕飯作らなあかな」

どうやらはやては僕の為に歓迎パーティーを開いてくれるみたいで  
す

なんかはやて…うれしそうだな

…っと、さすがにはやてだけに料理作らせる訳にもいかないか

ん？ 僕に料理ができるのかって？

そりゃ、前世で一人暮らしだった時は料理作っていたからね

…中の下レベルだけど

「はやて、僕も何か手伝うよ。」

Side Out

はやてSide

ん〜 今日はどんな料理作るかな〜

せっかくキヨウスケ君に食べてもらうつんやから…美味しいって言うてほしいわ〜／＼／

さ〜て 冷蔵庫を開つけて〜……………ああああ〜orz

し、しもうた 玉子があらへん せっかくキヨウスケ君に特製オムライス食べてもらいたかったのに〜…

よし！ここはひとつぱ「はやて、僕も何か手伝つよ。」  
…ってキヨウスケ君？

Side Out

キヨウスケSide

あれ？なんかはやて困っているみたいだな

「はやて、どうしたの？」

「そ、それが…ちよ〜っと材料が足りなくなてな

あ、これから私が買ってくるからキヨウスケ君は待っててな」

いやいやいや さすがに車椅子の女の子を一人買い物に行かせて僕は待つてるだけってのは…

「いいよ はやて 僕が代わりに買ってくるから」

「そ、そんな ええよ 私が買い忘れたんやから……」

…はぁ このコは

「はやて、僕ははやてと一緒に住むんだよね？ だつたら遠慮なんかしないでいいんだよ 僕ははやてと家族になりたいんだし」

『（マスター いきなりプロポーズですか？）』

グフツ！… いきなり何をいうんだインフィニティさんっっ／／／  
そんなんじゃないやいっ！

…あゝはやてさんが真っ赤になって俯いちゃった…

『（これぞ天然フラグメーカー属性ですかゝさすがマスター 私も鼻が高いです）』

いや インフィニティさん 変な感心しないでよ

「…ほんまに家族になってくれるん…うれしい…／／／」

うづ ヤバイ お持ち帰りしたい位可愛い… いやいやいや しっ  
かりしる俺っ！

「そ、それで何を買ってくればいいんだい？」

なるべく平静を装い聞いてみると どうやら玉子がなかったらしい

「じゃあ すぐに買ってくるよ。 行ってきます」

外に出て顔を冷やさないと…

お店はちゃんと確認してから選ぶほう！（前書き）

すみません 抜けていた話です どうぞ

お店はちゃんと確認してから選ぼう！

キョウスケSide

うっ… 我ながら恥ずかしい台詞を…

多少は外の空気をすってクールダウン中です

とりあえず近くの銀行へ行き、神様が偽造してゲフンゲフン…

…用意してくれた貯金を下ろして今商店街で買い物中です。

え、何か問題ありましたか？

偽造？ なにそれ おいしいの？

さーて はやてに頼まれた買い物は済んだし… 少し財布も余裕あるな、

…デザートでもお土産に買って帰るか

『マスター でしたらあそこの喫茶店でケーキでも買っていきまし  
』よ



ん…そうだな ちょっと寄って行くか…

僕はその時気付くべきでした…

その喫茶店が…

【翠屋】 だった事に…

カランカラン

僕はお店のドアを開けると

「いらっしやいませ〜」

…バタン

…そのままドアを閉めました

OK キョウスケ とりあえずCOOLになれ。

今さっき居た女の子、 ツインテールがピョコってなっていて、声  
がV。 田村ゆかり っぽかった女の子… あれは…

とりあえずもう一回ドアを開け…

「い、いらっしやいませ〜」

うん 確定！

魔王様こと【高町なのは】ご降臨っ！

どこからか『魔王じゃないもん！』という電波が聞こえたような…

魔o…なのはSide

「いらっしやいませ〜」

私は今お店のお手伝いをしていたんだけど… じゃあああ！

今入ってこようとした男の子、私の顔を見たときとたんドアを閉めちゃった〜 なんて〜??

あ、またドアが… あ、またあの男の子だ

うう〜 私何かしたかな〜？

Side Out

これが高町なのはとのエンカウントでした

『【てきよけ】のマテリア装備しますか？』

おそいわっっっっっ！

## エンカウント

「あ、さっきはごめんね　ちょっと知っている人と勘違いしちゃって…」

とりあえずはごまかさないと…

それと迅速に用件を済ませて帰らないと…　なぜか嫌な予感が…

「えっと、テイクアウトでシュークリームを4ついただけますか？  
(ニコッ)」「

「…／／あ、はい　少々おまちください」

テッテッテッテ…ガシャン！！

あ、こけた

あんなに慌てなくてもいいのに…

ん？　何か視線というか殺気が…

…そういえばここにはシスコン属性もった危険人物がっ

『(マスター　貴方の事は忘れません)』

おいこら　勝手に別れをつげるなっ！

「あら、この辺じゃ見かけない口ね」

おお、この声は 高町家の影の最終兵器…

なのはのお母さん【高町桃子】さんっ

うわっ ホント生で見ると若いな

この一家って見た目若いんだよね

…なにげに不老一家かってツツコミたくなるが

「あ、はい 最近このあたり引越してきました、今親戚の家」  
厄介になっています」

まあ 微妙に嘘はいつてないよな？

桃子さんは あらあまだ小さいのに偉いわね とか言っている  
が

そりゃ〜中身は成人青年ですからね  
それなりの対応は可能ですよ

「お、おまたせした〜／＼／」  
お、どうやらなのはさんがシュークリームの入った箱を持ってきて  
くれたみたいだ

いや だから何故頬を赤らめてイラッシャルンデスカ？

『…ハーレムルート一直線』

…こいつは…

ハッ！

殺気が強くなった！！

とりあえずここは撤退したほうがいいかな

「ありがとう 可愛い店員さん」ニコッ

「／／／／…あう」

びきーん

は、！僕は一体何を

『（天然とは恐ろしいですね）』

うう…否定できませんよインフィニティさん

「じ、じゃあ お代はここに置いておきますね あ、お釣りはけっこうですのでそれじゃー！」

とりあえず殺気がこれ以上にならない内にお店をでました

後ろの方で男の人の声があったような気がしたが 気にしないでおこ  
う…

「インフィ…とじめえぞ【リッキー】と【てきよけ】のマテリア装  
備して…」

気がつけばお約束？（前書き）

すみません、今回は短いです



気がつけばお約束？

「ただいま」

あの後、逃げるように？翠屋を後にした僕は無事に八神家に帰宅できました

『色々なフラグは立ちっぱなしですが』

某シスコン兄との決闘フラグは勘弁してほしいが…

『まあ マスターならばちつと相手を瞬殺でしょうが』

…やれやれ 安息の日はないのかな…

あれからはやての料理に舌鼓を打ち（ホント美味しかった）、お土産に買ってきたシュークリームを二人で食べ（はやては喜んでくれたな）今二人で居間にいるのですが…

「そういえば…はやて、僕はどこで寝たらいいのかな？」

まあ 居候の身ですからソファーでもいいのですが

「ん〜？ 一応お客さん用の部屋があるけど…もしキョウスケ君が

よかったら…その……一緒に…寝よか？／／／

OK、ガール、少し落ち着こうか。

「…あの～はやてさん 分かっていると思いますが…

僕男の子なんですが？」

「うん わかつとるよ…でも…

キョウスケ君の事信頼しとるから平気や／／／

『（マスター これは断れませんね）』

しかもとどめに

「うちと寝るの…嫌なん？」

つて涙目で言われた日には 罪悪感が～

…数時間前にあった「お風呂に一緒に入ろう」発言は何とか丁寧に  
お断りできたが…

『（あれは笑え…大変でしたね）』

そのこのデバイス！今笑えるとか言いかけただろっ！

「ううう わかったよはやて、じゃあもう夜も遅いし寝ようか？」

「うん………／／／」

いや ホント ロリコンぢやないから手は出さないよ ホントだよ  
？

僕ははやてを俗に言う【お姫様だっこ】をして寝室へ行き一緒に寝  
ました

…はやてが寝ぼけて抱き着いてきたので、精神が削られていきまし  
たが…

気がつけばお約束？（後書き）

作者「とうとうストックが尽きた…」

インフィ「ならさっさと執筆してください」

作者「いやゝあつたはずの資料が行方不明になっていた為、発掘が大変で…」

インフィ「…」

作者「とりあえず微かな記憶とインスピレーションでがんばります」

インフィ「そろそろあのイベント発生ですが大丈夫ですか？」

作者「…たぶん」

インフィ「少し…頭ヒヤソウカ？」

作者「な、なるべく早く更新できるよう努力いたします

誠にすみませんっ

てかキャラというかデバイス違っし〜」

ズガガガガガーン

能力確認は計画的にネ（前書き）

な、なんとかできた…

## 能力確認は計画的にネ

「…んん… 朝か ……」

僕は起きようとしたが…アレ？ 動けない？ 金縛り！？

そう思っていると隣には

「…ZZZ」

僕の体に腕を回して抱き着いて寝ているはやてがいた…

『（おはようございますマスター 昨晩は大人の階だ（潰してほしいのかな…インフィニティ？）」「ガタガタガタ）』

とりあえず、はやてを起こさないように…っと

僕はそーっと部屋から出てリビングへ

「（さて、と インフィニティ この部屋に認識阻害の結界を）」

そう たしか原作ではこの八神家、ギル・グレアムに監視されていた筈 その使い魔のロツテ アリア（だったかな？）の猫姉妹もいたはずだし… まあ 既に僕の存在は気付いているだろうが…

『結果を展開させていただきましたマスター様』

…まあ…スルーするか

僕は神様から貰った能力で【別荘】を想像し創造した

魔法先生ネギま、エヴァ別荘初期Ver

うわゝ ホントに出来た

よし 早速転位っ

シュッ

おお スゲー 漫画と同じだゝ

『マスター ここでの24時間は外では1時間ですので』

あ、やっぱり原作と同じかゝ

「じゃあ…ここでチート能力確認するかゝ ここなら派手にやって  
も平気だろっし」

バリアジャケットを展開、と



「…インフィニティ デバイスの2フォームとしてモード変化出来る?」

『はい可能です。』

「なら2フォームは砲撃型にしたいから銃ハンドガンタイプで、僕の魔力でも耐えられるくらいの強度設定しておいて」

これは、見た目ハンドガンだと相手は威力はたいしたことないと相手は油断する そのスキを付いていきなり極大魔法砲撃をぶっ放すっ!フッフッフ…

『ああ、マスターが腹黒く…純真なマスターは何処へ…』

その後色々な武具や道具を製造

まとめて僕専用の異次元空間（原理は「ゲート・オブ・バビロン王の財宝」とお考え下さい）に収納

あゝ能力開発は楽しいな

あれから24時間経過…

気が付いたら、別荘が半壊してました。

『調子にのって【バハムート】 + 【まほうみだれうち】を使うからです』

いや〜壮観だったな〜 うん 後悔はしないっ

「じゃあ 今日はこのくらいで戻るか…」

外に戻って結界解除っ

さあ 世界征服するか〜

足掛かりにまずは帝都日本を  
フッフッフ…アーハッハッハ！！

『マスターが壊れた〜、しっかりして下さい！マスターあ』

その後、起きてきたはやてによって正気に戻ったとか…

「はっ！僕は今まで何をっ！？」

サプライズは程々に？

さて、あれから一週間が起ちました

こちらの生活は何も問題無く はやてとの二人で出掛けたり、時間  
が出来たら別荘で修業したりとの繰り返しかな？

そんなある日……

「え、明日はやての誕生日ですか？」

本日 はやての定期検診に付き添いで病院に来たら、担当医の石田  
先生に教えてもらったのである。

「はやてちゃんから聞いてなかった？…やっぱり遠慮しているのか  
しら」

まったく 家族なんだから遠慮しなくていいのに…

「ええ、はやてはそんなこと一言も言ってくれなくて…  
あ、でも石田先生に教えていただいてよかったです。逆にサプライ  
ズではやてを驚かせてやりますよ」

そう、そんな大事な事を黙っている子にはサプライズ（お仕置き）をしなければ…フッフッフ

『（最近黒キャラ目指してますか？）』

ソナナコトナイヨ

「ふふっ、じゃあ私もキヨウスケ君に教えた事は はやてちゃんには黙っててあげるわ…」

キヨウスケ君、はやてちゃんの事 お願いね。

あのコ 貴方に会ってからとても楽しそうで 治療にも前向きに取り組んでくれて…本当に貴方には感謝しているわ。」

「いや そんな…僕は何もしていませんよ

ただ…はやてには笑顔でいてほしい それだけですよ」

さて、そーゆー訳で石田先生にはやてを任せて、その際に準備をする為 商店街に来てはみたが…

『（ケーキはやはり翠屋で買いますか？あそこのケーキは美味しいと評判ですよ）』

確かに味はあそこの店が1番なんだが…

「まあ まだ午前中だからまだ学校にいる時間か…」

魔王&シスコンに会わないように…

あ、【ラッキー】のマテリア使おう！

よっしゃ〜！ 助かった！！

無事エンカウントすることなくケーキGETだぜ！

とりあえずケーキは僕専用の次元収納空間に保存して、今度はプレゼントを買いに…

「って 何買おう…?」

ヤバイ 考えてなかったあああああ！！

…じりじりじりじりじりじりじりじりじりじり…

『(マスター 手作りで何か作っては?)』

おお、それだ!

インフィニティさん、他に何かアドバイスをぷりーず

『(面白い位テンパってますね

まあ 弄ぶのも何ですし、そうですね… 指輪 と言いたい所ですが 今回は………なんていかがですか?)』

そうか

あ、どうせ僕監修で作るなら……

さあ主人公は何を作るのか?

次回をまで!

『まだ決まっていただけでは?』

【作者】

…ナンノコトヤラ

出会はいつも穏便に？

みなさん こんにちは

神代 恭介です…

さて 僕は現在…

生命の危機に立たされています…

みなさんに現状を伝えるとすれば…

黒い服（インナー？）を着た 女性2人に幼女1人 大男1人が僕の目の前に居て、僕をバインドで拘束シテイマス

特に幼女の方はゴル○イオ○ハンマーかってツツコミたいくらいの凶器を構えています…

「おまえは何者だ？」

ピンクのポニーテールの女性がそう尋ねてきましたが…

いや 喉元に剣先突き付けないでください…



何でこんな事になったかというところ…

数時間前

八神家 リビング

「はい、はやて ちょっと早いけど…お誕生日おめでとう」

そう言うと、はやてはポカーンとした顔で僕の手にある包装された箱を凝視しています

「（インフィニティ、今のはやての顔を写メってお気に入りフォルダに保存っ！保護設定に）」

『（マスターも性格変わってきましたね）』

いや〜 サプライズ成功っ

はやての面白い顔見れた〜

Side Out

はやてSide

「はい、はやて ちょっと早いけど…お誕生日おめでとう」

えっ　なんでキョウスケ君　わたしの誕生日の事知っとるん？  
それにそれって…プレゼント？あかん、嬉しくて泣きそっや…

「あ、ありがとう　キョウスケ君…／／／」

Side Out

キョウスケSide

「あ、ありがとう…キョウスケ君…／／／」

ぐっ、ヤバイ　可愛い　抱きしめたい…って、イカンイカン！  
性を保たないと…　理

『（時には感情のまま行動することも大切ですよ）』

いやいや！　未成年どころが年齢が二桁も行っていない少女にそれはマズイから　法的に！

「あ、開けてもええかな？」

「う、うん」

前回言っていた 僕手作りのアレ…

それは

「うわ…めっちゃ可愛いペンダントやな」  
そう ペンダントです

もちろん《ただの》ペンダントではないですけどね

「ありがとうキヨウスケ君 で、その…な  
キヨウスケ君…ペンダント付けてくれるかな／＼？」

うっ かなりドキっとする台詞を／＼

「う、うん いいよ／＼」

『（マス）（静かにしてようなインフィ君…）（…）』

僕はインフィを黙らさ…さらに待機状態にして誕生日イブ？でしたが、せつかくということとで命懸けで入手した翠屋のケーキをはやてと一緒に食べ その日の最後にはやての

「今日は一緒に寝たいな」  
発言で 特別に今夜は一緒に寝ることになった

が、

次に目を覚ました時には…

「お前は何者だ？」

T O B e c o n t i n u e d . . .

指示は的確にしようっ？

深夜

八神家

はやて寢室

はやてSide

「あ…あ………」

なんや？目の前で本が勝手に…

？『起動』

ピカーーーーーッ

「ひっ……」

なんや！？わたしの胸から光の球が…

カツ！

「んっ！」

シューーーーーーウ

急に本が光った。その光が収まるとわたしの目の前には…

Side Out

?Side

「闇の書の起動…確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター…何なりと命令を」

「……………」

(ん？んん？…ねえ ちよつとちよつと)

(ヴィータちゃん シーツ)

(でもなあ…)

(黙っている、主の前での無礼は許されん)

(無礼ってかさあ…こいつ 気絶しているように見えんだけど)

「うそぉー!?!」

「きゅううう…」

? Side

「ん?こいつ誰だ?」

主の隣で寝ている少年… なんだ! この少年から凄まじい気を感じるっ!

「…ッ、シャマルっ!この少年を拘束しろっ!」

Side Out

キヨウスケSide

と いう訳で前回の冒頭に戻るんだけど…

「…あの〜 貴方達は一体誰ですか？それに何でこんな変なロープで拘束されている…まさか…泥棒ですか？」

一応 一般人を装い質問してみる

…だが、何故だ？こうゆう状況にならないように魔力は消して普通の一般人と変わらないように振る舞っていたのにつ！

「ふっ… とぼけても無駄だ 貴様から感じる凄まじい気はごまかされんっ！」

…ハイ？ スザマシイキ？…

(インフィニティ…リミッターは掛かっているよね？)

秘匿回線でインフィニティに念話を送ると

『(ハイ、マスターの指示道理 魔力にはリミッターを掛けています 万全です)』

……………アレ？……………

(ごめん インフィニティ もう一回言ってくれないかな？)



『(ですから、マスターの指示道理 魔力にはリミッターを掛けています 万全ですよ)』

……………えっと

(……………気の方は?)

『(指示がなかったのですそのままですが?)』

……………指示がない!?

## 回想

「(インフィ…僕にリミッターかけて魔力反応を0にできるかな?)

」

『(分かりました ……リミッター設定完了。 これでマスターの魔力反応は0になりました)』

## 回想終了

……………あ…言っていない…

こ、これはヤバイ…

あ、そうだ 主のはやてに説明して…って

「気絶してるし〜!」

「…もう一度聞く

貴様は何者で何故ここに居る? …まさか主の命を狙っ!」いやいや

ちがいますよ!」なに?」

ここは早く誤解を解かないと… 殺気も痛いし

「僕はこの家「シグナム、こんなやつ遣っちまおうぜ!」に…つてはあ!?!」

いやいやいや ヴィータさん まずは話し会おうよ うん

しかも字が物騒な方に〜

「だから僕の話しを聞いてくれ〜」

その後 復活したはやてにより ヴォルケンリッター達は僕は敵ではないと納得してくれた…

『出会いは最悪、ですがその後 彼女との仲が急接近ってのが王道ですよ マスター 』

何の王道だよ…

『もちろんラブコメです』

]

## とあるデバイスのチート化計画（前書き）

時間軸としてはシグナム達と会う前です

## とあるデバイスのチート化計画

月×日

別荘内

『あの…マスター 何をしているんでしょう？』

「いや〜 インフイって容量がかなり空いているじゃん  
だから新たなシステム増設しようかな〜と」

『新たなシステム…ですか？』

「そだよ〜 …大丈夫、痛くしないからあ〜」

『マ、マスター？何か様子が変わりますよ？』

「フッフッフ…マ改造、マ改造〜」

『い、いやあああ〜』

【データウェアポンシステム】

ファイアーウォール…対魔法防御に特化したシールド

ハイパースキャン…超広域探索

イリュージョンフラッシュ…影分身・高速移動

クラッシュレイ…デバイス内部破壊効果

クロックマネージャー…限定空間時間停止

オートプレッシャー…広域超重力波発生

インフィニットレイヤー…使用者及び任意の相手の魔力完全回復

「まあ　こんな所かな」

『……………』

あれ？返事がない…ただのしかばねのようだ…

月×日

また別荘内

『マ、マスター…今度は何を…?』

「ん〜? ちょっと対魔法用の武器を思いついたから創造しようと思ってる〜」

『対魔法?それはどんな?』

「うまくいけば、なのはのスターライトブレイカーすら無効化できるやつ〜」

ちよつとまってる…

カチャカチャ…

パンツ!

バチバチバチッ!

……出来た！」

『（…早っ）』

### 銘【細雪】

日本刀タイプのマジックウエポン

刃に触れた魔法はすべて細雪のように霧散させる

使用者のレベルが一定以上ないと扱えない

『…チート仕様ですね』

「まあ 否定はしません」

『確か某鳥ロボットが使っていたアタックプログラムですよね』

「…よくご存知で…とりあえずリリなの風に設定しました」

『あまり設定変わってませんよ…』



月×日

またまた別荘内

『今度も何か作製中ですか？』

「ん まあね〜

…インフィニティ…

ブラックホールに興味ある？

『…ハイ？』

続く……………？



別荘へいこう！

とりあえず数時間に渡る説得により ヴォルケンス達の誤解は解けたのですが…

「キヨウスケ君も魔法使いなんやね〜」

はい、 はやてにバレました

理由は簡単

僕がヴォルケンス達の説明を聞いている時【魔法】を何も疑いも無く受け入れて話を聞いていたって事で気が付いたらしい…

おそるべし洞察力っ！

さすが未来の部隊長！

『自分の迂闊さは棚上げですね』

ハイ すみません…

「分かったことが1つある

闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住きつちり面倒みなあかん  
ゆうことや。幸い住むところはあるし 料理は得意や みんなのお  
洋服買ってくるからサイズはからせてな」

ヴォルケンス：やっぱ啞然としてますね」

はやては急に4大家族が増えた事がうれしいようだな

「そういえばキヨウスケ君は洋服どないしてるんや？」

あゝ：魔法がバレたならいいか」

「ん？ 空気中の魔力を使って服を創ってるよ。」

「？それって？」

あ、難しかったか？

「まあ 魔法で創っているって事だよ。」

「そつなんやゝ ……じゃあシグナム達のお洋服も作れる？」

「まあ 女性用の服は創った事はないからデザインとかあれ」じゃ  
あこれお願いな」……ばあ？」

はやてさん どこから出したのですかその某女性ファッション雑誌

…

『ご都合主義です』

何か妙な電波が…

それから僕はシグナム達の服を錬成？したのですが…

「し、下着もですか…／＼／」

下着まで創るとは想定外ツス

はやてさんは僕の方を見ながら笑ってるし…ドウシテクレヨ

ウ コノ狸…

錬成し終わった僕ははやて達に渡し、試着しようとしているヴォルケン3姉妹？たち

僕は慌てて部屋を脱出！（犬モードザフィーラも一緒に）

「我は狼だ…」

あゝ… スマン

「いただきます」x5

あれから着替え終わった（あれからまた追加発注を受けたが…）  
オルケンスと一緒に食事することになりました

「そういえば神代、お前が使っている魔法というのはどんなのだ？  
聞く所によると、我らの魔法とは違うらしいが…」

あゝ やっぱり興味もちますかゝ この頃から既にバトルマニアだ  
つたのか…

「んゝ 魔法発動にはこのデバイスに組み込まれている【マテリア】  
を使っているんだ」

「まふおひふあ？（【マテリア】？）」

はい ヴィータさん 食べるか喋るかどちらかにしようねゝ

「モグモグモグ」

… スマン やっぱ聞いてくれ

「その【マテリア】ってどんな物なんですか？」

「んゝ 簡単に言うと【星の命を凝縮した結晶】…だったかな？  
その中にある知識を引き出して魔法が発動する」

たしかそんな設定だったような…

ん？なんか視線が集中しているような

「どうした？みんな？」

「いや… 星の命なんて言われたからつい…」

「そうか？ ついでに言うとマテリアには大きく分けて5種類あり  
魔法 支援 コマンド 独立 召喚 とあるんだけど…まあ 口  
で言うよりは実際に見てもらった方が早いかな 今度【別荘】で見せ  
るよ」

別荘なら被害は少ないし管理局にバレないしね〜

「えっ？キヨウスケ君、別荘なんてどこにあるん？」

「ああ、はやては見ている筈だよ？ 前にボトルに入ったミニチュ  
アがあったでしょ？ あれ実はマジックアイテムで中に入れるんだ  
」

「ええっ！ そうなんか？」

やっぱり驚くか

「まあ 一種の結界みたいな物だよ」

「よし！では早速その【別荘】とやらに案内してくれ！」

…え？

「えーと…シグナムさん 今からですか？」

「勿論だ！さあいくぞっ」

何目をキラキラさせていらっしやるんですか〜

ヴィータ止め「面白そうだな 私も行ってやってもいいぞ」

あなたも行く気満々ですかっ しかも上目線っ！

シャマルは

「はやてちゃん 楽しみですね〜」

「そやな 私もワクワクするな〜」

二人とも既に同行モード！？

ザフィーラ何とか

「……………」

目を反らさないで〜

最後の砦がぁ〜…

「何をしている神代？ 早くしないか」

何このフラグたちそうな伏線…

『マスター これが宿命です』



そんな宿命いやだ〜〜〜つ

別荘へいこう！（後書き）

作者【久々の連続投稿…】

インフィ『何か理由でも？』

作者【…いや まあ… 前の話 武装追加だけの話だったじゃん…】

インフィ『はあ たしかにそうでしたね』

作者【冷静に読んだら…】

インフィ『読んだら？』

作者【話短っ！って思ったから…】

インフィ『まあ 設定みたいな感じでしたからね』

作者【ちなみにまた設定追加する可能性あるんで】

インフィ『またチート化ですか!』

やり過ぎると、いろんなフリガダ立つよね。(前書き)

効果音：意外に難しい？

やり過ぎると、いろんなフラグ立つよね」

やってきました別荘へ

「は、すごい所やな」

「ほう…ここは魔力が充実しているな」

「すげーな！ ここ」

「はやてちゃん 気をつけて下さいね」

「……………」

ただ今八神家ご一行は別荘に驚いています

…ザフィーラさん 影薄いですよ

「ああ この別荘の中と外の時間の流れは違うから」  
「ここでの一日は外では1時間しか経っていないから」

「…ほんま魔法ってすごいな」

「いえ 主はやて 我々もこれほどの魔法は知りえませんが、  
神代、これもお前の魔法なのか？」

まあ 驚くのも無理ないか…

「僕の魔法は平行世界の魔法を主体としているからね シグナム達の魔法…というより、この世界の魔法とは根本的に違うよ」

FFやネギまの魔法だからね」

「平行世界？」

ん？はやてが首を傾けているが…

「うん 僕は平行世界から来たからそれぞれの世界の魔法が使える ええええええ〜！！」る…って、みんなどうしたの？」

なんかみんなビックリしているけど？

「キョウスケ君って別の世界の人なんか？」

「…アレ？言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてね〜よ！ てか平行世界って何なんだよ！」

なんかヴィータが半ギレしてるよ

「え と キョウスケ君、それは管理外世界からって事ですか？」

「いんや 違うよシヤマル 平行世界っていうのは可能性の世界 【ヴォルケンリッター】がはやてに会わなかった世界【や】【八神はやてが神代恭介と出会わなかった世界】つい最近なら【みんなが別荘に入らなかつた世界】 そんな数えきれない世界から来たんだ」

僕は【アニメのリリカルなのはの世界】に来た事になるのかな？

「そんな世界があるのか…いや 神代の事を疑う訳ではないが…」

「あらゆる可能性の数だけ枝別れしていく世界…【極めて近く、限りなく遠い世界】って誰かが言っていたかな」

「じゃあ別荘の中案内するから付いて来てね」

あれから別荘の中を案内しました

途中プールがあるってはやたとシャマル、ヴィータがはしゃいでいたような…

で、一通り案内し終わったらシグナムが

「神代、お前の魔法を見せてくれ」発言をしたので現在インフィニティをSet Upしています

『何か久しぶりですね』

「まあ 否定はしないよ… さて、インフィ リミッター限定解除、出力30%くらいで」

『了解、魔力出力設定30%…リミット解除しました』

さて、何を見せようかな…

「まずはウォーミングアップ…インフィ【ほのお】+【ぞくせい】  
マテリアセット」

僕は大刀を炎属性を付加し刀に炎を纏わせる

…シグナムの目が光ったのはキノセイダヨネ？

その刀を振りながら

「…ファイア！」      ボウツ！

まずは基本魔法を発動っ！

刀から炎が射出された

「次っ【れいき】セット」

【ほのお】が解除され【れいき】がセットされた

そして近くにあった柱を切る！

「はああああ！」

ガキッ！



僕は柱を少し傷付けた

そして…

ピシ、パキッ…

傷付けた所から柱が凍りついていく

「【いかずち】セツト」

今度は【いかずち】のマテリアをセツトし、凍り浸けになった柱に

「サンダラっ！」

ズガアアア

少し派手目の魔法をぶつけた

「なっ…っ！」

シグナムside

「なっ…っ！」

正直驚いた

魔力変換資質など無視し、様々な属性魔法を放つ神代。

魔力変換の炎は私も持っているが…神代は氷や雷といった魔法をもあの大刀に纏わせいた…

それを目の当たりした私は

闘いたい と

願った

s i d e O u t

キヨウスケ s i d e

「うっし 今日絶対好調っ！」

僕はバリアジャケットを解除して はやて達の所へ向かった

「どうかな？とりあえずこんなカンジかな？」

「す、凄いな〜 あれが魔法…なんやね」

やっぱり初めて魔法見るのは刺激が強かったかな？軽目にしておいてよかった…

『あれが軽目…ですか？』

…ちよい調子にのりましたスミマセン

「まあ 他にも攻撃以外にも回復、補助、防御とかもあるから」

なんか今シャマルがピクツって反応したような… あ、

「あ〜でも高等な結界とかは苦手なんだ」

その瞬間、シャマルが「あ、私 結界魔法得意ですから任せて下さい」って言っていた

サポート系のエキスパート魔導師としては気になったのか…

「恭介！ お前召喚魔法もできるって言ってたよな？それはやらねーのか？」

「ん？見たい？いいよ〜」

ヴィータ嬢のリクエスト入りまゝす

何を喚ぶかな…

「…インファイ【シヴァ】セット」

『了解…召喚マテリア【シヴァ】セット』

「いでよ シヴァ！」

そして 上空に雪とともに空から舞い降りた

氷の召喚獣 シヴァが現れた

「いけっ！ ダイヤモンドダスト…！」

ゴオオオオオ…

「……………」

「……………」

「……………反則だな」

別荘内の海…全部凍っちゃった テヘッ

ザフィーラさん 喋るじよ…

お酒は20才まで…？

別荘内 夕刻

はい！ あれから【イフリート】を使って氷は解凍しました

何故かみんな無言だったけど… どうしてかな？

『あんなのを見せられれば当然ですっ！』

さて 時刻は夕刻、別荘設定で24時間は外へ出れないので『スル  
ーですか！？』…

…外へ出れないので、夕食は別荘内で食べるようになりました。

変な周波数はキニシナイ〜

「にしても ホンマ不思議やなあ〜  
あんだけ騒いでたりしてたのに、外じゃまだ20分位しか経ってへ  
んなんてな〜」

「ホント…恭介、オメーの魔法って反則ばっかだな。」

反則というかチートだね

『意味同じですよ』

「…正直我らが束になっても勝てるかどうか」

「あら シグナム、あなたが弱気なんて珍しいわね」

「弱気？フツ…むしろ強者と戦えると思うと騎士としての血が騒ぐ… 神代、今度私と手合わせしてくれないか？」

いや まだ人生終わらせたくないし

『（不老不死がなにを言っているんですか）』

「シグナム ケンカはあかんよ？」

はやてナイス！

『…チッ』

何故デバイスが舌打ちを！？

「いや…主はやて、ケンカではなく「みんな家族なんやから仲ようしなあかんよ？」… はい、わかりました」

ああ なんかシグナムが落ち込んでいるな  
まあ気が向いたら  
こっそり別荘で模擬戦してあげよう

『シグナムフラグ立ちますね』

そうなの？

おまけ

「キヨウスケくくん／／／  
いっしょにねろく／／／」

誰だ！未成年はやくにワイン飲ませたのは！？

「主、しっかりして下さい！」

「うわくん はやてが はやてがくあ」

「ウフフ、はやてちゃんカワイイ」

「……………」

カ、カオスだ…

ちなみに犯人はシャマルだった

「インフィ…【チヨコボ&モーグリ】発動っ！」



「い、いめんなさ〜い〜い〜い〜」

ユユユユユ...

ドーン！！！（ペチッ！）

あ、デブチヨコボ降臨

シャマル…無事、かな？

ひだまりの中の日常…

『ピピピピピピピピ…』

ガチャ…

「ん、んん…ふあああ」

朝か…

おはようございます 神代 恭介です

今日は、いつもより早めに起き『マスター…』ん？

「ああ おはようインフィ…どうかした？」

『私を目覚まし時計の中に組み込む意味…あるんですか？』

「うん ないよ」

『ひどっ…』

まあ 漫才は置いておいて

『だからスルーしないでください』

キッチン

ジューー

「  
〜?〜  
」

あ、はやてもう起きている 相変わらず早いな〜

『マスターは朝弱いですよね』

まあ基本はね〜

「おはよ はやてっ  
」

「あー おはよーさんや〜 キョウスケ君 (ニコッ) 」「

くっ 朝から笑顔が眩しいぜ

「朝ごはん作ってるんだよね?何か手伝うよ」

「ありがとな〜 じゃあキョウスケ君にはサラダ作ってもらおかな  
?」

「オツケー」

今日はベーコンエッグに焼き魚か

「…なんかこうやって二人で料理しとると…新婚さんみたいやね／＼」

って 朝から爆弾投下ですか…って、言った本人が赤くなってるし

「あゝ…そうだね／＼」

『マスターも赤くなってますね』

うるさいよ デバガメデバイスっ！

「おはよう はやてちゃん！」「おはようございます」

「「シヤマル シグナムおはよー」「」

『見事に息ピッタリですね』

…「コイツ…」

「インフィニティ…ブラックホー」スミマセンでしたあ 調子に乗ってごめんなさいっ！！』『…分ければよろしい」

「…？どないしたん？」

「イヤ ナンデモナイヨ？」

「何でカタコトなん!？」

まあ 仕様です

「たっだいまっ!」

お、ヴィータ ザフィーラ連れて散歩いつていたのか…って散歩！  
？

「おかえりヴィータ ザフィーラ」

「二人ともミルク飲む？」

「飲む飲むっ!」

「……………(コクッ)」

「シグナムも？」

「ああ…いただきます」

…誰もツツコミ入れのか？

「…なあ ザフィーラ… 一応狼…なんだよね？ 散歩する狼って  
一体」

「……………主が犬を飼いたいと願っているのて」

ああ！ なんて主想いの守護獣なんでしょう ……インフィにも見  
習せたいよ

『失礼な！私は主に忠実ですよ』

…そうか？

「ほんならいつてきまーす」

「……………お気をつけを主」

朝食を終え、僕とはやて ヴィータ、シグナム、シャマルたちとお  
出かけ

ザフィーラは留守番をしてくれるとの事

「ごめんな〜みんな つきおつてもろて…」

「いえ、お気になさらずに主はやて」

「私達も、はやてちゃんとおでかけできて嬉しいですし」

「はやてがいなきゃ家だつてどこだつて退屈だもんな」

「う〜ん ほんならみんなが楽しいこと何か探してあげなな〜」

「いいよ そんなの わたし達はマスターがはやてでいてくれるだ

けでうれしいんだから」

「その御心使いだけで我らは満足です」

「私達は はやてちゃんが好きなんですから」

「みんな…ありがとな。」

………

『マスター 空気ですね』

気付いてるからツツコミ入れないで…

「恭介！なにやってんだ 置いていくぞ」

あ、空気脱出。

『…哀れすぎです』

**特別講義 必殺技は…(前書き)**

ユニーク10000突破記念

時間軸は少し前になります



特別講義 必殺技は…

別荘内

カチャカチャ

「よし できた！」

え？何が？

それは…

「マスター！ また私を改造したんですか！！」

うん そだよ

『軽っ!』

「まあまあ …正直1stモードの大刀【ルシファー】に必殺技が欲しいな〜って思ってたさ」

『マスターの存在自体必殺技みたいなものですが…』

いやいや そんな僕なんて…どう頑張っても惑星一つ壊すので精一杯ですよ

『…十分です!』

別荘内、山岳フィールド

「インフィニティSet Up! モード1st!」

ピカッ！

『必殺技ってどんなのを作ったのですか？』

「ん〜 剣に周囲の魔力を吸収・増幅させチャージ、んで そのまま相手を叩つ斬る！」

『…思ったよりシンプルですね』

「甘い！甘いぞ！砂糖に練乳かけて食べるより甘々だよ インフィニティ君」

『は、はあ……』

「いいかい？ この【周囲の魔力を吸収・増幅】 ここが第一ポイントだよ

周囲の魔力と言うのは自分はもちろん、相手が放った魔法もこの範囲なんだよ」

『そ、そうなんですか？』

「そう！ その増幅した魔力を込めた剣の威力は計り知れない…さらにも！」

『まだあるんですか！？』

「吸収・増幅した魔法を開放することで特に、接近戦において 剣

撃 砲撃と相手に二段同時攻撃ができるのだよ!」

『……………』

「驚愕したかい?インフィニティ君  
早速実践だっ!」

「はああああ! チャージ!」

《Ignition》

シューシュー

「いくぜ! プラスト…シグヴァーン!」

ガキイイイーン!

「…バースト!」

《Explosion》

グアアアアーン!!

『……ここ、山岳地帯でしたよね？』

「山……消えたね」

この技を後に見たヴォルケンリッター達はこう語る……

「……流石にこれは……」

「……ちょ……反則だな……」

「……やり過ぎですね」

「……」

呆れていましたね

これでカートリッジ使ったら…

『使う気ですか！？次元震発生しますよ！』

リミッター…掛けるか…

【しつけ】は全力全壊で（笑）

キョウスケSide

やってきました図書館へ〜

久々だな〜

「そういえば ここで私とキョウスケ君が初めて会ったんやね〜」

「はは そうだね〜 結構昔に思えるよ」

「神代も本が好きなのか？」

「その時はちょうどこっちの世界に来たばかりだったから情報収集にね」

『（…マスター）』

「（…ああ）」

「はやて、ちょっと家に忘れ物してきたんで取りに行ってくるよ」

「なんだよ 忘れ物って？」

「まあ…財布をね」

「あら キョウスケ君にしては珍しいわね」

「まあ そうゆう訳でちょっと取りに行ってくるよ はやて達はしばらくここにいるんだよね？」

「うん そやな〜」

「じゃあ シグナム ヴィータ シヤマル はやてを…よろしくね」

「おめーに言われなくても分かってるよ さっさと取りに行っていよいよ!…早く来ないと置いていくぞからな」

「…じゃあ…いくか」



はやてSide

「騎士甲冑？」

「ええ 我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜わなければなりません」

「自分の魔力で作りますから 形状をイメージしていただければ」

「そっか… そやけど、わたしは皆を戦わせたりせえへんから…服でええか？騎士らしい服 な？」

「ええ かまいません」

「ほんなら資料さがしてかっこええの考えてあげなな」

「それにしてもキヨウスケ君遅いなあ」

S i d e  
O u t

キヨウスケ S i d e

「……さてと、いい加減でできたらどうですか？」

「……驚いたな 気配は消していたのだが……」

やっぱりあなたか…仮面の男 いや… 猫姉妹

「まあ 監視されているのは知っていたからね 当人が現れたれたんだから挨拶くらいはしないと……」

「……闇の書に関わるな これは警告だ」

いきなり本題か

「……いやだ と言ったら？」

「………排除する」

「ふん…ならっ！」

僕は【瞬動】を使い仮面の男の後へ

「なにっ！」

「…誰を排除するんですたっけ？」

僕は瞬動と同時にSet Up シンファイ2ndモード【ジリオ  
ン】を突き付ける

「…今後八神家に近づかないでもらえますか？ 仮面の男さん…ちなみに」

「【オートプレッシャー】っ！」

僕の背後に超重力を展開

ドカアアア

「グツ……な、なぜ【二人】いるっ……こ、ことに気付い……た!？」

威力は押さえているとはいえ よく超重力内で喋れるな

「やれやれ 初めに言ったでしょ? 監視されているのには気付いて  
いたと」

そろそろはやて達の所に戻らないと

「さて、こちらからも警告です… 八神はやてに危害を加えたら…  
文字どおり潰すよっ」

言い終ると同時にオートプレッシャーの出力UP

「グアアアアア…」

よし 調きよ…説得終了っつと

『今のが説得？よくて脅迫レベルですよ』

まあ キニシナイ〜

とりあえず 二人にはバインドかけて放置して帰りました

「おせーぞ恭介！いつまで待たせる気だよ！！」

ヴィータさん 人の苦勞も知らず…

「まあまあ ヴィータ キョウスケ君も悪気があった訳でもないんやし…な？」

「うう はやてがそう言うなら…」

ありがとうはやて様っ

「キョウスケ君が遅れたお詫びに皆に何か買ってきてくれるって」

…ハイ？

「はやて…今何で「拒否権はないで」…ハイ ワカリマシタ」

いや 別にいいんだけどさ

「じゃ いなか」

こうして次の目的地へ…

次回を待て…

君は刻の涙をみる…

「いや 見ないしっ！」

く約束く（前書き）

キヨ「…作者よ 言い訳は？」

作【スミマセンスミマセンスミマセン！】

キヨ「8話と9話投稿し忘れるとは…」

イン『1st Mode 起動…』

作【え、その…】

キヨ「さあ 作者よ…お前の罪を数えてな！」

作【ひいひい！】

キヨ「ブラストっ！シグヴァーン！！」

ズガアアアア…



〈約束〉

はるばるきたぜデパートお

『マスター…軽くヤケになってませんか』

ナツテナイヨ

デパート内トイ

「主はやて、ここは…?」

「ええからええから　こーゆー所にこそ　それっぽい材料があったりなあ」

「はやて…ぬいぐるみ欲しかったの?」

「あ、ううん　ちょっと資料集めとしてなここに寄ったんよ」

話しを聞くと、どうやらヴォルケンリッター達の騎士甲冑の資料集めに寄ったらしいが…

何故トイ　ら　に?

すると

じ〜〜〜〜

ヴィータがとある物体を凝視

「ヴィータちゃん どうしたの ……ヴィータちゃん？」

シヤマルの声が聞こえない位自分の世界に入っているのか…

クイクイツ

ん？裾がひっぱられて？あ、はやてか

「（ヒソヒソ）なあキヨウスケ君、あんな・・・をこっそり買ってきてくれへんかな？」

「（ヒソヒソ）…それは構わないが…」

「（ヒソヒソ）じゃお願いな〜」

デパート帰り

「いい風ですね〜」

「ほんまや〜」

「お天気もいいですし」

「絶好のお散歩日よりやな〜」

いや〜あの後さらにみんなの服を購入。  
ん？僕が創ってなかったか？

さすがに僕に創ってもらってはかりは…（下着関係は精神的にキツイからと進言したりもしたが）という事で買いましたよ

「ヴィータ」

「ん？なにはやて？」

「ハイ、ヴィータ」

はやての手には僕が先程はやてに頼まれて買ってきた

「袋からだしてもええで」

ガサゴン

「うわぁ…はやて、ありがとう」

うさぎ（らしい）ぬいぐるみがあった

「そのぬいぐるみな、私とキョウスケ君からのプレゼントや。ヴィータ気に入っていたようやから」

「恭介も？」

何驚いた顔でこっちみてるんだ？

「って言っても僕ははやてに頼まれて買って来たただけだね（ニッコウ）」

まあ実際そうだし

「…………と／／」

「ん？ヴィータ 何か言った？」

「な、なんでもねーよ／／／」

「????？」

ヴィータSide

「恭介も？」

正直驚いた

あいつからプレゼントなんて想像できねーからな

「って言っても僕ははやてに頼まれて買って来たただけだね（ニッコウ）」

うっ…その笑顔、反則だろ／／／

なんか顔が熱くなってきたじゃねーか

…はやてと恭介からのプレゼント…か

「（ボソツ）ありがと／＼／」

「ん？ヴィータ 何か言った？」

恥ずかしくて二度も言えるか！

「な、なんでもねーよ／＼／」

Side Out

キョウスケSide

「さ、はよう帰ってご飯にしような」

「あ、今日は私が作りましょうか？」

シヤマルの発言に世界が止まった…

「…シグナム、シャマルを台所に近づけないように見張っててくれ」  
何とか復活した僕はV作戦を提案

「勿論だ 主はやての命を護る為 その任務、我が命に懸けて遂行しよう！」

「ちょっと二人とも酷いっ！」

いや、マジ命に関わるから…シャマルさん…料理の勉強もつとしよう

Side Out

夜、八神家リビング

なんとか対シャマル絶対防御壁を展開し無事に食事を終えた僕たち  
…途中部屋の隅でうずくまって黒いオーラを漂わせていたシャマル  
がいたような気がしたが…

はやてSide

わたしはシグナムに抱っこしてもらい夜空を一緒に見とる

「うわぁ 綺麗…」

今日は天気がよかったからなくお星さまが綺麗や

「主はやて 本当に良いのですか？」

「何が？」

「闇の書の事です…あなたの命あらば我々はすぐにでも闇の書のページを蒐集しあなたは大きいなる力を得られます。この足も治るはずですよ」

確かに足が治ってくれるならうれしい…けど

「あかんで…闇の書のページを集めるにはいろんな人にご迷惑をかせせなあかんのやる？ そんなんはあかん… 自分の身勝手に人に迷惑かけるのは良くない…」

わたしは 今のままでも十分幸せや…父さん母さんはもうお星さまやけど、遺産の管理とかはおじさんがちゃんとしてくれる」

「お父上の御友人…でしたか？」

「うん お陰で生活に困ることもないし それになにより…今はみんながおるからな」

今のわたしには家族がある それだけで満足や

バタバタバタ

「はやて〜!」

「どないしたヴィータ?」

「はやて 冷蔵庫のアイス食べていい?」

「ヴィータ、あれだけご飯食べたのにまだ食べるのか?」

「うるせーな 恭介! 育ち盛りなんだよ

それに、はやてのご飯ははギガうまだしな」

「しゃあないな〜 ちょっとだけやで」

「お〜」

バタバタバタ

「…シグナム」

「はい?」

わたしはシグナムの目を真っ直ぐ見つめ…

「シグナムはみんなのリーダーやから約束してな」

「はい?」



「現マスター八神はやては闇の書にはな〜んも望みない  
私がマスターでいる間は闇の書の事は忘れてて  
みんなのお仕事は家で一緒に仲良く暮らすこと… それだけや…  
約束できる?」

「誓います 騎士の剣にかけて」

ありがとな シグナム

願わくば皆といつまでも一緒にいられますように…

Side Out

おまけ

「おい、ヴィータ 一体何個アイス食べるんだよ しかもハー  
ン  
ダッ ばっか」

「いいじゃねーか 減るもんでもねーし」

「いや 減るって…」



嵐の後も… 前編

「ほんならいつてきまゝす」

「はい お気をつけて」

今日は、はやてとヴィータが二人で図書館に行ったので家には僕  
シグナム シャマル ザフィーラだけになりました

これがこの後の惨劇の始まりになるうとは…

シグナム Side

「はい お気をつけて」

「あら、シグナム はやてちゃん達はもう行ったの？」

「ああ 先程ヴィータとお出かけになられた」

「ね…闇の書の管理人格の起動って、蒐集が400頁越えてからだ

っけ？」

「ああ、それと主の承認がいる…つまり主はやてが我らの主である限り、私達や主達が管理人格に会うことはないだろうな」

「そうね、はやてちゃんは闇の書の蒐集も完成も望んでいないし」

「どちらにしろ主はやてには管理人格のことは伏せておかないとなあのお優しい主の事だ きつと気に病まれてしまう」

「そうね…あの子【闇の書】もわかってくれるわ…」

「そういえば神代はどうした？」

「キヨウスケ君？今日はまだ見ていないわね まだ部屋かしら？」

「そうか… シャマル、私は神代と【別荘】に行ってくる！」

「え？」

タツタツタツ

「あゝ…行っちゃった…キヨウスケ君、大丈夫かしら？」

…あ！そうだわ！！」

Side Out

## 八神家個室

キョウスケSide

「ふうっ とりあえずこんな感じかな？」

え？ なにをしているかって？

【別荘】の拡張ですよ

流石に部屋には置けない大きさなので、使っていない部屋に設置（はやての許可済）

【別荘verレーベンスシユルト城】完全再現！

「じゃあ 早速試運転がてら中に入るか」

と、魔法陣を展開「神代 いるか？…っこれは！？」と

「ん シグナムか どうした？」

まあ【別荘】にびっくりしてるとは思って

「あ、ああ 神代に模擬戦を頼もうとしたのだが…これは？」

「これ【別荘】だよ 少し拡張したんでこれから中に行こうとして

いたんだか…シグナムも付いてくる？」

「う、うむ いいのか？」

「ああ まだ細かい設定していないけど問題ないだろう 模擬戦もこの中でしょ」さあ行こう。すぐ行こう 直ちにいくぞ！」「うお！」

シグナムのキャラが半壊した

『シグナムフラグ…』

インフィさん！今日の開口1番それ！？

「はあ… じゃあ僕に捕まって」

シュッ

S i d e O u t

嵐の後も…後編

別荘内

「ほお…」

「シグナム こっちこっち とりあえずこの魔法陣で城まで一気に  
いけるから」

「…あちらの魔法陣は？」

「ああ、修行用に作った各フィールド 砂漠 雪山 熱帯ジャン  
グルとかに行く魔法陣だよ」

…凄くシグナムの顔が輝いている…

「ま、まあとりあえず城までいってみよ」

「うむ」

シュッ

「ここは？」

「ああ カフェテラスだよ でここを真っ直ぐ行くとお城があるよ  
中はそこらの高級リゾート施設以上になっている」  
さすがにメイドは居ないが…

『マスターにメイド趣味があつたとは…』

いや ないよ！

…多分

「では神代…早束手合わせを頼む」

シグナムがレヴァンティンを構えた

てかいつの間にバリアジャケットを展開していたん！？

『漫才中にですよ』

あ、さいですか

「インフィニティSet Up！」

ピカッ

「インフィニティ 1stモード大刀…【ルシファー】」



カチャ

「いくぞ！」

ガンツ、ガンツガキツ！

僕はシグナムの斬撃を剣で受け

「はああああ！」

ガキイイイ

「ぐっ…！」

ドカアアアアン

シグナムを吹っ飛ばした

「くっ、流石にやるな 神代…だから…レヴァンティン…！」

《Explosion》

「紫電…一閃ッ！」

やば、

「…！」

ドカアアアアン！

シグナムSide

「紫電…一閃ッ！」

ドカアアアン！

「ハアハア…クツ、手応えがない…どこだ？」

「ここだあ！」

しまった！上か！

上空に神代がいた…筈なのに…

ドカツ

「ぐっ…！？」

私の【横に】居た神代に攻撃を受けた…

「ッ…レヴァンティン！」

《ja》

「シユランゲフォルム…飛竜一閃！」

横にいた神代に向かって連結刀を放ったが…

シュツ

な、消えた!?

残像!?

くっ 神代は何処だ?

そう思考した次の瞬間…

私の意識は闇に落ちた…

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

「ケアルガ」

僕は気を失ったシグナムにケアルガをかけ治療中

「……ん」

お、気がついたかな

「か、神代…はっ！ここは!?!」

はい 落ち着こうね〜シグナムたん

「ここは城の中だよ シグナムは模擬戦中に気を失っちゃって…」

「そうか…私の負け…か」

「ゴメン」

「何故謝る？負けたのは私がまだ未熟だった為だ お前が謝ることはあるまい」

「あ、いや そうなんだけど… ありがとうシグナム（ニコッ）」

「う、うむ わかればよい…／／／」

「???」

「と、ところで神代、さっきの模擬戦だが…さっきは何なのだ？」

ああ あれか〜

「【イリュージョンフラッシュ】 簡単に説明すれば、分身しながら高速移動していたんだ」

「では私は神代の分身に攪乱されたのか…フツ私もまだまだだな」

「さ、一休みしたら家に帰ろう  
まだ別荘の時間設置は変えてないから外も夕方だろうし  
そろそろはやく達が帰ってくる頃だしね」

「ああ そうだな」

Side Out

シュッ

「ただい……ま？」

僕とシグナムの目の前にある光景…

「ザ、ザフィーラ！！どうした？すっかりしろ！！」

そう ザフィーラが泡を吹いている

ああ ザフィーラ

天に召されたか…

となりにはネ は居ないか…

「……………私は生きて…いる」

無事だったんだねパト ツシュ

「どうしたんだザフィーラ？ 主の身に何かあったのか！」

「い、いや…主はまだ帰宅されていない…原因「あら おかえりなさい シグナム キョウスケ君」 コレだ…」

シヤマルさん…

そのエプロン姿…もしかして…

「今日は私が夕飯作ったから楽しみにしていてね」

「シグナム…」

「なんだ…？」

「はやく達は助けないと…」

「…ああ」

その後 帰宅したはやくて&ヴィータは…

「た、大変や！はよ114番…ちやう！あれ？救急車って何番やっけ！？」

「シ、シグナムくっっかりしろく！ 恭介も気をくっっかり持てく」

「くっくくく ごめんなさくい」

大混乱だったそうな

「な、なんで【ちりょう】マテリア使っても治らないんだよ……」

『ギャグ補正です』

## 加速するストーリー

### 某管理外世界

「…シューティングソニック!」

「!」

ドカアアア…

「すげーな… 幻想種を一撃かよ…」

「ふう… ヴィータ 蒐集を」

「あ、ああ」

みなさん こんにちは 神代 恭介です

僕たちは今【蒐集】を行う為 世界を飛び回っています

「なに一人でブツブツ言ってるんだ？」

それより見るよ!闇の書の頁が10ページ埋まったぞ!」

「そっか… でも先はまだまだ遠いな」

「ああ… はやくしねーとはやてが…」



数日前

海鳴大学病院

今日ははやての定期検診に来ているのだが…原作道理ならそろそろ…

「シグナムさん シャマルさん…ちょっといいかしら？」

石田先生から二人に話しがあるそうだ

やはりきたか…

シグナムSide

「命の危険!？」

「ええ… はやてちゃんの足は原因不明の麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。この二ヶ月は特に…このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんで

す…」

「何故！何故気付かなかった！！」

「ごめんっ、ごめんなさいっ…私っ」

「お前にじゃない…自分に言っている」

そう 主はやての麻痺は病気などではなく【闇の書】の呪い…

主はやてが生まれた時から共に有った【闇の書】は、主の身体と密接に繋がっていた…

抑圧された強大な魔力はリンカーコアがな主の身体を蝕み、健全な肉体機能どころか生命活動さえ阻害していた…

そして、主が第一の覚醒を迎えたことでそれは加速した

それは四人の活動を維持するためごく僅かとはいえ主の魔力を使用している事も無関係とは言えないはずだった

夕方

私はヴィータやザフィーラに現在の主の状態を話した…

「……………なきや、

はやてを 助けなきや！！ シャマル！シャマルは治療系得意なん  
だろ！そんな病気くらい治せよ！」

「ごめんなさい…私の力じゃどうにも…」

「なんでだ…なんでなんだよっ！うっうっうっ…」

「…シグナム」

…解っているザフィーラ

「我らに出来る事はあまりに少ない…だが」

このまま主を見殺しにする訳にはいかない！

S i d e O u t

深夜

「主の身体を蝕んでいるのは 闇の書の呪い…」

「はやてちゃんが闇の書の主として真の覚醒を果たせば！」

「我らの主の病は消える…少なくとも進みは止まる！」

「はやての未来を血で汚したくはしたくないから人殺しはしない…  
だけど、それ以外なら何だってする！！」

… 申し訳ありません我らが主…ただ1度だけ あなたとの誓いを破  
ります

「我らの不義理をお許し下さい！」

キヨウスケSide

「やはり原作道理蒐集が始まる か…」

さて、どうしたものか…



ヒーローは遅れて参上!!

管理外世界

ウィータSide

「く、くそう…はやてに貰った騎士服をこんなにグチャボロにしががって…ま、騎士服は直るし、そこそこ頁を稼げたからいいけどよ…」

ブチッ

あ…靴が…

ドサッ

くっ、倒れている暇なんでないんだ…ちくしょう、体中…

「い、たくない!痛くない!!こんなのちつとも痛くない!!昔とはもう…ちがうんだ

帰ったらきつと…暖かいお風呂と、はやてのご飯が待ってるんだ…

優しいはやてがニコニコ待っててくれるんだ

そうだよ…私は、すっげー幸せなんだ!

だから、こんなの、全然、痛くねーエエエ!!」

ゴゴゴゴゴゴ…ドカアア!

「ッ!」

クソツまだいやがったか

「アイゼン！」

《Explosion》

「たあああー！！」

ドカアアアア！！

「ッ」

ドドオオン！

「ハア ハア ハア よ、よし 蒐」

「！！ しまった！！」

しまった！もう一匹いやがったか！

しゅめん はやて

Side Out

?Side

「　　ファイヤーウォール！」

ドカアアアア！

ふう　間一髪

「　…大丈夫かい？ヴィータ」

「な、なんで…なんでお前がいるんだよ！【恭介】っ！」

なんでとはご挨拶だね

「そりゃ〜ヴィータを愛しているから」

「なっ…／＼／＼　なにいつてやが…ッ！」

弄ぶのはこのくらいにして…

『鬼畜ですか』

鬼畜？新製品のお菓子の名前？

「　フルケア」

ヴィータの傷を完全回復っ

「あ…身体が…」

「ヴィータは下がって…　コイツは僕が倒すから」



ま、この程度なら軽いしね〜

「な、なに言ってるやがる！ こいつは私が「はい 黙ってようね〜

【サイレス】「…！？%#\*？」

さて サクッと倒すか

「インフィニティ2ndモード」

『Mode Change! 【ジリオン】』

「いくぞ！ カートリッジロード！」

《Load Cartridge》

「はあああ！ コズミックブラスター！！」

ズガアアアア

「  
」

ドドオオン

「ない、一撃かよ…」

もちろん非殺傷設定だから無事だよ〜

「さて、ヴィータ…一度家に帰ろうか

シグナム達にも話しがあるし」

「…ああ」

ヴィータはその後こっそり蒐集していたが…

## 八神家 別荘内

それから シグナム ヴィータ シヤマル達と話し合いが行われた  
ザフィーラははやくと外出してくれた

「…なるほどな はやての命が」

まあ 知っていましたよ？

「それで神代はどうするつもりだ？…もし邪魔をするのであれば…」

カチヤ

「まあ とりあえずレヴァンティンから手を放してくれ ……ま 結

論から言つと…

なんで、はやての危機に僕だけのけ者なのかな？」

「う、い、いや今回の事は神代には関係な「関係大アリだろ？はやての事なんだから」…」

「でも キヨウスケ君…私達をしている事はどんな理由があれ犯罪行為…貴方を巻き込みたくなかつたのよ…」

すでに巻き込まれてるんだけどね〜

寧ろ 巻き込まれに来たのかも

『（Mツ気もあつた「（今回シリアスだから黙つてようね…）」ハ  
イ…』

「シャマル リンカーコアから魔力を蒐集された人はどうなる？」

「え、えつと 余程の事が無い限り命に別状はないわ しばらく魔法が使えない位かしら」

「そうか…今まで管理局員から蒐集したか？」

この時期すでに管理局員から魔力を奪っていたか原作でも分からないからな  
いからな

「いや まだ管理局とは戦っていない 主に魔法生物からの蒐集だ  
が…」

「魔導士からの蒐集なら頁が稼げるんだけどよ…管理局に目付けら

れると厄介だってシグナムが…」

どうやら まだ管理局からは蒐集してないか

…まあ 蒐集しても最悪アースラ関係者からだけなら【説得】して丸め込む事はできると思うが…

「なら 今までどおり魔法生物だけから蒐集してくれ それなら罪も少しは軽くなると思うし…それから僕も協力する！」

王 爆誕!?

と言つ訳で『どついう訳かは前々話から読んでクダサイ』…

と、とりあえず 僕も蒐集に参加しています。

参加に当たつてまず僕のリンカーコアから蒐集しては?という事を皆に話したら…

「…えっ!?! キョウスケ君にリンカーコアの反応が無いんだけど…」

と シャマル女医の診断で判明

この世界の魔法の規格外らしい

蒐集したら一気に666頁いくと思つたのに… ちくしょう

八神家

はやてSide

最近はみんな忙しいみたいやな

シグナムは近所の剣道場で非常勤の講師

未っ子ヴィータは近所の老人会のゲートボールチームに入れてもろて おじーちゃんおばーちゃんのアイドル(?)に

シヤマルはご近所奥様方との交流とか皆のお買い物とか(料理は私と一緒にないとかかん!と止めてある)

ザフィーラは常に誰かと一緒におるな

まあ みんなそれぞれやりたい事があるんはええコトやな...

ガチャ

「あ、はやて どうしたの?」

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

「あ、はやて どうしたの?」

なんか元気ないな

「あ、キヨウスケ君 なんでもあらへんよ」

「なんでもない人がそんな淋しそうな顔しないよ」

「…かなわんなあ」

…最近 皆一緒の時間があんまり無くて…ちょっと前までは皆ずーっと一緒やったから少し淋しいなって」

ナデナデ

「ヒヤッ！／＼／」

「大丈夫だよ はやて みんなはやての事が大好きなんだ 今はちよつと忙しいけど、またみんな一緒に暮らせるようになるから ね」

僕ははやての頭を撫でながら元気つけようとしたのだが…

はやての髪、撫でると気持ちいいな

『ロリ王降臨ですか』

ロリ王ってなにさ!?

「う、うん……／＼／」

あゝ はやても顔真っ赤だ

「「ただいま」」

え！？

「はやく お願い…ま」

「ごめんなさい ちょっと遅くなっちゃっ…あらあら お邪魔だったかしら」

やばい…

『マスター 貴方の事は忘れません…』

っ て おい！

「きょーうーすけー！！ てめーはやくは何してやがる…！！」

ヴィータがどす黒いオーラを放っている…！

「い、いや これは その… な、なあ はやく」

はやく助けて…

「……／／／」

っ てトリップされていらっしやる…！

こゝこれはマズイ！ ……そうだ！

「…ヴィータ」



「なんだよ？命乞か？」

僕はヴィータに近づき

チュ

「な！………／／／」

ヴィータの頬にキスをした

計算どおりパニクりまくってるな

「今だ！【エスケプ】！」

シュン

脱出する際、背後から凄い殺気を感じたのは…気にしないようにしよう…

『やはりハーレムの才能ありですね』

もういいや…

その後 八神家ではやてがヴィータに O H A N A S H I を し  
たそうな…

スマン ヴィータ 君の犠牲は無駄にしない！

「次はキヨウスケ君に O H A N A S H I せなあかな〜」

シャマル曰 修羅神が降臨した と後に語っていた

激突！！赤と白（前書き）

本格的な戦闘シーン…

はっきり言ってグダグタですっ！

すみませんが想像力全開で読んで下さい

ホント戦闘って難しい…

激突！！赤と白

夜、海鳴市市街地

「どうだヴィータ 見つかりそうか？」

「…居るような、居ないような」

「こないだっから時々出て来る妙に巨大な魔力反応 あいつか捕まれば一気に20頁くらいは行きそうなんだけどな」

「別れて捜そう…闇の書は預ける」

「OK ザフィーラ」

「…本当にいいのか？ 人は襲わないと恭介と約束を…」

「…急がないとはやての命が危ないんだ…多少の危険は覚悟の上だ」

「…わかった」

スッ

「…封鎖領域 展開」

「…魔力反応！ 大物見つけ！！いくよグラーアイゼン！」

《Jawohl》

ビル屋上

ヴィータSide

(いた！アイツを仕留めれば！！)

「テートリヒ シュラーク！」

ヴィータは少女に攻撃を仕掛ける

ドカアアア

ヴィータの攻撃によりビルから落下する少女

「キャアア！！

レイジングハート！お願い！」

《Standby LeadY Set Up》

ピカッ

少女は光に包まれ白い制服：バリアジャケットを展開し空に舞う

(ちっデバイスを起動さやがったか：でも関係ねえ！！)

「ふっ！おらあああ！！」

それでも構わずヴィータは追撃をかける

ドガッ

少女：なのははヴィータの攻撃を飛び続け回避する

「いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど！ 何処の子？ 一体何でこんな事するの！？」

教えてくれなきゃ分からないってば！！！」

ヒュン！ ヒュン！

なのはが予め放っていた誘導魔力弾をヴィータの背後まで操作して攻撃する

「ん！ くうう！！！」

(ちっ、誘導弾かよ！)

ドカアアア！

ヴィータは一発食らうも防壁で耐える

「このやるおおお!!」

《Flush Move》

クーン!

ヴィータはなのはを攻撃しようとするが、なのはは高速飛行魔法で回避

《Shooting Mode》

「話しを…」

《Divine》

「聞いてつてばあ!!」

《Baster》

ドゴアアアア!

なのはは砲撃魔法でヴィータを攻撃  
しかし僅かにヴィータの横を通過

「ぐっ、あっ!!」

その砲撃はヴィータの被っていた帽子を掠め破り、帽子は落下して  
いった

パサッ

(はやてがくれた帽子…アイツ!許せねえ!!!)

ヴィータの瞳に憎しみが宿り、その瞳をなのはに向ける

キッ！

「ああ…っ」

「グラーアイゼン！カートリッジロード…！」

《Explosion》

《Raketen form》

「ふええ！？」

ヴィータのデバイスにピック状の突起物とブースターが現れる

「ラケーケン！！うおおお！！」

ヴィータはブースター力でさらに加速しピック状のハンマーで攻撃

ブオン！パキイイ！

なのはは障壁で防ぐが障壁を貫通 そのままレイジングハートに直撃

「ハンマー！！！！」

ドカアアア！！

「キヤアアアア！！」

そのままレイジングハートの柄を折り、なのはをそのままビルに吹





パリーン！ドカアアアーン！！

その勢いで、なのはは吹き飛ばされ倒されてしまう

「ハア ハア ハア…あ、ああ くっ！」

ヴィータはグラアイゼンをさらに握り締め、なのはに近寄る

「…うつ」

カタカタッ

なのはは意識を失う寸前になる状態にもかかわらず戦意を喪失せず、震える手でヴィータに破損したレイジングハートを向ける

スッ

ヴィータはなのはにグラアイゼンを振り下ろそうとする…

S i d e O u t

なのはS i d e

(…こんなので終わり？嫌だ ユーノ君 クロノ君 フェイトちゃん…！)

ガキイ！

「なっ…！」

(え、何ともない…?)

「ごめん　なのは　遅くなった」

(この声は…)

「ユーノ君…？」

なのはを抱き抱えた少年、そして…

「ちっ、仲間か!？」

振り下ろされたグラブアイゼンを突如現れた漆黒のマントを纏った少女に防がれていた

ガチッ!…スタツ

お互いのデバイスで弾き返し距離を取る

《Scythe form》

「…友達だっ！」

「…フェイトちゃん？」

漆黒のマントを纏う少女…フェイトがヴィータの前に立ち塞がった

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

激突！！ 赤と金 オレンジやピンクも参上！？

フェイトSide

フェイトは赤い服を着た魔導師にバルデッシュを向ける

「民間人への魔法攻撃 軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだテメー 管理局の魔導師か？」

「時空管理局囑託魔導師 フェイト・テストロッサ…」

抵抗しなければ弁護の機会が君にはある 同意するなら武装を解除して「誰がするかよ！！」「！」

タッ！

しかしフェイトの勧告に耳を貸さずに逃げていく

(くっ！逃がさない！)

「ユーノ なのはをお願い」

「うん」

フェイトは、なのはをユーノに任せて赤い服の子を追いかける

タッ！

Side Out

上空

ウィータSide

(ちっ来やがったな！)

「バルデッシュュ！」

《Arc saber》

「ふんっ！」

上空にいたウィータに魔力刃を飛ばす

ザンッ！

(ちっ、させるかよ！)

「グラーアイゼン！」

《Schwalhe fliegen》

ヴィータもフェイトに向かって魔力球を飛ばす

バギユツ！

お互いの攻撃が交差し二人に襲いかかる

「っ！障壁っ！」

《Panzer hinderis》

ブオン、

ガガガガッ！

ヴィータはフェイトの攻撃を防御

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

一方ヴィータは攻撃を誘導して回避しているフェイトを追尾している

「はああ！バリアアアア、ブレイク！！」

突如下からアルフが現れ、ヴィータの隙を付いて障壁を破壊。同時にフェイトも攻撃を回避し魔力球を破壊

ドカアアアン！

ガキイ！、パリン！！

「このお！ ふん！」

アルフにヴィータの鉄槌がヒット

ドカア！

「ッ！うわぁ！」

そのままアルフは落下していく

(よし、一匹吹っ飛ばし！?)

「はっ！」

フェイトがその隙を付きバルデッシュを振りかざす

《P f e r d e》

ヴィータは高速飛行魔法を展開しフェイトの攻撃を回避する

ヒュン！

(食らっかよ…っ！ちっ)

刹那、落下したはずのアルフからバインドを掛けられうになるヴィータ

「はぁぁ！」

ギュン！

さらにアルフからのバインドを回避する

だがヴィータの高速魔法が解除される瞬間をねらい、続けざまにフ



エイトはバルデッシュを構え切り掛かる

「はああああ！」

ガチツ！バチバチツ！バチツ！

フェイトとヴィータ、二人のデバイスが攻めぎ合ってお互い一方も引かない

（…くつそお ぶつ潰すだけなら簡単なんだけど…それじゃ意味ねーんだ

魔力を持って帰らないと… カートリッジ残り2発 やれっか？）

Side Out

アースラ、ブリッジ

「アレックス 結界抜き まだ出来ない？」

「解析完了まであと少し！」

「術式が違う… ミッドチルダ式の結界じゃないな」

「そうなんだよ 何処の魔法だろう これ？」

ヴィータSide

「こんのお うっ!?!?」

フェイトに攻撃をしようと突進するヴィータだが、

ジャキイイン…ガチッ!

「んんん!」

ヴィータはフェイトに集中していた為、アルフのバインドに拘束されてしまう

(ッ!あの使い魔のバインド!?)

「ぐっ…んんっ!」

脱出しようとするヴィータだがバインドははずれない

「終りだね 名前と出身世界 目的を教えて貰っよ」

(ちっ、こんな所で!)

「んぐぐぐぐ…」

フェイトを睨み付けるヴィータ…

「…はっ！なんかやばいよ！ フェイト！」

「…勘がいいな…その使い魔」

(え？こ、この声は…)

Side Out

キヨウスケSide

「…勘がいいな…その使い魔」

…まったく…ヴィータは、暴走した結果捕まってるし

『(まあ、原作どりの展開でしたね)』

さて、介入するか

「サンダラ！」

ズガアアア！

まずはフェイト&アルフを牽制つと

「くっ！あ、あなたは誰ですか!?!」

「この」の仲間…って言えば分かりやすいですよね？」

「…なら、武装を解除して投降して下さい。民間「状況が分かっているように」ですね」

「僕は仲間を助けに来たんですよ？何でわざわざ捕まらないといけないんですか？それと…」

「…？」

「…仲間は僕1人とは限りませんよ」

僕がそう言い終わると同時に

シュン！タツ

「シグナム！」

「…レヴァンティン カートリッジロード…」

《Explosion》

「紫電一閃！ はあああ！！！」

フェイトに切り掛かるシグナム フェイトはバルデッシュで受け止めるが

ガキイイイ！

バルデッシュは一刀両断されてしまう

「はあああ!」

さらにシグナムはフェイトに切り掛かろうとレヴァンティンを振りかざす

「っ!?!」

《Defensor》

シグナムの攻撃に反応出来ないフェイトに代わり、バルデッシュが自動防御でフェイトを守る

ガキッ!

が、バリアごとフェイトを叩き落とす

ドカアアアン!!

アルフSide

「フェイト!?!」

(フェイトが落とされた!?!?  
くそっ!早く助けにいかないと…っ!)

スッ

「お前の相手は我だ…」

アルフの前に青い服を着た男が立ちはだかった

「こんのお！邪魔するなあ！！」

ドカアアア！

T o B e c o n t i n u e d . . .

助っ人ついでにコンビニへ

キョウスケSide

「ヴィータ、無事か？」

「うっせー これから逆転する所だったんだ！」

「ハア…確か僕は人は襲わないようにって言ったよね？」

「うっ…」

「まあ、無事でよかったよ。お前がケガでもしたら【主】が心配するし」

「…わーってるよ」

「それと…【デスペル】！」

パキーン！

バインドを解除っ！

…FF系の魔法でも解除できるんだ

『知らなかったんですか？もし解除出来なかったらイタイですよ』

…まあ解除できなかつたら【細雪】で切ったよ？

「あ、それからコレ、シグナムから預かったヴィータの落とし物だ」  
パサッ

「帽子の破損は直してくれたって 後でシグナムにお礼言っておかないとね」

「…ああ」

さてと、

「てか恭介…おめーどうしてココが分かったんだ？」

今更!？

「ま、それはね…」

数時間前

『マスター、結果が展開されました。この反応は…ヴィータ嬢です』

結果?ってことはやはり原作どりの展開か…



「ヴィータのやつ…：やっぱ【なのは】に目を付けたか」

『どっしりますっ？』

「なのはやフェイトに挨拶しに行くか」

『本格的に原作介入ですね？』

まあね、その前」…

「あ、はやて〜」

「ん？どないしたんや？」

「ちょっとコンビニに行ってくるけど、何か買ってきていいんか？」

「ん〜別に今はええよ〜それより気をつけてな？」

「ああ、じゃあ行ってくるね」

ガチャ、ボタン

「さて、インフィニティSet Up…  
いくぞー！」

「ゴッッ…」

## 結界表層部

「…結界が張ってあって入れない…」

『入り方考えてなかったんですか!』

いや〜行き当たりバッタリで何とかなるかなと（笑）  
…アレ使うか

僕は収納空間から刀を取り出す…

その刀身は小さな雪片を散らし、うつすら蒼く光っていた

「…【細雪】こいつなら…!」

シュツ、…カチン!

…パリーン!

結界の破片がまるで雪片の軽さで宙を舞う。  
スノーブラインドが僕を覆い尽くした…

「さあ 行こうか」

「と、いう風に来たんだよ」

はい、回想終了です…ん？

「どした？ヴァイター??」

「【細雪】ってなんだよ？てか何かツッコつけてるんだよ!」

描写にツッコミ!?

「ま、まあ簡単に言っと…この刀身に触れる魔法を全て、淡雪の」とく霧散させる」

「……………反則通り越してもう呆れるしかねーな…」

チート仕様だし

「さて、ここまできたら後戻りできないな…腹くるるか！  
いくぞヴァイター!」

「ああ!」

はやてSlide

「~~~~よし、と」

トウルルルル ガチャ

「もしもし？はやてちゃん？シヤマルです」

「あ、どうした？」

「すみません いつもものオリーブオイルがみつからなくて… ちよ  
つと遠くのスーパーまで買いに行つてきますから」

「あ、別にええんよ 無理せんでも」

「出たついでにみんなを拾つて帰りますから」

「そっか？」

「お料理お手伝い出来なくてすみません」

「アハハ 平気やつて…（寧ろ助かった…？）」

Side Out

シヤマルSide

「なるべく急いで帰りますから」

「急がんでええから 気いつけてな？」

「はい それじゃ」

「…そう なるべく急いで確実に済ませます クラールヴィント  
導いてね」

《Ja》

《Pendel für》

To Be continued...

迫り来る鏡

フェイトSide

ガチイイン！

シグナムとフェイトはお互いのデバイスで激突

「くっ！」

《Photon lance》

バチバチッ！

フェイトは射撃魔法弾を展開

「レヴァンティン、私の甲冑を」

《Panzergeist》

それを見たシグナムは防御壁を展開する

ブオン

「撃ち抜け ファイア！」

バチ！バチ！ガギイ！

フェイトはシグナムに向かって魔法を放つが

ガギイイン！

「っ！？」

シグナムの防御壁に全て阻まれてしまう

「…魔導師にしては悪くないセンスだ

だがベルカの騎士に一对一を挑むには…まだ足りんっ！！」

タツ！ヒュッ！

「はあああ！！」

シグナムはフェイトにレヴァンティン斬撃を繰り出す

ガギイイ！

フェイトはシールドを張り防御する、が

パリーン！！

（っ！破られた！？）

バリアを破ったシグナムの一撃をバルデッシュで受け止めるフェイト

「くっ！！」

ドキユ！

シグナムはレヴァンティンにカートリッジをロード

「レヴァンティン！！叩き切れ！！」

《Jawohl》

シグナムの一撃を再び受け止めるフェイトだが

ガギイ！…バギイイイ！！

受け止めたバルデツシュに亀裂が入り…

バギイ！ドオオオオン！！

フェイトはそのままビルに叩き落とされてしまった

「くっ…」

シュウウウ、

ドキユ！ガチャ！

《Nachladen》

シグナムはレヴァンティンに弾丸を装填する

（あれだ…あの弾丸、あれで一時的に魔力を高めてるんだ…）



「終りだか？ならばじつとしている  
抵抗しなければ命までは取らん」

「ッ！誰が！」

「いい気迫だ 私はベルカの騎士 ヴォルケンリッターが将…シグ  
ナム そして我が剣 レヴァンティン お前の名は？」

「…ミッドチルダの魔導師 時空管理局囑託 フェイト・テストロ  
ツサ この子はバルデツシュ」

「テストロツサ それにバルデツシュか…」

「「はああああ…！」」

バキイイーン！！

Side Out

なのはSide

「助けなきゃ…うつ…私が、皆を助けなきゃ…」

《Master shooting Mode accelerator》

「レイジングハート…?」

《Let's shoot it Starlight Breaker》

撃つて下さい スターライトブレイカーを

「そんな 無理だよそんな状態じゃ」

《I can bo shot》  
撃てます

「あんな負担の掛かる魔法 レイジングハートが壊れちゃうよ!」

《I believe My Master》  
私はあなたを信じています

「……」

《Trust me My Master》  
だから、私を信じて下さい

「…レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ!」  
フェイトちゃん ユーノ君 アルフさん、私が結界を壊すからタイミングを合わせて転送を…」

カチャ

「レイジングハート カウントを！」

《All right》

《count nine eight seven……》

《threey… threey… threey…》

「レイジングハート、大丈夫？」

《No problem》

大丈夫です

《Count three two one…》

ドクンッ！

「っ！？あ…あ…」

(な、なに？これ…)

なのはの眼前には…自身の胸から腕が突き出した光景があった…

Side Out

フェイトSide

「なの…は？」

（なののは胸から…腕が…？）

「なのはあ！！！」

なののは異変に気づき、駆け付けようとするが

カチャ！

だがフェイトの前にシグナムが立ち塞がる

「ここは通せん」

Side Out

To Be continued…



GETだぜ！？（前書き）

連続投稿の割に短いです

とりあえず一回戦目は終了？

GETだぜ!?

〔リンカーンコア捕獲! 蒐集開始〕

「あ…ああ…」

なのはの胸から突き出した手  
その手にあるなのはのリンカーンコアから魔力が吸い取られていく

《Count zero》

「…ス、スターライト…ブレイカー!!」

ふらつきながら、それでもなのはは集束砲撃魔法を放つ

ドカアアアア!!

キョウスケSide

「…ス、スターライト…ブレイカー!!」

ドカアアアア！！

タツ！

「インフィニティ！カートリッジロード！！全て防御に回せ！！」

《Load Cartridge》

ドカアアア！

「クツ！！やっぱスターライトを受けるのはキツイ…【マバリア】」

ブオン！

これで多少は…！！

…え？なんでスターライトをわざわざ受け止めているかって？

それは…

『マスター、SLBラーニング完了しました』

よっしゃー！

そう、マテリア【てきのわざ】にスターライトをラーニングする為  
さって、そろそろキツイか…

「【リフレク】」



キーン！

ドカアアアア！！

バキイイイーン！！

おお！、簡単に結界破壊しやがった…あの威力で非殺傷かよ…【リフレク】でも軌道ずらすのがやっただし…

ま、とりあえず魔王の技…GETだぜ！

…後はなのはを…

S i d e O u t

なのはの【スターライトブレイカー】により周囲に張ってあった結界が破られる

「（結界がぬかれた 離れるぞ）」

「（心得た）」

「（シャマルごめん助かった）」

「（うん 一旦散っていつもの場所でまた集合。キョウスケ君も離脱して）」

シュン！

アースラブブリッジ

「結界、破られました！映像来ます！」

「何これ…どうゆう状況…？」

ああ、逃げる！ロツク急いで！ 転送の足跡を…」

瞬間、モニターに映る敵魔導師 その手にある一冊の本

「…っ！あの魔導書は、まさかっ…！」

「急いで医療班を向こうに飛ばして！ それから本局内の医療施設の手配を」

「…ゴメン クロノ君…しくじった…クロノ君？」

「…第一級搜索指定遺失物ロストログア【闇の書】…」

「クロノ君 知ってるの？」

「ああ、知っている 少しばかり嫌な因縁があるんだ…」

〜座談会〜 忘れてかけていた【アレ】決定？

キヨ「とうとう本格的にA S介入だな」

イン『そうですね』

キヨ「原作、どうブレイクするか」

イン『ブレイク前提ですか!?!』

??『あ、あの〜 それより私の出番は?』

作【あ〜…タイミングがなかなか無くて】

??『そうですねですかあ〜 でも作者さん…私の事忘れないで下さいね(ニコッ)(」

作【は、はいっ／／／】

キヨ「…さつきから妙な電波が…」

??『あ、すみません 私は貴方のユニゾンデバイス(仮)です』

キヨ「…あ!すっかり忘れ…あ」

??『ウルウル(涙目) ええ〜 忘れていたんですか…』

キヨ「…神ガ忘レテイタラシイヨ？」

??『じゃあ神様のせいなんですね』

イン『神に反逆ですか』

キヨ「てか作者！？なんでココにいる！！」

作【座談会だから】

キヨ「……さいですか」

作【前々からユニデバの名前考えていたけど ようやく決定したので報告を】

キヨ「ようやくなのか…随分かったね」

作【友達に「女性キャラクターで名前付けるならどんなの？」って聞いて考えてもらった】

インフィ『丸投げですね』

キヨ「だな」

作【いや、友達が考えてくれた名前…既に使われていた為新たに考えて直して時間かった】

??『大変だったんですね』

作【…登場いつにするかは未定だが】

キヨ、イン、?? 『意味無っ!!!』

作【ま、まあ 気長にまつてて〜】

?? 『あの〜 それで、私の名前は?』

作【それは…】

キヨ イン ?? 『それは…?』

作【《エリス》です!!!】

エリス 『エリスですか〜。とてもいい名前ですね〜 私気に入りました』

キヨ 『で、このエリスの出番は?』

作【……………ちあ?】

エリス 『O H A N A S H I しましょうか? 作者さん』

作「え、いや 遠慮しましエリス」大丈夫 時間はたっつぷり  
ありますよ？」 …ハイ】

ズルズルズル、ボタンー！

キヨ「その後、ドアの向こうから…いや やめておじい…」

イン『後の自分の姿ですね』

キヨ「…作者よ 生きて還って来てエリスの魔王化は回避してくれ  
」…！」

行動には気をつけよう！

八神家リビング

「はやてちゃん お風呂の支度できましたよ」

「うん ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさい」

「はい」

「明日は朝から病院です あまり夜更かしされませんよう」

「はあ〜い」

「では よいしょ…と シグナムはお風呂でうごちますっ」

「…私は今夜はいい 明日の朝にするよ」

「そっ…」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまにはそっゆつ日もあるわ」

「ほんならお先に」



「はい」

ガチャ、バタン

「…今日の戦闘か？」

「…聡いな その通りだ」

「…お前の鎧を撃ち抜いたか」

「澄んだ太刀筋だった よい師に学んだのだろうな。武器の差がなければ少々苦戦したかもしれん」

「…だが、それでもお前は負けないだろう」

「…そうだな 我らヴォルケンリッターの誇りに賭けて」

シュ！

「ただいま」

「神代！無事だったか」

「まあね〜 あ、これお土産ね」

「一応コンビニに行くって出掛けたからね〜 お菓子、ジュース、アイスと色々あるよ〜」

風呂場

ピキーン！

「ん？」

「どないしたヴィータ？」

「なんかアイスの気配が…」

「??？」

再びリビング

ん？なんか欲望混じった変な電波が

「どうした神代？」

「あ、いや 何でもないよ」

「…コンビニに寄っていて遅くなったのか」

ああ、呆れないでパトラツ…じゃなくザフィーラさん

まあ実際はそれだけじゃないけどね

回想

数時間前

「さて、と…」

シュツ！

お、いたいた …… って フェイト、アルフ ユーノもいるか

「…！あなたは」

カチャ

バルデツシュ構えて臨戦体制か…ま 無理ないか

「…【ケアルガ】Ver【ぜんたいか】」

パアアアア！

「なっ…ケガが!？」

「…僕より高度な回復魔法!？」

ミッドの回復系は知らないけど、ケアル系の上級魔法だから  
次に…

「【インフィニットレイヤー】！」

パアアアア！

「なに…これ…」

「…暖かい…光」

これでなのは魔力も回復 リンカーコアの回復も早くなる…はず？

『疑問系ですか！？』

だって…ねえ

「…どういづつもり？」

うわっ フェイトさん睨んでますね〜

「…どういづつもり とは？」

「友達を…なのはを襲っておいて！…その襲った相手を治療するなんて…」

「まあ こちらも色々都合がある という事ですね」

「…あなた達は何でこんな事をするんです？」

「…闇を天に…それが【僕の】目的です」

最終的には改悪された闇の書を夜天の書に戻す …なるべく穏便に…あのキメラもどきとの戦闘は避けたいな〜

『ヘタレですか?』

いや めんどいじゃん!あの多重結界&超再生って!!

「闇を天に?どういう意味です?」

「…悪いがアフターサービスはここまでですね…管理局員が来たよ  
うです」

長話するとまた面倒になりそうだし…

「まって! まだ聞きたいことが…」

「では、ごきげんよう美しいお嬢さん…【エスケプ】!」

シユッ

『…何気にフェイトフラグ立てました?』

あのぐらいでフラグ立つわけないじゃんかゝ ハッハッハ

フェイトSide

「な、えっ?…//」

美しいお嬢さんって私の事!?

「フェイト?大丈夫?」

「アルフ!?な、なんでもないよ?…//そ、それよりなのはを  
アースラへ!」

…今ドキツとしたのは一体…

いざ！小さき悪魔の巣窟へ？

教室

「さてみなさん、実は先週急に決まったのですが今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。一人は海外からの留学生さん、もう一人は編入生さんです。フェイトさん、神代くん どうぞ」

ガラガラ

「し、失礼しますっ」

「……………」

「あいつ、フェイト・テストロッサといいます よろしくお願いします」

「神代 恭介です…よろしく」

はい？ 何故フェイトと一緒に自己紹介しているかって？

それは…

「はい、ではフェイトさんは後ろの席に 神代君はその隣の席ね」

… 只今聖祥大付属小学生に転入しています

しかも主要人物勢揃いのクラスに…

こうなったのも… アイツのせいだ〜あ！！

数日前

ピンポーン

「は〜〜い」

タッタッタッ

「八神さん、お届け物です」

これが不幸への片道切符のはじまりだった…

八神家リビング



「キョウスケ君に荷物が届いているわよ」

なんですと!?

ここに僕宛に荷物を送る人なんていないはず…

「…シャマル、差出人は？」

「え〜と… 【神 進】 ってなってるわ」

「シン、ススム？知らない…いや まさか…」

ガサゴソ

僕は荷物を開けるとそこには…

「…制服？ それに手紙？」

あからさまに見た事のある制服…凄く嫌な予感が…

一応手紙を読んでも…

聖祥大付属小学生への編入手続きしといたから

b y 神

…今時b yはないわ〜

「なんや？聖祥の制服？」

はやてさん！いつの間に！？

「さつきや、そういえばキョウスケ君って学校行ってへんよな」  
私は今休学中やから仕方ないけど」

…心が読めるんですか？

って、僕は見た目は子供でも中身は大人ですから小学校は…

『コソですか？』

「は、はやて 一応大学卒業程度の学力はあるから…学校に行かなくても問題ないよ」

「ん〜でもせっかく進さんって人が編入手続きしてくれたんやし…  
やっぱり一生に一度の学校生活、キョウスケ君にも楽しい思い出作ってほしいんよ」

いや、これで行ったら2回目ですから

「せっかくですから行って見たらどうです？（はやてちゃんには私  
が付いていますから大丈夫ですよ）」

「いや、しかしだな…」

「はやての気遣いを無駄にする気が…！」

うお！ヴィータいつの間に！？

「さつき帰って来た」

…いや、だから心読まないでよ

「…わたしの足のせいで、キョウスケ君が学校行けないみたいで何か嫌なんよ…」

こゝ、これは…断れない空気満載!?

「…はあ、わかったよはやて。じゃあ週明けから行くよ…」

と、いう訳で2度目の小学校生活を始めたんですよ…

え?フェイト達に顔バレてるんじゃないかって?

今は変装用メガネ(ネギまVer)をかけているからバレない…はずで、只今休み時間なんだが…

「ねえ 向こうの学校ってどんなカンジ?」

「すげー急な転校だよね なんて?」

「日本語上手だね どこで覚えたの?」

「前に住んでたのってどんな所?」

…隣でフェイトが質問攻めにあっています

僕に質問はないのか?フツ、近づくなオーラを出しているから誰も

寄って来ないよ。だってかつたるいし

なのは、アリサ、さすがSide

「フェイトちゃん 人気者」

「でもこれはちょっと大変かも」

「はあ しょうがないな」

パンパンツ！

「ハイハイイ 転入初日の留学生をそんなにみんなでワヤクチャにしないの！」

「アリサ…」

「それに質問は順番にフェイト困ってるでしょ…それに、アンタ！」

…ん？僕？

「…何かな？」

「アンタもカンケーないって顔してないでみんなの質問に答えなさい！…！」

なんでさ…しかも初対面で上から目線で命令!?

これが噂のアリサクオリティか!!

「何がアリサクオリティよ!!」

…あなたも心読めるんですか…

## School Days

キンコンカーンコーン

学校、昼休み

「フェイトちゃん 初めての学校の感想はどう?」

「歳の近い子がこんなにたくさんいるのは初めてだから…なんだかもうグルグルで」

「にゃはは」

「まあ すぐに馴れるわよ きつと」

「うん、だといいな」

ズルズル…

「あの〜…」

「あ、キョウスケ君 どうしたの?」

「どうしたのって…教室から拉致られて引きずられているんですが…」

そう 昼休み速攻教室から脱出を試みたが、フェイトに捕まり  
アリサに引きずられている状況っす…

「ご、ごめんね〜キョウスケ君。アリサちゃん強引で…」

すずかよ…謝るならまず助けしてくれっ

「ごめんね キョウスケ…アリサが捕まえておけっつて言っから…っ  
い…」

やはり諸悪の根源はアリサかっ!？

「で、バニングスさん… 僕に何か用でしょうか？」

「て、転校してきたばっかだろうし、あんた一人でお弁当食べるの  
も寂しいでしょ？」

だからあんたもついでに一緒に食べさせてあげよっつこのよ!文  
句ある!？」

…なんか言ってる事めっちゃめっちゃな気が…

ジイイイイ…

ん?視線が…

「ん?テストロッサさん 僕の顔に何か付いてる?」

「えっ! う、ううん 何でもないよ …ただ、前どこかで会った  
ような気がして…」

ギクッ！

「えっ？フェイトちゃん、キョウスケ君と会った事あるの？」

「うん…つい最近見たような…」

ギクッギクッ！ごまかさなければ…

「ほ、ほら 世の中には似たような人が25人はいるって言うし…  
他人の空似じゃないかな？」

「そっか」

「って、フェイト！！さすがにそんなにいないわよっ！」

「…あれ？そう言われれば、私も見たような…」

ジイイイイ

いや なのはさんフェイトさん 顔近いつて！！…仕方ない 少々  
危険だが【切り札】を切るか…

「…(ニコッ)」

「「っ！！…／／／」」

ああ、やはり二人とも真っ赤になって…って？



「……………／／／」

なぜにすずか&アリサまで真っ赤に!?

…ハッ!これが世界の修正力か!?

「ほ、ほら さっさと食べないと昼休み終わっちゃっわよ!」

「う、うん…そうだね」

「ど、どいで食べるのアリサ?」

「それはね……」

昼休み、屋上

「……………いただきます」

ふう… あれからなんとかごまかして、よっやくお弁当にありつ  
けた

「モグモグモグ…ん?」

ジイイイイ×4

な、なに？この視線？

「キヨウスケ君のお弁当…おいしそう」

「はあ…味見してみる？」

「え？いいの？　じゃあ私のおかずと取り替えっこしよ」

「あ、なのはちゃんだけずるい」　キヨウスケ君、私もいいかな…  
「？」

「あ、じゃあ私もいいかな？」

「私のおかずとも交換してあげるわ！」

パクツ　モグモグ

「」「」「美味しい」  
「」「」

「はは、ありがとう」

同時刻、八神家

ピキーン…！

「…っ！」

「どうかしましたか？はやてちゃん？」

「…キヨウスケ君が他の女の子と仲良うしている…気がする！」

「は、はやてちゃん？」

同時刻、管理外世界

ピキーン！

「はっ！？」

「…どうしたヴィータ？」

「…恭介のヤロー、他の女とイチャついている…気がする！」

「……………そうか」

再び屋上

ブルツ！

な、なんか寒気が…

「このお弁当、キヨウスケ君のお母さんが作ってくれたの？」

「あ、今親戚の家に住んでるんだ このお弁当もそのコが作ってくれ……ど、どうした？」

な 何だか4人からダークオーラが発生している……

「……キヨウスケ君

【そのコ】って女の子なのかな かな？」

何故二回繰り返す！？なのはさん！

「あ、ああ……僕と同年のコだけど……」

「……キヨウスケは、その【同年のコ】と一緒に暮らしているの？」

「え、ええ そうです……」

フエイトさん……目が単色にナツテマスヨ!?

「同年って事はウチの学校のコなのかな？」

「あゝ どうだったかな？ 今ちょっと病気で休学しているから……」

あ、病気発言でオーラが霧散した

「病気？そのコどっか悪いの？」

「病気……というか下半身がちょっと……車椅子生活しているからね」

「そ、そうなんだ……車椅子だと大変なんじゃないかな？」

「そのコのお姉さん2人（シグナム、シャマル）が面倒見てくれるから生活面ではそんなに苦労はないみたいだよ 妹も（ヴィータ）面倒見てくれるし…ってうわっ!？」

な、なんだ!？さつきより黒く深いどす黒いオーラが充満している!？

「…キヨウスケ君…女の子ばかりの家に男の子一人で住んでるんだ…」

「ま、犬もザフィーラいるけど…」

「でも男の子はキヨウスケだけなんだよね…」

「…ハイ」

こ、これは…いろんな意味でヤバイ!

「あ、そろそろ次の授業の準備「まだ時間あるわよ? その所をじっくり聞かせて貰おうかしら?」…え?」

アリスに肩を掴まれ振り返ると…

ゴゴゴゴゴッ!

単色の目をした4人がそこにいた…

い、生きて帰れるかな？

糖分過多摂取!?

キーンコーンカーンコーン…

## 教室

な、なんとか屋上から無事生還できた僕は…

「(ヒソヒソ) キョウスケ、授業聞かなきゃ」

隣の席のフェイトが呟いていた…だがな!

「(ヒソヒソ)…無理 てか誰のせいでこうなったと…」

まったく…僕は机に突っ伏してダウン中です

…そっだ! 京都に行こう …ぢゃなくて

「先生、少し体調が優れないので保健室に行ってきます」

「あら大変 じゃあ保健係の「あ、一人で大丈夫です」そ、そっ?」

はい仮病ですが何か?

保健室

ガラガラッ

「失礼します…って誰もいないか」

ちよつどいい、ベッドで寝かせてもらおう…

フイトSide

キョウスケが保健室に行ってしまった…

やっぱりさっきのコトが原因かな…

だって、その…キョウスケが他の女の子と一緒に住んでいるって  
聞いたら…

何だか胸のあたりがモヤモヤして…

何だろう…この気持ち…

キョウスケ…大丈夫かな？



後で様子見に行ってみよう…かな

Side Out

キーンコーンカーンコーン

放課後

キョウスケSide

「…んん 知らない天井だ…」

まあ お約束のネタを言ってみたが  
放課後まで寝てたか

コンコンッ

「し、失礼します」

ん？この声は…

「テストロッサさん？」

「あ、キョウスケ 具合はどつ？」

…仮病だからね〜

「あ、まあ 大丈夫だよ」

「よかった…あ、実はこれからみんなで翠屋で歓迎会やるってコトになって…よかったら…その…キョウスケも来ないかな…ね？」

つてフェイトさん そんな小動物みたいな目で訴えられたら断り難いっしょ

「まあ 折角のお誘いだし いいよ」

「ほ、ほんと！？よかった あ、実はキョウスケの鞆持って来たからすぐ行けるよ」

用意周到ですな…

「分かったよ テスタロツサさ「ねえキョウスケ！」って うお！？」

いきなりフェイトが凄いい勢いで突進してきた  
顔近いつスよ…

「あの…ね 私の事は…できればその、フェイトって呼んで欲しいんだけど…ダメかな…？」

だから何故みんな上目づかい+涙目コンボ使うかな〜

「わ、わかったよフェイト…あと、とりあえず顔近いから」

「あ……／＼／＼ごめ、きゃー！！」

「あぶなっ！！！」

慌てていた為、勢いよく離れようとしたらフェイトが体制を崩してコケそうになった

……で、僕は慌ててフェイトの腕を掴み助けようとしたんだよ うんただ……

ドサッ

……慌ててフェイトを引っ張ったから勢い余ってフェイトは僕に倒れ込んだ

「「あ……／＼／＼」」

端から見たら、フェイトが僕に覆いかぶさっているように見える体勢になっているが……

「……………／＼／＼」

フェイトさん……だから顔近いってか潤んだ目で見つめていらっしやるし……！！

「フ、フェイト？」

「……キョウスケ……／＼／＼」

スッ

って、何故目を閉じて近付くんですくわあああ!?

Side Out

同時刻、商店街

はやてSide

ピキーン!

「…はっ!」

「こ、今度はどうしたの?はやてちゃ…」

「…何か急にキョウスケ君を調きよ…【お話】しとうなってきたな  
」

「は、はやてちゃん…大根、握り潰してるわよ…」

後にシャマルは、光を失い単色になったはやての目を見て恐怖した  
という…

Side Out

同時刻、管理外世界、戦闘中

ヴィータSide

ピキーン！

「…っ!？」

「どうしたヴィータ!？」

「…何か急にイラついてきた!！」

「…ッ!」

「ヴィータ!危ないッ!」

「…うぜーんだよ!この爬虫類野郎!！」

とつとつとくたばりやがれっ!！」

アイゼン!カートリッジフルロード!！」

《Explosion》

「…うらあああ!！」

ドグアアアアン!！」

…後にシグナムは、辺り一面荒野と化した大地を見たそうな

Side Out

キョウスケSide

「……ん／＼／」

ん じゃねー！

ヤバイ フェイトとの唇の距離が後1センチ… このまま流れにまかせ…

ガラカラカラ！

「フェイトちゃん… キョウスケ君起き… た…」

…られなかった

悪魔降臨…

「キョウスケくん… フェイトちゃん…  
ナニヲシテルノカナ？ カナ？」

何故カタカナに!?

「いや、これは…事故! そう事故と不可抗力と偶然が重なって…  
ヒッ!」

な、なんだ 今のなのはは確実に視線で人を瞬殺できると確信できるぞ!

「フ、フェイト! そうだ! フェイトからも誤解を…ひいひい!」

なのはの殺気がさらに倍増した!?

「キヨウスケ君…

フェイトちゃんの事…名前で呼んでるんだ…」

名前呼んだだけで殺されるんかい!?

「きゅううう／／／」

フェイトは真っ赤になってオーバーヒートしてるしっ!

「ま、まで高ま…い、いや なのはっ!」

「ふえ!?!」

あ、名前で呼ばれて驚いたのか 殺気が消えた…

「フェイトが転びそうになり、助けようと咄嗟に腕を掴んだら 勢い余ってさっきみたいなただただだよ」

うん 嘘ではないよね …危なく理性飛びそうだったが

「そ、そうなんだ…」

どうやら納得してくれたみたいだな…

「ほら フェイトもしっかりしろ」

フニフニ

フェイトの頬をつねってみた

…お、柔らかいな

いや だからロリコンじゃないヨ？

「…はっ！ キョウスケ…それになのはも…いつの間？」

気付かんかったんかい！！

「外でアリサちゃんとすずかちゃんが待っているから早く行こ？」

「う、うん…あ、キョウスケ…さっきは その…／／／」

「まあ その…気にするな」

「…二人とも早く行かないと…」

う、ご機嫌斜め？

「あ、ああ 悪いのは 今行く…よ？」

なんだ！？この殺気は…



「…キョウスケ…いつの間になのはを名前で…」

何、この負の無限ループは!?

八神家、キョウスケ部屋

ピキーン!

『…何かマスターの身に面白い事が起こっているような…』

机の上に置いてある指輪が眩いていたそうなの…

## 歓迎会、翠屋Side

### 学校 校門

とにかく負の無限ループを脱出しアリサとすすかの待つている校門へ向かって…いるんだが…

「「く？」」

右腕なのは、左腕にフェイトが抱き着いている…

何故？

案の定校門にいたアリサ&すすかは

「あんだ！遅いと思ってたら何やってるのよ！！」

「…いいな…なのはちゃんフェイトちゃん」

「「えへへ / / /」」

「なのは、フェイト…そろそろ離してく…ぬおっ!？」

何だこの負のオーラ!? てかこのパターンは…

「…あんだ…いつの間に二人の事名前で…わ、私の事も名前呼びなさい!!--」

「私もすずかでいいよ」

最近 海鳴市周辺は名前で呼ぶの流行っているのか？

「わかったよ アリサ すずか」

「わ、分かればいいのよ／＼」

「えへへ／＼」

まあ 喜んでくれてるみたいだな

両脇から不機嫌オーラが発生していたのは言うまでもないか…

喫茶、翠屋

カランカラン

「いらっしゃ…あ、おかえりなさい」

「ただいま〜お母さん」

僕は転生して3回目の翠屋来店

桃子さんと土郎さんがいた…入って早々に土郎さんはこちらを見ていたが…

「あら、そちらの口は？」

「あ、僕は「彼氏です」「っはあ!？」

なのはさん…あなたは何をほざいてるんですか？

ああ、僕の周辺は一気に混沌に飲み込まれているし…

「あら なのはったら こんなカツコイイ彼氏作っちゃって」

桃子さん…このカオスに気付いて下さい

「あ…なのはさんの言っている事は冗談ですから」

当然訂正はするよ？

「そ、そうだよ！キヨウスケはなのはの恋人じゃないよ…キヨウスケは…わたしの…ごによごによ」

ん？最後の方が聞き取れないけど…？

とりあえず挨拶はしておくか…

「あ、はじめまして 今度聖祥に転校してきた神代 恭介です なのはさん達とは同じクラスメートなんですよ」

んゝ 我ながら社交性に長けているなゝ

ジイイイ

な、なんか桃子さんが僕の顔を見ている…

「あ、あの 何か？」

「以前お店に来た事…ないわよね？」

…変装メガネ効いてるのかな？

「は、はい 今日はこちらのお店で僕とフェイトさんの歓迎会を開いてくれるとなのはさん達が…」

「あらそうなの？ じゃあサービスしなくちゃね  
なのは、空いている席に案内してあげてね」

「は〜い じゃあキヨウスケ君 行こ」

だから腕を絡めないでくれ〜 土郎さんの視線が〜！！って来た〜  
！！

「やあ 君 ちょっといいかな？」

いやです…!!と言えればどんなに楽か…

「何でしょうか？」

「…君 何か格闘技とかしているのかい？」

…たしかに身体はチート仕様だが

「…まあ 格闘技、という程ではないですがそれなりに鍛えていま  
「貴様か！なのはに手を出す奴は！！」「…はい？」

カウンターから高町恭也が現れた…めんどい

「あ、あの…「なのはに手を出す奴はオレが相手だ！！」「…」

駄目だ このシスコン馬鹿 話し聞かぬ どうしようか迷ってる  
と

「…オニイチャン…私のお友達（恋人）に何を言っているのかな…」

何か、なのはの脳内変換で妙な単語が出てきたが

「あ、いや、これはだな「少し向こうでお話 しようかな かな？」  
…はい」

そのまま兄妹仲良く？奥に消えていった  
直後 断末魔が聞こえたのはスルーしよう

他の三人は苦笑いしていた…

迫り来る惨事？

夕方、翠屋

「さて、そろそろお開きにしようか」

一応小学生だからね、早めに帰らないと、はやても心配だし

「まあ、今日はもう遅いし、私とすすかはリムジンで帰るけど…。」  
人も乗っていく？」

「私は少しなのはと話しがあるから…」

「僕も大丈夫だよ」

あ、なのは、悪いけどお土産用のケーキ適当に見繕ってくれるかな？」

「うん、わかった」

タッタッタツ…ドテツ！

またコケた…

「そういえばキョウスケ君、携帯って持ってる？」

「ん？いや持っていないけど…」

「フェイトは持ってる？」

「ううん、私も持っていない…」

「二人とも持っていないんだ…」

「じゃあ今度パンフレット持ってきてあげるから二人の携帯買に行くわよ！」

何その決定事項は！？

「え、と、私はリンディ提と…さんに聞いてみないと…」

「キョウスケ アンタは？」

「まあ 携帯くらいは買えるから問題ないが…別に必要ないような」

「そんなことないよキョウスケ君！ お友達同士いつでもお話出来て便利だから」

「そうよ！ じゃあキョウスケは決定ねっ！ フェイトは…OKだったら買いに行きましょう？」

「うん…わかった」

タッタッタッ



「おまたせ〜 キョウスケ君」

お、今回はコケなかったか

「じゃあ料金は…カード使えるかな？」

僕はなのはに黒いカードを渡すとレジに向かって…ん？アリサとす  
ずかがビツクリしているみたいだが？

「はい、キョウスケ君 カード返すね

なんかお父さんビツクリしていたけど…何でかな？」

さあ？

今日の歓迎会はこれでお開きとなり、僕はケーキを持って帰宅しま  
した

## 八神家、リビング

帰って来て早々はやて&ヴィータに拉致られてリビングに正座させ  
られています… なんですさ

「今日は帰り遅かったなー？どっか寄り道してたん？」

はやてさん…顔が笑顔でも目が笑ってないっす

「あ…学校のクラスメイトが歓迎会を開いてくれるって事になって…あ、これお土産のケーキです」

一瞬顔が緩んだ！これで機嫌が…

「……くんくん」

? ヴィータさん、何を？

「ヴ、ヴィータ？どうかした？匂いなんか嗅いで？」

ケーキの匂いでも嗅いでいた？

「…ん！やつぱさうだ！！ 恭介から女の匂いがする…！」

はいいいい！！？

アタナは警察犬か！？

「…キョウスケ君…クラスメイトって女の子だったんかな？」

う、黒いオーラが！！ シグナム！シャマル！ザフィーラ！助けて  
！！！！ って何故目を反らす！？

「は、はい、女の子四人でし…んだと！！テメエいい身分だな！！」

つてちよ！まで、ヴィータ！！」

黒いオーラに殺気がプラスされた！？

「ん！？なんだ？恭介の首に付いてる赤い…」

ま、まさか！？

「い、いや　まで　これはキスマークじゃないぞ！　第一未遂だった…あ…」

「キヨウスケ君…少し別荘でお話せなあかんみたいやね」

「はやて…私も手伝うよ…」

こうして僕はヴィータに引きずられ、はやてと共に別荘へ…

その後別荘内で地獄絵図が広がったそうなの…

…別荘から出てきたはやてとヴィータの肌艶が妙によかったそうなの…

「一暴れした後のケーキはギガうまだよな　はやて」

「そやね」



大きい天国、小さき修羅神？

深夜、海鳴市街ビル屋上

ガチャ、バタン

「…来たか」

「うん」

「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようにはいかないわね」

「少し遠出することになるな なるべく離れた世界での蒐集を」

「今何頁で来てるっけ？」

「340頁 この間の白い服のコでかなり稼いだわ」

「おっし！ 半分は超えたんだな ズバツと集めてさっさと完成させよう」

「…早く完成させてずっと静かに暮らすんだ はやてと一緒に」

「行くか もうあまり時間がない」

「ああ いくぞレヴァンティン」

《Sieg》

「導いて クラールヴィント」

《Anfang》

「やるよ グラーアイゼン」

《Bewegung》

「それじゃ 夜明け時までにはまたここで」

「ヴィータ あまり熱くなるなよ」

「わーってるよ」

ガチャン！

「ちよつとまったー！」

俺 参上！

「神代！？どうしてここが！？」

「シグナム達が夜中こっそり出ていく気配がしてね… 場所の特定は【ハイパースキャン】の広域探査で」

「それでキョウスケ君 どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよシャマル！

蒐集を手伝うって言ったんだから何で僕に声をかけてくれないのさ

「？」

「…すまんキョウスケ お前には主の傍にいてほしかったのでな」

「ああ、前回管理局を相手にしたからな… あちらも本格的に動くだろう。万が一に備えて主はやての護衛をしてほしかったのだ」

「だったらそう言ってくれ」

「そーゆー訳だ恭介！ 今回は私らに任せな！！」

「まあ…分かったよ 今回ははやての護衛に徹するよ …みんな無茶するなよ」

「はい わかりました」

「シュン！！」

「あゝあ もう行っちゃった」

『マスターはこれからはやて嬢と添い寝ですか』

「いや 何故添い寝を！？」

『最近あちこちでフラグ立ててるようですので、ここいらで一度原点復帰をと』

「原点ってなにさ！？」

…まあ 添い寝はともかく 寝直すか…

シュン！

早朝八神家、

はやてSide

ピピピピピ  
ガチャ

うん。ふあああ朝やなく皆のご飯の支度せな…

「うん…」

パサッ

ヴィータ、布団かけへんと風邪ひいてまうよ

「ん…」

起しちゃうよじつに…



リビング

ん？ソファーに…シグナム、ザフィーラ まったく…毛布もかけず  
に…えっと毛布は…っ

Side Out

数時間後

トントントン

「ん、ん…」

「ごめんな 起こした？」

「あ、いえ」

「ちゃんとベットで寝やなあかんよ 風邪ひいてまう」

「す、すみません」

「シグナム タベもまた夜更かしさんか？」

「あゝ…その、少しばかり」

「ふふ あ、シグナム はい ホットミルク。暖ったまるよ」

「ありがとうございます」

「ザフィーラにもあるよ ほらおいで」

ガチャ！

「すみません！ 寝坊しましたあ！…」

「おはよう シャマル」

「おはよう あ〜もう！ しめんなさい はやてちゃん」

「ええよ」

「…オハヨ」

「うわあ…ヴィータめっちゃ眠そうやな」

「…眠い」

「んもう、顔洗ってらっしゃい」

「う〜 ミルク飲んでから」

「はい」

「…暖かい、な」

「あ、シャマル、もう朝ご飯できるからキョウスケ君起こしてきて

くれへん？」

「はい、わかりましたあ」

キヨウスケ部屋

キヨウスケSide

…く…き…い

ん…なんだ？

ユサユサ

揺れてる？地震？

キヨウスケ君起きてください

「…あと5時間10分」

「何具体的な睡眠時間言っているんですか！朝ですよ起きて  
トキ」

「…ああ…」

「あ、キヨウスケ君起きてくれましたか」

「……………」

「キヨウスケ君？」

ギョッ

「え、ええ！キ、キヨウスケ君？／＼／」

ああ なんだろう気持ちいいな またこのまま夢の中へ…

スパーン！！

「！いつて！？な、なんだ？」

「おはよう…キヨウスケ君」

「…はやてよ 朝からハリセン持って何をしているのですか？」

「これか？寝ぼけてシャルルに抱き着いていた誰かさんを叩く為や」

抱き着く？シャルルに？誰が？

シャルルの方を見ると…

「キョウスケ君ったら大胆／＼」

…はい？

『マスターはシャル女史の胸の谷間に顔を埋めて夢心地だったんですよ』

…ナンデスト？

「キョウスケ君ったら／＼言ってくれればいくらでも…」「いくらでも何やシャル？」「い、いえっ！」

朝から混沌としてきたな

『主な原因のマスターが他人事みたいに…』

「…キョウスケ君 ちよ／＼とオハナシしよか…」

「あ、じ、じゃあ私は朝食の支度をしてきますね」

シャル！ 助けてくれよ！！

バタン！

あ、希望の扉が閉められた…

「さあ キョウスケ君…じっくり話しあおか…」

リビング

ガチャ

「シャマル 主達はとうした？」

「はやてちゃん達は…」

ドカバキガキドコーン！！

「な、なんだ？ 恭介の部屋辺りから変な音が？」

「…ちょっとはやてちゃんがキョウスケ君にお話を…」

「あゝ…そうか」「

直後断末魔が聞こえたとか聞こえないとか…

「大きい胸がそんなにええんかー！！？」

乙女の魂の叫びも聞こえたとか…

後にこの出来事が引き金で、はやては揉み魔になったとかならない  
とか…？

百合神降臨…（笑）

八神家、玄関

「じゃあ 行ってきます…」

何とか【フルケア】で回復した僕は学校に向かう所です

「あ、待って！忘れ物や はい お弁当！」

「ありがとう はやて」

「なんか…旦那様を見送る奥さんみたいで照れてまうな／＼／」  
なら言わなければ…

「じゃあ 行ってくるね、はやて」

「いってらっしや〜い…あなた（ボソツ）／＼／」

ん？ 最後が聞き取れなかったが…まあ いいか

学校、昼休み



ん？授業はどうしたと？

ショートカットしたけど何か？

「はー やっとお昼だよー」

「おなかすいたねー」

「なのはーすずかー 早く行きましょ！

あ、フェイト！キョウスケを拉致って屋上ね」

アリサよ！何を物騒な台詞を！？

「え、と、じゃあ行こう キョウスケ」

フェイトよ 行くのはいいが…なぜ手を繋ぐ？ 周りのその他男子の殺気が…

## 屋上

「そういえばフェイトちゃん、宿題ってちゃんとやってるっ？」

「うん ちょっと難しいけど何とかやってるよ」

「頑張つてね」

「うん ありがとう すずか」

「フェイトつて漢字の読み書きがまだあんまり出来ないから先生から特別な宿題が出されてるのよね？」

「うん でもアリサは凄いやね 英語も日本語も完璧なんて」

「えっへん！パーフェクトバイリンガル」

「「わーパチパチパチ」」

「で・も！ フェイトの理数系の成績についてはビミョーに納得いかないのよね」

「え？なんて？」

「なのはもそうだけど…なんで二人して理数系だけがバツグンに成績いいのッ！？」

「え」

「ええと なんでだろう…？」

…アリサが坊やだからさ

「なんか言つた？キョウスケ！？」

「いえ なにも」

「あゝ フェイトちゃん うちのお姉ちゃんの数学の問題も解けたから…わたしより上かも」

「そんなことは聞いてないッ！」

タダっ子だな もう…

「キョウスケ！知らん顔してるけど、アンタの成績も納得いってないのよ！！」

え？なんで？

「理数系どころか私と同じ全教科満点って何よ！？真似！？」

殆ど言い掛かりだな。クレーマーだよ

中身は成人男性の知識人だからな

「まったく 負けてられないわ！ 今度は塾のテストで勝負よフェイト！キョウスケ！」

「いーよー」

「遠慮します」

第一僕は塾行ってないし なんかアリサが騒いでるがスルーするか

「にやはは 二人とも大丈夫？アリサちゃん負けず嫌いだから」

「うん！面白そうかな」

俺は迷惑だけだな

「そーそー 学校のテストなんて百点は当たり前で面白くないもんねー」

「あーアリサちゃん…それ絶対おかしいから」

なのはフェイトSide

「でも、物理と数学ってミッドチルタもこっちもほとんど変わらないんだね」

「そうだね リニスに教わってたのほとんど同じみたい」

「魔法の構築とか制御とかって理数系だもんね」

「だよね でもアリサとかキョウスケも凄いよね あんなに勉強できて」

「そーだねー。すずかちゃんは運動得意だし」

「うん 午後の体育でもまた凄いとこ見られるかな？」

「でもフェイトちゃんは漢字以外は勉強もできるし、運動も得意だ

し…凄いよねえ…」

「そ、そんなこと…ないと思うけど…」

「わたしは文系だめだし、体育苦手だし…」

「う…うん…なのは魔法戦はあんなに強いのにね…」

「あうっ…」

「でも大丈夫 午後の体育のドッチボールでは私がきつとなのはを守るから」

「フェイトちゃん…」

ギョッ！

「うん…ありがとうフェイトちゃん」

Side Out

キョウスケSide

「うん…ありがとうフェイトちゃん」

あゝ抱き合って二人の世界に入っただけじゃあ

「あー また二人でベタベタしてる」

「今日はなんのお話？」

「あ、アリサちゃん すずかちゃん!？」

「ああ ええと いろいろと」

「あははは」

「なのは、フエイト…」

「何？キヨウスケ君」

「二人は…百合系？」

「ふえええ!？」

「な、ち、ちがうよキヨウスケ!？」

その後二人は必死に誤解を解いていたという…

「いや、そうしか見えんしっ!」



## 勉強会と敵陣突入！？前編

キンコンカーンカーン

放課後

今日のお勤め終了っ！

ん？午後のドッチボール？  
テキトーに投げてたら勝ったよ？

さて今日はこれから「キョウスケ君 一緒に帰ろうっ？」って…

「なのはとフェイトか… あれ？アリサとすずかは？」

珍しい 4人セットだと思ったのに

「アリサちゃんは塾だって」

「すずかは図書館に用事があるからって先に帰ったよ」

最近の小学生は忙しいな

「まあ 一緒に帰るのはいいよ」

「ホント？じゃあ早く行こう」



なのはよ…当たり前用に密着してくるよな…　なのはフラグ立ってたか？

「あ、なのはずるいよ」

ギョッ

フェイトさんも腕絡めて密着させるんですね…

いいですけど…

マンション、フェイト部屋

で、なぜこうなった!？

状況はフェイトの部屋に僕、なのは、フェイトの三人

事の始まりは…

数時間前

「ね、フェイトちゃん 今日宿題で分からない所があるんだけど…教えてくれるかな？」

「うん いいよ あ、でも私も分からない所あるし…あ、そうだ！キョウスケ、よかったら勉強教えてほしいんだけど…」

「あ、フェイトちゃん ナイスアイデア！ キョウスケ君頭良いしね〜」

なんか知らぬ間に流れが変な方向に…

「あ でも僕も人に教える程では…」

「だめ…かな？」

「キョウスケ…」

うっ だ、だから二人して涙目で訴えないでくれ！

「…わ、わかったよ でも勉強教えるって場所はどつするんだ？」

「あ、だったら私の部屋はどうか？それなりに広いし ね？」

…ハイ？フェイトの部屋？「アースラクルー駐屯地」敵陣だよね！？ まずくない？

「あ、じゃあ私何かお菓子持っていくね」

既に確定っすか…

確かクロノもいるんだよな…あの変態シスコン あ！この時期は

まだフェイトは養子になってないからシスコンではないか？ KY  
は健在だろうか…

「あゝ 僕がフェイトの家にお邪魔してもいいのか？」

「え？ うん ぜんぜんいいよ そ、それにキョウスケの事…その、  
紹介したいし…／／／」

いや 娘さんを下さい って言いに行くのではないし

「……………」

う、なのはから覇気が！？

「キョウスケ 早く行こ／／／」

だからひっぱらないでくれゝ

現在

そして僕はフェイトの部屋に  
ちなみになのはは光の速さでお菓子を持って参上しました  
… かなり息が上がっていたが

この何故か黒い空気…どうなるのさ

…続く

「この状況が続くのか!？」

作者【はい】

勉強会と敵陣突入！？後編

カリカリ、カリカリ

「しかし…二人とも理数系得意なんだし 僕が教える事あまりないよね」

フェイトはともかくなのはも理数系得意ってのは七不思議の一つだな

「…なんか今すごく失礼な事考えなかった？キョウスケ君」

「…イエ？」

「でもキョウスケが居てくれるお陰で勉強もはかどるよ」  
「つてもちよっとしか教えてないよな」

ガチャ

「ただいま フェイトさん…あら、なのはさん いらっしやい」

アースラ艦長リンディ提督が現れた！

…逃げる？

「あら 貴方は初めて見るコね」

「お邪魔してます フェイトさんの「か、彼氏です／＼／」…って  
おい！」

なに？このデジヤヴ！？

「あらフェ「違いますから」あら残念」

なんかフェイトが落ち込んでいるが…

「フェイトさんやなのはさんと同じクラスに転校してきた神代恭介  
です」

「あらこれはご丁寧に 私はフェイトさんの保護者のリンディ・ハ  
ラウンです フェイトさんと仲良くしてあげてね」

なんかなのはの視線が怖い！！

「は、はは なのはさん共々仲良くしますよ」

危機回避能力だけはかなりアップしたからな フォローは入れな  
いと

「そつた、恭介君 よかったら夕飯食べていかない？フェイトさん  
もその方が喜ぶだろうし」

リンディさん！さっきから爆弾投下しっぱなしッスよ

「……／＼／」

「……………」

ああ！二人の反応があからさまに正反対だし

「あ、すみません 家で家族が待っていますので遠慮します」

「あらそう…残念ね」

フェイトには悪いがはやてが待っているからな

「それではそろそろ僕は…」

「え？もう帰っちゃうの！？」

もう…って一般小学生には遅い時間だと思っが

「ああ お菓子ありがとうなのは）ニコッ（」

「！ど、どういたしまして…／＼／」

「フェイトも今日はありがとう）ニコッ（」

「！う、ううん！こちらこそありがとう…／＼／」

…二人とも顔が真っ赤だな

「それではお邪魔しまし…」

ガチャ

「ただいま母さん」

「たっただいま〜！」

…クロノ&エイミイが現れた！

…本気で逃げる！？

「ん？お客さんだったのかい？」

「へ〜、なかなかカツコイイ子だね　なのはちゃんかフェイトちゃん  
の彼氏？」

ちよ！エイミイさん！核弾頭投下しないで下さい！！

「「そ「いえ　友達です！！」「…チツ」「

二人とも性格崩壊！？

とりあえず…

「フェイトさんのお兄さんにお姉さん…ですか？　はじめまして  
同じクラスに転校してきた神代恭介です　今日はフェイトさんたち  
と勉強会を開いていたのでお邪魔させていただきました」

なのはやフェイトが妙な事を口走らない内に説明をしとかないと

「あ、ああ　フェイトの兄…かな？クロノ・ハラオウンだ」

「私はエイミイ・リミエツタ　よろしくね〜」

やはりこの頃のクロノはシスコンではないか…



「はい それでは今日はこれでおいとまします」

「あ、待ってキョウスケ君！」

「ん？どうかした、なのは？」

「えっと、ね よかったら…送ってってほしいかな？なんて／＼／」

あゝ、夜道を女の子一人（時期魔王だが）ってのも何だしなゝ

「まあ構わないよ」

「え、ホント！？…じ、じゃあ、行こうか…／＼／」

僕はなのはとハラウン家を後にした…

背後から殺気を感じたのはいうまでもないな…

夜、フェイトマンション（アースラ駐屯地）

ミレム

「ん？はいはい エイミィですけど？」

「あ、エイミイ先輩 本局メンテナンススタッフのマリーです」

「あ、何？どうしたの？」

「先輩から預かっているインテリジェントデバイス2機なんですけど…何だか変なんです」

「えっ？」

「部品交換と修理は終わっただんですけどエラーコードが消えなくて…」

「エラー？何系の？」

「ええ 必要な部品が足りないって…今データの一覧を」

ピッ

「あ、きたきた… えっ！？、足りない部品って…これ？」

「ええ…これ何かの間違いですよね？」

エラーコードE203 必要な部品が不足しています  
エラー解決のための部品 ” CVK - 792 ” を含むシステムを組み込んで下さい

「2機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けられないんです それで困っちゃって…」

(レイジングハート…バルデッシュ…本気なの!?)  
CVK - 792…

【ベルカ式カートリッジシステム】…)

T o B e c o n t i n u e d

## 友達の友達は友達の輪だね

あの後なのはを送っていき（途中シスコン兄に勝負挑まれたが、なのはが地獄に連れていった…）八神家に帰宅。

みんなと夕飯を食べていたのだが…

### 八神家リビング

「友達？」

「そや 明日私のお友達を夕飯に誘ったんやけど…みんなもええかな？」

「はやての友達？ 何か忘れてるような…」

「はい 我々は構いません」

「はやての友達ってどんな奴だ？」

「グイータ 奴ってのは失礼やで私と同じ年のカワエエ女の子だよ。」

「名前はすずかちゃんて言うのよ 私も話した事ありますがどうしても優しいコでしたね」

「…ッ！？なんですと〜！」

「ど、どうした？神代？」

「えっと…はやて、月村すずかさん かな？」

すっかり忘れてた〜！ 原作ではやてとすずか 早期に友達になるんだっけ…

「え！？キョウスケ君知つとるん？」

「まあ クラスメートだし」

「え！？すごい偶然やな〜 …もしかして、キョウスケ君はすずかちゃんと友達？」

「ま、まあね」

「…ふ〜ん じゃあ明日、すずかちゃんに学校でのキョウスケ君の事いろいろ聞いてみなあかな〜」

…なんでさ 明日ど〜し〜しよ〜し〜し

次の日、管理外世界

今日は学校は休みなので、シグナムと管理外世界で蒐集しています

「　　　ッ！！」

「大物だな…」

「シグナムは下がってて　僕がやるよ」

「…フツ　いいだろう　お手並み拝見しよう」

さて、大型のサ○ホーンみたいなヤツだが…

「【クロックマネージャー】！！」

「　　…」

僕はクロックマネージャーを発動　相手の動きを止め…

「インフィニティ！フェアリースフィア！」

『フェアリー展開』

僕の周りに十数のスフィアが出現

「いくぞ！…この妖精は、性格悪いぞ！！」

『ターゲットロック』

「いけっ！」

僕が掲げた手を相手に向けると、すべてのスフィアが相手の周囲に展開し…

「…ショット！」

ドカドカドカアアアーン！！

スフィア一つ一つから拡散された魔力弾が射出される

「ッ！」

ドオオオオン！

「よし シグナム 蒐集を…ってどうした？」

何かシグナムの顔が輝いている…不吉な！？

「神代！ 帰ったら模擬戦をつー！」

「…はあ とりあえず蒐集してね」

海鳴市内スーパー

はやてSide

「そやけど最近みんな、あんまりお家におらんようになってしまったな……」

「え、ええ まあそのお…なんででしょうね」

「あ、別に私は全然ええんよ みんなが外でやりたい事とかあるんやったら…それは別に」

「はやてちゃん……」

「私は元々一人やったしな」

「…っ！はやてちゃん大丈夫です！今は皆忙しいですけど、その、すぐにまたきつと……」

「そっか、シヤマルがそう言うならそうなんやね。今夜はさすがちやんも来てくれるし、あ、お肉はこんなもんかな？」

「はいっ」

「外は寒いし、今夜はやっぱあったかお鍋やね。」

「はいっ」



ウイイイン

外はめっちゃ寒いな〜

「はあ、みんなも外でさむないかな……」

S i d e O u t

キョウスケ S i d e

「神代 先程のはバインドの類なのか？相手の動きを完全に止めていたが……」

ああ クロツクマナージャーの事ね

「バインドではないよ あれは一定空間内の【時間】そのものを停止させるんだよ」

「……ヴィータからも聞いていたが、もはや何でもアリだな」

もはや呆れ果てるよね〜

「さて、このまま次の世界に《シグナム、キヨウスケ君！聞こえる？》ん？シャマルからの通信？」

なんか焦っているような…

「どうしたシャマル？」

《あ、シグナム！？ 大変なの！！ヴィータちゃんとザフィーラが管理局の人達に囲まれて…！》

「っ！なんだと！？シャマル二人は無事か！？」

《管理局の捕縛結界に閉じ込められてしまっただけで脱出できないでいるの…》

ふむ… 第二ラウンドか… 確かなのはとフェイトがカートリッジシステム搭載してくるんだっ たな…

「分かったシャマル、今から現場に向かう」

《お願いします 私も後から合流しますので》

「さて、シグナム…行くぞ！」

「ああ！」

Side Out



新たな力 舞う戦乙女

都市部上空

ヴィータSide

「くっ…」

「管理局か」

ヴィータ達は管理局員に周りを包囲されていた

「でもチャライよ コイツら 返り討ちだ!」

しかし…

スッ…

「ん?」

突如包囲していた管理局員が後退していく

「!上だっ」

上空には魔法を展開していた魔導師…クロノがいた

(しまった！さっきのやつらは囷か！?)

「ステインガーブレイド エクスキュージョンシフト！」

ブオンブオン

クロノは無数の魔力刃を放った

「チィ！！」ザフィーラはとっさにシールドを展開し…

ブオン！ドカドカドカアア！！

「ハアハア…少しは通ったか？」

多少攻撃を通したのか魔力刃を数本腕に食らったザフィーラがいた

「！ザフィーラ！？」

「気にするな この程度でどうにかなるほど…ヤワじゃない！！」

パキン！

ザフィーラが力を入れると、魔力刃は碎け散る

「上等っ！」

Side Out

アースラ駐屯指令室

「武装局員 配置終了！ OK クロノ君」

〔了解〕

「それから今現場に助っ人を転送したよ」

エイミイがそう告げると、クロノがビルに二つの人影を見る

「えっ？あ、なのは！フェイト！」

市街地、ビル屋上

なのは、フェイトSide

「レイジングハート！」

「バルデッシュュ！」

「「Set Up!!」」

ピカア!

二人が光りに包まれたが、いつもと様子が違った

《Order of the setup was accepted》

《Operating check of the new system has started》

「…え!?これって?」

「今までと違う?」

「二人とも落ち着いて聞いてね! レイジングハートとバルデツシユも新しいシステムを積んでいるの!」

「新しい…システム?」

「その子たちが望んだの 自分の意思で…自分の想いで呼んであげて その子達の新しい名前を」

「レイジングハート・エクセリオン!」

「バルデツシユ・アサルト!」

《《Drive Ignition》》

パーン！

ウィータがなのは達のデバイスの変化に気付き

「あいつらのデバイス… あれってまさか!？」

ガチャ

《《Assault form》》

《《Accel mode Standby ready》》

新たな力を手に入れた魔導師…なのはとフェイトが降臨した

Side Out



右手に剣、左手に希望

市街地、結界表層部

キョウスケ、シグナムSide

「強装型の捕獲結界 ヴィータ達は閉じ込められた か……」

《Wahlensie Aktion!》  
行動の選択を

「レヴァンティン、お前の主はここで退くような騎士だったか？」

《Nein》

否

「そうだレヴァンティン 今までずっとそうしてきた！」

「あゝ……盛り上がってる所悪いが……」

僕も居るんですよ

「む、すまん。それで何だ？」

「結界には僕が穴を開けるからシグナムはヴィータ達の援護に行っ

てくれないか？」

「神代はどうするのだ？」

「僕はシャマルの援護を…ね。大丈夫、後で駆け付けるから」

確か…シャマルがクロノに見つかって、ピンチの所をあの仮面の男（猫姉妹）が介入してくるんだが…

その時【闇の書】の頁を消費して結界を破壊するのが原作なんだが…悪いが頁は使わせない！てか、猫は廃除する！

…以前警告はしたから歴史が変わって来ないかもしれないが…

「分かった、シャマルの事 頼んだぞ」

「それと今日は、さすが遊びに来る日だからな。みんな遅れないようにしないとな」

「ああ、主が楽しみにしているのだしな」

原作では間に合わなかったか…

「…はやての笑顔、護ってみせるさ」

僕は【細雪】を取り出す

「…その刀、ヴィータに聞いた【細雪】とやらか？」

「…うん、でも…」

ドクン！

僕は細雪を構え【リミッター】を解除する

ギユン！

細雪は、刀の姿から光の刃そのものに姿を変えた

「なっ！？」

「貫けええ！」

ガシユ！

リミッターを解除した細雪は結界を貫通し大穴を開けていた

「さ、シグナム」

なんかビックリしてるようだが？

「あ、ああ。では行ってくる」

シュン！

さて、僕はシャマルを探して…と

シューーン！パシッ！

もちろん細雪は回収していくよ？

自動帰還付きだし〜



## 想いを力に

市街地、ビル屋上

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない　まずは話しを聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

フエイトとなのはは、ヴィータ達を説得をしようと言いつつ話し合いを求めていた

「…あのさあ　ベルカの諺にこーゆーのがあんだよ　【和平の使者なら槍は持たない】」

「「…??？」」

「話し合いをしようってのに武器を持ってやって来るヤツがいるか　バカ！って意味だよバーカ！」

「なっ…い、いきなり有無を言わずに襲って来た子がそれを言う！？」

「…それにそれは諺ではなく小話のオチだ」

「うつせー！ いいんだよ 細かい事は」

ドカアアア！

突如、結界を破り上空から現れた人影：

「っ！シグナム」

突如現れたシグナムに驚くフェイト

「ユーノ君 クロノ君 手え出さないでね 私あの子と一対一だから！」

なのはは、ヴィータを見据えてクロノ達を制する

「ちっ…」

ヴィータは不愉快そうになのはを睨んでいた

「…マジか？」

「マジだよ」

クロノとユーノは苦笑混じりで答える

「（アルフ…私も、彼女と…）」

フェイトは先程現れたシグナムを見つめてアルフに念話をおくる

「…ああ 私も野郎にちよいと話がある」

フェイトに答え、アルフはザフィーラを睨み付ける

「…ん？」

ザフィーラもその視線に気付き身構える

ここに前回の闘いの第二ラウンドが開始されようとしていた…

## ビル群屋上

クロノ、ユーノSide

「（ユーノ それなら調度いい 僕と君で手分けして闇の書の主を  
探すんだ）」

「（闇の書の？）」

「（連中は持っていない おそらくもう一人の仲間か主かがどこか  
に居る 僕は結界の外を捜す 君は中を）」

「（わかった）」

「キューン！キューン！」

Side Out

なのは、フエイトSide

《Master》

「うん？」

《Please Call me Cartridge Load》  
カートリッジロードを命じて下さい

「うん、レイジングハート！ カートリッジロード！」

《Load Cartridge》

《Sir》

「うん 私もだね

バルデッシュ！カートリッジロード！」

《Load Cartridge》

「デバイスを強化してきたか…気をつける ヴィータ！」

「言われなくても！」



シムン!

Side  
Out

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

## 純白の天使

市街地、ビル群上空

なのはVSヴィータSide

ヒュン

上空を飛んでいるヴィータ、その後を追うようになのはが飛んでいた

「ふん、結局戦<sup>ち</sup>んじゃねーかよ」

「私が勝つたら話を聞かせてもらおうよ！いいね!？」

「やれるもんなら…やってみるよ!！」

《Schwalhe fliegen》  
バシユ!

ヴィータは魔力弾をなのはに目掛けて撃ち込む

《Axel fin》

ヒュン!

なのはは上空に上がり回避する

「アイゼン！」

《Explosion》

《Raketenform》

ヴィータは、なのはに向かい突進する

ビュユユ！

ブースト加速をし、回転しながらなのはに攻撃を向ける

「あつ！」

《Protection Powered》

ガキン！！バチバチバチ！！

レイジングハートはプロテクションを張りヴィータの攻撃を防御する

ギイイイイイン！

「か、堅てえっ！」

「あ、ホントだ」

《Barrier Burst》

ギイイイン…ドカーーン！！

プロテクションは爆発し、なのはとヴィータは爆風によりお互い吹き飛ば

「ぬあああ!?!」

なのはは体制を立て直したが、ヴィータは不意を付かれた為バランスを崩して落下していく

《L e t s   S h o o t   i t   A c c e l   S h o o t e r》  
アクセルシューターを撃つて下さい

「うん!アクセルシューター!」

《A c c e l   S h o o t e r》

「シュート!!」

ドゴアアアン!!

「えっ!?!」

カートリッジで強化された砲撃は、なのはの想像以上の魔力弾数を生み出した  
その数12発

「ぐっ…なっ!?!」

体制を立て直したヴィータだが、その数に驚いた

《C o n t r o l   p l e a s e》  
コントロールをお願いします

「ん…!」

なのは目を閉じ意識を集中、アクセルシューターをコントロールする

ギューン！ギューン！ギューン！

ヴィータの周りを囲むようにアクセルシューターが回っている

「アホか！こんな大量の弾、全部制御出来る訳が…」

バツ！

ヴィータが言いながら腕を振ると、先程放った魔力弾が四方からなのはに接近する

《It can be done as my master》

出来ます 私のマスターなら

「ん…」

ギューン！ギューン！ギューン …… パーン！

なのはのアクセルシューター4発は軌道を変え、ヴィータの弾を迎撃した

「ああ…」

複数個の魔力弾を制御しているのはを驚愕したヴィータ

「約束だよ 私達が勝つたら事情を聞かせてもらって  
アクセル…」

「くっ！」

《Panzer hindernis》

ヴィータは自分の周りに全包围防御魔法を張った

「シューート!!」

ヒュン!ヒュン!ヒュン!

しかしなのはは、お構いなしにバリアごとヴィータに攻撃

ガンガンガン!

ヴィータのバリアになのはの攻撃が連続で当たり、徐々にバリアに  
亀裂が入っていく

「あっ…このお…!!」

ヴィータは低い声で呟いた…

To Be continued



漆黒の女神、暁の牙

ビル群

フェイトVSシグナムSide

ガン、ガン！

フェイトとシグナムはお互い攻撃をしながらビルを駆け上がっていく

「はああああ！」

「ぬああああ！」

ガキン！…バキン！

フェイトとシグナムはデバイスでぶつかり合い、お互いを弾くと体制を整える

《Plasma Lancer》

バチバチバチ！

「プラズマランサー ファイア！」

ギューン！ギューン！



フェイトはシグナムに向かって魔力弾を放つ

「はぁぁ！」

シグナムはレヴァンティンを振りフェイトの攻撃を振り払う

ブォン！

振り払われたフェイトのプラズマランサーは四方八方に散り空中に静止した

「ターン！」

バチバチッ！

ギューン！

フェイトの命令によりプラズマランサーは向きを180度変え、再びシグナムに襲いかかる

「はっ！」

シグナムは襲い掛かってくる魔力弾を上昇してかわすが、さらに魔力弾は追尾してくる

「レヴァンティン」

《Sturm winde》

シグナムはレヴァンティンから衝撃波を放つ構えを取る

《Blitz Rush》

バルデツシュは加速魔法をかけ魔力弾のスピードをさらに上げる

「てええい！」

ザシュザシュ！ドカーン！

シグナムの魔力が籠った衝撃波でフェイトのプラズマランサーを全て迎撃した

「はあ！」

《Haken Form》

その隙をついて、フェイトはバルデツシュをサイズフォームにしてシグナムに接近して攻撃

《Schlange form》

シグナムもレヴァンティンを連結刃形態にして迎撃する

ドカーン！

お互いの攻撃が交差し爆発が起こる

二人は爆煙を挟んで距離を置く

フェイトは左腕に

シグナムは胸に傷を負っていた

「…強いなテストロッサ…」

《Schwert form》

それにバルデツシュ！」

《Thank you》

「貴方とレヴァンティンも… シグナム」

《Danke》

「この身に成さねばならぬ事が無ければ心踊る戦いだっだが…仲間たちと我が主の為、今はそうも言っていられん

…殺さずに済ませる自信はない この身の未熟を許してくれるか？」

そう言うと、シグナムは居合いの構えをとる

「構いません…勝つの私ですから」

フェイトは笑いながら答える

「フッ…」

シグナムもまた口元に笑みを浮かべていた

Side Out

市街地内

アルフVSザフィーラSide

ドカア！ドカアン！

「デカブツ！あんたも誰かの使い魔か！」

アルフは拳を繰り出すが、ザフィーラは受け止めながらそれに答える

「ベルカでは騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばぬ」

「んん？」

アルフは一瞬興味が出たように次の言葉を聞いていた

「主の牙、そして盾…守護獣だー！！！」

「おんなじような…もんじゃんかよー！！！」

ドカーーン！！

アルフの攻撃が爆発し、二人を爆心地から吹き飛ばした

「ぬっ…ちい！」

ザフィーラは何か持ちこたえ、戦況を分析していた

(∴状況はあまり良くないな。シグナムやヴィータが負けるとは思わんが、ここは引くべきだろう∴シヤマル、何とかできるか?)

S i d e O u t

T o B e c o n t i n u e d

不意打ちは主人公の特権だね

結界外、表層部

シャマルSide

「（…ここは引くべきだろう…シャマル、何とかできるか？）」

ザフィーラは念話で結界外にいるシャマルに話しかけた

「（何とかしたいけど 局員が外から結界維持してるの  
私の魔力じゃ破れない シグナムのファルケンかヴィータのギガン  
ト級の魔力を出せなきゃ…）」

「（二人とも手が放せん…やむをえん【アレ】を使うしか…）」

「（解ってるけど、でも…）はっ！」

ジヨキ！

背後からクロノがデバイスをシャマルに向けていた

「（シャマル？どうしたシャマル！？）」

ザフィーラの念話にシャマルは答える事ができないでいた

「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します  
抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある…同意するなら武装の解  
除を…」

ビュン！タツ！

「えっ！？」

ドカツ！

ガシャアア！

クロノは突如現れた仮面の男に蹴飛ばされてしまい、金網に激突してしまった

「…くっ！仲間！？」

クロノは何とか立ち上がりながら仮面の男を睨む

「貴方は…？」

シャマルは仮面の男に尋ねるが

「…使え」

「えっ！？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

仮面の男は闇の書の力を…蒐集した魔力を使って結界を破壊するよう促す

「でもあれは…」

「使用して減った頁はまた増やせばいい…仲間がやられてからでは遅かるう」

「あっ…」

シヤマルはそう言われ闇の書を見つめ考える…そして、

「（みんな！今から結界破壊の砲撃を撃つわ 上手くかわして撤退を）」

「「「「おっっ！」「」「」

シヤマルは決意し、ヴォルケンリッター達はそれに答える

S i d e O u t



キヨウスケSide

数分前、シャマル付近

「搜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します  
抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある…同意するなら武装の解  
除を…」

あゝやはりクロノに見つかったか…  
この場面でリンデイさんとエイミイさんが「うゝん」とか「ナイ  
スクロノ君！グッドジョブ」なんて影で喜んでる事だろう…

ん？僕は見つからないのかと？  
今僕は光学迷彩【プリズムフロントム】（魔力反応も遮断）で隠れ  
ているから見つからないですよゝ

『ぶつちやけミラージュコロイドでは？』

…まあ、否定はしないけどさ。

ドカツ！

ガシャアア！

ふむ、どうやら仮面の男は介入してきたか…

『マスターこれからどうしますか？』

ん〜とりあえず…

「闇の書を使って結界を破壊しろ」

って展開早っ！

「使用して減った頁はまた増やせばいい…仲間がやられてからでは遅かるう」

その瞬間、プリズムファントムを解除

【ヘイスト】を唱え瞬動で一気に仮面の男に接近

「良いわけねーだろー!!」

ドカー！ゲシヤ！！

その勢いで仮面の男の腹におもいつきり蹴りを入れた

T o B e c o n t i n u e d

ツッコミは徹底的に！

結界外、ビル群

キョウスケSide

「良いわけねーだろー!!」

ドカア！グシャー!!

その勢いで仮面の男の腹におもいつき蹴りを入れた

「えっ!?!キ、キョウスケ君?」

いきなり現れたからシャマル驚いているな

「ふう シャマル、闇の書は使うな あの結界は僕が「動くな!!」  
…ん?」

ああ、復活したのかクロノ…

「…ああ、そういえば忘れてた…【ストップ】」

僕はクロノにバインドならぬ【ストップ】をかけて拘束した

「なっ!?!か、身体が動かない!?!」

あ、ストップ中も喋れるんだ

「執務官殿はそこで惨めに腐っていて下さい」

「な、き、貴様っ！一体僕に何をした!？」

はあ…うるさいな〜ん？

タッ！

「…貴様っ!」

あ〜 仮面の男もまだ居たんだ

「まったく…今日は予定があるってのにつて、いきなり【クロックマネージャー】!」

僕は不意打ち気味にクロックマネージャーを発動！ 不意をつかれた為仮面の男は見事に停止中

え？卑怯？ いやだな〜 戦闘において油断するのが悪いってどっかの誰かも言ってたぢゃん

『マスター、クロックマネージャータイムリミットまで後10秒ですが…』

おっと さっさと済みますか…

「インフィニティ モード1st!」

『1st ルシファーSet』

使うの久々だな

「チャージ！」

《Ignition》

シユユユウ

「吹っ飛べ！ブラストシグヴァーン！」

ザンッ！

「バースト！」

《Explosion》

ドカアアアアン！

かなりの爆風により、仮面の男は勢いよく遙か彼方に吹っ飛んでいきました

「さて、後はそのKY執務官殿か…」

「っ…！き、貴様つ何をする気だ!？」

僕はルシファーを振りかざし…

「…カートリッジロード」

《Load Cartridge》

ザンッ！

ガシャアア！

クロノはまた金網に吹っ飛びました

「安心しろ…みね打ちだ」

「あ、あの〜キョウスケ君 その刀って両刃じゃ…」

「……………非殺傷だから」

僕はシャマルから目線を外して言った…まあ一応生きてる…はず？

『一応ですか!?!』

…気にするな、インフィ君

「シャマルはあその黒いKYから蒐集して その後ここから離脱してくれ」

「えっ!?!でも…まだ皆が」

「今日は急いで帰らないといけないんだからチャッチャとやることを済ませようね。シグナム達は僕が脱出させるから」

「あ、はい 解りました。気をつけてね下さいね、キョウスケ君」

「ああ、じゃあ

シューン!

T  
o  
B  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

さあ合流だ！さあ逃げよう？

### 結界表層部

結界は毎度お馴染み【細雪】で突破！

シュン！

「つと 皆は…【ハイパースキャン】！」

…見つけた！ 1番近い魔力反応は…ここか！

シュン！

タツ！

「無事かシグナム？」

「なっ！？」

「…あなたは！？」

いきなり現れたからシグナムもフェイトも驚いているな

「話しは後だ 脱出するぞ！シグナムは離脱してくれ。結界は僕が



破壊する（今日は、はやての友達のすずかと食事する約束があるんだから早く帰るぞ）」

「あ、ああ解った」

「すまんテストタロツサ…この勝負あずける」

「シグナム!？」

シュツ!

行っただか…さて

「と、言っ訳で少し付き合ってもらいますよ（ヴィータ!ザフィーラ!聞こえるか!?)」

Side Out

ヴィータSide

「（ヴィータ!ザフィーラ!聞こえるか!?)」

「（ん？恭介からの念話？）」

「（ああ、恭介！？聞こえてるよ）」

「（今から結界を破壊するから離脱してくれ！…解除されると同時に転移を）」

「（な！？、おめーはどうすんだ？）」

「（破壊した後、魔導師を足止めしてる）」

「（な、無茶だろ！？私やシグナムと互角の奴らを二人同時に相手にするなんて！）」

無茶苦茶もいいとこだ！

だが、アイツは…

「（ま、時間稼ぎくらい問題ないよ）」

今日は大事なイベントがあるんだ 後で駆け付けるからさ」

「（ヴィータ…ここはキョウスケに任せよう）」

ザフィーラ？…ちっ、仕方ない

「（…解ったよ。本当に大丈夫なんだよな？）」

「（何？心配してくれるの？ ヴィータも可愛い所があるな）」

「（なっ／＼／んなわけねーだろ…さっさと結界ブチ壊せ！）」

「(はは、じゃあそつするよ)」

(まったくアイツは…さて、)

ヴィータはなのはを見ると

「…ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ あんたの名は？」

「なのは…高町なのは！」

「高町なぬ…なぬ…つてええい！呼び難いッ！！」

「逆ギレ！？」

「ともあれ勝負は預けた！次は殺すかな！ぜつてーだ！！！」

ドカアアアアア！

その瞬間、地上から巨大な桃色の砲撃が上空に放たれ…

パライイイイン

！！

結界は粉々に碎け散った

「覚えてろよ！バーカ！」

シュン！

ヴィータはその場から離脱した

Side Out

なのはSide

「あ、えと…：ウィータちゃん」

なのはは暫くウィータがいた空間を見つめていたが

《Master》

「は、レイジングハート！ …：そつだ！ フェイトちゃんは！？」

慌ててフェイトが戦っている場所に向かった

Side Out

To Be continued



## 誰がための銃口

結界内ビル群、数分前

キョウスケ Side

「（はは、じゃあそうするよ）」

ヴィータとのやり取りを終えて、目の前に…フェイトに目を向ける

「さて、悪いがまずは用件を済ませよう…インフィニティ、2ndモード」

『2ndモード【ジリオン】Set Up』

僕がジリオンを構えると、フェイトもバルデッシュを構える

「何をするつもりです？ あなたの行っている行為は公務執行妨害にあたります。無駄な抵抗は止めて武装を解除して下さい」

「…なら無駄な抵抗ではなく有効な抵抗ならいいんですね  
インフィニティ【てきのわざ】セット」

カチャ

インフィニティに【てきのわざ】のマテリアをセット  
ジリオンを上空に向け

「…貫け！スターライトブレイカー！」

「…なっ!？」

ドカアアアア!

ジリオンから桃色の砲撃が放たれ結界を破壊した

「な、なのはのスターライトブレイカーを…何故？」

フェイト、パニック中だね

「これで僕の…一つ目の用件は済んだ…あとは…むっ？」

シュン!

「フェイトちゃん!大丈夫？」

なのはも来たか

「一応はじめまして、と言った方がいいのでしょうか？」

「あ、あなたは!？」

なのはがこちらをジッと見ているが？

「あ、あのっ この間は手当てしてくれてありがとうございますっ  
！」

ペッコ

「……………」

僕とフェイトの時間が止まった

「ふえ？ど、どうしたの二人とも！？」

「はっ！ な、なのは…彼は一応敵なんだし…」

「ま、まあ アレはこちらの都合で勝手にやっただけだ 気にする  
な」

いきなりお礼言われるとは思わなかったわ

「それで、あの あなたたちの事情を聞かせてほしいんですが…」

「…何故かな？」

答えは予想はつくが…一応聞いてみよう

「えっと…何で闇の書の完成を目指しているのか…  
事情を聞かせて貰えれば、私たちも協力出来る事があるんじゃない  
かなって」

…いや、闇の書を使っている時点で管理局は即封印！か即捕獲！っ  
て思ってるだろうし、一般局員レベルの二人じゃ無理だろ



「フェイトも同じ考えか？」

「えっ！？は、はい　そうです」

？…急に話しを振ったからビックリしたか？

「理由ね…以前フェイトには【闇を天に…】って言いましてよね  
それが理由ですよ」

「それって…どうゆう意味なんです？」

「さあね　それに…」

カチャ

「…事情を説明しても君達には何も出来ないし、ね」

僕はジリオンの銃口を二人に向ける…

T o B e c o n t i n u e d



主人公偽名ってクラ ドじゃないの!?

「そ、そんなことないよ!」

「そうだよ! 私たちはきつと力になれるよ!」

って、なのはとフェイトは言っているが…はあ 縦社会が解らない  
人はこれだから…ま、小学生だから仕方ないけど

「…【ヘイスト】」

ヒュッ!

「えっ!?!」

「き、消えちゃった!?!」

カチャ

僕は二人の上空に回りこみジリオンを構え…

「…【クラッシュシュレイ】!」

ビッ!ビッ!

二人のデバイス目掛けて赤い光線を放った

バシユ！バシユ！

赤い光線は二人のデバイスに命中し、コア部分が激しく点滅しだした

「！？バルデツシユ？」

「レ、レイジングハート！？どうしたの？」

《《…Error…》》

「君達のデバイスの機能を一部破壊させてもらったよ…今回の目的は戦闘ではなく足止めですから…」

デバイスがそんな状態では追撃は無理ですね。それでは失礼します  
小さなお嬢さん方々…」

僕は立ち去ろうと二人に背をむけると

「ま、まって下さい！ 私は高町なのはっ！あなたのお名前はっ？」

んんん 毎日会っている神代恭介です とは言えんし…

「私はフェイト…フェイト・テストロッサです！」

フェイトさんまで自己紹介すか？

しゃあない…偽名でいいか

僕は振り返り二人をジッと数秒見つめる

「……………／／／」

え、何赤くなっていらっしゃるのですか？二人して…

「僕は…スコールです」

『某 傭兵Seedの名前ですか？』

ネタバレは止そうよインフィニティ君！

「スコール…さん」

「スコール…」

「それでは…」

シュン！

僕は二人の前から消えた

S i d e O u t

なのはS i d e

あの人…スコールさんは行ってしまいました

何だろう…敵って感じがしない… 前から知ってるような、そんな感じ…あの人が闇の書の主なのかな？…見つめられ時ドキッとしちゃったけどノノノ

「フェイトちゃん 大丈夫？」

「うん…バルデツシユもそんなにひどいケガじゃないみたい」

レイジングハートもそんなに傷ついてないみたい…よかった

「フェイトー！なのはー！ 無事かい？」

「あ、アルフさん、私達は大丈夫です 相手の人は逃がしちやいましたけど…」

「アルフ…クロノやユーノは？」

「…クロノが魔力を奪われちまってね…今ユーノが治療してるよ」

「闇の書…完成に近づいていくね…」

レイジングハートもバルデツシユも頑張ってくれたのに…ごめんね

一体闇の書が完成したらどうなっちゃうんだろう…

Side Out

フェイトSide

あの人、スコールと名乗った人…クロノ達の話だと、闇の書の主の可能性が高いって事だけど…なんか前から知っているような…

でも、スコールに見つめられたら顔が熱くなって…すごく胸がドキドキして／＼／

それに…何で私の名前知っていたんだろう？ スコールにはまだ名乗ってなかったのに、すごく自然に呼んでくれたな…どうしてだろう？

Side Out

これってネギま!?

キヨウスケSide

さて、前回の戦闘での収穫

闇の書の頁の消費阻止

クロノからの蒐集

まあ原作よりは進んでいるはず

そうそう はやてとすすずかの食事会（鍋パーティー）は結果から言う  
とシグナム達は間に合って、はやて達と過ごしたらしい…

そう この【らしい…】とは、僕は間に合わなかったのです…帰って  
来たのは深夜0時過ぎ

管理局にロックでサーチされたらヤバイから色々な場所をランダム  
ジャンプで中継していったから時間かかってね

で、こっそり玄関を開けたら…彼女がいたんだよね

しかも…あんな展開になるとは…



回想

八神家玄関、A M O : 2 3

ガチャ…

(ただいま…)

もうみんな寝ているよね

バタ、ン

あゝ真っ暗で何も見えないな…スイッチは、と

パチッ

「って、うわっ！ …ってヴィータ…さん？」

ヴィータは玄関に居た…というより膝を抱えて座り込んでいる

「…遅かったな恭介」

うっ！ こ、この地を這うような低い声は…かなり怒ってる…拷問  
フラグ…

「う、うん 追跡されないように色々な場所を中継してきたんで……」

な、なに！？この沈黙は！

「あ、それで皆は？」

恐る恐る聞いてみる。まあ無事なのは確かだろうが

「……………と」

ん？？なんだって？

「え？何ヴィータ？よく聞こえなかったんだけど……」

「……………け、……………ぱ……………だ」

う、うん やはり聞こえん……

ちよい耳を近づいてみると、

ガバツ

「どんだけ……心配したとおもってんだよ！」

ヴィータがいきなり抱き着いてきて涙声で……って抱き着きいい！？

「……………ひっく……………」

いやいやいや ヴィータさん！ 多分ですが、あなたのキャラ間違ってますよ！？

「恭介…ひつく…無事で…よかった…」

あゝ これって悪いの僕なんだろうな

「…ごめんヴィータ 心配かけて」

ギョッ

僕の胸で泣きじゃくっているヴィータを優しく抱きしめてあげた…

…ここにはやてが居たら…よそう、考えるのは。

不死身だけど…怖い…

10分後

ようやく落ち着いたのか、ヴィータは泣き止み僕を見上げている…

だから捨てられた子猫みたいなその目はやめて… 理性があゝ！！

「…恭介………」

「ヴィータ………」

な、なんだ！？この雰囲気は

ハッ！そうだ！いつものパターンなら誰かが乱入してきた、

し~~~~ん

来る気配がないっ!？

スッ

あああああ!!

ヴィータが目を閉じて接近してくる!？

後5センチ…2センチ…

うう！息がかかっ…んっ!？し、舌をつ!!

「…んっ…んんっ」

「んっ…んくっ…」

パアアアアッ!

ヴィータとキスしたら突如、僕とヴィータの上に【カード】が現れていた

ヴィータの絵柄が書いてあるカードが…

5分後

長いキスの後、ヴィータが

「…はやてには、黙っておくから…／／／」

…なんか月9みたいな展開!?

「う、うん／／…ん？」

僕は上空にあるカードに気付いた…

えっ!?!?パクティオー???

「このカードは？」

僕はカードを手に取って見る

ヴィータの絵柄が書いてあるな…でもネギま!の仮契約カードとは微妙に違ってるし…魔法系統が違うからかな?

「…どうした？」

ヴィータが心配そうに見ているな…

「あゝ その、ヴィータと…したら、なんかカードが現れてね」

再び思い出したのか真っ赤になったヴィータ

「キ!?!?! / / / か、か、カードって!?!」

一応唱えてみるか…

「Divide」

分割

パアア!

予想道理コピーできましたよ

「じゃあこれ、ヴィータが持っててね」

一応ネギまの様にコピーをヴィータに渡す…アーティファクト出せるのか!?!

「…私が写ってるカード…ありがとう恭介!大切にするよ」

なんかヴィータ口調も変わってきた?

「なあヴィータ…ちょっとカード持って【アダアット】って唱えてみてくれないかな?」

これでアーティファクトが出たら…

「あ、うん…アデアット!」

シーリーン

あり?何も出ない??

「恭介…私、何か失敗したか?」

不安げに見つめるヴィータ

ホント性格変わった?

「あ、いや 大丈夫 だよ とりあえずそのカードはヴィータが持  
つてていいから 僕も同じカード持つてるから」

そう言い、僕はオリジナルのカードをヴィータに見せる

「…うん ありがとうノノノ」

回想終了

てな展開が数時間前にあっただんですね〜

まさかヴィータとキスするとは…

いや だからロリコンじゃないって！

魂が体の年齢に引つ張られたんだ〜！！

ゴ、ゴホン！

ともかく…あのカードの事は、結局何なのか解らないし…

仮契約カードの類だと予想はしているのだが…

…てかカモいなくても仮契約可能か…

ハッ！ま、まさか僕がカモ属性付いてるとかじゃないよね！？

ん？そんなことよりあの後どうなったのか？

いや 普通にヴィータは、はやての部屋で寝たよ

…変な想像した？

だって僕まだ子供だし〜（笑）

『中身は二十歳過ぎのロリコンのくせに』

イ、インフィニティさん！？…あ…そういやコイツ大人しかったな…

『気をつかったんですよ 空気くらい読みますし』



…あ、そう？

『（バツチリ録画しましたから何かのネタに使いましょうか…）』

何か言った？

『イエ ナニモ』

何故カタコトに？

## 想いの交差

『前回までのあらすじ…』

ついにマスターはハーレム街道まっし「をい…」…ハイ?』

誰がハーレム街道まっしくらだぁあ!!!

『自覚なしですか?』

…ないって否定できない自分が恐いっ

## 八神家 リビング

今朝早く、ヴォルケنزの方々が僕の部屋に乱入してきた

昨日の…戦闘の方に関して

「神代は無茶しすぎるっ!」や

「キョウスケ君…心配したんですよ」に

「キョウスケ…少しは我々を頼れ」

と、上からシグナム、シャマル、ザフィーラと言われました  
いや〜チートだから大丈夫なんだけど

ヴィータは昨晩のアレを気にしてか何も言っ来なかったが、チラ  
チラ視線を感じまくった  
目が合うと

「っ!?! / / /」

ボンッ!

…真っ赤になりオーバーヒートしていた シャマルが心配して治療  
しようとし聞いていたら

「な、なんでもね〜よ / / /」

と、そっぽを向いていた

昨日のと言えば、はやてに鍋パーティーに遅れてごめんと謝ったら

「ええんよ 気にしてへんから」

笑顔で許してくれたが…やっぱり寂しそだった

ちなみにシャマルに聞いたのだが、すずかには僕の事は言っていない  
らしい

「ねえ はやて、すずかに僕がここに住んでいる事言っていないんだ  
って?なんで?」

「うん…やっぱりサプライズで、すずかちゃんをビックリさせたいんよ」

その方が面白そうやしな」

まあ、すずかにバレたら確実に白と金の魔導師にも情報が行って、ココが修羅場になるだろうな…いろんな意味で…

「ん？どないしたヴィータ？ ご飯あんま食べてへんけど？」

「べ、べべつに何でもないよ はやてっ！」

「そうか？」

「こっちは…まあいいか」

「ご馳走様はやて！じゃあ学校に行ってくるよ」

「ほなこれお弁当っ 行ってらっしゃいキョウスケ君」

「ありがとうございます 行ってきます」

### 八神家玄関

さて、行くか

「恭介っ！」

「ん、どうしたヴィータ？」

「あ…その…（ボソッ）いって、らっしやい…／＼／＼」

「あ、ああ 行ってきます」

ガチャ バタン

『いや〜マスター―途って感じてしたね〜ヴィータ嬢は』

ホント理性を保った自分を褒めたいよ

『さあ この調子でどんどん女の子を落としていきましょう』

いやいやいや そんな鬼畜王みたいな真似はしないよ

多分…

携帯って何買うか迷うよね

学校、昼休み

授業？書いてもつまらないでしょ？

いつものごとく、アリサ経由でフェイトに捕獲され、お弁当をみんなで食べました

で、アリサが以前言っていた携帯のパンフレットを持ってきたのでフェイトと一緒に見ています

「な、何だかいっぱいあるね」

「まあ 最近は何れも同じような性能だし…見た目で選んでいいんじゃない？」

「でもやっぱりメール性能の良いやつがいいよね」

「カメラが綺麗だと色々たのしいんだよ」

「うん…」

フエイト悩んでるな

てか、なのは達よ、買う本人より盛り上がってどっつするよ!..?

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょ?」

「操作性も大事だよ」

「外部メモリ付いていると、いろいろ便利でいいんだけど…」

「そうなの?」

「うん、写真とか音楽とか沢山入れておけるし…そうそう、メールに添付してお友達に送ることもできるの」

「あ、そうだよ」

「けっこう使えるよね」

「うわ、いいよね」

…だから買う本人より盛り上がるなよ…

「キョウスケはどんなのがいいの?」

よくぞ聞いてくれたアリサよ!

「軽量&コンパクト、ハイスペックなのが!」

「…聞いた私がバカだったわ…」

どーゆー意味だ？

「にやはは…キヨウスケ君も使いやすい方がいいよね」

「まあ、操作性とかはサンプルとかを実際触ってみないと分からないけどね」

「キヨウスケ…携帯はどんな色にする？」

「そうだな…やっぱり黒とかかな」

男でピンクとか痛いし

「…そっか」

なんなフェイトが嬉しそうだが？何かしたかな？？

「ん？今フェイトが見ているページの携帯…」

ヒョイ

僕がフェイトの見ていたページをフェイトの肩越しに覗き込む

「…！？／／／」

「あ、この携帯、結構趣味かも。フェイトはこれにする…の？」

フェイトの方を向くと…フェイトの顔が近づ！！



そうですね〜

僕の顎がフェイトの肩に乗る位置でパンフ見ている、その位置からフェイトの顔を見ようとすると…

「%\$@&amp;.¥!?!/?//」

ボンツ！

至近距離でフェイトと目が合った

顔の距離…5センチ

そりゃテンパってオーバーヒートするわ…!?

な、なんだ!?!この混沌の海は!?!

ゴおおおお

うっ！　なのは、アリサ、すずかから闇がっ…混沌の言語を教えた  
ら、確実に金髪の魔王を喚びだせる力を感じるぞっ！

「…キョウスケ君…ちょっといいかな？かな？」

「…なのは、私も手を貸すわよ」

「…キョウスケ君、私たちとちょっと来てくれるかな？」

ヤバイ！本能が警笛を鳴らしている！！

「い、いや　これは…」「」「言い訳はあっちで聞くよ」「」「…ハ、

ハイ」

に、逃げ道があゝ

キーンコーンカーンコーン

おお、神の救いか！

「ほ、ほら 次の授業の準備しないと」

「「「（…ちっ）「「「

ねえ！？今ちっ とか言ったよね！？

「…まあいいわ、放課後じっくり話しあいましょ！後…」

まだあるのかよゝ

「放課後にフェイトとキョウスケの携帯買いに行くから一緒に行くわよ！！」

ホントいきなりだなゝ



携帯は危険が危ない？

携帯ショップ店内

あれから下校し、途中リンディさんと合流  
携帯ショップに直行した…

リンディさん、一応保護者なんだから、下校中の寄り道を容認って  
いいのか？

店員「ありがとうございます」

「はいどうも」

フェイトさん、ハイ」

「ありがとうございます リンディ提督」

ペコッ

リンディさんから携帯の入った袋を嬉しそうに受け取ってるな

「キョウスケ君の保護者の方は？」

「あ、僕はこのカードで多分大丈夫ですよリンディさん」

そう、あの黒いカードで携帯を購入しました  
黒いカードって威力あるな

ただ、

「ふふっ／＼／＼キョウスケとお揃いだね」

フェイトさん…同じ機種で色まで同じってどどどど  
確かに黒ってフェイトの好きな色だが…

「お待たせ」

「ううん」

「いい番号あった？」

「うん」

「へへ何番？」

「えっとね…うん」

「うんうんうんうん」

「キヨウスケ君の番号は？」

「えっと…これ!？」

何？番号見せようと携帯いじってだら…急に殺気が!？

「さ、三人とも…どうかした？」

「」「」なんでフェイト(ちゃん)とお揃いの(かな)(よ)」「」「」

細部は違うが内容は見事に八モったな…てかそこかよ!

「何で、って言われても…欲しい機種がたまたま同じだったんじゃない? ねえフェイト?」

「えっ!?!う、うん!そそそうだよ、いやだなあみんな、ぐ、偶然だよ、うん!偶然っノノ!!」

「嘘つきなさい!フェイトあなた…狙ってたわね!？」

アリサがバツサリ切った!

「…ずるいよ、フェイトちゃん」

いや、お揃いの何がずるいの?なのはさん…

「今度私もその機種に変えようって」

あ、あの…友達みんなで同じ機種ってのも紛らわしくないですか?

すずかさん？

「えっ？大丈夫だよ それに同じ機種なら簡単にキョウスケ君の携帯チエックできるでしょ？」

すずかさん…心を読まないでくださいよー てか サラッと恐い事言っただけ！！？ あんたは僕の彼女か！？

「へへっ / / /」

ハッ！また心読んだのか！？

「はは、…とりあえず…アドレス 交換しよか…」

「くくくうんっ」「」「」

で、みんなとアドレス交換をした

…無駄に疲れた…

その後、

「今日はフェイトちゃんとちょっと用事があるから」

と、なのは&フェイト+リンディさんは帰宅

アースラ関連でミーティングだろうか

「私も今日はお友達のお家にお呼ばれしてるから」

と、すずか

「私はこれからバイオリンのお稽古があるから」

と、アリサ

平たく言えば現地解散したのです

まあ僕もこれから蒐集に行く予定だったからちようどいい

「（シグナム 聞こえるか？）」

「（ああ、神代か どうした？）」

「（これから蒐集を手伝うから合流してほしいんだ…後、僕の部屋からインフィニティを連れて来てくれないかな？）」

「（分かった では後ほど合流しよう）」

さて、いくか…



すずかSide

ピッピッ

「メール送信つと。ちゃんとお土産も買ったし、喜んでくれるかな？」

すずかの携帯には

はやてちゃんへ

これから時間通りにそちらに行けます。

楽しみにしてるね  
すずか

という送信履歴があった

Side Out



写メって証拠残るよね

八神家

はやてSide

ピンポーン

「はぁーい」

ガチャ

「こんにちはー」

「あーいらっしやい すぐかちゃん  
寄ってくれておーきになー」

「こちらこそおじゃましますっ」

今日はすずかちゃんが家に遊びにきてくれた  
友達があんまりおらへん私にとっては一大イベントやっ！

リビング

「あ、このケーキ美味しいなー」

「駅前商店街の翠家さん 私のお友達のご両親が開いているお店なんだよ友達みんな大ファンなの」

「へー えーなあ すずかちゃんステキなお友達たくさんやなー」

「みんなにはやてちゃんの事紹介したいんだけど…なかなかタイミングが合わなくて…」

「みんな塾とかお稽古とかあるもんなー」

すずかちゃんのお友達の中に…キョウスケ君もおるんやろな

…今日はキョウスケ君、帰り遅くなるって言ってたし どうせやったら居る時にすずかちゃんにビックリサプライズで紹介したいしな

「せやけどまーあんまり気にせんでー」

「うん そういえばシグナムさんとかご家族の皆さんも結構忙しいんだよね？」

「んん…まーいろいろとー」

「グイータちゃんはゲートボールやってるんだよねー 今度教えてもらおうかな」

「あはは ヴィータ喜ぶよ」

「ほんと？」

「ほんまや」

それにしても…すずかちゃんにはほんまにすごく優しいな

基本的にはどう見ても怪しい我が家の家族構成のことも…それに、私の車椅子やその理由の事も 出会ってから今まで一言も聞かないせやけど、私が話したらきつと静かに聞いてくれて…全部受け入れて笑ってくれるような気がする

なんやるなー そんな気がするんよ

「？なに はやてちゃん？」

「あ、あはは なんでもー あ お茶のお変わりどーやー？」

「うん！ただこうかな」

「ちよつとまってるな」

「そういえば今日ね、お友達二人の携帯買いに行ってきたんだよ、フェイトちゃんとキョウスケ君の」

ピクッ

な、なんやて！？携帯電話を？ そんな話 聞いてへんけど…ま、まあ携帯くらい今時普通やしな

「へ、へ〜 そうなんや〜」

「それでフェイトちゃんったらね、キヨウスケ君とお揃いの携帯買ったんだ〜　なのはちゃんやアリサちゃんが羨ましがってたよ〜  
…私もちよつと羨ましかったな〜」

コポコポツ

お、お揃いの携帯！？　なんや　お揃いつて！？ラブラブカップルみたいやんか！！

「は、はやてちゃん！　お茶！こぼれてるよ！？」

「あ、あかん！　ついボーっつてもうた」

「だ、大丈夫？」

「うん、ありがとつすずかちゃん」

「あ、それでね　この前みんなで写メ撮ったんだ〜」

すずかちゃんにその写メを見せてもらったら…

キヨウスケ君が皆に抱き着かれていた所の写メが写ってた  
…てか皆、キヨウスケ君に顔近づけすぎや！！

「へへっ／＼これ待受にしてるんだよ」

こゝこれはキヨウスケ君に詳しく別荘でジツクリお話し聞かなあか  
んな…フッフッフツ…

S i d e O u t

女性の勤は恐ろしい…

管理外世界

キョウスケSide

ゾクッ！

「！！！？ な、なんだ？今の寒気は？」

『どうかしましたかマスター？』

「いや 何か寒気が…」

『どうでもいいですが…ターゲットがこちらに突進してきますよ？』

「ッー！」

おまつ、それを早く言えよ！！

「ッー！【だいち】マテリアセット！【クエイガ】！」



ドカー!

クエイガにより大地が盛り上がり、でっかい岩亀?をひっくり返した

「インフィニティ2ndモード!」

『モード2nd Set!』

「コズミックブラスター!!」

ズガガガガン!

「で、こうなつたと…」

「ちょっと手加減間違えちゃった テヘっ」

「まったく…蒐集する身にもなってくれ」

いや〜 岩亀?の真上から砲撃したら勢い余って地面に大穴空けながら埋まっちゃった…

Side Out

同時刻 管理外世界

シャルSide

「（ヴィータちゃん そろそろ時間よ 首尾はどう？）」「

「（でかいの一匹と小さいのを二匹仕留めた たぶん5頁分くらいだ）」「

「（こっちは3頁分と少し…  
少し足りないけど今はここまでにしときましょう）」

「（まだ大丈夫だよ！あともう少し…）」

「（帰りが遅くなるとはやてちゃんが心配するわ 晩ご飯までに帰るって約束破るの嫌でしょう？）」「

「（…わかった…）」

「（戻ったら老人会にも少し顔を出しておかないとね）」

「（うん…ちょっとだけ寄ってく じーちゃん達には悪いけど、10分くらいで切り上げるから）」

「（了解 協力するわ）」

「（そ、それと…その…恭介と念話が繋がらないんだけど…）」

「（あ、シグナムとキョウスケ君は、ちょっと遠くまで行っているからかしら？）」

「（そ、そうか…シグナムと一緒になんだ…）」

「（？ヴィータちゃん？どうかしたの？）」

「（い、いや なんでもねーよ 通信終わりっ！…！）」

プッッ

「…どうかしたかシャマル？」

「ん〜 ヴィータちゃん…もしかしてキョウスケ君と何かあったのかしら？」

「何か…とは？」

「なんか最近ヴィータちゃんって、キョウスケ君を見る目が…ハッまさかヴィータちゃん そうなの！？」

「…シャマル？」

「え、うそ！ いつの間に？ いや〜ん / / /」

クネクネッ

シャマルは身体をくねらせて妄想を爆発的に膨らませていた

後にザフィーラが

「シャマルが…壊れた…」

そう呟いていたそうなの…

人の不幸（恋愛話し）は蜜の味！？

夕方、八神家

ガチャ

「はやく ただいま！」

「ごめんなさい ちょっと遅くなっちゃった」

「シヤマル ヴィータ おかえりー」

「あ、おじゃましてまあす」

「いらっしやーい」

「ヴィータは今日もゲートボールクラブかー？」

「うん、じーちゃんばーちゃん話長いんだよー もう帰るって言ってるのにー」

「まー人気者さんでええことやんか  
シヤマル シグナムは？」

「ああ、お稽古が少し長引いてちょっと遅くなるそつですよ」

「そーかぁー まーシグナムなら心配ないかなー」

「すずかちゃん、これから晩ごはんにするけど一緒にどつっ？」

「すみません これからお稽古なのでそろそろおいとまします」

「えー」

「シヤマル 送ってってあげてなー」

### 管理外世界

シグナムSide

ドカアアアーン！

「ふう 少々数が多かったな…大丈夫かレヴァンティン？」

《Ja》

「さて、今日の蒐集は…ヴィータが5頁半 神代が6頁半、シヤマルとザフィーラが3頁 そして…」

《Sammlung》

シグナムは闇の書を取り出し蒐集させる

「私が6頁か 焦っても詮無いことだが、素早い蒐集とは言い難いな…」

ピカッ

闇の書が僅かに点滅した

「気にするな 別におまえのせいではないだろう 頁蒐集によつてしか力を発揮できないおまえの性質も…おまえがやむなく主にかけてしまう負担も おまえのせいなどではない 気にするな」

ピカッピカッ！

「おまえも主はやてのお気に入りの様子だ おまえに主を殺させるようなことは我々がしない…それより前に必ずおまえを完成させる」

ピカッ！！

「いましばらく時はかかるが信じて待っている きつと大丈夫だ」

「（もしもしシグナム…こちらシヤマル すぐかちゃんを送った帰りに迎えに行くわ…座標を出せる？）」

「（ああ、今出す）」

Side Out

キイイイン

その後合流したシャマルはシグナムを治療していた

「闇の書と何かお話してた？」

「なに ただの世間話さ…一刻も早く主はやてに平穏な暮らしが戻ったら良いなと」

「…そうね そうなった後、私たちも闇の書もはやてちゃん達と一緒にいられたらいいわね」

「ああ そうなれたら…幸せだな」

「はい 治療おしまいって そういえばキョウスケ君は？ 今日一緒にだったのよね？」

「ああ、神代なら…」

ドゴオオオン…！



「きゃっ!? な、何？」

「ああ、神代だ」

「キヨウスケ君？」

シュン!

「よっ…と あ、シャマル 来てたんだ」

「キヨウスケ君、さっきの物凄い音は？」

「ああ 向こうで一匹倒してた 後で蒐集お願いね」

「なら私が行ってこよう」

シュン!

「あ、シグナム…場所わかるかな？」

「ねえ キヨウスケ君…」

「何? シャマル？」

… 凄く嫌な予感が…

「ズバリ聞いちゃうけど…ヴィータちゃんとかあったでしょ?」

ギクッ!

「ななな、何モナイデスヨ　しゃまるサン」

「…動揺してるのが丸解りよ？」

「うっ…」

「さあ　どうなの？キヨウスケ君っ！？　お姉さんに話してみなさい」

シヤマルさん…すぐく目が輝いてますね〜

「い、いや　ホント何もしてない」私が一部始終録画してありますよ　お見せしましょうか？』　ってオイ！！」

「えっ　やっぱり何かあったのね　インフィニティ　見せて」

『ハイ　わか「そろそろデバイス新型創るかな…」スミマセンスミマセンスミマセンスミマセン…』

とりあえずインフィニティを黙らすのに成功…後で画像処分しなければ…

「ん〜　残念っ　…でも、何かあったのは確実ね　今度はヴィータちゃんに聞いてみましょう」

ず、ずいぶん楽しそうですね…

シユーン！

「今戻った…ん？どうかしたか？」

「い、いや なんでもないよシグナム  
さあ 夕飯に遅れるから早く帰ろうか  
シヤマル 転移魔法お願いね」

「はい 分かりました」

シュン！

写メと少女と別荘と!?

八神家

「「「ただいま」」」

「おかえり 三人とも」

「すずかちゃん送って帰る途中で二人に会ったので一緒に帰ってきました」

「えっ? すずかが来ていたのシヤマル?」

「ええ、少し前まではやてちゃんと一緒でしたよ」

「すずかが友達の家に行くって言うていたのは…はやての家に行くことだったのか…ハッ! 殺気!？」

「:キヨウスケ君、すずかちゃんに聞いたんやけど、今日携帯電話買ったん?」

「は、はい 買いましたが…」

…携帯料金心配してるのかな？ だったら僕の口座からだから家計に負担はかからないが…

「別に携帯買った事はええんよ… ただ、その時一緒に携帯買った【女の子】の友達とお揃いってどーゆー事や？」

ええっ！ はやてさん 貴方もそこにツッコミ入れますか！？

「た、たまたま同じ機種になっただ「恭介とお揃い！？おい、どーゆー事だよ！！？」って 落ち着けヴィータ 今説明中だから ね」

ヴィータが乱入してきた…

だから何で皆お揃いに過剰反応するんだああ！？

「すずかちゃんにな、写メも見せてもらうたんやけど…キヨウスケ君 【可愛い女の子】 4人に抱き着かれる写メが写ったのは何や？」

『…死亡フラグ確定ですね』

不吉な事言っな！

妙にリアルすぎだ！！

「いや あの それは、僕に真ん中に立ってほしいって言われて立っていたら…皆抱き着いて来…いってええええ！？」

ヴ、ヴィータ、足踏んできます！！

「フン！！」

あゝ ヴィータが頬膨らましてそっぽ向いてるし〜

…ちょっと可愛いつて思ってしまった

「キヨウスケ君、ちょっと別荘に行こか… あそこならた〜っぷり時間あるしな」

はやてさんが、とても素敵な笑顔で微笑んでいます…笑顔の裏に黒い何かが見えますが…ここは助けをシグナ「すまん神代 無理だ」

って助け求める前に断らないでくれ〜

じゃあシャ「ごめんなさい でも手当は任せて下さいね」

あなたもか〜!!

「……………」

ザフィーラに至っては目を合わせないでいるし〜

「はやて…」

あ、ヴィータが止めてくれる？

「私も行っていいか？」

…前言撤回

ヴィータも凄くいい笑顔でいらっしやる…って何故グラーファイゼンを起動してる!?

「気にするな…さ、いくぞ恭介！」

今日解った事…

ヴォルケンリッター達は心が読める…

その後 はやてとヴィータを除くヴォルケンリッター達に見送られ  
僕たちは別荘に入っていった…

「さて じゃあ夕飯の支度しなくちゃ」

「ハッ！、しまった！ 主や神代が居ない今、食卓に危険が！」

「シグナムひつどーい！ これでも上達しているのよ？」

そしてシャマルは台所に向かった

「ま、までシャマル！ お前は主と一緒にでなければと止められている  
だろうー!？」

その時、別荘の中と外でいろんな意味の修羅場が展開されていたと  
いう…





## 食事会と負のフラグ

あれから別荘内で、はやてとヴィータの事情聴取…

ガクガクガク！

…お、思い出すのも恐ろしい…

で、で丸一日（別荘内時間）かかり、別荘から出ると…

「あ、おかえりなさいい 夕飯の支度はもう出来てるわよ？」

とシャマルが発言っ！

食卓を覗くと…既にザフィーラは天に召されていてシグナムが介抱していた

こ、これはマズイ！

「よし みんな！別荘で食事会だ！」

コクコクコクッ！

シグナム ヴィータ はやてが物凄い勢いで首を縦に振っている

いや 首の骨痛めるぞ？

シャマルが何か言っていたが…スマン！無理だ！

そのまま今度は皆で別荘へ…

余談だが、ザフィーラは前々から作っていた万能薬改で一命を取り留めた…

#### 別荘内

「ふう、一時はどうなるかとおもったぞ」

「はは…とりあえず料理は今はやてが作ってくれてるからね」

「はやての料理はシャマルと違ってギガうまだしな」

上からシグナム・僕・ヴィータは命の危機の回避話をしながら別荘内のカフェテリアではやての料理を待っていた

ちなみにシャマルは落ち込みモード全開で、別室にてザフィーラを治療していた

…今度多めに万能薬改を大量に作っておくか…保険で

「「「「「いただきます」」」」」

今はやてが作ってくれた料理を皆で頂いています

…さすがにザフィーラは復帰はまだかかりそうだった為ダウン中

ちなみに和食 肉じゃがに焼き魚 冷奴にごはんと味噌汁 あとサ  
ラダが今夜のメニューだ

「でもはやて、あまり食材なかったのによくこれだけの夕飯作れた  
ね」

「無かったって…キョウスケ君の別荘の冷蔵庫の中、ぎょうさん入  
ってたよ？」

あれ？そうだったか？

「モグモグ、はやてお代わり！」

ヴィータ食べるの早っ！

「はいヴィータ ちゃんと噛んで食べなあかんよ？」

「主 また腕を上げられましたね」

「ありがとなシグナム」

「シヤマルもこの位腕上げねーとな」

「うっっ…ごめんなさい」

確かにはやての料理は美味しいよな　料理の上手い子は貴重な財産だ

「キョウスケ君、お代わりは？」

「ありがとうございます、いただくよ」

こうして夕飯は和やかに過ぎていく筈だった…

…シグナムがああセリフを発するまでは…

「そつだ神代 聞きたい事があるのだが…」

「モグモグ…ゴクン！　ん？何？」

「ヴィータが持っているカードは神代が作ったのか？」

…シグナムは最重要機密に関わる爆弾を投下した

次回！ 主人公に明日はくるのか！？

「明けない夜は…ないんだあー！！」

つづく

主人公補正に女難は必須!?

前回までのあらすじ…

シグナムが、いらんことを言った…

『いや!ザックリ言い過ぎですよ!?!?』

「え?カードって何や?」

はやてが食いついた! 出来ることなら即リリースしたいっ!

「ヴィータが肌身離さず持っているカードなのですが…どうしたのかと聞くと神代に貰ったと」

ヴィータさん!喋っちゃったのですか!?! ヴィータを見ると

「…/~/」

赤くなって完全に俯いていた

「どんなカードなんや?」

「あゝ まあ ヴィータの絵柄が書いてあるカードなんだが…」  
作成条件が…キスとは言えんよな

「ヴィータ ちょっと見せてくれへんかな？」

「う、うん／＼」

「?どないしたヴィータ?顔が真っ赤やよ？」

「な、なんでもないよ!」

「そか? …へゝ、ほんまヴィータの絵柄が描いてあるんやゝか  
わええなあゝ」

はやてがかなり食いついている! こ、この流れは…

「ええなあヴィータ、なあキョウスケ君 できれば私も欲しいんや  
けど…」

やはりそうきたかゝ!!

「あら?このカードから魔力を感じるわね? 何か特殊な物なの？」

う、シャマルさん、マジックアイテムだって瞬時に見抜きやがった

「神代が作ったのか？」

「ま、まあ 作ったと言うか出てきたというか…」

ヤバイ！言い訳が思い付かん！！

「なんやハツキリせえへんな…何か隠してへんか？」

「い、いやだな…はやて 何も隠してないですよ？」

「ふ…ん…何隠してるんヴェータ？」

「べ、べべつに何もっ！ 恭介とキスしたなんて隠してな…あ！」

「」「」………「」「」

この瞬間、世界が静止した…

「」「えええええ…ツ！」「」

別荘内に悲鳴が響きわたった…

パチン！

うお！耳が…！鼓膜があ…

『ギャグ補正付いてますから次のシーンで治りますから』



「う、はい…」

「…説明してくれるかな？キョウスケ君？」

はやてさん、今までで1番素敵な笑顔ですね…  
殺気がこもってますが…

「う、ハイ…」

こうして僕ははやてに仮契約の説明（ネギま仕様の）をした

まあキスの前後はごまかしたが…

ちなみにヴィータの方はシャマルが弄りまくっていた…

シグナムは顔を真っ赤にしてパニック中だった

続く

「まだ続くの！？この流れは！？」



## キスと仮契約とポイズンクッキング？

前回までのあらすじ…

ヴィータとのキスがバレた…

「…それじゃ【帰りが遅くなったキヨウスケ君をヴィータが出迎えてくれて、家に入ろうとしたらキヨウスケ君が玄関で足を滑らせヴィータがそれを助けようとしたら勢いが強く二人は衝突…キスしてもうた】と？」

「は、はい。かい摘まんで言うと…

まあ事故みたいな物で、その時に仮契約が成立してしまいそのカードが現れたました…」

まさか玄関でディープなキスをしました とは言えんしな

「…ずるい（ボソッ）」

はい？

「ヴィータばっかずるいやん！

私もキヨウスケ君とキ…じゃなく、仮契約したいっ！」

一瞬はやてさんの欲望が垣間見えたような…

「お、落ち着けはやて！」

「いやいやや〜！」

はやてキャラは崩壊した！

「それに仮契約つても詳細はまだ詳しく判らないんだ…  
せめてカード効果が詳しく判ってからでも遅くないし…ね？」

なんとかはやてを説得する

…まあ、はやてとのキスが嫌な訳ではないのだが…皆の前でつてのがちよつと、ね〜

い、いや！だから石を投げないで！？

「…ぶ〜っ」

渋々だが、とりあえずはやてとの仮契約は保留となった…

「…そういえばそろそろクリスマスやな…そのロマンチックなシチュエーションを利用して…（ボソッ）」

何かはやてさんから負のオーラが！？

「…何か言った、はやて？」

「い、いや！何も言っへんよ！？」

…何事もなければいいが…

クイクイツ

ん？誰か服を引っ張って？

「恭介…その、ごめん…」

うう！ ヴィータさん！その涙目で謝らないで〜！！罪悪感が〜良心が〜あ！

「う、うん 大丈夫だよヴィータ 別に怒ってないから」

そう言いながらヴィータの頭を撫でた

「ん…／＼ありがとう恭介／＼／」

ヴィータの顔がフニャフニャになっ「キョウスケ君…」しまった…

恐る恐る声の方を見ると…

「…ほんまに仲ええなあ」

微笑んでいる鬼神が…笑ってはいるが…目が単色になってる〜！？

「あ、いや これは…」

「…シャマル、キョウスケ君がシャマルの手料理食べたらしいん

よ…【シャルル一人】で作ってな」

はやてさん！それは死刑宣告ですか！？

「は、はい！判りました！」

タッタッタ

シャルルは、はやての覇気？に気圧され別荘のキッチンへ…

よし！逃げよう！

『現実逃避もいいですが、一日経たないと別荘から出れませんよ？』

くっ…だ、だがこのレーベンスシュルト城は伊達に馬鹿広くないのだよ！

隠し部屋の一つや二つある……ような気がする！

『造った本人が知らないんですかっ！？』

いや〜 テキトーに構築したからね〜

レーベンスシュルト城って把握しているのって1/10くらいだし

「…キョウスケ君、何処に行こうとするとるん？」

しかし、はやてに回り込まれた！

「いや、逃げ…じゃなくて…」おまたせ、キヨウスケ君」「シヤマル早っ!?!」

ポンッ

誰かが背後から肩を叩いてくる  
振り返るとシグナムが…

「神代…これを…」

そのシグナムが手渡してくれたのは…

「…胃薬?」

「まあ…気休めだが…」

シヤマル料理>越えられない壁>その他諸々>胃薬くらいの気休め  
だぞ!?!?

「さあキヨウスケ君…たくさんたべてな」

教訓

周りの視線には気をつけよう

そしてここから記憶が途切れた…

…恐るべしシヤマル料理

バタッ

「ああ！？恭介！しっかりしろ！！！」

「ふん！乙女の純情蔑ろにしたバチや！」

「あ、主…さすがにやり過ぎでは？」

「うつつ…どうせ私の料理なんて…シクシクシク…」

『相変わらず平和ですね』

どごがだっ！



留守番って暇だよな〜(前書き)

すみません 特に短いです…

留守番って暇だよな〜

前回までのあらすじ…

シャマルのポイズンクツ…いや、手料理を食べ…奇跡の生還を果たした僕

目を覚ましたらヴィータが介抱してくれが、その現場をはやてに見つかり…はやても介抱に参戦！

それはいい！

だが…はやての手にあつた…

「はい、キョウスケ君、あ〜ん」

先程のシャマルの料理がああ〜

…別荘内で2日寝込んでいました…

そして別荘から出て…

八神家、ベランダ

「じゃあ、三人とも気をつけてね」

「ああ、神代 シャマル 主の事頼むぞ！」

「ヴィータちゃんは一人で大丈夫なの？」

「へっ、大丈夫に決まってるだろ！」

「…ではゆくぞ！」

シュン！

「行っちゃいましたね。さ、キョウスケ君 私達はやてちゃんの所に行きましょう？」

「そうだねシャマル」

さて、本日はシグナム・ザフィーラコンビとヴィータが蒐集に行き僕とシャマルは、はやての護衛の為に残りました

理由は…以前現れた仮面の男！

僕が、

「あの仮面の男は信用できないから敵と認識して間違いないね…てか確実にはやてに危害加える存在だな！」

って、つい力説したら…

「主の身が心配だな…これからは戦闘ができる者と、サポートとしてシヤマルが残るようにしよう」

とシグナムが決定

それはいいんだけど…

「なら今回は恭介が残れ」

とヴィータ嬢が

何故？

「オメー前回ムチャしまくったからだ！  
鍋パーティーにも間に合わなかったし、はやては顔には出してなかったけど淋しがつてたんだかな…！」

うっ！やっぱそうだったか…

『ヴィータの精神的ダイレクトアタックで700ポイントのダメージ』

あゝはいはいそうだね〜インフィ

『ノリ悪いですよマスター』

「まあそう言うことだ神代 今回は我々に任してもらおう」

まあ、シグナム達の事は信頼してるし大丈夫か

回想終了

と言つ訳で、はやての護衛兼自宅待機になってしまった…

…アレ？でも何か忘れてるような？？

マンション（フェイト部屋）

フェイトSide

今日はなのはと私の部屋でお話中です この前買った（キョウスケとお揃い）の携帯の使い方や、アリサやすずかの事とかお話中です

「そっか アリサとすずかはバイオリンやってるんだね」

「うん メールでよくお稽古の話とか教えてくれるんだよ」

「そうなんだ」

やっぱり携帯って便利だな

キョウスケともそんな風にメールとか出来たらいい...かな//

ガチャ

「たっだいま」

あ、エイミーが買い物から帰って来たみたいだ

キッチン

私となのはエイミーが買ってきた食材を冷蔵庫に収納するのをお手伝い

ガサガサ

「艦長 もう本局に出掛けちゃった？」

「うん アースラの武装追加が済んだから試験航行だって アレックス達と」

「武装つて、えと…アルカンシエルか」 ハア…あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど…」

…そんなに危険な武装をアースラに付けないといけないのか…

「クロノ君も居ないですし 戻るまではエイミーさんが指揮代行だ  
そうですよ

「（責任重大）」

アルフはエイミィにプレッシャーかけて…

「うっ…それもまた物騒な〜」

そう言いながらエイミィはカボチャを片手で掴んだ

…エイミィ、意外と握力あるんだ…

「まあ とあいえ、そうそう非常事態なんて起こるわけが…」

そう言った瞬間

ビー…ビー…ビー…!

「あ…」

部屋中に非常事態のアラートが鳴り響いた…

マンション、モニター室

私はモニターを確認したら、そこにはシグナムと この前アルフと戦った使い魔の男の人が映し出されていた

「文化レベルゼロ 人間は住んでいない砂漠の世界だね

結界を張れる局員の集結まで最速で45分…ううん マズイなあ〜」



相手はシグナム…なら！

「エイミー 私が行く」

「私もだ」

私とアルフが出動を志願した。シグナムが居るのなら私が行かないと…

「…うん お願い」

「うん」

「おう」

私は自分の部屋にバルディッシュを取りに行った

「なのはちゃんはボックス ここで待機して」

「はい」

#### フェイト部屋

机の上に置かれた待機状態のバルディッシュを手にする

「行くよバルディッシュ」

《Yes Sir》

バルディッシュ…私に力を貸して

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

## 桜花幻影

管理世界、砂漠

シグナムSide

「ハア…ハア…ハア…ヴィータがてこずる訳だな 少々厄介な相手だ」

シグナムは目の前の魔法生物ワームを見据えていた

ズカア！

「ッ！」

「ぬっ！？」

突如背後からもう一匹、地面から魔法生物ワームが現れた！

シュルシュル！

「しまった！」

シグナムはワームの触手に捕まり縛られてしまっ

「ッ！」

ギリギリ！

「ぬあああ！」

シグナムは全身を締め付けられ身動きがとれない

「ッ！」

ワームはそのままシグナム襲い掛かってきた

《Thunder blade》

ズカア！バチバチバチッ！

突如上空から雷の剣が無数に飛んできてワームに突き刺さる！

「ッ！」

上空には先程サンダーブレイドを放った主…フェイトがいた

「…ブレイク！」

ドオオオオン！

フェイトが唱えると雷の剣は爆発しワームは崩れ去った

Side Out

アルフSide

アルフはフェイトと別れ、ザフィーラの元に現れる

「ご主人様が気になるかい？」

「…おまえか」

「ご主人様は一对一 こつちも同じだ」  
そう言い、アルフは構える

「シグナムは我らが将だが…主ではない」

ザフィーラも身構え臨戦体制に入る

「あなたの主は、闇の書の主…って言う訳ね…」

「……………」

Side Out

フェイトSide

「フェイトちゃん！助けてどうするの！？捕まえるんだよ！」

通信でエイミーからツッコミが入った

「あ、ごめんなさい つい…」

「…礼は言わんぞテストロツサ」

「お邪魔でしたか？」

「…蒐集対象を潰されてしまった」

ジャキ！カチャカチャ…

シグナムはそう言いながらデバイスに弾丸を込めていく

「まあ…悪い人の邪魔が私の仕事ですし…」

「そうか…悪人だったな私は…」

ガチャ！

弾丸を込め終え、シグナムはレヴァンティンを構えた

Side Out

マンション、モニター室

ビッビッビッビー!

突如アラートが鳴り響く

「な、もう一カ所!?!」

エイミイがモニターを見ると、そこには闇の書を持ったヴィータが別世界を飛行している姿があつた

「本命はこっち?なのはちゃん!」

「はい!」

なのはは力強く頷いた

## フェイトVSシグナム

管理世界

フェイトVSシグナムSide

「預けた決着は、出来れば今暫く先にしたいが…速度はおまえの方が上だ 逃げられないのなら戦うしかないな」

「はい…私もそのつもりで来ました」

ジャキ！

お互いにデバイスを構え

タツ！

ガキツ！

「てい！」

「ふっ！」

バチバチバチ！



お互いの攻撃を2、3度デバイスで受け、すれ違い様に攻撃するが、お互いの障壁によって阻まれる

「てっ！」

ヒュン！

フェイトは着地と同時に高速移動で瞬時にシグナムの背後をとり攻撃を仕掛ける

「ハアア！！！」

シグナムはその攻撃に反応、レヴァンティンを鞘に納め瞬時に背後のフェイトの攻撃を受け止める

ガキッ！

「はああ！」

受け止めたままシグナムは鞘からレヴァンティンを抜き攻撃する

ガチィ！ズザザザッ！

フェイトも防御するが後ろに吹き飛ばされる

《Schlange form》

「はああ！」

シグナムはレヴァンティンを連結刃にしフェイトに追撃を放つ

「っ！」

フェイトは何とかシグナムの攻撃をジャンプし回避した

《Load Cartridge Haken form》

ガチャ！バチバチ！

フェイトもバルデツシュをハーケンフォームに変型させ構える

「ハーケンセイバー！！！」

「はあああ！！！」

シグナムは連結刃をフェイトの周りを囲むよう螺旋状態にする

「はあああ！！！」

ズバア！

フェイトはハーケンセイバーの魔力刃を連結刃の隙間を抜いて撃ち出す

「てええい！！！」

シグナムも魔力を込めると、フェイトの周りを囲っていた連結刃が一気にフェイトに迫る

《Blitz rush》

バルデツシュは加速魔法をさらに掛ける

ヒュン!

ドカアアア!

シグナムは上空に飛び加速された魔力刃をかわす…が

「はああああ!」

上空には、シグナムの攻撃をかわしたフェイトがバルデツシュを振り下ろしてきた

《H a k e n s l a s h》

ガキッ!

しかしシグナムはフェイトの攻撃を…

「さ、鞘っ!?!」

鞘で受けた

「はああああ!」

ドカッ!

そのままシグナムはフェイトに蹴りを入れ吹き飛ばした

《P l a s m a l a n c e r》

バチバチ！

フェイトは何とか障壁で防御、落とされながらもバルデッシュはプラズマランサーを撃ち出す

「ハッ！？」

シグナムは予想しなかった攻撃に一瞬反応が遅れてしまった

バチバチ！ドカアアン！

プラズマランサーはシグナムに直撃し、フェイトは空中で体制を立て直し着地した

《Assault form》

フェイトはバルデッシュをアサルトフォームに変型させ構えた

ドカアア！

攻撃を受け、落下したシグナムは体制を立て直し着地した

《Schwert form》

シグナムもレヴァンティンを構える

「ぶっ！」

フェイトの足元に魔法陣が現れ

バチバチバチ!

フェイトは左手に電撃を貯める

「プラズマ……」

同時にシグナムの足元にも魔法陣が現れ、レヴァンティンを上段に  
構え魔力を集中

「飛竜……」

「スマツシャー……!」

ドカアアア!

フェイトはプラズマスマツシャーを撃ち出した

「一閃……!」

ズカアアア……!!

同時にシグナムもレヴァンティンに込めた魔力で連結刃を撃ち出し  
た

ドカアアアアーン!!!

お互いの攻撃はぶつかり合い、お互いに打ち消しあった

ヒュン!

その瞬間、二人は上空に飛び上がり

「はああああ!!!」

「はああああ!!!」

ガキイイイ!

空中で再び激突した

Side Out

To Be continued

おまけ

## 八神家リビング

ズズズズズ

「はあ〜…キョウスケ君が入れてくれたお茶って何でこんなに美味しいんやろな〜」

「本当ですね〜…私が入れると緑茶が紫茶になっちゃってますよ…何でかしら？」

「…あはははは…」

（…そりやお茶にソースやら醤油やら、あまつさえどこぞの通販で入手した怪しさ大爆発な物体いれるからだ（や）（）（）

キョウスケとはやての魂の叫びは同調したそうなの…

## 護るべきもの

上空

アルフVSザフィーラSide

バキィィィ！

アルフとザフィーラはお互いの拳をぶつけ合い攻撃をしていた

「てい！」

「っん！」

ドカツ！バキィ！

「ハア…ハア…あんたも使い魔、守護獣ならさ！ご主人様の間違いを正そうとしなくてもいいのかよ！？」

アルフはザフィーラを説得しようと語りかけるが、



「…闇の書の蒐集は我らが意志 我らが主は…我らの蒐集については何もご存知ない!」

「な、なんだって!? そりゃ一体!? あのスコールって奴が主じゃないのかい!？」

ギユツ

ザフィーラは拳を握り絞めて否定する

「スコールは我らの為…自ら汚名を着ているに過ぎん!」

「じゃあ…あいつは…主じゃない?」

「それに、主の為であれば血に染まる事も厭わなず 我と同じ守護の獣よ お前もまたそうではないのか?」

ザフィーラは拳を構える

「…そうだよ、でも…だけどさ!」

アルフは悲しみの混じった表情でザフィーラを見つめていた

Side Out

別管理世界

ヴィータSide

「(シグナム達が!?)」

「(うん、砂漠で交戦してるの テスタロッサちゃんと、その守護獣のコと)」

ヴィータはシャマルと念話でシグナム達の事を聞いていた

「(うーん 長引くとマズいな 助けに行くか) …ん!？」

何かを見つけ空中で急停止するヴィータ

その先には…

「(ヴィータちゃん?)」

「(クソツこつちにも来た!例の白服) …高町なんとか!」

ヴィータの目の前には高町なんとかが…

も、もとい【高町なのは】が居た

Side Out

なのは、ヴィータSide

「ふえ！？なのはだつてば！なの〜は〜あ もう…

ヴィータちゃん、やっぱりお話し聞かせて貰う訳にはいかない？もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかもしれないよ」

「…っ！うるせえ！！管理局の人間の言う事なんて信用できるか！！！」

ヴィータはなのはを拒絶…だがなのはは、

「私 管理局の人じゃないもの 民間協力者」

そう言い、なのはは両手を広げ優しく微笑んでいた

（闇の書の蒐集は魔導師一人につき一回 つまり、コイツを倒しても真にはなんねーんだよな…カートリッジの無駄遣いも避けたいし）

「ヴィータちゃん！」

なのははヴィータを説得しようとするが、

「ぶっ倒すのは…また今度だ！」

ヴィータの足元に魔法陣が現れヴィータは魔力球を構える

「あつ!?!」

キイイイーン!

ヴィータの掌に魔力が集中する

「吠えろ! グラーファイゼン!」

《Eisengeheul》

ヴィータは作り出した魔力球をグラーファイゼンで叩き付けた

ドカツアアア!

「きゃあ!」

なのはは突然の衝撃に驚き、目をつぶり両手で耳を塞いでしまう

辺り一面は光や衝撃に覆われた

「脱出!」

その隙にヴィータはなのはとは逆方向に飛んでいく

「…つく ああ!?!」

衝撃が収まり目を開けると、遠くを飛んでいくヴィータを見つける

《Master》

「うん!」

レイジングハートの呼び掛けになのは頷いた

「よし ここまで離せば攻撃もこねえ…次元転送っ…ん？」

ヴィータが何かに気付く その目の先には…

《Buster mode Drive Ignition》

レイジングハートを砲撃モードにかまえたのはいた

「いくよ！久しぶりの長距離砲撃！」

《Load Cartridge》

ガチャ！ガチャ！

レイジングハートはカートリッジを2発ロードし魔力を高める

「まさか！撃つのか！？ あんな遠くから！！？」

キイイイン！

レイジングハートに魔力を集中させる

《Divine buster Extension》

「デイベイン、バスターア！！！」

ドカアアアア！

放たれた巨大な砲撃がヴィータに襲いかかる

「あつ…」

ヴィータは驚きの余り身動きができず、

ドカアアアアン！！

砲撃はヴィータに直撃し爆発した

「あ…」

なのはは自分で自身の砲撃に驚いていた

《It's a direct hit》

直撃ですね

「ちょっとやり過ぎた？」

《Don't worry》  
いいんじゃないんでしょうか

そして砲撃の爆煙が晴れるとそこには…

「ふう、間一髪だな」

「あ、き、恭介…？」

「スコール、さん？」

Side Out

To Be continued

出現場所は確認しないと！（前書き）

気付いたらPV890000、ユニーク1000000越えてました  
みなさんありがとうっ！！



出現場所は確認しないと！

数分前、八神家

キヨウスケSide

「（ヴィータちゃん？）」

「（クソツこつちにも来た！例の白服）」

「えっ！？キヨウスケ君！大変よ！ヴィータちゃん達がつっ！」

「ああ！シャルル、済まないがはよての事を頼む！」

「はい、分かりました」

さて、ヴィータ達がいる世界に転移…と行きたい所だが、ちよい距離があるな…シャルルにサポートしてもらって転移して…間に合うか？

ピカッ！

「な、これは!?!」

突如僕の胸から光が…いや、正確には胸ポケットに入れていたヴィータとの仮契約カード

「キヨウスケ君…そのカードって…」

「あ、ああ これはヴィータとの仮契約カードなんだが…何故急に…うっ!これは!?!」

カードを見つめていると急に僕の知らないカードの機能の【一部】が頭に浮かんで来た

「…なるほど、これなら!」

「どうしたの?キヨウスケ君?」

「ん、大丈夫だよシャマル これならすぐヴィータの元に行けるよ  
そう言い僕はカードを掲げ

「…転送!」

シュン!

「えっ!?!キヨウスケ君?…これって超長距離転移!?!」

シュン！

よし！カードの転移機能で一瞬でヴィータの元に来れたのはいいが…

なのはの砲撃射線上ぢやね〜か！！

「くっ！【ファイヤーウォール】×5重障壁！！」

ブオン！

ドカアアアアン！！

くっ…！障壁が持たない！？

「インフィニティ！カートリッジロード！！」

《Load Cartridge》

ガチャ！ガチャ！

くっ、2発カートリッジ使っても3つ目まで破壊してくるとは…

「…ふう、間一髪だな」

「あ、き、恭介…？」

「スコール、さん？」

「大丈夫かヴィータ？（すまないがここではスコールって呼んでくれないかな？）」

「あ、ああ…大丈夫だ。すまねえスコール 助かった」

しかし、なのはあのあの砲撃…あれ非殺傷設定してあるのか？

「ヴィータ、ここは一旦退くぞ！」

「おう！」

だが、なのはさんも素直に見逃す訳ないよな。仕方ない…

「ヴィータは次元転移の準備を！僕があっちの相手をしているから」

「…大丈夫か？」

って心配そうに見てる…ヴッ！お持ち帰りした…ぢやなくて！

「大丈夫だよ…ヴィータ それよりも今はこの場を乗り切らないと」

「ああ、まかせたぜキョ…スコール！」

さて、後は…

「ディバイーン…」

って容赦なく砲撃ツスか！なのはさん！？

回避する？いや、後ろにヴィータがいるから却下 受け止める…微妙だったからな…なら、

ギュ！ドンッ！

僕は足に魔力を集め、虚空瞬動で一気になのはに詰め寄った

T o B e c o n t i n u e d

説得はまず誠意をみせないと！

前回までのあらすじ

虚空瞬動で一気になのはに詰め寄った！

《Master!》

「…はっ!？」

一瞬で距離詰められたら砲撃主体の魔導師は手も足もでないしね

「インフィニティ【ふういん】セット!【フリーズ】!」

グオン!

ピキ、パキパキッ!

「こ、拘束魔法!?!そんな…!し、しかもあんな距離を一瞬で接近して!？」

多少バリアジャケットのお陰でレジストしたのか氷漬け…とはいかないが、なのはの身動きを封じるには十分か…ん?そういえば…原作ではたしか、僕じゃなくあの仮面の男が介入したが…今日は影も形も見えないのは…??

そう考えていたら

「ス、スコールさん、何であなたは闇の書を完成させようとしてるんですか！？何か訳があるならお話し聞かせて下さい！もしかしたら私達にお手伝い出来る事があるかもしれないですし…」

【フリーズ】中のなのはが話しかけてきた

… ったく、話しを聞かせてって言いながら…

「…あなたは相手と解り合おうとする時に、あんな極悪極太魔力砲撃をぶっ放して相手を潰してから解り合おうとすんですか？」

… ったく、あんな非殺傷設定にしても食らった方はトラウマに成り兼ねない程の凶悪砲撃放って「訳を聞かせて」って…タチの悪い当たり屋と同じぢやね〜か

… 未来じゃティアナがオーバーキル食らってたし…この辺も後々改変しないと…

「あ、その…」

なのははバツが悪そうに視線を反らしているが…今か！

「（ヴィータ、先に戻っててくれ！僕はこれからシグナムのフォロ―に行くから！）」

「（…絶対大丈夫だよな？恭介…）」

「（ああ、ちゃんとヴィータの元に帰ってくるよ）」

「（っ！？ぜ、絶対だかんっ！／＼／＼）」

シュン！

よし、ヴィータは逃げたか…しかし、何故ヴィータは顔を赤くしてたんだ？

『マスターがあんな天然ジゴロ発言したからでは？』

は？いつそんな発言した？

『だから天然なんです！…ってか、マスター！なのは嬢が…』

「…んんんっ！」

フリーズを（魔）力づくで破ろうとしているし！  
長居は無用だな…

「（シグナム、聞こえるか？）」

シーーン

あれ？念話を通じない？…何か嫌な予感が…

「インフィニティ！シグナム達の現在地座標は分かるか？」

『ハイ、シャマル女史に座標は頂きましたから』

「よし、すぐに転移を」



『イエス マスター』

「ま、まってスコールさんっ！」

いやいや、待てませんよ？

シュン！

Side Out

なのはSide

パライイン！

私はスコールさんが転移すると同時に拘束を解いた

でも…スコールさん、氷は冷たいよっ！せめて普通のバインドを  
っ！

《Sorry master》

「うっん 私の油断だよ…」

私はレイジングハートにそう言い、二人が居なくなった空を見つめて  
ていました…

次こそお話し聞かせてもらおうのっ！

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

T  
O  
B  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 緊急事態

### 別管理世界

シグナムVSフェイトSide

ガキツ！

シグナムとフェイトは長時間攻撃を繰り返していた

「ハア…ハア…ハア…」

（此処にきてなお速い 目で追えない攻撃が出てきた…早めに決めないとなズイな…）

カチヤ

シグナムはレヴァンティンを鞘を構える

「ハア…ハア…ハア」

(つ、強い クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ  
今はスピードでごまかしてるだけ…まともに喰らったら叩き潰され  
る！)

カチャ

フェイトもバルディッシュを構える

(シュツルムファルケン…当てられるか?)

(ソニックフォーム…やるしかないかな?)

お互い静止し構えいた…そして

「ッテイ！」

「ハアア！」

お互い相手に向かっていったその時

ズブツ!

「あ…」

フェイトの背後から仮面の男がフェイトの胸を腕で貫いた

「テストロツサ…」

「あ…ああああ!!」

男の腕から魔力が放たれ苦しみ出すフェイト

「責様ぁ!」

シグナムが仮面の男に怒りをぶつけると  
スッ

仮面の男は掌を広げる

そこにはフェイトのリンカーコアが輝いていた

「はっ!?!」

シグナムの目が見開かれる

「…さぁ 奪え」

仮面の男は冷酷に呟いた

Side Out

キョウスケSide

シュン！

ふう、長距離転移って結構魔力食うんだよね

さて、シグナムは何処に…

「【ハイパースキャン】！」

『…マスター、2時の方向に反応あり』

よしっ！

シュン！

タツ！

「シグナム！無事…っ！貴様は！」

目の前にはフェイトを抱えたシグナムと…

「貴様がイレギュラー…」

仮面の男が居た

「…シグナム、フェイトから蒐集したのか？」

「……………ああ」

辛そうな顔してるなシグナム…

恐らく誇りを賭けた戦いを仮面の男に邪魔されて…って所か

「ふっ…早く闇の書を完成させる」

シュン！

そう言い残し仮面の男は消えた… こりゃそろそろ…

「うっ…」

「テストロッサ!?」

「どうしたシグナム？」

「テストロッサの容態が!?!」

は?リンカーコアから魔力奪っただけではないの?

「分かった…インフィニティ!【フルケア】マテリアセット、【フルケア】!」

ピカッ!

よし、これで「神代!テストロッサがまだ苦しんで!」って何っ!?!

「インフィニティ!魔法は効いてないのか!?!」

『いえ、魔法は効いていますが…フェイト嬢のダメージが深く、回復魔法だけでは追いつかないようです』

な、なに！？ 原作とちがっちゃねーか！？

「…つく！ゴホッ！」

「テストロッサ！しっかりしろ！！！」

…何この展開？フェイトが吐血！！？

これってかなりヤバイ？

T o B e c o n t i n u e d



これは不可抗力!?

前回までのあらすじ…

「…つく!ゴホツ!」

フェイトが吐血して緊急事態っす

キョウスケSide

これってかなりヤバイ?

…なら、コレを

ゴソゴソ

僕は収納空間から液体の入ったビンを取り出す

「神代 それは?」

「これは、以前精製した【エリクサー】だよ 最高級クラスの回復薬だ これをフェイトに飲ませれば…さ、しっかりしてフェイト この薬を飲んで」

フェイトにエリクサーを飲ませようとするが…

「…駄目だ テスタロッサに薬を飲み込む力がもつ…」

ヤバイヤバイヤバイ…原作ブレイクにもコレはBAD END過ぎるだろ！

し、仕方がない…ごめんフェイト！

僕はエリクサーを口に含み…

「神代？何を…っ／／！？」

「…んっ…」

ゴクン

パアアアツ！

…緊急事態だったので、…く、口移してエリクサーを飲ませたのだが…

姉さん大変です

仮契約カードまで出ましたよ…

「…とりあえずフェイトの顔色も良くなったし、これで大丈夫」

「う、うむ／＼ テスタロッサが無事で何よりだ…神代、そのカードはもしや？」

やっぱり気付くか…!!

「うん、か「フェイト！無事かい！？」ってアルフか…」

タツ！

「…フェイトに何をした!？」

うわっ 睨んでますね〜

「…言い訳はしない、テスタロッサに済まないと伝えてくれ」

フェイトを抱き抱えていたシグナムはアルフにフェイトを預ける

「…行くぞ、スコール」

「…アルフ、フェイトはさっきまで重体だったんだ。一応手当はしたけどそちらでも医療機関で診てもらってくれ…」

そう言い僕もシグナムの後を追ってこの場を去る

アルフが何か言っていたようだが…封鎖される前に撤退

まあアースラもこっちをモニターしているから詳細の説明はいいか

あ、もちろんカードは回収済みだよ

分割はしていないけど

Side Out

シグナムSide

なんとかテストアロツサは一命は取り留めた…

これも神代のお陰だ。主の為とはいえ、相手の命まで奪ってしまえばあのお優しい主は心を傷めてしまう…

しかし神代には驚かせられてばかりだな

あの魔法や力もそうだが、我等守護騎士が主以外にここまで心を許してしまうとは…ヴェータは特にだったな

…そういえば先程テストロッサを助ける為とはいえ…その、結果的にとはいえキ、キスの現場を目の当たりにしてしまった

…以前ならあの程度でうるたえる私ではなかったのだが、今の主と神代に出会ってから私は…いや、我等は変わったのだな…

我等を受け入れてくれるあの温かな主の笑顔…

我等を包み込んでくれる神代の優しさ…

初めは驚いたが、今は心地よい…

こんな気持ちが続く日々がいつまでも…と願ってしまったな

その為には主を呪いからお救いせねば！

…神代の場合は、当面テストロッサとキスをした事を主やヴィータにバレた時どうするかが目下の課題だな

しかし仮契約か…

「私も…」

つて、わ、私は何を考えているんだ／＼！？  
騎士とある者が…！

しかも神代はまだ子供ではないか！？

…いかな、キスを目の当たりにしたせいで思考が鈍っているようだ  
少し落ち着かなければ…

S i d e O u t

???? S i d e

『フッフッフ…またフラグが立ちそうですよマスター』  
「何のフラグだよインフィニティ…」

S i d e O u t

## 作戦会議：アースラSide

アースラ、会議室

会議室には、なのは・クロノ・アルフ・リンディ・エイミー・アレックス・リーゼ姉妹が居た

「フェイトさんはリンカーコアにダメージを受けていたようだけど、命に別状はないそうよ」

ホッとする一同

「私の時と同じように闇の書に吸収されちゃったんですね」

リンディの報告になのはは自分と同じ状態だと確認する

「アースラが稼動中でよかった　なのはの時のように救援が早かったから」

「だね…」

と、クロノの発言にロツテ相槌をうった

「二人が出動してしばらくして、駐屯場の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで指揮や連絡がとれなくて…ゴメンね、私の責任だ」

エイミーは深々と頭を下げ落ち込んでいた

「んなことないよ エイミーがすぐシステムを復帰させたからアースラと連絡がとれたんだし…仮面の男の画像も残せた」

そう言い、モニターに映る仮面の男を確認するロツテ

「でもおかしいわね、向こうの機材は管理局で使っているの物と同じシステムなのに…それを外部からクラッキング出来る人間なんて居るものなのかしら？」

リンディは疑問に思い考えていた

「そうなんですよ 防壁も警報も全部素通りで…いきなりシステムをダウンさせるなんて…」

「ちょっと、有り得ないですよね」

エイミーとアレックスは信じられないと言う顔でいた

「ユニットの組み替えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ」

エイミーは力強く意気込みを入れていた

「それだけすごい技術者が居るって事ですか？」



「うん」

なのはの問い掛けにアリアは頷く

「もしかして組織だってやってんのかもね…」

ロツテの言葉に場は沈黙した…

「君の方から聞いた話しも状況や関係がよく判らないな」  
ククロノはアルフに現場の状況を聞いてみた

「ああ、私が駆け付けた時にはもう仮面の男は居なかったけど、アイツが…スコールとシグナムが居て…シグナムがフェイトを抱き抱えてて「言い訳は出来ないが済まないと伝えてくれ…」って」

「それと、こちらのモニターで確認したんだけど…仮面の男にリンカーコアを無理矢理抜き取られた時のダメージが大きくて、フェイトちゃんのバイタルがレッドゾーンギリギリまで下がって危険な状態だったのが解ったわ」

エイミイはモニターを切り替え皆に説明した

「で、このスコール君だっけ？この子がフェイトちゃんに何か飲ませている映像があるんだけど、この後フェイトちゃんのバイタルが通常値まで回復したのも確認できたわ」

エイミイはその【飲ませている】画面に切り替えた

「…エイミィさん、これってやっぱり…／＼」

なのはは、顔を赤くしてモニターをみている

「まあ…その、状況から判断して口移してフェイトちゃんに飲ませている…ぶっちゃけキスしてるわよね」

「あうう／＼」

エイミィの答えになのはは更に赤くなった

「ゴ、ゴホン！とにかくだ！闇の書が完成する前に闇の書の捕獲、または主の確保が最優先になるな」

クロノは今後の活動方針を語る

「…アレックス！アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「うん では予定より少し早いですがこれより指令部をアースラに戻します」

職員は所定の位置に！」

「……………ハイツ！……………」

リンディ提督の号令にアースラクルーは頷いた

「と、なのはさんはお家に戻らないとね」

「あ、はいでも…」

なのは何か言いたげにリンディを見ている

「フェイトさんの事なら大丈夫 私達でちゃんと見ておくから」

「…はい」

なのはは迷いながらも頷いた…

「さて、フェイトさんが目を覚ましたら説明しないといけない事が  
沢山あるわね…」

作戦会議ウォルケンリッターSide そして…

八神家リビング

キヨウスケSide

今、八神家では前回現れた仮面の男について会議がひらかれてます  
まあ、正体も目的も黒幕も誰か知っているが…

「やはり奴は闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれない…」

「ありえねー！だって完成した闇の書を奪ったって、マスター以外  
には使えないじゃん！！」

上からシグナム・ザフィーラ・ヴィータがそれぞれの意見で論議  
していた

「完成した時点で主は絶対的な力を得る…脅迫や洗脳に効果がある  
筈はないしな」

…やはりみんな闇の書の歴代主や自身がどうなったか覚えてないみたいだ…

「まあ 家の周りには嚴重なセキュリティを張っているし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶとは思いませんけど…」

…追記すると家の中にあつた監視カメラ等も僕が全て潰したが…ん？どうやってつて？ハイパースキャン使えば一発ですよ

…某 NOTEのLじゃね〜んだからあんなに設置するか！？つて位あつたが…あのジジイはロリコンか！？

「やはり今後もシヤマルと戦闘が可能な者一人、主の元を離れん方がいいな」

「そうね…」

原作では八神家自体襲撃つて展開はなかつたが…万が一があるとも限らないし、はやての安全を第一に考えないと…

「ねえ…闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになつてさ…それではやては幸せになれるんだよね」

「なんだヴィータいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る 守護者である私達はそれを誰より知っている筈でしょ？」

「そうなんだよ…そうなんだけどさ…私は何か…何か大事な事を忘

れている気がするんだ…」

…ヴィータは何か違和感に気付いているのか？

「なあ皆…【夜天の書】って魔導書知ってるかな？」

もしかしたら少しは覚え「いや、聞いた事がないな」ってシグナムさん！貴方たちの大元ですから！！

「…他のみんなも？」

「はい、ヴィータちゃんやザフィーラは？」

「私も聞いた事ねー」

「…私もだ、それがどうかしたのかキョウスケ？」

「あ、いや…なんでもないよ 気にしないで」

やっぱ覚えてないか…

「じゃあ今後も今までどおりはやての護衛組と蒐集組に分か

ガシャン！！

って、なんだあ！？

何か倒れたような大きな音が…っ！しまった！もうその時期だったか！！

「ハッ！今の音、はやての部屋から!？」

ダッダッダッダッ!

ウィータは慌ててはやての部屋へ

皆も後を追うように急いではやての部屋へ向かった

はやての部屋

ボタン!

「はやて!」

「はやてちゃん!」

「ああ…くっ…!」

部屋に入ると、はやてが胸を押さえて倒れ込んでいた!

「はやて!はやて!病院!!救急車!!!!」

「ああ!」

「動かすな!そっとしておけ」

でも、そのままって訳にもいかないよな…かなり苦しそうだし…よし！

「インフィニティ！」

マテリア【かいふく】セット！【リジエネ】！

ピカアアア！

リジエネの虹色の光がはやてを包む

「恭介！？それは？」

「回復魔法の一種かな 一定時間常に回復魔法がかかり続ける…多少は楽になるはずだ」

「見て！はやてちゃんの顔色が！」

皆がはやての顔を見ると、先程まで苦しそうにしていたのが嘘のように落ち着いていた

「ふう…応急処置だがこれでとりあえずは大丈夫だ」

ホントに【とりあえず】だけど…

ピーポーピーポー！

「救急車が来たみたいだな」

こうして僕たちは病院へと向かった



S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

## フェイトの受難？

アースラ、病室

フェイトSide

「う、うん…」

フェイトはベッドの上で目を覚ました

「フェイトさん…目、覚めた？」

「リンディ 提督…？」

「うん」

目の前に居る人物…リンディに気付き咳くと、リンディはそれに応えた

「んん…ん？アルフ？」

ベッドから起きようとして傍らにいたアルフに気付いた

「アルフもタベからずつとあなたの側にいたから」

「…えっ？あれ？私…？」

ようやく状況が把握出来てきたのかフェイトは少しパニックになってしまった

「ここはアースラの艦内、あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて気を失っていたの」

「あ…」

そう言われ、フェイトは何があつたか思い出した

「リンカーコアを吸収されてるけど…すぐ治るそうよ 心配しないで」

「私…やられちゃったんですね…」

フェイトはそう言い落ち込んでしまった

「管理局のサーチャーでも確認出来なかった不意打ちよ 仕方ないわ」

リンディはフェイトの手に自分の手を重ね慰めた

「あ…／／／」

フェイトはリンディが自分の手を握っているのに気付き顔が赤くな

った

「あ、ごめんなさい！嫌だった？」

慌ててリンディはフェイトから手をはなした

「いえ、嫌とかではなく…その…／／／」

「少しうなされるているようだったから…でもよかったわ　あなたが無事で」

「すみません…ありがとうございます／／／」

フェイトは顔を赤くしながらリンディにお礼を言った

「学校には家の用事でお休みって連絡してあるからもう少し休んでいるといいわ」

「はい、」

「お腹減ってるでしょ？何か軽い食事と飲み物を持ってくるわ　何がいい？」

そう言いリンディはドアに向かいながらフェイトに聞いた

「あ、いえ　そんな…」

フェイトは遠慮しているようだったが、

「いいから」

リンディの一言で押し切られてしまった

「えと…お任せします」

「うん」

シュー、ボタン

リンディはそう言い一旦部屋から退室した

フェイトは、リンディが握ってくれた手を見つめていた

「ん、フェイトお〜…」

ベッドの脇でうたた寝していたアルフが寝言を呟いた

フェイトはそんなアルフを見つめながら微笑んでいた

数分後

シュー、ボタン

「お待ちせフェイトさん」

トレイにはサンドイッチとドリンクが乗せられていた

「えと、ありがとうございます」

フェイトはリンディならトレイを受け取り、

「いただきます」

サンドイッチを食べ始めた

「ねえ フェイトさん、不意打ちを受けた後の事って何か覚えてるかしら？」

「えっと…意識が途切れ途切れだったけど、シグナムの声とスコールの声が聞こえたような…ごめんなさい その位しか…」

再び顔を俯かせるフェイト

「あ、いいのよ！こちらでモニターしてたし、バルデッシュのデータを解析してあの時何があったか確認できているし」

リンディは慌ててフォローする

「何かあったんですか？」

「ん〜 実はフェイトさん、仮面の男に無理矢理リンカーコアを取り出された時のダメージがかなり深刻なレベルだったのよ…」

「えっ!？」

フェイトはリンディの発言に驚いていた

「でもね、あの男の子…スコール君がフェイトさんを助けてくれた  
ようなのよ」

「…スコールが私を？」

再びフェイトは驚いた顔をした

「ええ、フェイトさんはかなり危険な状態で…スコール君がフェイトさんに薬を飲またら一瞬で回復したからこちらも驚いたけどね…  
ただ」

「？ただ…何です？」

フェイトは恐る恐る聞いてみた

「フェイトさん…薬が飲める体力もなかったみたいで、緊急事態だったんでしょね…その…スコール君はフェイトさんに口移しで薬を飲ませたのよ」

「……………」

フェイトはリンディが言ったことを頭の中で処理中…

（口移し？口移しって口と口で移すって意味？ え？え？それって…）

そして数分後…

ボンツ!!

「きゅゅゅゅ／＼／」

ボタン!

フェイトはオーバーヒートした

「フ、フェイトさん!?!しっかりして!?!」

フェイトの頭から煙が出ていた…

「／／／／／／!?!」

フェイトが再起動したのはそれから数時間後だったそう…

Side Out



## 入院

海鳴大学病院前、病室

「さあ 大丈夫みたいね よかった」

「はい ありがとうございます」

主治医の石田先生に診てもらいとりあえず落ち着いたはやての容態…

「ああ ホツとしました」

「せやから、ちょ目眩がして胸と手えがつっただけやて言つたやん  
… もう、みんなして大事にするんやから」

「いやっ！手はともかく、胸つるって…」

「…キョウスケ君、どこ見とるん／＼？」

「しまった！ついはやての胸を凝視してしまった…」

「あ～いや～あはは…」

「…恭介のスケベ！！フンッ！」

ゴン！

いててて！ヴィータさんっ！スネは蹴らないで〜

「でもはやてちゃん…頭、打ってましたし…」

「何かあつては大変ですから」

「はやて！よかったあ…」

みんな安堵してるな〜はやてかなり痛がってたからな…実際マジでヤバイと思つたし

「まあ来てもらったついでにちょっと検査とかしたいから…もう少しゆっくりしてってね」

「はあい…」

どうやらはやては検査は嫌いらしいな…

「さて、シグナムさんシャルさん ちょっと…」

「はい…」

「ん？」

シグナムとシャルが石田先生からの呼び出し…このフラグって…はやくて入院の時期か…急いでアレを創らないと…

とりあえずシグナム達の話を一応聞いておかないと  
調度はやてはヴィータと話し中だし…

『盗み聞きですか？』

うっ…現状把握だよ！

とりあえずドア越しに聞き耳を…

『やっぱり盗み聞きですか』

だから違っつてば！

病室外、廊下

「今回の検査では何の反応もありませんが…っただけ ということ  
はないと思います」

「はい…かなりの痛みようでしたから」

「麻痺が広がりはじめているのかもしれない、今までこっついう兆  
候はなかったんですね？」

「と、思っていますが…はやてちゃん痛いのが辛いのが隠しちゃ  
いますから」

「発作がまた起きないとも限りません…用心の為に少し入院して

もらった方がいいですね 大丈夫でしょうか？」

「…はい」

やはりはやては入院になるか…

T o B e c o n t i n u e d

蝕む呪い…

「入院!？」

「ええ…そうなんです」

「……………」

はやて落ち込んで…いや、不安なのかな？

「でも検査とか念のためとかですから心配ないですよ　ね？シグナム？」

「はい、ですから主は心配なきよう」

「いや　それはええねんけど…私が入院しとつたらみんなのご飯は誰が作るんや？」

「んぐっ!」

ヴィータがコケた

そりゃ論点がズレてるしな

「そ、それはまあ何とかします」

「そうですよ 大丈夫です 多分…」

そう言ったシャマルの発言に、シャマル以外の皆の心が一つになっ  
た…

いや、あんたが作らなければ… と

「ん〜…」

「だ、大丈夫だよはやて！みんなのご飯は僕が作るし、家事も学校  
休めば何とかなるし」

「あかんよ！キョウスケ君、気持ちは嬉しいけど…学校にはちゃん  
と行かな…」

うつうつ…そんな悲しそうな目で見ないで〜ピユアすぎますよはやて  
さん！

「う…分かったよはやて」

はやてのお願いなら仕方ないな〜

「私が、毎日会いに来るよ！だから…大丈夫！」

「ヴィータはええコやな せやけど、毎日やのうてもええよ やる  
ことないしヴィータ退屈やん」

「はやて…」

「うん じゃあ お言葉に甘えて、私は三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

…ッ！あかん！すずかちゃんがメールくれたりするかも！」

あ、すずかとメル友だったよな

「ああ 私が連絡しておきますよ」

「うん…お願いなシヤマル」

「では戻って着替えと本を持ってきます ーご希望がありましたら」

「うん 何にしようかな」

そうして僕たちは一時家に戻る事になった

## 病院、正面入口

僕たちが病院から出ると…

「ん？」

ヴィータがはやての病室を見上げている…やっぱり心配だよな

「ヴィータ！」

「あ、ああ……」

ヴィータはシグナムに呼ばれ、僕たちは家にむかった

## 病室

はやてSide

「うっ……うっ……うっ……」

（あ、あかな……みんなに心配かけないようちよ無理したかな……う  
うっ……）

胸を押さえて苦しんでいた

Side Out





お見舞いに行こう！

朝、マンション前

なのは、フェイトSide

「おはようフェイトちゃん！」

「おはよう、なのは」

「体調大丈夫？」

「うん、魔法が使えないのはちょっと不安だけど…身体の方はもうすっかり（当面、私となのはは呼び出しがあるまではこっちで静かに暮らしててって）」

「（出勤待ち…みたいなカンジかなあ？）」

「（うん、武装局員を増員して追跡調査の方をメインにするみたい）」

「（そっかあ）」

プッポー!

「あ、なのは!バスが来たみたいだよ」

「うん!行こうフェイトちゃん」

S i d e O u t

学校、教室

なのは、フェイト、アリサ、さすがS i d e

「入院!?はやてちゃんか?」

「うん、昨日の夕方に連絡があつたの… そんなに具合が悪くない  
そうなんだけど、検査とか色々あつてしばらくかかるって…」

「そっかあ…じゃあ放課後みんなでお見舞いとか行く?」

「え、いいのアリサちゃん!」

「さすがの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ、お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいんじゃない？」

「うん それはちょっとどうかと思うけど…」

「でもいいと思うよ ねっ、さすが」

「うん ありがとう。じゃあはやてちゃんの家族の人に聞いてみるね！」

「あつでも、もし面会出来なかったらどうしようか？」

「ん…じゃあ私達の写メも送っておく？お見舞いの代わりにこれを見せて下さいって」

「あ、アリサそれいいかも」

「じゃあ…あれ？そういえばキョウスケは？アイツも可哀相だから入れてやらないと…」

「ふふっ、アリサちゃん素直じゃないんだから」

「な、なにによすずか！別にそーゆーんじゃないんだか「朝から元気だね」アリサ」ってキョウスケ！？」

Side Out

キョウスケSide

はやてに学校行けって言われたから来たはいいが…こんな暇そろそろないんだけどな…まあ下準備は別荘とか使えばなんとかなるか…

ガラッ

「じゃあ…あれ？そういえばキヨウスケは？アイツも可哀相だから入れてやらないと」

ん？僕の事言っているのか？  
…脅かしてやるか

「な、なによすずか！別にそーゆーんじゃないんだか「朝から元気だね」アリサ」ってキヨウスケ！？」

「おはよみんな！どうしたの？」

「あ……キヨウスケ……」

ん？フェイトどうしたんだろう？元気がないような…

「ちょうどいいところに来たわね！アンタそこに立って！」

「って、アリサ！説明なしかい！」

「にやはは、あのねキヨウスケ君、皆で写メ撮ろって事になったの」

「写メ？前撮ったような…」

「えと…すずかの友達が入院して、お見舞いに行く前にまず写メ送るうって事になったんだ」

へ〜お見舞いね〜…ん？すずかの友達？

……………あ”

「じゃ撮るわよ〜 タイマーセットして…っ」と

っていつの間に!?

しかもいつの間にか皆が周りに!?

ピッピッピッ…カシャ!

「ちゃんと撮れたかな？」

「うん、ばっちりだよ〜」

「じゃあすずか、メメールお願いね」

「うん!」

やっぱりはやてに送るんだろうな〜

…あれ？病室って携帯禁止だから持って行ってないよな？

…ああ、シヤマルに預けたんだっけ

…ん？何か忘れてるような…？

まあ、思い出せないからたいしたことないか…

「ねえ、キヨウスケ君もお見舞いに来てくれるよね？」

まあ…はやては、なのは達と僕が友達って知ってるし…

「キヨウスケ君…何か用事とかあるならいいよ」

「すずかさん！貴女もその上目づかいを使うんですか！？くっ！しかも板に付いてるし！」

「あ、いや別に用事はないし…いいよ」

「本当？ありがとうキヨウスケ君！はやてちゃんもたくさん人数居た方が喜ぶよ！」

さつきとは打って変わって嬉しそな笑顔ですな〜

「すずかちゃんも…だから、それはちょっとどうかと思うよ〜っ！」

「なのは！そこは気にしちゃ負けよ！！」

「アリサちゃん…」

「すずか、はやてにはもうメール送ったの？」

「うん、さっきの写メもちゃんと付けたよフェイトちゃん」

ブーブーブー！

ん？携帯から電話？

「ちよっとゴメン」

「あ、キヨウスケ君どこ行くの？もうHR始まっちゃっよ？」

「ちよっと…トイレに　なのは、悪いが代返よろしく」

ガラガラ！

「に、にゃああ！？む、無理だよー！」

なのは何か言っているがスルーするぞ　さて、誰から…ってシャルからの着歴？何だろう？

ピッ！トウルルル…ガチャ！

「もしも「キヨウスケ君！コレはどういう事！？」ってシャル、声がでかい！…ってコレって何だ？」

Side Out



お見舞いに行こう！シャマルのテンパリ！？編

前話より少し遡り…

八神家、キッチン

シャマルSide

「　　　　　？　　　　　よいしょっ　と、はやてちゃんのお弁当こんな感じかな」

【シャマル女史は、ただお弁当を詰めているだけです。おかずはマスターが作って行きました  
インフィニティ談】

ピーピーピー

「ん？あ、すずかちゃんからメールだわ」

ピッ！

「シャマルさんへ

こんにちは月村すずかです  
今日の放課後友達と一緒ににはやてちゃんのお見舞いにいきたくて  
すが行っても大丈夫でしょうか？」

「すずかちゃん、いい子ね…」

ピッ

「えっ？ええ！？ええええええ！！！！？」

「もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せてあげて下さい」

メールに添付されていた写真には…なのは・フェイト・すずか・アリサ・キヨウスケが写っていた

「な、なんで管理局魔導師とキヨウスケ君と一緒に…？」

Side Out

管理外世界

シグナムSide

「なに！？テストロッサ達がどうしたって？」

「（だから！テストロッサちゃんとなのはちゃん 管理局魔導師の二人が今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの！！！すずかちゃんのお友達だからっ！ああ！どうしよう！！！どうしよう！！！！」

「いやまでシャマル落ち着け大丈夫だ！

幸い主はやての魔法資質はほとんど闇の書の中だ 詳しく検査されない限りバレはしない」

「（それはそうかもしれないけど…）」

「つまり、私達と鉢合わせる事が無ければいいだけだ」

「（うーん 顔を見られちゃったのは失敗だったわ… 出撃した時 変身魔法でも使ってればよかった…）」

「今更悔いても仕方ない… 御友人のお見舞いの時は私達が外そう」

「（うん…）」

「後は主はやて、それから石田先生に我等の名を出さぬ様をお願いを」

「（はやてちゃん変に思わないかしら？）」

「仕方あるまい 頼んだぞ！」

「（待ってシグナム！実はテストロッサちゃんとなのはちゃん達が

写っていた写真に…キヨウスケ君も一緒に写っているのよ！」

「なんだと！？…どういうことだ？シャマル、神代は何か言っているのか？」

「（ううん…でもキヨウスケ君、あの認識阻害魔法がかかったメガネ掛けているから正体は隠しているみたいだけど）」

「…転校した先にテストロッサ達が偶然居た…というのが妥当か…」

「（あ、そうだわ！キヨウスケ君にそのメガネを借りればいいんだわ！）」

「いや、確か神代はメガネは一つしか作っていないと言っていた…我々の分を作ってもらうとしても今回は間に合わないだろう…変身魔法を使っても主はやてが不信に思われてしまう…それに万が一バレルという事があるかもしれないことだし、やはり我々は極力鉢合わせしないようにしよう」

「（うん…そうね、分かったわ）」

「後、一応神代に確認しておいてくれ

勿論念話ではなく携帯で…念話だとテストロッサ達に気付かれてしまうかもしれない…」

「（分かったわ）」

「では頼んだぞ！シャマル」

Side Out

再び八神家

シャマルSide

「さて、キョウスケ君に事情を聞かないと…ヴィータちゃんがこの写メ見たらどうなるかしら〜フフフツ」

シャマルは黒い笑みをうかべていた…

「いっ、ごほん！とりあえず電話ね〜」

ピッポツパツ！

トゥルルルル…ガチャ！

「もしも「キョウスケ君！コレはどういう事！？」ってシャマル、声がでかい！…ってコレって何だ？」

Side Out



その日の出来事はその日の内に報告しなきゃ (笑) (前書き)

ヤバイ…一日一回更新が滞りそうな…

その日の出来事はその日の内に報告しなきゃ（笑）

現在に戻り…

学校内

キョウスケSide

「もしも「キョウスケ君！これはどういう事！？」ってシャマル、声がかい！…ってコレって何だ？」

「まったく携帯から声がダダ漏れだぞ！？」

「何でキョウスケ君が管理局魔導師のなのはちゃんとテストロッサちゃんと一緒に写メに写っているのよ！？」

…は？

「なんで、って…クラスメートで（強制的に）友達にさせられたから…かな？」

「友達って…聞いてないわよ！？」



「え！？言つてなかつたっけ？」

確か転校した日になのは達に会つて、その日の夜にその事をシグナム達に一応言つ……………あ”っ！

確か…帰つたら何故かはやてとヴィータに正座させられ【お話】の為に【別荘】に強制連行されたんだ… 恐怖の余り記憶を封印してたんだ…ガクガクガクッ！

「…悪いシャマル、言おうと思つた日にはやてとヴィータに別荘に拉致られて忘れてた…」

「あ…、それは…仕方ないわよね」

キヨウスケ君 命の危機だったみたいだし…」

判つてくれるかシャマルっち！

「とりあえず管理局の方には僕の正体はバレてないと思つよ。認識阻害メガネもちゃんとかけてるしね」

「今日すずかちゃん達がはやてちゃんのお見舞いに来る時、キヨウスケ君も来るの？」

「…まあ、みんなと同伴で行くことになつただけ…」

「シグナムとも話したんだけど私達は顔がバレているから、はやてちゃんのお見舞いに来ている時は鉢合わせしないように席を外そうつて事になつたのよ」

で、キヨウスケ君はもしいはやてちゃんが私達の名前出しそうになったらフォローしてほしいのよ…勿論後ではやてちゃんや石田先生に

私達の事は言わないよう言っておくけど…」

まあ 原作では大丈夫だったが…何かあるか分からないしな

「わかったよシャル 何とかフォローするよ」

「お願いねキョウスケ君 それじゃ」

ガチャ、プープープーッ

さて、教室に戻るか…

放課後はやてのお見舞いイベントか

別に変な事はなかったよな

…シャルが怪しさ大爆発な服装で居た以外は…

…あれってシャルの趣味だったのだろうか？

密談は静かにしてこそ意味がある

教室前廊下

キョウスケSide

さて、やっぱり授業中だな〜…

よし！サボろう！

屋上で昼寝でもして…

ガラッ！

「遅いわよキョウスケ！！」

アリサに捕まった…ちっ！

「キョウスケ君！授業に遅刻は感心しないわね 高町さんにまで迷惑かけて」

なのはに代返頼んだのがバレたか…  
やはりなのはには荷が重かったか〜

… 今度超ネクタイ型変声機でも作って渡しとくか…

「さ、はやく中に入りなさい」

「ハイ、先生 すみませんでした」

教室に入ると、なのはがゴメンとジェスチャーしていたが…まさかホントに僕の声真似して代返したのか？  
僕が席に座ると

ツンツン

ん？フェイトか

「キョウスケ、どこに行ってたの？（ヒソヒソ）」

「どこ…って家の人から電話があったから（ヒソヒソ）」

「家の人ってキョウスケがお世話になってる？（ヒソヒソ）」

「うん、姉さんみたいな人かな？（ヒソヒソ）」

「何かあったの？（ヒソヒソ）」

「いや 帰りに夕飯の食材買ってきてと（ヒソヒソ）」

それは言われてないが、はやてが居ない食卓は死守しないと…特にシヤマルとか、シヤマルとか…って一人しかいないか？

八神家

「はくちゅん！ …風邪でも引いたかしら…？」

教室（授業中）

「ね、ねえキヨウスケ…よかったら私も付いて行っていいかな？私  
もリンディさんにお買い物頼まれていたからその…ね？（ヒソヒソ）  
」

何が【ね？】なのかはわからんが…

「まあ、別に構わないよ（ヒソヒソ）」

「ホント！？約束だよキヨウスケ…！」

あゝフェイトさん…周りの視線独り占めですよ？

「どうかしましたか？テストロッサさん？」

そりゃいきなり大声出して席立てば目立つよな

「あ、いえっ…な、何でもありません／＼…／」

恥ずかしそうに座るフェイト…顔真っ赤だな

「さ、授業を続けるわよ」

そしてその後は何事もなく授業が続いた…

…だが僕は、その時気付くべきだった…

殺意が籠った視線が3つあったことに…

S i d e O u t

まとめてエンカウント！

海鳴大学病院

キョウスケSide

とうとう来てしまった…

この4人娘と一緒ににはやての元へ…  
こりゃ一悶着ある予感が…

コンコン！

ってまだ心の準備があゝ！！

「はあゝい どうぞ」

ガラガラッ

「「「「「こんにちは」

「「「「「こんにちは」





「ほ、ホントなのなの？キョウスケ君！？」

パニくり過ぎだなのは

「…まあ、一応家主です」

と、はやての方を指指す

「はい、家主さんやで〜」

と何故ピースをしているはやてっ！

「え？え？でも、この前私が遊びに行った時にキョウスケ君の話をしたのに…はやてちゃん何も言ってないよね！？」

「ごめんなすずかちゃん…キョウスケ君とすずかちゃんが友達って事は前から聞いたったんよ  
でも…」

「「「「…でも？」「」「」

「面白そうやし、驚かそうと思って秘密にしとったんよ テヘッ」

「「「「「テヘッ じゃな〜い！」「」「」

みんな息ピッタリだな〜

「そこっ！変な感心しないの！…！」

だから心を読むなあゝ

「…ねえキヨウスケ君…キヨウスケ君は私がはやてちゃんと友達って知ってたんだんだよね？」

うっ、すずかから妙な気配が…

「まあ…はやてからすずかと友達になつたって聞いた時は驚いたが…ホントは以前の鍋パーティーの時に話す予定だったんだけど、僕だけちよつと参加できなくて…ごめんすずか」

そう言いながら僕はすずかの手を両手で握って謝る

「えっ！？う、ううん／＼／＼も、もう怒ってないからっ！だ、大丈夫だよキヨウスケ君！／＼／＼」

「ありがとう…すずか（ニコッ）」

「…っ！！？うゝ…／＼／」

すずかが許してくれたのはいいが…顔が真っ赤になっている…病院に来て風邪引いたらシャレにならないよな…ッ！？

「……………じーっ」「……………」

こ、これは！？？どす黒いオーラが病室を！？さらに殺気が籠った視線が5つ…つて5つ！？

えゝと…なのは・フェイト・アリサ・はやて・すずか…は顔真っ赤にしている最中だから違うよな？

じゃあもう一つは…誰？？

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

嫉妬とケーキと紅茶と？

はやて病室、外

?????Slide

「…恭介のヤロー、はやてとならともかく…他の女とイチャつきやがって〜!」

「ヴ、ヴィータちゃん落ち着いて…」

答えは病室をこっそり覗いているヴィータだった…

「私だって…私だって、恭介にあんなことやそんなことされてーのにーっ!」

ヴィータの理不尽な叫びがこっそり響いた

「落ち着いてヴィータちゃん!声が大きいわよ!それにこの作品、年齢制限ないから不用意な発言は控えないと!」

「うるせー!!作者の都合なんてするかー!!キスだって仮契約以來してねーのにっ!こーなったら…」

ヴィータは病室のドアに手をかけようとするが…

「だから落ち着いてってヴィータちゃん！

今入って行ったら私達の事があの二人にバレちゃうわー！」

「ガルルルル…ッ」

「どっどっ…」

「って！私は馬かつー！フンッ！」

そう言いヴィータは立ち去ろうとする

「ヴィータちゃん？どこに行くの？」

「……………狩り（ギロツ）」

「あ、し、蒐集ね？が、がんばってね」

シャマルはヴィータの目が据わっている事に気付き恐怖した…

（キョウスケ君…帰って来たら色々あぶないかもしれないわね…）

心の中で合掌するシャマルだった

後に確認すると、ヴィータの蒐集ペースがいつもの3倍だったとか…

Side Out

再び病室内

キヨウスケSide

うっ！…この黒い空間を打破しないと…

「な、なのは…確かお土産があるんだったよな？」

「あ、そうだった！これね家のケーキなの」

【ケーキ】の単語で何とか場の黒い空気は薄まった…ホッ

「そうなん！？」

「すっごい美味しいんだよ」

「ね」

「めっちゃ嬉しいわ」

「じゃあ僕は紅茶でも入れてくるよ」

そう言い僕は部屋を出ようとドアの前に…シャマルの気配はないな

たしか石田先生と話し中イベントか…

「あ、キョウスケ！私はミルクティーだから」

「あ、私も」

「私も同じのお願いしてもいいかな？」

「私はレモンティーがいいかな」

「ほな私はアップルティーな」

上からアリサ・なのは・すずか・フェイト・はやての順でオーダーが…

てか手伝えよ女性陣！？

Side Out

支える想いとパシリ君？

数分前

病室前

シャマルSide

シャマルはヴィータを見送った後も病室の様子を伺っていたが…

「シャマルさん？何やってんですか？」

はやての担当医の石田先生に声をかけられていた

「はっ！その、ちょっと気になりました…」

…シャマルは例のサングラスにコートという某笑っていいとも（火）のコーナーに出て来る外人と同じ怪しさ大爆発の恰好をしていた…

「中に入ればいいじゃないですか…というのは禁句なんですかね？」

「あの…ええっと…」



「フフッ」

病院、待合室

シャマルと石田先生は待合室の椅子に並んで座り語りだした

「変な言い方かもしれませんがはやてちゃんの主治医としてシャマルさん達には感謝してるんです 皆さんと暮らすようになってからはやてちゃん…本当に嬉しそうですから」

「……………」

「はやてちゃんの病気は正直難しいですが、私達も全力で戦ってます」

「…はい」

「一番辛いのは、はやてちゃんです でも皆さんやお友達が支えてあげる事で勇気や元気が出てくると思うんです だから支えてあげてください はやてちゃんが病気と戦えるように」

そう言いながらシャマルの手に自分の手を乗せる石田先生

「は、はいっ！…う、ううっ」

その言葉にシャマルは泣いた…

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

シャマルと石田先生の感動の話の間、主人公のキヨウスケは…

「ホントに誰も手伝いにこないし…」

キヨウスケの手にはトレイに乗った紅茶が6つ…

早い話がパシられていた

「うるさいよ作者!」

ナレーションにツツコムとは…まあがんばれ!主人公っ

「あゝはいはい…ったく」

コンコン!

ガラッ

「お待たせ、お茶持ってきたよ」

「おそいで！キヨウスケ君っ！」

開口一番それが…

「なら誰か手伝いにこいよ〜！」

「あかんで！お客様にそんな事させるわけにはいかへんよ」

「お客つて…まあ一応そうだが…」

「そんな事より早くお茶にしましょ！せっかくキヨウスケが入れてくれたんだし」

「にははは、そうだね〜、キヨウスケ君はケーキどれがいい？」

「あ、キヨウスケ私手伝うよ」

「あ、フェイトちゃん、私も」

みんななんだかんだ言つて一応気を遣つて手伝つてくれた  
…アリサは口だけだったか…

「あんた今何か失礼な事考えてなかった？」

「イエナニモ」

ちっ、相変わらず鋭いな

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

暴かれるキヨウスケのスキル…？

キヨウスケSide

「あ、この紅茶美味しい〜」

「ホントだ…すごく美味しいよ！キヨウスケ」

「うん、普段飲んでると一味違っつて感じたね」

「ま、まあまあね！」

「そんなんよ〜キヨウスケ君が入れてくると、お茶全般に及んで  
ごく美味しくなるんよ」

上からなのは・フェイト・すずか・アリサ・はやと（アリサは微  
妙だが）褒めてくれた  
まあ…特に紅茶に関してはこだわりがあるしね〜

「へ〜なんか意外だね〜」

「そうだね。ねえはやて、キヨウスケって家ではどうなの？」

をい、プライベートを聞くか！？フェイト〜

「そやな〜…家事全般手伝ってくれたりして助かってるな〜」

「へえ〜何か意外な一面ね」

「キョウスケ君ってそうゆうイメージないから」

「失礼な！居候なんだからその位当たり前だろ？それに…」

足が不自由な女の子に家事丸投げって…人としてどうよ？

「どうしたの？キョウスケ君？」

「いや なんでもないよ、なのは」

コンコン、ガラツ！

「はやてちゃん、そろそろお薬の時間よ」

「あ、石田先生。もうそんな時間やったんや〜」

「じゃあ私達もそろそろ…」

「そうだね」

「はやてちゃん、またお見舞いにくるから」

「お大事に、はやて」

「みんな、今日はホンマにありがとな〜」

「あ、はやて 僕も一回家に帰って夕飯の支度するから後でまた来るから何かリクエストある？」

「ほんなら…キヨウスケ君特製のスイーツを」

さつきケーキ食べたばかりなのに!?

「甘い物は別腹や!!」

「はあ…たしか前に作っておいたシャルロットケーキがあったな、それでいい？」

「うん 楽しみやな」

「……」

ん?どうしたみんな?鳩が豆鉄砲くらったような目をして

「えっと…キヨウスケ君ってスイーツも作れるの？」

翠屋としては気になるか?なのは

「ああ、作れるぞ?」

「あ、ちなみにキヨウスケ君の料理もプロ顔負けやで!」

はやてよりは劣るけどな

「…今日はキヨウスケの意外な一面のオンパレードだね」

「あんだ…もはや何でもアリね」

「キヨウスケ君の手料理…食べてみたいな」

「ん？まあ機会があれば」「」「ホント！？絶対よ！！」「」「つて全員かい！？」

「あらあら、キヨウスケ君人気者ね」（はやてちゃん頑張らないとキヨウスケ君盗られちゃうわよ）」

「！！！？…な、な、／／／」

？何かはやてが顔真っ赤にして口をパクパクさせているが

「どうしたはやて…風邪か？」

ん？石田先生が何やら驚いているな

「はあ…はやてちゃん、苦労しそうね」

「????？」

Side Out

はやてSide



「じゃあ後はお願いしますねシャルさん」

ガラツ、バタン

石田先生と入れ代わりに入って来たシャル

「お友達のお見舞いどうでしたか？」

「うん みんなええコやったよ 楽しかった また時々来てくれる  
て」

「それはよかったですねえ」

「ただな…」

「どうかしましたか？はやてちゃん？」

「薄々気付いてたんやけど…みんなキヨウスケ君の事が…」

「はやてちゃん…」

「…すずかちゃん達には悪いけど…負けへんで…！」

はやてから霸王並のオーラが放出された

「ふふっ キヨウスケ君って意外と鈍感にですからね  
積極的に  
アプローチしないと」

「せせせ積極的に…！」

そうシャルに言われ何やら考えているはやて…すると

考え中…

脳内演算終了

ボン！

「きゅうう〜っ／＼／」

「は、はやてちゃん！？しっかりして！」

何を妄想したか今までで一番真っ赤になり気絶したはやてだった…

「あ、あかん…あかんよキヨウスケ君、そんなトコ触ったら…デヘ  
ヘヘッ／＼／」

気絶したはやてが、ヨダレを垂らしながらアブナイ発言をしていた  
と後にシャルは語ったとか語らないとか…

「しっかりして〜！！ああ、石田先生ッ 早く来て〜！！はやてち  
ゃんが越えちゃいけない一線を越えちゃっ〜！！！！」

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

## 制服デートと告白と

商店街

キョウスケSide

はやてのお見舞いの後、

「あゝ 私これから塾行かなきゃ！」

と、アリサ

「き、奇遇だねアリサちゃん！私も今日はこれから塾があるんだ」

と、すずか

「ふ、二人とも大変だねゝ あ、私もお店のお手伝いしないとゝ」

と、なのは

アリサの迎えのリムジンで三人は一緒に帰って行って、今は僕とフ  
イトだけなのだが…なのは達、明らかに挙動不審だったよな…

「どうしたの？キョウスケ？」

「あ、いや何でもないよ」

「そっか、じゃあ早く行こう」

ギユ！

フェイトは僕の手を握って歩いていく

フェイトの横顔が赤かったのは気のせいかな？

### 商店街

さて今現在の状況を確認しよう

学校帰りの為二人とも制服

スーパーの買物カートを僕が押している

フェイトは何故か…そう！何故か僕の腕にピッタリくっついていて…

端から見たら制服デートすか!?

しかしこの状況…周りの視線が痛い!

ご近所の奥様たちは何やらヒソヒソ話しているし…

「あ、あのフェイトさん?なぜ腕を組んでいらっしやるんで?」

「え? だって、今日はスーパー混んでるし…それにこうすると何か安心できるから…キョウスケは嫌だった?」

いや、そんな悲しそうな目をされると…!!

「い、いや フェイトみたいな可愛いコに腕を組まれるなんて光栄かな(ニコツ)」

フェイトを安心させる為に言った台詞なんだけど、

「あう…/ / /不意打ちは反則だよ…キョウスケ/ / /」

何が反則かは解らないが…フェイトの顔が真っ赤になった…スーパーの空調の調子が悪いのかな?

「そ、それでキョウスケは何を買うの?」

「そうだな…今日はシーフードカレーとサラダにするかな。自家製のピクルスはまだあったし、後デザートにフルーツのカクテルゼリーでも作るかな」

「な、なんか凄く豪華そうだね?」

以前からデザート系は、はやてとヴォルケンリッター（女性陣）が必ず作ってくれて懇願されたからな

「フェイトは何を買うの？」

「えと、確かリンディさんからメモ貰ったんだけど…」

メモを見せてもらつと…牛乳 食パン 玉子等など  
まあ明日の朝食用かな？

こうしてフェイトと買物をしていたのだが…

「…ん？」

「どうしたの？キョウスケ？」

「いや、何か…視線を感じただけ…気のせいかな？」

「私は何も感じなかったけど？」

まあ小学生男女二人で普通に食材買っている光景って珍しいからな

）

S i d e O u t

???? Side

「あぶなかったわね…危うくバレる所だったわ」

「キヨウスケ君って何気に鋭いからね」

「乙女心には鈍いかも…」

「にははは…そうだね」

「あ!、フェイトったらまたキヨウスケにくつついて!?!」

「ずるいなフェイトちゃん…O H A N A S H I、しないといけないね…」

「な、なのはちゃん…?」

「あ、二人が移動したわ!行くわよっ!なのは、さすが」

「アリサちゃん!バレないように気をつけないと」

「キヨウスケ君もO H A N A S H Iなの…」

実はあれからキヨウフェイの後をこっそり尾行していた3人だった

「まったく…学校からフェイトの様子がおかしいとは思っていたけど、こーゆー展開になっていたとはね」



「あ、フェイトちゃんが腕組みながらキョウスケ君の手を繋いだ！  
！」

「しかもあれって恋人繋ぎってやつだよね…お兄ちゃんが忍さんとしてた…」

ブチ！x3

何かが切れる音がした

「「「ふっふっふっ…O H A N A S H Iだね（よ）（なの）」  
「」

三人の心は一致した

Side Out

キョウスケSide

買物も終り帰宅中

ゾクッ！

な、なんか寒気が!?

ガクガクガクツ!

ん? フェイトの顔が真っ青に…

「どうしたフェイト? 顔色悪いぞ?」

「あ、うん…何か急に寒気がして…」

「風邪か?…少し公園で休んでいこうか」

「…うん」

## 公園

僕はフェイトをベンチに座らせる

「ちょっとゴメンね」

「えっ?」

そう言い僕はフェイトに熱がないか額に手を当てて計る

「あう… / / /」

ん…少しあるかな?

「…ちよつと熱っぽいかな？今日ははやてのお見舞いや買物で疲れ  
たせいかな？」

「そ、そうかな／＼（これはキヨウスケのせいだよ）」

さて…と

パチン！

僕は周囲に認識障害魔法を展開した。（ネギまVer）

「っ！？結界？」

まあイキナリだから焦るよね

「フエイト…大事な話があるんだ…聞いてくれるかい？」

「き、キヨウスケ？」

僕は認識障害メガネを外す…

「えっ…！？ス、スコール！？え、ええっ！??」

さらにパニック状態だな

「うん…見ての通り僕はスコールとして君達の前に現れた…」

「キヨウスケが…スコール…」

「驚いたでしょ…それでどうする?…捕まえるかい？」

フェイトはジッとこちらを見つめて一言…

「…訳を聞かせてくれるかな？」

「…ああ」

そして僕はフェイトに色々と話した…

Side Out

To Be continued

協力者と乙女心…？

公園

キョウスケSide

あれからフェイトと色々と話した

「はやてが闇の書の主…」

「うん、はやて本人は知らないけど、今はやてはその闇の書の呪い…っていうよりバグのせいで身体を蝕まれているんだ…最終的には命が…」

「そんな！？何とか助けられないの？」

「ヴォルケンリッター達は闇の書が完成させればはやてを救えると思っっているが…完成された闇の書は主を飲み込み全てを破壊し、また転生する…」

フェイトは黙ってこちらを見ている

「だが：かなり分の悪い賭になるが、救う方法はある！」

原作でもはやては命は救われたが：それだけじゃ足りない！

「ならアースラの皆にも「ダメだ」っ、なんで!？」

「…ハッキリ言うが、僕は管理局は信用できない」

「ッ!？」

フェイトは驚いてるね〜

「理由が知りたいかい?…インフィ！」

『…よろしいのですか?』

「えっ!?!?声が?」

僕はポケットから指輪を取り出しフェイトに見せる

『初めまして…ですかね?マスターのデバイス…インフィニティです  
以後よろしくフェイト嬢』

「あ、うん こちらこそ…」

「さて、インフィニティ…今回の【闇の書】に関する管理局側の裏の情報を」

『はい』

インフィニティはある人物のデータを表示した

「グレアム提督!?!」

「そ!で、この人の良さそうな顔をしている人が今回の黒幕さ」

「ええ!?!」

「まあ、正確には…」

「一旦言葉を区切り…」

「はやてを殺そうとしている人物だ」

その言葉にフェイトは今日1番の驚いた顔をした

「そんな…グレアム提督が、闇の書をはやてごと封印しようとしてるなんて…」

証拠なら以前こっそりハッキングしたからかなり出てきたよ、以前別荘で製作した高速演算情報処理 ハイパーカリキュレーションシステム【A K】と、次元ネットワークコンピュータ【ORACLE】、こいつを使えばハッキングなんて朝飯前の晩飯さっ

…調べたら、管理局が知られたくない情報が山のように出てくるわ  
… 今回の事後処理の取引材料に使えるな

「ついでに言うと、この前フェイトを襲った仮面の男ってその男の  
使い魔：ロツテかアリアだから」

フェイトは信じられないといった感じで目を見開いていた

「あちらさんのプランは闇の書を完成させて、闇の書を覚醒した主  
ごと氷づけにし異次元に封印ってカンジかな そうすれば闇の書の  
転生機能も作動しないから」

「そんな…」

「アースラはグレラムと繋がりがあからね だから信用できない  
…でも」

「でも？」

「僕はフェイト・テストロツサという女の子は信用しているよ（二  
コッ）」

「あ…／／／」

「それにフェイトは…一方的にとはいえパートナーになったからね」

「えっ！？ パパパートナー！！？／／／」



フェイトがかなりテンパッているが？なんでだ？

『…いつか女性に刺されますよ』

…何か妙な電波が届いたような？

なんとかフェイトを落ち着かせ、僕は一枚のカード…フェイトの絵柄の仮契約カードを見せる

「私の…絵が？キョウスケこれは？」

「これが仮契約の証…パクティオーカードだよ」

フェイトはマジマジとカードを見つめる

「このカードには色々と能力があるんだけど、僕もまだ詳しく解らないんだ…分かっているのは、

カードに描かれている人物の所に転移出来る【転送機能】と呼び出す【召喚機能】…距離は持ち主の魔力によって左右されるけど…分かっているのはそのくらいかな。それじゃ…」

僕はカードを掲げ…

「Divide」  
分割

パアア！

カードを複製つと

「これをフェイトに…」

分割したカードをフェイトに渡す

「…ありがとうキョウスケ／／」

「どづいたしまして」

「ね、キョウスケがこのカード作ったんだよね？」

あゝまあ 作ったというか…

「…この仮契約カードってある条件を満たせば作れるんだが…」

「条件？どんな？」

「以前砂漠で倒れた時の事って聞いてる？」

そう聞いた途端フェイトの顔がまた真っ赤に

「う、うん…／／リンディ提督が教えてくれた／／」

「仮契約の条件って…キスだったんだ

ごめんねフェイト」

「あ、そ、そんな！謝る事ないよ！！あの時は私が危険な状態だつて聞いたし、キョウスケは私を助けてくれたんだよね」

「う、うん」

「そ、それに…初めてがキヨウスケでよかったし（ボソツ）」

「ん？何？聞こえなかったけど」

「あ、ううん！なんでもないよ！」

凄いいで首をブンブン横に振っているフェイト…頭取れないか心配だ…

「それで、キヨウスケ…キヨウスケは…はやてを助けるんだよね」

「…うん、必ず」

「なら私も手伝う…友達が危険なのを放っておけない！」

「ありがとうフェイト…」

「それで、キヨウスケはどうやってはやてを助けるの？」

まあ 基本は原作と同じかな 前々から仕込みはしているが…

「…闇の書を完成させる」

「えっ！でもさっき…」

「完成させると主は闇の書と融合…【ユニゾン】状態になる…僕たちはその【闇の書の意志】と戦闘になると思う…」

「はやてと戦うの？」

「正確には闇の書の暴走した防衛プログラムとね…ここからが賭なんだが、闇の書の意識内にいるはやてに闇の書の管理者を説得してもらおう」

で、説得して管理者権限発動したはやてに闇の書と暴走した防衛プログラムを切り離してもらい同時にはやてを救出！

そして最終フェイズ…僕らでその暴走プログラムを消滅させる」

大まかな流れは変わらないな〜不確定要素がなければ

「…完成前に何とかならないの？」

「…闇の書には転生機能があつてね 完成前に何とかしようとしたらその時点ではやてを飲み込み転生してしまう…まったく誰だよ！あんな風に改変したのは！」

たしか…旅する機能を転生機能に、修復機能を無限再生ってどんなマ改造だよ！？」

「キョウスケ…私は何をしたらいいかな？」

……アレ？

「…いや、特にないな」

コテツ！

あ、フェイトかコケた

「ち、ちょっと！何もないうって…」

「あゝ…最終的にはフェイトにも協力してもらおうよ？ただ、それは【フェイト達とスコールが協力】って形にしたいんだ」

「????？」

「フェイト、君は【ジュエルシード事件】で裁判を受けたよね…一応無罪になったけど」

「えっ！？何でキョウスケが知ってるの？」

原作で…とは言えんから

「ハッキングした時ちよつとね…それで、一応管理局に保護監察受けているフェイトがここでまた敵側の僕に表立って協力したら…管理局から裏切り者扱いされ立場悪くなるでしょ？」

「……………」

「だから、今後もスコールとしてフェイト達の前に現れても今まで道理敵同士って振る舞って…」

まあ最終決戦時に協力関係によってカンジがベストなんだけど」

「…うん、分かった」

多分その時になのは達にも正体バラす事になりそうだしな

「キョウスケ…一つお願いがあるんだけど…いいかな？」

「お願い？まあ無茶じゃなければ…で、何かな？」

「えっと…その…／／／」

なにやらフェイトは指先で自分の髪をモジモジさせているが？しかもなぜか顔を赤くして…

「あの…ね／／…キョウスケとちゃんと仮契約したいの！」

…はい？

「え？仮契約はちゃんと出来ているが？」

カードもちゃんとあるしね

「ちがうの…今度はちゃんと…自分の意志でキョウスケとしたいの／／」

『くくっ！ホントモテモテですねマスター』

え〜と…これってやはり

『そうですよマスター』

…マジ!??

Side Out



追跡者とキスと仮病と？

少し時間を遡り…

公園前

??? Side

「あの二人…相変わらずべったりくっついて…!!」

「あ、アリサちゃん！二人が公園に入っていくよ！」

「ぬぁんですって!?!なのは!?!すずか!?!いくわよ!?!」

「もちろん!」

「なの!?!」

相変わらず尾行を続けていた三人娘でした



公園内

「ああ！！キョウスケがフェイトのおでこに手を当ててる！？？」

「いいなあ〜フェイトちゃん…ね、なのはちゃんもそう思…」

「……………」

すずかは見てはならない友人の姿をみたそうな…

パチン！

「ん？今何か音しなかった？」

「えっ！？そ、そうかな？気付かなかったけど…」

「フェイトちゃんとキョウスケ君…何話しているんだろっ？」

「こっそり近付くわよ…」

「ええ！？だ、大丈夫かな？」

「なのは！あなたは気にならないの！？？」

「うっ…気になる」

「だったら行くわよ！」

「アリサちゃん…そーっとだよ？」

こうして三人娘は二人に接近中…

Side Out

キョウスケSide

「ちがうの…今度はちゃんと…自分の意志でキョウスケとしたいの  
！！！！」

「え〜と…それって…」

コケン

フェイトは頷きジッと見つめてくる…

「キョウスケ…」

スッ

目を閉じてフェイトが顔を近づけてくる…ってこのパターン前にあ

ったような…

って考えている内にフェイトの唇まで後数ミリって…っん!?

「ん…んっ…」

「んん…んっ…ん!?!」

フ、フェイトも舌を!?!

「んむっ…んっ…」

「んくっ…んんっ…!」

数分後

「……………//」

「……………//」

な、なんか気まずい…冷静に考えてみれば小学生があんな…深いキスするのって変だろ!?!  
別にロリコンじゃないって…!

『マスター…余韻に浸っている所まことに恐縮なのですが…』  
別に浸ってない！

『なのは嬢達が接近中ですよ？』

……は！？なんだって〜！！？

『一応認識疎外魔法を強化しましたからフェイト嬢とのキスシーンは見られてませんよ』

「あう…／／／」

インフィの台詞に更に赤くなるフェイトさん

「まあ…いろんな意味で助かったが…ハア…」

この場をどう乗り切るか

『では結界を解除します』

スッ

「…その三人娘！出てきたらどうだい？」

ガサガサッ！

「なんだ、バレてたのか」

「じゃははは…」

「だからそーっとって言ったのに」

公園の植え込みからアリサ・なのは・すずかが現れた…ホント間一髪だったな…

「で、三人とも…塾や家の手伝いはどうした？」

「「「うっ…」」」

「まさか…後をつけていた？」

ジト目でなのは達を見る

「た、たまたまよ！たまたま三人とも予定が無くなって、たまたま一緒になってたまたまアンタ達を見かけたただけなんだから！」

アリサよ…もう少し考えて発言しようよ

「あれ？フェイトちゃん…何で顔が赤いの？」

ギクツ！

「ななななんでもないよなのはっ！」

うわ…動揺しまくりだよ

「…キョウスケ、アンタ何かしたの？」

ギクツギクツ！

「…ナニモシテナイヨ？」

「なんで片言なのよ！？しかも疑問形！？」

「ここはごまかさないと！」

「フェイトの体調が悪いみたいで…少し休憩していたんだ」

「えっ！？大丈夫フェイトちゃん？」

「う、うん…大丈夫だよ、すずか」

「フェイトちゃん、今日は早く休んだ方が…」

「そうだね、荷物は僕が持つから。悪いけどなのは達はフェイトの付き添いお願いできるかな？…尾行するほど暇だろうし…」

「」「うっ…はい…」「」

こうして僕らはフェイトを送っていくことになった

Side Out



アマゾネスな少女たち？（前書き）

書いてて砂糖吐きまくったな



アマゾネスな少女たち？

マンション、フェイト部屋

キョウスケSide

おかしい…

確かフェイトを体調不良（嘘）で送っていったが…

「はい、次は私の番だよ」

「あ、ああ…じゃあはい…あ！」

「揃った〜ありがだね」

「くっ…ババがあ〜」

現在フェイトの部屋にてなのは達とババ抜きをやっています…

回想

ガチャ

「ただいま〜」

「……お邪魔しま〜す」「……」

「……やっぱりまだ誰も帰って来てないみたい」

「アルフさんはいると思っただけけど……」

「フェイトちゃん、早く横なっただ方がいいよ」

「ありがとうすずか……もう大丈夫だから」

「う〜ん……私達が帰ったらフェイト一人になっちゃうし……よし！私達でフェイトを看病しましよ……！！」

「えっ、そんな！？悪いよアリサ」

「友達なんだから気にしない！」

「そっだよフェイトちゃん」

「あ、私お買い物した物を冷蔵庫に入れておくれ キョウスケ君、フェイトちゃんの買い物袋貸して」

「…ああ、じゃあこれ」

…なんか大事になってきたな…まあ フェイトとキスしたのがバレルのに比べればマシだけど

### フェイト部屋

「本当に大丈夫？フェイトちゃん…」

「うん、大丈夫だよなのは…元々大したことないし」

「ねえ、せっかく皆いるんだし…何かして遊ばない？」

「そうね…フェイト、何かある？」

「たしかトランプならあるけど…」

「じゃあみんなでババ抜きでもしようか？」

「まったく！ただババ抜きするんじやつまらないわ！…そうね、ビリだった人は勝った人の言う事を何でも聞くってのはどう？」

「うわ…なんか面白そうだね」

「決まりね…じゃあやりますよっか」

回想終了

で、結果僕が負けました…

「さあて…ビリになったキョウスケに何をお願いしようかしら」

くっ…アリサの口元が悪魔のように三日月型につり上がっている

「なるべく穏便に…」

「じゃあ…わ、私を抱きしめなさい！／＼／」

「」「」「……」「」「」「」

はい？

「えっと…ゴメンアリサ、耳がおかしくなったみたいだ…悪いがもう一回言ってくれないか？」

「だ、だから！私をギュって抱きしめなさいって言ってるのよ！！  
／＼／」

「」「ち、ちょっと待ったー！！」「」「」

うお！？なのはたちが凄い形相でアリサに詰め寄ってる！

「な、なな何言っているのアリサ！？」

「そつだよ！アリサちゃん！！」

「アリサちゃん、抜け駆けはするいよ」

フェイト・なのは・すずかがアリサを説得中…頑張れみんな！アリサの野望を阻止してくれっ！

「何言ってるのよ！アンタ達も頼めばいいじゃない！」

「…あ、そつか」

速攻で懐柔された！僕に味方はいないのか！！？

「じゃあ…キョウスケ は、はやくしなさいよ／／／」

はあ…どうせ拒否権なんてないんだろうな… サクッと済ませよ…

ギユ！

「あ…／／／」

しばらくアリサを抱きしめ…

「…ハイツ！終了了！！」

なのは達が乱入した

「ちよ…早いわよ！？」

「…持ち時間一人30秒！」

「いつ決まったのよ！そんなの!？」

「「「今だよ!！」」」

…はあ、数時間前のシリーズは何処へ…

「じゃあ…次は私だねキョウスケ君…／／／」

そう言いなのが前に出てきた…てか、みんなお願い同じかいっ!？」

「あ、ああ…じゃあ」

ギョ!

「ん…／／／」

…「っするとなのはって華奢なんだってよくわかるな…

「「「ハイツ!終了了!！」」」

「えゝまだ早いよゝ」

「「「早くないっ!！」」」

「ぶゝ…」

渋々なのはは従ったが…ああ、僕の理性が削られていく…

「じ、じゃあ次は私だねキョウスケ君…／／／」

さすががモジモジしながら僕の前に立つ

「うん…」

ギユ！

「っ…／／／」

緊張しているのか小刻みに震えてる…恥ずかしいなら頼まなければいいんじゃない？

「っっハイツ！終了了！！」「」

「……／／／」

うっ、さすがの顔が真っ赤だ

「じゃあ…最後は私だねキョウスケ／／／」

フェイトとは、ついさっきキスしたばかりだから…なんか変な感じだな…

ギユ！

「あっ…／／／」

…フェイトの匂いっていい香りだな…ってヤバイ！理性がああ！

チュ！

「「「あー！ー！ー！！！！」」」

「フ、フェイトノノ！？」

「えへへ／／／」

フェイトが僕の首筋にキスを！？つかフェイトってこんなキャラだ  
ったっけ！？

「フ、フェイト！！ああんた何してんのよ！？」

「ず、ずるい！フェイトちゃんばっかり〜！！」

アリサとすずかが猛抗議…ってあれ？なのはは？

「…フェイトちゃん…ちょっといいかな…？」

なのはの感情がない表情に戦慄した…

「え…な、なのは？ち、ちょっと！？」

ガクガクガク！×2

背後でアリサとすずかが恐怖で震えてる…ってこれはさすがにマズ  
イか…仕方ない、背に腹はかえられない…

「…なのは」

「ナニカナ？キョウスケケン…？」



僕は人差し指を自分の唇に当て、その当てた場所をなのはの唇に触れさせた

ピトッ

「ふえ／＼／！？」

まあいわゆる間接キスですね

『（流石！我がマスターです。ようやくハーレム作る決心が！？）』

電波はスルー！

「キ、キョウスケー！！あんたドサまぎで何してんのよ！！？」

「そ、そうだよ！いきなりなのはちゃんに…その…／＼／」

…だって、あのまま放っておいたらフェイトの命が危なかったし…  
マンション半壊させる訳にもいかないじゃんか…

「……………／＼／」

なのはからはダークオーラは消えた…が、

「わ、私達にもしなさいよ／＼／！…！」

「なのはちゃんやフェイトちゃんだけはするいよ／＼／」

今度はアリすずの二人からダークオーラが…

「キョウスケ…」

「な、何かな？フエイ…」

ドンッ！ドサッ！

痛つつ…フエイトがいきなり抱き着いて来た！？

僕は態勢を崩しフエイトのベットに押し倒され…って、なにいい！？ベットにだと！？

「「「あー！！」「」」

三人娘が大声で叫んだ！ てか何この状況って！？

「キョウスケ…一緒に寝よ」

そう言いながら体を密着させてくるフエイト…ってフエイトの目が普通じゃない！？

「ち、ちよつと待てフエイト！まず落ち着こ」「私と一緒に寝るのよー！」「ってあんたらもまず落ち着けー！」

ドサッ！ドサッ！ドサッ！

「ぐっ！？」

く、苦しい…みぞおちにクリーンヒットした…

ガチャ

「ただいまフェイトさん？」

「……………」

リンディさんご降臨…

「どうしたんです艦長…あら、これはこれは…お邪魔だったかしら？」

エイミーさんも降臨しました

「エイミー、今日はお赤飯にしなくちゃ」

「ハイッ 艦長！」

「ち、ちよつと待って下さい！二人ともー！！」

「……………」

バタン！

ああ…二人とも出て行ってしまった…

「……………キヨウスケ（君）／／／……………」

「よ、四人とも落ち着け！！そしてなのは！服を脱ごうとするな！フェイトも僕の服を脱がそうとするな！！」

その後しばらく、四人にもみくちゃにされてました…精神的ダメー  
ジが…あ!!..!

もちろん何もしてないですよ？基本の身体小学生ですから

『小学生でなければ何かしたと？』

「……………多分」

S i d e O u t

## 家事能力と花婿要素？

キヨウスケSide

何とか…あのカオスな部屋から脱出した僕が見たのは…

キッチン

「あら、意外に早かったわね？」

ホントに赤飯作っていたリンディ&エイミーが居た…orz

「てか止めてくださいよ！二人とも一応保護者でしょ！？」

「だって面白そうだったから（笑）」

（笑）じゃないっすよ！！リンディさん！！！！危うく18禁になる所だった…

『（十分に18禁では？）』

否！断じて違うー！…多分？

「キヨウスケ君、フェイトちゃん達はどうしたの？」

「ああ、みんななら…」

ボタン！

「…キヨウスケ（君）ひどいよー！…！」「…！」「…！」「…！」

「…なるほど…プツ！」

四人娘の姿を見たエイミィさんは納得した

「フェイトさ…ププツー！」

「エイミィ！リンディさんまで…笑わないで下さいノノノ！！！」

「だ、たつて…ねえエイミィ？」

「そ、そんな恰好で笑うなって方が無理だよ！アーハツハツ！だ、ダメ！お、お腹がねじれるツ！」

えゝ 皆さんに四人娘の状況を説明すると…

布団で簀巻きになってます

「キョウスケ！いいから解きなさいよ！」

まあそろそろ大丈夫だろ…

リビング

「まったく…酷い目にあつたわ」

「キョウスケ君ってあーゆるー風に縛る趣味があるの？」

「いやいや！無いって…！」

誰だ！？なのはに变な知識入れたのは！？

「さあ、とりあえずお茶を入れたからどうぞ」

リンディさんがお茶を入れてくれ…

まてよ…

もしかして、あの緑茶に砂糖が入ったあの伝説の『リンディ茶』か  
！？

「キョウスケはお砂糖いくつ？」

「って、フェイトさん！何普通に緑茶に砂糖入れようとしてるの！？」

「さ、砂糖は遠慮しておくよ……」

「そう言うとフェイトは残念そうな顔をしていたが……すまん！さすがに無理だ！」

「じゃあ…なのはは？」

「ふえ！？わ、私も大丈夫だから」

「じゃあアリサ……」

「私もいらないわー！」

「すずかは……」

「大丈夫だよーフェイトちゃん」

全員に拒否られた

「…美味しいのに（ボソッ）」

とりあえずリンディ茶の洗礼は受けずに済んだ

「そういえば、さっきはやてちゃんの所でキョウスケ君が入れてく



れた紅茶すごく美味しかったよね。」

「…たしかにね、悔しいけど家のメイドが入れるのより美味しいかもね。」

「すずかとアリサはそう言っているが…別に普通と思うが？」

「あら、もしかしてキヨウスケ君は家事得意なのかしら？」

興味深々でリンディさんが聞いてきた

「まあ、得意かどうかは分かりませんが人並みにできますよ？」

「キヨウスケ君…。」

「ん？どうした？なのは

「それって私達が人並み以下って聞こえるよ！」

「え！？なのは達も炊事洗濯くらいできるだろ？」

特に女の子なんだからそーゆーのは…

「アンタの場合、スペック高すぎんのよ！！」

アリサが怒りながまら叫んだ…家事なんて、はやてに比べたら僕なんてまだまだだよ？

「ふふ、これは優良物件ね　そう思わない？フェイトさん？」

「な、ななに言ってるんですか／＼！？」

フェイトが赤くなり凄く動揺してる…優良物件って何だ？引越すの？

「リンディさん…キョウスケ君はフェイトちゃんの…じゃありませんカラ…」

ゾクッ！

な、なんか部屋の温度が5度下がったぞ！？

「そ、そうね…ごめんなさいね、なのはさん」

なのは以外は冷や汗ダラダラだった…

…これってなのは魔王化進行中！？

しばらく平和的な談笑をした後…

「さて、僕はそろそろ…」

「えっ！？もう帰るのキョウスケ？」

「家族のみんなの食事の準備はやての所にもまた行かないといけ

ないからね」

食事に関しては最優先事項だな…シャマルが絡んだら…入院人数増えるし

「そっか…仕方ないね」

「あ、キヨウスケ君！私の家の車で送ろうか？」

「あ、大丈夫だよ　すずか。」

こっそり転移していくからね

「キヨウスケ君、はやてちゃんによろしくね」

「また今度お見舞いに行くって伝えておきなさいよ！」

「はやてちゃんに早く元気になってねって伝えてね」

「ああ、伝えておくよ」

そう言い、僕は席を立ち…

ポン！

「あ、キヨウスケ」

フェイトの肩に手を置いた

(フェイト、聞こえる?)

(えっ!?! 念話?)

(正確には接触念話かな?これなら念話を傍受されないからね)

(そっか…ふふっ、今日はキョウスケに驚かされっぱなしだね)

(まあ、そうだね。…闇の書の事だけ…)

(うん、分かってるよ みんなには秘密にしておくね …キョウスケ、もし私に出来る事があったら何でも言ってみてね?私…キョウスケの力になりたいんだ…)

うう、カワイイ事を言ってくれるね…お持ち帰りしたくなる…ハッ!?僕は一体何を!!!?

(…うん、その時は頼りにしてるよ)

(うん!まかせてノノノ)

フェイトとの協力は取り付け…ん?

ジーーーーッ

何か視線が…

「キョウスケ君…?何さつきからフェイトちゃんと見つめ合ってるのかな?かな?」

しまった!?!端から見たらジッと見つめ合ってるようにしか見えな

かった!!

し、しかもなのは目が単色に!?

「ふゝん…キヨウスケ君とフェイトちゃん…いつの間に」

すすかの目も単色に…って、今すすかの口元からキバみたいなのが  
一瞬見えたぞ!?

「キヨウスケ!ちょっとアンタ説明しなさいよ!」

アリスは目は単色になっていないが…仁王が背後に見えます…

「がんばって」

リンディ&エイミーさんは助ける気ゼロで手を振っていらっしやる  
し!??

「アハハ…し、失礼しました」

僕は脱兎の如く逃げ出した…一瞬本気で瞬動を使おうかと考えた…

ホント、超怖い…

Side Out

フェイトSide

キヨウスケが凄い勢いで出て行ってしまった…  
確かに今のなのは達は怖い…

「キヨウスケ君、凄い早さで逃げちゃったね」

「大丈夫よすずか…こっちにもう一人居るから…ねえフェイトおお  
お？」

えっ！？わ、私！？

「…そうだね、キヨウスケ君には逃げられちゃったけど…フェイト  
ちゃん、OHANASHI…聞かせてくれるかな？」

「アハ、ハハハ…」

…超怖い

キヨウスケ…私ダメかも…

Side Out

おまけ

「艦長は誰がキヨウスケ君の彼女になると思います？」

「そうねえ…私としてはフェイトさんを応援したいけど…地域によつては【一夫多妻制】って許可している世界もあるのよね…」

「あゝ…キヨウスケ君見ているとそんな未来がリアルに想像できるから怖い…」

「まあ…それはそれで面白そうね」

「アハハ…」

「ところで、エイミイはキヨウスケ君争奪戦には参加しないの？」

「わ、私ですか！？流石に年下すぎるといっつか…手を出したら犯罪っばいですし…でも、優良物件なのは確かですからね…」

そんな談話がフェイトと霸王三人との O H A N A S H I の裏で行われていたそうなの…？





ナデナデは程々に

八神家

キヨウスケSide

ガチャ!

「ただいま」

シーーン

誰もいない?

あ、そうか! シャマルは確かはやての付き添い、シグナム・ヴィー  
タ・ザファイラは蒐集に行っているんだっけ。

まあ今日はみんなも一度戻るって言っていたからな… 夕飯の支度で  
もしてるか

キッチン

「…?」と、カレーはこれでいいかな? 後は… ブロッコリーの  
ピクルスの瓶詰めをカートに乗せてつと ゼリーは後は冷やすだけ

だからな〜」

ガチャ

「「ただいま〜（帰りました）」」

「お帰り！シグナム、ヴィータ」

つてシグナムが凄いい勢いで迫ってくる！？

「神代、病院ではどうなった？」

あ〜…シグナム達は詳細は知らないんだよな

「ああ、とりあえず管理局にはバレないようにしたよ」

…そう【管理局】にはね〜 フェイトの事はまだ秘密にしないとね  
〜…

「そつか…なら良いのだが」

「恭介！今日の夕飯はカレーか！？」

速攻食欲か！？ヴィータさん！

「ああ、今日はシーフードカレーだよ…もちろん辛さを控えめにしているから」

ヴィータ用に合わせてね

「こ、子供扱いすんじゃないー!!」

「おや？誰もヴィータに合わせてとは言っていないが？」

まあ 実際はそうなんだけど

「くっ… / / ま、まあ私は大人なんだ、その位許してやるか」

なんかシグナムが笑いを堪えているが…

「じゃあ大人のヴィータさんをお願いがあるんですが、食卓に食器並べるのをお願いできるかな？(ニコツ)」

「お、おうつ！任せとけ！… / / /」

胸を張って答えるヴィータ…何故か顔が真っ赤になっていたような？

「あ、シグナム 悪いが少し留守番頼むね」

「それは構わんが…どこか行くのか？」

「はやてに届け物をね ケーキを持っていくって約束したから」

「何！？ケーキもあんのか!？」

ヴィータが凄い早さで戻って来た

「あゝ昨日作ったシャルロットケーキだよ…まだ冷蔵庫にあるから食後にね。後さっき作ったフルーツのカクテルゼリーもあるよ」

「うっしや！今日は豪華だな！」

ヴィータがえらくご機嫌だ

「それはそうだろう。神代の作るスイーツは主も認める美味しさなのだ……」

シグナムもどこかご機嫌なような？

「そう言ってくれると作り甲斐あるよ。さて、じゃあはやての所に行ってくるね」

「あ、そーいえばシャマルもはやてに付き添ってるんだよな？」

あ、忘れてた……

「はは……じゃあもう病院も消灯時間だし、ついでにシャマルも迎えに行ってくるよ」

僕は転移魔法を展開……

「ち、ちよつと待て神代！ 転移魔法で行くのか？」

そうだけど？

「管理局に転移反応でバレないのか？」

「ああ、僕の術式は特別製だから大丈夫だよ」

プリズムファントムの応用で隠密性は高いっすよ？

「そ、そうか…いや 今更だったな」

「シグナム…恭介に私らの常識は通用しねーよ」

それは褒めてるのか？ ヴィータ？

「じゃあ…すぐ帰ってくるから」

シュン！

はやて病室

シュン！

「きゃ！？」

「な、なんや！？」

あ、急に現れて驚かせちゃったか？

「や、はやて！ 数時間ぶり」

「き、キヨウスケ君…もう驚かせないでくださいよ」

シヤマルのサーチに引つ掛からず現れたからね

「キヨウスケ君…病人なんやから気いつけてな…心臓に悪いわ」

「あはは ごめんはやて。あ、これ頼まれてた本と御所望のシャルロットケーキです。オマケでフルーツのカクテルゼリーもあるよ」

「ホンマか!? ありがとなキヨウスケ君」

「夕飯はもう食べたの?」

「うん…ただ、病院食ってあんま味気のうてな…」

「味にこだわるはやてシェフとしては物足りないと?」

「うん、そやね…って ちょいまち! 半分はキヨウスケ君の作る料理のせいでもあるんやで!」

「おや なら責任取ってそのスイーツは回収しないと?」

「う… いやや! 後生やからそれだけは!」

まあ、はやて弄びはこのくらいにして…

「冗談だよはやて」

「ほ、ほんまに?」

「ホントだよ…まったく大袈裟な」

「そんな事ない！キョウスケ君が私の為に作ってくれたんや…そんな位の価値あるんよ」

うっ／／ カワイイ事言うな…思わずグツときてしまった…

…ただ、はやての為だけではないんだが…水をさすのも悪いか…

「…ありがとう、はやて（ニコッ）」

「ど、どういたしまして…／／／」

…？はやての顔が真っ赤に？…風邪も併発か？

「あの～二人してラブラブ空間に入らないでください～ 一応私も居るんですけど～？」

あ、すっかり忘れてた…

「い、ごめん！ってかラブラブ空間って何さ！？」

「そそそやシャマル！何言ってるんや／／／」

「あら、私を空気にして二人仲良くしていたからってっきり」

「……………／／／」

シヤマルもはやて弄びまくってるし…

『（マスターも弄びの対象なのですが…）』

コンコン、ガラッ！

「はやてちゃん、そろそろ消灯時間だから…あらキョウスケ君？いつの間に来ていたの？」

「あ、石田先生 さつきですよ。はやてに届け物があったので」

「…はやてちゃん、甘い物は程々にね」

「はあい…」

「シヤマルさん、キョウスケ君 そろそろ消灯時間ですから後は我々に任せて下さい」

「あ、はい わかりました。はやてちゃん…それじゃ私達は帰りますね 明日また来ますから」

「うん…」

うん…はやてのテンションがた落ちだな

「はやて、なのは達もまたお見舞いに来てくれるって。もちろん僕も来るから安心して、ね」

ナデナデ



そう言い僕ははやての頭を撫でた…

はやての髪って撫でると気持ちいいな…

「ん…絶対やで／＼／」

「ねえシャマルさん、彼はいつもああなの？（ヒソヒソ）」

「え、ええまあ…キョウスケ君、鋭いようで鈍いですから（ヒソヒソ）」

「「……………はあ」「」

何か後ろで深いため息が聞こえた…ような？

まあいいか 僕ははやての頭から手を放すと

「あ……………」

って何故この世の終わり見たいな顔するんです!？

…もう一回

ナデナデ〜

「あっ…／＼／」

…放す

「あっ……………」

もう一回…

ナデナデ〜

「あん……ッ／＼」

…やべえ、はやての反応見てるの楽しくなってきた

「キョウスケ君…／＼」

ん？はやての目がとろんとしてきた…

「ゴホン！二人とも、そーゆーのは二人っきりの時にしなさいね」

石田先生のツツコミで現実に戻された

「！……ッ／＼」

はやては我に帰ったのか俯いてしまった…頭から煙りが出ているが…撫ですぎたか？

「はは、すみません。つい…」

シヤマルも真っ赤になってこっちを見ていた…何故？

「何故って…キョウスケ君って…ハア」

何故そこでため息を！？

「じゃあはやてちゃん、私達は家に戻りますね」

「う、うん…ほならまた明日な キョウスケ君も…//」

「?ああ、また明日」

ガラッ!

僕とシャマルは病室が出て帰宅（転移）の準備をした

「なあシャマル、はやての顔が真っ赤だったが何かあった？」

「…キョウスケ君、少しは自覚しましょうね…」

と呆れ顔で言われた…

まあ いいか

「じゃあシャマル、家に帰るか。ヴィータ辺りが「お腹空いた」って騒いでいそっだし」

「ふふ、そうですね」

シュン!

Side Out



## スイーツ争奪戦と活動方針

八神家

シュン！

「ただいま〜」

「ただいまかえりました〜」

僕とシャマルが転移で家に着き、目の前で見たものは…

「恭介〜…腹減った〜…」

「ヴィータ！はしたないぞ！」

「……………」

予想道理の発言をしたヴィータに注意するシグナム、無言で犬モ―

「…狼だ」…狼モードのザフィーラが居た

「お腹空いたなら先に食べててもよかったのに」

「いやなに ヴィータが神代と一緒に食べ〜わーわー！な、なに言

ってやがる！シグナムッ！！」…どうしたヴィータ？事実ではないか？」

「うっ…／／／」

ヴィータが真っ赤になってるな

「はは、ありがとうヴィータ（ニコッ）」

「そ、そんな事より早く飯にしようゼッ／／／」

「？ああ、そうだね」

## リビング

「………いただきます」「……」

テーブルにはシーフードカレーとサラダ、自家製のピクルスにフルーツのカクテルゼリーが人数分並んでいる

ザフィーラはい…狼モードのままが良いとの事だったが…ホントに犬化してないか心配だ…

「カレーの出来はどうか？」

僕は感想を聞いてみる…まあ全員の顔が嬉しそうに輝いているのが  
答えだと思っが

「ああ、ギガうまだぜ！」

「辛過ぎないかな？」

「ん、ちょうどいいぜ」

ヴィータには好評だ

「シグナム達は？」

「一応辛さ控えめに作ったからな」

「いや、ちょうど良い。大丈夫だ」

「ええ、私もこの位で大丈夫ですよ」

「……………」（コクッ）」

みんなにも好評のようだ

「神代の料理はいつも美味しいな。すまんがブロッコリーのピクルス、  
まだあるか？」

「ん、まだあるよ。…はいシグナム」

「すまん」

「恭介っ！ドレッティング！」

「あゝはいはい、ちょっと待ってね〜」

「うふふ、何かキョウスケ君がお母さんみたいね」

シヤマル…それは多分褒め言葉ではないぞ？

「あら そっね」

「このゼリーもメチャクチャうめーな！」

「ホントね〜 …キョウスケ君、今度作り方教え〜」「やめる！シヤマル！！死人が出る！！」「酷いわ！シグナム、ヴィーたちちゃん…グスッ」

シグナム達の制止にシヤマルは涙目だ…

まあ…シヤマルが作るとゼリーがバブルスラムになりそうだから怖い…



「はい、まだお腹の空いている人は？」

僕がそう言つと

「はい！はいはい！！」

ヴィータが勢い良く手を挙げだ

「ヴィータちゃんつたら…実は私も…」

シャルルの手も控えめに上がった

「じゃあ昨日のシャルロットケーキが残ってるけど、食べるよね？」

コクコクコクッ！

ヴィータとシャルルは勢い良く頷いた…

「シグナムも食べるよね？ザフィーラはどうする？」

「……………我はいい」

うん…男性だから甘い物は苦手なのかな？

ちなみに僕は激甘党だから平気だけど…でもリンディ茶は例外だから！

「うっし！じゃあザフィーラの分は私がもらうな！」

「ヴィータちゃん、ずるいわよ。ここはジャンケンで…って何シグナムもサラッと参加しようとしてるの!?!」

「い、いや…勝負事となれば私も参加したくてな…別に神代のケーキ目当てではなくてだな…/ / /」

その後三人でジャンケンを繰り返していた…

「うっしやあー!!勝ったぜ!!」

「あゝあ…」

「くっ…無念!」

結果的に勝ったのはヴィータだった

「んじゃザフィーラの分もーらいつ!」

ヴィータは美味しそうに食べていた

残り二人も自分の分を食べていたが…

「…スイーツの怨みは…(ブツブツ)」「」

…何か物騒な空耳が聞こえたが…気のせいだろうと自己完結した

「さて、みんな…現在はやては入院している。これはある意味好都合と言えるだろう」

夕食も終わり、僕はシリアスモードで今後の活動について話し合っている

「なっ！神代！！主が入院したのに好都合とはどういうことだ!？」

シグナムが今にも掴みかかろうとばかりの勢いで突っ掛かってきた

「落ち着けシグナム、別にはやてが入院して嬉しいって訳じゃないよ…シグナム、今までの蒐集はどうやって活動してた？」

シグナムは睨みながら僕の問いを聞いた

「…どうやって？別世界に行って魔法生物から蒐集…だっただろう。神代が人間からは蒐集するなと自分で言ったのではないか？」

いや、要点はそこじゃないんだが

「……………なるほどな」

お、ザフィーラは気付いたか？

「ザフィーラ？何がなるほどなの？」

「シヤマル…我々は主に秘密で蒐集を行っていた。故に活動は主に気付かれぬよう昼間外出する時と主がお休みになられる夜から目覚められる朝方までと時間が限られていた」

「……そういうことか」

シグナムも分かったようだな

「???なんだよ?どーゆー事だよ?」

…ヴィータはイマイチ理解してないようだ

「ごめんなさい…私も分からないんだけど…」

シヤマル!? 貴女は一応参謀的なポジションなんだから分からないとマズイだろ!?

「……主が入院している現在、蒐集に行ける時間が格段に増えるという事だ…こちらに戻らなくても長期に蒐集活動できる」

ザフィーラさん、正解っす ただの犬にならずに済んでよかった

「そーゆー事だよ

まあ、今まで道理はやての護衛には最低二人は付くけどね。それは交代で代わればいいしね…ただ、管理局…なのはとフェイトと鉢合わせしないようには気をつけないと…それは僕がになのは達と一緒に行動を共にすれば情報は得られると思うけど」

まあ、なんだかんだでいつも一緒にいるかならなく…最悪フェイトに協力してもらえば何とかなるかな

「いや、主の護衛には神代とシャマルが適任だろう。蒐集活動は私とヴィータ・ザフィーラで行う」

「…理由は解るが…一応聞いていいかな？」

「神代は認識阻害魔法でテストロツサ達に正体はバレていないし、一緒に居ても怪しまれない…シャマルは顔はバレているが、不測の事態にすぐ対応出来るだろう。何より神代個人では闇の書は使えない…分担で蒐集するなら扱える我らの方が適任だろう」

まあ…予想道理の答えだな

「はあ…分かったよ、確かに筋は通ってるしね」

「じゃあ蒐集は私らに任せてくれ！恭介ははやての事を守ってくれよ？」

「ああ、だが無茶はしないでくれよ…特にシグナムとヴィータ！」

「な、なんで私らなんだよ！」

「そつだ神代！無茶と言うならお前も大概無茶するだろう！？」

抗議を上げる二人…だつてなあ…

「シグナムはバトルになると夢中になりそつだし…」

「うっ…！」

「ヴィータは頭に血が上ると見境なくなるし…」

「うつつ…」

二人とも自覚はあるようだ

「…まあ、シグナムは引き際をわきまえてるからまだ大丈夫だと思うけど…」

そう言いヴィータの方を見る

「な、なんだよ恭介!？」

「…ヴィータはすぐ戦闘で熱くなるからな」

「だ、大丈夫だって!私は、はやての為以外で無駄に戦う気はねーし」

「…まあヴィータに関しては仮契約カードが有るからね。何かあったら直ぐに駆け付けられるけどな」

カードの転送機能使えば一瞬だからな

『ならシグナム卿とも仮契約してみては?』

「「「……は?」「」」

僕とシグナム・ヴィータの思考は一時停止した…

「あら、だったら私も仮契約しないといけないわね」

シヤマルさんはなぜか乗り気ですし！

「ち、ちよつと待て！！別に私は仮契約しなくても大丈夫だっ！！」

「そ、そうだぜ！シグナムは強ええし、恭介の手助けなんて必要ねーよ……！」

シヤマルだって結局恭介と一緒に行動すんだしもつと必要ねーだろ……！」

……ヴィータがえらく力説しているな……

「まあ、無理に仮契約しなくてもいいだろインファイ？」

『……ちっ』

今コイツ確実に舌打ちした！？デバイスなのに舌打ち！？

「と、とりあえず仮契約は置いて、今日はゆっくり休んで明日朝から分担で蒐集に行こう！」

「ああ 分かった」

「わかりました」

「任せとけ……！」

「……………（コクッ）」

こつしてミーティングは終わった…のだが…

T O B e c o n t i n u e d ?



## 真夜中のドキドキ

深夜、キョウスケ部屋

キョウスケSide

なあ…何故こうなっているんだ？

「すう…すう…ムニヤ…」

みなさん深夜にこんばんは。神代恭介です…

さて、僕は今ベットの中に居るのですが…全く眠れません…その原因は…

「ん…恭介え…」

ギュッ！

…まあ、勘のいい方なら分かると思いますが…平たく言うとヴィータと一緒に寝ているからです…

しかもヴィータはガッチリ抱き着いてきてホールド中です…

数時間前

コンコンー！

「んっ？どつぞっ」

ガチャ

扉が開くとそこにはパジャマ姿のヴィータが居た

「どつした？ヴィータ？」

「あ、あのさ…その…うっ／／／」

……？

「何か相談事？まあ廊下は寒いし中にどうぞ」

「あ、ああ…／／／」

そう、思えばこれが始まりだったような…

僕は椅子に座り、ヴィータは僕のベッドに腰掛けた

「で、どうしたんだい？」

さっきの説明で解らない事でもあったかな？

「あのさ恭介…き、今日はやていないじゃんか…」

…まあ入院中だからね

「それで…その、はやてのベッドで一人で寝るのは…ゴニョゴニョ  
…／／／」

…？寝るのは？

「だ、だから…その…今日は一緒に寝ていいか？／／／」

「……………は！？」

え〜と…要約すると、ヴィータは僕と一緒に寝ようと言っているのか！？

「…ああ／／／」

ってまた心読まれた！？

いやいや！そんな事はどうでもいい！

「ち、ちよつと待てヴィータ！さすがにそれ…駄目なのか？」う

ぐっ!」

そんな涙目で見つめるな!?!?

「…解ったよ。ヴィータ」

涙目に屈服しましたよ…貴方は断れますか!?

「じ、じゃあ寝ようか?」

「あ、ああ…/ / /」

そう言うとヴィータはベットのの中に潜り込んで、布団をスツポリと被って目元だけ出して僕の方を見て

「へへっ…恭介の匂いがするな/ / /」

うっ…!理性に500ポイントのダメージがああ!

お、落ち着け僕っ!COOLになれ!!

とりあえず僕は落ち着き?布団に入った

途端にヴィータが身を擦り寄せてきて、少し冷えたいた身体を体温で温めてくれた…ってそれヤバイだろ!

さらに理性に800ポイントのダメージが!!

「なあ恭介…手、繋いでいいか?」

「あ、うん…」

ギョッ

「へへ、こうしてると何か落ち着くな／＼」

…こっちは全然落ち着きませんよ

回想終了

てな事がありました…まあヴィータは寝たのですが、僕は全く眠れない状況ですよ…ヴィータは僕を抱き枕にでもするかのように抱き着いてきているし…

ああ…ヴィータの温もりが心地いい…

…ハッ!? ぼ、僕は一体何を!? しかも僕の手が無意識にヴィータの胸元にいい!?

…本格的にコレはヤバイ…このままだとヴィータに…

『…お困りのようですねマスター』

イ、インフィニティ?

『眠れないようなら…睡眠魔法をご自分にかけてみては?』

おお! そうか!

「よ、よし！マテリア【ふうじる】セット！【スリプル】！」

ピカッ！

僕はスリプルを自分にかけて、意識を手放し。

「……………ZZZ」

Side Out

ヴィータSide

「……………インフィニティ、寝たか？」

『はい、ヴィータ嬢…作戦通りです』

「そうか…」

実はヴィータは寝てはいなかった！

『こちらのお膳立てはバッチリですよ。後は…』

「あ、ああ…そういう【取引き】だったな…は、恥ずかしいけど…  
こんなチャンス滅多にねーし…／／／」

『私個人のデータフォルダに保存しますのでマスター以外には見られませんがご安心を…』

「恭介は面と向かって言ってもなかなかしてくれねーし…」

『まあ、その為に私が手助けをしたんですが』

「でもお前、恭介のデバイスだろ？マスターを守らなくていいのから？」

『もちろんマスターの身は護りますよ？…女性関係は面白そうですから別ですが』

「…はあ、じゃあ…約束どつり…」

『ハイ！もうどんといっちゃって下さい。バッチリ録画しますから』

「ああ、…恭介／／」

ヴィータは布団の中でキョウスケに覆いかぶさるような状態になり  
ジッと顔を覗き込む…

「ん…」

一瞬キョウスケからつめき声が出てヴィータの肩はビクツとなった  
が、意を決するように顔を近づけていく…そして

「…………んっ…………んんっ」

ヴィータは熱くて、甘い、長いキスをした

唇を離し、そつとキョウスケの顔に手を置くヴィータ

「お、オメーが悪いんだからな！他の女とイチャつくから不安になるじゃねーかあ……」

そしてヴィータは再び唇を重ねた……

Side Out

『これでマスターのハーレム日記に新たな1ページが……フッフッフッ』

ちなみに取引とはヴィータがキョウスケとキスするのをインフィニティが手伝う代わりに、その模様をインフィニティに記録させるとの事でした……ヴィータは赤くなりながらだが了承したのは言うまでもない……

「イ、インフィニティ……録画した画像、後でコピーしてくれ／＼／」



とヴィータが後に言ったとか

朝

キョウスケSide

「ん、んん〜…よく寝た…」

あれ？身動きが…？

…あ！確かに昨日ヴィータが来て一緒に寝たんだっけ…  
ふと横を見ると、

「スースー…」

ヴィータが寝ていた。しかもガツチリ抱き着いて来てるので動けない！？

てか顔近っ！？

しかしこのままって訳にもいかないしな〜…起こすか

「おーい、ヴィータ〜」

つんつん

ヴィータの頬を突いてみた

「ん……」

あ、起きたか？

「すう……すう……」

「朝だぞ〜ヴィータ」

つんつんつん

「ん……あん……んん」

ちよっ……へ……っ変な声だすなよ……っ

「ん……あ……オハヨ、恭介え」

「あ、ああ……おはようヴィータ……とりあえず先ず腕を放してくれな  
いかな？起きられないからさ」

「ん……」

な、なんかまだ寝ぼけてるのか？

ギョッ！

つてらさに力を込めていらっしやるし〜!!…??

「ちょ！？ヴィータ？」

「へへ…恭介だあ／／／」

スリスリ

ちょ！？頬を擦り寄せて！？てか絶対起きてるよなコレ！？

コンコン！ガチャ

「キョウスケ君、朝ですよ、起き………きゃ／／／」

きゃ／／／ ぢゃない！

「し、シャマル！？いや…これはだな…」

「あらあら、お邪魔さまでした／／／」

ボタン…ギイイ

「シャマル！何ドアの隙間から覗いてんだ！？てか助けてくれ／／／」

その後、何とかヴィータを起こし脱出した僕

その後、何を思ったかヴィータがいきなりここで着替えようと服を脱ぎはじめたのを何とか制止し「別に恭介なら見られてもいいんだけどな／／／…ゴホン！」

とりあえずヴィータを自分の部屋で着替えるように促して、朝のドタバタ騒動は収束した…

「あ、朝から疲れた…」

あ、朝食を作らなくちゃ…

そうして僕はキッチンへと向かった

S i d e O u t

女子力UPマニュアルは必要か!?

リビング

キョウスケSide

「……………いただきまーす」「……」

今朝はごはんにみそ汁、アジの開きにきんぴらごぼつと肉じゃがと和食系でまとめてみました

…手伝おうとキッチンに入ろうとしていたシャマルをシグナムとヴィータが食い止めていた事を一応記載しておこう…

「神代、この後の予定だが……」

「モグモク…ん?ああ、とりあえずこの後、僕とシャマルがはやてのお見舞いに行くよ。シグナムとヴィータ、ザフィーラは蒐集活動を行ってくれ…ある程度集まったら戻ってはやてに顔を見せに来てくれよ……」

「ああ、分かった」

「キヨウスケ君、学校はどうしますか？」

「……本音を言えば蒐集に行きたいけど、なのは達の様子を見ないといけないしね」

「テストロッサ達と行動を共にしないと我々が鉢合わせする事があるしな」

「モグモク……じゃあ恭介は学校の後にはやての所にいくんだよな？」

「……なのは達も一緒に行く可能性があるけどね　その時はシャマルに携帯で連絡するよ……念話だとバレるからね」　シャマルはその後シグナム達に状況を連絡してくれ」

「はい、分かりました　私もキヨウスケ君から連絡があつたら席を外しますね」

「……なあ恭介……闇の書が完成したら、はやては助かるんだよな？　はやてと恭介……それに私達……みんな一緒に幸せに暮らせるんだよな！？」

「ヴィータ……」

「ヴィータちゃん……」

「……………」

シグナム・シャマル・ザフィーラはヴィータを見つめている……

ナデナデ

僕はそつとヴィータの頭を撫でた

「ひゃ!？」

いきなりだからビックリしちゃったか？

「大丈夫だよヴィータ…みんなその為に頑張ってるんだから」

「…うん／＼」

ヴィータは目を細めて嬉しそうにしてるな

「ゴ、ゴホン！二人とも…いいか？」

「あ、ごめんシグナム」

「うっ…／＼わ、わりいシグナム…」

「仲がいいのは良い事だが…我々が居るのを忘れるな」

シグナムは苦笑しながら注意した

…人目は気にしないとな

「……………キョウスケ、そろそろ主の所に行かないと学校に遅れるぞ」

あ、もうそんな時間か

「じゃあ僕とシャマルはお見舞いに行くけど…三人とも気をつけて  
よ」

「ああ」

「心配すんな恭介！」

「……………心得た」

「じゃあシャマル、悪いけどはやての着替えを準備してくれ」

「はい 分かりました」

さて、学校まで時間ないから病院までは転送で行くか

「シャマル、準備はいい？」

「あ、はい いつでも大丈夫です」

「じゃあ僕に捕まって 転送で行くから」

「はい」

ギョッ！

シャマルは後ろから抱き着いて来た。僕の後頭部から柔らかい感触が…ってヲイ！



「ってシャマル！頭に胸が当たってるって！」

「あ、気にしないで下さい〜当ててるんですから」

なぜに!？

「ほらキヨウスケ君、早くはやてちゃんの所に行きましょう」

「…ハア、最近こんなばっかだから微妙に耐性ができてる自分が怖い…」

そうして僕は頭に胸の感触を感じながら転移魔法を発動させた…

シュン!

病院、はやて病室

コンコン

「はい、 gentlemen」

ガラッ!

「おはよう、はやて」

「おはようございます はやてちゃん」

「あ、キヨウスケ君にシヤマル おはようさん」

「はやて、具合はどう？」

「ん〜大丈夫やで〜でも暇すぎってのも考えもんやな」

「そつだろつと思って…はい、はやてちゃん 新しい本を何冊か持ってきたよ」

「ホンマか！？ありがとな〜シヤマル」

シヤマルははやてに数冊の本を…つて

「ちよつと待てシヤマル！」

「あ、あら どうかしましたかキヨウスケ君？」

僕はシヤマルの持ってきた本を確認…

「…【誰でも解る男の落とし方】【男を刺激する100の仕種】【夜のテクニクBest50】ってナニカナ？シヤマルサン？」

「いや、それは…何と言いましようか…てへ」

「…ちよつと廊下に来てくれるかな〜」

ガシッ！

僕はシャマルを引きずるように出ていく

「ちょ！ご、ごめんなさいキョウスケ君！！ちょっとした茶目っ気  
…」

ガラッ…ボタン！

Side Out

はやてSide

キョウスケ君が黒い笑顔を浮かべながらシャマルを連れていった…  
ごめんなシャマル、あのキョウスケ君にはさからえへん…

私はさつきシャマルが持ってきた本を手に取り…

パラパラ…

何気なくページをめくってみた

「…これは／＼…こうすればキョウスケ君が…あかん、刺激が強すぎや／＼／＼」

私が本を熟読していると…

バキドカ、ガシャーン！ギイイイン！ドンドン！……グチャー！！  
い、今ありえへん音と最後に何かが潰れた音がしたような…

ガラッ

「あ、おまたせはやて」

…凄く笑顔の眩しいキョウスケ君が入って来た……シャマルは？

Side Out

キョウスケSide

「あ、おまたせはやて」

「あ…キョウスケ君…」

ん？はやての様子が…って

「あ、だめだよはやて そんな本読んじゃ」

はやては先程の痴女の持つて来た本を持つていたので回収した

「あ、こ、これは…シャルルがどんな本持つて来てくれたんかな？  
つて…／＼」

とりあえず僕はその中からはやてが見ても問題ない本を選んで…

「ん〜 とりあえずコレとコレとコレは大丈夫かな」

「あ、うん…ところでキョウスケ君、シャルルは？」

「その辺に転がってるから大丈夫だよ」

「ちょ！何！？転がってるって！！？」

「あ〜そのうち復活するから〜」

うん、ちゃんと手加減したしね〜

『…あれで手加減したのですか？』

勿論だよインフィ

ガラッ

するとシャルルが身体を引きずるように入ってきた

「ひ、ひどいわキョウスケ君…もうお嫁に行けない体に…うつつ…」

「キョウスケ君！？一体シャルルに何したん！！？」

僕ははやての肩に手を置き…

「はやて、世の中には知らない方が幸せって事があるんだよ？」

「そ、そか…」

はやてを（無理矢理？）納得させた

あ、ちなみにシャマルには魔王式の注意をただけですから

Side Out

?????

?????Side

「…ようやくここまで完成したようじゃな」

「…まったく、本当ならとっくの昔に完成して彼に渡せたはずでしたのに…」

「まあ 当初の予定よりは遅れたが…」

「その原因は貴方なんですから！少しは反省して下さい」

「ふおふおふお…」

「てか反省の色無しですか！？…しかもその原因が【T U T Y  
Aで暇潰しに借りたDVDに影響されて】って…」

「いや〜アレを見たら『これだ！』って思ってたの〜」

「ハア…頭が痛いですわ…」

「ま、当初の予定とは違ってしまっただが…」

「…と言うより、かなり彼の発注とは掛け離れています…」

「……………」

「…どう見ても小学生…ですね」

「…初期設定は8才位ぢやよ」

「…確か「外見は17歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方で  
ロングヘアーで顔も超美人でっ！」って彼は言っていましたよね？」

「…超高性能ぢやよ？」

「てかそれ以外真逆！？超美人と言うよりも超可愛いし！」

「だつてのゝ…なんだかんだでオリジナルで造つては既に他の小説とネタが被つて何回も頓挫してのゝ…もうオリジナルは断念し既存の作品をクロスオーバーさせてユニゾンデバイス作るしかなかったんじゃないよ…」

「って作者のネタバレですか！？神様!？」

「しかも以前に決めた名前まで他小説で結構同じのを使われていたそうじゃし…」

「えっ!?!ま、まさか神様…以前付けた名前まで変更を!？」

「…スクルド君はどう思うかの？」

「…もう勝手にして下さい」

二人…神とスクルドは目の前にあるケース見ながら口論を繰り返していた…

Side Out

??? Side

ケース内にいる【少女】の目の前で神とスクルドが口論している中…



『……………私……………すたー……………何処……………さ……………で……………』

【少女】は目覚めの時を迎えようとしていた…

S i d e O u t

フェイトを救え！…って何から？？

学校

キヨウスケSide

はやてのお見舞いの後、急いで学校に移動（転送って便利だね）  
遅刻はせずに済んだのですが…

「……………」

隣の席のフェイトの口から魂が抜けていた…

「ふ、フェイトさん？一体何があったの？」

「あ……………キヨウスケ……………大丈夫…だから…」

いやいやいや！明らかに大丈夫じゃないっしょ！？  
…昨日あれから何かあったか！？

「おはよーキヨウスケ君！」

「あ、おはようなのは…」

ギョッ！

僕がなのはとあいさつをしたらフェイトが僕の腕を掴み…

ガタガタガタガタ

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

フェイトが壊れていた…

「なのは…昨日フェイトに何をした？」

聞くのが怖い、なのはに尋ねると

「ふえ！？い、いやだな〜キョウスケ君。私はフェイトちゃんと〇

H A N A S H Iをただけだよ〜」

…ああ、魔王降臨したんだな……つたく

「フェイト…昨日大変だったんだね…ごめんね」

ギョッ！

僕はフェイトの震えた手をそつと握って落ち着かせようとした

「あー！キ、キョウスケ君！？何フェイトちゃんの手握ってるの！？」

「ん？だってフェイトこんなに怯えてるんだし……」

「あ……／＼キヨウスケの手……温かい／＼」

お、フェイトの震えが止まった  
再起動したようだな

「ち、ちよつとキヨウスケ君？いつまで手を握ってるの？」

なんかなのはが必死に抗議しているが……まあ確かに再起動したなら大丈夫か

僕が握った手を離すと

「あっ………」

凄く残念そうな顔をしたフェイトがいた……いや 昨日も長時間握っていたんだし、そんな残念そうな顔されても……ねえ

「……あれ？そう言えばアリサとすずかは？」

いつもならなのはと一緒に乱入してくるハズだが？

「あ、二人は今日は少し遅れるから自分のお家の車で行くってメールあったの」

ガラガラ

「「おはよう！」「」

お、噂をすれば…

「おはようアリサちゃん！すずかちゃん！」

「二人ともおは…」

ガタガタガタガタ

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
い…」

フェイトは再び壊れていた…

こゝこいつら一体フェイトに何したんだ！？

## 昼休み、屋上

一気に昼休みまで来ました

何とかフェイトのトラウマ？を取り除き、いつもの仲良し四人娘にもどったみんなとお弁当を食べてます

「さすが、今日ははやてのお見舞いに行くのよね？」

「うん、そのつもりだけど…みんなは都合悪いかな？」

「あ、私は大丈夫だから」

「うん、はやてちゃんとまたお見舞い行ってくつて約束したしね」

「私も大丈夫。はやてのお見舞いに行くよ」

今日もどうやらみんなではやてのお見舞いに行くことが決定したよ  
うだね

フェイトは事情知ってるから当然か…

「キョウスケ君、はやてちゃんの具合どうかな？」

さすがが僕にはやての体調を聞いてきた。

「ん…今朝も病院に行ってきたが体調は安定してたよ 本人は「  
暇すぎや〜！」って騒いでたけどね」

…ついでに痴女も殲滅したな

「にははは、はやてちゃん元気そうだね」

「じゃあ今日の放課後みんなでお見舞いに行きましょう！」

「「「おー！！」「」」

…いや、お見舞いはいいんだが…みんなテンション高くない？

キーンコーンカーンコーン

「あ、お昼休み終わっちゃうね」

「じゃあ教室に戻りましょ」

こうして昼食を食べ終わり…あ、一応痴女…ぢやなくシヤマルに連絡しておくか

「キョウスケ君？どうしたの？」

「あ、ごめんすずか 先に教室に行つてて〜後で行くから」

「？うん、わかった。授業に遅れないようにね〜」

バタン！

さて、なのは達は先に行つたか…  
僕は携帯を取り出し…

ピッ！ピッポップ！

トウルルルル…ガチャ

「もしもし？キョウスケ君？」

「あ、シヤマルか？キョウスケだけど、今日の放課後にみんなではやてのお見舞いに行く事になったから鉢合わせしないように気をつけてくれ

後、シグナム達にも連絡してこちらから連絡しない限り病院には近

づかないように伝えてくれ」

「ええ、分かりました。キョウスケ君も気をつけて下さいね」

「ああ、分かった。シャマルも気をつけてな。…ちなみにはやての容態はどうだ？」

「…正直良くはありませんね…はやてちゃん、顔には出しませんけど…辛そうにしているみたいですし…」

「そうか…分かった。シャマル、はやての容態に変化があったら最優先で連絡してくれ…はやての事頼んだよ」

「はい、はやてちゃんの生命…私達で救ってあげないと…ですよね」

「そうだね…じゃあ後はよろしく」

ピッ！

…そういえば…暴走プログラムどう倒すか考えてなかったな…原作と同じなら問題ないが…手札は多い方がいいし、うん…

バタン！

「キョウスケ！アンタ遅いわよ！早くしないと授業始まるわよ！！」

…とりあえずアリサの怒りを買わない為に早く教室に行くか



S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

謎の食通降臨!?

放課後、病院

キョウスケSide

学校が終わり僕たちは速攻ではやてのお見舞いの為病院に来ました  
あ、もちろん着く前にシャマルにメールして隠れてもらったよ

コンコン

「はい、どつぞー」

ガラッ

「「「「「こんにちは」」」」」

「あ、みんないらっしやい」

ん…シャマルの気配は…屋上か

「みんな おおきにな〜」

「はやてちゃん、具合はどう?」

「あはは 大丈夫やなのはちゃん 元々ただの検査入院やし」

「でも、それでも心配だよ〜」

「すずかちゃん…優しいなあ」

「すずかの場合、心配性なだけって感じもするけどね」

「え〜っ! アリサちゃん そんな事ないよ〜…そう思うよね? なのはちゃん」

「ふえ!?!? そ、そうだね〜…」

…なのはよ、動揺したら内心そう思ってるって事になるぞ?

「あ〜!?! なのはちゃんまでそう思ってるの?」

「そ、そんな事ないよ?」

「…フェイトちゃんはそう思ってないよね?」

「……………」

「フェイトちゃん?」

…ん? フェイト…はやての事ジッと見てるな

「ん？フェイトちゃん 私の顔に何か付いとる？」

そりゃそんなに凝視したらはやても気付くよな

「えっ！？う、ううん なんでもないよ」

…フェイトは状況把握してるからな　気になるか…

「？ならええんやけど」

「フェイトちゃんどうかしたの？」

「あ、ごめんすずか。何でもないよ…」

「そっ？」

フェイトに気にするなって言う方が無理かな　…少し空気かえるかな

「あ、そっだ！実は今日もお菓子作ってきたんだ みんな食べる？」

「……………もちろん（や）……………」

即答かい！　しかもさっきの空気も無くなってるし！！

「でもキョウスケ君、今日は手ぶらだったよね？」

ギク！

「あ…今朝はやてのお見舞いに来た時に持ってきてたんだよ、で、

石田先生に預かってもらってたんだ」

「へ」

「じゃあ持つて来るからまってね」

「あ、キョウスケ君 手伝うよ」

あゝ…今回はそれマズイんだよね

「ありがとうすずか でも大丈夫だよ ホラ、お客様に手伝わせる  
とはやてがうるさいからね」

「なんやて!？」

「アハハ、冗談だよ じゃあ待つててね」

ガラツ…バタン

とりあえず人目が無い所に行つて…

### 給水場

よし ここなら自立たないな…

確か以前に作り置きして異次元空間に収納していたお菓子が…

ガサゴン

あ、あった

え？腐ってないかって？

異次元空間の中は時間が止まってるから大丈夫さ ハッハッハ！

さて、このお菓子にはやはり紅茶かな

## 病室

コンコン！ガラッ

「お待たせ！持ってきたよ」

僕はトレイに紅茶とお菓子をのせて部屋に入った

「「「「「おお〜」」」」」

みんなテンション高っ！

「キョウスケ君、そのお菓子は何？」

よくぞ聞いてくれたのはさん！

「これはアップル・ストウリューデルっていうお菓子だよ さあ！  
綿々と伝えられてきたウィーン菓子の真髄を堪能してくれたまえ！」

「な、なんかキョウスケの性格変わってない？」

「う、うん…」

「キョウスケ君…料理になると性格変わるんよ…」

「変わり過ぎじゃあ…」

「そ、そうだね」

上からアリサ・なのは・はやて・すすか・フェイトと何か言っているが…気にしない

「そしてこの紅茶…みんな、まずは香りを楽しんでくれ  
そして、次は色合いを… そうすれば心が落ち着いてくる 産地であるヒマラヤ山岳地帯の景色がまぶたの裏に浮かんでくる… そうして初めて、… 紅茶のシャンパン… を堪能することができるのだ」

紅茶を極めるためにはこの位はしないと…！

「アハハ…」

乾いた笑いが聞こえたが…スルーだあ！

みんなとお見舞いという名のお茶会&談笑を過ごし…

「そういえばそろそろクリスマスだね」

「そうね…あ、みんな今年はみんな一緒にクリスマス過ごさない？」

「あっ！アリサちゃん、それいいかも」

「でしょ？フェイトは何か予定ある？」

「えと…多分大丈夫」

「キヨウスケは？」

「まあ、はやての外出許可が取れればね」

「え！？キヨウスケ君、私の事は気にせんといってみんなで楽しんで何言ってるのよはやて！アンタの参加は決定事項よ！！」ってアリサちゃんなんでやねん！

「さすが関西人！ツツコミがうまいわね！」

「いや…ってちゃうわ！私もって…？」

「はやてちゃん…これは前からみんなで話し合っていたんだけど、せっかくみんなお友達になれたんだし…私達みんな、はやてちゃんやキヨウスケ君とクリスマス過ごしたいんだよ…」

「すずかちゃん…」



「そうだよはやてちゃん…私もみんな一緒に過ごしたいな」

「うん、私もはやてとクリスマス過ごすの楽しみなんだ」

「なのはちゃん…フェイトちゃん…」

「と言う訳で全員強制参加よ！いいわね！」

「アリサちゃん…もうしゃあないな」

「ハハハハ」

「でもみんな…ありがとう」

それからクリスマスパーティーの打ち合わせをして…

「あ、もうこんな時間だわ」

「あ、ホントだ」

「じゃあはやてちゃん、私たちそろそろ…」

「そか…」

「あ、でもまたお見舞いに来るから大丈夫だよ はやて」

「うん みんな…ありがとな」

「キョウスケ君はどうするの？」

ん?...まあはやての護衛もあるしな

「僕はもう少し居るよ。食器も洗わないといけないし」

「あ、じゃあ私手伝うよ」

ん...シグナム達と定時連絡したいしな...

「あ、大丈夫だよなのは。そんなに手間はかからないし」

「でも...なんか悪いし...」

うつつ、なんていい子なんだ！このコが数年後の魔王とは信じたくない！

「ありがとうなのは、優しいね(ニコツ)」

「ふえ！？／＼／＼　そ、そんな事ないよっ／＼」

なのはは凄い勢いでアワアワしている...ん？

ガシツ！

フェイトがなのはの肩を掴んだ...前髪で目元が見えないが...

「...さ、なのは...早くイコウカ...」

「ひっ!?!?」

ここからじゃ見えないが…何かなのはがフェイトの目を見た途端に  
顔色が真っ青に…

ガクガクガクガク×2

ちようどアリサとすずかはフェイトの目元が見える位置にいたが…  
二人とも震えてる…

「…（ヤバイ！今のフェイト（ちゃん）に逆らったらやられる！  
！）…」

三人の心が一致した瞬間だったそうなの

「じ、じゃあキョウスケ君…私達はこれで失礼するね！」

「う、うん そうねなのは」

「じ、じゃあはやてちゃん お大事にね」

なのは・アリサ・すずかは怯えるように挨拶をしていた…  
このカオスの中心のフェイトは…

トン

僕の肩に手を置いた…？ あ！接触念話か！！

（…フェイト？）

（あ、キョウスケ！接触念話だっけ？これなら念話は盗聴されない

んだよね？)

(ああ、そうだよ)

(キョウスケはこれからシグナム達と何かするんでしょ？)

鋭いな〜このコ

(今シグナム達は蒐集中だから定時連絡しようかと…後ははやての護衛だね…)

(…そっか はやて、グラム提督達に…)

(まあしばらくは大丈夫だと思うけど念の為だよ)

(そっか…じゃあ私達は帰るね)

(ああ、フェイト…ありがとう)

(ふふ、どういたしまして) じゃあキョウスケまたね

ガラッ、ボタン

「…みんな行ってもうたな〜」

「やっぱり寂しいかい？」

「ん…そやね」

ああ！はやてが悲しそうな顔を！

「大丈夫だよはやて、元気になったたらみんなともっと遊べるんだし  
…まあまずはクリスマスパーティーだね」

ナデナデ

僕ははやての頭を撫でながら励ました

「…ん、そやね／＼」

はやては気持ち良さそうにしていた

「…なあキョウスケ君」

「何、はやて？」

「………うん、何でもない」

そう言つとはやては何も言わず、僕に身を寄せてきた

僕はそのはやての温もりを感じていた…

Side Out



## 接触

### 病室

キヨウスケSide

ナデナデ

はい、あれからずっとはやての頭を撫でてます  
相変わらずはやての髪の毛の触り心地はいいな…

ガラッ！

「はやてちゃん、お友達は…あらあら」

「……………」

僕とはやての時間は停止した…

「お邪魔だったかしら？ね、キヨウスケ君はやてちゃん」

「あ、いやこれは……………」

「シシシシャル!?これはな…えーと…な、何でもないんや!!」  
「/ / /」

僕はともかく…はやては動揺しまくっていた  
…このままだとシャルに絡まれそうだな

「あ、じゃあ食器洗ってくるから」

そう言い残しこの場を脱出!

…背後からシャルがきゃーきゃー言っていたが気にしない事にする!

S i d e O u t

シャルS i d e

「お友達のお見舞いどうでしたか?」

「う、うん 楽しかったで また来てくれるで」

「それはよかったですねえ」

「そやけど、もうすぐクリスマスやな みんなとのクリスマスは初



めてやから、できればそれまでに退院してパーっと楽しく出来たらええねんけど…」

「そうですね…出来たらいいですね…」

「うふふ 楽しみやな〜」

### 病院、屋上

シャマルは今屋上に来ている…

「（闇の書がはやてちゃんを侵食する速度が段々上がってきてるみたいなの このままじゃ持って一月…もしかしてもっと短いかも）」

シャマルは念話でシグナム・ヴィータ・ザフィーラにはやての現状を伝えた

S i d e O u t

管理外世界

ヴィータSide

ヴィータは嵐の中、海上を飛んでいた

(…何かがおかしいんだ…こんなはずじゃないって私の記憶が訴えてる…)

ヴィータは自身の記憶の違和感を感じつつ、蒐集対象を探し飛行していた

「…でも、今はこうするしかないんだよな　はやてが笑わなくなったり、…死んじゃったりしたら…嫌だもんな!!」

《Ja》

ズバァアアン

その時、突如海中からタコ型魔法生物が浮上してきた

「やるよ！アイゼン！！」

《Explosion》

「ギガント！ぶっ潰せー！！！！」

ヴィータはグラーファイゼンを握り魔法生物に突撃した…

Side Out

時空管理局  
オフィス

ディスプレイをジッと見つめている一人の老人…グレアム

「父様 あんま根を詰めると体に毒ですよ」

「そつだよ」

グレアムの使い魔、リーゼロッテ・リーゼアリアはグレアムの身体を気遣う

「ロッテか どうだい様子は？」

「まあボチボチですね」

「クロノ達も頑張ってますけど…闇の書が相手ですから一筋縄では…」

「そうか…すまん、お前達まで私の計画に付き合わせてしまった…」

「何言っているの父様！」

「私達は父様の使い魔 父様の願いは私達の願い！」

「うん 大丈夫だよ父様 デュランダルももう完成してるし」

「闇の書の封印、今度こそきつと大丈夫ですよ」

「うん！フフフツ」

「フフフツ」

「ああ…」

笑うロツテとアリアにグラムは頷く…

パチン！

突如、何かが弾ける音がした途端周囲の景色が灰色に染まった

「な、何！？」

「父様！？これは…」

「…結界か？しかしミッド式とは違う…」

キイーン！ジャキイーン！

突如ロツテとアリアに蒼く光る鎖が巻き付き二人を拘束した

「ぐっ！こ、これは！？」

「バインド！？一体誰が！？」

「ロツテ！アリア！」

グレアムはバインドで拘束された二人に駆け寄ろうとするが…

カチャ！

グレアムは【何もない空間】から銃口を突き付けられた…

「父様！！」

「だ、誰だ！？そこに居るヤツ！」

「…プリズムファントム解除…」

ヴォーン！

「…よお、三流小悪党共…不吉を届けにきたぜ…」

「お、おまえは!?!」

「イレギュラー!?!」

「…君はスコール…いや、神代恭介…」

少し遡り…

病院、屋上

キョウスケSide

シャマルの弄ぶオーラから脱出した僕は、実は食器洗いはなく屋上に来ていた

『…マスター、座標確認しました』

「じゃ、黒幕に挨拶に行くか…プリズムファントム展開!」

ヴォーン!

これで僕は、あらゆるサーチに引っ掛からない!

「インフィニティ、転位!!」

シュン!

時空管理局

シュン!

っと…目的地についたな

…プリズムファントム正常稼働中

僕の目の前では使い魔姉妹とグレアムが居る…

「闇の書の封印、今度こそきつと大丈夫ですよ」

「うん!フフフツ」

「フフフツ」

「ああ…」

「コイツラ…やはり原作通りにはやて…この封印が目的か…」

パチン!

僕は無言でこの空間に結界を張る  
ちなみにこの結界はネギまの認識阻害Verをアレンジして組んだ  
術式である。だから…

「…結界か？しかしミッド式とは違う…」

…となる訳です

後は使い魔姉妹を封じるか…こいつら笑いながらはやてを封印する  
計画話しやがって…

「（シグ・ガルバリー！）」

僕の両手から魔法陣が現れ、

キイーン！ジャキイーン！

蒼く光る鎖が二人を拘束した

そして二人に駆け寄ろうとしている老人…グレアムに

「（インフィニティ2ndモード！）」

『2ndモード！ジリオンSet Up！』

カチャ

銃口を突き付けた



「父様！！」

「だ、誰だ！？そこに居るヤツ！」

「…プリズムフロントム解除…」

ヴォーン！

「…よお、三流小悪党共…不吉を届けにきたぜ…」

「お、おまえは！？」

「イレギュラー！？」

「…君はスコール…いや、神代恭介…」

「貴様！父様に何をする！？」

「くそつ！こんなバインドすぐに…」

猫姉妹が騒いでいるが…

「…オートプレッシャー！」

ズウウウン！バキバキ！

「ぐわあああ!」「」

バインドされた上からオートプレッシャー…超重力を二人にぶつける  
まあ手加減はしてるから骨の二、三本で済むはず

「…さて、グラム提督：僕が何しに来たかお分かりですか？」

僕は冷ややかにグラムに語りかける

「……………」

だんまりか…

グン!

僕はオートプレッシャーの出力を上げた

「ぐはっ……………」

出力が上がった為、息も出来ないくらい苦しむ二人…

バキバキバキ!

骨の三、四本は折れたかな?

「!?ま、まってくれ!八神はやての事だな!」

その瞬間、僕はオートプレッシャーの出力を下げる

え?人質なんて卑怯?ソクナコトナイヨ!手加減シテマスシ

「…僕の用件は、闇の書に関して起こった事件の揉み消し…早い話が八神はやてやヴォルケンリッター達は無罪放免について事ですよ」

「な、なにを言っている！ 既に被害が出ている事件を揉み消すなど…」

「あなたなら無理ではないでしょ？それに…」

僕はある資料をグラムに見せる

「…な！こ、これは！？」

「時空管理局の闇の部分ですよ…僕の特技の一つにハッキングがありましてね…勿論、貴方の考えた八神はやてごと闇の書を凍結封印って情報もありますよ

これに比べたら無罪にするくらい軽いでしょう…ああそつだ、これをミッドチルダはもちろん全世界にバラまいたらどうなりますかね…？」

…まあ、出所不明の情報なんて信憑性はないかもしれないが…スキヤンダル満載だから公表されれば管理局もタダでは済まないのは確実だけど〜

「…ああ、ついでに言うと もし断れば…」

僕は一旦区切り…

「マテリアセット【バハムート零式】！…いでよ！バハムート零式

「！」

グオオオオン！

突如、宇宙空間に6枚の翼を持った巨大な龍が現れた

「なっ……！？」

「……この建造物が宇宙のチリとなりますよ？」

自分で言っただけだが……今回悪役っぽいな

「……………解った」

長い沈黙の末グレாம்は了承した

「ほう……いやに素直ですね。」

そう言いながら僕はバハムート零式を解除！オートプレッシャーも解除した バインドはそのままだが

「まあ僕としては今回は挨拶に來ただけですし、貴方の計画は阻止しますよ」

「……………」

「ついでに言うと【闇の書】を【夜天の魔導書】に戻しますから邪魔はしないようお願いしますね……特にそこに転がってる猫姉妹は！」

僕は微かに意識が残っていた猫姉妹に殺気を叩き付ける

「「ひっ!?!」」

一瞬悲鳴をあげた二人だが、気を失ったようだ…まあ気にせず帰ろうとする

「ま、まってくれ!闇の書を夜天の魔導書に戻すとは!?!」

「…そのままの意味ですよ…では」

シュン!

僕が転移すると同時に結界は解除され、残ったのは気絶した猫姉妹と呆然としているグレアム…後、バハムート零式が撒き散らした膨大な魔力反応やその神々しい姿を目撃し、混乱した管理局員たちだった

Side Out

『本当に今回は黒すぎですね』

まあたまにはね〜

『…ギャップ萌え狙い?』

いやー！ちがっぞー！？

イヴ前夜と…（前書き）

リョウリュウさん 前話での誤字のご指摘、ありがとうございました

イヴ前夜と…

管理外世界

シグナムSide

山岳地帯の広がる世界…その空を飛びながらシグナムはシャマルと連絡をとっていた

「（ええ、ここまででは上手くいつてるわ）」

「ああ…そつちに戻らなくなった分、管理局もこちらを追いきれていないようだ。主はやては淋しがつていないか？」

「（私には一言も…でも、お友達をよく来てくれてるみたいなの  
すずかちゃん達）」

「そうか…だが心配させてもいけない。数日中に一度戻る」

「（うん、気をつけて）」

「ああ」

シャマルとの通信を終え、シグナムは山岳に降り立った



パラパラパラ

シグナムは手に持った闇の書のページをめくる

「残り、後60頁…」

頁を確認し、静かに呟くシグナムだった…

S i d e O u t

高町家

なのは&a m p・フェイトS i d e

高町家の夕食のテーブル。そこには高町一家となのはに夕食に招待されたフェイト&a m p・アルフ（犬モード）が揃っていた。

「はい、どつぞ〜」

料理を次々と食卓に置いていく桃子さん

「おお！旨そうだな〜」

「「「はあ〜す〜い ねえ〜」」」

みんな桃子さんが作った料理に絶賛だった

「いただきま〜す×6」

「フェイトちゃんも沢山食べてね」

「はい、ありがとうございます」

「はい、なのは 取り皿」

「ありがとうございます… はい、フェイトちゃん」

なのはは兄の恭也からお皿を受け取りフェイトに渡した

「ありがとうございます」

「フェイトちゃんは今年のクリスマスイヴはやっぱりご家族と一緒なのかい？」

士郎はフェイトにクリスマスの予定を尋ねた

「はい、えと… イヴはリンディさん達と過ごして…25日は、なのはや友達と過ごす予定です」

「そっ」

「ウチは今年のイヴも地獄の忙しさだな」

「私、今夜の内に値札とPOP作っておくから」

「お願いね！私達は今夜しつかり寝とかなきゃ！」

「ん??？」

フェイトは士郎・なのは・美由希の会話がよく分からないように首を傾げていた。それに気付いたなのははフェイトに…

「あ、翠屋のクリスマスケーキ 人気商品だからイヴの日はお客さん一杯なの」

「それにね、イヴを過ごす恋人同士とか友達同士とかの為に深夜まで営業してるんだよ」

なのはと美由希はフェイトに説明した

「そうなんですか」

なのは達の説明でフェイトは納得といった顔をした

「恭ちゃんはいいよね、店の中で忍さんとずっと一緒だし」

「それは別に関係ないだろ」

美由希と恭也の会話聞いていたなのはとフェイトは…

「「いいな」…私もキョウスケ（君）とイヴ過ごせたら…」」

その台詞に反応した土郎・恭也は

「「なっ！？イヴを男女で過ごすなどなのは（達）にはまだ早い！」」

と、勢いよく言い放った

さらにその台詞を聞いた美由希・桃子は

「あら恭ちゃん、あの子の何処が気に入らないの？」

「…二人とも、乙女心を理解していないようね…？」

美由希の抗議と桃子の（恐怖の）笑顔を受けた

もちろん男性二人は（主に桃子の）威圧に恐怖しながら冷や汗をかいていた…

「あ、アリサちゃんとすずかちゃん家の予約分はちゃんとキープしておくからね」

先程までのダークスマイルとは打って変わって桃子はいつもの笑顔でなのはに話しかける

「うん」

「リ、リンディさんからも予約頂いてるからな。お楽しみに」

ダークスマイルから解放された？士郎もフェイトに話しかけた

「あ、はい ありがとうございます…」

フェイトも若干引きつつも士郎に御礼を言った

Side Out

月村邸

すずか Side

すずかはベットの途中でなのは達にメールを送っていた

「明日の終業式の帰りの件 みんな大丈夫ですか？」

ピッ！

「はやてにプレゼント渡しにいくんだよね？」

ピッ！

「でも、内緒で行って大丈夫かな？」

ピッ！

「まっ、もし都合が悪かったら石田先生に渡してもらえばいいし」

ピッ!

「じゃあ そつゆう事でまた明日ね おやすみ」

「送信…っ」と

ピッ!

Side Out

軌道上、アースラ

クロノSide

ピッ ピッピッピッ

クロノはアースラのコンピュータであるデータを調べていた

プシュー

ドアが開きエイミーが入って来た

「ん？あれ？どうしたのクロノ君？」

その瞬間、クロノは調べていたデータを慌てて消した

「う、うん…ちょっと調べ物」

言葉を濁し答えるクロノ

「なんだ 言ってくればやるのに」

「いや、いいんだ…個人的な事だから…」

そう言いながらドアに向かうクロノ…

「ああ、闇の書についてのユーノのレポート　なのは達にも送っておいてくれたか？」

途中で振り向きエイミーに確認をとった

「なのはちゃん達も闇の書の過去については複雑な気持ちみたい…」

「…そうか」

そのまま沈黙する二人だった…

Side Out

病院、はやて病室

キヨウスケSide

今日はシグナム・ヴィータ・シャマルが揃ってはやてのお見舞いに来ていた

ザフィーラは留守番（人型モードは耳が目立つし、狼モードだと病院側から許可が下りないだろうとの事で）をしてくれている

…うん、予定ではクリスマスイヴ前に防衛プログラム戦を終わらせたかったんだが…どうやら魔導師をターゲットにしなかった為に頁が効率よく蒐集できなかったと最近気付いたんですよね…orz  
結果的に差し引きゼロですよ！

…過ぎたことは仕方ない、確か原作ではイヴになのは達がサプライズで来るんだよね…一応今日は認識障害メガネは外して【スコールVer】で居るが…

「はやて…ごめんね あんまり会いにこれなくて」

「ううん 元気やったか？」



「めっちゃめっちゃ元気！」

ヴィータははやてにべったり甘えモードだな

ピピピピピ！

ん？なんの音だ？

「キョウスケ君？なんやその指輪から音してへんか？」

えっ！？

『マスター、通信が入っています』

ええっ！？誰から？？？

『（神様からです）』

……………何？

今頃なんだろう？

「はやて、ちょっと席はずすね」

「キョウスケ君、どないしたん？」

「え〜〜〜と…………ト、トイレだよ」

うわ！我ながら苦しい言い訳を…こんな今時信じる人いる訳…

「あ…／＼そ、そか…」

居たよ!?

しかも顔が赤くなっているのは何故や!?

「…じゃあシグナム・ヴィータ・シャマル、はやての面倒よろしくね」

「ああ」

「つたりめーだ!」

「はい、わかりました」

ガラッ!ボタン!

「とりあえず屋上に行くか…」

しかし神って…あの神(仮)だよな

…何だろっ通信って???

Side Out

ユニゾンデバイスは魔法少女！？（前書き）

はじめに…

すみませんでした。orz

ユニゾンデバイスは魔法少女！？

病院、屋上

キョウスケSide

さーて 屋上には…よし、誰もいないな

「インフィニティ、通信を繋いでくれ」

『解りました…』

ザザザザザーツ…

「おお、キョウスケよ 全滅してしまうとは情けない…」

ドラ エの王様ネタかよ！？

「…切るぞ」

「じよ、冗談じゃよ」

「ったく…で、何かあったのか？」

「いやの〜 以前頼まれた物が完成間近なので取りに来てほしいん  
じゃよ」

…はて？ 何か頼んでいたっけ？

「おぬし…ユニゾンデバイス頼んどったろうが！」

あ！…そうそうー！いや〜 すっかり忘れてたな〜

「…忘れておったな」

「イエイエ…いやー楽しみにシテマシタヨ？」

「…まあよい、ではこちらに【召喚】するぞい！」

えっ！？いきなり！？

「ちよつとま「ではいくぞい！カーーツ！」人の話しを聞けー！」

シュン！

?????

シュン！

「つと…ここは？」

「キョウスケ君！久しぶり〜」

ギユツ！

「ス、スクルドさん！胸っ！胸が当たってます！」

いきなりスクルドさんが抱き着いて来てその胸をおもいつきり押し付けてくる！？

「あら いいのよ？女神と人間の禁断の愛を「ゴツホン！」あら…  
神様〜」

「スクルド君…そーいうのは人目がない所でお願いしたいんじゃないが…」

人目なかったらいいんじゃない！？

「あら これは失礼しました…（チッ）（」

「…今何か聞こえたようじゃが…？」

「きゃ 神様っ 気のせいですよ」

…いや 僕も今っチッて聞こえたぞ！？

一応スクルドさんは離れてくれた

「キョウスケよ…久しぶりだな お前の活躍は（面白おかしく）見とるぞ！」

…今なんか、聞き流せない単語が聞こえたような？

「ゴホン！…とにかくまずはこっちじゃ！ついてまいれ！」

と神が別空間へと移動していくのでついていった

「じじじやーじじじやー」

って何も無いよな？

ギイイ！

突如空間に亀裂が入り扉のように開いていく

「じの中じゃよ…」

「へへ 随分嚴重だな…ってこれは！？」

僕の目の前には子供一人分入りそうな大きなカプセルがあり、その

中には…

「…女の…子あ!?!」

なのは達位の女の子が居た

「このコがおぬしのユニゾンデバイスじゃよ」

いや…まあ 状況的にはそうだとわかるが…

「…何故に木 本桜なん!?!?!」

神の方を振り向くと、神は目を反らした

「…? スクルドさん、これは?」

スクルドさんは申し訳なさそうな顔である方向を指差した

…その先には何やら大量の本やDVDが置いてあった

僕は恐る恐る近づき確認すると…

「…なあ神よ、この明らかに全巻揃ってそうな本やDVDは何だ?」

「ん? おぬしが元居た世界のアニメ【カードキャプターさくら】ではないか」

何当たり前のように言ってるんだ?

「すみませんキョウスケ君…あの神は今度はそのアニメにハマってしまい…」



「はあ!？」

「貴方のユニゾンデバイスは…本来ならなのはさんやフェイトさん達がカートリッジシステムをデバイスに組み込む時期に渡せたのですが…神がそのDVDを見て「これだ!」とほざいて作り替えてしまったんです…」

な、なんだそりゃ〜!？

「それと…「まだあるんかい!？」ハイ…キヨウスケ君、仮契約カード持ってますよね?」

ああ、何故かキスしたら仮契約カードでてくるみたいだが…つてこの流れは…

「それも神が勝手に追加した能力なんですよ…このユニゾンデバイスの能力の一つ【シンクロユニゾン】の媒体として」

シンクロユニゾン?普通のユニゾン・イン!的なのじゃなく?

「それは後でこのコに聞いていただければ…すみませんキヨウスケ君、貴方の希望は【外見は17歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方で ロングヘアで顔も超美人でっ!】という希望だったのに…」

…いや…まあ…今思うとかなり恥ずかしいな

「ゴホン!まあ多少の誤差はともかく…後は微調整で完成じゃ」

「…なあ、ちなみに名前は決まってるのか？」

「勿論！　ここまで再現させたんぢゃから名前は【さくら】しかないからっ」

「いやまてよ！以前作者と話した時、エリスにするとか言わなかったか!？」

すると神が一枚の手紙を渡してきた

「ん？手紙…なになに

ゴメン！名前は他作品の作者と多数かぶってた。なので既存の作品とクロスさせました　作者より

つてご都合主義かよ!？」

作者「すみませんorz」

今また電波が聞こえたな…

「はあ…もういいや。それで微調整つてすぐ終わるのか？」

「後はおぬしの魔力を注ぎ込むだけじゃよ…早速作業に取り掛かるうかの」

「はあ…で、どうすればいいんだ？」

「な〜に簡単じゃよ その水晶におぬしの魔力を送り込めばいいだけじゃ」

ふうん…じゃあさっそく

ブオン！

「くっ…！？結構キツいな…」

水晶に触れた途端に僕の魔力が吸い取られていくのが解る…

「まあ の〜 普通のユニゾンデバイスとは違い神様製作の特注品じゃからの〜 ほとんど人間と変わらん仕上がりじゃよ…」

…チート仕様って訳ね

ガチャ！プシュー…

などと神の自慢話しをしているうちにカプセルが開いた

「おお！目覚めるぞい」

「……………」

あれ？無反応…？

「ん…ふみゃー！…よく寝た〜！」

開口一番寝起きセリフかい！？

「あ！はじめまして！さくらです！あなたがますたーですね？」

「あ、ああ…神代恭介です。よろしくね（ニコッ）」

僕はさくらの頭を撫でると…

「…はにゃん／＼／＼」

はにゃん…ん???

「ど、どうかしたか？さくら？」

えっ！？何か変な所触っちゃった!?

「い、いえ／＼！その…嬉しくって、はにゃんってなっちゃった  
んです／＼／」

そ、そうなんだ…

「ふむ…早速デバイスにフラグ立っておったか…」

「あ…私も撫でてほしい…」

後ろの二人が変な事言っているが気にしないようにしたいと…

Side Out



人生いろいろや！うっしやあ！！

キョウスケSide

「で、何故ここでもこうなる？」

「　　？はう　　／／／」

現状を説明すると…ユニゾンデバイス…いや さくらが「手…繋いでいいですか／／？」って上目づかいで聞いてくるもんで…繋いでいます

「ますたーの手って温かいですね／／」

嬉しそうにしてるから無下にはできないし…はあ

「さてキョウスケよ、ラブラブ中の所を悪いんじゃが…」

いやいやいや！これは違っしょ！？

「冗談じゃ…さて、その口は基本的には【カードキャプターさくら】の魔法が使えるようにしてあるからの その為スタンドアローンで活動も十分可能である。さらに、おぬしとユニゾンする事でおぬし

自身もそのさくらの魔法が使用可能になるのじゃ」

「へ〜 そりゃ便利だな〜」

魔法戦のバリエーションが増えると便利だしな

「私、ますたーの為に頑張りますね（ニコッ）」

うっ…か、可愛い…

「そ、そうだから とりあえずその敬語はいいから…ね」

可愛い女の子にマスターって言われると…何か背後から刺されそう  
な気が…

「あ、はい…じゃなくて、うん！キョウ君 …テへへ／＼」

えらく速攻で碎けたな〜

「ではさっそくユニゾンしてみてもどうかの？」

あ、一応機能確認だね

「じゃあまず…インフィニティSet Up！」

『…マスター私の事忘れてたなかったんですね…覚えていてくれて  
嬉しいです！』

あ〜…前回出番少なかったからね〜…いいからSet Outを…

『オーライ！バリアジャケット展開！！』

ピカアアア！

…えらく力入ってるなインフィニティさん…

とりあえずいつものバリアジャケット姿になり

「じゃあいくよ さくら！」

「うん！ユニゾン・イン！」

ギユユン！

僕とさくらがユニゾンすると、黒が基調だったバリアジャケットがメタルブルーの色に変化し瞳の色も蒼色から碧色に変化し髪も明るい茶髪に変化していた

「…へへ ユニゾンってこんな感じなんだな」

「（どうかな？キョウ君。何かおかしな所ある？）」

ん？この声は

「さくらか？いや大丈夫だよ」

「（よ、よかった） 初めてだから上手くいくか心配だったんだ」



「そか あ、さくらの魔法ってどんなのがあるの？」

「（えっと、今記憶をリンクさせるね それで解ると思うから）」

さくらがそう言うつと頭の中に知識が流れ込んで来る ふむ、クロウカード系の魔法か…まずはコレか

「…闇の力を秘めし鍵よ！新たな姿を我の前に示せ 契約者さくらの名のもとキヨウスケが命じる 封印解除！《レリーズ》」

パアアアア！

封印解除と共に僕の両腕にはブレスレットレリーズが装着された

「…これでクロウカードが使用可能になったんだよね？」

「（うん そうだよ！試しにウインディ使ってみる？）」

「そうだね…じゃあ…」

僕は右腕を前に出し

「ウインディ！（THE WINDY）」

ゴオオオオオ！

おお！ホントに出来た！しかも精霊姿で じゃあ…

今度は左手を前に出し

「ウォーティ！（THE WATERY）」

ザバアアアン！

こちらも精霊姿で出現した！…が

「…け、研究室があゝ…」

「風はともかく水びたしですね」

やべっ 室内って忘れてた…

ウォーティでびしょ濡れになった研究室の掃除を部下の天使たちに丸投げした神が

「まあ とりあえず不具合はないようじゃな」

「後はさくらちゃんが貴方のサポートをしてくれるから解らない事は彼女に聞いてね」

「はあ じゃあとりあえず…ユニゾン・アウト！」

パシィィー！

「ぶっ…さくら、身体に異常はないか？」

「うん、大丈夫だよ」

「…あら？キヨウスケ君、胸の辺り光ってない？」

え？…あ、ホントだ

何が光って…えっ！？光っていたのはヴィータとの仮契約カード…  
だが、

「ヴ、ヴィータとの仮契約カード…ヴィータの絵柄が…消えた…？」  
なんで！？

「なんじゃと！？…しまった！闇の書が覚醒しておる！！」

「なっ！？…なんだって！？」

「こちらでも調べましたが…ヴォルケンリッター達が闇の書に蒐集  
され、それを目撃したはやてちゃんが…」

…シヨックのあまり暴走したのか…だけど！

「誰がヴィータ達を蒐集したんだ！？…ま、まさか？」

「うむ…どうやら仮面の男…いや、リーゼ姉妹らしいの」

…あいつら…忠告を無視か…

「…いくぞ、さくら！ 闇の書の暴走を食い止め…いや、家族を助

けに行くぞ!」

「…うん!キヨウ君の家族は私の家族でもあるもん!」

「と言う訳だ 神様、現場に転送してくれ」

「うむ 解った…では行くぞ!」

「キヨウスケ君…ご武運を」

「ありがとう神様、スクルドさん」

シュン!

Side Out

「…神様、キヨウスケ君達は大丈夫でしょうか?」

「正直原作と違ってきた世界じゃからの… ま、大丈夫じゃろ」

「軽っ!」

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

守るべきもの

時間はキョウスケが屋上に行った所まで遡り…

はやて病室

コンコン

「こんにちは〜」

「「っ!?!?」「」

シグナムとシャマルは聞き覚えのある声に驚いた

「あれ? すぐかちゃんや はい どうぞ〜」

はやても声の主に気付き招き入れた

ガラッ!

「「「「「こんにちは〜」「」

「あっ!」

ヴィータは入って来た人物の中の2人を見て驚いた

「あっ！今日はみんなお揃いですか？」

すずかはヴォルケンス達とはやてが一緒に居る所を久々に見たので少し嬉しそうにしていた

「こんにちは 初めまして」

アリサはヴォルケンス達とは初対面なので礼儀正しく挨拶をし、

「あっ！」

「あ」

「あ……」

入って来たのはとフェイトはシグナム達がいる事に驚き、シグナムはなのは達を睨み、シャマルはその様子を交互に見て困惑していた

「あ、すみません お邪魔でした？」

アリサは場の空気やシグナムやシャマルの反応を見て邪魔してしまったか聞いてみたが、

「あ、いえ……」

「いざっしやい 皆さん」

シグナムは表情を戻し、シャマルは普段と変わらず柔らかい物腰で招いてくれたが、やはり二人とも少し複雑な表情をしていた

「なんだ よかった」

「ところで今日はみんな どないしたん？」

はやては突然来たみんなに尋ねると…

「「うふふふ」」

「ん？」

アリスとすずかの意味ありげな笑いにはやては？と思っていると、二人は手に持ったコートに手を掛け…

「「せーの！」「」

バツ！

「「サプライズプレゼント！」」

「うわぁー！」

コートの下に隠してあったプレゼントをはやてに見せた

「今日はイヴだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「うわ〜ホンマか〜ありがとうな〜」



「みんなで選んできたんだよ」

「後で開けてみてね」

はやて・アリサ・すずかの会話中、シグナムとシャマル　なのはと  
フェイトは複雑な視線をお互いに交わしていた

ギツ！

はやての傍らに居るヴィータは特になのは達を睨み付け、

「あ……」

なのははその視線に気付き肩を竦めてしまっていた

「なのはちゃんフェイトちゃん、どないした？」

なのはの様子に気付き、はやてはどうしたのか尋ねると

「あ、ううん……何でも」

「ちょっとご挨拶を……ですよね？」

「アハハハ……」

なのはとフェイトは何とかごまかし、

「はい……」

シグナムもなのは達の話しに合わせ返事をした

「あ、みんな コート預かるわ」

「「はーい」」

ガチャ、ギイイ

シャマルはみんなのコートを預かるとクローゼットの中に掛けている…この時シャマルは念話妨害を周囲に施していた

シグナム・フェイトSide

シグナムとフェイトは二人並んではやてに背を向けて気付かれないように会話をしていた

「…念話が使えない 通信妨害を？」

念話が使えない事に疑問を持ち、もしかしたら…とシグナムに尋ね  
「シャマルはバックアップのエキスパートだ この距離なら造作もない…」

シグナムは当然のように答えた

Side Out

ヴィータ・なのはSide

「クッ……………ッ！」

ヴィータの方は、なのはを敵意剥き出しで睨み続けていた

「えっと、あの…そんなに睨まないで…」

なのはは脅えたような困ったような感じでヴィータに言うてみたが、

「睨んでねーです こーゆー目つきなんです！」

なのはの主張はヴィータにバツサリ切った！

「う〜ん」

困ったなのはだったが…

「ヴィータ！嘘はあかん！なんや悪い子はこつやで！」

ムズッ！

「んーんー！！」

はやてはヴィータの態度を注意しながら鼻を摘んでお仕置き？をした

Side Out

「お見舞い、してもいいですか？」

フェイトはシグナムに警戒されながらも、はやてのお見舞いの許可を貰おうとし、

「…ああ」

シグナムはフェイトの方に視線は向けなかったが許可してくれた：

夜、病院外

「さよーなら〜」

アリサとすずかは手を振りながら出口まで見送ってくれたシグナムとシャマルに挨拶をしていたが、なのはとフェイトは…

「…」

ただ黙ってシグナム達を見ていた

病室

はやてSide

「ん？どないしたヴィータ？」

「…なんでも、ないよ…」

ヴィータははやてに抱き着きながら目を閉じ、はやての温もりを感じていた

「そっかあ？」

はやてもヴィータの頭を優しく撫でていた

「…ん 今夜は雪になるかな？」

はやては部屋の窓から空を見て呟いた

Side Out

病室、屋上

「はやてちゃんが闇の書の主……」

なのはは闇の書の主がはやてだった事に驚いていた

「悲願は後僅かで叶う……」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも！」

シグナムとシャマルは臨戦体制となりなのは達に迫った

「待つて！ちよつと待つて！！話しを聞いて下さい！！！！ダメなんです！闇の書が完成したらはやてちゃんは……」

なのはがそう言いかけたその時！

ビュユユー！

「はぁぁー！！！」

グラーファイゼンを振りかざしたヴィータがなのはに襲いかかってきた！

バチイイイ！

なのははとつさにプロテクションを貼り不意打ちを防いだ……が、

バキイイ！

「きゃああああ！」

ガシヤヤン！

なのはは吹き飛ばされ金網に激突してしまった

「ッ！なのは！？」

フェイトは慌ててなのはの方を向くが…

ビュン！

「はあああああ！！」

レヴァンティンを振りかざして来たシグナムに攻撃された

ガキイ！

間一髪シグナムの攻撃をかわしたフェイト　レヴァンティンはコンクリートに傷を付けただけだった

キイイン！

フェイトは咄嗟にバルデツシュを起動させ構える

「…管理局に我等が主の事を伝えられては困るんだ！」

シグナムはレヴァンティンを握り絞める

「…私の通信防御範囲から出すわけには…いかない！」

シヤマルも普段から想像出来ないほど拳を握り絞めた

ヴィータ・なのはSide

「ヴィータ…ちゃん」

吹き飛ばされたなのは、近づいてくるヴィータに話しかけた

キイン

ヴィータはバリアジャケットを展開しながら、なのはに近づき…

「邪魔：すんなよ、もう後ちよつとで助けられるんだ！」

はやてが元気になって私達の所に帰ってくるんだ！

必死にがんばってきたんだ…もう後ちよつとなんだから…クツ！」

ヴィータは目に涙を浮かべ怒りで震える程強く握ったグラーファイゼンを振りかぶり…

ブオン！

「邪魔すんなーっ！！！！」

ドカアアアン！



カートリッジで強化した一撃を振り下ろした

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

ヴィータの一撃で発生した爆炎の中…

コツ コツ コツ…

足音が聞こえ、炎の中バリジャケットを纏ったなのはが悲しそうな表情で現れた

「…悪魔め…」

その姿を見たヴィータは目に涙を溜めながらそう呟いた…

「…悪魔で…いいよ」

キーン！ドキュ！

なのははレイジングハートを起動させカートリッジをロード

《Accelerate Drive Ignition》

「…悪魔らしいやり方で話しを聞いてもらっから！」

なのはは強い意志を込め、レイジングハートをヴィータに向けた

Side Out

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

現れた『影』

「シャマル、お前は離れて通信妨害に集中している」

「うん」

キイイン

シグナムに言われシャマルはバリアジャケットを纏い通信妨害を周囲に施した

「…闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてしまってる…今の状態で完成させてもはやては…」

フェイトはそう言いかけるが…

ジャキ

シグナムはレヴァンティンをフェイトに向け

「我々はある意味で闇の書の一部だ！」

ズガアアアン バチバチッ！！

そしてその上空でヴィータとなのはは激突していた

「だから当たり前だ！私達が1番闇の書の事を知ってたんだ！」

ヴィータは攻撃しながら叫んだ

「じゃあ、どうしてー！」

《Acceler shooter》

なのはの足元に魔法陣が現れ、複数の魔力弾が現れた

「くっ…！」

それに気づきヴィータは距離をとる

「どうして【闇の書】なんて呼ぶのー！」

「！？」

「なんで…本当の名前で呼ばないの？」

「ホントの名前…？」

ヴィータはなのはの言葉に動きを止めた

フェイトVSシグナムSide

フェイトはバルデッシュを構え…

《Barrier jacket Sonic form》

バチバチ！

フェイトはバリアジャケットを纏い

《Haken》

ドキュ！ガチャ！

カートリッジをロードしバルデッシュを構えた

「薄い装甲をさらに薄くしたか…」

シグナムはフェイトの姿…ソニックフォームの特徴を瞬時に理解した

「その分、早く動けます」

「緩い攻撃でも当たれば死ぬぞ 正気がテストロッサ？」

「貴女に勝つ為です！強い貴女に立ち向かうには、これしかないと思っただから！」

「…ッ！」

シグナムはフェイトのその闘う者の覚悟に心打たれ…空を仰ぎ…そして、

キイン

シグナムはバリアジャケットを纏った

「…こんな出会いをしていなければ、私とお前は一体どれほどの友になれただろうか…」

「まだ、間に合います！」

ジャギ

だがシグナムはレヴァンティンを構え

「…止まれん！」

涙を流しながら呟いた…

ドキュ！

シグナムはカートリッジをロード

その足元に魔法陣が現れ、そしてレヴァンティンを再び構えた

「我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば騎士の誇りさえ捨てると決めた…もう止まれんのだ…！」

「止めます！私とバルデツシュが！」

《Yes sir》

フェイトの足元にも魔法陣が展開された

Side Out

フェイトSide

フェイトはバルデッシュを構えながらシグナムの動きを見る…

(…キョウスケは今後もスコールとして私達の前に現れても今まで道理敵同士って振る舞ってって言ってたし…

今は…戦うしかないかな

…それにしてもキョウスケは何処に…?)

Side Out

なのは・ヴィータSide

「ホントの名前が、あつたでしょ!？」

「闇の書の…ホントの名前…」

「うん…」

ヴィータは自身が抱いていた闇の書の疑問もあつた為その事を考えていた

(闇の書の本当の名前…ハッ!? そういや前に恭介が何か言ってたな…たしか…なんとかの書とか…なんだっけ!? や、やて?)

ヴィータが思考の海に落ちていたその時、

ブオオオン!

「ハッ!？」

突如なのはの周囲に青色の魔力が集中し…

ガチィ!

「ああっ!バ、バインド!？」

なのははバインドに囚われてしまった

「ああ!？」

その様子にヴィータは驚いた



S i d e O u t

フ ェ イ ト S i d e

「ッ!?なのは!」

シグナムと鏝ぜり合いをしていたフェイトもなのはの異常に気がつき、シグナムとの距離を何とか取り…

《 P l a s m a l a n c e r 》

バチイバチバチ…

1発の魔力弾を精製  
周囲の気配を感じ取り…

「っ!そこっ!!!」

バチイイ!

上空に向かって打ち出した

ドオン!

フェイトの打ち出した魔力弾は何かに当たり空間が歪めた、フェイトはそれを見極めると、

「はあああああ！」

ガチイガチイガチイ！

フェイトは上空に向かって行き、その空間をバルデッシュで切り裂いた

「ぐっ…」

フェイトが切り裂いた空間からは仮面の男が現れた

「この間みたいには…いかない！」

ドキュ！

フェイトはカートリッジをロードし構えていたが…

ヒュ！

「フッ！！」

ドカツ！

横から現れたもう一人の仮面の男に飛び蹴りの一撃を受けてしまった

「うわあああ！」

フェイトはそのまま落下していき

シュ！

仮面の男の手から一枚のカードが現れ…

シュ！ガチイイ！

フェイトはビル激突寸前で仮面の男のバインドに拘束されてしまった

「うわあああ！」

フェイトはそのまま落下していき

シュ！

仮面の男の手から一枚のカードが現れ…

シュ！ガチイイ！

フェイトはビル激突寸前で仮面の男のバインドに拘束されてしまった

「うっ…あああ！」

そして囚われのフェイトの悲鳴が響いた…

S i d e O u t

「ふ、二人!？」

なのはは仮面の男が二人居る事に驚いた

シュ!

仮面の男はさらに複数のカードを自身の周りに展開し魔法を発動した

ブオオオン!ガチイ!

「ああ!？」

「なっ!?!ぐうう」

「うわぁ!くっ…!」

仮面の男が発動させた魔法でシャマル・シグナム・ヴィータまでも拘束されてしまった

「ん、ん…っ!」

「くっ…!」

「これって一体!？」

「…この人数だとバインドも通信防御もあまりもたん…早く頼む」

「ああ…」

スッ

仮面の男が手を掲げるとそこには…

「ああ！？いつの間に!？」

闇の書が現れた…

キイイイイン

「うわっ！ああっ！あああ!?!？」

闇の書が輝くと同時に苦しむヴィータ

その胸からヴィータのリンカーコアが抜け出してきた

キイイイイン

「ぐっ…ぐわあ!」

「あ、ああ…あああ!」

同様にシグナム・シャマルからもリンカーコアが抜き取られ闇の書に蒐集されていく

「…最後の頁は不用となった守護者自らが差し出す」

「ぐああ……」

「これまでも幾度かそうだった筈だ」

《Sammlung》

蒐集

キイイイン

「あ……あ……あああ！」

壊れ呪われたロストロギア

「ああ……」

「ぐっ……ぐあ……あああ！」

こんな物で誰も救える筈もない

「ッ……ああ！」

闇の書にリンカーコアを蒐集されシャマルとシグナム消えてしまっ  
た……

「シャマル！シグナム！何なんだ……何なんだよ！テメーは……！？」

ヴィータは仮面の男に向かい叫ぶが

キイイイイン！

「ぐああ…ああ…」

「プログラム風情が知る必要もなからう」

ヴィータもまたリンカーコアを吸収され消えかかる

ヒュン！

「てええええい…はああ！！！」

その瞬間、上空から駆け付けたザフィーラが仮面の男に向かい拳を振りかざした

バキイ！バチバチバチイイイ！

だが仮面の男のプロテクションに阻まれしまった

「…そうか、もう一匹いたな」

キイイイイン！

「ぐつぐぐぐ…」

仮面の男はザフィーラからもリンカーコアを抜き取り蒐集しようとするが、

「ぐつ…ぐおおお！」

ザフィーラは血の吹き出した拳に力を込め…

「…奪え！」

《Sammlung》

蒐集

再び仮面の男は闇の書を使用した

「ぐっ…てえりやあああ！！！」

リンカーコアを抜き取られながらもザフィーラは仮面の男に再び拳を振りかざした

バキィ！バチバチバチィィィ！

だが、再び仮面の男のプロテクションに阻まれてしまった…

To Be continued



悲しみの『覚醒』

病室

はやてSide

「ハッ!？」

はやては何かに弾かれるように目を覚ました

ドクン!

「っ!？」

はやての中で何かが覚醒しようとしていた…

Side Out

屋上

???? Side

「他の二人は…なのはとフェイトは大丈夫か？」

「4重のバインドにクリスタルケージだ 抜け出すまで数分はかかる」

仮面の男たちの上空には、なのはとフェイトを閉じ込めたクリスタルが浮かんでいた…

「十分だ…闇の書の主の…」

フィン！

目覚めの時だな…」

「いや…」

フィン！

因縁の…終焉の時だ」

そう言いながら仮面の男の姿がなのはとフェイトの姿に変わっていた

キイイイイン！

変身した偽なのはと偽フェイトたちの目の前に魔法陣が展開され、

その中心に

シユン!

はやてが強制転送され現れた

S i d e O u t

はやてS i d e

「あ……くっ……なのはちゃん?……フェイトちゃん?……なんなん?なんなんコレ!?!?」

はやては目の前に吊されてるように浮かんだヴィータ、目の前に倒れたザフィーラを見て混乱していた

「……君は病気なんだよ 闇の書の呪い、って言う病気」

偽なのはは淡々とはやてに話しかけた

「……もうね、治らないんだ」

偽フェイトもまるで残忍に笑い、楽しそうにそう言い放った

「えっ…？」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われる事はないんだ…」

偽なのはと偽フェイトは、はやてを絶望に落とそうと画策していた

「くっ…そんなんええねん…ヴィータを放して…ザフィーラに何したん？」

はやては胸の苦しみに耐えながら家族を…ヴィータやザフィーラを心配していた

「このコ達ね もう壊れちゃってるの…私達がこっする前から…」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えると思いきんで…無駄な努力を続けてた」

「ッ！無駄って何や！？シグナムは？シャマルは？」

悲痛な叫びをあげるはやてに偽フェイトは顎ではやての背後を示す  
はやてが後ろを振り向くと…

「……………ああっ！！」

…先程まで着ていた服が、そのまま着ていた人だけ消えてしまった  
かのように床に落ちていた…

「壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃおう」

二人がそう言うのと構えた手に魔力が集中した

「いやっ！…ちょ…やめてー！…！」

はやては偽なのは達は何をしようとしているか気付き止めようとするが…

「やめてほしかったら…」

「力づくでどうぞ」

その想いは砕かれてしまった…

「なんで、なんでやね！！　なんでそんなん！！？」

はやては涙を流し懇願するが

「ねえはやてちゃん…」

「運命って残酷なんだよ」

「ダメっ！やめて…やめてえー！…！！…！」

ズカアアアアン！

…偽なのは偽フェイトの攻撃はヴィータやザフィーラを飲み込み  
…消滅させた…

「…ぐわぁ…うっ…」

ドクン！

家族を目の前で奪われ苦しむはやての足元に白い魔法陣が現れ、そ  
して目の前には闇の書が現れた

《Guten morgen Meister》

お早うございます ご主人様

そして白い魔法陣はみるみる悲しみの闇に染まっていった

Side Out



はやては魔力柱の中に居た

「…我は闇の書の主なり…この手に力を…」

するとはやての手に闇の書が現れ

「…封印、開放…」

《Freilassung》

開放

すると闇の書が反応し、はやての身体を成人に変化、銀髪長い髪  
黒いバリアジャケットそして…4枚の漆黒の翼が現れた

「…ッ!」「」

その変貌になのはとフェイトは驚いていた

「…また 全てが終わってしまった…一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい…?」

「はやてちゃん!」

「はやて!」

「我は闇の書…我が力の全ては…」

スッ



はやて 闇の書がその手をかざし

《Diabolic emission》

キイイイン!

闇の書の掲げた手の平に巨大な魔力球が現れた

バチバチバチッ

「あっ!?!」

「ああっ!?!」

なのはとフェイトもその魔力に驚くしかなかった

「…主の願いをそのままに…ディアボリックエミッション…」

「あっ!」

「空間攻撃!?!」

なのはとフェイトはその攻撃の特性に気付いたが、それと同時に…

「闇に染まれ…」

闇の書の魔法が放たれた

ズカアアバチバチイイイ!

ディアボリックエミッシヨが広域に拡大する中、なのははフェイトの前に立ちレイジングハートを構えた

《Round shield》

キイイン！

バチイ！ズカアアバチバチ！

「うつつ！くつつ…」

なのはとフェイトはシールドごと闇の書の魔法に飲み込まれてしまった…

Side Out

遠く離れた場所で仮面の男達はその様子を観察していた

「持つかな あの二人？」

「暴走開始の瞬間までは持ってほしいな…」

仮面の男が二人話していると突然、

シュウウウ

突如仮面の男から光の粒子がもれ…

「なっ！」

「クッ!?」

そして

ガチイ!

仮面の男達はバインドによって拘束された

「…ストラグルバインド…相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する…あまり使い所のない魔法、けどこういう時には役に立つ…」

仮面の男達の前にクロノが降り立ち…

シュルシュルシュル…ガチイ!

「ぐわあ!…クッ!」

そしてクロノがデバイスを地面に突き立てると仮面の男からさらに粒子が漏れ出した

「変身魔法を強制的に解除するからね」

「ぐわあああ！」

パン！

変身魔法が解除され、そこに現れたのは…

「クロノツ！コノオ！！」

「こんな魔法、教えてなかったんだがな…」

仮面が剥がれ落ちた二人の女性…

「一人でも精進しろと教えたのは君達だろう…アリア、ロツテ」

クロノの仲間…いや師匠と言うべき人物がいた…

To Be continued

悲しみの『覚醒』（後書き）

次回 やつと主人公が戻ってきます！

キ「ホントか？」

イ「一応主人公なのに定番なかつたからですね」

キ「…気にしている事を…」

さ「ねえキヨウ君、もしかして…私のせいかな…？（ウルウル）」

キ「い、いや！さくらのせいじゃないから！あんの無計画な神のせいだから！さくらは気にするな！」

さ「うん…ありがとうキヨウ君」

イ「こつやつてフラグ立てるんですね…修羅場の数も増えそうですね」

キ「……妙に説得力あるな」

イ「作者に聞きましたから StrikerS編なんか特に…」

キ「と、特に…なんだ？」

イ「いや、見事な天然鬼畜っぷりだったと」

キ「鬼畜！？ぼ、僕の未来って…（ガクッ）orz」

さ「キョウ君！わ、私は何があってもキョウ君の味方だから 元気  
だして」

キ「あ、ありがとう さくらー！」

イ「（これで一つはフラグ確定ですね…フッフッフ…）」

あ、色々バレた？

(隠れたか…)

ディアボリックエミッションを放った闇の書はそう眩きただ佇んでいた

### ビル群

何とか闇の書の攻撃を回避した【3人】

今は身を隠すようにビルの陰に隠れて様子を伺っていた

「なのはごめん…ありがとう。大丈夫？」

「うん… 大丈夫」

「よかった〜間一髪だったね」

「あの〜…あなたは？」

なのはは目の前にいる見知らぬ少女に話し掛けた

「私は…さくら！」

よろしくね！なのはちゃんにフェイトちゃん

「さくら…？貴女は一体？」

「えへへっ」

数分前

キョウスケSide

シュン！

「っと…ここは…病院近くのビル屋上か…ん？」

あれは…ッ！クロノと猫どもかつ！？

「キョウ君キョウ君！あれ…」

「ん？なんだ…ってあれは…ディアボリックう！？」

しかも目の前になのはとフェイトが！

「さくら！なのはとフェイトを頼む！こっちも後から行くから！」

「う、うん！わかった！…フライ《翔》…！」



キイーン！

バサッ

おお！さくらの背中に羽根が現れて…意外と速く飛べるんだな…  
って関心している場合じゃないか…

まあ、なのは達はさくらに任せれば大丈夫か…

まずは…はやての心を踏みにじったであろう猫に対価を支払っても  
らわなければ

…え？そんな暇あったらはやてを助ける？

…まあ、原作での知識があったからこういう状況も想定していたん  
でちゃんと手は打ってあるからね…それにグレアム達は最終回に責  
任取って辞職したけど…それではやて達にした事が許されると思っ  
て呑気にイギリス隠居生活しているのがムカつくんだよね

「って訳で…インフィニティ、マテリア【ハーデス】セット！」

『オーライ、【ハーデス】セット！』

さあ、宴のはじまりだ…

『…マスター、セリフが悪役ですよ？』

イヤダナ〜セイギノミカタデスヨ〜

シュン！

ビル屋上

タツ！

つと…まずはクロノさんに…

「（クロックマネージャー！）」

バチイ

クロノさんにクロックマネージャーを使用して少し休んでもらい…

タツ！

「お、おまえは…！」

「カ、カミシロ…ひっ!？」

おゝ二人とも顔が真っ青だな

『殺気あてまくりのクセに…』

気絶しない程度だよ

「さて…猫姉妹よ…自分勝手な都合ではやてを苦しめた報い…受け  
てもらっぞ！」

「

カチャ

僕は2ndモードで銃口を向け…

「召喚！【ハーデス】」

バシイイイ！

マテリアを発動させ、猫姉妹の背後から大釜と供に現れた死神…【ハーデス】

シューウウウ…

その釜からは怪しげな煙りが立ち込め猫姉妹を包み込んだ

「ゴホツ…！な、なんだ…この煙りは…ゴホツゴホツ！」

「ゴホツゴホツゴホツ！…くっ…うわあああ！？」

二人の断末魔？が聞こえ、ハーデスの釜から発生した煙りが消えていきそして…二人の姿はなかった…

いや…正確には…

「…使い魔とはいえ命まで取ると後がめんどいからな…」

足元に仰向けになりピクピク痙攣し泡を吹いている小さな【カエル】が二匹いた

【ハーデス】は相手にダメージを与えると同時に一定確率で毒・混乱・睡眠・沈黙・ミニマム・カエル・スロウ・マヒ

を起こすのだが…全ての状態異常になったようだ…ざまあ！

バチイ！

「な、おまえはスコール！？いつの間に！！？」

クロツクマネージャーの効果は切れたので時は動きだした

「…ああクロノ提督、お久しぶりですね。あ、コレどうぞ」

僕はいつの間にか持っていた虫カゴ？をクロノに渡した  
その中には…

「…カエル？」

「はい、そのカエルは貴方が捕らえた猫姉妹ですから」

「なっ！？そ、そういえば二人がいない！？」

「当分は（半永久的に）その姿のままですから…それとグラム提督  
によるしくお伝えくださいね…約束は忘れずにと」

そして僕はさくら達と合流する為立ち去った

シュン！

クロノが何か言っていたが…まあスルーっすね

『半永久にカエル…ギ ユー隊長みたいな末路ですね…』

S i d e O u t

同時刻

なのは& a m p・フェイトSide

「闇に染まれ…」

闇の書の魔法が放たれた

ズカアアバチバチイイイ!

ディアボリックエミツシヨが広域に拡大する中、なのははフェイトの前に立ちレイジングハートを構えた

《Round shield》

キイイイン!

バチイ!ズカアアバチバチ!

「うづつっ!くっ…」

なのはとフェイトはシールドごと闇の書の魔法に飲み込まれてしまった…

シュン！

突如なのは達の後一人の少女が現れ…

「盾よ！彼の者の力より我らを守れ！シールド！《盾》」

キイン！

なのはのラウンドシールドの前方にさらに巨大な翼を象った盾が現れた

ズカアアン

「なっ!?!」

「シールド!?!誰?!?!」

なのはとフェイトは後ろを振り向くと、ピンクの杖をもった少女…さくらが居た

「二人ともこっち!」

「だ、誰?!?!」

困惑するのは達であったが

「いいから早くっ!」

「「！」「」」

さくらに促され脱出した

「ジョン！」

Side Out

現在

「私は…さくら！」

よろしくね！なのはちゃんにフエイトちゃん

「さくら…？貴女は一体？」

「えへへっ」

「シュン！」

「みんな！無事か？」

「僕はみんな合流…」

「あ、スコールさん！」

「あ、キヨウスケ！」

「あつキヨウ君！」

「「……………え？」」

約2名様が変な声を上げた

「フ、フェイトちゃん？今スコールさんをキヨウスケって…？」

「さくら…貴女キヨウスケの知り合い？」

「えっ！？フェイトちゃんまたキヨウスケって言ったよね！どういう事！？ねえフェイトちゃん！！？」

「な、なのは！そんな事より今はこのコの事だよ！」

「ほえええええ〜！？わ、私！？」

…なんかえらく大混乱中だな…仕方ない…

「あ…まずなのは、コレならわかるか？」

僕は懐から出した認識障害メガネをかけ…

「ふ、ふえええーっ！????キ、キヨウスケ君?!?!？」



なのは、声でかい！闇の書にバレる！

「ううっ…だって…」

まあビックリするのは解るが…

「で、フェイト…この【さくら】は僕のユニゾンデバイスだよ」

「ユニゾンデバイス？」

二人とも首を傾げているけど…あ、この時期まだユニゾンデバイスの知識はまだなかったのか？

「あ…平たく言うと、僕と融合してサポートしてくれるデバイスだよ」

「…ふん…でも、キョウスケのパートナーは私だよ キョウスケ？」

…今それを言うんですか！？フェイトさん…

「パートナー！？フ、フェイトちゃん！どーゆー事かな？かな？」

「どうもこうもないよ…なのは、ホラ」

フェイトが何故か優越感たっぷりの表情で、なのはに仮契約カードを見せて

「…フェイトちゃんの絵の書いてあるカード??」

「これは…キョウスケとキスすると貰えるパートナーの証のカードなんだよ」

フェイトさんはサラッと爆弾投下した…

「……………」

あ、時間が止まった

「ええええええええええええー！！！！！！！！！！？？キキキツスう？？」

だからなのはよ…声でかいて…

T o B e c o n t i n u e d

爆弾発言って処理が大変！

キヨウスケSide

「キキキキヨウスケ君！？フェイトちゃんとキスしたって…ホントなのかな？」

パニック中の割に何故冷静にレイジングハートをこちらに向ける？

あれか、魔王の血が成す技か！？

「あ…ホラ、以前フェイトがリンカーコア抜かれた時に…」

「あっ！そういえば…」

エリクサー飲ます際に口移しでしたので仮契約カード発生したからな

「でも、その後キヨウスケと【またちゃんと】キスしたんだ！」

…またフェイトさんは火にガソリンを注ぎ込むセリフを…

「…ふうん…レイジングハート…カートリッジフルロード…スター

ライトブレイカー発射シーケンス…」

ってちよい待てい！

「な、なのは！落ち着け！今ははやてを助けないと！」

僕がなのはを必死に説得していると…

「あ、でもキョウ君の仮契約って二人いたような…」

さくら！なんで知ってるのさ！

「私、仮契約のシステム管理もしてるからだよ」

そんなん聞いてないぞ！？

「…キョウスケ…私以外にも…キスしたんだね…」

フ、フェイトさん…？

「…バルディッシュ…カートリッジフルロード…プラズマスマッシュ  
ヤー発射シーケンス…」

あんたもかい！

「だから落ち着けー！ー！！」

ハア…ハア…ハア… つ、疲れる…

「キヨウスケ君… / /」

「な、なにかな？なのはさん…」

嫌な予感しかしないんだが…

「私と…仮契約してなの！ / /」

はい 嫌な予感的中！

「なっ、ダメだよ！なのはにはユーノが居るじゃない!？」

フェイトは必死になのはを止めている

…そーいやユーノって居たな〜 キレイさっぱり忘れてたよ

「えっ？ユーノ君はお友達だよ？」

何でユーノ君に悪いの？フェイトちゃん??？」

ああ、ユーノが報われない…

「あゝ、二人とも…はやての事忘れてない?」

「「……………あっ!」「」

その【あっ!】って…忘れたたんだな…はあ…

「キヨウ君…フェイトだよ!」

ああ…さくらに癒される…って、半分はアナタのせいでは!??

「…あのコ 広域攻撃型だね、避けるのは難しいかな…バルデツシユ！」

《Y a s s i r B a r r i e r j a c k e t L i g h t n i n g f o r m》

ブオオオン

フェイトはバリアジャケットを変更した

「はやてちゃん…ねえキョウスケ君、はやてちゃんは…」

「…闇の書の管理人格と融合して暴走中だな…」

「キョウスケ…これからどうするの?」

そっだな…ん?

ヒュウウ

「なのは!」

「フェイトお!」

おっ、淫獣とアルフ!

「…君、変な事考えなかつたかい？」

「いや…事実しか考えなかつたが」

「なんだと!？」

「てかさあ…何でスコールとフェイト達が一緒にいるんだい？」

「あ、それはね…」

説明中

「と言う訳なんだ」

フェイトがアルフ&ユーノに説明してくれた。

「へえ、スコールの正体がキョウスケだったんだ…よかつたじゃないかフェイト。ファーストキスが好「わーわー!ア、アルフ!な、何言ってるの!？」きな…って…わ、解つたからバルディッシュを向けないでくれよ」

「うう、ノアルフったら…」

フェイトが真っ赤になってバルディッシュを振り回しているが…あれって誤射とかないよな？

ジイイイ…

な、何か視線が…

「……………」

「何かな…ユーノ・スクライア？」

ユーノがあらさまに敵意剥き出しで睨んでた…ユーノに何かしたかな？

「……………いえ」

いえ…って言われても、ねえ…

「スコール…いやキョウスケ、アンタはフェイトの味方でいいのかい？」

「…まあ、フェイト個人でなら…」

カチャ

って、オイなのは…だから何故レイジングハートを向ける？」

しかもなのは目に光がない単色に!？

「…フェイトちゃん個人ってどういうコトカナ？」

怖っ!このコやっぱ魔王かも…

「あ…それはフェイト個人なら味方だけど、管理局の味方をする



「気はないって事だよ」

「えっ！？なんで？」

「…はやてをあんな目に遭わせたのは誰だと思っ？」

「それは…仮面の男の人だよな？」

「ではなのは、その仮面の男の正体は？」

「えっ！…ユーノ君分かる？」

「え！？…ぼ、僕も分からない…アルフは？」

「私に分かる訳ないじゃないか！」

なのは・ユーノ・アルフはまだ知らないか…

「クロノはもう気付いて捕まえてる頃だろうが…黒幕はグレアムで  
実行犯は使い魔の猫姉妹だから」

「…「なっ！？」」

一応民間協力者の立場でも自分の上司にあたる人がはやてをあんな  
目に遭わせた張本人ってのはショックかな

「…ほ、ホントなのかい？」

「そんなのデタラメに決まっているだろ！そんなヤツの言う事なん  
か信じなくていい！」

「ユ、ユーノ君…」

「君！キヨウ君が嘘言っているっていうの！？」

さすがにさくからもユーノの発言に力チンときたのか、珍しく怒っているな

「…ユーノ、キヨウスケの言っている事は本当だよ」

「…フェイト（ちゃん）？」「」

「前にキヨウスケに証拠も見せてもらった…グレアム提督は…はやてごと闇の書を凍結封印しよう」と…」

フェイトもその事を聞いてショック受けていたけど…大丈夫かな？  
なのはも根は優しいから、かなりショックだろうな…

「そ、そんな…そんなのってないよ！！はやてちゃんが何したっていうの！？そんなの…はやてちゃんは一生懸命生きているだけなの…！そんなの酷すぎだよ！！」

…やはりというか、なのはは目に涙を浮かべて叫んだ

「なのは…」

ギョッ

そんななのはを僕は優しく抱きしめた

「キヨ、キヨウスケ君!？」

「…ありがとう、なのは…  
はやての為に泣いてくれて…」

「…友達だもん 当たり前だよ／＼」

カチャ

「…フェイトさん、とりあえずバルディッシュを納めてほしいんだ  
が…」

そう! フェイトがハーケンフォームでバルディッシュの魔力刃を  
首に突き付けて…って軽く刃が食い込んでいるんですが!?

「…なのはを放したら…」

何コレ…超怖っ!?

ギユ!

「痛っ!?!さ、さくら?何故つねる!?!」

急にさくらが手の甲をつねってきた…なんでさ?

「…あれ?何でだろう??何かモヤモヤして…」

しかも無意識かい!

「で、キヨウスケ…なのはを…放さないの？」

ヤバイ…フェイト、目が危ない…

「あ、ああ…そうだね。ごめんなのは 急に抱きしめて」

そう言い、なのはを放すと

「あっ…う、ううん／＼む、むしろ…ゴニョゴニョ…／＼」

？最後の方が聞き取れないが…まあいいか

「ゴホン！…まあ とりあえず当面は…はやてを助けないとね

なのは達も聞いたと思うけど、闇の書の意識がある内に助けないと…はやては完全に取り込まれて【闇の書】は転生機能使ってしまうから…」

「うん…はやてちゃんを助けないと…」

「はやては私達の友達だからね…」

なのはとフェイトはデバイスを強く握りしめ、決意を秘めた目をした…

To Be continued

「あ、キヨウスケ君仮契約は？」

…覚えてたんですね　なのはさん…

「「む〜〜〜っ！」「」

その横でフェイトとさくらがむくれていたが…とりあえずなのはは  
スルーしよう…

S L B は封印指定に!?

ビル屋上

「主よ…あなたの望みを叶えます…」

キイン!

闇の書の足元にベルカ式魔法陣が現れる

「…愛おしき守護者達を傷つけた者達を…今、破壊します」

《G e f a n g n i s d e r M a g i e》

ゴオオオオ…

闇の書を中心として結界が広がっていった

キヨウスケSide

「あつ！」

ゴオオオオ...

これは…結界か！？

「くっ…何？」

「前と同じ閉じ込める結界だ」

フェイトの問いにアルフが答えた  
親切な解説ありがとうアルフさん！

「やっぱり、私達を狙ってるんだ！」

そりゃー、あの猫姉妹がなのは達に変身してはやてを苦しめたんだから…闇の書から見たらなのは達を目の仇にしているだろうな

「今クロノが解決方法を探してる 援護も向かってるんだけど、まだ時間が…」

たしか…解決方法つても…原作では、あまり活躍しないデュランダ  
ル持つてくるだけだったよな…援護もアースラだけだったよな…  
よく考えたら役にたたねえ〜！！

「それまで私達で何とかするしかないかな？」

「いや、フェイト…解決方法なら一応あるぞ」

前に話したの忘れたか？

「えっ！？ホント？キョウスケ？」

「…もつとも予定していた計画は、あのポケ提督やバカネコ姉妹のせいで邪魔されたけどね」

「そ、そうなんだ…」

そうなんだよまったく、はた迷惑な…ん？

「なのは…どうした？」

なのはが闇の書の方を見ているが…？

「あつキョウスケ君…ううん、大丈夫だよ」

ならいいけど…

「…スレイプニール、羽ばたいて」

《Sleepnir》

バサッ！

闇の書は4枚の漆黒の羽根を羽ばたかせ空に舞った

バサッ、ビュユウ…

「キョウ君！闇の書が来るよ！」



「キョウスケ君、どうしたらいいの？」

「…とりあえず、闇の書を取り押さえないと…みんな！手伝わてくれ！」

バチィ！バチィィ！！

闇の書とフェイトは上空で激突していた

「ハッ！」

ジャラジャラ！

ユーノはその隙を付いて闇の書の足元にバインドを掛ける

「ふん！」

シュルシュル、ガチィィ！

アルフもバインドで闇の書の右腕を封じ、

「風よ！戒めの鎖となれ！ウインディ！《風》」

キイン！  
ゴオオオツ！

さらにさくらもウインディで闇の書を捕まえた…が、

「…砕け」

《Break up》

バチイ！

一瞬にして3人のバインドを破壊してしまった

「ちっ、フェイト！なのは！同時攻撃だ！！」

「うん！！」

《Plasma smasher》

シューウウバチバチッ！

「ファイヤー！」

ドオオン！

《Divine buster extension》

シューウウウ…

「シューート！」

ドオオオン！

一瞬のスキに上からフェイト、下からなのはが同時に砲撃を放った

「インフィニティ！2ndモード！コズミックブラスター！！」

ドカアアアン！

僕は正面から、合計3方向からの砲撃が闇の書を狙う…が、

「…盾」

《Panzer Schild》

バキイイ！

闇の書は3人分の砲撃を受け止めた

「くづっ…！」

「くうう！」

「ちっ！カートリッジ…！」

さらに僕はカートリッジをロードしよじりよするんじ…

「…刃持て血に染めよ」

《Blutiger Doich》

「あっ!?!」

なのはも闇の書が防御しながら魔法詠唱しているのに気付いた…

「てか、その体制からかよ!?!マテリアセット【バリア】+【ぜんたいか】!【マバリア】!?!」

キイイイン!

とつさに【マバリア】をなのはやフェイトにも展開!

…

「穿て、ブラッディダガー」

闇の書の周りに紅く光る無数の魔力刃が

キイイン

ドカアアン!

一瞬にして魔力刃は僕やなのは、フェイトを襲った

「なのは!フェイト!大丈夫か!?!」

「くっ!な、なんとか…!」

「くう…!だ、大丈夫…!」

爆煙からフェイトとなのはは現れた  
…つたく、なんか原作より威力強くなってるのか!?

「キヨウ君!大丈夫!?!」

さくらが心配そうにこちらに駆け付けてくれた

「さくら…とりあえず大丈夫だ。だが、このままじゃジリ貧だな…  
何とか近づいて魔力を…」

と、さくらと話していると…

「咎人たちよ 滅びの光を」

キイイン

闇の書が手を掲げると【桃色のミッド式魔法陣】が展開された

「おいおい…」

「キ、キヨウ君…あれって確か…」

キイイイイン

魔力の粒子がその手に集中していく

「まさか!」

「あれは!?!」

アルフとユーノもソレに気付き驚愕した

「…星よ集え 全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライトブレイカー…?」

なのはがつぶやく

さすがになのは自身の魔法だからそりゃ気付くか

シュウウウ…

さらに闇の書に魔力が集まる

「キョウスケ! さくら! アルフ! ユーノ!」

「ああ!」

「う、うん!」

「うん」

「あいよ!」

フェイトの掛け声で僕とさくらはなのは達と、ユーノとアルフは別方向へ速攻で離脱していった

「…貫け 閃光」

闇の書の詠唱はさらに続いた…

Side Out

アルフ、ユーノSide

アルフはユーノを担いで高速飛行で距離を取っていた

「なのはの魔法を使うなんて」

「なのはは一度蒐集されてる その時にコピーされたんだ」

そして二人はさらにスピードをあげ闇の書から離れていった

Side Out

キヨウスケSide

僕は、なのは・フェイト・さくらと共に超特急で離脱中です

「ちょ！？フェイトちゃん、こんなに離れなくても…」

なのははやや抗議気味にフェイトに詰め寄っていた

…コイツ、自分の魔法の非常識さに気付いてないんかい！？

「至近であんなの食らったら防御の上からでも落とされるっ！回避距離を取らなきゃ！」

さすが体験者…無印版でよくフェイト無事だったと今でも思うよ

「なのは、自分の魔法の破壊力くらい把握しとけよ！…非殺傷でも致命傷レベルのダメージ食らうって何処のバグ技だよ！…たく、その威力…ホントに【アクまた】かもな！」

「…そんなに凄い魔法なんだ…でもキョウ君、【アクまた】って何？」

「ん？どこかの魔導士の名称にならって僕が命名した【悪魔すら恐ろしくてまたいで通る】って意味での二つ名」

「あ…それ納得かも…」

フェイトはそれを聞いてどこか納得した顔をしていた  
あ、でもさくらがドン引きしてるよ…

「ちよつと〜！キョウスケ君もフェイトちゃんもヒドイよ〜！？」

なのははかなり抗議の雄叫びを叫んでいたが…



「いや酷くないぞ？あんな非常識な魔法組んだ大元なんだし」

そりゃツツコミたくなるよな

「うづうづ…」

なのはは若干涙目だった

あ、いや…決してSではないから  
事実を述べたダケダヨ？

『あれですかマスター？好きなコ程いじめたくなるって…』

ミシミシッ！

「あゝ急に握力計りたくなつたな」

『す、すみませんマスター！

ヒ、ヒビが！？ホントマジすみませんっ！許して下さいっ！…！』

口は災いの元だよ？

キイイイ…

ふと後方を見ると、さらに闇の書は魔力を集めていた

てかどんだけ魔力集束する気なんだ！？

「みんな！飛行速度上げるぞ！」

「「「うん!」「」

ビュュン!

さらにスピードアップして闇の書との距離をとっている...

《Sir there are noncombatants  
on the left at three hundred  
yards》

左方向300ヤード、一般市民がいます

「「えっ!?!」「」

バルディッシュの言葉になのはとフェイトは驚いた

一般市民?

.....あ”っ

...あの二人...忘れてた.....

Side Out

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

なのは違もバレた！！

アリサ、さすがSide

道路に一人佇むずか

「はー…っ」

結界内に閉じ込められ、辺りの様子に呆然としていると…

タッタッタ

「やっぱり誰もいないよ！ 急に人が居なくなっちゃった…」

辺りの様子を見てきたアリサがずかの元に駆け寄って来た

「……………」

「辺りは暗くなるし、何か光ってるし…一体何が起きてるの！？」

「うーん…」

困惑するずか

「とりあえず逃げよう！なるべく遠くへ！」

「う、うん……」

ガシッ！

そう言い、二人は手を取り合い走り出した

Side Out

キイイイイ……

さらに闇の書のチャージは続いていく……

キヨウスケSide

ユユユユ

《Distance…Seventy sixty fifty…》

バルディツシュが民間人…まあアリサとすずかなんだけど、二人の  
所まで誘導してくれている

「キョウスケ、なのは、さくら…この辺」

「うん」

なのははそう頷くと一気に急降下…って急降下あ!?

「くっくっ…!」

ヒュウウ…ズザアアア!!

なのはは空から降下、スライディングし煙りを撒き散らしながら派  
手に着地した

…この頃から結構ムチャするんだ…

ヒュウウ、タツ!

フェイトは信号機の上に着地

まあ、なのはに比べたら穏便だ…日常で信号機に乗ったらアウトだ  
な…

僕とさくらは上空で待機しているよ?  
上からの方が見渡せるし〜

《Twenty eight》

「えっ！？うん…（キヨウスケ、すぐ近くに居るみたいなんだけど…そっちはどうかな？）」

どっちらこちらに近付いているようだな…てか、

「（なのは！…煙り撒き散らすなよ！視界が悪くて見えん！）」

念話でなのはにツッコミを入れた

「（ふえええ！？こ、これは…その、緊急事態だったし…）」

「（まあいい、とりあえず視認でアリ…一般市民を探すぞ）」

「（う、うん！）」

…危なくネタばれする所だった

たしか、原作だとあそこからアリサ達が出てくる…ん？気配が…

コッ、コッ…

なのはは煙の中歩きながら辺りを見回し、そして…

タッタッタッ

路地から出て来る人影を発見…あゝやっぱりあの二人かゝ

「あっ！あの、すみません！危ないですからそこでジッとしてて下さい」

なのはは走っている二人に話しかけた

「えっ？」

「今の声って？」

アリサとすずかがその声に気付き振り返ると煙りは晴れ…

「なのは？」

「フェイトちゃん？」

バリアジャケットを纏ったなのは達を見つけて、アリサとすずかは驚いた

…なのははともかくフェイトは一般人からみたらコスプレだからな  
…違う意味で驚いてたり…まさか、ね

「あ…」

ちなみに、なのはとフェイトもアリサ達の姿を見て驚いていた  
ん？僕はバレてないのか？

ほら、今認識障害メガネかけてないから【スコルVer】なんで  
すよ

この姿で会った事ないからバレてませんよ

…ん？たしかこのタイミングって…ヤバッ！闇の書の…

シューウウウ…



「スターライトブレイカー…」

ドゴオオオオン！！！！

なのは達が出会ったと同時に、闇の書のスターライトブレイカーが6人に放たれた…

「あっ！？」

「「ああ！？」」

アリサとすずかは迫ってくる光に驚いていた

ゴオオオオ！

「（フェイトちゃん、アリサちゃん達を）」

「（うん！）」

カチャドキュ！

フェイトはカートリッジを一発ロード

「二人とも、そこでジツとして！」

フェイトに言われ二人は抱き合うように佇んだ

《Defenser plus》

キイイイン

アリサとすずかを包むようにバリアが貼られた

タツ

「ふっ！」

キイイイン

フェイトは二人の前に着地し守るように自身の前に障壁を展開

「さくら！シールドを二人に！！」

「うん！、盾よ！彼の者達を守りたまえ！シールド！《盾》」

キイイイン！

ブオン！

フェイトが張った結界の前にさくらのシールドが現れた

「レイジングハート！」

ドキュドキュ！

なのはもカートリッジを2発ロード

《Wide area protection》

キイイイン

「んっ！」

なのははフェイトの前でプロテクションを展開した

「ファイヤーウォール5重展開！！」

ヴオオン！

さらになのはプロテクションの前に僕のパファイヤーウォールを5重に展開…原作より強固な防御になったが…

ドゴオオオオ！バチィバチィ！

そしてスターライトブレイカーが僕たちを飲み込んだ

「くっ！？なんて魔力嵐だ！！」

さすが基が魔王様の魔法だな…

「（…キヨウスケ君、今何か失礼な事考えてない？）」

念話でなのはが話しかけてきた…余裕あるな、なのはさん…

「（…いや、それより気を抜くなよ。アリサ達が後ろに居るんだからな）」

「（わ、分かってるよ〜）」

ま、こんだけ防御固めれば大丈夫とは思うがね

「（なのは、なのは大丈夫!?!）」

「（フェイト!?!）」

ん?ユーノのアルフからの念話か?

「（んっ!、大丈夫ではあるんだけど…!）」

「（アリサとすずかが、結界内に取り残されてるんだ）」

「（なんだって!?!）」

「（くっ!エイミーさん!）」

アースラ

ピッピッピッピッピッ!

素早い動きでコンソールを打ち込むエイミー

「余波が収まり次第すぐ非難させるっ! 何とか堪えて!」

「（ハイッ!）」

Side Out

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

安請け合いは罪なのか？

交差点

キヨウスケSide

ようやく砲撃が収まり…

「「うっ…っ」

アリサとすずかは、二人抱き合いながらしゃがみ込んでいた…  
そりゃ一般市民がいきなりアレな砲撃に襲われたからな　怖がつて当然だな

「もう大丈夫…」

「すぐ安全な場所に運んで貰うから、もう少しジツとしてね」  
フェイトとなのはが二人に話しかけた

「あの…なのはちゃん？、フェイトちゃん？」

「ねえ！ちよっと…」

二人がなのは達に話しかけようとするど…

キイイイン

二人の足元に転送魔法陣が展開され

「あっ!?!」

「ああっ!?!?ああ…」

シュン!

そして二人は転送された

「見られちゃったね」

「うん…」

「…二人とも、後でアリサ達にちゃんと話さないとな」

「うん、そうだね…って!キヨウスケ君もだよ!?!」

何を言うのか?なのはさん

「いや、僕はこの姿でアリサ達に会った事ないからバレてないよ?」

「ううっっ…なんかズルいっ!」

「キ、キヨウスケ、私達もバレちゃったんだし…その、ね？」

ね？ って言われても…ねえ？

「あ、だつたら記憶消す魔法あるけど…使う？なのはちゃん？フエイトちゃん？」

あ…さくらの言っている魔法は…たしかイレイズ《消》だったかな？

「…なんか、そーゆーのはちょっと…」

「うん、なんか人の記憶を勝手にいじくるってのは…抵抗あるかな」

「だそうだ、さくら…ハア 仕方ない、話す時は僕も付き合つよ」

アリサやすすか達には、いずれ話す事になったと思うから別に問題ないし

「ホント!？」

「ありがとう！キヨウスケ！」

ギョツ！

いや、お礼言われる程でもないんだけどさ…

「二人とも…なぜ抱き着く？」

「抱き着きたいからだよ」「」



うわっ、ストレートですね〜

「…なのはちゃん、フェイトちゃん…今はそんな事してる場合じゃないよ?」

な、なんかさくらが怒っているような…

「べ、別に怒ってないもん!」

いや…怒ってるじゃん…

「…とりあえず、離れよっか…二人とも」

二人は残念そうな顔で離れてくれた

「なのは、フェイト アリサ達の事をアルフ達に…」

「うん(ユーノ君、ごめん 二人の方を守ってあげてくれるかな?)」

「(アルフもお願い)」

僕の意図が分かった二人は、念話でユーノとアルフに二人の護衛を頼んだ

…また二人のいる方にスターライトなんぞぶち込まれたら…

「(でもフェイトお)」

それでも食い下がるアルフ…ったく

「（ご主人達なら僕が守るから大丈夫だよアルフ）」

「（キ、キヨウスケ！？…そうだね、アンタにならフェイトを任しても大丈夫だね）」

「（…スクライアもそれでいいな？…大丈夫だ、なのは達は必ず守るよ）」

「（……ああ）行こうアルフ」

…なんか言葉にトゲがあるよな…淫獣って言った事で根に持つてる？

「あ、ああ…（キヨウスケ、二人を頼んだよ）」

ヒュン！

後にアルフから聞いた話だと、この時のユーノの顔が恐ろしかったと語っていたが…だから別に変な事は言っていないよな？

『（…なのは嬢がマスターの事はかり見ているから嫉妬してるって気付かないのでしょうかね…ドロドロな多重関係は面白いからいいですが）』

…なんか変な電波が？

「さて、これで二人の安全は確保されたが…どうした？なのは？フ  
エイト？」

そう、アルフ達との念話が終わってなのは達を見ると…

「……………／／」

二人とも顔が真っ赤になって頭から煙りが…？

「さくら、二人はどうしたん…」

訳を聞こうとさくらの方を見ると…

「む……………っ！」

頬を膨らませたさくらが現れた！

…なんとなく逃げてみるか？

「キョウ君！わ、私も守ってくれるよね！？」

なんか凄い勢いで迫って来たさくら…てか顔近っ！？

「あ、ああ…勿論さくらも僕が守るよ」

「あ、ありがとう…キョウ君／／」

さくらもなのは達同様に顔が真っ赤になって…

…訂正

なのは達から急に黒い覇気が!?

「キヨウスケ(君)…なんでそう節操なく他の女の子に優しくするかな…?」

カチャ!

「ち、ちよ待て!?!何故に二人してデバイスをこっちに向ける!?!」

「それは…」

「O H A N A S H I する為だよ…キヨウスケ君」

「い、いや…今はそれより闇の書を…」

「…問答無用!?!」

ヤバイ…二人とも目がマジだ…  
何とか切り抜けないと…

「(なのはちゃん、フェイトちゃん クロノ君から連絡! 闇の書の主に…はやてちゃんに投降と停止を呼び掛けてって)」

あ、エイミィさんからの通信?!?!

「ほ、ほら!エイミィさんもああ言ってるんだし!」

何とかなのは達を説得！

「…うん」

「そうだね…」

助かった…エイミーさんが女神に見えるよ

「じゃあO H A N A S H I は後でしょうねっ キヨウスケ  
君！」

結局するんかい…

「（なのはちゃん？フェイトちゃん？どうかしたの？）」

「（あ、いえ分かりました

…はやてちゃん、それに闇の書さん…止まって下さい！ヴィータちゃんを傷つけたの私達じゃないんです！）」

「（シグナム達と私達は…）」

二人は闇の書の管理人格を説得してるが…無理だろうな

「我が主は、この世界が自分の愛する者達を奪った世界が悪い夢であつてほしいと願つた…我はただ…それを叶えるのみ 主には穏やかな夢の内とわで永久とわの眠りを…そして、愛する騎士達を奪つた者には…永久とわの闇を！」

キイイイン

闇の書が手を掲げ、足元に魔法陣が現れた

「闇の書さん!!」

なのは…その名前は逆効果だ…

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…」

闇の書は悲しみの表情で呟いた…

「あっ…」

ゴオオ…ドカアアア!

突如、道路の下から蒐集した魔法生物の触手などが現れるのはやフ  
エイトを絡め捕った

S i d e O u t

T o B e c o n t i n u e d



## 消失する金色

前回までのあらすじ…

「闇の書さん!!」

なのはが真名ではなく、呪われた名で呼んで管理人格の地雷を踏んだ…

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…」

結果…

ゴオオ…ドカアアア!

突如、道路の下から蒐集した魔法生物の触手などが現れなのはやフエイトを絡め捕った…

「あっ! ああっ!」

「くっ! あああ!」



キヨウスケSide

僕とさくらは何とかツタは回避できたが、地面から伸び出た甲殻獣の首？に襲われてなのは達と分断されていた

「なのは！フェイト！」

二人を助けに行こうとするが…

「  
ッ！」

ズカアア！

「  
きゃあ！」

「ッ！さくら！？大丈夫か！？」

「う、うん…なんとか」

くっ！なんて数だ！？

原作でもこんな数いなかったぞ！？

「ジャマだ！インフィニティ1stモード！」

『1stモードルシファーSet Up!』

キイン！

「マテリア【いかずち】 + 【ぞくせい】セツト！【サンダガ】

ズカアアア！

さらに僕は、サンダガを剣に掛け…

「さくら！雷を！」

「うん！…雷よ！彼の者の力となれ！サンダー！《雷》」

ズカアアン！

さくらの雷も僕の剣に宿り…

バチ！バチバチッ！！

剣に宿ったサンダガと《雷》が激しく放電した

「カートリッジロード！」

《Load Cartridge》

ドキュ！ドキュ！

さらにカートリッジを2発ロード

「いくぞ…！崩魔…雷刃…！」

僕は剣を突き出し…

タツ！

「【ブロー・ガ・ルーン】…！！！」

甲殻獣の群れに突撃

ドカドガアア！ドカアアン！！

甲殻獣を猛スピードで次々と貫通していった

S i d e O u t

「…ハッ…！ま、まってよキョウ君…！  
フライ！《翔》」

キイン！

バサッ！

…あ、さくらの事…忘れてた  
大丈夫…だよな？

なのは・フェイトVS闇の書Side

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…  
それでもいい…」

ギョツ！

なのはとフェイトに絡みつくツタは二人を締め付けた

「くっ…くう…！」

「ああ…！」

「私は、主の願いを叶えるだけだ…」

「願いを叶えるだけ？そんな願いを叶えて、それではやてちゃんは  
ホントに喜ぶの！？」

心を閉ざして何も考えずに、主の願いを叶える為の道具でいて…貴  
女はそれでいいの！？」

「…我は魔導書、ただの道具だ」

「だけど…言葉を使えるでしょ！？心があるでしょ！？そうでなき  
やおかしいよ…」

ホントに心がないのなら…泣いたりなんかしないよ！！」

そう言われ、闇の書は頬を伝う涙に触れた…

「この涙は主の涙…私は道具だ 悲しみなどない…」

「ッ！…バリアジャケットパージ！！」

《Sonic form》

ガチャ！ドキュ！

バシイイ！

フェイトはバリアジャケットパージの余波で締め付けたツタを吹き  
飛ばしなのはと共に脱出した

「くっ…」

「…悲しみなどない？ そんな言葉をそんな悲しい顔で言ったって  
…誰が信じるもんか！！」

「貴女にも心があるんだよ！？悲しいって言っていていいんだよ！？貴  
女のマスターは、はやてちゃんはきつとそれに応えてくれる優しい  
子だよ！？」

「だからはやてを解放して！武装を解いて！お願い！」

フェイトとなのはは闇の書に呼び掛けるが…

「……………」

闇の書は沈黙したままだった

ドカアアア！！

「な、何！？」

「なのは！何か後ろから向かってくる！？」

S i d e O u t

キョウスケ S i d e

タツ！

「なのは！フェイト！大丈夫か！？」

「キョウスケ君！！…おどかさないですよ！」

「キョウスケ…うん、こっちは大丈夫…。な、なんか後ろが怖い事になってるね…」

後ろ?…ああ、【ブロー・ガ・ルーン】で突破攻撃したから甲殻獣の残骸が散乱してるだけじゃん!

「「「だけじゃん…って…」」」

なんか二人が呆れ顔しているが、二人はとりあえず無事か…後は

「闇の…いや、夜天の魔導書…」

「…あの包囲網を突破するとは…さすがだなキョウスケ…」

「…そりゃどうも」

やっぱりなのは達と分断されたのは意図的にか…

バサッ!

「ハア、ハア…キ、キョウ君!置いてくなんてひどいよ!」

「あゝさくら…ゴメンゴメン でも障害はなかったでしょ?」

殆どブロー・ガ・ルーンの雷の放電の余波で吹き飛んでたからな

「それでもだよ!!む〜〜〜!!」

さくら…「ご機嫌斜めだな」

「ゴメンさくら、埋め合わせに今度何か奢るからな」

「ホント！？絶対だよキョウ君！！」

速攻で機嫌が治ったよ…女の子ってゲンキンだなあ…

ジイイイ…

「……………」

な、なにか凄い勢いで二人分の視線で射抜かれているんですが！？

「ど、どうした？二人とも？」

視線の先に居る二人…なのはとフェイトに恐る恐る聞いていると…

「さ、さくらちゃんばかりズルイ！！」

「そ、そうだよ！キョウスケ！！私達にも何か…その…」

二人が（なのはは特に）騒いでいるな

「わ、分かったよ、二人にも何か奢るよ…この件が片付いたらね」

「「約束だよ！キョウスケ（君）！！」（ニコッ）」

えらく素敵な笑顔で二人は嬉しそうに笑った

ゴゴゴゴゴ…

突如地響きがし…



ドオオン！ドオオン！ドオオン！ドオオン！

あちこちの地面から火柱が噴き出た

「…早いな、もう崩壊が始まったか…私もじき意識を無くす…そう  
なればすぐに暴走が始まる 意識のある内に、主の望みを叶えたい  
…」

《Blutiger Dölich》

キイイイン

闇の書が手を掲げると

キイン！

「はっ！？」

キイン！

「ああっ！？」

キイン！キイン！

「囲まれたか？」

「きゃ！？」

なのはとフェイト、僕とさくらの周りを囲むようにブラッティダガ

ーが囲んだ

「闇に…沈め」

キイイイ…

ダガーが紅く光はじめ…

ドゴオオオン！

二人を囲んだダガーが爆発した

「……ッ？」

爆煙がはれ、その中から出てきたのは…

「あゝヤバかった」

「あ、ありがとうキョウ君…でもこの体制は…はずかしいかな／＼」  
瞬動で爆発の瞬間にさくらを脇に抱えて脱出した僕と

「ありがとうフェイトちゃん」

「大丈夫？なのは？」

なのは抱いたフェイト…フェイトはソニックフォームのスピードで爆発を回避したのはを助けたようだ

フェイトは闇の書の方を向き

「このッ…駄々っ子!!」

《Sonic drive…》

「言う事を…」

《Ignition》

タッ!

「聞けー!!」

そのままフェイトは闇の書に突撃していった

「まで!フェイトッ!」

僕はフェイトを制止したが…遅かった!

「…お前も我が内で、眠るといい」

「はあああああ!!」

ガチン!

しかしフェイトの一撃は闇の書の防御壁に阻まれ…そして、

「あっ…!?!?」

キイイイイ…

フェイトの身体が金色に輝き、

「あ……………」

フェイトは力無く落下していきながら…

「!?!?フェイトちゃん!?!」

「フェイト!?!」

「フェイトちゃん!」

キーン!?!

弾けるように消えてしまった…

《Absorption》

吸収

Bannon!

「すべては、安らかな眠りの内に…」

「ああ……」

「……フェイトちゃんが……消えちゃった……」

T o B e c o n t i n u e d

## 闇の中の虚像

前回のあらすじ…

フェイトが闇の書に飲み込まれました…

キョウスケSide

「あ…ああ…」

「なのは！しっかりしろ！」

「…！！キ、キョウスケ君…」

僕の声で呆けていたなのはがすぐに我に帰った

「フェイトはまだ無事だ！…そうでしょ？エイミィさん」

どうせこちらをモニターしてる筈だしな

「状況確認!…フェイトちゃんのバイタル、まだ健在!闇の書の内部空間に閉じ込められただけ。助ける方法…現在検討中!…ってホントにキミ、あのキヨウスケ君なんだね」

「まあ、そうですね。…それにしても闇の書の内部空間か…」

「我が主も、あの子も覚めることない眠りの内に終わりなき夢を見る…生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「…永遠なんてないよ…みんな変わっていく…変わっていくかなきゃいけないんだ。私も…貴女も!」

なのははレイジングハートを強く握り構えた

あ、ゴメンなのは。僕一応不死身なんだよね…ある意味永遠?…ま、まあ冗談はこの位にして

「なのは、ここじゃ万が一にも被害が大きくなる…海上まで押し出すぞ!さくらもいいか?」

「うん!」

Side Out

フェイトSide

チュン、チュンチュン

「……んっ」

小鳥のさえずる声でフェイトは目を覚ました

ガサツ

フェイトは何故かベットで寝ていた  
ベットから起きて隣を見るとそこには…

「すう…すう…」

子犬モードのアルフと、フェイトと同じ金髪の少女が寝息をたて眠っていた

「えっ!?!」

その少女は本来なら居ないはずの少女…

「……は…?」

辺りを見回し、フェイトが見覚えのない部屋で戸惑っていると…



コンコン

「フェイト、アリシア、アルフ 朝ですよ」

「まさか…」

フェイトが聞き覚えのあるその声の主…母、プレシアの使い魔で、既に消えてしまった筈の人物に驚いていると…

ゴソッ

隣で少女が目を覚まし

「ん…んん おはよ、フェイト」

「あ…」

フェイトは目覚めた少女…過去の事故で命の灯を消したアリシア見て呆然とした

ガチャ

「みんなちゃんと起きてますか？」

「はい」

「ん…っ眠い」

部屋に入って来た女性…リニスにアリシア・アルフは返事をした

「二人ともまた夜更かししてたんでしょ？」

「ちょっとだけだよ」

「ね」

「早寝早起きのフェイトを見習ってほしいですね」アリシアはお姉さんなんですから」

「ぶ~~~~っ！」

「ふふっ」

三人の会話を呆然と聞いていたフェイトだったが、

「あの…リニス？」

「はい、なんですか？フェイト」

そしてフェイトはアリシアの方を向き

「…アリシア？」

「ん？」

確認するように二人の名を呟いた

「ふう 前言を撤回します 今朝はフェイトも寝ぼけ屋さんのよう  
です」

「フフフッ」

「さっ着替えて 朝ご飯です プレシアはもう食堂ですよ」

「ッ！？」

フェイトは驚愕した

「かあさん……」

P.T事件…虚数空間に落ちて消えてしまったその母の名を聞いて…

「母様おはよう〜」

「おはよう〜プレシア」

「アリシア、アルフおはよう」

「プレシア、今日は困りましたよ 今日嵐か雪になるかもしれません」

「ん？」

「ホラ、フェイト」

リニスに呼ばれたフェイトは柱の物影から戸惑いながら出てきた

「あ……………」

「フェイト、どうしたの？」

「どうも何か怖い夢でも見たらしくて、今は夢か幻だと思ってるみたいですよ？」

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

「有り得る!！」

アリシアとアルフは冗談気味で話しあっていた

「フェイトいらっしやい」

「あ……………」

優しく微笑む母プレシアに呼ばれフェイトは顔を俯きながら側に寄った

スッ

プレシアはフェイトの頬を両手で触れると

「…はっ!？」

フェイトは目を見開くほど驚いてしまい一歩下がってしまった

「怖い夢を見たのね？でも、もう大丈夫よ　母さんもリニスもア  
シアもみんなあなたの側にいるわ」

「プレシアも私も」

「そう、アルフもね」

「まあ、朝食を食べ終わる頃には悪い夢も覚めるでしょう」

「さあ席について頂きましょう」

「は～～～い」

（違う…これは夢だ　母さんは私にこんな風に笑いかけてくれた事  
は一度もなかった　アリシアもリニスも今はもういない…でもこれ  
は…

私はずっと…欲しかった時間だ

母さんが居て…アリシアが居て…リニスやアルフと一緒に笑って過  
ごす。

何度も…何度も夢に見た時間だ…）

S i d e O u t

はやてSide

「…眠い…眠い…ん？」

はやては目の前に居る銀髪の女性に気付く

「そのままお休みを…我が主 貴女の望みは全て私が叶えます…目を閉じて、心静かに夢を見て下さい…」

その言葉に促され、はやては眠りの海に落ちかけていた…

Side Out

海上

キヨウスケSide

「ふんっ！」

キーン！

なのはは障壁を張り

ドカアアン！バチバチバチツ！

闇の書の攻撃を防いでいた…が

パライイーン！

「あつ！？」

障壁は破られ

《Schwarze Wirkung》

ドカアアン！

「きゃああああ！」

バシヤアアア！

なのはは海に落とされてしまった

「ツ！？さくら！なのはのフォローを！」

「うん！」

バサツ！

海中に落ちたなのははさくらに任せて…気になる事が…

「…なぜ、なのはにだけ攻撃する？」

「……………」

そう、闇の書はなぜかなのはにだけ攻撃対象にしている

「…キヨウスケ、貴方の事は騎士達を通して見ていた…特に紅の鉄騎は貴方に深い愛情を持っていた…」

私は、主や騎士達が愛した貴方とは戦いたくない…それに…」

海面を見ていた闇の書

バシャアアン！

「大丈夫！？なのはちゃん？」

「ハア…ハア…ハア…ハア…う、うん ありがとう さくらちゃん」

なのはは息を切らしながら浮上してきた

「（リンディさんエイミィさん、戦闘位置を海の付近に移しました 市街地の火災をお願いします）」

「大丈夫、今災害担当の局員が向かっているわ」

「（それから闇の書さんは駄々っ子ですが何とか話しは通じそうです）」



す もう少しやらせて下さい  
(  
いくよレイジングハート!!」

《Yes my master》

「…それに…あの者は…主の心を脅かす者…」

T O B E c o n t i n u e d

安全確認はしてくれ〜!!

はやてSide

(私は…何を望んでたんやっけ?)

「夢を見る事…悲しい現実には夢となる安らかな眠りを…」

(そう…なんか?)

私の…ホントの望みは…)

Side Out

キョウスケ、なのはSide

ガチャ、ドキュ!

《Reload》

なのははレイジングハートにマガジンを差し込んでる

「マガジン残り三本 カートリッジ18発：キョウスケ君とさくらちゃんは？」

「ん？あゝ…そーいやインフィニティ、カートリッジの弾丸ってどうなんだ？」

『今更ですか？…カートリッジは自動精製されますから…実質無限です』

うわゝ今更だけど僕らってチートだよなゝ

「私は魔法形体が基本的に違うからカートリッジシステムはないんだよ」

まあ、本々ユニゾンデバイスだからなゝさくらは

「…なんかズルイよキョウスケ君…  
…うゝん、スターライトブレイカー撃てるチャンスあるかな？」

《I have a method》  
手段はあります

「えっ!？」

《Call me Exelion mode》

「ッ！ダメだよ！あれは本体の補強するまで使っちゃダメだって私がコントロールに失敗したらレイジングハート壊れちゃうんだよ！」

《Coal me》

「…ッ」

《Coal me my master》

「…なのは、使ってやれ」

「えっ!？」

「レイジングハートはお前を信じてるんだ、だからマスターであるお前もレイジングハートを信じてやれ」

「キョウスケ君…」

「そつだろレイジングハート？」

《Yes》

「…レイジングハート…うん！分かった！」

「…お前は、もう眠れ」

「いつかは眠るよ だけどそれは今じゃない 今は、はやてちゃんとフェイトちゃんを助ける

…それから貴女も！」

ドキュ！ガチャ

なのははレイジングハートのカートリッジを一発ロード

「レイジングハート！エクセリオンモード、ドラァーイブ！」

《Ignition》

キイーン

ガキツ！ガチャ、ガチャ！

レイジングハートはその姿を変えた

「さくら！ユニゾンいくぞ！」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！」」

キイーン！

僕とさくららはユニゾンし、

「ふえ！？キョウスケ君…何か雰囲気変わった！？」

「ん？ああ、ユニゾンすると見た目の色彩変わるんだよ」

「へ〜、そうなんだ〜」

「ま、詳しい説明は後でお茶でもしながらするよ…いくぞ！なのは」

カチャ

僕はルシファーを構える

「うん！繰り返される悲しみも、悪い夢もきつと終わらせるー！」

スッ

闇の書が手を掲げ魔法陣が現れる

《Photon lancer genocide shift》

バチバチバチ！

闇の書の周りに無数の魔力弾が現れた

「ってフェイトの魔法かよ!？」

「（フェイトちゃんも蒐集されちゃったんだよね？）」

まあ、なのはのスターライトぶっ放したんだからフェイトの魔法使えて当然か

「…ッ！」

キーン！

なのはの足元にも魔法陣が現れレイジングハートを構えた

Side Out

フェイトSide

フェイトとアリシアは草原で一緒にいた…が、

ゴロゴロゴロ

空が曇りカミナリが鳴り響いた

「あれ？雨になりそうだね フェイト帰ろう…フェイトってば！」

「…ごめんアリシア、私はもう少しここに居る」

「そっなの？じゃあ私も、一緒に雨宿り」

ザアアアア

アリシアがフェイトの傍らに座ると同時に雨が降ってきた

「…ねえアリシア、これは夢、なんだよね？」

「……………」

「私と貴女は、同じ世界には居ない…貴女が生きていたら私は生まれなかった…」

「…そう、だね」

「母さんも私にはあんなに優しくは…」

「…優しい人だったんだよ 優しくったから壊れたんだ…死んじやった私を生き返らせる為に」

「…うん」

「ねえフェイト、夢でもいいじゃない ここに居よう ずっと一緒に私ここでなら生きていられる フェイトのお姉さんでいられる 母さんとアルフとリニスと皆と一緒に居られるんだよ？」

「……………」

「フェイトが欲しかった幸せみんなあげるよ？」

Side Out



はやてSide

「私が、欲しかった幸せ？」

「健康な身体 愛する者達とのずっと続いてゆく暮らし  
…眠って下さい そうすれば夢の中で貴女はずっとそんな世界に居  
られます…」

しかしはやては首を横に振った

「せやけど…それはただの夢や！」

はやては強い意思の瞳で答えた

Side Out

キョウスケ、なのはSide

ガチィ！バキィ！バキィ！ガキィィン！

「うわあああ！」

なのは闇の書の攻撃で吹き飛ばされた

《Photon Lancer genocide shift》

バチバチバチ！

「…行け」

スッ

闇の書が落下するのには向かって追撃

「なのはッ！くっ、インフィニティ！フェアリーを！…」

『フェアリースフィア展開！ターゲットロック！』

「さくら！フェアリーのコントロール頼む！」

「（うん！）」

ヒュンヒュン！

「シヨットト…（うはー…）」

ドカドカドカアア…

フェアリースフィアの放つ魔力弾で闇の書の放ったプラズマランサーを迎撃、辺りは爆煙に包まれた

「なのはは！？」

「…くっ！」

カチャ！

なのははなんとか踏ん張り、レイジングハートを構えた

「（キョウスケ君！闇の書さんに同時攻撃いくよ！）」

「（ああ、わかった）」

「一つ覚えの砲撃…通ると思ってか？」

「通す！レイジングハートが力をくれてる！！命と心を賭けて答え  
てくれる！！」

ドキュ！ドキュ！

カートリッジを2発ロード

「泣いてる子を救ってあげてっ！」

《A・C・S・standby》

キイイン

「インフィニティ！さくら！ブロー・ガ・ルーン、シーケンス！」

『B・G・R・standby』

「（雷よ！《THE THUNDER》）」

バチ！バチバチツ！！

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム！」

《Open》

ジャキ！

レイジングハートの先に光の刃が現れる

「エクセリオンバスターA・C・S…ドライブ！！」

ギイイイン！

「崩魔：雷刃っ！」

『刀身に余剰魔力強制集束！』

「（魔力集束120%！雷力はコントロールするから大丈夫だよキヨウ君！）」

「（よし頼む！）…ブロー・ガ・ルーンッ！！」

タッ！

ドカドガアア！ドカアアン！！

なのはと僕の攻撃は闇の書のシールドに突撃した！

キーン！バキイイイイン！！

闇の書がシールドを張ると同時になのはと僕が激突、お互い拮抗していた

バキイイイイイン！！

「届いてー！！」

ドキュドキュドキュドキュ

さらになのははそのままカートリッジを数発ロード

「クッ！撃ち貫く！」

ドキュドキュドキュドキュ

僕もカートリッジを数発ロード！

ピキピキッ！

貫通威力を増し闇の書のシールドに亀裂が入る…もうちよい！…すると

「ブレイク…」

キイン！

エクセリオンの桃色の翼が広がり…

「まさか!?!」

闇の書が驚愕して…って

「ちょ!ま、まてなの…」

「シューート」

ドカアアアアン!!!

僕の声は掻き消え、なのはは近距離砲撃を放った…

ガシャ、プシユユウ…

レイジングハートは多数カートリッジを使用した為、排熱中

「ハア…ハア…（ほぼゼロ距離、バリアを抜いてのエクセリオンバスター直撃

これでダメなら…」

《Master!》

レイジングハートに呼ばれ上空を見上げると…

「……………」

ほぼ無傷で佇む闇の書が居た

「…もう少し頑張らないとだね…」

《Yes》

「…ゲホッ…頑張るのはいいんだけどさ…なのはあ…!」

「キョウスケ君!? どうした…あ…!」

「…僕が隣にいたの忘れて撃つたろ…!?!」

あんなゼロ距離砲撃ぶつ放す隣にいればこっちにもダメージくるのは必須…

「あっ……………その……………にははは…ごめんなさい」

《Im very sorry》

どうもすみません

ハア…魔王ツ娘が…

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D



魔王育成者はユーノだった!?

はやてSide

「私、こんな望んでない!あなたも同じはずや!ちがうか?」

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士達と同じように私も貴女を愛おしく思います。…だからこそ貴女を殺してしまう自分自身が許せない…」

「……………」

「自分ではどうにもできない力の暴走、貴女を侵食する事も暴走して貴女を食らいつくしてしまう事も止められない…」

「…覚醒の時に今までの事、少しは分かったんよ…  
望むように生きられへん悲しさ…私にも少しは判る!シグナム達も同じや!ずっと悲しい思い、淋しい思いしてきた!」

「……………」

「せやけど忘れたらあかん!」

スッ

はやては車椅子から銀髪の女性の頬に手を伸ばし…

「あなたのマスターは今は私や　マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん」

キイン

そして、はやての足元に強く輝く純白の魔法陣が現れた

Side Out

フェイトSide

「…ごめんねアリシア…だけど私は行かなくちゃ…」

「そっ」

スッ

そう言うとアリシアはフェイトに左手を差し出した

その手に握られていたのはフェイトの愛機…

「…！バルデツシュ…」

アリシアはフェイトにバルデツシュを渡すと、フェイトに抱き着いたフェイトもアリシアの背に腕を回し優しく抱きしめた

「…ありがとう、ごめんねアリシア…」

「いいよ、私はフェイトのお姉さんだもん。待ってるんでしょ？優しくして強いコ達が…」

「うん…」

「…それにフェイトの彼氏さんもね」

ボンツ！

「ア、アリシア！？」

いや、その／＼キョウスケとは…まだそんなんじゃ／＼」

フェイトはアリシアの【彼氏さん発言】に軽くパニックになった

「ふふっ、【まだ】なんだね。じゃあこれからフェイトの彼氏さんになるのかな？」

「~~~~ツ／／」

フェイトの顔は真っ赤になった

「フェイトが好きになった人か…ふふっ、じゃあ将来はお義弟になるのかな？」

「アアアアリシア!!?」

「…会ってみたかったな…」

アリシアは寂しそうな表情で呟いた…

「あ……………」

「ねえフェイト…あなたの好きになった人ってどんな人？」

「…キョウスケは、とつても優しい人だよ。近くにいると心がポカポカして…アリシアもきつと好きになるよ」

「そっか…」

「でも、優しすぎて…他の女の子と仲良くしすぎて、ライバルが増えるのが結構大変かも…」

「フェイトも苦労しそうだね」

「そうだね…でも負けないよ!」

「うん、フェイトなら大丈夫。お姉さんが保証するよ」

「うん」

「…じゃあいつてらっしやいフェイト」

「うん…」

「現実でも、こんな風に…居たかったな…」

シユユン…

アリシアの体は金色の光りになり消えていった…

S i d e O u t

はやてS i d e

「名前をあげる もう闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん…私  
が呼ばせへん！」

「…ッ」

その言葉に管理人格の女性は涙した

「私は管理者や 私にはそれができる」

「無理です、自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っています、それも…」

管理人格は涙声ではやてに首を振る  
しかし、

「…止まって」

キイン

はやてがそう強く願うと、足元の魔法陣の輝きが一層増した

S i d e O u t

なのは・キョウスケ S i d e

ギギギッ!

「…ん?」

闇の書の体が人形みたいに軋む音を立てた

「（外の方！えと、管理局の方！こちらえと、そこに居る子の保護者、八神はやてです！）」

「はやてちゃん！？」

「（うそ…なのはちゃん！？ホンマに！？）」

「（うん、なのはだよ　色々あってキヨウスケ君と一緒に闇の書さんと戦ってるの！）」

「（えっ！？キヨウスケ君もいるん！！！？）」

「（いるぞ！はやて…なんか久しぶりだな）」

「（キヨウスケ君…あの…）」

「（まあ、言いたいことは沢山あるだろうが…）」

「（うん…ごめん二人とも、なんとかその子を止めてあげてくれる？魔導書本体からはコントロールを切り離れたやけど…その子が止まらんと管理者権限が使える…　今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから！）」

「え？？？」

あゝ…なんかなのはには難しすぎてパニックしてるな

「（なのは！分かりやすく伝えるよ！）」

今から言う事をなのはができれば、はやてちゃんもフェイトも外に

出られる!」

ユーノからの念話…おい、まさかユーノ…魔王フラグを立てる気が!??

「(どんな方法でもいい!目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして!!全力全開!!手加減ナシで!!!)」

やっぱり魔王フラグや)

「…!さすがユーノ君!分っかかりやすい!」

《It's so》

まったくです

キーン

なのははレイジングハートを構え…

「ちよい待ち!」

バシッ!

僕はなのはの頭にチョップと言つ名のツッコミを入れた

「イタッ!…うっ、なんなの?キョウスケ君!」

「なんなの?じゃない!!何物騒な事をサラッとしようとしてんだ!??

つかスクライア!!お前も女の子に何させようとしてんだ!」



「(な、何って...)」

「どこの世界に友達助けるのに、その友達目掛けて全力全壊手加減なしの悪魔法砲撃ぶつ放すヤツがいる！

特になのはのは非殺傷にしても十分殺傷能力あるつてのに!!」

「うっ…なんかヒドイ言われようなの…しかも字が【悪魔砲】や【全壊】になってるし…」

事実だからあきらめろ…

「(くっ…ならどうするんだ!?)」

「フッフッフ…こんな事もあるつかと、そう!こんな事もあるつかと準備していたアイテムがあるのだよスクライア君!」

「キ、キヨウスケ君?」

若干なのはが引いていたような気がしたが…スルーって事で

「ゴホン!…(はやて、前にプレゼントしたペンダント、肌身離さず今もしてるか?)」

「(えっ!?!…うん、キヨウスケ君がくれたプレゼントやしノノ大切に持っとるよ。今もちゃんとココにあるよ)」

そか…あれ?今何か違和感が…?

「(よ、よし!はやて…実はそのペンダントは、僕の魔力と共鳴さ

せ一時的に身につけている人の魔力を増幅する作用があるんだ。  
で、これから僕の魔力をはやてに送るから増幅されたその魔力で防  
御プログラムから主導権奪っちまえ!!」

「(えっ!?!うん!あ、でも魔力送るってどうやって?私は今闇の  
書の中やし...)」

……中?

……あ!

「(大丈夫だよはやてちゃん。キヨウスケ君の事だからちゃんと考  
えが...)ってキヨウスケ君?」

「……あ」

「キヨウスケ君…まさか…」

「…い、いや、ホントは…はやてと一緒に闇の書起動させて、そ  
の時にその【魔力増幅で一気に管理者権限発動!速攻で暴走プログ  
ラム分離作戦】ってのをしようと考えてたんだけど…  
…バカネコが邪魔したから前半から頓挫して…」

ホント迷惑な猫だ!

「えっと…」

なのはが冷や汗を流しながら困った顔をしている…

「…で、仕方ないから作戦変更して…闇の書に取り込まれても基本はやての身体だから、闇の書の姿になってもペンダントは胸元にあるかな」と思ってたまで何とか近づいて、僕の魔力を直接ペンダントに送るうとしてただけど……」

「（…ペンダント…私の手元って事は…）」

「…はやてちゃんと一緒に闇の書さんの中に？」

「（キョウ君どうしよう!?このままじゃなのはちゃんに砲撃で魔王フラグが!）」

そつだよな…って慌てる割に、さくらの中でもしっかりなのは魔王候補か…

「……仕方ない、外からじゃダメなら中に直接送るしかないか…」

「中に…どっやって?」

「……まあ、なのはは僕が闇の書に近付くのを援護してくれ」

「?う、うん!分かった!」

「（さくらもなのはと一緒に援護してくれ）」

「（うん!）」

「「ユニゾン・アウト!」」

パシイイ！

僕とさくらはユニゾンを解除して…

「じゃあ二人とも、援護お願いね」

「うん！まかせて（なの）」

タッ！

僕は闇の書の方へ飛んでいった…

T o B e c o n t i n u e d

『???マスター、顔が赤いですが?』

きききききのせいですよ！インフィさん！

## 救いの光

キヨウスケSide

ザバーン！ザバーン！

闇の書の足元の海中から闇の書が生み出した魔法生物のツタが現れた

「…キモッ！」

『開口一番それですか！？』

だつてさ…あのウネウネ…ってなんか苦手で…

シュルシュルシュル！

って言ってる側から来たし！…ん？

ドゴオオン！

バアアン！

バシィィ！

「！」

後ろから砲撃が放たれツタの魔法生物は次々と薙ぎ倒されていった

「（キヨウスケ君は早く闇の書さんの所に！）」

「（道は私となのはちゃんまで切り開くから！）」

お、二人の連携バツチリじゃんか！

…じゃあ急ぐか！

Side Out

なのは、さくらSide

「なのはちゃん！次いくよ！」

「うん、エクセリオンバスター バレル展開！中距離砲撃モード」

《All right Barrel shut》

バサア！

レイジングハートから桃色の光の翼が現れ、レイジングハートの先端に魔力が集中していく

ドコオオン！  
ガチイ！

衝撃波が放たれ、同時に不可視型のバインドが魔法生物のツタを捕らえ身動きを封じた

キイイイイイン！

レイジングハートに魔力が集束していく

「矢よ！敵を撃ち抜け！アロー！《矢》」

キイイン

ヒュン…ズカアアン！

さくらの放った魔力の矢は無数に分裂し、次々と魔法生物を撃ち落としていく

「エクセリオンバスター！フォースバースト！」

ドキュドキュドキュドキュ！

その際になのははカートリッジ4発ロード！

キイイイイイイ…

レイジングハートに巨大な魔力が集まり…

「ブレイクシューート!!」

ズカアアアアン!

なのはの砲撃が、全ての敵を包みこんだ…

S i d e O u t

キョウスケ S i d e

ズカアアアアン!

うおっ!あぶね〜

もう少し飛ぶスピード遅かったら…ソッ!

『まあ塵も残らず消え去ってますね〜…あ!マスター、そろそろ目標に接触します』

こいつもサラッと怖いことを…っつと

タッ



「……………」

あゝ、もう完全に防御プログラムが表にでて絶賛暴走中だな

ギギギッ

とりあえずはやてが何とか動きを止めてくれているけど…

「（はやて、今から魔力を送る…準備はいいか？）」

「（うん、ええよ。私はどうしたらええの？）」

「（ま、ペンダントを握って祈っててくれ。乙女の祈りは奇跡を呼ぶっていうしな）」

『クサッ！マスター、台詞がクサすぎます！』

「……………さ、はじめるか」

『何ですかその間は！？明らかに編集点的な間は！？それでスルーですか！？』

「…なのはに頼んでSLBの的になる？」

『す、すみませんでしたアアアー！…！』

判ればよろしい

「コホン…じ、じゃあ…／＼」

スッ

僕の両手が闇の書の頬を包み、僕は顔を近づけていき…そして…

お互いの唇が重なり、二人は光に包まれた

Side Out

はやてSide

私はキョウスケ君に言われた通り、ペンダントを握って祈ってる…

(乙女の祈りは奇跡を呼ぶっていうしな…)

うっ、キョウスケ君…ホンマ恥ずかしいセリフをいいよるな〜ノノ

キィィィン

「ッ!?ペンダントが光つとる!」

フワッ

ペンダントは私の手からゆっくりと浮かび上がり私達を照らしてく…

「…温かい光、ですね…」

「そうやね…これがキョウスケ君の光…なんや力が湧いてくる…私  
もがんばらなあかな」

スッ

私はこのコの頬を両手で優しく包みこむ…

「…夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る…強く支える者、  
幸運の追い風、祝福のエール…  
リインフォース。」

キイーン

はやてが優しく名を告げるとリインフォースの体が光に包まれた

Side Out

フェイトSide

「バルデツシュ、ここから出るよ… ザンバーフォーム、行ける？」

《Yes sir》

「いい子だ」

カチャ

フェイトがバルデツシュを掲げ、バリアジャケットを展開した

《Zamber form》

ドキュ！ドキュ！

バルデツシュはカートリッジを2発ロード

ガチャガチャ！ブオオン！

バルデツシュの姿が大剣に変化した

バチバチバチッ！

キイン！

「疾風、迅雷！！」

カチャ！バチバチ！

フェイトは剣を掲げた…

ブオオン！バチバチ！

フェイトが剣を振る度に雷が舞う

ドゴオオン！バチ！バチバチッ！！

そしてバルデツシュを構え…

「スプライト、ザンバー…ッ！！」

バチィ！…パリーーン！！

フェイトが剣を振るうと、今まで居た闇の書の中の世界が砕け散った

S i d e O u t

はやてS i d e

光に包まれたはやては今、闇の空間から光の空間に包まれていた

（新名称：リインフォース認識、管理者権限の使用が可能になりま

す…)

(うん…)

(ですが、防御プログラムの暴走は止まりません…管理から切り離された膨大な力がじき暴れ出します。)

(ううん、まあ何とかしよ)

キーン

はやての前に魔導書が現れる

(行こか、リインフォース…)

はやては魔導書を優しく抱きしめた

(はい、我が主…)

Side Out

To Be continued

おまけ

(…なあリインフォース)

(…なんでしよう?)

(…なんや唇に温かい感触があるんやけど…?)

(…はい、私も唇にそのような感触があります)

(…なんやすごく胸がドキドキしてるんやけど…何か解るか?)

(…キョウスケが我らに魔力を送る際、唇同士を接触させてました  
が…)

(…ああ、そうなんや…って／＼ そそそれってキ、キキスしてもう  
たって事!?)

(…はい、そのようです)

(…う……／＼ な、なんか微妙なファーストキスや…／＼  
…キョウスケ君、どうせやったら私が私の時に…／＼)

(…主?顔が真っ赤ですが?)

(…ふえ!?!そ、そんな事あらへんよ!?)

(…リインフォースはどうなん?)

(…私、ですか?)

(…悪くない気分、ですね…／＼)

あ、あかん…リインフォースの顔、綺麗や…これ以上ライバル増えたら…

…よし！キヨウスケ君に責任取ってもらって、まずちゃんと私に…キ、キスしてもらわなアカンな〜ノノ

そや、今のキスはノーカンや！

ファーストキスはちゃんとしてもらうから覚悟しいや〜キヨウスケ君！！



夜天、闇を切り裂いて…

キヨウスケSide

パアアアア

「……………ん…ぷあ！」

なんとか魔力共振はうまくいったか／＼

『いや…見事なキスシーンでしたよ あ、仮契約カードがありませんよ…2枚も』

こ、このデバイス…いつかバラしてや……は？

「…2枚？」

僕は頭上を見ると…あ、ホントだ

「……………なあ、インフィニティ…」

『なんですマスター？』

「これは…どゆこと？」

1枚ははやてとの仮契約カード。まあ、これは解っていたよ？  
…だがもう1枚…これは…

「…リインフォースやんか!？」

ナニコレ?融合状態って、二人分なの!?!どっかの某Wなライダー  
みたいなカンジだった!?

『まあ、一気に2枚ゲットですね』

…まあ…いいけどね…

あ、そういえばはやては…

キイイン…

『はやて嬢はマスターの目の前の光の中です…光の中から魔力反応、  
これは…フェイト嬢ですね…来ます!』

シユン!

純白の光の中から一筋の金色の光が飛び出た  
その光の先には…

「フェイト!!!無事だったか?」

「あ、キョウスケ!うん、大丈夫!」

どつやら無事だったようだ

ヒュユユ

「フ、フェイトお〜!」

ギユ!

アルフはフェイトに抱き着いた

「アルフ!?…ごめん、心配かけちゃったね」

「ううん、いいんだよ…フェイトが無事なら!」

「アルフ…」

ヒュユユ

「キヨウスケ君〜!」

「キヨウ君〜!」

お、なのはとさくらもこつちに合流……気のせいかな…二人の後ろから黒い瘴気が…

カチャ

「「キヨウ（君）スケ君、さっきの【アレ】は何なのかな?」」

にこやかに微笑み、二人して杖をこつちに向けてらっしやるし〜!!

【アレ】ってやっぱ…アレだよな〜

「なのは！さくら！どうしたの？」

何も知らないフェイトもこちらに合流

…あ、ちなみにユーノもいつの間にか居た…ような？

「フェイトちゃん、キョウスケ君が闇の書さんと…その…キ、キスしたんだよ！…（ボソツ）私だってまだしてないのにノノ」

最後の方が聞こえなかったが…ゾクツ！

さ、寒気が！？

「…キョウスケ…どういうこと？」

フ、フェイトさん？バルデツシユの切っ先をこっちに向けないで〜  
！！

「は、はやてやフェイトを助ける為だったんだよ…ね？」

これはホントだよ！？

「…それなら仕方ないか…」

そう言いフェイトはバルデツシユを納めてくれた…助かった〜

「…まあ人命救助って事だったから…」

さくらも杖を引いてくれた…って僕的には、何故あなたもなのとはと  
一緒に杖向けるかが疑問なんですが！？

「！……ッ…／＼な、なんでもだよ！」

いや、言ってる意味解らないし…

「…じゃあキヨウスケ君…／＼わ、私とも…キ、キスし…

ゴゴゴゴゴ！

「みんな気をつけて！闇の書の反応まだ消えてないよ！」…うつて  
っ…エイミィさん…」

なんかなのはが泣いているが……そっいや何か言ってたよっな…？

「……………ホッ」

後ろの方でユーノが安堵感たっぷりの顔をしていたが…？

Side Out

アースラ指令室

リンディ Side

「さて、ここからが本番よ…クロノ！準備はいい？」

「はい！もう現場に着きます！」

リンディはモニター越しにクロノに指示を送った

チャラ

「…ハア、アルカンシエル…使わずに済めばいいけど…」

リンディの手の中には最終兵器…アルカンシエルの起動キーが握られていた…

「闇の書の主、防衛プログラムと完全に分離しました」

「解ったわ！」

「みんな！下の黒い澱みが暴走が始まる場所になる！クロノ君が着くまでむやみに近づいちゃダメだよ！？」

「…はい…」

S i d e O u t

はやてS i d e

「管理者権限発動……」

(防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました……数分程度ですが、暴走開始の遅延ができます)

「うん、それだけあったら十分や……」

キイイイン……

はやての周りに4色の光の球が現れる

「リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復……」

キイイイン

光の球はその輝きを増し……

ビル屋上

キイイイン

地面に4色のベルカの魔法陣が現れ、その中からシグナム・ヴィー  
タ・シャマル・ザフィーラが現れた

「…おいで、私の騎士たち…」

はやては優しく呟いた

S i d e O u t

キヨウスケS i d e



キィイン…ズガアアアン

目の前のはやてが中にいる光の球から突如、爆発的に光があふれ出した

「「「うっ!?!」「」「」

その光にみんなは目を覆った…

その光が収まると…

「ああ!?!」

光の周りには、それを守るよう4人の騎士たちがいた

「ヴィータちゃん!」

「シクナム!」

二人とも縁がある二人の復活して喜んでるな

「…我ら夜天の主の元に集いし騎士」

「主有る限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の元であり」

「我らが主、夜天の王…八神はやての名の元に!」

シグナム・シャマル・ザフィーラ・ヴィータは完全復活してみたい  
だな

「リインフォース…私の杖と甲冑を…」

(はい！)

パリッパリ…パリーン！

光の球は砕け、中からはやてが現れた

「はやてちゃん！」

「(ニコッ)」

はやてはなのはの声に笑顔で答えた

「夜天の光りよ！我が手に集え！祝福の風、リインフォース…セー  
ーットアップ！！！」

キイイイン

はやてはバリアジャケットを纏い…うつ、はやてのミニスカ…ノノ

『惚れ直しましたか』

「…ああ、…ってイイインフィニティ！！？な、何をオツシャツテ  
イラッシャルヤラ？」

『動揺しまくりですね』

「…後でコイツのメモリー消去しなければ…」

『怖っ！！』

T  
o  
B  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

初顔合わせは…グダグダだった…

キヨウスケSide

「…はやて」

「うん…」

「すみません…」

「あの…はやてちゃん 私達…」

ヴィータ・シグナム・シャルは、はやてに謝った…まあ隠れて蒐集してたからな〜

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた…そやけど、細かい事は後や 今は…おかえり、みんな」

「うっ…う…うわああん!」

ヴィータは泣きながらはやての胸で泣きじゃくった  
はやてもヴィータを優しく抱きしめて受け止めた

「はやてっ!はやて!はやてえ〜!うわああん!」

「ヴィータ…」

ポンッ

僕ははやてとヴィータの頭に手を乗せる

「…キヨウスケ君」

「ひつく…恭介え…」

「はやてもヴィータも無事でよかった…」

僕は二人の頭を撫でた

「き、きょうすけく！うっ…うわああん…！」

ガバッ！

ヴィータは今度は僕に抱き着き、泣きじゃくった

「キヨウスケ君もごめんな…私のせいで巻き込んでしもって…」

「はやて…気にするな、好きでやった事だし」

「それでも…ありがと…／＼（ニコッ）」

ヴッ…はやて、その笑顔…反則だろ／＼

トコトコ

ん、なのはとフェイトがこっちに…ってあれ？何故か寒気が…？

「あ、なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな〜ウチの口達が迷惑かけてもつて…」

「うづん…」

「それは平気…」

カチヤ

「あ〜…二人とも…一応お尋ねしますが、なぜ僕にデバイスを向けていらっしやるのでしょうか？」

「えっ？…もちろん、何でヴィータちゃんと…」

「…抱き合ってるかって事だよ…キョウスケ…」

いやいやいや、抱き合つって…

「うづん…ひっく…」

あ〜…まだ泣いてるか〜

しかし説明せんと命が危険だな…

「これは…キョウ君〜！！」「さくら？」

スタツ

「キョウ君！みんな無事だったんだね〜よかった〜」

「ああ、さくらも援護ありが…痛っ！」

「…恭介…この女…誰だ!？」

ヴィータさん!？爪!爪が胸に食い込んでるんですが!？

「奇遇やな〜ヴィータ…私も気になったんよ〜  
…キヨウスケ君、その娘…誰や？」

はやてが笑顔（目は笑ってないが）で聞いてきた…

「さ、さくらは僕の…グホッ！」

「僕のお!？どーゆー関係だ!オイ恭介え!!！」

だからヴィータさん!爪が食い込んで…って爪が刺さってますから  
!!

「キヨウスケ君…ヴィータちゃんと仲いいんだね…」

なのはよ…これが仲いいように見えるか!？

「…キヨウスケ、ヴィータとはどういう関係…？」

フェイトも笑顔で聞いてきたが…やはり目は単色であった

「だ、だから…シ、シグナム・シャマル・ザフィーラ助けてくれ！」

僕は他3人の方を見ると…

「すまない…無理だ」

「流石にこの修羅場には…ちょっと」

「……………すまん」

「ってちょっとおおお!？」

「さあ、キョウスケ君…」

「どーゆー事か…」

「O H H A N A S H I…」

「聞かせてくれるかな？」

「はやて、ヴィータ、なのは、フェイトが黒いオーラを放ちながら迫ってくる」

「…超怖い…」

「だから…まず、はやてやヴォルケンスは知らないと思うが…さくらはユニゾンデバイスなんだ」

「ほう…そうなのか？」

「シグナム知つとるん？」



「はい、たしか古代ベルカで生み出された技術だと…」

「てか…はやて、今リインフォースとそのユニゾン状態なんじゃ…？」

「え！？そうなん！？」

…気付かんかったんかい！？

「えっと…はやてちゃん、さくらって言います。よろしくね」

「あ、うん。私の方こそよろしく…さつきはごめんな…怖がらせてもつて…」

「えっ！？ううん！大丈夫だよ！キョウ君の家族なら、私にとつても家族なんだし」

「家族…」

はやて…ビックリした表情してんな

「…だめ…かな？はやてちゃん…？」

さくらの涙目＋上目づかいコンボ発動！

…誰だ、さくらにあの技教えたのは？

『美少女の標準装備みたいですよ』

…あゝ…なんか納得、心当たりメチャクチャありますよ…

「……………」

…か？

「かわええええ！！さくらちゃん！めつちゃかわええな〜！！」

「あ、あの…？」

ギユ！

「ホンマめつちゃ萌えるで〜！！」

はやて…なんかキャラ違う…

…さっきの僕の胸のドキドキを返せ〜！！

「さくらちゃん、私の事は【はやてお姉ちゃん】って呼んでな？」

「えっ！？う、うん…はやてお姉ちゃん…」

はやては妹を手に入れた

…あの〜はやてさん、一応僕のデバイスなんですけど？

「あ、でもキヨウスケ君の事をパパって呼んで、私の事をママって呼んでもええよ？…キャノノ」

「…は〜や〜て〜（ちゃ〜ん）？」

主になのは、フェイト、ヴィータから黒いオーラが放たれた！

「い、いややな〜…じ、冗談や…だから皆…落ち着こな…？」

第一パパって歳じゃないんだがな…

「で、なのはにフェイト、ヴィータもかぞ「パートナーだ!!」く…  
…ってヲイ」

ヴィータはパートナーと言い切った!

…まあ確かにそうなんだけどさ…この状況では嫌な予感しかしないんだが…

「「パ、パートナー!?!」」

なのはとフェイトはハモった!

「そうだ!…これを見る!! 恭介と私のパートナー（仮契約）の証だ!!」

そう言いヴィータは仮契約カードをなのは達に見せた!

「あ!?!それって仮契約カード!?!」

「ヴィータちゃんもカード持つてるの!?!…って事は…ヴィータちゃんも、キョウスケ君と…キスを!?!」

「なっ!?!【も】って…まさか…」

ヴィータは恐る恐るなのは達に尋ね…

「うん、私もキョウスケと仮契約したから…カード持つてるよ」

そう言いフェイトもヴィータにカードを見せる

「た、確かに同じカードだ…じゃあお前も…恭介と…？」

「うん…その…キス、したかな／＼」

…これは…本気で修羅場！？…よし！逃げよ…

ガシッ

…しかし、なのはに捕まった…ってなのは！？

「……………」

「あの…なのはさん？」

「…キョウスケ君」

「な、なになかな？」

「な、なんで！なんでフェイトちゃんやヴィータちゃんとはキスして、私とはキスしてくれないの！？」

なのはは涙目で僕をガクガク揺らしまくった  
…涙目で言われると何故か罪悪感があああ！

「な、なんで…って言われても…」

ほとんど事故と偶然と人命救助つてのが重なっただけだし

「い、こづなったら／＼んんんっ！」

ってなのは唇を近づけてきて…って

「まてまてまて！落ち着けなのは！」

「んんんっ！！」

落ち着く気配なしかい！

「な、なのは！？何してるの！？」

「テメー！恭介から離れろ！！」

修羅場寸前のフェイト & amp・ヴィータがこちらに気付きなのは  
を引き剥がそうとした

「フェイトちゃん！ヴィータちゃん！は、放して〜！！！！」

「「おなこ放すか！！！」

ヴィータ達の活躍で何とかなのはを取り押さえた…

「キョウ君〜！」

「…あ、さくら…とはやてっ？」

はやての顔が若干赤いような

「キヨウ君！忘れ物だよ！！」

そう言いさくらはある物を差し出した

「あ、仮契約カード……」

こ、このタイミングで出しますか！？

「キヨウスケ君……／＼その……このカードは……私たちの愛の結晶やな」

「……なっ！？」「」

はやてさくくん！？何色々々問題がありそんな発言を！？

「か、神代！！……どういう事だ！？……ま、まさかもう主と……／＼」

「あらあらくじゃあ私達、はやてちゃんの他にキヨウスケ君にも仕えないと」

「……キヨウスケになら、主を任せられるな」

「ちょ！3人とも……」

「……あ……！！……！？」「」

こ、今度はなんだ！？

「そ、そういえば……はやてちゃんも……キヨウスケ君とキスを……。〇

「ズ」

「な、なんではやての仮契約カードが…ま、まさかキヨウスケ!？」

「恭介…はやてともキスしたのか…まあ、はやてだったら…でも…  
うゝゝっ!」

後で乱闘していたなのは、フェイト、ヴィータもこちらに気付いて  
各々な反応をしていた

…なのはは目に見えて落ち込んでいるが…

ツンツン

ん?さくら?

「(キヨウ君、もう一枚のカード…リインフォースさんとの仮契約  
カードは、はやお姉ちゃんにはまだ見せてないから…まだ皆には  
言わない方がいいんだよね?)」

まあそうだが…はやお姉ちゃんって呼ぶの確定なんだね…

「(ああ、リインフォースに関して後々考えがあるし…それに…)」

この修羅場でさらにもう一人仮契約しました　なんて言った日に  
は…物理的に潰される…

「(ありがとな、さくら　気をつかってくれて)」

「(ううん、だって私はキヨウ君のパートナーだしね…で、その…  
…/ノ)」

ん？さくらの顔も赤くなつて？

「（あの…ね、後ででいいんだけど…お願い聞いてほしいな）なん  
て／＼）」

「（お願い？まあいいけど？）」

「（ホントに！？ありがとうキョウ君！！）」

まあ、さくらが喜んでくれるなら

「キョウスケくくくん！！」

「うわっ！？な、なのは？」

復活したなのは…な、なにか鬼気迫る雰囲気か…怖っ！

「私とも…キスをしてなのー！！！」

「だから落ち着けー！！！」

To Be continued





倒し方って難しい!?

前回までのあらすじ…

暴走プログラムをほったらかして、なのはが暴れていた…

「ちょっと〜! 暴れてないもん!」

…電波はスルーしよう…

キョウスケSide

スツ…タツ

「済まないな、水を差してしまうんだが…時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

お前…もっと早く来いよ…絶対今の修羅場静観してたろ!?

「ゴホン！…  
スコール…いや、キヨウスケ…言いたい事は沢山あるが…今は時間がないので状況を簡潔に説明する」

うわっ！コイツ、スルーしたよ！

「…あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する…僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない…停止のプランは現在3つある…」

1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる

2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシエルで消滅させる

3つ、キヨウスケの未知の魔法で殲滅させる…

これ以外に他に良い手ないか闇の書の主とキヨウスケ、それと守護騎士の皆に聞きたい」

と、クロノは僕と夜天Sideに有効な手を聞いているが…

「ええつと…最初のは多分難しいと思います…主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいな物ですから…」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん…」

シヤマル・ザフィーラにより1つ却下！

「アルカンシエルも絶つ対ダメツ！！こんな所でアルカンシエル撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

「そ、そんなにスゴイの？」

「発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲…って言うと大体わかる？」

「あの！私もそれ反対！！」

「同じく！絶対、反対！」

はい、2つ目もヴィータ・なのは・フェイトにより却下！

「僕も艦長も使いたくないよ…でも、アレの暴走が本格的に始まったら被害がそれより遥かに大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を侵食して無限に広がっていくから…」

「……………」

クロノとユーノの説明を聞き押し黙るなのはとフェイト…

「ハーイみんな！暴走臨界点まで後15分切ったよ！！会議の結論はお早めに！」

エイミーさんは通信で残り時間を教えてくれた

「後は…キョウスケ、君の未知の魔法で何とかならないか？」

「ん…アレを消し去る手段ならいくつかあるにはあるが…」

「何！？本当か！？」

「ただ…地球の地形、変えていいなら…？」

「……………は！？」×10

あ、やっぱりみんなア然としたか…

「だ、ダメー！！キョウスケ君！それフツーにダメだから！？」

「そ、そうやキョウスケ君…流石にそれは…あかんよ」

「……………なあ、やっぱり恭介って…」

「……………言うなヴィータ…今更だ…」

なんか皆疲れ切った顔をしているが…なぜ？

「ちなみに地形変えるって…どの程度だ？」

「そうだな…仮に【バハムート零式】ってのを使ってアレを消滅させるとしたら…地球の1/10削り取る程度？」

ピシッ×10

あ、完全無比に硬直してるよ

「も、もう少し穏便な手段はないのか？」

「穏便って…そうだな…」

暴走プログラムの無限再生がなければまだ穏便な手段があったんだ

がな…

「…君達は？何かないか？」

クロノはシグナム達に（穏便な）手はないか聞いていた

「すまない…あまり役に立てそうにない」

「暴走に立ち会った経験は我らにもほとんどないのだ」

「でも、何とか止めないと…はやてちゃんのお家がなくなっちゃうのイヤですし！」

「…いや、そういうレベルの話じゃないんだがな…戦闘地点をもっと沖合にできれば…」

「いや、沖合でもアルカンシエルの空間歪曲の被害は出る…キョウウスケのバハムート零式とやらは、地球自体に危機的ダメージを与えそうだし…」

「う〜ん…」

皆で考え込んでいると…

「…あ〜〜ッ！なんかゴチャゴチャうっとうしいな〜！！  
みんなでズバッとぶっ飛ばしちゃう訳にはいかないの！？」

「ア、アルフ…」

「これはそんなに単純な話じゃあ…それにスバッと倒すだけなら

とつくにキヨウスケに頼んでいるし……」

「地球破壊の特典付きだけどね」

「キヨウスケ……それは特典とは言わないんじゃない……」

フェイトが不安そうな顔でツツコミを……

まあ……ここは原作道理に進めるか

「……エイミーさん、アルカンシエルって宇宙空間でも発射可能ですか？」

「フッフッフ……キヨウスケ君、管理局のテクノロジー舐めてもらっちゃ困りますな」

撃てますよ〜宇宙だろうがどこだろうが！」

「と、言う訳で喜bekロノ 手間は掛かるが攻略方が見つかったぞ！」

「攻略方って……ハッ!? おいつ!? ちょっと待て!!! 今の話の流れ……ま、まさか!?!」

「そ、なのは・はやて・フェイト、比較的安全にズバツとアレをぶっ飛ばすにはどうしたらいいでしょう？」

ヒントは宇宙空間!

さあ、シンキングターイム!」

後は、なのは達に丸投げつと!

「ふええ!?! ……えつと……ズバツとぶっ飛ばす……」

「ここでも撃つたら被害が大きいかから撃てへん…」

「でも、ここじゃなければ…ヒントは宇宙空間…」

「…ツ！ああ！」「」

てか、ほとんど答え言ってたしな

「…答えは解つたみたいだね。」

「…うん！」「」

三人は力強く頷いた

「ほえええええ！？キョウくん…私、解らないよっ！」

…さくらの頭から煙が出ていたのは…きっと気のせいだろうっ…

Side Out

アリサ、すずかSide



二人は海岸沿いの道で海の向こうを見ていた

「…光、収まった…」

「…うん、海にまだ黒いのがあるけど…」

「一体何なの？まさかこんなのがこのままずっと続いたりしないよね？」

「何となくだけど…大丈夫な気がするの」

「ん？」

「きつと戦ってくれてるから…」

「…なのはとフェイトが？」

「うん…それと一緒にいた人達も」

「…すずかに真顔で言われると、なんかそんな気がするから怖いわ」

「はは……」

「まあ、それにしてもよ…ああもう！！訳分かんない！！！！楽しいクリスマスイヴに一体どういう事態なの！？夢なら覚めて〜一刻も早く覚めてよ〜！！！！」

「ア、アリサちゃん 落ち着いて！」

アリサも軽く暴れてた

「うるわしいうるわしいうるわしい……！」

「ア、アリサちゃん！どうしたの！？」

「……ハッ！？な、何故かは分からないんだけど……急に言わなきゃいけないような気がして……」

「????？」

次回！アリサは炎髪灼眼の討ち手に……

「ならないわよ……！」

「ア、アリサちゃん………？」

「あー！！また変な電波受信したじゃないの……！！まったく誰のせいよ……！」

「（作者……じゃないかな？）」

To Be continued



COAL or DROP?

アースラブリッジ

リンディ・エイミィSide

「何ともまあ…相変わらず物凄いというか…」

頭を押さえながらリンディは呆れてたようにため息をついた

ピッピピ…ピッ…

エイミィはコンピュータで計算中…

「計算上では実現可能ってのがまた怖いですね…クロノ君！こっちのスタンバイは準備OK！暴走臨界点まで後10分！」

エイミィは最終決戦のタイムリミットをクロノ達に伝えた

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

「実に個人の能力頼みでギャンブル性の高いプランだが…やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合5層式、まずはそれを破る！」

…ん？

「はやて、バリアって4層じゃなくて5層なのか？」

「えっ！？うん、そやよ…確かに5層や」

…原作より1層増えてるが…まあそのくらいの誤差は許容範囲だからいいか…

…だが僕は、その時気付かなかった…

その1層の違いの原因が…【アレ】だという事に…

「それで、バリアを貫いたら本体にむけて私達の一斉攻撃でコアを露出！」

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

「後は、アルカンシエルで蒸発！」と

「うまくいけばこれがベストですね」

「…キヨウスケ、この作戦の指揮は君が統ってくれ」

「はあ！？いやいやいや！こーゆー場合、指揮権ってクロノにあるんじゃない？」

「…今作戦を考えてくれたのは君だ、それに…僕は君にはやらねえっぱなしだったからな…君が指揮を統ってくれた方が上手くいくような気がしてね…」

「うわっ！暗っ！…知らない所でクロノの性格改変したのか！？」

『マスターがやり過ぎた結果では？』

「うぐっ…確かに…」

「ハア…分かったよ…」

やることは変わらないしね

「みんな、この一戦に僕たちの命と地球の命運を賭けるっ！」

クロノの言った通り、ギャンブル性の高いプランで外れれば無一文

どころか全てが終ってしまっ…  
「ただ、当たれば億万長者だ！全賭けでいくぞ！」

「ああ、言われるまでもねえ！、こっちは最初からそのつもりだ！  
！恭介！！」

「勝手に賭けられても困るが…よからう神代！！私も騎士の誇りと  
魂を賭ける！！」

「うん！その賭け、私も乗るよ！キヨウスケ！！」

「せや、もちろん私もキヨウスケ君の賭けに乗るで！！」

「わ、私の全部キヨウスケ君にあげるの〜！」

「私達もキヨウスケ君に…ね？ザフィーラ？」

「…ああ」

「私もフェイトが乗るなら乗るよ！ユーノも乗るんだろ？」

「…これしか方法がないなら…僕も！」

みんな…ありがとう…1人、問題発言していたような気がしたけど  
…？

Side Out

クロノSide

「…グレアム提督、見えますか？」

「ああ、よく見えるよ」

「闇の書は呪われた魔導書でした…その呪いは幾つもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきました  
アレのおかげで僕も母さんも…他の多くの被害者遺族も、こんなはずじゃない人生を進まなきゃならなくなった  
それはきつと貴方もリーゼ達も…  
無くしてしまつた過去は変える事は出来ない」

《Start up》

バシイ！カチャ

クロノはデュランダルを起動させた

「だから今を戦つて未来を変えます！」

Side Out



「……」

「暴走開始まで後2分！」

「あ、キヨウスケ君にさくらちゃん、なのはちゃんフェイトちゃんも」

「……」

「シヤマル！」

「はい、4人の治療ですね…クラールヴィント、本領発揮よ」

《Ja》

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

キイイイン

緑の光が僕たちを優しく包み込み

「あ…わあ！」

「ええ…っ」

「ほえええ…」

僕たちの傷を回復してくれた

「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント 癒しと補助が本領です」

「ん…さんきゅ、シャマル」

「すっじいです」

「ありがとうございますシャマルさん！」

「シャマルさん！ありがとうございます」

「ふふ…どういたしまして」

「さくら、ユニゾンいくぞー！」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！」「」

パシィィ！

「…ユニゾンすると、はやてと雰囲気似てるねキョウスケ」

「ん？ああそっか、なのは以外は僕のユニゾン姿は見るの初めてだっけ」

「うん…なんか髪や瞳の色まで変わってるね」

「フフフフッ」

「ん？どうしたはやて？なんか嬉しそうだけど？」

「えっ！？…私とキヨウスケ君、同じユニゾンでお揃いやな〜って  
／／」

いや…それは過大解釈じゃ…

ゴゴゴゴオ…

な、凄いプレッシャーが！？

ジイイイ…x3

プレッシャーの正体は…

「…なのは、フェイト、ヴィータ…視線が痛いんですが…」

「「「……………フン！」「」」

だから一体僕が何をしたっていうんだよ…

「はぁ…みんな、今は気持ちを切り替えて行こう…」

『…逃げましたね』

…今度AIEユニット、丸ごと交換してやる…

「じゃあすまないが、アルフ・ユーノ・ザフィーラは周りの触手を  
廃除してくれ…僕たちが攻撃に専念できるように」

「ああ、私達サポート班に任せな！ 二人とも、あのウザいバリケードを上手く止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフを初め、ユーノ・ザフィーラは頷いた

バシャアアン！

ゴゴゴゴゴゴ！

タイムリミットが迫り、そのウザいバリケードの触手が活発に活動し始め…

「始まる！」

バシャアアン！バシャアアン！

黒い球体の周りからエネルギーが柱のように立ち上った

「…夜天の魔導書、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の闇…」

キイイイ…バシャアア！

闇の球体が割れ、中からはおぞましい巨大生物…色々な生物を掛け合わせたようなキメラが現れた

「　　ッ！」

頭部から闇の書の管理人格に似た銀髪の女性からは、さなざらローライの歌声のような声が響いた…

「よし、こちらのコールは済んだ！…あと出来る事は伏せたカードをめくるだけだ…いくぞ！みんな！！」

T o B e c o n t i n u e d

## 闇の最後と影の胎動

キヨウスケSide

「チエーンバインド！」

「ストラゲルバインド！」

バシィィィ！

アルフとユーノのバインドで暴走プログラムの周りにあるバリケード：へびみたいな魔法生物の足を捕まえ、切断していく

「縛れ！鋼の軛！でええええや！！！」

ゴゴゴッ！

ザフィーラから放たれた魔法はその足を薙ぎ払った

「ッ！」

その攻撃に暴走プログラムはさらに声を上げた

カチャ

その上空にデバイスを構えたのはとヴィータ

「ちゃんと合わせるよ！高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ブオオン！

「鉄槌の騎士ヴィータと黒鉄の伯爵グラーファイゼン！」

ドキュ！ガチャ！

《G i g a n t f o r m》

グラーファイゼンはその鉄槌を巨大なハンマーに変形させた

「轟天爆砕！ギガントクラーラーケンツ！！」

ドオン！！！！

バリ…ガシャアアアン！

ヴィータの強烈な一撃（別名ゴルイオンハンマー）でバリアの一枚を破壊

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン！いきますー！！」

キイイイン

《Load Cartridge》  
ドキュドキュドキュ!

「エクセリオンバスターーッ!!!」

《Barrel shot》

ドオオン!

不可視のバインドをまず放ち、触手を払いのけ…

「ブレイク…」

キイイイイン

魔力を集束…

ドオオン!

「シューーート!!!」

ドオオオオオン! バリイイイン!

なのはの放った砲撃攻撃でさらに一枚破壊した

「ッ!」

「次!シグナムとテストロツサちゃん!」



シャマルの指示が、暴走プログラムの背後に陣取るシグナム達に伝えられた

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン！刃と連結刃に続くもう一つの姿…」

ガチッ！ドキュ！

シグナムは剣の柄と鞘を併せ

《Bogen form》

その姿は弓に変形した

ギイイ…ドキュ！

シグナムが弓を引くと矢が現れ、カートリッジが弓から2発ロードされた

「翔けよ！隼！！」

《Sturm falke》

キイイイン！

魔力を集中し…

シュン！！

一気に放った！

ドオオオオオン！

シグナムの攻撃でさらにバリアを一枚破壊

「フェイト・テストロッサ バルデッシュザンバー！いきますー！」

ブオオン！キイイイン！

ドキュ！ドキュ！

「はあああ！」

ブオオン！

フェイトがバルデッシュを一降りすると、不可視の物理破壊衝撃波が暴走プログラムに命中した

ドゴオオオン！バチバチイ！

フェイトはバルデッシュを上に掲げ…

「撃ち抜け！雷神！」

《Jet zamber》

フェイトが振り下ろした魔力刃：長く伸びたその一刀は暴走プログラムのバリアを砕いた

さすが別名【斬艦刀】！！断てぬものなし！だな

「　　ッ！！！」

暴走プログラムも応戦しようと触手から砲撃を放とうとしていた

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！！」

キイイイン！！

ザフィーラの魔法によりその触手は刃に貫かれた

「次！キョウスケ君！！お願い！！」

暴走プログラムの上空に待機していた僕…

「…神代恭介と無限の力、インフィニティ…これが僕のジョーカーだっ！！！」

カチャ！

僕は剣を上に掲げ

シューウウウ…

魔力を集束…

《Load Cartridge》

ドキュー！ドキュー！

カートリッジをロード！

「重閃…爆剣！」

キイイイイン

「メテオ…ザッパ…っ！！！」

振り下ろした剣から無数の魔力弾が降り注ぐ！

ドガドカドカアアアアン！！！！

「ッ！！！」

最後のバリア破壊し、本体にもダメージを与えた

「はやてちゃん！！！」

シヤマルは僕の反対側の上空にいるはやてに声をかけた

「彼方より来たれ…やどり木の枝 銀月の槍となりて撃ち貫け！！！」

キイイイン

「石化の槍！ミストルティン！！！」

ドオンドオンドオーン！！！！

パリ…パリパリ…

はやてより放たれた魔力槍は暴走プログラムを貫き、さらにそのまま暴走プログラムを石化させていった

「…」

バリイン！

暴走プログラムは石化ていき、女性を象っていた姿は崩れ落ちた

バァン！グチャ…ズズズズ…

しかし暴走プログラムは再生していき、その姿をさらにおぞましく変貌させた…

「うわっ！まあ…」

「なんだか、スゴイ事に…」

そのおぞましい変貌にアルフとシャマルは嫌悪感をあらわにした  
…僕だけだろうか…あの恐竜みたいな顔…デジモンじゃね？って思うのは…

『マスターから電波とは珍しいですね』

…ゴホン！…

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない、ダメージを入れたそばから再生

「されちゃっー!」

「だが、攻撃は通っている…プラン変更なしだ!…!…いくぞデユラ  
ンダル!」

《Ok Boss》

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ!」

キイイイ…

クロノから放たれた冷気は海をも徐々に凍結させ、暴走プログラム  
も凍結させていき…

「凍てつけ!」

《E t e r n a l c o f f i n》

パキパキイ!!

一気に暴走プログラムを凍らせた

バリーン!

しかし一瞬で暴走プログラムは氷を破壊し復活し再生していく

「いくよ、キヨウスケ君!フェイトちゃん!はやてちゃん!」

「ああ!」

「うん!!」

「うんっ!」

カチャ

《Starlight Breaker》

キイイン…

「全力全開っ!スターライト…」

ゴオン!バチバチ!

「雷光一線!!プラズマザンバーツ…」

シュウウウ…

「…ごめんな…おやすみな…」

…響け!終焉の笛、ラグナロク…」

バチイイイ!

「…ブレイカー…!!」

ドゴオオオオン!!!

なのは達のトリプルブレイカーが暴走プログラムに命中した

「…最後の審判、黙示の光…」

キイイイイイ…

僕は剣をかかけ…

「ファルネーゼ・アポカリプス!!」

剣を振り下ろし、広域殲滅魔法を放った!

ドコオオオオン…!!

暴走プログラムに4人分の攻撃が直撃し、残骸があたりに散らばった

シャマルは旅の鏡を使い、暴走プログラムのコアを探っていた

「…本体コア、露出…捕まえ…たっ!!」

「長距離転送!!」

「目標軌道上っ!!」

キイイイン

「…転送っ!!…!!」

ゴゴゴゴゴゴ…シュン…!!



暴走プログラムのコアはシャマル・アルフ・ユーノ達により転送された

Side Out

アースラSide

「コアの転送来ます！転送されながら生体部品を修復中！！  
凄い速さです！！」

「アルカンシエル、バレル展開！！」

シユユユユ…

「ファイアリングロックシステム、オープン！！」

ブオン！

リンデイの目の前に立体キューブ…アルカンシエルの発射スイッチが現れた

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します！準備を！」

「了解！」

カチ…ブオン

リンディはアルカンシエルの起動キーを差し込み発射体制に入った

シュン！…グチャグチャグチャ…

それと同時に、転送されてきた暴走プログラムがアースラの目の前に現れた

…その身体をおどましく再生させながら…

「アルカンシエル…発射！！」

カチッ

ブオオオオン！バチバチバチイ！！

アルカンシエルの主砲が放たれ、暴走プログラムに命中！

シユユユユ…バアアン！！

暴走プログラムは空間歪曲により消滅した

「効果空間内の物体…完全消滅、再生反応…ありません！」

「ふう…準警戒体制を維持、もうしばらく反応区域を観測します」

「了解！…ふう…」

エイミーは椅子にもたり掛かり安堵した

Side Out

キョウスケSide

「という訳で現場の皆、お疲れ様でした〜！状況、無事に終了しました〜！！

この後まだ残骸の回収とか市街地の修復とか色々あるんだけど…皆はアースラに戻って一休みしていつて」

「あ、あのアリサちゃんとすずかちゃんは？」

「ああ、被害の酷い場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻ってもらったよ。大丈夫！」

「そうですか、よかったです」

「キョウスケ、お疲れ様」

「ああ…フェイトも頑張ったな。」

ナデナデ

僕はフェイトを労う意味で頭を撫でた

「あつ…／＼」

…相変わらず頭から煙が出てるが…

ドサッ

「はやて！…！」

「はやてちゃん！？」

「はやて…はやてーっ！！！！！」

「どうした！？…ってはやて！？」

はやてがシグナムの腕にもたれ掛かり気絶していた

「恭介！はやてが…はやてがぁー！！！」

「…これは…急激な魔法消費による疲労で気を失ったみたいだ…！」

「じ、じゃあ…はやては大丈夫なのか？」

「十分な休息をとれば大丈夫だろう…シャマル、はやての容態は？」

「ええ、極度の疲労によるものね…急に身体を酷使したせいね…でも命に別状はないから大丈夫よ」

「そ、そうか…よかった…はやて…」

ヴィータがこれでもかという位、安堵していた

「はやてちゃん…大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ、なのはちゃん。」

「じゃあアースラではやてを休ませて…」

フェイトが言い終わる寸前で…

ゴゴゴゴゴ…

突如地響きがした！

「な、なんだ!？」

「み、みんな!?!アレを!」

「そんな…暴走プログラムの残骸が…」

「…一カ所に集まっていく?」

なっ!?!こんな原作になかったぞ!?!?

『マスター、前方に高エネルギー反応!?!』

「（キョウ君…何か…怖い…）」

ドクン！

「な、なんだ…何なんだよ…！暴走プログラムは破壊したじゃんか  
！！」

ドクン！

「まだ終わっていないのか…」

ドクン…グシヤ！

脈打つ闇の書の暴走プログラムの残骸…その残骸の塊から現れたの  
は…

「…な、なんでアレがこの世界にいるんだよ…」

僕はそう呟いた…

現れたのは…

僕がよく知っている…異形の存在…

この世界に存在しないはずの…

「…アインスト…レジセイア…」

T O B e c o n t i n u e d

## 新たな力

キヨウスケSide

…アインスト・レジセイア…

スーパーロボット大戦のゲームのキャラが…な、なんで闇の書の残骸からアレが出てくるんだ!?

…もつとも大きさは少し小さいが…

「なんだ!?!アレは?エイミー!!!」

「わ、分からないよクロノ君…闇の書の防御プログラムのコアは消滅したのに…」

アレが本当にアインストなら…結構ヤバイ?

《…コレハ…アラタナ……ウツワ……》

「ん?声…?」

「どうした?ヴィータ?」

「シグナム、なんか声みたいなのが聞こえたんだけどよ…」



「声？…いや、私には何も…」

「あ！シグナム、私も変な声が聞こえた…念話とも違ったような…」

「本当か？テストロッサ…シャマル、ザフィーラは聞こえたか？」

「うっん…私達には…」

「…ああ」

《…ミライ…ゲート…ナリエル…》

「あ、また聞こえた！」

「ああ、私も聞こえた！」

「…私には聞こえないけど…キョウスケ君は聞こえた？」

なのはは聞こえないようなので僕に尋ねた…声ってこの声だよな…

「…ああ、聞こえた…」

「えっ！？ホント！？キョウスケ君？」

「…ミライ・ゲート・ナリエル…だろ？フェイト・ヴィータ？」

「うん！」

「ああ！」

「しかし、何で君達だけがあのアンノウンの声が聞こえるんだ？」

「何でって…僕とヴィータ・フェイトの共通点…」

「…美少女とか？」

「フイ…」

「いやフェイト…それだとキョウスケには当てはまらないのだが…」

「うーん…」

僕ってフェイトの中では美少女扱い！？

…ゴトゴトゴト…

「皆！アンノウンに動きあり！…これは…市街地に移動を開始している！？」

「なんだって！？エイミィ！結界は！？」

「ダメ！張り直すのに時間がかかってっちゃう！！」

ちっ…あのまま市街地に上陸され暴れられたりしたら…！

「皆は、はやてを連れてアースラに！」

「恭介はどうすんだ！？」

「…あのアンノウンをなんとかする！」

「なっ！？君一人でか！？ムチャだ！タダでさえ防御プログラムとの戦闘でかなり消耗してるのに！？」

「大丈夫…【インフィニットレイヤー】…！」

…パアアン

僕を中心に光が辺りを包み込む

「あ、魔力が…」

「回復していく…」

「…これは一体！？」

「この光…前にキョウスケがなのはを治療した時に見た光だよね？」

「ああ、この光には魔力を回復させる作用がある…はやての酷使したリンカーコアも回復させる作用も少なからずある筈…シヤマル、はやてを頼む」

「…はい、分かりましたキョウスケ君！」

これで皆を退避させて…ん？

…ザッ！

「…私は残るぞー!!」

「グイータ？」

「…そうだな、なら私も残ろう…シャルは主を退避させてくれ」

「ちょ…シグナムまで!？」

「キョウスケ、私も残るよ…私はキョウスケのパートナーなんだし…」

「フェイト…」

「私も残るよ、キョウスケ君」

「なのは…」

「…そうだな、ここまで来て君にだけ背負わせる訳にもいかないしな」

「KY…「クロノだ!!」…冗談だ、気にするな」

「私はフェイトが残るなら付き合っよ!」

「アルフ…」

「僕も…なのはが残るなら…」

「ユーノ君…」

なのははユーノを見つめ…

「無理しなくても大丈夫だよ？私は、キョウスケ君がいるから大丈夫だよ」

「グサツ！」

「うぐっ…」

なのはは見えない言葉の刃でユーノを攻撃！

…哀れだ、哀れすぎるぞユーノ…せめて今後淫獣って呼ぶのはやめてあげよう……多分

「なあ…恭介…高町なのはって…」

「……鈍感な罪だな…」

『それをマスターが言いますか！？』

えっ！？なんで？

「……ハア…」

ヴィータも何故ため息を！？

「…な、なのは？」

「だからユーノ君もアースラでシャマルさんとはやてちゃんの治療お願いね？」

「…分かった、いきましようシャルルさん…」

「え、ええ…じゃあ皆、気をつけてね」

・シユン！

シャルルとユーノははやてを連れてアースラへ帰還、ユーノの顔が絶望に染まっていたのは言うまでもないが…

「後は…アレか…」

・ズウウウン…ズウウウン…

「アンノウンの移動速度が思ったより遅いのが救いだっただな…少しは対策を練る時間がある」

「対策って…クロノ、何かいい案があるの？」

「…まず情報が欲しいな…」

情報って言っても…アインストだからな…あ、闇の書から産まれたから新種のアインストかもしれないし…

「だったら私にまかせてなの！」

「なのは？何をするんだ？」

「まかせてキヨウスケ君！

まずは様子見で！ワンシヨット！

レイジングハート！」

《Acceler Shooter》

・ドオン！

つていきなり砲撃ですかい！？

…しかし

・パシユウ…

「ふえ！？消えちゃった！？」

なのはのアクセルシューターは本体に当たる事なく消えてしまった

「も、もう一回！レイジングハートお願い！！」

《Divine buster》

・ドゴオオン！！

つて威力上げてかよ！？

・パシユウ…

「ま、また消えたの…な、なんでえ〜！？」

「…どうやらあのアンノウンには砲撃を無効化するバリアが貼られているみたいだな…」

レジセイアなら…確かビームコートだと思ったが…その魔力版…って

「AMFかよ!？」

AMFってたしかStrikersでガジェットが搭載したのが初登場だったんじゃない？

「AMF?何それ?キヨウスケ君!？」

「アンチマギリングフィールド…魔法結合を消し去るフィールド…だったっけ?クロノ?」

「そこで僕に振るのか!?!…まあ大体そんな感じだ…付け加えるのならAAAランクの魔法防御だ」

「AAA!?!」x6

そりゃ驚くわな…この高ランクなら

「確かにありやあ完全に無効化してたな…ったく、せっかく恭介が回復してくれた魔力、無駄遣いしやがって」

「ううっっ…」

なのはは涙目になってスカート裾を掴んでた

「まあヴィータ、一応なのはのお陰で相手に魔法無効化バリアがあるって分かったんだし…」

「…恭介が言うなら…まあ今回は許してやるよ」



なんかヴィータとなのはって…相性悪いのか？…Strikers  
ではあんなに仲良かったのに…

『…マスターが原因では？』

…??だからなんでさ？

『…ハア……』

だから何で皆してため息を！？

「…だが、これでは我々の魔法が奴には効かないと分かったただだ  
…神代、何か手があるのか？」

「ん…魔法が無効化されるなら、それを上回る攻撃をぶつけるしか  
ないかな？」

スパロボだったら敵エネルギーをゼロにして、バリア発生できない  
状態にしてフルボッコなんだがな

「（ハイ！ハイ！キョウ君、だったら新機能使ってみる？）」

「（新機能？どんなの？）」

「（えつとね…キョウ君の新ユニゾンだよ！）」

「新ユニゾン!？」

T O B e c o n t i n u e d

「皆々!アンノウンの上陸まで後10分切ったから急いでよ〜」

あ、はい!すみません!!

## 剣神降臨

キョウスケSide

「（新ユニゾン？ってどんな？）」

「（え〜と…簡単に説明すると、キョウ君と仮契約した人とユニゾンできるの！名付けで【シンクロユニゾン】！）」

なにそのインチキ仕様は！？

「（ただ、ユニゾンデバイスでない人とのユニゾンだから…持って約10分が限界なの）」

ま…そのくらいの制限はあるか…

「…おい、キョウスケ…」

「どした？クロノ？」

「何か手があるなら早くしてほしいのだが…アンノウンが陸地に近づくと、さすがに結界張っていない市街地で派手な攻撃は出来なくなるのでな…」

ああ、そっか！

「(で、さくら どうやってユニゾンするんだ?)」

「(それはね……)」

「と、言う訳でヴァイタ、フェイトに白羽の矢が立った訳だ」

「恭介と……」

「一つになる……」

…その表現、いろいろ誤解を招きそうなんでやめてもらえますか…

「正確には僕とさくら+仮契約者って事なんだけど……」

「私とユニゾンするんだよ(な!?)(ね!?)」

と二人が詰め寄ってきた…ふ、二人とも顔近い！

「…今回は僕が剣に慣れているのを考慮して…フェイトと……」

「ホント!?あの…初めてなんで…その…やさしく…ね／＼」

だからその表現から離れて下さいフェイトさん…

「な、な、な…orz」

「ヴィータ…まあ…何だ、これは戦略的な事なんだから…気にするな」

「な、なんで私のは…ハンマーなんだああ…!!」

隣でおもいつきり落ち込むヴィータをシグナムが励ましていた…  
…すまんシグナム、フォローは任した…

「…いいな、フェイトちゃん…こうなったらキョウスケ君を襲っ…  
…ゲフンゲフン!…お願いして仮契約してもらおうの!!」

何か…物騒な台詞が聞こえたが…  
うっ!悪寒が…

「それで…どうすればいいの?キョウスケ?」

「えーと…仮契約カードを掲げて【シンクロ・イン】って唱えれば  
いいみたい」

「わかった…じゃあいくよ」

僕とフェイトはカードを掲げ…

「シンクロ・イン!!」

「キイイイン！」

僕とフェイトが光に包まれ…光が収まると…

「…っわぁー！」

「ほう…」

「…何でアタシとじゃねーんだ…ハンマーの何がいけないってんだ…ブツブツ…」

若干の悶着はともかく…僕の今の姿は髪は金髪に変化し、瞳は赤く、バリアジャケツトは元々の黒に戻り、金のラインが入ったカンジに変化した…早い話し、フェイト要素がプラスされたって事ですね

「ん…うまくいったかな…さくら？」

「（うん…魔力補助、ダメージコントロール、セーフティー管理、融合者フェイト・テストロッサの体調…オールグリーン！）」

「フェイトは？」

「（うん…なんか変な感じがするけど…大丈夫！）」

どうやらユニゾンは上手くいったようだな

「（次にデバイスを接続して）」

デバイスコネクト…インフィニティと融合者のデバイスを一つに

合成する事

「インフィニティ！バルデツシュ！コネクト！！」

・ガチャ！ガキツ！

「…イフト・バルデツシュ！」

「「「「おお〜〜！！！！！！」」」」

デバイス合成が上手いきき、女性陣から歓声が上がった

「…だからキョウスケ…出来る事なら早く対応を…流石に彼一人で  
防衛しているのも限界だ…」

ん？彼つて…

僕はアインストの方を見ると…

「ぬおおおお！！ここは通さん！！！！」

・ガキイイイイ！

・シユルシユルシユルシユル！

「はああああ！！！！」

・バキイイイイ！！

「「「「「……………あ」」」」」

ザフィーラがインストを足止めしていた…すまん  
てか、皆も気付けよ…!

「よし！いくぞ！イフト・バルデツシュ！ザンバーフォーム…！」

『ザンバーフォーム！』

あ、デバイス音声はインフィニティがメインなんだ…

ガチャ！ガチャ！

イフトバルデツシュをザンバーフォームに変形…って

「フェイトの使っていたのと違う…てかこの形って…」

「（うん、キョウ君のイメージを参考にして再現してみたんだよ）」

イメージとしては長大な柄に鍔の部分からは…

「ハアアアア！」

ブオン！バチバチバチ…

長い魔力刃を形成（スパロボ、スレードゲルミルの斬鑑刀参照）



…つてAMFで魔力刃って効いたっけ？

「（まかせてキョウ君！…刀身固定！）」

ピキイ！

さくらが魔力刃を物質化してくれた

…ホント何でもアリだな…

「（これならAMFも関係ないよ！）」

たしかにこれなら効果あるな…

「よし皆！あのアイン…アンノウンの相手は僕がするから手は出さないでくれ！！…いくぞ！フェイト、さくら！」

「『うん！』」

シュン！

僕はアインストに向かって行った

Side Out

「な！？消えた！？」

「にゃあああ！？キ、キヨウスケ君何処に行ったの！？」

「…見ろ！神代はもうアンノウンの所にいるぞ！」

「バカな…あの距離を一瞬で…」

「はあ〜…キヨウスケ凄いね〜」

ヴィータ、なのは、シグナム、クロノ、アルフがあまりのスピードの速いについていけなかったそうなの…

キヨウスケSide

タツ！

「って、うおっ！？瞬動も使わず一瞬でここまで移動スピードあるのかよ！？」

「（フェイトちゃんとユニゾンした事での効果だよ！…特性は超スピードみたいだね）」

なるほど…人によって特性が色々変わるんだ…フェイトはさしずめ超高機動戦タイプって事かな

「ザフィーラ！」

「ぬ…キヨウスケか？」

「ああ、後は僕らに任せてくれ！」

「…そうか、だが油断するなキヨウスケ」

タツ！

ザフィーラは皆が居る所まで下がっていった…  
さて、何でアインストがこの世界に現れたか気になるが…

カチャ！

「…立ち塞がるなら者は全て破砕する！！」

「……………！！」

グオオオオオ！

アインストはその鋭い爪を振りかざして来た！

「させるか！」

ガキイ！

僕は刀でその攻撃を受け止め…

「はああああ！」

ザシユ！

そのまま一気に振り抜きアインストの腕を切り落とした

「……………！」

グチャ…グチャグチャ！

だが、アインストはその傷口をすぐさま再生した…

『(うつ…)』

「(気持ち悪い…)」

た、たしかに…闇の書の暴走プログラムの再生もおどましかった…  
これも…

「……………ココハ……………ナリエ……………ナイ……………」

『(キョウスケ！また声が聞こえた！)』

「…いつの目的は…！？」

ギイイイイン！

刹那、アインストは腕を掲げ上空にエネルギー球体を作り出した

『(キョウスケ！危ない！！)』

判ってるってフェイト！

ズガアアアアン！

シュン！

ドガアアアア！！

「ふう…」

瞬動で回避…ってこのスピードほとんど瞬間移動だな…

「（キョウ君！ユニゾンリミットが後5分だよ！）」

「分かった！…一氣に決めるぞ！」

「『（うん！）』」

カチャ

イフト・バルデツシュを構え…

「…再生するなら、それ以上のスピードで攻撃を続けるまでだ！」

シュン！

ザンツ！キュ…ザンツ！…ガガガガガガンツ！！キュ！ガガガ  
ガガン！！

瞬動で移動し、すれ違い様に相手を切り裂く

それを繰り返す単純な作業だが…これを超高速移動で繰り返せば…

Side Out

なのは他Side

「……すい」

「私やテストロッサのスピードを遥かに凌駕しているな…」

「……てか、私には光の線しか見えねーんだが…」

「……これが彼の力か…」

「……はあ…私には全然見えないよ」

「……」

なのは達はキョウスケの戦いぶりに圧倒されていた  
なのは達から見れば、アインストの周りを高速で飛び回る光しか見  
えていなかった…

「ふっ…この圧倒的スピード…神代…興味深い…」

ポニーテールの人だけが、口元に不敵な笑みを浮かべ…

「……………」（バトルマニアだ！）「……………」

他の皆の心が一致した瞬間でもあった…

Side Out

キョウスケSide

ザンツ！タツ！

斬撃を繰り返す事数十回！

「……………！！」

「（キョウスケ！相手はかなりのダメージを負ってる！）」

「ああ、次で最後だ！カートリッジロード！！」

《Load Cartridge》

ドキュ！ドキュ！

「イフト・バルデツシュ！バーストモード！」

『オーライ！バーストイグニッション！！』

パリン！

ブオオオオン！

バルデツシュの固定された刀身が砕け、中から膨大な魔力刃が一気に噴出、高エネルギーが天を貫く光の柱となった

「…斬艦刀、星薙の太刀！！」

バチバチ…バチイイ！

激しく噴き出る魔力の刃を…

「ハアアアアア！！」

ブオオン！

そのままアインスト目掛け振りかざした！！

「……………カンサツ……………セカイ…シュウエンノ…」

ブオン！！

「なっ！！！？」



バシヤアアアン！！

僕の太刀は…海を切っただけだった…

『（…消えた？）』

「（………目標、ロスト…キヨウ君…）」

「………ああ、逃げられた…な」

僕の太刀が当たる寸前に、アインストは転移して消えてしまった…

「（クロノ…どうやら逃げられたみたいだ…アースラで追跡できたか？）」

「（ちょっとまってくれ………駄目だ、こちらでも反応が追跡できなかった）」

こうして闇の書の暴走を始めとする戦いは終わった…

残ったのは…アインストの謎の言葉と、

「………ここで倒せきれなかった事が後に影響しなければいいが…）  
ただ何でアインストがこの世界に…？」

答えが帰ってこない疑問だった……

S  
i  
t  
e  
  
O  
u  
t

## 夜天の心

### アースラ病室

ここはアースラの病室。ベットには、はやてが眠っている

その周りにヴォルケンリッター達と…リインフォースが心配そうにはやてを見ていた

ヴォルケンリッター、リインフォースSide

「…やはり破損が致命的な所まで至っている…防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ…私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう…」

「やはりか…」

リインフォースが自身の現状を話し、それを聞いたシグナムは、予想していた事態が的中してしまった事にため息をついた

「修復はできないの？」

シヤマルがリインフォースに尋ねるが、

「無理だ…管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている…」

「…元の姿が解らなければ戻しようもないと言っか」

「そついう事だ」

リインフォースの絶望的な答えにシヤマルは肩を落とし、ザフィーラは冷静に状況を把握した

「主はやては大丈夫なのか？」

「何も問題はない、私からの侵食も完全に止まっているしリンカーコアも正常作動している 不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう…」

「そつ…じゃあ、それならまあ…よしとしましょうか…」

「ああ、心残りはないな」

シヤマルとシグナムは、少なくともはやてが助かる事に安堵した

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ…破壊しちゃえば暴走する事も二度とない…代わりに私らも消滅するけど…」

…夜天の魔導書の破壊…

それは、夜天の魔導書から生まれたヴォルケンリッター達の消滅をも意味していた…

「…すまないなヴィータ」

「何で謝んだよ！いいよ別に…こうなる可能性があった事位みんな知ってたじゃんか…ただ…」

「ただ？」

「…恭介と、もう会えなくなると思つと…」

「…ヴィータちゃん…」

ヴィータは今にも泣きそうな顔で俯いた…

「いいや違つ…」

「…えっ！！？」「…」

リインフォースのその言葉に皆の視線が集まった

「お前達は残る…」

逝くのは…私だけだ…」

そう言い、リインフォースは悲しみを含んだ笑みを浮かべていた…

アースラ食堂

キヨウスケ Side

現在僕とさくら、なのは・フェイト・アルフは、クロノとユーノからリインフォースの話聞いています

「夜天の書の破壊!？」

「どうして!？ 防御プログラムはもう破壊したはずじゃあ…」

「そうだよ！ 確かにあの時、みんなでやっつけた筈じゃあ!？」

なのはとフェイトとさくらはクロノとユーノを問い詰めている  
…まあせっかく助けた相手を破壊って言われれば当然か

「闇の書：夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムって、なのは達が戦っていた？」

「ああ」

「防御プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度は、はやてちゃんも侵食される可能性が高い…夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消

えないんだ…」

「だから闇の書は防御プログラムが消えている今の内に、自らを破壊するよう申し出た」

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…」

カツツ…

「いや、私達は残る」

「シグナム!？」

「シヤマルさん!？」

「…防御プログラムと共に我々守護騎士プログラムも本体から開放したそうだ」

「それで、リインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって…」

「お願い？」

「ええ…リインフォースが最後はあなた達3人の手で送り出してほしい…って」

「3人？私とフェイトちゃんと…キヨウスケ君？」

って僕かよ!?

「ああ、リインフォースが神代にも…と」

「……………そうか」

ん〜…色々準備があるんだよね〜

…よし、さくらに頼んでアレ使うか

「それとキョウスケ」

「何だ？クロノ？」

「君には少し聞きたい事があるのだが…」

「……………なにかな？クロノ執務官殿？」

ここは下手な事は言えないからな…気をつけないと

「……………君は一体何者だ？こちらで調べたが戸籍などは確かにあるが、不自然すぎる所が多々あるのだが」

いきなりそこツツコムか〜…ま、今更どころ言っても仕方ないか…

「そうだな…シグナム達には話したが…僕はこの世界とは違う世界…平行世界から来たみたいなんだ」

「……………平行世界!？」



「…なるほど、つまり君は平行世界での事故で、こちらの世界に迷い込んだと言っ訳か…」

「ま、本来なら僕はこの世界に居ない存在って事かな」

何か、なのはとフェイトが不安そうにこちらを見ているが…？

「じゃあ君が使っていた魔法も…その平行世界の物なのか？」

「……ああ」

正確には、居た世界のゲームやアニメの魔法なんだけどね

「では君のデバイス…さくらも平行世界から？」

「…ああ、一応こっちに来た時は未完成だったんだが、こっちに来た時にシグナム達に会い、シグナム達が使うデバイス…カートリッジシステムに興味が出てね…古代ベルカ式魔法を調べていき、その時の知識で先にインフィニティを造って…さらに調べていく内に融合デバイスの記述も発見したので、未完成だったさくらにその融合のノウハウを注ぎ込んで改修し…完成したのが今のさくらさ」

…かなり嘘なんです（笑）

まさか神様から貰いました…って言えないしね〜

「なるほど…」

クロノは何か考え込むように何かの資料を見ている…

「キョウスケ君…居なくなったりしないよね？」

「えっ？」

なんでそこまで話しが飛躍する？

「だって…キョウスケが…本来はこの世界に居ない存在なんて言うから…」

あゝ…なるほど…

「大丈夫だよ二人とも…だからそんな顔しないでほしいな…二人には笑顔が似合ってるんだから…な？」

「うう、うん！／＼」

「…まあ…クロノが僕を捕まえようとしたら逃げるが…」

僕が言ったその瞬間、少女二人からクロノに向かって強烈な殺気が放たれた…

「クロノ（君）…キョウスケ（君）に何かしたら…」

「な、なんだ！？二人とも…」

「…その口にレイジングハート突っ込んで、零距离スターライトブレイカーぶっ放すの」

「…バルデツシュザンバーで足元から細切れにするよ？クロノ…」  
怖っ！二人ともそれはフツにクロノの生命が…ま、いつか  
…後ろでシグナム達がドン引きしているが…

「ひっ！？ふ、二人とも落ち着いてくれ！？」

クロノの顔色が真っ青になって必死に説得してるな

「…神代、テストロッサ達を止めないのか？あの目は本気だと思う  
のだが…」

「ん？まあ正直な話し、管理局が僕らをどうするか解らないからね  
…その牽制の数は多いに越した事はないからね」

「応グレアムを脅…ゴホン！…お願いしたけど、どうなるか解らな  
いしな」

「ゴホン！…で、では次に、闇の書の残骸から生まれたアンノウン  
について…君はアレが何か知っているのか？」

知ってますが…アレは僕にとってモイレギュラーだからな

「…闇の書の残骸から現れたのだから…闇の書の暴走プログラムの  
一部だったのでは？」

「いや、リインフォースから聞いたのだが…あのアンノウンについ  
ては知らないらしい…」

「ええ…」

シグナムとシャマルがクロノの代わりに答えてくれた

「…それに戦闘中に君とフェイト、それに魔導書の守護騎士のヴィータだけにあのアンノウンの声が聞こえたらしいし…君らの共通点は【仮契約を交わした】事だと僕は思うんだが…君は何か知っているのでは？」

鋭いな…伊達に執務官名乗っている訳じゃないか…

「いや、あのアンノウンがどういう存在かは僕も知らない」

別にこれは嘘ではない。

闇の書の残骸から産まれたアインスト…アレがどんな存在で何が目的かは知らないからな

「そうか、解った…」

何か腑に落ちない感じだが、一応納得した…かな？

「そついや…シャマル、はやての様子はどつ？」

「はやてちゃん…今はグツスリ眠ってますよ。ヴィータちゃんが傍らに着いているから大丈夫よ」

「そつか…」

「フフツ…キヨウスケ君、はやてちゃんやヴィータちゃんが気になる？」

「そりゃあ気にな…」

ジイイイ…

ヴツ…な、なんか視線が刺さる感覚が…後ろを振り向くと…

「「「む〜〜〜〜！」「」

白と金とピンクがホツペタを膨らまして睨んでました…

「…頼むからアースラは破壊しないでくれよ」

クロノ！！それはこの3人に言ってくれ！！

Side Out

アースラ病室

ヴァイターSide

「はやての幸せが私達の1番の幸せ…だからリインフォースも笑って逝くってね…」

ヴィータは、はやてに布団をかけ出入口に向う

キィイ

ドアを開け、部屋を出ようとするが…はやてのベッドの方を振り向き、

「…夢の中でいいから、褒めてあげてね…あの子の事」

キィイ…ボタン

眠っているはやてにヴィータは一言伝え、部屋を後にした…

S i d e O u t

裏でこっそり活動中？

海鳴市、とある丘

ザツザツザツ…

雪が積もる中、4人の少年少女達が歩いている…

その先には、長い銀髪をなびかせ…一冊の魔導書を持った女性…

「…ああ、来てくれたか」

リインフォースが居た

キョウスケ？Side

今私…僕は、なのはさんとフェイトさん、それとマス…さくらさんと一緒にリインフォースさんの所に来ました  
その目的は…

「リインフォース…さん」

「そう呼んでくれるのだな」

「……………」

「貴女を空に還すの私達でいいの？」

「お前達だから頼みたい…お前達のお陰で私は主はやての言葉を聞く事ができた 主はやてを食い殺さずに済み騎士たちも生かす事ができた…感謝している。だから最後は、お前達に私を閉じてほしい…」

そう…はやてさんを暴走プログラムから救う為に、リインフォースさん…夜天の魔導書を破壊する為です…

「はやてちゃんと…お別れしなくていいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ…」

「リインフォース…」

「でもそんなの…何だか悲しいよ…」

「お前達にもいずれ解る…海より深く愛し、その幸福を護りたいと思える者と出会えればな…」

フツ…いや、もう出会っているのかもな…」

リインフォースさんは僕に視線を送ってきました…

「「う……………／／」」



なのはさんとフェイトさんが顔を赤くしてしまいました…

「…………むっ」

あ…さくらさんが何だか不機嫌そうです…

ザッザッザッザッ…

「あ…」

後ろからヴォルケンリッターの方々が来ました…

やはりみなさん表情は優れないですね…

「そろそろ始めようか…夜天の魔導書の…終焉だ」

ラインフォースさんはそう言い、空を見つめ続けていました…

…頼みますよ、ご主人様…

「（大丈夫ですよ、ああ見えてもマスターは頼りになりますから）」

私の指にある指輪…インフィニティさんから念話が…

そうですねインフィニティさん…私もご主人様を信じます…

Side Out

遡ること数時間前

キヨウスケSide

「…と言う訳でさくら、お願いな？」

「うん…って何がと言う訳でなの!？」

ノリツツコミとは…さすが神監修のデバイス…高性能だな

「いや、このままだとリインフォース消えちゃうじゃんか？  
だから助けようかね」

「だったらみんなに話しても…」

いや〜それだと今後リインフォースツヴァイが作製されなくなっちゃうし…

「あ、リインフォースツヴァイちゃんが居なくなっちゃうからか！」

な、なんでさくらはその未来ってか原作知識を!？」

「もう…忘れちゃったの？以前ユニゾンした時に記憶をリンクしたでしょ？その時にキョウ君の記憶も私に流れてきたんだよ！」

あ…そうなんだ…まてよ…

「じ、じゃあ…シンクロユニゾンしたフェイトにも…？」

それは…ちよつとヤバイかも…

「あ、それは大丈夫だよ！フェイトちゃんとは記憶までリンクしてないから

キョウ君フェイトちゃんの記憶何か見えた？」

「いや…ないな〜」

「だから大丈夫だよ！」

そうですか〜

「じゃあさくら…」

「うん、リリース（封印解除）！」

パアアア

さくらは封印の杖を出し…

「鏡よ！彼の者の姿を映し、もう一人の彼の者となれ！ミラー」  
《鏡よ！彼の者の姿を映し、もう一人の彼の者となれ！ミラー》

キーン！

カードから少女が現れ…

シユルルル

その姿を僕に変えた

「ほゝ… 実際目の当たりにすると… ホントそっくりだな」

「あ…あの… 初めましてご主人様…」

なんか… 凄く緊張してる？

「あゝ… そんな緊張しなくていいよ！… えっと、ミラー… でいいのかな？」

「は、はい… ご主人様のお好きなようにお呼び下さい」

「じゃあミラー、さくらとも話したんだけど、今回お願いしたいことは…」

「はい、分かりました。私はご主人様の代わりに、なのはさんやフエイトさんと一緒に行けばいいんですね？」

「ああ、後これを一応渡しとくよ」

僕は指輪…インフィニティをミラーに渡した

「インフィニティ、ミラーのサポートを頼むよ？」

『それはいいのですが…マスターは私がいなくて魔法使えますか？』

「ま、基本魔法も出来なくはないけど…っと！」

ふわ…

「気のコントロールで飛行も出来るから大丈夫さ」

まさに舞 術！

「ほえええ〜」

「ご主人様凄いです！」

『相変わらず何でもアリな方ですね』

何でもアリは否定しないが

「それに予備で簡易デバイスも造ったから補助魔法も出来るし、インフィニティ通してそっちの音声も聞こえるしね」

「でもキョウ君、どうやってリインフォースさんを救うの？」

「それは…これを使うのさ」

僕は収納空間から一冊の本を取り出す

「それは…魔導書？」

「そ、僕が造っていた魔導書…名付けて…」

「『名付けて？』」

「天空の魔導書だあー！！」

そして現在

現在僕はリインフォース達の上空に待機中です

辺り一帯、天空の魔導書を中心にした術式を複数展開…つと、

あ、下の準備がどうやら出来たようだな…

「…術式起動、対象…リインフォースの……」

T  
O  
B  
E  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

S N O W  
R a i n

病院

はやてSide

「……………ん？」

ベットの上で目覚めたはやて

上半身を起こし、辺りを見回すが…

ドクン！

「うっ…ぐっ…」

はやては胸を押さえ苦しみだした

ドクン！

「ハッ！？…ライン…フォース…」

眩くはやてのその瞳の色は、碧く輝いていた



Side Out

鳴海市、とある丘

キヨウスケ？改め、ミラーSide

リインフォースさんの足元からはベルカ式魔法陣が展開され、陣の中心にはリインフォースさん…周りの小さな円には、なのはさんとフェイトさんと私がデバイスを起動させ待機しています  
…さくらさんやヴォルケンリッターの皆さんは少し離れた場所で見守っています

《Ready to set》

《Standby》

『準備はよろしいですか？』

「ああ、短い間だったが…お前達にも世話になった」

《Don't worry》

気にせずに

《Take a good》

良い旅を

『貴女の行く道に祝福を…』

「ああ、ありがとう…」

ラインフォースさんはデバイス達に御礼を言い、目を閉じて自らの存在を消し去ろうとするその時…

「ラインフォース！！みんなー！！」

車椅子に乗ったはやてさんが、息を切らしてこちらに駆け寄って来ました

「ハア！ハア！ハア…」

「はやてちゃん…」

なのはさんとフェイトさんは驚いて

「はやて！」

ヴィータさんは、はやてさんに駆け寄ろうとしますが…

「動くな！！動かないでくれ、儀式が止まる…」

ラインフォースさんに一喝され、みなさんその場に留まりました…

「あかん！やめて！！ラインフォース止めて！！破壊なんかせんで

ええー！！私がちゃんと抑えるー！！大丈夫や！こんなんせんでええー！！」

「…主はやて、良いのですよ」

「いいことないー！！いいことなんか、何もあらへんー！！」

「随分と永い時を生きてきましたが、最期の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました…騎士達も貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

「心配とかそんな…」

「ですから、私は笑って逝けます」

「……ッ！話し聞かん子はキライヤ！マスターは私や！話し聞いてー！！私がつつと何とかする！暴走なんかさせへんって約束したやんか！ー！！」

「…その約束は、もう立派に守っていただきました」

「リインフォースー！！」

はやてさんは何とかリインフォースさんを引き留めようとしています…

「主の危険を払い、主を護るのが魔導の器の勤め…貴女を護る為の最も優れたやり方を私に選ばせて下さい」

やはりリインフォースさんの決意は固いみたいです…

「…せやけど…ずっと悲しい思いしてきて、やっと…やっと…救われたんやないか…」

「私の遺志は貴女の魔導と騎士達の魂に残ります…私はいつも貴女の傍にいます」

「そんなんちゃう！そんなんちゃうやろ！リインフォース！」

「…駄々っ子はご友人に嫌われます…聞き分けを、我が主」

「リインフォース！」

はやてさんが、リインフォースさんに駆け寄ろうと車椅子を勢いよく運転していますが…あ、危ない！

ガタッ！

「きゃー！」

バタン！

はやてさんは転んでしまい、車椅子から放り出され倒れてしまいました…

「あっ…！」

なのはさんは一瞬はやてさんに駆け寄ろうとしましたが…リインフォースさんに言われた通りその場に留まりました

「ひっく…なんで…これから…やっと私が…これから、うんと幸せ

にしてあげなあかんのに！」

「大丈夫です、私はもう世界で1番幸福な魔導書ですから」

「…リインフォース…」

「主はやて、1つお願いが…私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈ってあげてくれますか？」

祝福の風、リインフォース…私の魂はきつとその子に宿ります」

「…リイン…フォース…」

「はい、我が主」

リインフォースさんは、はやてさんの呼び掛けに優しく応えると振り返り、再び魔法陣に戻りました

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達…ありがとうございます…そして、さよなら…」

キイイイイン

「ッ！」

シュウウウ…

リインフォースさんの姿は光の粒子となり消えていきました…

キラッ

「あ……」

ヒュウウ……

上空から何か光る物が落ちて来て、はやてさんがそれを受け取りました

「う……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

「はやてさん……」

はやてさんは空から落ちてきたリインフォースさんの欠片……剣十字の紋章を握りしめ泣いていました……

ご主人様……後はお願いします……はやてさんの為にもリインフォースさんを……

S i d e O u t

T o B e c o n t i n u e d



祝福の風…再び

別荘内

キョウスケSide

こんにちは、神代恭介です

…なんかこのフレーズ久々だな（笑）

あ、失礼…僕の前には一冊の本があります…

タイトルは…

【天空の魔導書】



現管理人格…

【リインフォース】

消える筈のリインフォースを助ける事には成功しました…

まあ…多少の問題はありますが…

「ねえ、キョウ君…リインフォースさんはどうなったの？」

今別荘には僕とさくら（ついでにインフィニティ）だけです。

は yet は現在病院に戻っています…

石田先生に無断で外泊って事になっていたので…ヴォルケンス共々  
説教喰らっている頃でしょう…僕は速攻逃げましたけど

『…マスター、シャマル女史からのメールをお忘れで？』

ハテ？

「キョウくん…はやお姉ちゃん、外の時間で今日すずかちゃん  
の家に行くから迎えに来てほしいって…」

ああ、一応みんなとクリスマスパーティーする予定だったっけ

『その時にきつと、先生からの説教がマスターにも必ずありますね』

……ハア、でしようね」

「で、キヨウ君 リインフォースさんは？」

「ああ、起動してみるか…天空の魔導書よ…我が声に応えたまえ！」

ピカッ！

魔導書から光が溢れ、その中から見知った女性が現れた…

「……ん…ん、ここは…？」

「目が覚めたかい？リインフォース？」

僕の声に反応し、リインフォースの目が一気に見開かれた

「ッ！？…キ、キヨウスケ…ですか？」

「ああ、久しぶり…と言う程時間は経ってないか」

「私は…主はやてを救う為、消え去った筈…」

…ハッ！ダメだ！…私が存在したら防衛プログラムが暴走し、主はやての命をうばってしまう…！」

あゝ…リインフォースでも混乱してるか…

「落ち着けリインフォース！」

「これが落ち着いていられるか！ また私は…私は、主を不幸にし

てしまうー!!」

「あゝ…すまんが、リインフォースとはやての契約…と言っかリンは切れてるから…」

ピタッ

あ、リインフォースの動きが止まった

「キョウスケ…そ、それは一体…？」

「今のリインフォースの現状を説明しよう…落ち着いてちゃんと聞いてくれよ?」

「は、はい…取り乱してすみません」

「まあいいって…さてリインフォース、君がなのは達に消してもらった後に何があったか説明すると…」

回想

とある丘、上空

キョウスケSide

今リインフォースの消滅を確認…っと  
リインフォースの光の粒子が、僕の術式に導かれ集まり…僕は魔導  
書を開き

「アブソルプティオーニス！」

《Absorptionis》

キュウウン！

光の粒子は僕の張った術式の魔法陣をフィルターにして、すり抜け  
て天空の魔導書へと吸収されていく…

シュウウウ…ボタン！

「リインフォースの人格データ回収完了…っと。後は…」

ジュウウ…

魔法陣のフィルターには黒い塊が張り付いていた

「…これが、改悪されたデータ…」

僕は黒い塊を見つめ…収納空間から一降りの刀を取り出した

カチャ…

その刀の刀身は冷たく輝き、触れる物を一瞬で消してしまふ…無慈悲なほど一瞬で…

「…消え去れ！」

ヒュ！

僕は刀を…【細雪】を黒い塊に向かって振り下ろした

ザアア…

黒い塊はその名の通り細雪となり消え去った…

「後は…リインフォースの取り除いたデータ分を再構築してインストールしないと…」

とりあえず天空の魔導書は収納空間に閉まっておいて（中の時間は止まっているので保存には最適？）ミラーと入れ代わらないとな

…ミラーって礼儀正しいから口調でバレそうだな

僕は事前に打ち合わせした通り、さくら達との合流地点…といったも少し離れた場所だけど、簡易ステルス結界を張りながら向かった

スタツ

つと…着地成功つと。さて、さくらとミラーは…あ、いたいた

「さくら…ミラー！」

「あ、キョウ君！こっちこっち！」

「ご主人様、お急ぎを」

「ああ！…ご苦労様だったねミラー」

「ありがとうございます…では失礼します」

パアアアア

ミラーはカードに戻り、さくらの手元に

「じゃあさくら、はやて達の所に行こうか」

「うん！」

タツタツタツ！

「うっ…」

「はやてちゃん…」

「はやて…」

ザツザツザツ…

「…はやて、ベットに戻ろう…はやてが風邪引いたらリインフォースも悲しむよ…」

「ぐすつ…キ、キョウスケ君…」

「シグナム、悪いがはやての車椅子を…」

「ああ、解った」

シグナムに車椅子を持って来てもらい、はやてを乗せようと抱き抱えると…

「キョウスケ君…リインフォースが…私、リインフォースに何もしてあげられへんかった…ダメなマスターや…」

あゝ…一応無事なんだけど…今後の為とはいえ、なんか少し良心が痛むな…

「…そんな事はないよ、はやてはリインフォースを闇の呪縛から救ってあげたんだ…立派なマスターだよ。だから胸を張って自信もっていいんだよ。」

…でも、今だけは無理しないで、僕の胸を貸してあげるから…」

「キヨウスケ君……う、う、うわああん!!」

「はやて……」

僕の胸で大声で泣くはやてを僕は抱きしめていた……

余談だが、さすがに刺すような視線は今回はなかった……いつものパターンならダークなオーラが満ちていたが……  
空気読んだか……黒い執務官にも見習ってほしいものだ……

数分後

「落ち着ikai? はやて」

「う、うん……/ごめんな……みつともない所、見せてもって……服も私の涙で……」

「ああ、大丈夫だよ さ、はやて……とりあえず車椅子に乗って」

「うん」

「じゃあシグナム、はやてを病院に」



「ああ、解った」

「で、その後…悪いんだけど…石田先生に言い訳をしておいて」

「……えっ!?」「……」

いや…えっ!?…って…

「はやては一応入院していたんだよね?それが無断で居なくなっただけで病院は大騒ぎだろうしね…はやての事だから、病院抜け出して急いでココに来たんでしょ?」

「うっ…せやかて…リンフォースの事があつたんやし…」

まあリンフォースが消えるって時だったしな

「そうですね…石田先生怒ってるかしら…」

あの先生なら確実に…

「ん?言い訳をしておけて…恭介は来ないのか?」

ヴィータさん鋭い!

「ああ、僕とさくらはちょっと用事があるから一旦家に帰って別荘に入るよ」

「…さくらと一緒に?な、なんでだよ!」

「…事後処理をね、さくらは初起動でいきなり過酷な戦闘をしたか

ら調整しないと…な、さくら

と僕はさくらにアイコンタクトを送る

「ほえ！？そ、そうなんだよヴィータちゃん！」

「そっか…さくらちゃん、迷惑かけてもったな…」

ああああ〜！！はやてがまた凹みモードに入るっつと！！

「うっん！そんな事ないよ！！はやてお姉ちゃんが無事なら私も嬉しーしー！！！！」

「…ありがとな、さくらちゃん」

ナイスフォローだ！さくら！！

「「別荘??」

あ…少し空気になっていたなのフェイコンビを忘れてた

っ  
…っく

「回想なのに続く、なのですか？」

「すまん…リインフォース。ま、とりあえずお茶でもどどろぞ」

「は、はい…では、いただきます」

「あ、お茶菓子もある〜！食べていいかな？」

…シリアス感がないな〜

## 少年に祝福された風

前回までのあらすじ…

「…たしか回想中なのでは？」

「…はい、すみません…まだ回想続きます」

キョウスケSide

「「別荘？」」

なのはとフェイトがハモって首を傾けながら聞いてきた

「ああ、恭介が魔法で造ったミニチュアだ」

いやヴィータさん…それじゃ説明足りませんよ

「あゝ…簡単に言えば特殊な結界だよ。結界中で1日過ごしても、外では1時間しか経ってないって仕様の」

「しかも中には、お城や一年中入れるプールとかもあってリゾート気分満載な所や！」

「ふえええ！？な、何か凄い所なんだね…」

「それもキヨウスケが造ったんだよね…キヨウスケって何でも作れるんだ…」

まあ神様から貰ったチートパワーでだけどね

「ま、機会があつたら今度見せてあげるよ」

「ホント!?!」

な、何だろう…二人の目が凄くキラキラしているが…

「あ、ああ…」

二人の妙な迫力にただ頷くしかできなかった…

「(キヨウスケ(君)の別荘…プールもある…水着で悩殺…そしてそのまま…キャノ／＼)」

二人が人様にはあまりお見せ出来ないだらし無い顔をしていたが…  
ちよつと怖い…

「じ、じああはやての事、頼むよシグナム・シャル・ヴィータ・ザフィーラ」

シュン！

僕とさくらは一旦家に転移した…

Side Out

シグナム・ヴィータSide

「…なあシグナム」

「何だ？ヴィータ？」

「…アレはどうすんだ？」

【アレ】を見てシグナムは困り果て…  
結果シグナムはシャルの方を向き、

「シャル」さあはやてちゃん！早く病院に戻りましょ「ル、」

「そ、そやねシャル！石田先生が心配しとるから超特急でもどらなあかな！」

「はい！」

シャアアア

…シャマルは、はやての乗った車椅子を猛スピードで押してその場を立ち去った…

「…逃げたなシャマル」

「ああ！！何気にザフィーラも居ねえ！？」

ザフィーラも影が薄い（？）為、はやて達と共に立ち去っていた

「何！？…では、我らだけでアレを何とかするしかないのか！？」

二人の目の前のアレとは…

「あつ…そんな…ノノだ、駄目だよキョウスケ君ノノ」

「…キョウスケが望むなら…あつノノ」

「「……………」」

未だ妄想の中にドップリ浸かって色んな意味でヤバい二人だった…

「……………ほつといていいんじゃないか？」

「……………我らは主はやての下に行かねば」

「ああ……………」

ザッザッザッ…

二人はそのままはやて達の下に向かった

ちなみになのは達が正気を取り戻したのは1時間後だったそうな…

S i d e O u t

八神家、キヨウスケ部屋

キヨウスケ S i d e

シュン！

つと…部屋に入るのも何か随分久しぶりに感じるな…

「ここがキヨウ君のお部屋か、ちゃんと綺麗に片付いてるんだね」

そりゃ毎日はやてやヴィータが入り浸ったりするから…女の子が来るのに汚くはできないよな



…別に僕の部屋に居たって面白くもないのに…

『(…………ハア、お二人が報われませんね)』

「さて、別荘はこっちの部屋だから、その魔法陣の上に立って

「ほええええ…何かフラスコみたいなのが沢山あるね」

「修行用とかもあるからね…じゃあ、いくか」

「うん！」

・シユン！

…別荘内…

・シユン！

「到着つと…どうだいさくら？」

「ほえええええ！お、お城だよ！！お姫様が住んでるようなお城があるよ！！」

お姫様：吸血鬼エヴァが住んでたお城のレプリカだけだね

「さ、中の研究室に行って天空の書の調整しないとな」

「あー！おっきなプールだ〜！うわー！」

…テンション高っ!?!?このコ、本当にデバイス?

…城内、研究室…

僕とさくらは、地下に作られた研究施設にいます

「ねえキョウ君…何で研究室の出入り口が地下で、しかも隠してあるの?」

「ん〜 強いて言うなら…」

「言うなら?」

「お約束?」

…ズコッ

あ、さくらがコケた(笑)

「お、お約束って…」

いや、秘密研究所は地下に作るって規則が国際法で決定してるじゃん

「そんな規則ないよ〜!!」

…ちつ、久々に心を読まれたよ

「ゴホン…ま、まあともかく調整作業を開始しようか」

「調整ってどうやるの？」

「…元々闇の書は夜天の魔導書を書き換えて作られたんだ。で、今回闇の書から暴走したプログラムを取り除いて夜天の魔導書に戻した…だが、基礎構造は改変されたままなので再びバグ付き防御プログラムが夜天の魔導書の中で再生されてしまう…」

「うん…」

「で、それを避ける為にリインフォースは自ら消え去る…筈だったんだけど、僕がリインフォースをこの【天空の魔導書】に回収する際に、僕が構築した魔法陣を通してリインフォースの管理人格や無傷なデータのみを抽出して回収した」

「でも回収しても、さっき基礎構造とかが改変されたままって…」

「うん、だから…リインフォースの人格と夜天の書の基礎構造と切り離しちゃった」

「そ、そんな事して大丈夫なの？」

「あゝ…多分ね。夜天の魔導書本来の姿が解らないから元に戻せな

い…それならいつそ別の魔導書を基礎にして管理人格を上手く移し、不足したデータは新たに再構築してリインフォースにインストール…で、基礎構造をこっちの魔導書にすれば大丈夫かな？…って」

「なんで疑問系なの!？」

いや〜正直、不安要素と穴だらけの理論満載だからね〜

正直、かなり分の悪い賭けだな…

「天空の書にリインフォースの人格が無事そのまま保存されているから大丈夫…とは思っただけ…とりあえず今からリインフォースの調整だ。手伝ってくれ!さくら」

「うん!まかせて!」

……回想終了……

「と言う訳なんだよ」

「…つまり、私は…」

「ま、転生?みたいなカンジになるのかな?ん〜…初期起動も問題ないみたいだし…なんとか成功かな」

「キヨウ君、一週間も別荘で作業に集中してたもんね。」

「そうか…すみませんキヨウスケ…ってあれから一週間経ったのですか!？」

「ああ、別荘内時間がね。外じゃまだ7時間位しか経ってないよそれにリインフォースを助けたいから僕が勝手にした事だし気にしないでね…ただ…」

「ただ…なんですか？」

「かなり強引な手段使った為に…色々と問題が…」

「問題…とは？」

「まず、夜天の書から天空の書に人格の移動…言い換えれば生まれ変わりだから…はやてとのリンクは切れた」

「…はい、確かに主はやてとは繋がりが感じられません…」

うっ…そんな悲しそうな顔されると…

「さらにリインフォース…」

僕はリインフォースを同じ目線で真正面から見つめ…

「な、なんでしよう…/ /」

【真正面】から見つめても気付いてないかな？

「リインフォースの修復に、同じ融合デバイスのさくらを参考に  
してプログラムを組んでインストールしたんだけど…何か違和感ない  
かな？」

「…違和感、ですか？」

やっぱり気付いてないか…

「…さくらに聞いたんだけど、さくらは僕とリンクしているから僕  
が成長すると、それに合わせて外見が成長するんだって…」

体が成長するデバイスってどんなだよ…

「は、はい…そうなんですか？」

そうなんですよ

「で、僕はさつきリインフォースを修復する時に、さくらを参考に  
したって言ったよね？…だから、その…」

「……………？」

「…さくら、鏡を」

「ハイイ！ じゃん！リインフォースちゃん この鏡見てくらん？」

さくらが持った鏡をリインフォースが覗くと…

「……………なっ！な~~~~っ！！？」

別荘内にリインフォースの音が響いた…

次回、リインフォースの問題点が明らかに!!

『…読者の方にはバレまくりでは?』

女性の魅力は…？

前回までのあらすじ…

鏡を見たリインフォースが…

「……………なっ！な~~~~っ！！？」

別荘内でリインフォースが絶叫していた…

キョウスケSide

「キ、キョウスケ…これは一体…？」

リインフォースは自身の姿を見て驚愕していた…

「…私の姿が…縮んでるのですか？」



そうなのです！リインフォースの姿が、なのはやフェイト達と同じ位に縮んでしまったのです！

「…おそらく原因は、さくらのデータを参考にしたプログラムのせいかな」

僕とリンクして同じように成長するルーチンが組み込まれたようだ…

「だ、大丈夫だよリインフォースちゃん、キヨウ君が成長すれば元の姿に戻るよー！」

「ほ、本当ですか？」

リインフォースは上目使いで僕を見てくる…クッ！リインフォースもこの技を使ってくるとは…

「…多分」

元々さくらを元にしたデータだからな…多分大丈夫とは思うが…

「だったら試してみようか？」

はい？何を言ったのかな？この口は…

「あ！そっか、キヨウ君に言ってなかったけど…年齢変化の封印は解除されてるよ？」

「……………はあ！？」

あの転生初日に、いきなり封印された能力が！？

「てかいつの間に！？」

「ん〜…私がこっちに来てからかな？」

結構前ぢやねーか！

…まあ、すぐ戦闘だったし…年齢変化は戦闘にはあまり意味ないしな…

「まあ、ツツコミたい所は満載だが…試してみるか」

とりあえず20歳前後…僕がStrikers時代の姿に…っと

・ボンツ！

「…ゲホ…浦島太郎じゃあるまいに煙かよ…」

一瞬白い煙が僕から吹き出た  
で、姿を確認すると…

「ん〜まあ予想どおり容姿はクラウドに似てるかな。さくら、リインフォースはどう…」

僕が二人の姿を確認すると…

「ほええええ！！こ、これが私！？」

「確かに元に戻りましたね。しかし…／／」

リインフォースは元の姿に、さくらは…外見は【ツバサ】のサクラ  
姫依りに成長していた

…若干リインフォースの僕の見目が熱っぽかったのは…気のせい  
だろう…うん

「見て見て！！キョウ君！！私こんなに背が伸びたよ！！」

…さくらは中身は子供のままだった…  
ま、経験値を積めば中身もそれなりに成長するだろう…

とりあえず、リインフォースの悩み？は解消され、僕はまた子供  
verに戻っている

それに合わせて、さくらとリインフォースも子供verになった

「これで大丈夫ってわかったよね？リインフォース」

「はい、色々ありがとうございます…キョウスケ」

・ギュー！（ムニユ）

嬉しさのあまり、リインフォースは僕に抱き着いてきた

…リインフォースは確かに身体的には小学生まで縮んでいる…【一  
部】を除いては、だけど…

「ちょ！？り、リンフォース！！む、胸が当たってるって！！」  
そうなのです…リンフォースの【胸】だけは…かなりの大きさな  
のです！！」

…小学生の身体には不釣り合いなくらいの大きさですよ  
…まったく、第一次成長期を無視した法則です

「あつ／＼し、失礼しました！」

リンフォースも慌てて離してくれた

「……………むう」

さくらが自分の胸を触りながら難しい顔をしています…

「どうした？さくら」

「…成長した私って、胸があんまりなかったんだもん…」

成長したサクラは、確かに容姿は美人で体型は…まあスレンダーで  
したね

「ほ、ほらさくら…女性は胸が全てじゃないし」

これってデバイスに言う台詞ではないよな

「…でもキョウ君、大きい胸が好きみたいだし…」

…なんでさ？

「だって、なのはちゃんとフェイトちゃん、はやてお姉ちゃんも将来胸大きくなるのは解ってるし…」

何で確定事項に…あ、そつか 僕の原作知識を見てStrikerのなのは達の事知ってるんだっけ

「なのは達はなのは達、さくらはさくらだろ？ さくらだって魅力的で可愛いんだしさ」

…なんだろう、デバイスを口説いているような気がするのはいのせ  
い？

「ほ、ほえ！？そ、そうかな／＼」

おっ、ともかく機嫌が治ってきた？…後一押しかな

「そうだって！だから自分に自信を持たないと！」

「そつかあ…私…可愛いんだ…／＼」

さくらは指をモジモジさせながら内面世界に旅立ち、何か呟いていた…

「…ゴホン！…それでリインフォース、君は天空の魔導書の管理人格になった訳だが…まだ魔導書とリインフォースの適合率が完全じゃないんだ」

「そ、そうなのですか？」

例えるなら高性能なソフト入れたが、容量が重くなって処理速度が重くなってしまったコンピュータ位に？

「それでまだ調整が必要なんだけど…少し時間が掛かるんだ…いいかな？」

「そうですね…わかりました。本来なら私は消え去る筈だった所をキョウスケに救われました…感謝しています」

「リインフォース…」

感謝なんて…僕が勝手にした事だから気にしなくていいのに…

「…なら私の全てはキョウスケの物ですね／＼あ、貴方の望むようにしてください／＼」

ってライ…

何故顔を赤らめながら、あからさまに妙な方向に持って行くことする発言を！？

「新たなマスターである貴方になら…私は全てマスターに捧げます／＼」

うゝ おおおい！？

さっきまで（ほんの少しだが）あったシリアシな空気は何処に！？

…ゾクッ

な、なんだか寒気が…恐る恐る振り向くと…

「キヨ〜おく〜ん…」

後ろにはジト目でこちらを見つめる人物…内面世界から帰還したさくらが居た

「…や、やあさくら…おかえり。どうした？」

「リインフォースちゃんに全て捧げてもらって…どうする気かな？」

「い、いや…どうするも調整を…」

「わ、私…て…」

はい？

「私だつて…／＼」

キヨウ君に全て捧げてるんだからー！！」

な、何口走りまくってるんや!？」

『ククツ、デバイスまで落とすとは…流石マスター!! 将来が楽しみです』

別に誰も落とすとらん!!」

「キヨウスケ、私は別に2号でも…／＼」

てかりインフォースも何を言っ…ってリインフォースの性格ってこんななの!？」

『…マスター、私やさくらを創ったのは誰ですか？』

誰って……あ　っ

「…あのアニオタ神か…」

『そのアニオタ神…もとい、神様がお造りになられたデバイスデー  
タをリインフォースに入れたんですから…性格がこうなるのは当然  
の結果ですね』

くっ…！！迂闊だった…

その後二人を落ち着かせるのに半日かかったそうな…

「ふ、不幸だぁー！！」

S i d e O u t



「はーつくしよん!!ちきしよー!!」

「か、神様…風邪ですか?」

「いや、誰かがワシの噂をしとるような…」

「そうですね?…それでは神様、例の件はキョウスケ君に一任という事でよろしいので?」

「…うむ、彼には申し訳ないがの…」

「…誰のせいでこうなったと思っていらっしやるんですか?」

「う…っ…ま、まあ今回の件はワシも間接的にはいえ支援せねばならぬな」

「では…」

「諸々の調整を頼むぞ スクルド君」

「我々はあくまでも支援だけですな」

「うむ、我々神は物語に直接介入はできん掟だしの」

「今回の支援も掟ギリギリですからね」

「そうじゃな…まあとりあえずは、この書類を【向こう側】のワシ経由でアースラに送らねばな」

「…しかし、また無茶しますね」

「…アレをほつといておいたら、他の神々の管轄区域まで影響がでるしのお…」

「わかりました、では早急に…」

「頼んだぞ…さて、これから忙しくなるのお…」

## 少女の想い

キヨウスケ達が別荘で漫才をしていた時間より…外の時間で数時間前…

「誰が漫才だっ！！」

…ゴホン…作者にツッコミは入れないで下さい

・ザッザッザッ…

妄想の中から復活し、雪の降る中なのはとフェイトは二人ならんで歩いてた

なのは・フェイトSide

「…事件、終了かな？」

「うん…」

「でも、ちょっと寂しいかな」

俯くなのを見て、フェイトはそつとなのはの手を握る

「クロノが言ってた…ロストログア関連の事件はいつもこんな感じだつて。大きな力に引かれて、悲しい事が連鎖していく」

「…うん」

「私、局の仕事続けようと思うんだ 執務官になりたいから…母さんみたいな人とか、今回みたいな事を少しでも早く止められるように…なのは？」

「ん…？」

「なのは何か考えてる？これからの事…」

「私は…執務官は無理だと思うけど、方向はたぶんフェイトちゃんと一緒に。ちゃんと使いたいんだ…自分の魔法」

「そっか…」

お互い見つめ合い、フェイトとなのはは笑い合った

ザッザッザッ…

「あっ…」

なのは達の前から街中をアルフ（仔犬モード）を散歩に連れていた  
ユーノが居た

「あ、なのは！」

S i d e O u t

なのは・ユーノ S i d e

合流したユーノは、なのはと共にフェイトをマンションに送った後、  
なのはを家まで送っている

「ユーノ君、せっかく戻って来てくれたのに殆ど一緒に居られな  
ったね」

「はは、ずっと調べ物だったからね」

「ユーノ君、これからどうするの？」

「うん、局の人から無限書庫の司書をしないかって誘われてるんだ。  
本局に寮も貰えるみたいだし、発掘も続けていって話したから決  
めちゃおうかな…って」

「本局だとミッドチルダよりは近いから私は嬉しいかな」

「本当!？」

『嬉しい』と言っなのはの発言で一瞬喜ぶユーノだったが…

「うん!だってお友達が近くに居ると嬉しいよ!..!」

「はは……」

…微妙な『お友達』発言をしたなのはを、ユーノも微妙な顔で苦笑していた

#### 高町家前

「…じゃあ僕はこれで」

「えっ?」

「仕事が決まるまでアースラに居ていって話したから」

「そうなんだ…」

「うん」

「ユーノ君、年末とかお正月とか時間あるようなら一緒に居ようね話したい事たくさんあるから」

「えっ…？は、話したい事？」

「うん！ユーノ君には色々相談に乗ってほしいし…」

「…相談？」

「ユーノ君は数少ない男の子のお友達だから、色々聞きたいんだ。ユーノ君くらいの男の子ってどんなのが好きか？とか」

勘がいいユーノはそこで気付いてしまった…

「なのは…それって、もしかして…キョウスケの事？」

「ふえ！？…う、うん…そうかな／＼

キョウスケ君ってどんなのが好きなのかってあまり話してくれないから…同年代の男の子に聞いたら解るかな？って」

「そっか…うん、僕に出来る事なら協力するよ」

「うわぁ！ありがとうユーノ君！」

なのはは嬉しそうにユーノにお礼を言うが…

「（…僕の入り込む余地は…もうないみたいだな…）」

ユーノは心の中でそんな事を思いながらなのはに笑いかけていた…

「（…うん、なのはが幸せなら…僕はそれで…）じゃあなのは…僕はこれで」

「うん！本当にありがとうなの！！ユーノ君！じゃあまたね〜」

なのはお礼を言いながら手を振り、ユーノはそんななのはを見ながら雪の降る中、帰路についた

Side Out

なのは部屋

なのはSide

部屋に戻り、なのはが携帯を見ると

「ん？」

メールが来ている事に気付いた  
内容を見てみると…

「明日ちょっと時間あるかな？午前中アリサちゃんと一緒に、はやてちゃんのお見舞いに行つてそれから家でクリスマス会をしようかなって思っています

フェイトちゃんも誘ってます 来てくれると嬉しいな」

すすかからのメールを見つめ…



「ちゃんと話さないかね…今までの事」

なのはは友達に魔法の事を話す決心を改めてした

「あ、フェイトちゃんは勿論キヨウスケ君やはやてちゃんも一緒にアリサちゃん達に魔法の事話さないと…」

知らぬ所で、キヨウスケ&はやても魔法関係者だと言つ事を話さなければならぬことが改めて決定した瞬間でもあった…

Side Out

翌日

ブオオオン！

なのはとフェイトは、はやてを迎えに行く為バスで向かっている最中です

「はやて、病院に戻ったんだ？」

「そういえば、入院中に抜け出しちゃったんだもんね」

「確かキヨウスケ君もそう言ってたよね。先生に怒られるとか…」

「うん、キヨウスケはそれを察して別荘に行ったんだよね」

「にはは…キヨウスケ君らしいよね。でも、キヨウスケ君の別荘か。どんな所か楽しみだねフェイトちゃん」

「ふふっ、そうだね…なのは、抜け駆けはなしだよ？」

「フェイトちゃんもね…水着後で一緒に買いに行こうね！」

「うん」

何やら以前話した計画を進行中の二人だった

病院・はやて病室前

ガラッ

なのはとフェイトはドアを開け、

「おはようございます」

「あ、おはよう！なのはちゃんフェイトちゃん」

はやてはシグナムに抱えられながら車椅子に乗る所だった

「あれ？もう退院？」

「残念、もうしばらくは入院患者さんなんよ」

「そうなんだ」

「まあもうすっかり元気やし、すずかちゃん達のお見舞いはお断りしたよ このままクリスマス会に直行や！」

「うん！」

「…昨日は色々あったけど、最初から最後までほんまありがとう」

はやてはなのはとフェイトにお礼を言うと

「ううん」

「気にしないで」

二人はそう返事をした。

ふと、はやての首にかかっているペンダントに目を向けるなのは

「あつ！それリインフォース？」

はやてになのはは尋ねると、

「うん、あの子は眠ってもうたけど…これからはずっと一緒やから新しいデバイスも、このコの中に入れるようにしようと思って」

はやてはペンダントを大事そうに触れながら答えた

「はやて、魔導師続けるの？」

「…あのコがくれた力やから、それに今回の件で私とシグナム達は管理局から保護観察を受ける事になったし」

「そうなの？」

なのははヴィータに尋ねた

「まーな」

「管理局任務の従事という形での罪の償いも含んでいます」

シャマルがなのは達に説明していると…

シユン！

「…実際は別に罪なんてないんだがな」

「……………キヨウスケ（神代）（恭介）（君）！？」「……………」

皆の音がステレオ効果で同時に色々ハモった

…って耳があゝ!!

S i d e O u t

アイスラでの邂逅…か？（前書き）

気がつけばお気に入り登録が1000件越えてました  
ありがとうございます！！

アースラでの邂逅…か？

病院・はやて病室内

キヨウスケSide

「キヨウスケ…いつの間に？」

「ああ、ついさっき転移してきたんだよ。それにしても…みんな久しぶり！」

「久しぶりって…キヨウスケ君、昨日会ったばかりじゃ…」

なのはは僕の変な発言に困惑している

「あ、もしかしてキヨウスケ君…今までずっと別荘におったんか？」

はやては気付いたみたいだな

「ずっとって訳でもないけど…別荘から出た後、クロノから連絡があったからアースラに行っていたんだ

ちなみに、別荘内で過ごした時間は…大体一週間とちょっとかな？」

「え？キヨウスケ、アースラに行ったの？」

「ああ…それではやて、クロノに聞いたんだが…せつかく無罪になるってのに自ら志願して罪を償うって言ったそうだな？」

「「ええ!？」」

なのはとフェイトが驚いた顔ではやてを見ていた

「うん…無罪って言うても、このコらが私の為に皆さんにご迷惑かけたんは事実やし…」

「主…」

「はやて…」

「はやてちゃん…」

「……………」

ヴォルケンリッター達がはやてを見つめている

「そやから…その罪を皆で背負って、時間をかけて償ってかなあんななって」

「そっか…はやてがそう決めたなら…」

結局原作どおり罪の償いを選択したか…まあ多少はその罪も軽減されたからいいんだけど…僕の苦勞がああ！



「保護観察もクロノ執務官の取り計らいで形だけという事にしてくれたようだ」

…まあその事で若干クロノとモメたがね」

「それに任期もそんなになくて、私達もはやてちゃんと一緒にいられるんですって」

まあ…任期に関しては実際少し違うんだけど

「そうですね」

「私は囑託扱いやかなのはちゃん達の後輩やね」

「ええ！？別にそーゆーのは気にしないよ」

「フフツ、そうだね」

「そういえば…キヨウスケ君も囑託魔導師になるの？」

「ん？ああ、実はその事でクロノに呼ばれたんだが…」

僕が少し言い淀むと…

「どないしたん？何かあったん？」

「あ、いや…大した事じゃ…」

ないんだけど…と言いつつ終わる前に

「…ハツ！まさかキヨウスケ！！クロノが何かされたの！？」

フェイトが妙な勘違いをした！

「えっ！？そうなのキヨウスケ君？…まったくクロノ君はあれほど言ったのに…O H A N A S H Iが必要だね…」

それを発端になのはから黒いオーラが…

「手伝うよなのは…私のキヨウスケに手を出したらどうなるか教えてあげないと…」

あゝ…クロノ、骨は拾ってやるから迷わず成仏してくれ…

「フェイトちゃん？キヨウスケ君はフェイトちゃんのものじゃないよ…間違えないでくれるかなあ…」

…何このカオス時空は！？

妙な殺気に当てられたのか、珍しくシグナムがたじろいでいた

「（か、神代！！早くテストアロツサ達を止めてくれ！！）」

ごめんシグナム…多分無理っす…

「…なのはちゃん？フェイトちゃん？キヨウスケ君は私たちの家族やで？」

なら私らの物に決まっとするやんか？おかしな事言っな〜  
そう思わへん？ヴィータ？」

「…ああ、恭介は私とはやてのモンだ！！誰にも渡さねー！！」  
はやてさん、ヴィータさん…貴女達も参戦ですか！？  
しかもいつの間にか僕は物扱いに！？

「…神代、それで実際クロノ執務官に何を言われたのだ？」  
シグナムも諦めてスルーすると決めたようだ…

「ああ、実は……」

## 回想

アースラ

「なんだって！！それは本当なのかクロノ！？」

「ああ、八神はやては自らの意志で罪を償いたいと申し出た。」

可能性はあったが…ハア…はやては人一倍責任感あるからな。精神が老成しているというか何というか…

「こちらとしても無罪になるよう手回ししたが、それでも納得しな

い同員や他の部署との摩擦がかなりあったので…一応これで示しはつくのでこちらとしては有り難いのだが…」

…ブチッ

「よしクロノ、文句言ってきた奴らのリストよこせ！今から生まれしてきた事を後悔させてくる！！あとお前も潰す！！」

何が有り難いだ！どうせそんな事言う奴らはロクなやつらじゃないだろうし…無能な管理局員は今後の為にも早めに抹消しなければ…

「ま、まで！！落ち着けキョウスケ！！僕も君の要望を忘れた訳ではない！これは形だけの措置だと思ってくれ！！てか頼むからデバイスをこちらに向けなくてくれ！！」

「…形だけ？納得のいくよう説明してくれるよな？クロノ執務官様？」

「あ、ああ…」

クロノ真っ青になりながら説明中

「…なるほど、では保護観察も名目だけで任期もあってないような物だと…」

「ああ、だが彼女が自分から罪を償いたいと言ってきたのは正直驚いたが」

はやては人一倍迷惑かける事を嫌うからな

「…まあ、はやて自身がそう望んだのなら僕はそれを尊重しよう」

これではやて達も管理局入りか：今後あの脳みそ達をどうにかしたいと…

「それでキヨウスケ、君の処遇なんだが…」

処遇？

「はて、管理局には大きな貸しが多々あるはずだか？」

闇の書の暴走したプログラム破壊・アンノウン（アインスト）の迎撃（逃げられたが）・さらにグラム&猫姉妹のはやて殺害未遂・その公表を公にしないなど…細かく上げればキリないけどな

「うっ…ま、まあ確かにそうなのだが…実は当初上層部は君の力に着目し、君や八神はやてを無罪にする代わりに君達を管理局に入局するよう司法取引を…」

カチャ

「ま、まて！それはあくまで当初の話しだ！！落ち着いてくれ！！剣を喉元に当てないでくれ！てか少し切れてる！？」

管理局つてのは…自分達の闇は棚上げで、舐めた真似しやがって…  
…ま、僕も人の事は言えないが

「で、当初と言うと今は違うのか？」

僕はクロノの喉元に剣を当てたまま問い質した

「ああ、僕としても八神はやてを盾に君を脅す勇氣…ゲフン！…そんな卑怯な真似はしたくないし、どうするか悩んでいたら…」

「…いたら？」

「…アースラに命令書が届いたんだ。「今回の件は当事者である八神はやてと神代恭介の意見を尊重するよう」と…」

…は？なにそれ？確かにこちらとしては都合がいいが…

「君が不信に思うのは解る。だが、この書類を出した人物は信用に足る人物なんだ…」

…誰だっていうんだ？

「…かの伝説の四提督の一人、【ダイテツ・ミナセ】特別名誉副元帥からだったんだ…」

へ…ん？どつかで聞いたような名前…って、その名前って！？しかも…

「クロノ、今【四提督】って言ったのか？」

「？ああ、言ったが…あ、君は平行世界から来たのだから知らないのも無理はないか…四提督と言うのはだな…」

クロノは四提督について話してくれたが…原作では三提督だったの

に…？しかもダイテツ・ミナセつてスーパーロボット大戦の八ガネの艦長の名前だよな？これは一体…？

「それで君には一度本局へ出頭して会ってほしいと…ダイテツ名誉副元帥直々のご指示なのだが…聞いているのか？」

「あ、ああ悪い…分かった」

…一体誰だ？

まあ直々の呼び出しだ…何者が正体暴いてやる！

「…キョウスケ、頼むから副元帥にケンカは売らないでくれ…」

それは相手次第だ…フッフッフ…

回想終了

Side Out

じゅく…

## 病院での1コマ？

### 病室

キョウスケSide

「…と言う訳でなんだ…」

僕はシグナムにアースラであつた出来事を話した

「そんな事があつたのか…しかし大物からの呼び出しだな」

シグナムもさすがに驚いているな

「…もしか我々に手を貸した為にそのような事に!？」

…いや、多分違うな。

それなら、わざわざ呼び出して会おうとする意味がない。それこそリンディさん達に命令すれば済む事だし…

「大丈夫、シグナム達のせいじゃないよ。恐らく相手は僕個人に用があるようだ」



「じゃなきゃ、あんな書類まで寄越してこちらの要望に沿うようになんて指示ださないだろう…」

「しかし神代…」

それでもシグナムは申し訳ないような顔をしていた

「僕の事は大丈夫だよ。それよりはやての事を…」

「…解った。だが何かあったらいつでも力になるぞ！」

何とか納得したシグナムは僕の手を両手で握り…って、シグナム顔近づいた！

「む…ゴホンノノす、すまん神代…それでいつ管理局へ行くのだ？」

「クロノが年末年始は忙しいだろうからって…三が日過ぎてからでいいってさ」

「そーいや、ミッドチルダにも正月ってあったかな？」

「そうか…たしか主はやても、そのように言われた筈だったな」

「じゃあみんなと一緒に本局に行く事になりそうだな」

「そうだな。主もお喜びになるだろう。」

「…行く先が管理局本局ってのがどうかと思うがな…」

「キョウスケ君、シグナム…そろそろすずかちゃんのお家に行く時間なんだけど…」

「あ、そうだな…ん？どうしたんだシヤマル？」

何故かシヤマルは怯えたような雰囲気がある？

「…キョウスケ君、はやてちゃん達の事…忘れてない？」

「…あ！」

すまんシヤマル…すっかり放置してたわ

しかも、はやて達は睨み合いで互いに牽制してらっしゃるし！？

…女の子の友情なんてはかないな…

『…マスターが主な原因ですよ？』

そうかあ？主にクロノが普段から人徳ないからすぐ疑われるってのが原因じゃ？

『…』（本人に自覚なし！？）『…』

シグナム・シヤマル・インフィニティが心の中で突っ込んだ瞬間だった…

「仕方ない、みんな！そろそろ出かけないと…」

と、その時！

コンコン！ガラッ

「はやてちゃんいる？って、あなた達！何しているの！？」

石田先生がご降臨されました

「まったく…ここは病院なんですから、ケンカはダメですよ！」

「……は……い」「」「」

石田先生が仲裁に入ったお陰で、とりあえず4人は鎮圧された…あれ？何か忘れていているような…

「それとキヨウスケ君！シグナムさん達にも注意したけど、はやてちゃんは病人なんですから許可なく外出させないように！！！」

…ああ、忘れてた。石田先生のお説教タイム…

「大体許可なく外泊までさせるなんて！！はやてちゃんの容態が急変したらどうする気！？まったく…！」

うっ、説教から逃げるタイミングを逃したああ！！

「（だ、誰か助けてくれ！！）」

念話で助けを求めたが…

「（我々も石田先生には散々言われたのだ…神代も諦める）」

シグナムからの念話で希望は断たれた…こうなるのがわかっていたから避けていたんだが…てかシグナム微妙に笑ってないか!?

「聞いているの!? キョウスケ君!？」

「ハ、ハイッ!」

はあ…長い説教になりそうだ…

病院、ロビー

何とか石田先生からの有り難いお説教が終わり、僕たちは外出する為ロビーにいます…精神的ライフが0っすよ

「はやてちゃん、今日はちゃんと帰ってきてね!約束よ?」

「はい、約束です!」

石田先生に念押しされているはやて…

「いつもお返事はいいのにね〜ではくれぐれも無理はしないように」

「はい、分かってます」

「じゃあ約束の指切りげんまん！」

「はい！フッフッ」

「ありがとうございました」

はやての指切りの後、シグナムは石田先生に御礼を言いこちらに来た

「気をつけてね」

「はい！」

はやては石田先生に返事をし手を振っていた

「…ヴィータちゃん、タベとか今朝やっぱり大変だった？」

なのははヴィータに昨日の事を尋ねると

「ああ、無断外泊だったからシグナムとシャマルがめちゃくちゃ怒られてた」

「…怖い先生なんだ」

それを聞いたフェイトは若干引いていた…僕も説教喰らうのが解っていたから別荘に非難したんだが…リインフォースの件があったからすっかり忘れてたよ…

「でも…いい先生だ」

「そうみたいだね」

ヴィータは勿論シグナムやシャルマルも石田先生を信頼しているしね  
…確かに美人だし、芯がしっかりしている女性だからな  
僕も何だかんだ言っても信頼してるし…あの説教がなければもっと  
いいんだがな…

「…ッ」

ん？ああ、こちらに目を向けたシグナムと目が合ってフェイトが表情を強張らせてるのか…

「お待たせ」

「うっん」

「じゃあすずかの家に行こうか。アリサを待たせると「何してんのよ！遅いじゃない！！」ってキレまくりそうだしね」

「にやはは、そうだね」

「じゃあ早よいかんとな」

なのはとはやて達は出口に向かっていくが、シグナムはフェイトの前で立ち止まったままだった…

まあ…大丈夫だよな？

「…テストロッサ」

「はい、シグナム」

「預けた勝負、いづれ決着をつけるとしよつ」

「はい、正々堂々これから何度でも」

「フツ…」

「瞬驚いたシグナムだが」

ナデナデ

シグナムはフェイトの頭を撫で

「…んっ」

フェイトもうれしそうな表情をしてシグナムに撫でられていた

…もしかしてこれがフェイトのバトルマニアフラグだったか？

「キョウスケくん！！早く行こうよ」

「早くせんとアリサちゃんに怒られるで〜！！」

ヴツ…それは遠慮したいな…

「フェイト、シグナム、早くはやて達の所へ行こう」

「うん！」

「ああ」

こうして僕たちは病院を後にした…

「そういえばキョウスケ、さくらは？」

「ん？ああ、さくらは初起動でいきなりフル稼働させたから、やっぱり少しメンテナンスが必要みたいなんだ…」

なのは達にリインフォースの調整の為に別荘に行く口実でついた嘘だったんだが…ホントにメンテナンスが必要なくらいムチャしたみたいだからな…

「そうなんだ…さくら大丈夫かな？」

「今は冬眠モードに切り替えて眠ってるよ。」

リインフォースの調整もあるし、さくらのメンテナンス…まあ別荘中なら時間は大丈夫だけど…

「ねえキョウスケ…今度さくらのお見舞いに行ってもいいかな？」



へっ!？」

「そうだな…さくらは我々にとってももう家族みたいな物だ…神代、私もさくらのお見舞いに行きたいのだが…」

…あれ?何気にピンチ?

このままじゃリインフォースの事もバレル?

「あゝ…そ、そうだね。機会があったら…」

…さくらとリインフォースって同じ場所にいるから…急いでさくらの治療場所を変えないと…

「どうしたのキョウスケ?何か考え込んでるけど?」

「我々が行ったら問題でもあるのか?」

「あ、いや…何でもないよ さ、急がないとはやて達に置いていかれる…早く行かないと!」

「?う、うん」

「?あ、ああ…」

ヤバイ、顔に出てたのかな?

フェイトとシグナムが?顔でこっちを見てる…

「キョウスケ君!!何しとるん?はよ行こー!」

∴ 先ずはアリサ&すずかの所に行かないとな∴

S i d e  
O u t

月村家へ行こう！！

キョウスケSide

さて、僕となのは・フェイト・はやてはずかの家少し遅れたクリスマスパーティーにお呼ばれした為、向かっている…というのが表向きの理由…

実際は、アリサとすずかに魔法の事を打ち明ける為に僕がなのは達に付き合っているというカンジかな？

え？シグナム達は一緒じゃないのか？

まあ一応、子供同士のクリスマスパーティーって事だからね。シグナムやシャマルが一緒だとすずか達の家族にどう思われるか…  
ヴィータは見た目的には大丈夫だったが、アリサと会わしたら…嫌な予感しかしないんだよね。

例えるなら…核弾頭に核弾頭をぶつけるようなカンジ？

ヴィータは一緒に行きたがっていたが、僕がある条件を出したら…

「ッ！ホントか！？分かった！じゃあ今回はいいや！！」

と、喜んで辞退してくれた…

しかし、ただ単に「埋め合わせに今度遊園地に連れていくから……」  
ってこつそり言っただけで簡単に了承してくれるとは……  
グイータって遊園地好きだったっけ？

『（マスター……世間一般ではそれをデートというんですが……）』  
……なんな変な電波が？

## 月村家

今僕たちは、すずかの家の前にいます……すずかの家がかなりのお金  
持ちつてのは原作で知っていたが……実際に見ると……

「……さすがお嬢様、広い屋敷だな」

何ていうか……お金って、ある所にはあるんだな

「あ、キヨウスケ君はすずかちゃんの家見るの初めてだっけ？」

「ああ、しかしデカイ家だな」

「何言つとるんや？キヨウスケ君の別荘の方が大きいやん！ てか  
別荘がお城って……」

僕の別荘ってある意味非常識だからな

「そうなの？はやて？」

「そうやでフェイトちゃん。ここの数百倍は大きいで〜」

「…はやて、さすがにそこまでは広くないぞ？」

何を過大評価してるんだ？この狸は…まあ拡張すれば可能だけどさ…

「ホラ、キヨウスケ君 はやくしないとアリサちゃんとすずかちゃん  
んが待つてるよ？」

そうだな…すずかはともかくアリサは確実に仁王立ちして…

パンツ！ドカツ！！

「遅かったじゃない！！…ってアンタ誰？」

イテテ…アリサの奴、いきなり扉勢いよく開けるから扉に激突した  
じゃんか！！

「てか扉開けて第一声がそれかい！？」

「アーーー！！アンタ確か、なのは達と一緒にいた男の子じゃない  
！？」

てか僕だと気付いてない？

あ、そっか 今認識障害メガネかけてないからか

「ア、アリサちゃん、彼は…」

なのはが僕の事を説明しようとするど…

「あ、いらっしやい、なのはちゃん・フェイトちゃん・はやてちゃんに…キョウスケ君」

アリサの後から出て来たすずかに…って

「えっ！？すずか、今何て言ったの！？何処にキョウスケが居るのよ！？？」

アリサがすずかの発言に戸惑っていた

月村家、テラス

あの後僕の事を説明し、納得してくれたアリサ…だが、

「へ、へ…これがアンタの素顔って訳なのね…こ、これもアリかも…（ボソツ）」

等と言っていた。

後半何か言っていたようだが、聞き取れなかった…

ちなみに、すずかに何で僕だと解ったかとなのはが尋ねたら…

「えっと…女の勘かな？」

と言っていたが、すずかは僕の耳元で

「…ホントは（血の）匂いでわかつちゃった（ニコッ）」

…さすが吸血鬼の血筋というか…一歩間違えたら怖いぞ？すずか…

で、今僕たちはテーブルを囲い、ティータイムを楽しんでいる…の  
だが、

「さあなのは！！フェイトもはやても、どーゆー事が説明してくれ  
るんでしょうね？」

現在アリサが尋問中です。

「落ち着けアリサ、なのは達はその事を含めてちゃんと説明するか  
ら」

「キョウスケ！！アンタもよ！！特にアンタは変装紛いなマネして  
たんだからソコもキツチリ説明してもらわよ！？」

…うわっ、火に油そそいだか…

「ま、それは置いといて…僕の事を話す前に、まずはなのはとフェ  
イトの事から話したほうがいいかな？」

二人ともいいかな？」

順番的には無印からの出来事から説明した方が分かりやすいだろうし

「えっ!?!…う、うん。それはいいけど…フェイトちゃん、いいかな?」

なのははフェイトに確認した

…なのははともかくフェイトにとっては辛い思い出だからな…

「…うん、大丈夫だよなのは。それにいい機会だからキョウスケにも聞いてほしいし…私の事」

あ…一応原作で何となく知っているんだけど…

「もしかしてなのはちゃんとフェイトちゃんの出会いから?」

まあそうなんだが…すずかの想像しているような出会い方じゃないけどな

「うん…なのはと出会った時は、私達…敵同士だったんだ」

こうしてまず、フェイトの口からなのはとの出会いが語られた…

Side Out



## 魔法の世界

前回までのあらすじ…

フェイトがジュエルシード事件の事を話し出した

キョウスケSide

魔法の存在

願いを叶えるジュエルシード

それを集めていたフェイトとアルフ

その時に出会った白い悪魔…魔導師なのはとの戦い

母親であるプレシアテストアロッサから語られた自身の秘密…

最終決戦で虚数空間に落ちていくプレシアとアリシア…

その話しを黙って聞いていたはやて・アリサ・すずかは驚きを隠せないでいた…

「…その後、私は裁判の為…なのはと別れてリンディさん達と一緒にいたんだ」

「「「……………」」」

フェイトの話しを聞いていた三人は言葉を失っていた  
あまりにも衝撃的だったのだろう  
そして…

「…私が魔法と出会ったのはユーノ君との出会いが始まりなの…」  
今度はなのはが語り出した

ユーノとの出会い

託された魔法の力

ユーノの手伝いでジュエルシードを回収していた事

その中で出会ったフェイト…

自分の思いをフェイトに何度もぶつけた事

…その中でアリサとケンカしてギクシャクした事

それを聞いたアリサは

「…あの時そんな事があったワケね…」

と呟いていた

そして最終決戦後…フェイトに

「友達になりたいんだ…」

とフェイトとリボンを交換して一時別れた事を話した

「…なのはちゃんとフェイトちゃんにそんな事があつたんだ…」

すずかは呟くように言葉をもらした

「次は私やな…」

はやてもなのは達の話しに驚いていたが、自分の事を語り出した

自分の足の事

僕との出会いの事

魔法の本 闇の書の事

ヴォルケンリッター達の事

自分の家族が自分の為にした過ちの事…

闇の書の暴走…

そして…リインフォースとの別れの事

「…ってなカンジや。」

「じゃあはやてちゃん…足の方は？」

「うん、時間がちよかかるケド、ちゃんと歩けるようになるんよ」

長い間使ってない足の筋力を取り戻す為のリハビリ…別荘使えば時間は何とかなるな

僕がそんな事を考えていると…

「さあ！！後はアンタの番よ！ちゃーんと説明してもらおうかしら？」

アリサの顔が目の前に…って！？

「アリサちゃん！！キョウスケ君に顔近づけすぎなの！！」

「そや！！離れや！！」

「アリサ…キョウスケに何する気？」

なのは・はやて・フェイトが間に割って入ってきた  
…てか最後の人、特に目が恐いんですが…

「うっ…わ、わかったわよ!！」

さすがにアリサもなのは達の覇気（殺意）にたじろいて一歩引いた  
「落ち着け三人とも…アリサ・すずか、僕は…この世界の人間じゃないんだ」

「「えっ!?!?」」

僕は二人に語りだした  
と言ってもクロノ達に話したのと同じ事だけどね  
…さすがに転生者とは言えないよね

僕の事を聞いた二人の反応は

「……………」

「……………」

無言…というか

「二人とも、何故にあきれ顔なんだ!？」

二人とも口を開けてポカーンとしていた

「…なのは達から魔法の事を聞いた時も驚いたけど…」

「さ、さすがに平行世界つてのにも予想外で驚いちゃって…」

「じゃはは…やっぱりそうだよな〜」

「うん、私達もキヨウスケから聞いた時は…」

「ほんま、今の二人みたいな顔で驚いたもんや〜」

…まあそうだろうけどな

「で、何でアンタは変装していたのよ？」

「正確には認識障害だよアリサ

ま、その時期はシグナム達がなのはとフェイトと一戦した後だったから…僕もその場にいたから正体バレるのを防ぐ為だよ」

「…キヨウスケ君、言ってくれば…」

となのはは言いかけたが、

「私は教えてもらったよ」

……………  
ヲイ

「えっ！？ど、どつゆう事！？フェイトちゃん！…」

フェイトよ…サラッと何爆弾落としてんだよー！？

「私はキョウスケとパートナーになった後に告白されたんだノ」

「「「「こ、告白ーう！！？」」「」」」

テラスになのは達の絶叫が響いた…って

「おい、フェイト…そーゆー誤解を招く言い回しはするな。」

「「「「えっ！？誤解！？」」「」」

…しかし、見事にセリフがハモるな

「フェイトとは仮契約した手前、ちゃんと説明しとかないと思ったからね」

…実際は不測の事態に備えてと、後は僕の正体はアースラ側に秘密にしてほしいと頼んだただけけど

「キョウスケ君、仮契約って何？」

「さすが首を傾け？顔で尋ねてくる

「さすが、コレだよ」

と言い、フェイトはカードをさすが達に見せる

「これって…フェイトの絵が書いてあるカード？」

「あ、私も貰ったで！」

はやても（あの時さくらがコピーした）カードを二人に見せた

「これも、はやてちゃんが描いてあるカードだね…いいな」

すずかは少し羨ましい視線を送る

「……………」

ん？

「どづした？なのは？」

「……………」

ゾクッ

な、なのはから不穏なオーラが…

「ど、どづしたのよ？なのは？」

恐る恐るアリサが近寄ると…

「私も…キョウスケ君とキスするの〜！！」

なのははトンデモナイ発言をしゃがった！？

「な、なんですって〜！！！！？」

当然の如く、アリサが般若の如く髪を逆立てて叫びまくっ…怖っ！！



「な、なのはちゃん…私もって…、まさか」

…しかもまずかは冷静に分析&ツッコミを入れるし…

『これはまた一波乱ありそうですね』

S i d e O u t

## 白い悪魔と赤い幸運

キョウスケSide

前回、なのはの欲望という名の叫びのせいで仮契約についてアリサとすずかに説明中です…

「…つまり、仮契約って…その…キ、キキスする事って訳ね…／＼キョウスケ、アンタはやたとフェイトとキスしたって事かしら？」

…現在僕はアリサ主導での取り調べを受けています…  
後ろではやたとフェイトに取り押さえられている姿が見えるなのは…まあスルーしよう…

「アンタ…！人の話し聞いているの！？」

「ア、アリサちゃん…キョウスケ君が可愛そうだよ」

ああ…すずかが女神に見える

「すずか…！アンタはいいの！？キョウスケが…その…キ、キスしたって…」

「…私だつて…でも、キヨウスケ君の事だからきつと何か訳があると思つんだ」

「……………はあ、解つたわよ 確かにすすかの言う通りよね。キヨウスケが節操なくキスする訳ないし…で、そこん所ちゃんと説明してくれるんでしょうね？キヨウスケ？」

「あ、ああ……」

何とかアリサの怒りは少しは収まった…のかな？

「んん〜!! こ、今度こそキヨウスケ君とキスするの〜!! 放してフェイトちゃん!! はやてちゃん!!」

「ちょ! な、なのは!! 落ち着いて!!」

「そうや!! ……つてなのはちゃん!? 何デバイス起動しようとするんや!!」

「えっ!?!? なのは!?!? ちょつと落ち着いて!?!?」

「レイジングハート…セーッ…」

「あかん!! フェイトちゃん!! バインドや!! ……」

「う、うん!!」

ガチィ! ガチィ!

「なっ！？バインド！？は、放してー！！今日こそキョウスケ君の唇をー！！」

「いい加減に…」

「おちつかんかーい！！」

スパーン！！x2

はやてとフェイトがどこから取り出したスリッパでなのはを鎮圧

…まあ、なのはの事は2人に任せよう…

「きゅう…」

「…なるほどね、フェイトやはやては助ける為にね…」

「ほらアリサちゃん キョウスケ君にそんな事情があったんだかし…」

アリサとすずかにフェイト達と仮契約した状況と経緯…というか人口呼吸的な措置をしたら結果的に仮契約が成立したという事を話した

…え？ヴィータの時は違うだろ？

…ま、まあアレは事故というか…

スミマセン、二人にはヴィータとも仮契約した事は秘密です

…ヴィータに関しては免罪符が見つからなくて…orz

「…まあいいわ

じ、じゃあキヨウスケノノわ、私とも仮け「アリサちゃん…」ひっ  
!？な、なのは？」

地を這うような声が聞こえ、そちらを振りむくと…

「…アリサちゃん、何を言っているのかな？」

デバイスを起動させたなのはが立っていた…ハッ!? フェイトとは  
やてがない!?!? どうした!?!?

「…ああ、フェイトちゃんとはやてちゃんはお花摘みにいったの…  
フフ」

こ、怖っ!?!?

しかもレイジングハートとなのはのバリアジャケットに、赤い何か  
が付着しているような…き、気のせいだよな?

「…アリサちゃん…ちょっと向こうでO H A N A S H I…し  
ようか?」

あ…なのはの目がハイライトと言つか…単色になってます…

「な、なのは…ちょ、ちょっと…」

さすがのアリサも今のなのはの前では無力でした…

ガシッ

「…さあ…イコウカ…」

ズルズル…

「い、いやー！ー！！た、助けてー！ー！！！」

…アリサはそのまま猫のように襟元を捕まれ…

ガチャ…ボタン！！

別室に消えていった…

「キ、キョウスケ君…アリサちゃんは…？」

「……すずか、アリサの事は…」

僕たちはただ、冥福を祈るしかできなかった…

ガチャ

「いや、危うくシミになる所やったわ」

「うん、でも中身がほとんどなくなっちゃったね…あ、キョウスケ  
！…どうしたの？」

…アレ？

「フェイト、はやて、何処に行っていたの？」

「ん？ああ、なのはちゃんが（レイジンググハートを持って）暴れた時に、そこにあったジャムが私らにかかってもってな〜」

「うん、それで服にシミが着いちゃうと大変だからはやてと洗面所に行って洗っていたんだ」

…なのはも一緒にいたと思ったんだけど、気付いたらいなくなっちゃって…」

じゃあ…さっきのなのはのバリアジャケットとかに付着していた赤いのは…ジャムだったのか〜  
おどかすなよ…

「あれ？そういえばアリサちゃんはどうしたん？」

「…魔王に拉致られた」

「あ〜…アリサちゃん、大丈夫やるか？」

多分トラウマは確実にだと思うな…

「魔王って…ああ、なのはの事か〜」

「…フェイトちゃん、それなのはちゃんの前で言わへん方がええよ」

「うん…分かってるよ はやて」

…もはやなのは代名詞だな 魔王って…

ガチャ

「あ、みんな!!」

噂の魔王様が現れた

「なのは…アリサは？」

恐る恐るなのはに尋ねると

「アリサちゃん？お話が終わったら疲れて寝ちゃったみたいなの」

…いや、それは多分…恐怖で気絶したんだろっ  
なのはよ、友達は大切にしような

その後、メイドのノエルさんとファリンさんがアリサを発見・保護  
してくれたらしい

アリサは目を覚まし戻って来て、なのはを見た瞬間…

「…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな  
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな  
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

…トラウマを持っていた…

トラウマの原因なのは、



「ん〜このケーキ美味しいね  
はい、キヨウスケ君あ〜んして 食べさせてあげるの!」

…という状況です

他の3人は…まあアリサを見て固まっていた

「む〜〜!!キヨウスケ君!!早くあ〜んしてなの!!」

ヤバイ!!なのはの目が段々単色に!?

「あ、あ〜ん…」

パクッ

「美味しい?キヨウスケ君?」

「あ、ああ」

「じ、じゃあ私ももう一口ノノ」

と言い、なのははそのまま手に持ったフォークを使いケーキに自分の口元に…

「「「ああああー!!?!?」「」」

急にフェイト達がいきなり大声をだしたが?

パクッ

「ん〜／＼美味しいの〜」

その光景を見たフェイト・はやて・すずかは崩れ落ちていた

…なんでだ？ケーキならまだあるのに??

『…………ハア、マスター…少しは気付きましょう』

その後、妙な空気と化した部屋でクリスマスパーティーを楽しんだのかなあ？

ちにみに後日、さくらの魔法『イレイズ』でアリサのトラウマの記憶を消したので何とか持ち直した…

S i d e O u t

同時刻、商店街

ヴィータSide

「なあシヤマル、買い物ってまだあんのか？」

私は今シヤマルと二人で買い物に来ている

いつもなら恭介が行ってくるんだけど、今日ははやくと出掛けちゃったから私とシヤマルできてるんだが、

「うん、後は…ここのお店で最後よ

ごめんなさいねヴィータちゃん お買い物荷物持ちお願いしちゃって…」

「しょーがねーよ

シグナムも忙しそうだったしな」

シグナムは、たまに顔を出している道場に用があって外出しちまっ  
てたしな

「あ、じゃあヴィータちゃんにコレあげるわね」

そう言うとシヤマルが数枚の紙を渡してきた

「…何だコレ？」

「さっきお買い物した時にくれたんだけど、商店街の福引券ですって  
あそこで福引やってるみたいだからヴィータちゃんやってみたら？」

福引、ねえ…

「ま、せっかくだし…いっちょやってみっか！」

「私はここで買い物しているから、行ってきていいわよ」

「ああ、じゃあ行ってくんない!」

「いらっしやうい、おっ!お嬢ちゃん福引かい?」

「ああ、これ福引券」

私は店員のおっちゃんに福引券を渡した

「…じゃあ3回分だ。このガラガラを回してくれ」

「ああ、コレか…」

ガラガラ…

「あゝ残念、ハズレだゝ これ景品のティッシュだよ」

ちっ…ハズレかよ。次こそは…

ガラガラ…

「おっ!!こいつは…大当り!!!」

3等のお菓子詰め合わせセットだ!!!」

…うっし!!!はやてと恭介と一緒に食べるか

さあ…ラスト1回!!

ガラガラ…

「…ん?こ、こいつは…大当りだ!!

特等の遊園地フリーパスのペア券だ!!」

…なっ!?!?遊園地い!?!?

S i d e O u t

遊園地に行こう〜準備編〜

県外、某所

キヨウスケSide

「へ〜 僕が居た世界と同じ名前の遊園地がホントにあるなんてな  
」

「向こうと同じだったか？恭介？」

「ああ、遠出した甲斐があったかな…懐かしいな〜向こうとあまり  
変わらないな」

「………そんな時は誰と来てたんだ？」

「…ん？何か言ったヴィータ？」

「な、何でもねー！！さ、早く行こうぜ恭介！！」

「???ああ…あ、その前にヴィータはこの年齢詐称薬・改を」

「ん？ああ、そっか…ゴクッ」

みなさんこんにちは、神代恭介です

さて、今僕はヴィータと二人で遊園地に遊びに来ました  
以前ヴィータと約束した遊園地行き…まさか次の日に速攻行く事になるとは思わなかったけど…

## 回想

昨日夕方、八神家キョウスケ部屋

「明日に？…まあ予定はないからいいけど…じゃあチケットを手配しないとな」

「あ、チケットならあんぞ！！さっき福引で当てたんだぜ！！」

あの魔境と化した（元）月村家から帰って来て部屋に戻ると、ヴィータが勢いよく部屋に入って来て「明日遊園地に行くぞ！！」的な話しをしてきた

「どれどれ…えーっと…東 動物公 一日フリーパス！？  
なんだ、こっちにも東 動物公 ってあるんだ！？」

「恭介、ココ行った事あるのか？」

「ああ、と言っても向こう（平行世界）でだけどね」

「向こうでか…向こうだとどんな所だったんだ？」

「ん？遊園地と動物園が一緒になった所だよ…ちょっとまって…」

ピッピ…ピッピ

僕は携帯でこの遊園地の事を検索してみると…

「あ、殆ど向こうと変わらない施設みたいだ  
でも久しぶりだな〜遊園地なんて何年ぶりだろ〜」

「何年振りって…そんな昔なのか？」

…まあ元々の年齢からだけどね

「じゃあ明日ココに行こうか？」

「あ、ああ／＼」

「あ、でも…子供だけで遊園地入れたっけ？」

確実に係員に止められそうな…あ、そうだ！！

「ヴィータって変身魔法使えたっけ？」



「変身魔法？あゝ…使えなくはねーけど…あんま得意じゃねーんだよな」

「そっか…たしか以前作ったアイテムの中に…」

ガサゴソ

収納空間にしまっておいたアイテムの中に確か…あ、コレか

「あつたあつた」

「何だソレ？」

「これは前に作った【年齢詐称薬・改】だよ　これを飲めば見た目の年齢が変わるんだ」

ネギまの面白アイテム…作ったのはいいが実際使うタイミングなかったからなゝ

「何か犯罪ツポイ名前だな…コレを飲むと成長できんのか？」

「実際は認識阻害の効果でそう見えるだけだけどね…試しに飲んでみる？安全性は保証するよ」

「いいのか？…じ、じゃあ…ゴクン！」

そういえばヴィータって殆ど成長しなかったんだよなゝ

ポオン！

「あ、何か視線が高い…  
き、恭介…どうだ？」

年齢詐称薬の効果は成功で、僕の目の前には成長したヴィータが居た  
年齢的には15才位だろうか？髪は縛ってなくロングで、スラツと  
伸びた手足

スレンダーかと思いきや、意外と胸は成長していた…（Cカップ位  
？）

その顔は幼さがまだ残っていたが…

「……………」

「ど、どうした？恭介？な、何か変な所あったか！？」

「えっ！？い、いや…何でもない／＼」

ヴィータに見とれてました…なんて言えないな…／＼

「へ…こ、これが私か…」

ヴィータは僕の部屋にあった鏡を見て、自身の姿を確認していた

「恭介はコレ飲んだらどうなんだ？」

「あ、僕は自分で年齢変化できるから…」と

ボンツ！

僕は前に解禁になった年齢変化で18才位になった

「ほら、これなら遊園地に堂々と入れ…どうしたヴィータ？」

「……………／／」

返事がない…？

それに顔が真っ赤だし…

「お〜い！ヴィータ〜？」

「ハッ！？キ、キ、恭介だよな／／？」

「？ああ、そうだよ…どうしたんだヴィータ？何かボーツとしてたけと…」

「なっ、何でもねーよ／／（見とれてたなんて…言える訳ねーだろ／／）」

…???

「まあいいか 元に戻る時は、こっちの方の薬を飲めばいいから」

「あ、ああ 分かった…なあ恭介、明日の遊園地の事は…」

「皆には内緒だろ？解ってるよ」

特になのはに知られた日には…ゾクッ！…昨日の悪夢が…

そ、それに…たしか明日は、シャマルが病院に行っではやての看病、シグナムはまだ道場の用事が終わっていないって言っていたから明

日も行くみたいだし…

なのはとフェイトは今頃家族会議で魔法の事を話している頃だな…  
説得には明日までかかるかな…主にシスコンのせいだ…

はやてはあのまま直で病院に送ったし、ザフィーラは…どうすんだ  
ろう？やっぱシャマルと一緒に病院に行くのかな

…よくよく考えたら、明日って皆予定あるんだな…

「じ、じゃあ明日に備えて早く寝ねーとな！…じゃあおやすみ！恭  
介！…」

バタン！

ヴィータは慌てて部屋を出ていった…

「…明日の何時に行くか決めてないんだが…」

まあ、いつもより早く起きれば大丈夫か…同じ家に住んでるんだし

…寝るか

次の日の朝

トットトット  
…トット

いつもより一時間は早く起きたな  
少し早い皆の朝食の準備でもするか

などと考えながら階段を下り、リビングに入ると…

ガチャ

「わっ！！？だ、ただだ！？」

キッチンで慌てふためくヴィータがいた

「おはようヴィータ…珍しいな 僕より早く起きてるなんて」

「おおおっ！！ま、まーな」

『おはようございますマスター』

ん？

「あれ？インフィニティ？」

ヴィータの指にはめられたインフィニティが挨拶してきた

「あ…ワリイ恭介、コイツちょっと借りてたぞ」

「いや まあ別にいいんだけど…所でヴィータ、キッチンで何してたの？」

「なっ！？いや…その…／／」

?ヴィータはしどろもどろしてるが…

『マスター、ヴィータ嬢は皆さんの朝食の支度をしていらしたんですよ。はやて嬢が居ない間、マスターが皆さんの料理を一人で作ってらっしゃるので少しでも負担を減らそうとヴィータ嬢がマスターの代わりに朝食位はと…』

「(お、おい！インフィニティ！？)」

『(任せて下さい。ヴィータ嬢は私の話しに合わせて下さい)ですが、さすがに経験がないので私がサポートしているのですよ。私の中にはマスターやはやて嬢の料理のレシピも記憶してあるので』

「へへそうなんだ。ありがとうヴィータ(ニコッ)」

「!??別にどーって事ねーよ…私もコレ位はできねーと…/ /」  
慣れない事してるから照れているのか…ヴィータの顔が真っ赤だった

「き、恭介 そんな事より早く顔洗ってこいよ！こっちは私が準備しとくからさー!」

「あ、そうだね」

キッチンはヴィータに任せ僕は洗面所に向かった

Side Out

ヴィータSide

「……あ、あぶなかった〜」

危うくバレる所だった…

「……インフィニティ、とりあえずオメーには礼を言った方がいいのか？」

一応コイツの機転で恭介にバレずに済んだんだが…

『まあヴィータ嬢の作ったお弁当の残りを朝食に回した分、半分位はネタバレした感がありますが…向こうに着くまで内緒にできたので良しとしましょう…大丈夫、マスターはヴィータ嬢がお弁当作っていた何て気付きませんから！！何たってマスターなんですから』

…何気に酷いな、このデバイス

「でもよ…初めて作ったんだけどよ…美味しくできてっかな？」

私は料理なんかしたことねーからダメ元でインフィニティに聞いてみたら…

『料理のレシピ？ありますよ』

って事でコイツに頼んだんだけど…

『大丈夫、はやて嬢やマスターに比べたらまだまだですが…シヤマ  
ル女史に比べたら遥かに美味しい筈です』

…それは喜んでいいのか!?

S i d e O u t



遊園地へ行くころ〜出発編〜

前回の回想のつづきです

八神家、ダイニング

キョウスケSide

「……いただきます」「」

「モグモグ……あら、今日はキョウスケ君が作ったんじゃないの？」

「確かに……いつもの神代の味とはちがうな」

今朝の朝食を食べて、味が何時もと違う事に気付いたシャマルとシ  
グナム

「ん？ああ、今日の朝食はヴィータが作ってくれたんだよ」

「何っ！？コレをヴィータが！？」

シグナムが驚いた顔をしていた

「シグナムの口に合わなかったか？」

「いや…少し驚いてな…」

「ええ、ヴィータちゃん とっても美味しいわよ」

「そ、そうか…？／＼」

ヴィータのやつ褒められて照れているみたいだな

「ああ、シャマルのとは比べようがない程に」

「ちょっと！？シグナム…！！私だって練習して腕を上げ「上がったのか？シャマル？」うう…」

どうやらシャマルの料理の腕は相変わらずのようだ…

「今日はシグナムとシャマルは用事があるんだっけ？」

「ああ、道場の方でまだ用件が済んでいなくてな…終わり次第、主の様子を見に行く予定だ」

「私もすぐに、はやてちゃんの様子を見に行くわ

ザフィーラはお留守番してくれるみたいよ」

「神代は今日はどうするのだ？」

「僕もちよつと用事があるからな。ザフィーラが留守番してくれるのは助かるよ。」

「ヴィータちゃんは？」

「わわわ私も…あ…うん、じーちゃん達とゲートボールしようかなって。」

ヴィータさん…あからさまに動揺しすぎですよ…

キラーン！！

？何か光ったようなの…？

「じゃあ今日は皆別行動になりそうね。」

「そうだな。あ！シャマル、コレをはやてに飲ませてほしいんだけど…」

そう言うと僕はシャマルに液体が入った瓶を渡す

「これは…惚れ薬？」

「なんでやねん！！」

あ、はやての関西弁が感染したか…

「ウフフ…冗談ですよ。キョウスケ君の存在自体惚れ薬みたいな物ですからね。」

「だからなんでやねん！！……つたく、それは僕が作ったエラー、ほ、惚れ薬何か何で作ったんだ恭介！！！！？」……いや、作ってないからグイータ…」

シヤマルが変な事言うから…

「ホントに違うんだろーな？」

「違うよ…これはエリクサーって言う上位クラスの回復魔法薬だよ。飲めば魔力も体力も回復するから…」

今思ったが、エリクサー1本でもロストロギアになるんぢやね？…ま、今更か

「じゃあコレを飲めばはやてちゃんの足も…」

「確証はないけど…少なくとも、はやての足の回復も早くなると思っよ」

闇の書の呪縛がない今ならエリクサーも効くと思うからな体力回復。足の筋力回復…となればいいんだが

「解ったわキョウスケ君、後ではやてちゃんに渡しておくわね」

「ああ、お願いねシヤマル」

足の回復は原作より前倒しにしても問題ないしね

玄関

「じゃあいつてくるわね」

「ザフィーラ、留守はまかせたぞ」

「…ああ、心得た」

「いつてらっしゃい」

「はやてによろしくな!!」

僕とヴィータ・ザフィーラは、外出するシャマルとシゲナムを見送っています

「さて、僕…も出掛けてくるか」

「あ、ああ 私も出掛けるから…ザフィーラ留守番よろしくな!!」

「…うむ、二人とも楽しんでくるのだぞ」

「「なっ!?!」」

ザフィーラさん、気付いている?

「…フツ我はただ留守を守るのみだ」

そう言い残し、ザフィーラは家の中へ消えていった

「…恭介、ザフィーラって」

「…まあザフィーラなら問題ないだろう。さ、僕らも支度して行かないと」

「ああ…そうだな」

10分後

玄関でヴィータを待つこと10分…あ、来た！

「わりい恭介！少し手間取っちゃった」

慌てて来たヴィータ。何時もの服装と違い、ベージュ色のコートに身を包み、赤い髪に合うような白いマフラーに白のイヤーマフラー。その手にはバツクを持って、それに膝上までのスカート姿だった

「…この服…ど、どうかな恭介？」

「えっ！？…あ…うん、似合ってるよヴィータ」

いつもと違うヴィータの私服姿…何か新鮮だな

「そっか…／＼あ、ありがとな 恭介／／」

「うん、じゃあいごうかヴィータ」

「ああ!」

「　　」

…道中ヴィータが嬉しそうに僕の腕を組んで歩いているんですが…

「な、なあヴィータ そんなにくっついて歩きずら」歩きずらくないぞ?」「…そうですか」

まあ ヴィータが楽しんでるならいいか

…しかし

「ん?どうかしたか恭介?」

「いや、何か視線を感じるといっつか…妙な寒気が…」

「ふん、寒気が…なら私が暖つためてやるよ…おりゃ!」

ギョツ!

ヴィータが組んでいた腕にさらに力を込めて体を密着させてきた!?

「ちょ!?!?ヴィータ!?!」

「へへへッ／＼どーだ？これで暖かくなっただろ？」

「はぁ…ま、いつか…」

こうして僕とヴィータは遊園地へと向かって…

「そっぴや遊園地って、ここからどの位かかるんだ？」

「ん…電車で乗り継ぎして…2時間かな」

「なっ！？そんなにかかるのか！？…仕方ねえ…恭介！！転移魔法でいくぞ！！遊ぶ時間が減っちゃう！！」

「な！？、ちよつと待て！ヴィータ！！」

電車代わりに転移魔法使っつて…

「ホラ！急ぐぞ！！」

「…せめて人目の付かない所で魔法は使おうな…」

…ま、まあともかく遊園地に向かいました…

シュン…！！

Side Out



キヨウスケとヴィータが転移した場所近く…物影に隠れて二人の動  
向を観察していた人影があつた…

つづく…

## 遊園地へ行こう〜暗躍編〜

前回までのあらすじ…

キョウスケとヴィータが遊園地に行く為に魔法で転移した場所近く…物影に隠れて二人の動向を観察していた人影があった…

????Slide

「…やっぱり、今朝のヴィータちゃんの様子がおかしいと思っていただけ…予想道理だったみたいね」

「(はやてちゃん、聞こえる?)」

「(聞こえるでシャマル…そっちの様子はどやった?)」

「(予想道理よ…ヴィータちゃんが昨日当てた遊園地のフリーパス券(ヴィータは当たった事を秘密にしています)を持ってキョウスケ君とデートするみたい)」

シャマルは昨日の買い物の後ヴィータの様子が普段よりハイテンシ

ヨンだったのを不審に思い、福引きの店員にこっそり聞いて発覚したのだった

「ふふ、説明ありがとうございます」

作：いえいえ、どういたしまして

「（シャマル？誰と話してるんや？）」

「（何でもありませんよ？はやてちゃん それでどうしますっ？）」

まあ はやてちゃんの事だから…

「（勿論尾行や！…私も行ければよかったんやけど…）」

…あれは…タイミングが悪かったですしね…

### シャマル回想

### 病室

シユン！

「はやてちゃん！！」

「わっ！？シ、シャマル…！！！？

も〜おどかせへんといて〜…転移魔法でいきなり現れんのは〜」

「ウフフ、ちょっとキョウスケ君の真似をしてみちゃいました」

はやてちゃんの驚く顔って可愛いわね〜 キョウスケ君もコレが見たいから毎回驚かせてるのかしら？

「あ、そうだわ！はやてちゃん キョウスケ君から薬を預かってきたんですよ」

「薬？キョウスケ君の事やから…またとんでもない薬やろうな〜」

「たしか…エリクサーって言う上位クラスの魔法薬だそうですよ  
これを飲めば、はやてちゃんの足が早く治る可能性があるって聞いてました」

「ホンマか!？」

「ええ、さ どうぞ」

「…見た目はリ ビタン みたいやな。どれどれ…そういえばその  
キョウスケ君はどうしたん…ゴクゴク」

「キョウスケ君はヴィータちゃんとデートみたいですよ？  
ヴィータちゃんは私達に隠しているようですが…」

「ブーーーーッ!？な、なんやて!？ホンマかシャル!？」

「…はやてちゃん、はしたないですよ…私が家を出る時はまだお家に居ましたけど…今頃は」

「こ、こつしちゃんおられへん！！ヴィータはキョウスケ君の2号って事で容認しとるが…二人っきりのデートやて！？うっ…気になるでっ…！！」

…はやてちゃん、2号なんて言葉…何処で覚えたのかしら？

「そんなん昼ドラにきまつとるやんか？伊達に休学しとった訳やらへんよ…！ちなみに正妻は私や…！！」

…はやてちゃん…ホントに将来が不安だわ…

「…っではやてちゃん！！足の方は？」

興奮している為か、はやてちゃんが私の目の前で自分の足で立って歩いていた

「…あ！！わ、私自分の足で立つとる…」

はやてちゃん自身驚いて…さっきのキョウスケ君の薬が効いたのかしら？

「…って感激しとる場合ちゃうな、シャマル！キョウスケ君達の後を追っで…！！」

そう言っつと、はやてちゃんがドアに手を伸ばして…

ガラッ

「はやてちゃん、具合はど…」

石田先生が目の前にはやてちゃんを見て驚いている…

「は、はやてちゃん！…あ、あ、足の麻痺はどうしたの！…？」

石田先生が勢いよくはやてちゃんを揺さぶって興奮しています…あ、石田先生！…はやてちゃんが目を回しちゃいます…！

「…なるほど、朝起きたら足の調子が良かったから歩いてみたら歩けたと」

「はい、そんな感じですよ」

はやてちゃんが石田先生に説明してませんが…

「…はやてちゃん、今日は一日かけて検査しましょうか？」

「ええ！？…あの…私これから行くところが…」

「何言ってるの！…？今まで動かなかつた足が急に治るなんておかしいわ…！」

ちゃんと検査しないと何があるかわからないじゃない…！」

「うう…そやけど…」

魔法の事が話せばいいんですけど…仕方ありません

「(はやてちゃん？キヨウスケ君達の事は私に任せて下さい)」

「(！？シヤマル?)」

「(石田先生もはやてちゃんの事を思っ<sup>て</sup>ああ言<sup>っ</sup>て下さ<sup>っ</sup>てるんですから)」

「(シヤマル…わかつた！でもな…何かあ<sup>つ</sup>たらすぐ念話で私に教えてな?)」

「(ハイ！わかりました)」

回想終了

と言うイベントがあ<sup>つ</sup>た為、はやてちゃんは現在病院で検査受けながらこちらの様子を伺<sup>っ</sup>てる次第なんです

「(シヤマル？キヨウスケ君達はど<sup>う</sup>な<sup>つ</sup>たん?)」

「(はい、今…あ<sup>つ</sup>！！転移魔法で遊園地に向<sup>か</sup>つたみたいですよ！)」

「(なんやて！？シヤマル！！急いで追跡や！！見失<sup>っ</sup>たらあかんぞ…！！)」

「(はい！わかりました)クラー<sup>ル</sup>ヴィ<sup>ン</sup>ト…追跡お願いね」

《Ja》

...^UU

S.i.d.e  
O.u.t



遊園地に行くところ〜撮影編〜

これまでのあらすじ…

キヨウスケとヴィータは遊園地に来ています

…シャマルが尾行しているとは知らず…

キヨウスケ Side

「さ、早く行こうぜ恭介!!」

「ああ…あ、その前にヴィータはこの年齢詐称薬・改を」

「ん？ああ、そっか…ゴクッ」

ボンッ!

ヴィータは年齢詐称薬・改を飲み、見た目を15才位に変化させた

「じゃあ僕も…ん！」

ポオン！

僕も見た目が18才位に変化させた

…え？なんで18才かって？

ヴィータとのバランスを考えて…かな？

「さ、これで準備OKだな！！早くいこーぜ！！」

ヴィータは僕の腕を掴み入口へと急いで向かった

「わ、分かったから引張るなって…」

Side Out

シャマルSide

キョウスケ君とヴィータちゃんが変身魔法で姿を変え、遊園地に入っていくのですが…

「……………／／」

ヴィータちゃんの姿にもビックリしちゃいましたが…キョウスケ君

もなかなか…／／

「（…ル、聞こ…？…シャマル！？どないしたん！？）」

「（ひゃー！？は、はやてちゃん…も、もう…びっくりさせないで下さい！）」

「（さっきから何度も呼んどるんやけど…どうかしたん？）」

「（い、いえっ！！何もないですよ？あ、今二人とも遊園地に入っ  
ていきましたから追跡しますね！！）」

「（あ、うん お願いな シャマル）」

…ふう、まさかキョウスケ君の大人Verに見とれてました なん  
て言えないし…まだ顔が少し熱いわ…／／

Side Out

遊園地内

キョウスケSide

さて、遊園地内に入った僕とヴィータ

「…ん？なあ恭介、あつちに人だかりが出来てっけど…何だ？」

「ん？…ホントだ アトラクションの行列…って訳じゃないよな」  
パンフレットを見てもここには何もなし…

「…何か面白そうなのがあんのかも…行ってみようぜ恭介！！」  
そう言うと言動が早いヴィータは、僕の手を掴み引っ張っていく

「ち、ちよつとヴィータ！？」

ヴィータに引っ張られ、人だかりの中を掻き分けると…

「……………テレビ撮影？」

目の前ではカメラ数台と、その前でコメントしている女性（モデル風）がいた

「……………では…あ！そのカップルさんたちに聞いて見ましょう！！  
すみませーん！！ちよつといいですか？」

なんだろう、こっちにカメラクルーが向かって来ているような…

「なあ恭介…何かコッチに来んぞ？」

…あ、やっぱり…

「すみませ〜ん…わあ〜 彼氏の方…カッコイイですね〜  
彼女さんもとつても可愛いですし…もう絵に書いたような美男美女  
のカップルですね〜。」

お二人はお付き合いしてどの位なんですか？」

インタビューしてきた女性が何かとんでもない勘違いをしてきた！！

「あ、僕たちはカップル「ハイ！！私達付き合い始めたばかりなんです！！」…ってオイ！！」

ヴィータさんも何かとんでもない事を口走った！！しかも外行用の口調ですか！？

「（お、おいヴィータ！！）」

「（ま、まあ今だけだし…いいじゃねーかノノ  
…それとも、私とじゃ…イヤか？）」

うぐっ！！久々に目を潤ませて+上目使いコンボを発動させたヴィ  
ータ…

じ、これは…

「（はあ…嫌じゃないよ…少し照れるけどね）」

「（ホ、ホントか！？…よ、よかったノノ）」

「あの〜…どうかしましたか？」

インタビューしてきた女性がこちらの様子を見て何かあったのかと尋ねてきた

「あ、いえ　そうですね　彼女とは付き合い始めたばかりで照れちゃって（ニコッ）」

「!？そ、そうですか／＼（うわ／＼…このコ凄くカッコイイ…この彼女、羨ましいわね／＼）  
コホン！」

実は、遊園地に来るカップルの中からベストカップルを選ぼうって事で、今沢山のカップルの方にインタビューしているんですよ  
あ、コレ今生放送中なんですが…撮影いいですか？」

いいですかも何も…既に撮影してんぢゃん!!

「はあ…まあいいですけど」

「ありがとうございます…！まずお名前宜しいですか？」

「…キョウスケです」

「ヴィータだ…です…!!」

一瞬、地が出たな…まったくヴィータも馴れない敬語使うから

「キョウスケ君にヴィータさんですか」

ヴィータさんは外国の方なんですか？綺麗な赤毛ですね」

「あ…ありがとうございます…／＼」

インタビューしてきた女性に褒められ、顔が赤くなったヴィータ

「キョウスケ君の方もカッコイイですね。今までインタビューしたカップルの中で断トツですよ」

「あはは…そ、そうですか」

それから色々と聞かれ、インタビューは終了した

後にスタッフの方に粗品を頂いたり、インタビューしてきた女性からは…数字や英文字が書かれた紙をコツソリ渡され…

「彼女にはナイショよ…（ボソツ）」

と、耳元で囁かれた…

これを一体どうしろと!?

「どうした？恭介？」

「ふえ!?!い、いやなんでもないよ…さ、やっとインタビューから解放されたんだ!遊びにいこうかヴィータ?」

「ん…ああ!?!もちろんだ!?!」

さて、まずは何に乗ろうか…

Side Out

少し時間を遡り…

フェイトのマンション

フェイトSide

昨日なのはの家族の人達に、私達の魔法の事…そしてこれからの事を話した

さすがに魔法の事を話した時は驚いていたな…  
なのはが管理局に入りたと言って言った時は、初めはみんな反対していたけど（特にお兄さんが）リンディさんの話を聞いてくれてやっ  
と許してくれた

今はリンディさんとなのはのご家族と話を詰めていて、私となのははマンションの方で休んでいます

「ふぁ…お父さん達の説得に朝までかかっちゃったね」

「うん…でも将来の事だから仕方ないよ」



「うん…そうなんだけど…特にお兄ちゃんの説得が大変だったよ」  
「！」

「アハハ…確かに」

私でもちよつと引いたかな…

「あ、もうお昼だね。フェイトちゃん、テレビ付けていいかな？」

「あ、うん いいよ」

カチッ

なのははテレビを見てるみたいだし…

「なのは、お昼は私が作る。フ、フェイトちゃん!!」よ…って、  
どうしたの？なのはは」

なのはがテレビを凝視したまま何か驚いているけど…？

「このテレビに出てる人…キョウスケ君とヴィータちゃんに似てる  
んだけど…」

…えっ!?!?

「ど、どれ!?!?…って、なのはあ…キョウスケは私達と同じ年齢だ  
よ?」

この人は似てるけど、大人の人だよ」

テレビに写っている人は、確かにキヨウスケに似ているけど…キヨウスケも成長したからこんな風になるのかな…／＼

「でもでもっ！！キヨウスケ君なんだよ！？キヨウスケ君ならちよつと大人になる位、朝飯前の晩御飯だよ！？」

…なのは、少し落ち着こう…ね？

「それに！！隣の女の人！！！！どう見たってヴィータちゃんだよ！！？」

…確かに言われてみれば、女の人はヴィータの面影が…というより…思いつきりヴィータだよな？

私がそう考えていると…テレビから

『ありがとうございます！！まずお名前宜しいですか？』

『…キヨウスケです』

『ヴィータだ…です！！』

……あ、コレ間違いなく本人たちだ

私となのははテレビに近づきキヨウスケ達の声を聞くと

『キヨウスケ君にヴィータさんですか？』

ヴィータさんは外国の方なんですか？綺麗な赤毛ですね』

「ねえ…フェイトちゃん…ヴィータちゃん褒められてるね…」

「う、うん…そうだね…」

私から見ても…今のヴィータは綺麗で可愛いらしいし…胸も…  
だ、大丈夫！私だってまだまだ成長するはず…！

『キヨウスケ君の方もカツコイイですね。今までインタビューしたカップルの中で断トツですよ。』

『あはは…そ、そうですか』

このインタビューしてる女の人っ！何キヨウスケとヴィータをカッ  
プルなんて言ってるんだろっ！

キヨウスケも否定しないで何かデレデレしてるしっ！

「ねえなのは…何か私、凄くイライラするんだけど…」

「奇遇だねフェイトちゃん…私もの…」

…これはキヨウスケが悪いんだよ？

私に黙って浮気なんてするから…

二人の手には、おもいつきり握り締められたレイジングハートとバ  
ルデッシュが

メリメリッ！！

と、音を起っていた…

Side Out

おまけ

ガチャ

「ただいま〜 なのはちゃん！フェイトちゃん！  
お腹空いたでしょ？エイミィさん特製チャーハン作っちゃ…うわっ  
！？な、なに？この負のオーラは！？」

帰宅したエイミィが見た物は…

「…フフツ…フツフツ…」

テレビを見ながら不気味に笑う少女二人だった…

つづく…



遊園地へ行くころ〜激甘偏〜

これまでのあらすじ！

キョウスケとヴィータは遊園地に入ってインタビューを受け、やっと解放された

キョウスケSide

しばらく遊園地内を歩く僕とヴィータ

「さて…と、ヴィータ何処いこうか？」

「う〜ん…あ！アレなんかどうだ？」

そう言いヴィータが指差した先には…

「…ゴーカート？へえこれは二人乗りなんだ」

「面白そうだな！一緒に乗ろうぜ！…！」

「ああ、いいよ」

「運転は恭介がしてくれよな。わ、私は隣でしがみついてっから／」

「?…そんなにスピードでないぞ?」

「い、いいんだよっ!／」

そう言うとウィータは僕の隣に座り腕をガツチリ組んできた

「…じゃあいくよウィータ?」

「ああ」

僕はハンドルを握り、アクセルを…踏んだ!!

Side Out

ウィータSide

ブオオオン!!

恭介がアクセルを踏んだ瞬間、カートが急発進した

「わっ！？ちょ？恭介っ！？」

お、思ったより速い！？

「キ、恭介！！前！！カーブだぞ！！」

こんなスピードで曲がれんのか！？

「しっかり捕まってヴィータ！！

…イナーシャルドリフト！！」

ザザザッ！！

カートが横に滑りながら向きを変え…

ブオオン！！

急カーブを一気に駆け抜けた！？

「いくぞ！！アスーダ！！」

ア、ア ラーダって誰だよ！！！？

「…次のカーブで勝負だ！！リフティングターン！！」

ブオオオン！！

なっ！？？カートがジャンプして空中で向きを変えっ！？？



ドオンー！

「うおっ！？」

カートが着地した反動で車体はかなり揺れた

「キ、恭介！？安全運転ー！！」

…この時私は思った…

恭介には車のハンドルは持たすまいと…

Side Out

キヨウスケSide

いや、カートとはいえ久々の車の運転、面白かった…ん？

「どうしたヴィータ？疲れた顔して？」

何かヴィータがグッタリしているが？

「…いや、何でもねー…」

と言ってもな〜…

「あ、ヴィータ 何か飲み物買ってくるよー！ヴィータはそのベンチで待ってて」

「ん…ああ、ワリいな」

そう言っつて僕は売店に行き、コーラとオレンジジュースを購入。

「おまたせ！ヴィータはオレンジでいいっけ？」

「ああ、サンキュ〜…ん」

ゴクゴクッ

「ぶはあ〜生き返る〜」

美味しそうにジュースを飲むヴィータだった

「ゴクゴクッ…次は何処行こうか？」

「う〜ん…おっ！？あそこ何だ？」

「あそこ…？」

ヴィータの視線を辿ると…

「…えーと、メリーゴーランド?」

「恭介!!あの馬と一緒に乗ろうぜ!!」

うっ…正直あれは…ハズイかも…

「…どうしても?」

無駄だと判っているが…一応尋ねるが…

「ああ!!面白そうじゃん!!」

説得失敗…仕方ないか

「じゃあコレ飲んだらいこうか」

「ああ」

ま、ヴィータが楽しんでくれればいいか

「そっぴゃ恭介が飲んでんのは何だ?」

「ん?コーラだけど…あ、こっちがよかった?」

「あ…なあ、それ一口貰っていいかノノ?」

「ん?いいよ ハイ」

やっぱコーラ飲みたかったのかな?

「あ、ああ…ありがと…ゴクゴクッ…／／」

何かストローを口にしてから顔を赤くして飲んでるが…？

「あ、じゃあ僕もヴィータのオレンジジュース一口貰うね」

ゴクゴクッ…

「ん〜果汁100%だったんだ…ってどうしたヴィータ？そんな驚いた顔して」

こつちを見て目を見開いているが

「なっ！？い、いいいや！？なんでもっ…／／あ〜…恭介、その…  
美味しい…か？／／」

「ん…ああ美味しいよ（ニコッ）」

基本的に甘いものは好きだからね〜

「そ、そっか…／／」

ヴィータの顔が更に赤くなった…風邪？

パシヤ

今僕は、ヴィータのリクエストでメリーゴーランドの馬に乗っているんだが…

「…なんでぞ」

「へへっ／＼この方が心地よくな」

皆さんに説明すると…僕はフツーに馬に跨がっているんですが、ヴィータはその僕の前に足を揃え、横向きにちょこんと座り…

ギョッ

そのまま僕の身体に抱き着き密着してきた

「…んゝ、恭介の匂いって何か落ち着くんだよな／＼」

そんな事を言うヴィータに離れてとは言える訳もなく…ハア

そうこうしているうちにメリーゴーランドが回りだした

…しかし、何処からか刺すような視線が…？

パシヤ

ん？何かさっきから音も聞こえるよつな？

メリーゴーランドから下り…

「ふう…あ！もうお昼か〜ヴィータお腹空いてない？」

いつの間にかお昼過ぎてるし

「あ、ああ…そそそうだなっ！！」

「じゃあ…どこかのレストランにでも入る「き、恭介！？」う…ってどうした？」

「あ…き、今日私がお弁当作ってきたんだけどよ…よ、よかったら…その…／＼」

そう言いながらヴィータは手に持ったバックを僕に見せる…

「えっと…じゃあ貰おうかな」

「ああ／＼」

「じゃあ向こうのカフェエリアで食べようか」

テーブルに着き、ヴィータは持って来たお弁当を出し…

「じ、じゃあ開けるな…／＼」

ヴィータが持ってきたお弁当は二段重ねで一段目にはご飯が、二段目にはおかずが入っていた

…あれ？このおかずって最近見たような？

「実は恭介にナイショで今朝作ってたんだけどよ…いきなりバレそうになっちまったからインフィニティがごまかしてくれて…今朝の朝食は、この弁当の余りだったんだ」

ああ、だから見覚えあるおかずがあるのか

「そっか…お弁当作るのがって大変だったんじゃない？」

「レシピとかはインフィニティが教えてくれたんだけどよ…」

『ヴィータ嬢の包丁の手つきが危なっかしかったですね』

手の平に極薄のプロテクションを常時展開しなかったら…ヴィータ嬢の指は絆創膏まみれでした』

「イ、インフィニティ！？」

あ…そういやすっかり存在忘れてた…

『あ、大丈夫です。すぐスリープモードに戻りますから…では』

…コイツ、出番がないから出てきたのか！？

「…とりあえず、お弁当頂こうかな」

「お、おう…あ！恭介、ちょっと待った!!」

ヴィータがくいつと僕の袖を引っ張り、箸の動きを止めた

「ん？どうした？」

「あ、その…ち、ちょっといいか／＼」

？何やら緊張した感じでヴィータが僕が食べようとしていたおかずを箸で取ると…

「あ、あゝん／＼」

「……………」

ナンデスカ？コレハ？

「あ、あゝん！／＼」

「……………あゝヴィータさん、これは？」

「こ、これはだな…その…／＼」

…お弁当を食べる時には、こうした方が恭介が喜ぶからって…イン  
フィニティの奴が言ってたんだけどよ…／＼」

…こんのデバイスはゝ!!

「あ…もしかして嫌だったか？」



そう言つとヴィータの表情が悲しみに染まつて…

いや！別に【あ〜ん】自体はいいんだが（えっ！？いいのか僕！？）  
周りの人目がちよつと…／＼

そうして悩む事1秒…

「じ、じゃあ…あーん／＼」

意を決し、ヴィータの持つ箸の方向に向け口を開けた

「あ、あ〜ん／＼」

パクッ

「モグモク…うん美味しいよヴィータ！」

「そ、そうか！？じゃあ今度はこっちのから揚げを…」

つて、あ〜んは続くんですか！？

それから何度も【あ〜ん】をされつつ、ヴィータの手料理を食べた…

しかし、僕もやられっぱなしって訳でもなく…

「ほらヴィータも、あ〜ん」

「い、いいって！私は自分で食べるから！…」

「あ〜ん」

「だ、だから… / /」

「あゝゝん！」

「…あ、あゝゝん / /」

パクッ

というように僕もヴィータに【あゝゝん】攻撃をしていた

「…ん？ヴィータ、ぼつぺたにご飯粒がついてるぞ」

「えっ？どこだ？ここか？」

ヴィータは自分のほつぺたを触って探しているが

「あ、そつちじゃないよ こつち…」

僕はそつと手を伸ばしてヴィータの頬についた米粒を取り

「とれたぞヴィータ」

「あ、ありがと恭介 / /」

「どういたしまして…パクッ」

「あっ！？… / /」

ヴィータが本日二度目の驚き顔

「ん……?どうかしたかヴィータ?」

「うう……/」

顔を真っ赤にしてヴィータは俯いてしまった

……屋外だからやっぱ風邪か?

パシヤ

Side Out

遊園地へ行こう！～発見編～

キョウスケSide

ヴィータとの（恥ずかしい？）昼食後、僕たちは散歩がてら遊園地内にあつた大きな池に来ていた

「恭介！あそこで売ってんの何だ？」

「ん？ああ、この池に居る鯉の餌だな」

「…コイツって何だ？」

あれ？知らなかったのか？

「ザツクリ言つと魚だよ」

ホントにザツクリ説明した（笑）

「へ～…ちょっと見ていこうぜ！なっ？」

「いいけど…あ、じゃあせっかくだしエサを買っていこうか」

「おうー!」

と、いう訳で僕たちは鯉のエサを買い、池に向かってエサを投げると…

バシャバシャバシャー!!

「うお!?す、すげーな…」

うん、正直引くくらい…

エサをちよつと撒いたら…鯉の大群が水面に顔を出して口をパクパクさせている…それはもう水面を隙間なく…

「これはまあ…凄いというか…」

正直圧倒された

「すげー…コイツってメチャクチャ食つんだな」

いやいやいや!!多分ここが特殊すぎるんすよ!!!?

「は…すごかったな恭介」

「あの食欲は確かにね…」

だがヴィータ、順調に物語を進めれば数年後にもつと凄い食いつぶりを目の当たりにするんだぞ？

…スバルとかエリオとか…たしかギンガもだったな…ん？

「あつヴィータ、ここから先は動物園ゾーンみたいだぞ？」

そう、ここの遊園地は動物園もあるのです

「動物！？　なあ恭介、ウサギもいるのか！？」

「ウサギは…あつ、居るみたいだね

パンフレットによると直接触れるみた「いくぞ恭介！！」「い…って、おわっ！？」

ヴィータは僕の手を引っ張りながら、凄いスピードでウサギゾーンまで一直線に向かった…

「ふあ……モコモコだあ…」

ヴィータはウサギゾーンに到着するや否や

「ウ、ウサギだあー！！すっ…げーカワイー！！！」

目の色を変えウサギに抱き着く…というよりは抱擁している…  
以前あげたウサギのヌイグルミ（ゴスロリVer？）がお気に入り

で、常々本物に触りたかったらしい…

「な、なあ恭介 コレ持ち帰ってもいいのか!？」

いや ダメだろ…?

「動物園の動物だからダメだよヴィータ」

「ええ〜〜!?!?なんでだよ〜〜!?!？」

それからヴィータを説得するのに数十分かった…

「さ、ヴィータ せっかく動物園ゾーンに来たんだから他の動物も見ていこ?。」

「…うう〜仕方ねえ…」

名残惜しそうにして…と言っか、そろそろ移動しないと…飼育員の視線が痛いんですよ!？」

あんだだけ騒げば当然かあ…

と言う訳で、僕たちは園内を歩き回ってます

テクテクテク…

「恭介！！アレは何だ！？」

「あれはキリンだよ」

テクテクテク…

「あっちの動物は何だ？」

「あれは象だよ」

テクテクテク…

「あつ！？あれは何だ？」

「ん？ああ、あれはミジユマルだよ」

テクテクテク

…ん？今、何か有り得ない動物の名前言ったようなの？



動物園ゾーンも一通り見て回って来た僕たちは、再び遊園地ゾーンに戻って来た…のだが…

「グイータさん…どうしてもコレに乗りたいと？」

「おうよ！！この乗り物おもしろそーだしなっ！」

…正直、遊園地に来てから初めに目に着いたアトラクションであった…

だからこそ見なかった事にしてスルーしてきたのだが…

「…もしかして、恐いのか？」

ギクッ！

「いいいやだな〜グイータさん！！恐い訳無いですよ〜ただ嫌いなだけですヨ？」

…僕の目の前にある乗り物…それは…

「だよな〜！！普段からメチャクチャな飛行魔法で空を飛んでる恭介が【ジェットコースター】が恐い訳ないよな〜！！」

……ジェットコースター【レーナ】です…

しかも木製のコースターってナメてる？ねえナメてますよね！？こんな安全性要素わざわざ減らした乗り物考えた奴誰！？今すぐバハムートの餌食にしてやる！！

「…おっ私達の順番だ！早く乗ろつぜ？」

「…そだね」

…もう行くしかないのね…

カタカタカタカタッ

コースターが徐々にレールを上っていく…  
よ、よりもよって1番前とは…

「いよいよだな！恭介っ」

ヴィータはワクワクが止まらないようだ…

「…な、なあヴィータ…実は…」

僕が言いかけたその時…！

ゴオオオオ！！

一気に急降下した…！

「いゃっほー！…！」

「&@?!?」

…グッ、このフワッと感が…ッ!!

ゴオオオオ!!

ゴオオオオ!!

ゴオオオオ!!!!

S i d e O u t

ヴイータSide

カタカタカタカタ…

「いやー面白かったな」

結構迫力あったし

「恭介、面白かつ…」

隣の恭介を見ると

「……………」

つて！真っ白に燃え尽きてる！？

つか、口から魂が抜けかけてねーか！！？

「き、恭介ー！！？しっかりしろー！！？」

Side Out

キョウスケSide

「……………ん…」

なんか…後頭部に柔らかい感覚が…

「あ、気がついたか恭介？」

…目の前にヴィータの顔が……………？

「ヴ、ヴィータ？…ああ…僕は…」

気絶してたのか…

「よ、よかった…驚かすなよ恭介…心配しちまったじゃねーか  
！！」

「ごめん…ヴィータ、実は…どうも絶叫系はちょっと苦手です…」

転生前から苦手だったからな…

「でもよ、いつもアレ以上のスピードで飛んだりしてんの…？」

「あ…自分で飛んでる分には大丈夫なんだが…ホラ、アレだよ。  
車酔いする人が車運転しても酔わないって現象？」

自分でコントロールすれば大丈夫って事かな？

「そっか…まったく、言ってくれればよかったのによ…  
でも、恭介の意外な弱点発見だな」

「はは、皆にはナイショな…ところで」

「ん？どうかしたか？まだ気分が悪いのか？」

「いや…それは大丈夫なんだが、ヴィータ…僕のこの状態って…」

まさかとは思うが…

「あゝ…その…何だ／＼恭介が気絶しちまって…やっぱ横にした方が  
がいいと思つてさ…ひざ枕つてヤツを…ちよつとな／＼」

やっぱり!?

「わ、悪いヴィータ!重かつたろ?今どくよ」

僕が体を起こそうとすると

「あ!?わ、私なら大丈夫だ!!…それより…もうちよつとこのま  
までいろよ…な?／＼」

と、ヴィータに頭を押さえられてしまった…

「…つか、コレ結構恥ずかしいんだが」

ベンチに横になって、なおかつヴィータにひざ枕されてる光景つて  
…かなり目立つんですが…

「へへっ、心配かけた罰だ」

そう言つとヴィータは僕の頭を優しく撫でていた

Side Out

シャルSide

さっきからキヨウスケ君とヴィータちゃんのデート現場をクリアール  
ウィントで盗さ…じゃなくて記録してるんですけど…

「……………ヴィータちゃん、何時にも増して積極的ね。」

…はやてちゃんもウカウカしていられないかも…」

…でも…なんでかしら？

ヴィータちゃんにひざ枕されてる大人Verのキヨウスケ君の姿を  
見ると…胸がもやもやするような…

「……………キヨウスケ君……………」

S i d e O u t

遊園地に行こう〜嫉妬編〜

キヨウスケSide

僕たちが遊園地に来て結構時間が経ち夕方…

「なあ恭介、最後にアレに乗らないか？」

ヴィータが指差す先にあるのは…

「観覧車に？別に構わないよ？」

「よっし！早く行こうぜ！」

ヴィータは僕の手を引っ張りながら走り出した

「あ、恭介は高い所は大丈夫だったか？気絶すんなよ？（笑）」

くっ！前回のネタを引っ張ってるし！



「おー！！こんな高くまで！！なあ恭介、はやてん家って…こっから見えつか？」

僕とヴィータは現在観覧車に乗っています…つか

「ヴィータ、流石に見えないって！」

一応ココから海鳴市って電車で2時間かかる場所だし

…しかし観覧車の順番待ち中、カップルしか列んでなかったな？

S i d e O u t

シヤマルS i d e

…まったく、なんで観覧車に列んでいるのがカップルばかりなのよー！！

私一人列んでかなり肩身が狭い思いだったわ！！

…コホン！

え〜と、ヴィータちゃん達が乗ろうとしている観覧車…パンフレットによると、【夕日の映える景色を眺める恋人達のスポット】！？  
…ハア、だからカップルばかりだったのね…

とりあえず二人のすぐ後ろの観覧車には乗れましたけど…べっ、別に寂しくなんかないもん！ぐすん…

「……………ヴィータちゃん楽しそうね……………」

ヴィータちゃんのおんな顔、キョウスケ君達に会うまでは見たことがないわ…  
ホントに不思議な人ね…

「……………キョウスケ……………」

ボンッ！

な、ななな何で！？／＼  
名前呟いただけで顔が赤くなっちゃう！？

だ、ダメよ！！キョウスケ君はまだ子供なんだし…でも、今のキョウスケ君の姿を見ると…／＼

…えっ！？クラーヴイントに反応？…こ、これは！？

S i d e O u t

キヨウスケSide

ヴィータは外の風景を魅入っていた

「…すげー眺めだな…」

「僕はジェットコースターの時は、風景を見る余裕がなかったもんな」

「そーだな、まさか気絶するとは思わなかったけどな」

「アハハ、僕も思わなかったけどね」

僕はヴィータと顔を見合わせ笑った

…つか笑うしか出来ないよな…orz

「なあ恭介、…ありがとな」

不意にヴィータがそう呟いた

「えっ？僕、何かしたっけ？」

「今日は…私と遊園地に来てくれてって事だよ！！！！」

向かい合わせて座っていたヴィータは、そう言うと僕の横にそっと座って頭を僕の肩に預けた

「…今日はすっげー楽しかった」

「そっか、それなら来た甲斐があったよ」

僕もそれなりに楽しめたしね

「……恭介ノ」

ヴィータはそう呟き僕を見つめてきた

「ヴ、ヴィータ!？」

ヴィータの顔は年齢詐称薬・改で、いつもと違う雰囲気を持っていた

それに加え、夕日に照らされてヴィータを神秘的に魅せていた…

それに…何だろう、ヴィータからとても甘い香りが…僕の思考を…

スッ

「……………んノ」

そしてヴィータは目を閉じて顔を僕に近づけて…

「……………ヴィータ」

スッ

僕の顔も無意識にヴィータに近付いていき…

ザンツー!!

…僕とヴィータの間に…よく見覚えがある金色の魔力刃が通過した…

「…ミツケタヨ、キョウスケ…」

ゴンドラの外には…狂戦士と化したフェイトが飛んでいた…つか恐っ…!

「フ、フェイト!?!」

「……やっぱりキョウスケだったんだね…」

「…あっ…!!ヤベツ…!!」

し、しまった…!!…! 今はヴィータ共々大人Verだから、上手くいけばごまかせた可能性が…!!…!

「……ほらフェイトちゃん、やっぱりキョウスケ君とヴィータちゃんだったんだよ?」

フェイトの反対側…つまり僕の後ろからよ…く知っている声が…振り向くと…

「……キョウスケ君にヴィータちゃん…少し頭、冷やそうか?」

レイジングハートをかまえたのはが…って！な、なのは！？その  
台詞はまだ早いぞ！？

あと数年後に言う予定の台詞じゃあ…

「と、とりあえず飛ぶぞヴィータ！！」

「お、おう！！」

僕たちはゴンドラから脱出し…

ガチィ！

「…はっ？バインド！？」

ゴンドラから出た瞬間に拘束された！？いつの間に！！？設置型バ  
インドなんて、この頃のはやフェイト使えたか？

「…ああ、そのバインドは…そこに居たシャマルさんに協力して  
もらったの」

なっ！？シャマルだっって！！

なのはが指差す先…って僕たちが乗っていた…つか僕らのゴンドラ  
のすぐ後かよ！！

「あつ、シャマル！テメー恭介を放しやがれ！！！！」

ヴィータがシャマルを睨みながら叫ぶが…

「…ごめんなさい！！…こうしないと…私がなのはちゃんに…」

ガクガクッ！）」

シャマルが顔を真っ青にして震え出した…軽くなのはにO H A  
N A S H I 済みか…

「ああ…それと…シャマルさんがこんな写真持ってたんだけど…ナ  
ニコレ？」

目を単色にしたなのはの手には数枚の写真…っ！

「なっ！？それって僕とヴィータの！？」

「どうした恭介？…んな／＼！？」

ヴィータも例の写真を見て絶句した

そりゃーヴィータと一緒に遊園地や動物園で遊んだ写真…  
つかいつの間に撮ったんだよ！？」

…しかし、端からよく見たら…結構恥ずかしい事してたんだな／＼  
「…キヨウスケ、ヴィータの飲んでいたジュースを飲んだんだ…コ  
レなんかヴィータに…あ、あゝんなんかされて…（わ、私だってキ  
ヨウスケにあゝんってしたいのに！！）」

「…これは逆にキヨウスケ君がヴィータちゃんにあゝんなんかして  
るね…

あー！こ、これなんか…キヨウスケ君にひざ枕あ！？（ヴ、ヴィー  
タちゃんばかりズルい！！わ、私だってキヨウスケ君にあゝんっ  
てされたり、ひざ枕だってしたいの〜！！）」

…なんか今、フェイトとなのはの妙な副音声が聞こえたような…

「べつ別にそんな位いいじゃねーか／＼!!」

ヴィータがなのは達に反論するが…

「…そうだね、あくんやひざ枕位は別にいいよ…」

いいんですか!?!なのはさん!!

「…でもねヴィータ…これはダメだよ」

フェイトが手にした写真には…先程のキス寸前のショットが納められていた

「あう…／＼そ、それは…その…／＼」

ヴィータが赤くなり撃沈された…

「キョウスケ君…私とはキスしてくれないのに…なんでヴィータちゃんとはキスしようとしたのかな?」

カチヤ

「い、いや…どうやら年齢変化で大人Verになったせいかな…精神が肉体年齢に引っ張られた影響で…」

ついフラフラ…って…とは言えないよな…てかなのはサン?何気にレイジングハートを向けてらっしやるし!?



「…ふうん…（これは…イイ事聞いたの）」

「…そうなんだ…（じゃあ、キヨウスケを大人Verにして誘惑すれば…あ、でも私…変身魔法はちよつと…後でリンディ提督にきいてみよ）」

「（そ、そうだったのか！！だったらまた恭介から貰った年齢詐称薬・改で大人のデートをすれば…恭介と今度こそ…／／／）」

…なんか副音声でとんでもない事が起こっている！…ような気がする！？

「…でも、まずは…」

「…頭、冷やそうか？キヨウスケ君？ヴィータちゃん？」

「「い、いやー！ー！！！！！」」

ドカアアアアン！！！！

その後なのはとフェイトと遊びに行く事を（強制的に）約束させられ意識を手放した…

後にシャマルに聞いた話だと、観覧車のゴンドラが一つ無くなつて園内が大騒ぎになったそうだ

だが、その遊園地はバニングス家の傘下だったらしく…なのはおそらくアリサに事情を説明して事態を収拾してくれたようだ…

この頃はまだアリサはトラウマ中だった為、素直に従ったとか…

Side Out

病院

はちてSide

「…うん」

「主…どうされました？」

「シヤマルとの念話が通じへんのよ…」

「シヤマルは確か…神代とヴィータの後を付けているのでしたね…」

「そうなんよ〜…何かあったんかな？」

「…あ、それと関係しているかは解りませんが…先程、テストロツサと高町が凄ざましいスピードで飛行していましたが…」

「えっ!?!…あ〜…それはキョウスケ君…ご愁傷様や」

あの二人がそんな行動するって事は…キョウスケ君とヴィータの事がバレたんやな〜

「主は妙に落ち着いてますね？」

「なんやシグナム…私やって大人のレディやで？この位で取り乱したりはせえへんよ？」

よくよく考えたら、あの二人と違って私とキョウスケ君は一つ屋根の下に暮らしとるんやから…チャンスはいくらでもあるしな〜

…ヴィータは…まあ私の次ならええか…

それに、二人かがりならキョウスケ君も落ちやすそうやしな…

フッフッフ…覚悟しいや〜

「あ、主!?!」

シグナムは、はやての笑みを見て顔を引き攣らせたそうな…

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

続・別荘へ行くろう！

別荘内

キョウスケSide

シュン！

「さ…初めて来る人もいるけど…ようこそ別荘へ」

「おお~~~~~！！」x7

「どや？キョウスケ君の別荘を見た感想は？」

「す…凄い！！フェイトちゃん！！見て見て！おっきなお城があるの…！」

「…うん、ホントおっきい…」

皆さんこんにちは

神代恭介です…

さて今僕たちは久々に別荘にいます

気付いている方もいると思いますが、今回はなのはやフェイトも一緒です

…まあ以前連れてくると約束したから別に良いんですが…

「…つか、何故あなた達もいるんです!？」

此処にいるのは八神家全員となのは・フェイト

後…どこから嗅ぎ付けたのかリンディさん・エイミィさん・クロノ・ユーノ・アルフという最終決戦メンバー勢揃いなのですよ…

事の始まりは数時間前…

回想

「…ふう、まつ…こんな所かな？」

僕は今、年末のイベント大掃除で自分の部屋を掃除しています  
まあ元々こまめに掃除していたから手間はかからなかったが

ガチャ

「キョウスケ君…こっちはもう終わったんか？」

「ああ、はやて…こっちは終わったよ…。はやての方は？」

「うん、こっちも大分片付いたで

…やっぱ自分の足で歩けると楽や」

はやてはエリクサーのお陰で日常生活はほぼ支障なく出来るレベル  
まで回復した。病院の検査でも問題なしとの事で年末年始は家で過  
ごす許可が下りたのだ

…流石にまだ走ったりはまだ無理だが

「…これもキョウスケ君や皆のお陰や…」

「別にいいって 僕たちは、はやてを…家族を助けたかったから助  
けたんだしね」

「…それでも…ありがと／＼」

「フフツ どういたしまして」

「あ、家族って言えば…キョウスケ君、さくらちゃんは大丈夫なん  
？」

「…そうだな、ちょっと様子見てくるかな」

さくらはボデイの方の負荷が結構あったのでメンテ中だったが…細かい調整は僕がしないとイケないしな…

ピンポーン

ん？誰だろう？

「あ、ごめん！シグナム！！代わりに出てくれへんか？」

一階にいたシグナムにはやては頼んだ

「はい、分かりました主」

そう言うとシグナムは玄関に向かったようだ

「じゃあはやて、大掃除が終わっ…」

ガチャ

「「キョウスケ（君）、はやて（ちゃん）掃除手伝いに来たよ」

なのはとフェイトが突貫してきた！

「二人ともどないしたん？」

「はやてちゃん、まだ足が完全に治ってないんだよね？」



「それで、なのはと相談したんだけど…私達も大掃除手伝った方がいいかな？って」

一応二人ははやての事を心配して来てくれたのか

「…ってのは建前で…ここがキヨウスケ君のお部屋か」

…前言撤回します

なのはさん、目的駄々漏れです…

「ま、まあキヨウスケ…なのはとお掃除のお手伝いに来たのはホントだから…ね？」

そう言うフェイトさんの目線も、キヨロキヨロと部屋の隅々まで観察しているように見えますよ？

「あ、キヨウスケ君のベット発見　じゃーんぷ！！」

ドオン！

なのはは僕のベットにダイブした

「あー！ー！！？なのはちゃん！？何してるん！！！！？」

「あ、なのはずるいよ！！わ、私だって…したいのに／＼」

「んんん　キヨウスケ君の匂いな」

やれやれ…

「なのはあ…掃除手伝いに来てくれたんだろ？だったら…」

そう言い、僕はなのはに近づき頭に手を置く

「にゃ！？／＼」

一瞬なのははびっくりするが…

「とつとと手伝わんかーいーい！！」

メリメリ！！

「きゃー！！？い、いたい！！痛い！！？」

なのはの頭を締め付けた

「ヒイイト！！エン…「わ、分かったの！！掃除しまーす！！  
あ、頭！！あたまわーれーるーの～～！！！」そうか…」

僕はなのはの頭から爆熱ゴツ　フィン　ーを離すと…

「…うう…酷いよキョウスケ君…」

人の部屋着で、いきなりベットにダイブかます人には言われたくない…ま、流石に少しやり過ぎたかな…

「…ま、少しやり過ぎたか…お詫びに掃除が終わったら別荘で生き抜きしようか？」

「え…別荘ってキョウスケ君の？」

「ああ、はやてにも話そうとしたんだけど…大掃除が終わったらいこうかなって思ってたさ

さくらの経過も見たいし…向こうには温水プールや露天風呂もあるから、はやての足のリハビリにもいいかなって」

あ、ちなみにリインフォースは別室に移動してさらに嚴重に結界をはったから大丈夫！

「い、いく！行くの〜!!」

なのはがおもいつきり手を挙げた

「私も行っていいんだよね？キョウスケ？」

フェイトも控えめながら尋ねて来た

「勿論だよ さ、そうと決まったら早く掃除終わらせようか？  
はやて、後残っている場所はどこかな？」

「あ、うん…後はシグナム達に頼んどったりビングが終われば大掃除終了や!!」

「ん、了解〜 じゃあ下に行ってシグナム達を手伝うか」

「「「おーーー!!!!」」」

しかし…えらくテンション高いな…

その後、なのは& a m p・フェイトのコンビネーションで大掃除は予定より早く終わり…

「あつ！！キヨウスケ君、別荘には温水プールもあるんだよね？私一回帰って水着持ってくるね？」

「あ、キヨウスケ…私も水着持ってくるから一回戻るね？」

そう言うとなのはとフェイトは…って！！

「レイジングハート！！！」

「バルデッシュ！！！」

「セーットアップ！！！！」

ピカアアア

「じゃあ急いで行ってくるね！！！！」

ヒュユン！！

「…なのはちゃん達、空…飛んで行ってもうたな…」

いや…まあ、別にいいですけど…

「そーいや、はやて達は水着持ってたっけ？」

ふとそんな疑問が浮かんだが…

「その事なんですが…キヨウスケ君、ハイ」

そう言うシャマルから受け取ったのは…

「…ファッション雑誌？」

僕が疑問に思っていると…

「キヨウスケ君、たしか魔力を固定化して服を精製してましたよね？  
今回もお願いします」

あゝ…そついやそんな設定あつたな

「…はあ、解つたよ…で、希望とかはあるんでしょ？」

「あ、もうチェックが入ってますから」

えらく手際いいな…

そーゆー訳で僕はファッション雑誌を見ながら水着を創つた…

…シャマルやシグナムはビキニ系なのは…まあスタイル良いし似合  
いそうだからいいんだが…

はやてやヴィータまでビキニ希望とは…

30分後

ようやくなのはとフェイト達が戻って着た

「じゃあ別荘に行くから足元の魔法陣に入ってね〜」

「はーい」×7

…何か人数増えているような…

と言う訳で別荘の中へ入り、冒頭に戻るのだが…

回想終了

「で、何で居るんです?」

と後ろにいた集団様に聞いてみると…

「ふふっ、フェイトさんがキョウスケ君の別荘に行くっていつから保護者は必要と思って…ね〜エイミィ」

「はい、私達もフェイトちゃん達の事が心配で」

「アタシはフェイトが行く所なら着いてくよ」

…貴女方、おもいつきり浮輪やらビーチボール持ちながら言っても説得力ないですよ!?

ガシッ!

「なんだ！？…ってクロノ？どうした？」

何故かクロノはやつれた顔で

「キョウスケ…この別荘は中の1日が外では1時間だそうだな…」

「あ、ああ…そうだが…？」

「頼む…キョウスケ！！この別荘にしばらく居させてくれ！！」

「…は？」

クロノは必死な形相で懇願してきた  
なぜに！？

「あ…キョウスケ君、クロノ君は今年中に提出しないといけない  
報告書が山のようにあるんだよ」とてもじゃないけど後数日中に  
全部終わらせるなんて無理なんだよ  
んで、フェイトちゃんから聞いた時間の流れが違うキョウスケ君の  
別荘を頼ろうとしてるんだよ」

横でエイミイさんが事情を説明してくれた

「頼む！！親友よ！！！！」

…いつから親友になったかな？

「ま、まあ別に構わないけど…」

「すまないキヨウスケ…恩に着る」

貸し一つと思つとくか

「で、スクライアも何か仕事関係でか？」

後ろの方にいたユーノに聞いてみると

「あ…僕は後学の為に、ここの魔法を見学したいんだ…それと僕の事はユーノでいいよ」

なんか…吹っ切れた感の顔だな？

「まあ、別に見学はかまわんが…多分役に立たないぞ？」

「えっ！？どうして？」

「どうしてって…一応異世界の魔法だし、こつちとは術式すら違うからね 僕が使う魔法はこつちの魔導師には使えないよ」

「そっか…でも見学してもいいんだよね？」

「…立入禁止区域以外はな」

「立入禁止？」

「そこには何があるんだ！キヨウスケ！？まさかロストログアか！？」

クロノが詰め寄ってきたが…ハア



「…創った本人が把握していない区画だからだよ 装備なしで入った  
ら最後…出られなくなるぞ？  
それでも良ければ止めないが…」

まあ半分は嘘だけどね〜 立入禁止区画の隠し部屋にリインフォー  
スがいるからな〜

「…あ、いや…」

「それに前々から言おうと思っただが…ロストロギアの定義って  
失われた技術で作られた〜… っただろ？別に僕の所有している  
魔法や道具は失われた技術でもなんでもないからな！

ただ異世界の知識で作ってこっちの人間には理解できないだけだし…  
理解できない!!ロストロギアって何!?ねえバカなの?バカなんだ  
ね管理局は?」

「いや…その…」

こうして暫く僕は、疲労困憊のクロノにトドメをさした(笑)

S i d e O u t

その頃はやて達は…

「ねえはやて、はやては此処に何度も来た事があるんだよね？」

「そやで、シグナム達も一緒に来て遊んどるよ」

「つても、シグナムは此処の訓練施設を借りて修行したり、私やはやてはお城の探検、シャマルは…何してんだ？」

「私はキヨウスケ君にお願いして図書室でお料理の勉強よ」

「……何か、こえーな」

「ヴィータちゃん酷い!？」

「にはははは…あれ？誰か来るよ？」

「何!？本当か高町!？この別荘には我ら以外いないはず!？」

「…あ、まってシグナム!あの娘は…」

つづく

乙女の戦い…？

前回までのあらすじ…

なのは達の前に一人の少女が現れた！！

『誰かは読者にバレバレですよ？作者さん』

…作者にツッコむとは…

キョウスケSide

さて、クロノを弄ぶのにも飽きたし…ん？

「みんな〜！！」

お、来た来た

「さ、さくらちゃん？」

なのは達がさくらを見てビックリしてるが…なんで？

「なんで？って…私達はキョウスケからはまだ治療中って聞いたからだよ！！」

あゝそうか…まだアレは言ってなかったな…つか心読むなよ…

「…ん？何かさくらの身体…透けてねーか？」

ヴィータが気付いたようだ

「えっ！？…も、もしかして…ゆ、幽霊っ！？」

なのはが変な事を口走って顔を真っ青にした

「いやなのは、一応幽霊じゃないから安心し…」

と言いかけた途端

「い、一応なの！？でも幽霊じゃないよね！！？違うよね！？ね！？ねー！え！？」

パニック状態のなのはは僕の足にしがみ付き涙目だった  
…なのはって幽霊ダメだったのか？

「な、なのは！？落ち着いて！！」

「つかキョウスケから離れろ！！」

「ヴィータ！！主の命令や！！かまへんからなのはちゃんを引ッペがしー！！」

何この物語開始数分のカオスは！？

「ほえええええ〜！？ キ、キョウ君どうしよ〜？」

ハア、説明するしかないだろうな…

「つまり…今のさくらは立体映像という訳か？神代？」

と言う訳で皆に説明中です

「そつだよシグナム、さくらのＡＩプログラムは無事だったからね  
で、ボディのメンテナンス中はＡＩプログラムをこの別荘のメイン  
コンピュータ内のネットに入力して…ついでに別荘の管理を臨時で  
さくらに頼んでおいたんだ〜」

「一応ちゃんとした管理ＡＩプログラムを組んでいるんだけど…まだ  
未完成だからな〜」

「それで私はそのコンピュータ内から別荘内の好きな場所に自分の  
姿のＣＧを出して、皆とコミュニケーションを取れるようにしたん  
だよ」

僕とさくらの説明を皆が聞いていると…

「?????」

数名がまだ？顔だった…

「まあ、普段のさくらだと思ってくれ」

しかし…何気に約一名様が何かブツブツ言ってるみたいだな

「…デバイスのAIプログラムのみをCG化…ねえキョウス」断る  
「…って頼む前に断られた!？」

「エイミーさん…どうせこの技術を教えてって言おうとしました？  
…残念ながら教える事は出来ません」

「え〜!?!この技術があれば色々できそうなんだけどな〜」

そりゃこの技術…改良すればインテリジェントデバイスみたいな複雑なプログラムも人型にも実体化とか可能だけど…

「こちら側の技術に慣れてない方が触れると危険ですからね」

まあホントは…管理局に技術を提供した日には、上層部が悪用するだろうし…極力技術提携とかはしたくないよな〜

「はあ〜…仕方ない、今回は見送るか〜」

って諦めてないんすか！エイミーさん!？

「はあ…じゃあさくら、僕たちは温水プールに行くから女性陣を更衣室に案内してくれ。クロノとユーノとザフィーラは僕が案内するから」

「あ、うん！じゃあ皆、着いて来てね」

そう言いさくらに皆が着いていった

「さて、じゃあ行くか…ユーノ、フェレットモードになって覗きにいくなよ？」

「なっ！？し、しないよ！！そんな事！！」

つても前科があるしね

「…温泉旅行・露天風呂…（ボソッ）」

ユーノの耳元で呟くと

「なっ！！なななんで君が知ってるんだ！！？」

無印の頃だったよね…フェレットなのをいい事になのはやアリサ・すずか達が入った温泉に堂々と入ったのは

「さてね、じゃあ行くか」

「ああ、だがユーノはどうしたんだ？」

「淫獣は気にするなクロノ」

「あゝ…なるほどな」

「そこ！！何を納得しているんだよ！？」

だって…事実だしな

Side Out

なのはSide

私達はさくらちゃんに案内されて更衣室にむかっているの

…その前に…

「ヴィータちゃん、ちゃんとアレは持って来てくれた？」

私は以前にヴィータちゃんにお願いした物を持ってきたか確認してみると

「…分かってるよ！！ちっ、はやてと二人で使おうと思ってたのによ…」

「まあヴィータ、今回はしゃあないよ…それにしてもこれがそんなんや〜」



ヴィータちゃんは渋々といった感じだったけど…今回の作戦にはア  
レが必要なの…！だって…

「これがあれば…この前のヴィータみたいにな？」

フェイトちゃんの言う通り…！

この薬があれば…

「ああ…恭介からケースごと受け取ったままだったから、まだ沢山  
あるな」

「見た目はただのタフ　ッ　やけどな」

ヴィータちゃんの手には…

「この年齢詐称薬・改があれば…私だって…」

この前のヴィータちゃんみたいに大人っぽく変身できるの…！…む、  
胸だっけとヴィータちゃん以上になるのっ…！」

「な、なのは…途中から声が出てるよ？」

「ふえ！？嘘！？」

「…ほあゝ　高町なのは…私と胸で勝負しよったのか？」

ヴ、ヴィータちゃん？目つきがちよっと怖い…

キラン

「それなら私が判定するで〜」

は、はやてちゃん…何か手の動きが怖いの…

「な、なのはにヴィータも！！何でそんな話しになったの！？」

「止めんなフェイト…これは私と高町なのはの…女の闘いだ！！」

「うっ…わ、分かったよヴィータちゃん…この勝負受けて立つの！  
」！

ここまで来たら…後には引けないの…

「どうしたの4人とも？もう皆更衣室に入っちゃったよ？」

「あ、さくらちゃん…実は…」

Side Out

さくらSide

皆を更衣室に案内したんだけど、何かなのはちゃん達がケンカしているみたいなので訳を聞いてみると…

「ほえええ〜…そ、そうなんだ〜」

胸の大きさの勝負…しかもキョウ君が作った年齢詐称薬・改で成長

後の姿で勝負って…あ、そういえば…

「たしかキヨウ君…胸が大きい人が好きじゃないかって疑惑が前に出たんだっけ…？」

ピシッ

あ、なんか空気が凍り付いた？

「…なのは、ヴィータ…その闘い…私も参加するよ…！」

フェイトちゃんから物凄い霸王色の何かが…

「…私も参加するで…！」

はやてちゃんからも覚悟の炎的な何かが！？

「それじゃあ…！」

「ああ…判定は」

「キヨウスケに…！」

「…揉んでもらって決めてもらって事でええな？」

ほえっ！？何か違う方向に話しがズレてない！！？

こ、これは色んな意味でマズかも…

こ、こうなったら大人の人に止めてもらって…

「あらあら…これは面白い事になったわね」

「艦長は誰に賭けますか？…私はフェイトちゃんに！」

「あら、じゃあ…色んな意味で押しの強さでなのはさんにしようかしら」

「あたしは勿論フェイトだな！」

「……………まったく何をしてるんだ」

「いいじゃん、それでシグナムは誰に賭ける？」

「……………勿論主です…ヴィータには悪いが……………」

「つてダメダメだ、この大人達…orz」

「ま、まあ…キョウ君なら誘惑に負けないと思うけど…」

「大丈夫…だよな？」

「…わ、私も参加しようかな？」

Side Out

シグナムSide

「ん？…どうかしたかシャルル？先程から何やら難しい顔で自分の胸を触っているが…？」

いつものシャルルなら、悪ノリしてくると思ったのだが…珍しいな

「えっ！？う、ううん！…何でもないわよシグナム…」

「…そうか？ならいいが」

まったく珍しい日もあるものだな…

Side Out

シャルルSide

キョウスケ君が胸の大きな人が好き…（まあ疑惑ですけど）だった  
ら…私にも？  
そ、そりゃシグナムには負けちゃうけど…私だってそれなりに胸は  
あるんだし…

Side Out

キョウスケSide

「はーくしょん!」

『マスター、風邪ですか?』

「いや、誰かが僕の噂をしているような」

しかも何か…嫌な予感しかないんだけど…

Side Out

くくく

乙女の闘い時々暴走中!?

前回までのあらすじ…

なのは・フェイト・はやてはヴィータから年齢詐称薬・改を入手した!!

別荘

キョウスケSide

「……………遅い」

なのは達が更衣室に行ってからすでに20分近く経っている

「…エイミィが言っていたが、女性は支度に時間がかかるそうだぞ？」

いや、まあそうだろうけど…

「その前にクロノ…仕事はどうした？」

「…いや…こうして時間が出来たのだし…気分転換をと」

「…通訳すると、【皆の水着姿が見たい】と？」

「なっ！？／／」

クロノは真っ赤になり慌てている

「クロノ…君って奴は…」

ユーノはそんなクロノを見下して見ているが…気付いているかユーノ？君もクロノと同類だぞ？

…いや、前科がある分クロノ以下か？

「おまたせーキョウスケ君」

噂をすれば…この声はなのはか…

「遅かったな、なの……………はあ！？」

振り向きなのはの方を見ると…

「にゃはは…ど、どうかなキョウスケ君／／？」

薄いピンクのビキニ姿なのは…しかも明らかに成長した姿…って



「なのは！おまつ…まさか年齢詐称薬・改を？」

そついやヴィータに渡したままだったな

「うん！飲んじやった」

今のはは…15歳位かな

「ぐはっ!？」

何か後ろでユーノが鼻血を出して倒れているが…気のせいだな…うん

「じゃあ…キョウスケ君も飲んでね！」

「えっ?何を…!?!んぐっ!?!」

ゴクン

有無を言わずなのは何かを口の中に入れられた!!

ポオン!

「…ゲホッ!なのは、いきなり何するんだ…ってこれは!?!」

なのはに飲まされたのは、僕が作った年齢詐称薬・改だったようだが  
変化した姿は、なのはと同じ15歳位だろうか?

…別に年齢詐称薬は年齢設定してなかったんだが…何か15歳になるな

「あー！ー！なのはズルイよ！抜け駆けなんて」

その後ろから聞こえる声は…

「フェイト…お前も飲んだ訳ね」

黒のビキニを着たフェイトが居た。多分フェイトもやはり15歳位の姿だった

「ぐお！？」

また後ろでクロノが鼻血を出して倒れているように見えるが…うん、気のせいだ…！

「あの…どうかなキョウスケ…？／＼」

「私達のこの姿は？／＼」

どう…って言われても…つか二人とも何で胸を強調させながら近づけてくるんです！？

「あ、あいつら…：やっぱ抜け駆けしてやがった…！」

「ずるいで…！なのはちゃんにフェイトちゃん…！ 急ぐでヴィータ…！突撃や…！」

「おう…！まかしとけはやて…！」

…ヴィータとはやても年齢詐称薬・改を飲んでいるのか…  
ヴィータは赤いビキニを、はやては白をベースに水色のストライプ

柄のビキニを着ていた

…あれ？二人とも凄い勢いで向かってくる！？

「キョウスケ君〜！！」

「恭介〜！！」

ドオン！

「きゃ！？」

「うおっ！？」

ムニユ

フェイトとなのはの短い悲鳴と共に僕の方に倒れ込んで来た！！

…何か身体をあちこちから柔らかい感触が…？

「むぐっ！？むー！？」

しかも何故か息が出来ない！？

…顔にも何か挟まったような？

とりあえずこの状態から脱出しないと…

僕は顔に挟まった物体を

退かす為、右手を伸ばしソレを掴むと…

ムニユ

「あ…んっ…／／」

…今の声、フェイトだよな？何か妙に艶っぽいというか…？  
左手も動かそうとすると…

ムニユ

「あん…っ／／」

…左手は動かないが、何か柔らかい物が手の平に…それに今の声は  
なのはだよな…

…今度は両足を動かしてみると

ムニユ

「んっ…あっ／／」

「あ…んんっ／／」

…はやてとヴィータの…いつもとは違う声が…  
共通して言えるのは…僕が触れたりした物は柔らかい感触…  
…えっ!?!?

「キ、キヨウスケ?／／あまり動くと…その…／／」

「にゃはは／／キヨウスケ君のえっち」

「あ、あかんよキヨウスケ君／／こ、こんな初めてで多人数でなん  
て／／」

「うっ…ん／／恭介え…／／」

…とりあえず視界を確保する為、目の前の物体から顔を強引に離  
…あっ／＼」ゴホン…離すと

「……………」

目の前には黒い布と…

「キョウスケ…んっ／＼そ、そんなに強く揉まれると…あっ…／  
／」

ムニユムニユ

……………え〜と、これは……………フェイトさんの…む、胸！…！？

「っ！？フッフフェイト！？こ、ごめん！！／今離れるから…」

何とか顔を真っ赤にしたフェイトから離れようと…って動けない！？  
…そういえばさっき、手足を動かそうとしたらなのは達の声もした  
が…ま、まさか…

「ヴィータ、もう少し上の方に胸を押し付けるで？」

「お、おう／＼」

右足にはやて、左足にはヴィータがしがみついていた…って！？  
ちよいまち！？それ以上、上の位置に移動するといろいろヤバイ！！

「もう…／＼しょうがないな〜キョウスケ君…

今度は…じ、直に触っていいよ／＼」

な、なのはも何僕の手を掴んでビキニの中に入れようとする!?

「い、いい加減に…放してくれ…!!」

色んな意味で理性がヤバイ!?

くっ!こんな事なら普通の年齢詐称薬を作りべきだったか!?

年齢詐称薬は幻術の一種で外見をそのように見せるのだが、この年齢詐称薬・改…幻術というより変身に近い薬の為、このように実際に触れたりするのだった…類似魔法・聖王モード等、Vivid参照

「(つて、そんな設定だったのか!?)」

作:伊達に改は付いていないのだよ…おっ、ようやくタマゴ技のばかぢから覚えたポカブが産まれた

「(のんきにポケン育成してんなー!!)」

その後、遅れて来たさくらによって何とか解放されたが…

「キョウ君!わ、私に言ってくれれば…その…がんばるよ?」

いや…何をさ?

Side Out

リンディ Side

ふふ、やっぱりココに来て正解ね  
彼…やっぱり面白いわ

「あ…やっぱりこうなってますね」

「ええ…でもフェイトさんから話しには聞いていたけど…キョウス  
ケ君のあの姿は…」

「あ…かなり反則ですよ〜／＼」

かなりのイケメンよね〜…エイミイも何だか彼を見て顔を赤くしち  
やってるし

「あら、エイミイ…あなたも参戦するのかしら?」

「えっ!?!／＼い、いや〜流石にオッズが高そうなんで…まあ勿体  
ない気もしますが」

エイミイも参戦すれば面白いのにな〜

「でも、彼女は後一押しで参戦しそうね」

「彼女つて…誰ですか？」

「まあ、後のお楽しみよ」

彼女のあのキヨウスケ君を見る目…ふふ、楽しみね

「そういえばクロノ君達は？」

「キヨウスケ君の後ろで転がってるわよ…まったく我が子ながら情けない」

もう少し甲斐性があればねえ…ハア

Side Out

シヤマルSide

私達が温水プールに向かうと…年齢詐称薬・改で成長したはやてちやん達がキヨウスケ君に迫っているわね  
…キヨウスケ君もあの薬を飲んだのかしら？成長した姿になってるわ…ノノ

「……はあ」



「どうしたシャマル？ため息などついて」

「シ、シグナム！？うん！！何でもないわ！！！」

「そうか…ん？主達は神代の所か」

「ええ、はやてちゃん達楽しそうね」

「フツ、神代は大変だろうがな…主やヴィータがあんなに楽しそうに出来るのは神代のお陰だ…彼には感謝の言葉もないな」

「そうね…私達もキヨウスケ君やはやてちゃんのお陰で救われて…」

彼は「家族だから当たり前だろ？」って言うでしょうけど…

「さ、シャマル 我々もそろそろ行くぞ…流石に神代がアレでは」

「フフッ…そうね」

でもキヨウスケ君…そんな貴方だから皆が好きになって…私も…／／

Side Out

おまけ

ピキーン！

「「「はっ！？」」」

「ど、どうした？」

何とか4人から解放されたけど…4人ともどうしたんだ？

「…感じた？みんな？」

「…ああ」

「…うん、感じた！」

「…この感じ…」

な…何？

「「「ライバルが増えた……よつな気がする！…！」」」

…だから何の？

<UJ>...

お色気作戦継続中!?

前回までのあらすじ

年齢詐称薬・改をの飲んだのは達が暴走した…

「…いや、ホント勘弁してくれ…」

『よく理性が持ちましたねマスター』

「……………まあ」

キョウスケSide

ヤバイ…

ヴィータとの遊園地の時からだろうか…薄々気付いたのだが年齢を

変化させると、魂や精神も年齢に引っ張られるようだ…

…そうになると健全な成人男性の精神と同じになるわけで…

ムニユ

「ねえ、どうしたの？キョウスケ君」

「うっ／＼いや…何でもないよ」

ムニユ

「何か悩みがあるなら私に話してね？キョウスケ」

今僕は温水プールの中に居るのですが…両腕になのはとフェイトが密着してきています…

しかも結局あのまま年齢変化したままなので…うっっ、両腕に柔らかい感触が！？

「おい！交代の時間だぞ！」

「次は私らが教えて貰う番やで！」

「えー！？もう！？」

「ちょっと早くない？はやて」

「何言つとるん！？キツカリ30分経ったで！！」

「ちゃんと約束は守れよ！！」

「ふう〜…フェイトちゃん」

「…仕方ないよ、なのは」

なのはとフェイトが離れると…

「じゃあ…あ！足が〜／＼（棒読み）」

ムニユ

「へへっ…恭介〜／＼」

ムニユ

交代で今度は、はやてとヴィータが腕にくっついて来た！！

「てか何でいきなり腕にしがみつくん！？」

「いや〜私は足が滑ってもうて

まだ足は万全やないしな〜」

「わ、私は…その…なんとなくだ！／＼」

なんとなくって…

「「む〜〜〜っ！！」」

案の定、なのはとフェイトとは先程とはちがい頬を膨らませて睨んできた…

つかはやての理由はまだ解るが…ヴィータの「…私はダメなのか？  
恭介え…」うつ…そんな捨てられそうな子猫みたいな目で見ないで  
くれ！！

一体何故こんな展開になったのかと言うと……………

## 回想

数十分前：

「で、何で皆してその姿に？」

さくらのお陰で何とか助かった？僕は何で年齢詐称薬・改を皆が飲  
んだのか尋ねると…

「にははは…こ、この前のヴィータちゃん見て私も大人っぽくな  
りたいかな…って（成長した姿でキヨウスケ君を誘惑するの！！）」

「う、うん…何か憧れちゃって（成長した私なら…うん、胸もヴィ  
ータは勿論なのはやはやてにも勝った！！

こ、これならキヨウスケと…／＼）」

「私らもちよつと背伸びしたくなつたんよ（ヴィータに聞いた話  
しやと、キヨウスケ君は大人Verになるど精神もそっちに引つ張  
られるって話しやったし…誘惑したら…お、大人の關係に…はうつ

「！！／／／」

「わ、私はこの姿…結構気に入ってんだ！（この前はジャマが入っちゃったが…こ、今回は…はやと二人で協力すりゃ…キ、キス位は…／／／）」

…今猛烈に副音声にツッコミ入れたくなったな…

「はあ…別にいいけどさ、何で僕まで？」

「えつと…ホラ、キヨウスケ君の成長した姿がまた見たいかな…ってね？フェイトちゃん？」

「えっ！？う、うん！そうなんだよ」

「しかし…今の神代達は15歳ぐらいなのだろ？間違えたな」

「そういえばシグナムは初めて見るんですけどっけ？キヨウスケ君はこの前はもう少し年齢が上でしたけど…（ボソッ）これはこれで／」

「…シヤマル、顔が赤いがどうかしたか？」

「な！？なな何でもないわよ！？」

「…ならいいが」

「（…シヤマルさん、キヨウスケ君の見る目が…ま、まさか！？）」



「(シャマル…まさか貴女も!?)」

「(まさか…シャマルまでキヨウスケ君狙うとるん…?うん…なのはちゃんやフェイトちゃんに盗られる位なら、シャマルもこっちに取り込んでヴィータと3人掛かりで…手数は多い方がええし…勿論シャマルは3号やけど)」

「(ちっ…シャマルも恭介なのか!?)」

…シャマルの奴、胸は私よかデケーし…高町はともかく、フェイトの胸もかなり…マ、マズイ!!このままじゃ…何とかしねーと!!」

…何か微妙な空気になってるな

あ、ちなみにさっきまで後ろに転がっていたクロノ&ユーノはリンディさんの指示の元、エイミーさんとアルフが引きずっ…ゲフン、治療しています…

「ふう…ダメね。シャマルさん、悪いんですけどこっち手伝ってくれるかしら?」

「あ、はい解りました」

シャマルはリンディさんに呼ばれ治療に参戦しに向かった…  
…シャマルが何故かチラチラこちらを見ていたが?

「ところでキヨウスケ君、お願いがあるんやけど…」

「ん?何はやて?」

「私に泳ぎ方教えて欲しいんやけど…」

あゝ…はやて足を動かせなかったからな

「いいよはやて、元々はリハリビを兼ねて来たんだしね」

「えへへ／＼ありがとキヨウスケ君」

「「「ちよ…ちよつと待つて（なの）！」「」」

フェイトとヴィータとなのはが慌てた感じで叫んだ？

「ど、どうした3人とも？」

僕が尋ねると、3人が一瞬お互いにアイコンタクトをとると

「あの…ね、キヨウスケ…」

「私達にも…その…」

「お、泳ぎ方教えてくんねーか？」

「えっ！？3人も泳げなかったっけ？」

なのはは…まあ運動音痴だから解るが…フェイトやヴィータは抜群  
だと思っが…

「わ、私はその…そう！前になのはのSLB受けて海に墜ちた時に  
…泳ぎが苦手になっちゃって…」

「ふえ！？わ、私のせい！？（フェイトちゃん酷い！）」

「わ、私もだ！コイツの砲撃食らっちゃってその衝撃で泳ぎ方忘れちまったんだ」

「ヴェータちゃん更に酷っ！？」

「…ふむ、そうだったのか…大変だったんだな… よし分かった！フェイトとヴェータにも泳ぎ方教えるよ！！」

「キヨウスケ君も普通に納得しないでよ～～！！」

…だってアノ魔王の砲撃だからな…リアルにありそうだし

「まあ、教えるとして「ねえ！スルーなの！？」も流石に全員は見れないか「ちょ！？ねえ聞いてなの～～！」ら30分交代でいいかな？」

「…は～～い」「」

じゃあ温水プールに向か「か、神代…」どうしたシグナム？」

「いや…流石に高町が哀れでな…」

ま、弄ぶのはこれくらいで

「うっ～～…み、みんながいぢめるの～～…」

「ごめんなのは、冗談だってば」

「……………本当？もう…無視しないでくれる？」

涙目でなのははこちらを見てく…うっ！！一瞬ドキッとしてしまった

「じゃあ…お詫びに1番になのはに教えるから…な？」

「ほ、ホントにホント！？ ありがとうキョウスケ君！！」

ガバツ！

嬉しさの余りなのはは僕に抱き着いて来た！？

ムニユ

うっ…直に胸の感触がっ！！？

ガシッ！！

「…なのは、じゃあ早くイコウカ？」

「…そうだな、泳ぎも私が教えてやるよ！」

「フ、フェイトちゃんヴィータちゃん！？い、痛い！指が肩に食い込んでるよ！？てか、私はキョウスケ君に教えてもら…」

「ほな…逝コウカ…」

ズルズル…

「痛っ！？わ、分かったから引きずらないで〜〜！！？」

そのままなのはフェイト達に引きずられながらプールに向かっていった…

なのは…せめて五体満足でいろよ？

「……で、では神代、私はいつも道理修行に行ってくる」

「今日はどのフィールドに？」

「ふむ…今日は重力フィールドに挑戦しよう」

この別荘、基本の砂漠や雪山やジャングル等のフィールド以外にオリジナルを数個製作したのだ！！

…流石に以前ノリで創った【精神と時の部屋】は…あまりにもアレだったから封鎖したが…

「…重力系はかなりキツイぞ？」

「フツ…望む所だ！！では…」

シグナムは不適に笑い重力フィールドに向かって行った

数分後

「おまたせ〜キョウスケ（君）」

「ああ、なのはにフェイト…あ〜…一応聞くが何があった？」

プールに来たなのはとフェイト、だが…はやてとヴィータが物陰がめっさ凝視してるんですが？

「…皆とO H A N A S H Iして…私とフェイトちゃんが先にキヨウスケ君を襲「な、なのは!？」…キヨウスケ君に泳ぎを教えてもらおうの」

今不穏な単語がなかったか!?

「じゃあ…行こうキヨウスケ」

「あ、ああ…」

回想終了

という訳でまずフェイトとなのはに泳ぎを教えたのだが…何故かその…密着してくるんだよなノノ

で、現在はやてとヴィータに泳ぎを教えている…んだけど…

バシャバシャバシャ

「その調子だよはやて」

僕ははやての手を掴んで…まあバタ足の練習中です

「…プファ!…ハア…ハア…け、結構水泳って…キツイな」

「でも泳ぎ方もよくなってきたぞ？」

「ホンマ！？やっぱ才能あるんかな？」

「はは…じゃあはやては少し休憩して…ところでヴィータ、さっきから何をしているんですか？」

僕がはやての相手をしている時、ヴィータは…

「ん〜？充電中だ／／」

…僕の背後からしがみついているんです…

「ほなヴィータ、交代や」

「ああ、充電完了…っと」

ふう…／／ まだ背中にヴィータの…感触が…／／

ムギユ

「…って！はやて！？お前も何してるん！？」

ヴィータが離れたと思ったら、すぐさまはやてがしがみついて来た！？

「交代やって言ったやろ？…私も充電や えいつ！」

って、しかも抱き着いたまま上下に動く！？

ヤ…ヤバイ！？おもいつつきりはやての双丘の感触が…！？

「恭介！！いくぞ！！」

「な、何／＼？…うおっ！？」

ガバツ！

油断していたらヴィータが前から抱き着いて来て…その…サンドイツチ状態に…／＼

「…ん／＼や、やっぱまだ充電がたりねーな／＼」

『…ククツ、久々のハーレム状態ですなマスター』

そのはやてとヴィータの充電は暫く続き、僕は身動きがとれない…  
というか動いたらやばかった…

勿論、とある方向から刺すような視線があったのは言つまでもない  
よな…

S i d e O u t

おまけ



「…はやてちゃんにヴィータちゃん…やりすぎなの…」

「…そうだね…なのは、アレは無いね…キョウスケもデレデレして…！」

「フェイトちゃん…もう我慢出来ないの…！」

「うん、いくよ…！なのは…！」

「うん…！」

ダツ…！

「キョウスケ君…！私も充電するの…！」

「キョウスケ…！私も…！」

「おわっ…！なのは…！？フェイト…！」

「ちよ…！？二人ともまだ時間やないで…！」

「テメーらさっか散々くつついてたろ…！」

「はやてちゃんやヴィータちゃん程じゃないよ…？というか…そんなに密着なんで…ず、ズルイの…！」

「そうだよ…！わ、私だってキョウスケと…その…もっとくつつきたいよ…！／／」

「ぐっ…た、助けてくれ…！」

その後、キヨウスケの精神的ライフは0を乗り越してオーバーキルを喰らったとか…

つづく…

「な、何！？つづくのか作者！？」

新たな契約者…？

前回までのあらすじ…

ハーレム状態？

「な、なんじゃそりゃー!?!?」

キョウスケSide

「……………」

「キ、キョウスケ君？大丈夫？」

「……………シャル、これが大丈夫に見えるか？」

「……………ごめんなさい」

何とかなのは達の…アレから解放されたが…うう／＼

もう理性を司るライフが0を越えてマイナス振り切ってるよ…  
流石にあれ以上やられてたら…

『手を出してましたか?』

「ブツ!? イイイインフィニティサン!? ナ、ナニヲイツテラッシ  
ヤルノデスカ!？」

ちなみにまだ年齢詐称薬・改の効果はつづいてます

『マスター、動揺しすぎですよ』

お前のせいだろ!？」

「はは…そういえばなのはちゃん達は？」

「なのは達ならさくらの案内で別荘の探検に行ったよ」

さくらが一緒なら…まあ迷子にはならないだろう…多分

「ふぁ…何か眠くなつたな…シャル、悪いけど少し寝るから何か  
あつたら起こしてくれ」

「あ、はい 解りました」

「…じゃあ…(….) ZZZZ」

S i d e O u t

シヤマルS i d e

はやてちゃん達の猛アタック？から脱出したキヨウスケ君は…流石に疲れたのかもう寝ちゃったわ

はやてちゃんもヴィータちゃんも…段々アプローチが凄い事になってるわね〜

それに触発されてか…なのはちゃんもフェイトちゃんも…もう少してキヨウスケ君、脱がされる所だったわね〜…

「……………ZZZ」

そ、それにしても…キヨウスケ君の寝顔…か、かわいい…！／／

…あつ！？そう言えば…今この場には私とキヨウスケ君しか…

「す〜す〜…」

…プールサイドとは言え…床にそのまま寝るのは…ねえ

この前ヴィータちゃんがやった…ひざ枕してみようかしら／／

「…よいしょ…っど」

キ、キヨウスケ君が私の膝に！！／／

「…はう／＼」

…さ、最高です／＼

Side Out

城内

エイミイSide

さっきまでクロノ君とユーノ君の治療…（かなあ？）をしていて、  
シヤマルさんのお陰で二人とも何とか復活したんだけど…

「…しっかし…男の子なのに情けないな／＼二人とも」

なのはちゃんとフェイトちゃんの水着姿みただけなのに…

「「男だからだ（よ）！！」「」

クロノ君とユーノ君が声を合わせて講義してるが…

「あゝはいはい、要するに二人ともムツツリなんだね」

「なっ！？エイミー！！僕をその淫獣と一緒にするな！！」

「なっ！！君なんてムツツリな上にKYじゃないか！！」

二人とも…どっちもどっちだよ…

「ハイハイ！とりあえずクロノ君は仕事しようね」

ユ一ノ君もこの見学するんだよね？」

「…ちっ、勝負はお預けだ！！」

「ふん…」

はあ…二人とも子供なんだから…

「じゃあユ一ノ君にはこれを」

「これは？」

「さくらちゃんから預かった【誰でも解る別荘案内図・今年度下半期版】！…だつてさ」

「そ、そうなんだ…」

「あ、クロノ君の分もあるよ」

ただし！キヨウスケ君も言つてたけど、立入禁止区域にはいかないでつて。それ以外なら施設を適当に使つていいつてさ。解らない事があつたら、さくらちゃんを喚べは来てくれるつて」

「ああ、解った…じゃあ僕はこの図書館に行ってくるよ」

「じゃあ僕は…適当にぶらついてるよ。エイミーさんは？」

「私？私はこの露天風呂に行くよ」

艦長達も先に行ってるし、なのはちゃん達も後で行くって言ったしね…二人とも覗くなよ？」

「なっ／＼！？」

「し、しないよ／＼！！」

おっおっ、二人とも赤くなっちゃって

「人をからかうなエイミー／＼…じゃあ行ってくる！！」

「ぼ、僕も行きますね／＼」

「はっい、いってらっしやっい」

さて、私も行きますか

Side Out



シャルSide

「…………ん」

「…………／／」

キョウスケ君の寝顔って可愛いわね／／

そういえば今この場には誰もいない二人っきり…これは…／／だ、  
誰も見てないし…いいわよね？

「…キョウスケ君…／／」

スッ

「…………ん…／／」

パアアアア！！

Side Out

別荘内、城内

さくらSide

「……ほえ!？」

今感じたのって…まさか仮契約!?

でも、なのはちゃん達はここに居るし…誰と!?

「…さくら?どうしたの?」

「フ、フェイトちゃん!?!ううん!?!何でもないよ!?!」

で、でも…調整中だから本当に仮契約かどうかまだ解らないし…なのはちゃん達にはまだ黙っていた方がいいよね…?

「なあさくら、この部屋は何だ?」

「えっ?ここはキヨウ君のプライベートルームだよ」

「なっ!?!ホントかさくら!?!」

ヴィータちゃんが一気に目の色を変えた…こ、怖いよ…!

「ここがキヨウスケ君の…」

「うん、プライベートルームと言っても別荘に居る時はほとんど研究室に籠っちゃってるんだけどね」

「アハハ…キヨウスケ君は凝り性やからな」

はやてちゃんも心当たりあるのかな？

「…で、さくらちゃん…さっき何かあったの？」

「ん〜何かキョウ君が誰かと仮契約した反応が…あゝっ」

し、しまった〜！！なのはちゃんの誘導尋問に引っ掛かっちゃった！？

「な、なんだって！？おい！さくら！！本当か！！！？」

凄い剣幕で私に掴みかかろうとしているヴィータちゃん…あ、でも…

スカッ

「なっ！！？うおっ！！？」

ガシャアアン！

「…ヴ、ヴィータちゃん…大丈夫？今私の姿CGだから…」

触れないんだよ？

「…つつ…すっかり忘れてた」

「そ、そんな事より本当なの！？キョウスケ君が…仮契約したって…！！？」

「う、うん…正直今の私の状態じゃハッキリは解らないんだけど…

多分」

「でも一体誰が…ハッ!?ま、まさか…」

フェイトちゃんが何かに気付いた様な表情をした

「…可能性があるんはシャルルやな」

「シャルルさん？」

「あのヤロー…私の恭介に…」

「…ヴィータ、キョウスケは私のだよ？」

「んだと!?!」

ほ、ほえええ!?!

フェイトちゃんとヴィータちゃんが一触即発!?!

「…うん、でもまだそう決まってへんのやろ？」

「そ、そうだよね!?!うん、ゼーったい違うよ!!大体、私を差し置いてシャルルさんが先に仮契約なんて…私が先なの!?!」

「…なのはちゃん…欲望がダダ漏れやで？」

「なら…急いでキョウスケの所に行って確認しよう!?!」

「…そーだな まずは確認しねーと…」

冷静になったのかフェイトちゃんとヴィータちゃんが…

「…ついわけで、さくら！！最短距離で恭介の所に案内しろ！！」

「…さくら、急いでね？」

…うう…二人とも怖いよ…

「ほな…いこか…」

「…うんソウダネ…（もしシャマルさんとキスしてたら…O H A  
N A S H Iなの…）」

…なのはちゃんも…もっと怖いよ…

S i d e O u t

キヨウスケS i d e

…ん？何か唇に柔らかい感触が？

「……ん」

しかも何か息苦しい!?

「…ぷはあ!?!? な、なんだ!?!?」

意識を覚醒させ定まる視線の先には…

「…えへ / /」

ほとんど唇が触れ合うそうなくらいの距離でシャマルの顔があった

「えっ!?!? シャマル、何を…?」

「えつと…キヨウスケ君の寝顔が可愛くて…その… / /」

シャマルは照れたように視線を泳がせていたが…僕の視界の端に映った一枚のカード…ってカードお!?!?

「これは…シャマルの…仮契約カード!?!? えっ!?!? まさかシャマル…」

「はい キスしちゃいました / /」

何軽いノリで言ってるんだー!?!?

「な、なな何でさ!?!?」

「キヨウスケ君の寝顔が可愛かったから…こつやっ / /」

「な!?!?…んっ!?!?」

シャマルが…唇を重ねて来て…／／

「……………んんっ／／」

「……………ん……………っん／／」

「ん……………どう？大人のキスは／／」

「……………シ、シャマル…あの…／／」

僕が混乱しているその時…

カラン！

「な、ななななななななっ…！？／／」

僕たちに近付いてきた人影が顔を真っ赤にして驚いていた

「あら、見られちゃった？」

「な…っ！？シャマル！！お、お前！？」

その声の人物は…

「…あゝ…シグナム、とりあえず…お互い落ち着こ…な？」

修行から帰って来たシグナムだった…

Side Out

おまけ

「さくら!!ここさつき通つたる!!」

「ほええええ!?!」

「ま、まさか……さくらちゃん……迷つたん?」

「……ソ、ソシナコトナイヨ?」

「つて、何で片言なの!?!」

「は、早くキヨウスケの所に行かないと……」

「ほええええ!?!」「じ、じいじ……!?!」



…迷っていた…

つづく

バれて拉致られさあ大変!?

前回までのあらすじ…

シャマルとキヨウスケは仮契約をした…

「だから…なんでさ」

キヨウスケSide

「コホン…ではシャマル…お前は神代と…その…ノノキ、もとい！  
仮契約をしたのだな？」

「ええ…だつて〜！キヨウスケ君のあの寝顔見てたらつい」

こんにちは…神代恭介です…

僕とシャマルのキスしている現場をシグナムに目撃され…ただ今シ

グナムに説教されています…つか何で僕まで!?

「……はあ、主やヴィータが知ったら…いや、あの二人は家族の絆を大切にしているから…大丈夫だろうが…」

「はやてちゃんはヴィータちゃんの事を2号って言って許してるし…なら私は3号って事で許してくれるかしら?」

…何か今シヤマルがとんでもない単語を言ったような気がするのは気のせいか!?

「…ま、まあ後は…神代、テスタロッサや高町はどうする?」

「あ…やっぱりそうなるか…」

でもまあ…当面の問題は…なのはだな…

仮契約しているフェイトは…まだ今回の件、理由を話せば何とか許してくれそうだけど…(ヤンデレ化しそうで十分怖いが…)

正直…なのはの方が…まさに魔王だからな…仮契約を迫りながら「…なのー!」とか言いながらオーバーキルで砲撃ぶっ放し続けそうだからな…

いや、別になのはが嫌いって訳でもないんだが…

「…ん〜、どうすっかな〜」

バレたら…O H A N A S H Iだしな〜

そう思案していると

シュン！

「…っと、やっと着いた〜！！」

「始めっからこーして自前の魔法で転移してればよかったな…」

「にゃははは〜」

「すっかり忘れてた…」

「ん…あつ！？居たでキョウスケ君！！」

…噂のなのは達が現れた…どうする？

「シグナムに…シャマル…ま、まさか二人とも！？」

「…つかシャマル…何で恭介の腕にしがみついていた！？」

なのは達が現れた瞬間、シャマルは驚き僕の腕にしがみついたんだが…僕の腕が何かに挟まれた…ノノ

「何って…いきなりヴィータちゃん達が現れたから驚いちゃって」

…シャマル、　じゃ説得力ないぞ…

「じゃあさっさと離れ……なっ！？」

「?どうしたんやヴィータ?」

ヴィータはこちらを見て硬直してるけど...

「.....キヨウスケ君、その手にあるカードは何かな?かな?」

えっ?手にある?そりゃ仮契.....え

「ふ~~~~ん...キヨウスケ、それじゃシャルとキスしたんだね?」

フェイトさん...相変わらず目が怖いっす...

「あ、いや...これは...したというかされたというか...」

うん、僕は悪くない...よな?

「ハア...やっぱりシャルもそうなんか」

はやてはそう言いながらシャルに近付く

「は、はやてちゃん...」

ポン

近付いたはやてはシャルの肩に手を置き...

「シャル...言つとく事があるからよー聞き...な?」

「は、はいっ...」

えっ…こ、これって…八神家崩壊！？ヤ、ヤバイ！？

「……正妻は私やで？そこを忘れんとつたら3号でOKや…！」

…はやてさん…それは色々と人道的問題なくね？

「は、はい！わかりました はやてちゃん…！」

いやいやいや！？そこ…！あきらかに問題発言のオンパレードだから…？

「…ねえはやて…さっきから何言ってるの？ …キョウスケの妻は私だよ？」

フエイトも何かとんでもない事言いながら参戦してるし！？

「…いやだな…二人とも…どうしちゃったの？キョウスケ君は私のだよ？」

さらに魔王…もとい、なのはも緊急参戦！？…そのまま三人は三竦み的な睨み合いを続け…

「…おい、恭介…」

「うわっ！？な、何だヴィータか…脅かすなよ…」

背後からいきなり声かけると驚くんだから…

「……………ちよっと手え出せ…」

「???:なぜ」

「い、いいから出せよ!!!!」

「あ…ああ…」

僕は言われるがままヴィータに右手を出すと…

ガチッ

いきなりヴィータは僕の腕を掴み…

ムニユ

そのまま自分の胸に押し付け…つてええええ!!?

ヴィータ達はまだ年齢詐称薬・改の効果は続いています

「ヴ、ヴィータ!?!な、何を…っん!!?!」

いきなり有無を言わず、ヴィータが唇を重ねてきた!?!?

「……………ん…」

「……………あああああー!!!!?!?!?!」

それを目撃したなのは達が絶叫!!!

「…ぷはあ!?!ちよ…ヴィータ…」

いきなり何を!?

「へへ…／＼この前出来なかったかな／＼（…はやて!?!）」

Side Out

はやてSide

私がないのはちゃん達と睨み合いしとる最中…ヴィータがキョウスケ君にキスしとった!?!…な、何しとるんやっ!?!あんの2号は!?!?  
…ゴ、ゴホン!?!  
と、と思うとると…

「（はやて!?!）」

2号…もとい、ヴィータからの念話が…

「（ヴ、ヴィータ!?な、何しとるん!?!）」

わ、私かて…キョウスケ君とキスは1回しかしてへんのに…しかもアレは微妙な状況やったから…カウントしてええんやるか…

「（このままアイツらと話しても埒があかねー!!恭介連れて転移するぞ!?!場所は…）」

なるほど…キョウスケ君を拉致ってトンズラやな…でも…



「（…分かったで…でもなヴィータ…）」

「（な…何だはやて…？）」

「（いきなりキスはあかんな…後で…ええな？）」

「（う…ご、ごめんはやて…）」

まあ後でヴィータには協力してもらって借りは返してもらおうで

「「ちょっと…！ヴィータ（ちゃん）…！な、何してるの…！？」」

案の定なのはちゃんとフェイトちゃんがヴィータに詰め寄って行くとる…今のうちに…

シュン！

Side Out

キョウスケSide

「「ちょっと…！ヴィータ（ちゃん）…！な、何してるの…！？」」

物凄くダークなオーラを放出しながら二人が近付く…いやホント怖

っ!!

「……恭介… 転移すつぞ(ボソッ)」

へっ!!?今なんて…うわっ!!

シュン!!

別荘中、???室

シュン!!

「…つと、ヴィータ!いきなり転移っ「キョウスケ君!!」て…は  
やて!?!…あれ?この部屋って…」

おもいつきり見覚えがある部屋…って

「僕の…部屋!?!」

「ああ、さっきさくらが案内してくれたからな」

…さくら…人の部屋勝手に観光スポットにすんなよ…

「まあ…とりあえずあの場からは脱出できたから助かったけど」

今のうちに何か対策を…

ムニユ

「…時にはやてサン…君は何をしているのかな？」

「何って…抱き着いとるだけや」

なんだそっか…ぢやなく!!

「は、はやて…ノノ密着されると…その…ノノ」

しつこい様ですが、はやて達はまだ年齢詐称薬・改の効果は続いてます

「さくらちゃんから聞いたで？キョウスケ君は大きな胸が好きやつて…い、言ってくれば私かてノノ」

…さくら、僕の中で君の好感度ガタ落ちだよ

「ち、ちょ…それは…っ！」

「ん〜」

はやては抱き着いたまま目を閉じて顔を近づけてくる！？…なんでさ！？

「…だって、シャルやヴィータはかりズルイやんノノ」

だから心を読まないでくれ…じゃない!!何とかしないと!!  
僕は何とかはやてから離れようとするが

ガチツ!!

へ?...ガチツ?...なっ!?!身動きが!?!?

「ふふっ、ナイスやヴィータ」

ヴィータ!?!ってバインドが!?!

「私だけキスしたってのは...やっぱはやてに悪りーしな...それに...  
うりゃ!?!」

ガシツ!!

そう言うとヴィータは僕の背後からしがみついてきた...当然バイン  
ド中の僕は身動きできないので...

ムニユムニユ

「へへ.../今の私だって、今のはやて位あんだろ?/」

ホントしつこい様ですが、ヴィータ達はまだ年齢詐称薬・改の効  
果は続いています

うっ...た、確かに.../って今はそれ所じゃ...ん!?!?

「.....ん...っ/」

一瞬のスキについて、はやてが唇を重ねてきた

「…ん…んっ！？／＼」

し、しかも舌を絡ませて！？…や、ヤバイ…思考があ…／＼

Side Out

その頃…

フェイトSide

「…ヴィータ、何処に転移したのかな？」

キョウスケに…キ、キスしたのも…ムツとしたけど…

「さくら、ヴィータが何処に行ったかわかる？」

「え…つと…ほえ！？キョウスケ君の部屋に魔力反応が…3つ！？」

…え！？3つ？キョウスケとヴィータと…後は誰！？

「フェイトちゃん!! さっきからはやてちゃんの姿が見えないの!!」

…そういえば…いつの間にかはやてが居なくなっ…!! ま、まさかはやても一緒に!?

「…フフ…はやてったら…また抜け駆けするんだね…」

「フ、フェイトちゃん?」

「フェイトちゃん…こ、恐いの…(ガクガク!!)」

「…なのは、さくら…行くよ…」

「…は、はいっ!!」

この瞬間…金色の魔王が誕生したと一部者は語ったとか…

「(…い、今のテストロッサには近付かん方がいいな…主よ…どうかご無事で)」

シグナムは胸元で十字を切って天に祈ったとか…

Side Out



なのは、ついに動く(笑)

前回までのあらすじ…

はやとキョウスケがキスをした…ていうか真っ最中？

「どっかのアングル族のモちゃんか!？」

キョウスケSide

「……………ん／＼」

「ん……………プファ!？は、はやて…／＼」

はやてと数分唇を交わし、顔を離すと…

「……………キョウスケ君…／＼」



トロンとした瞳で僕を見つめ…／＼

スッ

再びはやてが目を閉じて顔を近付けてきた

…あ…、はやての甘い香りが…

「…はやて」

スッ

甘い香に誘われるように、僕も…はやてに顔を近付け…

と、思っていたら

ボタン…！

「「ちょ、何してるの…！！…？」「」

なのはとフェイトが乱入してきた…！

「な、なのは！？フェイト！？」

二人の乱入で何とか理性を取り戻せた…も、もう少し遅かったら…  
やばかった…って今の状況もかなりヤバッ！？

「…ちっ、もう来よったか…」

…はやてさんが少し黒くなった!?

「もう来やがったか…どさくさで恭介を押し倒そうとしたのによ  
ボソツ」

ヴィータが何かとんでもない事を言っている…ほ、本気であぶなか  
った…

「…はやてちゃん?ヴィータちゃんも…キヨウスケ君から離れよっ  
か?」

「…そうだね、二人とも…キヨウスケが困ってるよ…」

なのはとフェイトが…こ、怖えええ!!

「…フフツ、ええよ…キヨウスケ君とはキス出来たし…ノノ」

な、何爆弾投下してるんですか!?

「っ!?!…ねえ…ホント?キヨウスケ君…」

ひいいい!?!な、なのはが目を単色にして向かってくる!?

「あ…えつと…」

…ヤ、ヤバイ…なのはの目がいつも以上にヤバイ!?

「お、おい!!高町な「ヴィータちゃん…少し離れてくれるかなあ  
?」「ひいいい!!」

ヴィータですら怯むなのは威圧感… …マジで魔王降臨！？て  
かヴィータ！！！逃げる前にバインド解除してくれ！！

ガクガクガクツ！？x2

…は yet は勿論、なのはの後に居たフェイトですら涙目で震えてる  
し…

「ねえ…キヨウスケ君、キヨウスケ君は私の事…嫌いなのかなあ？  
(ニコツ)」

…目を単色にてニコリ微笑んでも…マジで震えが！？…某スー  
ルデズのヒロインみたいに包丁もってないよな？

「い、いや…そんな事はないが…」

う…うん！嘘はいつてないよな？…ただ、魔王化が怖いが…

「そっか…じゃあ問題ないね」

「へっ？…問題って…んっ！？」

突然、柔らかい感触のなのはの唇が僕の唇に触れて…そのまま塞が  
れた

「…………ちゅ…………んっ／＼」

「…んん！？…んくっ！…！」

し、しかも舌を深く入れて！？つか、なのは！？力入れ過ぎ！？

「んんー！！」

パアアアア！！

…そして、勿論カードが現れましたよ…

「……ハッ！？な、なのは！！何してるの！？キヨウスケから離れて！！」

「…そ、そうだ！！テメー離れやがれ！！」

「ハッ！？こ、こうしちやおれへん！！ヴィータ！！いくで！！  
フェイトちゃんも一時休戦や！！」

「う、うん！！」

…その後、なのははフェイト・はやて・ヴィータによって取り押さえられました…

…うう／＼1日で4人とキスって…僕って…鬼畜？orz

『流石マスター！！感服しました！！』

…じいつ…やっぱりマ改造すっか…

夜・城外・テラス

「　　　　　にやは　／＼」

なのはカードを見て超ご機嫌だ…

「……………神代、高町だが…何かあったのか？」

「ああ…シグナム…じ、実は…」

僕の部屋でのドタバタ騒動が一段落？して、城外に戻ってきたんだが…なのは…あれから終始ご機嫌だ…魔王モードよりはマシだけども…

「…はあ、シヤマルに続き高町ともか…」

訳を話すと、ため息つくシグナム…まあそうだよな

「…しかも主やヴィータとも…その…したのか…／＼」

「…うつ…まあ…／＼」

はやてとヴィータはその後、何とか落ち着いてくれたが…フェイトが…

「…私だけしてない私だけしてない私だけしてない私だけしてない

私だけしてない私だけしてない…」

とエンドレスに呟いていた…はぁ、後でフォローしとこ」

あ！ちなみに今、夕食ではやてヤリンディさん、それにエイミィさんが作ってくれているんです

…シヤマルは只今ヴィータとザフィーラが見張ってますよ…相変わらず料理の腕が違う方向に上達しているからな…

「…あれ？そついやKYと淫獣は？」

なんかずつと姿が見てないけど…

「あの二人なら先程さくらが呼びに行ったぞ。何でも二人とも迷子になってさくらが喚ばれたとか…」

…あゝ…一応マップがあつたと思うんだが…重要施設には結界を張つてあるからそこは大丈夫だと思うが…

つか、KYとか淫獣でもう誰か解るんですねシグナムさん…

「まっ、さくらが行つたなら大丈夫か」

そつしているよ…

「お~~~~い！！キョウスケ〜！！」

犬耳…もとい、アルフがこちらに来る…そーいや何してんだ？アイツ

「はぁ…はぁ…探したよキョウスケ！！」

「ん？何かあったか？」

「…フェイトを何とかしておくれよ！！あれからずっと部屋の隅に座ってブツブツ呟いて…痛たまれないよ…」

えっ！？フェイトまだそんな凹みモード中だったんか！？

「…はあ、流石にこのままじゃマズイか…シグナム、ちょっとフェイトの所に行ってくるよ」

これ以上壊れたら…流石にな

「ああ、解った…神代、頼むぞ！！私としてもテストロッサに何かあったら…」

シグナム…やっぱりフェイトの事が心ば「私の対戦相手が減ってしまったからな！！」…ハア…でしょうね…シグナムの場合は…相変わらぬバトルマニアめ…

### 別荘内・客間

コンコン…ガチャ

「フェイト…居るか…入るぞ…って部屋暗っ！？」

「私だけしてない私だけして……えっ？キ、キョウスケ？」

暗闇でフェイトの声が……つかまだ変な呪詛唱えてたんかい！？  
えっと……明かりは……と

パチッ

「フェイト、大丈夫か？」

まあ色々な意味で……

「キョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケ  
ケキョウスケキョウスケ……」

……めっさ怖いんですが……フェイトの目も明らかに異常だし……とりあ  
えず……

「フェイト……目え食いしばれーえ！！！」

バシッ！！

フェイトの頭を叩いてみた

「！？……い、痛い……ハッ……！？キ、キョウスケ？わ、私……今まで何  
を！？」

とりあえずフェイトは元に戻ったが……叩けば治るんかい！！



「落ち着いた？」

「うん…ごめんね、心配かけて」

「とりあえずこれから夕飯だけど…」

グウウウ…

「…食べにいこうか？」

「あうう…／＼」

何の音だったかは、本人の名誉の為にシッシシはやめとじじ…

「…あ、あの…キョウスケ…」

「ん？どうした？」

さっきの音は皆には秘密にしとくが？

「…キョウスケは…その…な、なのはの事…す、好きなの？」

……………え…？

「えっと…何でいきなりそんな話しに？」

「だって…さっきなのは事…嫌いじゃないって…」

……ああ、アレか

「まあ、好きだよ」

「そ…そうなん…だ」

「…それに、はやてやヴィータそれにシグナムにシヤマル…さくらやリイ…ゲフン、…勿論フェイトの事も好きだよ」

「…えっ…み、みんな…なの？」

「ああ、みんな僕にとっては大切な人達だしね…あれ？可笑しかったかな？」

「う、ううん！…そんな事ないよ！！（そっか…じゃあキョウスケは、なのはの事が特別好きって訳じゃないんだ…だったら…／＼）ね、ねえ…キョウスケ、お願いがあるんだけど…／＼」

「えっ？まあ、出来る事なら…」

何かフェイトが顔を赤くしてジモジしてるが…

「あ、あの…わわわわわわ…イタッ!？」

…おもいっきり舌噛んだな…

「プッ…」

「キ、キョウスケ!? 笑うなんてヒドイよ」

思わず吹き出してしまった

「ゴメンゴメン! つい…」

「む〜〜〜〜っ／＼」

顔を赤らめて、頬を膨らませてるフェイト…怒っているんだろうが、可愛く見えてしまうな

「で、お願いはいいの?」

「あっ!! …えっと…あのね、キョウスケ…今度私と…お出かけ…してほしいんだけど…ダ、ダメかな?」

お出かけ? …ああ、買い物荷物持ちか何かを頼みたいのかな?

「分かった、別にいいよ」

「ホ、ホントに!? よかった…断れたらどうしようかと…(で、でもこれで…キョウスケとデートの約束が出来た…／＼)」

フェイトは思いっきり安堵しているが…大袈裟だな  
荷物持ち位は引き受けるのに

『…何でしょう…物凄くマスターとフェイト嬢の意見に行き違いを感じるの…?』

「で、フェイト 買い物っていつ行くの？」

「あっ、うん…キョウスケの都合のいい日がいいよ」

「そう？じゃあ都合が付いたら連絡するよ」

「…うん／＼」

フェイト…凄く嬉しそうだな

「じゃあ…とりあえず行こうか。皆お腹空かせて待ってるしね」

「ふふっ、そうだねキョウスケ」

「さて…今日の夕飯は、な〜にかな〜…あれ？」

「どうしたの？キョウスケ？」

「あ、いや…何か忘れてるような…？」

まあ思い出さないって事は大した事はないかな？

Side Out

おまけ

「ねえさくら…また行き止まりだよ？」

「…そ、そうみたいだね…」

「…さくら、まさかとは思つが…」

「ち、ちがうもん！！迷つてなんかいないもん！！」

「「（ま、迷つたな…）」」

…また迷っていた

1度あることは2度目もある!!

別荘内・オープンテラス

「いただきます」×多数

こんばんは 神代恭介です

僕たちは今、はやて達が作ってくれた夕飯【カレーライス】を食べ  
てます

「さすがはやて！ギガうまだな!!」

「うん…美味しいよ、はやて」

「さすが主です!!」

「はやてちゃん、お料理上手なの…」

「あはは ありがとな〜みんな

でも、今日のは私だけやなくて、リンディさんやエイミィさんの  
合作やからな〜」

「でもはやてさん、ホントに料理上手ね。いいお嫁さんになるわよ?…よかったわね。キョウスケ君。」

「ぶっ!?!な、何言っているんです!?!リンディさん!?!子供相手に言う台詞じゃないですよ?。」

まったく…このオバハンは

ピクッ

「ん?どうしたの?なのはちゃん?フェイトちゃん?。」

「ヴィータもどうしたのだ?急に手を停めて…。」

「「「……………いえ、な、何でも…」「」」

急にテンション下がったな?…別にカレーの味には問題ないし…?辛口だったか?

ちなみに隅っこの席で、何故かシャマルが泣きながらカレーを食べていたが…うんスルーだ!

「(うう)…はやてちゃん…お料理上手なの…わ、私も頑張らないとなの!…!」

「(キョウスケに私の手料理…食べてほしいな…/ /)」

「(うう)…どうしよう…私は料理はあんま得意じゃねーし…この前の弁当も苦勞したしな…本格的にはやてに習うか?」

…？何か微妙な空気が…？

「ところでキョウスケ君、今日私達が寝る部屋ってどこかな？」

あ、そーいや別荘に着いた早々更衣室に向かったからな…部屋に案内はしてなかったな

「大丈夫ですよエイミィさん、全員に【個室】が用意されてますから？」

ピクッ

…な、なんだ？今一瞬、妙な邪念を多数感じたが…？

「へへ 個室かへ ねえキョウスケ君、みんなの部屋って場所は近いの？」

「えっ？まあ同じ階ですから近いですよ。僕の部屋がある階の住居フロアなんですよ

ああ、もちろん談話室とかもありますから」

エイミィさん…皆とパジャマパーティー的な気分でガールズトークでもしたいのかな？

…と、この時の僕は思っていたが…まさか後に…あんな事になるとは…



あ、そういや…さくら…クロノ達を迎えに行ったままで戻って来てないな…？

夜 キヨウスケ部屋

夕食後、皆を部屋に案内して僕は自分の部屋でのんびりと読書中です

「…んゝ そろそろ寝るかな」

コンコン

ん？誰か来たみたいだな…

「どうぞ、鍵は開いてるよ」

ガチャ

「……お邪魔します」「……」

部屋に入って来たのは…

なのは・フェイト・はやて・ヴィータだった

あ、ちなみに年齢詐称薬・改の効果はなくなってるので

「やあ どうしたの？皆して？」

昼間あんな騒ぎの後、4人揃って行動つても凄いな…

「もちろん夜這いに来たんや！！」

……………あれ？

「あゝ…………悪いはやて、どうやら疲れて幻聴が聞こえたみたいで…  
何と言ったのかな？」

「せやから！皆で夜這いに来た言つとるんや！！」

何か更に変な単語増えてね！？

「は、はやてちゃん…／／」

「さ、さすがにそんな…ストレートに言うのは／／」

「別にいいじゃねーか！事実なんだしよ！」

…つかソコの3人！否定しないんすか！？

「ホンマは私とヴィータだけでキョウスケ君の部屋に忍び込も思っ  
たんやけどなゝ…運悪くなのはちゃんとフェイトちゃんに見つかっ  
てもうてな…」

「はやてちゃん！だからそーゆー抜け駆けはダメなのゝ！！」

「…なのは？確かなのはも自分の部屋コッソリ抜け出す所だったよね？…どこに行こうとしてたのかな？」

「ふえ！？…フェイトちゃん…見てたの？」

皆、同じ事を考えてたって事ね…

「…色々とツツコミ所満載だが…何がしたいんでしょう？」

「「「「一緒に寝たい（の）（んや）（な）（だよ）！！」「」「」

……………なんでさ？

「折角のお泊り会なんやし…そーゆーイベントは必須や」

…お泊り会って…まあ確かに似たような物だけどさ…

「キョウスケ君…ダメなの？…グスッ」

「キョウスケ…グスッ」

うつ……なのはとフェイトが涙目でこちらに訴えかけて…っ！

「…はあ、なら僕はソファで寝るから皆はベットで…」「いややな、キョウスケ君も同じベットで寝るんや」って！？」

…………だからなんでさ！？

「そっだよ…私、一緒にキョウスケ君と寝たいの／＼」

「わ、私も…一緒がいいかな…／＼」

「なあ、いいだろ、恭介くえ」

何この4対1みたいな不利な状況!?

『ちなみにマスター、5対1ですよ 私も一緒に寝る事を推奨します』

「はっ!?!なんでだインフイニティ!?!」

『面白いからです!?!』

うわっ…コイツ言い切ったよ… てか僕に味方なし!?!?

「…はあ、分かったよ…」

「「「「「やったー!?!」「」」」」」

…どうせ拒否権なんて…ないんだろっな、仕方ない、腹括るか…

「…ええか皆?恨みつこナシの一回勝負や!?!」

「うん…でも負けないよ！」

「私だって負けねーからなー!!」

「それじゃ…いくよ！」

…ただ今はやて・フェイト・ヴィータ・なのはが一触即発の状態です…

まあ…原因は【誰が僕の隣で寝るか】という事なんだが…  
まあ、唯一の救いは…

「……最初はグー!!!!!!」

…勝負方法が平和的なジャンケンでって事だな  
…バトルロイヤルとかだったら…別荘半壊しそうだし

「……じゃーんけーん……ポイ!!」

「じゃあ、明かり消すから」

「うん / /」

「キヨウスケ君、温いな / /」

結果…なのは・フェイト・僕・はやて・ヴィータ という位置になりました

「…な、なんてあそこでゲーを…」

「…くっ…はやてはいいとして…フェイトかよ…」

なのはとヴィータは悔しがってました

しかし、両隣にフェイトと…はやてか…うっ、はやてとの昼間のキスの事思い出すと… / /  
何か変に意識するな…あ、そっだ!!

「…インフィニティ、マテリア【ふうじる】セット、【スリプル】」

…ピカッ

僕は自分自身に魔法を掛けた

これで…前みたいに…ゆっくり眠れ………ZZZZ

…後にこれが過ちとなったのだが…

Side Out

はやてSide

ん？今何か光ったんは何や？

「……すゝすゝ……ZZZ」

「……キヨウスケ君、もう寝てもうたん？」

「……キヨウスケ？」

「すう……ん……」

フェイトちゃんもキヨウスケ君に話しかけてるみたいやけど……寝るの早っ！？

『皆さん、マスターは睡眠魔法を使って寝てしまいました……まったくへたレなマスターです』

なら、さっきの光はキヨウスケ君の魔法？……ちゅうか、インフィニティ辛口やな〜

「なっ……魔法で寝ちまったのか？この前と同じだな」

……この前？

「…ヴィータ？この前って何や？」

私はキヨウスケ君の寝顔を眺めながら、ヴィータに背中を向けたまま…振り返らずに尋ねてみると

「あ…いや…そのお…アハハ」

「…ヴィータちゃん？O H A N A S H Iを聞かせてくれるかな？」

「…まさか、キヨウスケに何かしたんじゃ？」

なのはちゃんもフェイトちゃんも当然ヴィータの発言は気になったようや

「お、おやすみ！…」

・ガバツ！

「ちょ…ヴィータ!？」

「すすす…むにゃむにゃ」

…はあ、まあええ…明日じっくり聞かせてもらってから覚悟せいな？

「じゃあ…なのはちゃん、フェイトちゃん…おやすみ…」

私も今日は…疲れてもうたしな

ふふっ、でも今日はキヨウスケ君に抱き着きながら寝れるんや…最



高や／＼

「……ん」

あ、キョウスケ君が寝返りうつってフェイトちゃんの方を向いてもうた……

・ガサゴソ……

ん……？何やきぬ擦れの音？

「……………ね？」

この声は……フェイトちゃん？

「……………ん／＼」

・チュツ

……ま、まどか……

「ちょー！？フェイトちゃん！？何してゐるん！……？」

Side Out

フェイトSide

『皆さん、マスターは睡眠魔法を使って寝てしまいました…まったくヘタレなマスターです』

キヨウスケが自分の魔法で眠った事をインフィニティが教えてくれた…もっとキヨウスケとお話（あ、もちろん普通のです）したかったな…

「なっ…魔法で寝ちまったのか？この前と同じだな」

この前って…？

「…ヴィータ？この前って何や？」

はやてがヴィータを問い詰めてるけど…ま、まさかヴィータ、前にキヨウスケと一緒に寝た事あるの！？

「あ…いや…そのお…アハハ」

ヴィータは笑ってごまかしてるけど…

「…ヴィータちゃん？O H A N A S H Iを聞かせてくれるかな？」

うん…私も聞きたいかな…

…ハッ！？ちよっと待って！！もし前に一緒に寝たとしてヴィータは【前と同じ】って言ったよね？

魔法で眠っちゃったキヨウスケ…無抵抗…ま、まさか！？

「…まさか、キヨウスケに何かしたんじゃない？」

無抵抗なのをいい事に…変な事してないよねヴィータ？

「お、おやすみ！…」

・ガバツ！

「ちょ…ヴィータ!？」

「す〜す〜…むにゃむにゃ」

ヴィータは逃げるように眠っちゃった…フツツ…ヴィータ、明日じつくり聞かせてもらおうからね？

「じゃあ…なのはちゃん、フェイトちゃん…おやすみ…」

はやても特に追求せずに寝ちゃうみたい…あ、はやて…キョウスケに抱き着いて…わ、私だつて…

「……………」

抱き着こうとしたら…キョウスケが寝返りをうって…わわわ私の目の前にキキキョウスケの顔が…

…今日だけで、シャマルやはやて・ヴィータやなのはとも…その…したんだし…

・ガサゴソ…

皆に気付かれないようにキョウスケの顔に近付けて…

「私だけしてないし…いいよね？／／」

・チュッ

「……ん／／」

…何か久しぶりの…キョウスケとのキス…／／

「ちょ！？フェイトちゃん！？何しとるん！？」

……あ、はやくにはねちゃった…かな？

S i d e O u t

暴走する愛情!?

みなさん、こんにちは フェイト・テストロッサです

えっと…キョウスケなんですが、今寝ちゃっているの…今回は私  
があらすじをお伝えますね…

えっと…前回わ、私は…キョウスケと…その…キスを…あうう／／

・ボンッ

「きゅうううう…／／」

・ボタン

『あゝ…フェイト嬢はオーバーヒートてしまいましたね  
まあ…つづきをどうぞ』

はやてSide

「ちょ！？フェイトちゃん！？何しとるん！？」

キヨウスケ君がフェイトちゃんの方に寝返りをうつたと思うとつたら  
…あの金髪は私のキヨウスケ君の唇奪いよつた！！！！

ま、まあ…フェイトちゃんは既に仮契約しとるから…初めてちゆう  
事じゃないんやろっけど…

「はやてえ、どーしたんだ？」

「フェイトちゃんがどうしたの？はやてちゃん？」

ヴィータとなのはちゃんも私の声で起きたようや…

で、只今説明中

「…フェイトちゃん…また抜け駆けなの？」

「だ、だって…今日は皆ともキヨウスケとキスしたのに私だけ…し  
てなかったから…」

あゝ…言われてみれば…今日はシャマル・ヴィータ・私・なのはち  
ゃん…4連続でキスやったしな…まあ気持ちは解るでフェイトちゃん

「…しかし、こんだけ騒いでもホントに起きねーな、恭介は……な、

なあ…はやて／＼」

「ん？どないしたヴィータ？」

ヴィータはキヨウスケ君の頬を指で突きながら…キヨウスケ君の頬  
つてやわらかそーやな／＼

「…今の恭介に…何しても大丈夫なんじゃねーか？／＼」

「「「……………」」」

い、いわれてみれば…最近はキヨウスケ君なかなか一緒に寝てくれ  
へんし…

こ、こんなチャンスもう滅多にないかも…

「いただきま〜す／＼」

「つて！ちょい待ち！！なのはちゃん！？」

人が考えて事をしとる時に…この魔王は〜

「…もう、何？はやてちゃん？せつかくのチャンスなのに…後、  
何か失礼な事考えてなかつた？」

そ、それは気のせいや！なのはちゃん…

「コホン…ええか、なのはちゃん…キヨウスケ君を襲いたいんはみ  
んな同じや！！でもな…今みたいに抜け駆けしようとしてみ？残り  
の3人が確実にジヤマするやろ？」

「ここは確実性を優先せな…このチャンスを有効利用せなな…

「はやて？どついつ事？」

「それなんやけど…皆、ここは一つ停戦協定を結ばへんか？」

「「「停戦…協定？？」」「」」

「そや、まあ早い話し…4人掛かりでキヨウスケ君に色んな事を…  
／／」

それなら…まあ一人に抜け駆けされるよりはマシやしな

「…は、はやてちゃん…何か大人なの／／」

「…う、うん…でもそれなら…キヨウスケと…／／」

「…じ、じゃあ…先ずは恭介の服を…／／」

フッフッフ…今夜は寝かせへんで〜キヨウスケ君？

Side Out

早朝



キョウスケSide

…ん…朝か…

「…ん…ふあああ…痛ッ!？」

何か腕の感覚が!？痺れたか？  
しかも何か…身動きがとれない…？

「…痺れた…かあ!？」

な…なんだ!？

「すー…すー…むにやむにや…」

「…ん…くう…」

「…す…す…」

「…ぐへへへっ…」

…あ…なにこの状況!？

なのは達が僕の両腕を枕代わりにして寝てるし…ご丁寧に右腕にな  
のは・フェイト、左腕にはやて・ヴィータ…こりや痺れる訳だわ…

さて…このままって訳にもいかないし…起きよ…

僕は、なのは達を起こさない様に注意して布団から出るが…

バサッ

………寒ッ!?

おかしいな? 別荘内は気温は適温に設定されてるんだが…

…だが、その理由はすぐに分かりました…

「……あれ? パジャマ…何で着てない…なっ!?! なんじゃこりゃー  
——!?!?!?」

早朝1番、別荘内に僕の悲鳴が響き渡った……

「あ、お早うキヨウスケ君」

「キヨウスケ…おはよ」

「おはようさん〜キヨウスケ君」

「オハヨ恭介…ねみい…ふああ……」

僕の叫びで目をさましたなのは達…

「ああ、皆おは…じゃなくて…！何なんだよコレは…！？」

僕は自分の身体のおちこちに着いている【キスマーク】を指さして  
なのは達に問いただと…

「えっ？あ、それはね〜にやはは／／」

「私らの愛の証や」

…いやまあ…こーゆーのはそーゆーカテゴリーに入ると思っけど…

「…はあ、まったくいつもの事とはいえ…」

「気にしたら負けや…それにキョウスケ君、なんだかんだで段々と抵抗がなくなってきたとるで〜」

…このままスキンシップを続けとったら…堕ちるのも時間の問題や  
な（ボソッ）」

うっ…確かに最近…状況に流される事があるような…

「ゲフン…し、しかしパジャマ脱がしたままって…よく僕は風邪引  
かなかったな〜」

上半身だけとはいえ裸で寝てたのに…

「えっと…キョウスケが風邪引かないように…皆で抱き着いてたか

ら／／

「へへっ／／私らも恭介の温もりで風邪ひかなかったかな／／」

「温もりで…ってヴィータ達はパジャマ着てたんだから大丈夫「私らもパジャマ着てへんよ？」…なん…だと!？」

はやてがトンデモ発言を!？」

よく見たら…ベットの周りに散乱している皆のパジャマ（上半身）  
…ナニコレ？

「…ミナサン…マサカ服キテナイノデスカ？」

言われてみれば…4人ともシーツを身体に纏ったままだし…

「なんや？中見たいんか？…私は別にええよ／／」

「わ、私だつて…キヨウスケになら…あうう／／」

はやて、フェイトさん…もう少し恥じらいを持とうよ…

「何ならキヨウスケ君もキスマーク…付けてもいいよ？／／」

「まで!!高町なのは!!それは私が先だかな!!／／」

なのはとヴィータはそれに加え、羞恥心という言葉覚えようね…

…はあ、4人が何やら言っているが…このままこの場所に居たら…  
シヤレにならん事が起きそうだ…

とりあえず逃げ…ゲフン、顔洗いにいこ…

Side Out

はやてSide

「ヴィータ、勿論私が先やで？」

正妻や先なんは当たり前やしな…ま、安心しいヴィータ。ちゃんと順番は守るで〜

「はやて…昨日言っていた停戦協定を破るの？抜け駆けは無しだよ？」

「フッフッフ…甘いでフェイトちゃん！！砂糖に練乳かけて食べる位に甘々やで！！停戦協定は朝までや！！こっからは早い者勝ちや！！」

「え〜〜！！ズルイはやてちゃん！！」

「これが世界の真理や！！いくでヴィータ！！」

「ああ！！恭介にキスマーク付けてもらうんは私達だよなっ！！はやて！！」

「もちろんや！！ヴィータ！！」

「とうかが、いつの間にかキョウスケが居ないよ!!?」

「ホ、ホント!? フェイトちゃん!!?」

なんやて!?! これからって時に!?!?

「ど、どこや!?! 何処に行ったん!?! キョウスケ君!?!」

「キョウスケ君…乙女に恥をかかせないでほしいの…!」

「恭介…私が1番に見つけてやんかな!そ、そんなもって…!」

「キョウスケ…逃がさないよ?フツ…!」

皆、考えとる事は同じやな。でも、負けへんで!!

S i d e O u t

キョウスケ S i d e

ゾクッ!

「な…なんだ？今寒気が！？」

『なのは嬢達が何か企んでいるのではないですか？』

「まさか…こんな朝っぱらから…」

…十二分にありえるな…

「あ、おっはよ…キヨウスケ君！」

と不吉な事を考えていたら…あれはエイミーさん

「あ、おはようございます エイミーさん」

「ん…ああつ！？キヨウスケ君…とうとう大人の階段を／＼」

…？大人の階段？…あ、ヤバッ！！キスマークか！？

「や、これは…ちがうですよ！？ 僕が寝ている間になのは達が勝手に…」

「ええっ！？なのはちゃん【達】！？

そんな…複数でなんて…キヨウスケ君のエツチ！！／／」

てか、話し聞けよ！耳年増！！

「…キヨウスケ君、今と…っても失礼な事考えてなかった？」

…この人も心読めるんかい！！

「考えてません！てか話しを聞いて下さいよ！！」

この後、事情説明にかなりの時間を費やす事となった…

そう…致命的なタイムロスを…

「見つけたでー！！」

「よっしゃ！！バインドオ！！」

ガチイ！！

「…はいいい！？」

いきなりヴィータからのバインドで捕獲されてしまった…

「いくでヴィータ！！なのはちゃんやフェイトちゃんに見つかる前に！！」

「ああ！！何か知らねーがアイツらが足止め食らってる今しかチャンスはねーしな！！」

「ほな…行こか？キョウスケ君？ 大丈夫や 別に痛くないんやし…ただ、らぶらぶちゅっちゅとキスマーク付けてくれるだけでええんやで？／／」

そ、それがマズイんだろー！！



「ほな体育倉庫へGO!や」

そして、そんな施設ないし!!

「なに、ただのノリや」

だから何で心が読めるんだ!?

「さ、いくぞ恭介… あ…そ、その…痛くしないでくれよな…//」  
頬を赤らめ可愛い…って!じゃなくて!!

「あ、私は…く、首筋に…頼むな//」

「グイータは大胆やな」 じゃあ…私も…まずは…//」

まずはって何さ!?!他にもあるんかい!!

そして僕はそのまま個室に連れ去られてしまった…

エイミーさん…笑ってないで助けて下さいよ!!

S i d e O u t

おまけ

その少し前…

「フェイトちゃん！！はやてちゃん達が先に行っちゃったよ！！？」

「うん…ヴィータが足を引っかけなければ…」

「急ごうフェイトちゃん！！まだ間に合うよ！！！」

タッタッタツ…

二人が通路を走っていると…

ドン！！

「きゃ！？」

「なのは！？大丈夫！？」

「…痛たた…う、うん大丈夫だよフェイトちゃん…」

なのはのぶっかった人物…それは…

「ってクロノ！？？」

「ゆ、ユーノ君も！？ど、どうしたの！！？」

「…なのは…フェイト…」

「た、助かった…遭難するかと思ったよ…」

ボタン×2

そう言いながら二人はなのはとフェイトにもたれかかった…

「ちょ!?!ちよっと!?!ユーノ君!!私、急いでるから…」

「ク、クロノも!?!は、早くしないと…キヨウスケが…」

という具合に足止めを食らっていました…

「お…お腹すいた…」

ブチッ

「…ユーノ君…私、物凄く急いでいるから…どいてくれるかな…?」

そう言いながら…なのはの手にはレイジングハートが…

「…クロノも…ジャマ…しないでくれる?…だからKYなんだよ?」

フェイトの手にもバルデッシュが握られ…

ドコーーーーーン!!!

「…もう！二人ともいきなりなくなるんだから！案内はちゃんとわた…し…が」

二人を探していたさくらが駆け付けた時には…

…黒焦げになった通路と…消し炭と化した物体が2つ転がっていた…

「ほ、ほえええええ！？」

キスマークパニック!!

別荘・個室

キヨウスケSide

はやてとヴィータに拉致られ…

「さ、キヨウスケ君 ここならジャマは入らへんから…／＼」

そう言いながらはやては、その白い首筋をこちらに露出して…って  
!!

「はやて!?!さ…さすがにそれは…マズインじゃ…」

何とかはやてを説得しようとするが…

「今更やな〜 キヨウスケ君、あんなだけぎょうさんキスしまくった  
んや…ちよちよつとキスマーク付ける位問題あらへんよ〜」

う……そ、それを言われると…

「…まったく返す言葉もございません…orz」

昨日だけで4人とキスしたし…

フェイトの事は寝ている時だった為、気付いていません

「それとも…胸に付けてくれてもええ」「く、首筋にします!」「そ  
か」じゃあヴィータもそれでええか？」

「う、うん…いいよはやて…キ、恭介…ノノ」

ヴィータは熱っぽい視線を送ってくるし…

ああ…段々と引き返せない所に足を踏み入れていくような…

### 別荘・キッチン

…はやてとヴィータから何とか解放され、朝食を作る為キッチンに  
向かうと…

「あら、おはようキヨウスケ君。エイミィから聞いたわよう大人の  
か」「おはようございます、そしてそのネタもついいですから!リン  
ディさん!」「あら、そう?面白いのに」

朝食を作っていたリンディさんが居た

…てか、そーゆー話は自分の息子さんでして下さい！

「…ってそういえばクロノ達…昨日の夕飯の時も見てませんが…」  
夕飯食べていなかったよな？

「あら、そーいえばそうね？まあ大丈夫でしょ、1日位食べなくても」

…まあ一応あれでも執務官なんだし…下手な事はない…よな？  
後でさくらに聞いてみるか

…そーいやさくらも昨日から見えないけど…？

「あ！キヨウスケ君、もうすぐ朝食ができますからその食器運んでくれるかしら？」

「あ、はい わかりました」

僕はリンディさんが作ってくれた料理を外のカフェテラスに運び…

「あー！…キヨウスケ君！！見つけたのー！！」

「キヨウスケ！！はやくに変な事されなかった！！？ま、まだ清い体！！？」

なのはとフェイトが現れた…フェイトは若干暴走気味だが…

「ふ〜ん…それでキヨウスケ君、はやてちゃんとヴィータちゃんにしたんだ〜（ニコツ）」

「キヨウスケ…はやてやヴィータばかり相手にしなくても…」

結果…只今なのはとフェイトに尋問されてます…

…二人とも目がとても素敵なハイライトで怖いんですが…

「あ、キヨウスケ君〜!!」

「恭介ー!!…って、オメーら、恭介に何やってんだ!!」

そこにはやてとヴィータがやってきた!!…もう誰でもいいから助けてくれ…

「ヴィータちゃん…ツ!?そ、その首の跡は…もしかして!?!」

「はやて…そ、その首にあるのは…やつぱり…キヨウスケに?」

なのはとフェイトは二人の首筋にある赤い跡を指差しながら聞いた  
だした…

「えっ?いや〜バレてもうたか〜。キヨウスケ君、激しくてな〜ノ  
」



う　をををい！！はやてさん！！何言ってるんですか！！？

「フフン！どーだ！！いいだろ！！恭介からの愛のこもった証だぜ／＼」

ヴィータも…もう少し自重してくれると助かるんですが…

「ううう…こ、こうなったら…キョウスケ君！！私にもキスマークブリーズなのー！！」

「あ、なのは！！ずるいよ！！キョウスケ！！わ、私も付けてほしいな…／＼」

「ちょ！？落ち着け二人とも！！」

「落ち着いてなんていられないの！！はやてちゃんやヴィータちゃんばかりズルイの！！」

「そつだよキョウスケ！！はやて達だけなんて…不公平だよ！！」

いや…そーゆー問題か？

「そーゆー問題だよなのー！！」

だから地の文にツッコムなよ…

朝食後

「ご馳走様でした」×多数

朝食を食べ終わり、僕たちは帰りの支度をしています…と言っても、外の時間は1時間しか経ってないが…

え？あの後どうなったかって…？

うっ…し、仕方ないじゃんか！！あのままじゃ收拾つかなかったんだし…／＼

『その割にはキッチリ綺麗にお二人にキスマーク付けてましたけどね？マスター』

……はいorz

…結果としては4人ともとても上機嫌…というか…アレは…と顔を引き攣らせながら考えていると…

「キヨウ君…！！」

ん？あの声は…さくら！？

「キヨウ君…、やっと見つけた…！！」

「さくら！今までどうしてたんだ？」

昨日から全く姿が見えなかったが…

「えっと…ちよつと医務室の施設を使つて…と、ところでキヨウ君…なのはちゃん達…何があったの？」

あ…やつぱり気付いたか…

なのは達の今の状態…

「…「えへ…えへえへえええ／＼」」」

…鏡を見ながら首を見て笑っているという…見事な壊れっぷりをしているんですよ…

とりあえず今のなのは達に関わるのは恐すぎるからスルーしとこ…

「ゴホン…と、ところで医務室って何かあったのか？」

「えつとね…クロノ君とユーノ君が消し炭になって倒れてたから…何とか治療してたんだよ…」

…は？何？消し炭って…

「…なのはちゃんとフェイトちゃんの残留魔力が残ってたけど…」

「あ…それは…何というか…」

悪魔砲喰らった訳か…二人とも、迷わず成仏してくれ…

「き、キヨウ君…まだ生きてるよ…一応」

…一応なんだね…

「…とりあえず帰りの支度しよ…」

さくら、悪いけど…なのは達を再起動しておいて」

「う、うん…でもなのはちゃん達…大丈夫かな？」

「……………多分」

「あはは〜……………」

#### 出入口魔法陣付近

そして、なのは達も無事にさくらのおかげで再起動に成功？して、別荘から出る為に入出口の魔法陣の所にいるのですが…

「クロノ…生きてたのか…」

「勝手に殺すな！！というか開口1番それか！？」

「いや〜無事でよかったな〜」

「…何か大元の原因はキミって聞いたけど…」

「ま、まあユーノ…そこは気にしたら負けだ！」

僕は…悪くないよな？多分…

「まったく…まあいい、それでキョウスケ さっきの話したが…」

「ん？ああ、クロノとユーノ・エイミーさんがここに残るって話しだろ？別にいいぞ？僕たちは外に出たら数時間後に再会って感覚だからな ただ…」

「ああ、分かっている 立入禁止区域には入らないさ」

「そうしてくれ」

さくら、3人の身の回りの世話を「い、いや！！それはもう遠慮する！！」「…って、どうした2人とも？」

2人は顔を真っ青にしているけど…？

「そうだよ〜クロノ君！ユーノ君！さくらちゃんがせっかく手伝ってくれるっていつのにさ〜 ね〜 さくらちゃん？」

「あ、はい！私頑張ります！！」

「んん〜 さくらちゃん！！なんていい子なの〜！！可愛いし〜  
…2人とも！！こんな可愛いさくらちゃんに何の不満があるの！？」

エイミーさんは、さくらに萌え萌えだった…

「いや…それは…」

クロノは何か言いたげだったが

「…クロノ、エイミイさんもいるし…大丈夫だよ きっと…」

「…あ、ああ…そうだな」

「コーノに説得され納得したようだ…つかウチのさくらに何か文句あるんかい!?!?」

「キヨウスケ君もさくらちゃんに甘々だね」

「…エイミイさん、あなたも地の文にツツコムんですね…」

「…ハッ!? 殺気!?!?」

「僕の背後からえぐるような視線が…」

「」「」「む————(怒)」「」「」

「…な、なんかめちゃくちゃ睨まれてるんですが…何かした？」

「…キヨウスケ君、まだ年末年始の準備終わつたらんし…早よう帰つて準備せんとな…?」

「…はやてさん、目が笑ってませんよ？」

「恭へ介え〜!?! 罰として、この後の買い出しに付き合えよな!?!」

「罰って何さ!?!?」

「あつ!?! ヴィータずるいよ!?!?」

「ズルくねーよ！！恭介は家族なんだし！！」

「うっ…そ、それは…」

「じゃあキヨウスケ君は…買い物後にウチに来てなの シューク  
リームご馳走するの！！…あ、ヴィータちゃんは先に帰っていいよ  
？」

「んだと！？テメー恭介に何する気だ！？」

「えっ！？ただお父さんとお母さんに【正式に】挨拶してほしいか  
な〜って / /」

…何で【正式に】を強調するんですか？

「その点フェイトさんは、義理の母になる私にキヨウスケ君を紹介  
しているから1歩リードね〜」

…今サラッと大事な事言わなかったか？

「ふえ！？リンデイさんがフェイトちゃんのお母さん？」

「ええ、フェイトさんにはハラオウンの名前を名乗ってもらおうと  
養子縁組の話があるのよ」

あ〜…そーいやそんな事も原作であつたな〜…

「何ならキヨウスケ君もハラオウンって名乗って見る？フェイトさ  
んの婿養子って事でもいいし〜」

「えっ！？キヨウスケがむむ婿に…あうう／＼」

フェイトは真っ赤になって俯いているが…そうになるとKYが義兄さんに…鬱だ…

「そんなんだめに決まっとるやろ！！キヨウスケ君には八神を名乗ってもう予定や！！」

「はやてちゃん…キヨウスケ君には高町の姓の方が良いに決まってるよ？」

てか、婿養子なのは確定なんですか！？

「はあ…大体子供の僕にはまだ早い話です「な、なあ恭介…／＼」ってどうした？ヴィータ？」

裾を引つ張りながら赤くなってるヴィータが…？

「あ…あのさ…私は、神代ヴィータでも…いいぞ？／＼」

「えっ！？／＼ヴ、ヴィータさん？」

「ちょー！？ヴィータちゃん！！？そ、それなら私だった神代なのはどうも全然全く問題ないよ？キヨウスケ君っ！！」

「わ、私だつて…フェイト・T・神代でも全然いいよ？／＼」

「ちょい待ち！！だつたら神代はやての方が1番に決まっとるで！



「！」

…いや だからまだ先の話しぢゃ…

結局…別荘から出たのはそれから数時間後となったのだった…

おまけ

「…はあ、あの4人は相変わらずだな」

「フフツ、いいじゃないシグナム 毎日飽きなくて」

「…まあ、な」

…ところでシャマルはあの話しには加わらないのか？」

「ねえシグナム…愛人って言葉知ってるかしら？フフフツ」

「……………」

シグナムは顔を引き攣らせて仲間の黒い笑顔を見るしかなかった…

「……………私は主達が幸せならそれでいい」

「……………」

「……………どうした？」

「「ザフィーラ居たの（か）！？」」

「……………」

すっかり忘れられていたザフィーラだった…

V S シスコン!?

キヨウスケ Side

…僕って沸点低かったかな？

あ、どうも…現実逃避気味の神代恭介です

僕は今、木刀を持って高町家の道場にいます…

で、勘のいい方は分かると思いますが…目の前には…

「なのはを傷モノにした不屈き者は…オレが叩き潰す!!」

「はぁ…」

…とまあ…シスコン兄貴 高町恭也が息巻いているんですよ…

「キヨウスケ君、頑張つてな〜!!」

「恭介!! そんなヤツ瞬殺だ!!」

「キヨウスケ君!! 頑張つてな〜!!」

道場の隅ではやて・ヴィータ・なのはが絶賛応援中だった…

何でこうなったというかと…

## 回想

数時間前…

「じゃあキョウスケ君また後でお店に来てね？」

「あ、ああ… 時間があつたら寄らせてもらつよ」

「チツ、早く帰れ！！私と恭介はこれから忙しいんだ！！」

「ヴィータく、そんな言い方はあかんよ…確かにお邪魔虫やけど…」

「酷いよ〜！ヴィータちゃんにはやてちゃんっ！！」

別荘から出た後、なのは達を見送る為に玄関にいるのだが…2人も黒っ！？…

「つたく、この忙しい時にシグナムとザフィーラはよ……」

「まあ、別荘だから数時間で帰ってくるし……」

別荘から帰り際……

「私とザフィーラはもう少し修行していく　数日で戻るの心配ないぞ?」

と言って、別荘に残留中なのです

「ああ見えてシグナムは修行好きですからね」

まあな……だが一緒に居たザフィーラから暗いオーラが出ていたのは気のせいかな?

「じゃあ私達も戻りましょうか?フェイトさん?」

「あ、はい……」

フェイト達も一度アースラに戻るらしい

「ねえキョウスケ……」

「どうした?フェイト?」

フェイトは僕の耳元で……

「あの……ね、約束……忘れないでね?／＼」

と呟いた。

約束?...ああ、買い物か!!

「ああ、大丈夫。ちゃんと覚えてるから。ね?」

僕もフェイトの耳元でそうつぶやくと...

「あ.....うん／＼」

フェイトは嬉しそうに...ハッ!!

ゴゴゴゴゴオオ...

じ、地響きが背後から聞こえ!?

「...キヨウスケ君、何フェイトちゃんと内緒話してるん?」

「おい恭介!!何話してんだ!?!」

何って...ここで話したらまた大変な事になるって本能が警告してるし...

「...キヨウスケ君、フェイトちゃんとどんなO H A N A S H Iしてたのかな?かな?」

って!?!なのはさん!!?!まだ居たんですか!?!

「...今かなり失礼な事考えてなかったかな?キヨウスケ君...?」

「イ、イエ...カンガエスギダヨ?」

と、とりあえずこの場は…

「さ、さあ！これから買い出しに行かないと！！ はやて、ヴィー  
タも一緒に行くんだろ？早く準備しないと！！」

「あ、せやな…」

「あ、ああ 分かったよ恭介…」

「なのはも後で翠屋に行くから！シュークリーム楽しみにしてるよ  
！！」

「う、うん…わかったの！！」

「じゃあフェイト、またな！！」

「えっ！？う、うん それじゃ…またねキョウスケ」

という風に勢いで乗り切る事に成功しましたよ

『（珍しいですね…マスターに被害なくその場が収まるとは…）』

いいんだよ！！たまには！！

…しかし、そのツケは後ほどああいう形になるとは…この時の僕は  
思いもよらなかった…

商店街

で、あの後僕は、はやてとヴィータと一緒に買い物に來ています

「あ、キヨウスケ君！！あの服カワええな」

はやては車椅子から解放され、僕たちと一緒に歩いています

「おっ、恭介！！向こうの肉まん旨そうぞ！！」

「ちょ…ヴィータ！！引つ張らなくてもちゃんと行くから」

「あはは、ヴィータは食いしん坊さんやな」

「だ、だって…私は育ち盛りなんだしよ／＼」

と言う具合にシヨッピング中なんですが…

なんかすれ違う人達（特に男）からの視線が…まあ二人とも可愛いから目立つ…よなあ…

「何だアイツ…2マタか？」

「男の敵だな」

「ケツ…ガキのくせに」



「くっ…リア充が！」

「お、俺の嫁が〜!!」

…うわ〜何このカオスっぷり…

つか子供相手にいい大人が殺気立たないでくれよ…  
それと最後のヤツは警察に通報しなくては!!

「どうしたん？キョウスケ君？」

「あ、いや 何でもないよ」

「そか？今日は色んな所まわるんやから、ポーツととったら日が  
くれてまうよ？」

「そつだぞ恭介！今日はしっかり付き合ってもらっかな！」

「あはは、お手柔らかに頼むよ…」

数分後…

「お、重い…」

た、たしかに買い出しだから荷物持ちになるのは予想していたが…

「…明らかに一人が持てる荷物の量越えてね!？」

そんな眩きも虚しく…

「後は、新しく出来た雑貨屋さんと…そや！本屋さんにも寄って、それから…」

ま、まだ寄るんですか！！？

「な、なあはやて…少し休んでいかないか？」

流石にちよつと疲れたし…

「んゝ そやねゝ じゃあどっかで休んでこか？」

「そーだな どこで休むんだ？はやて？」

…確かこの辺りって…

「なのはの家の翠屋が近くにあつたな？一応行くなって約束したし…顔位は出すか…」

てかむしろ、顔出さないと…魔王が召喚される…

「…はあ、しゃあないなゝ キョウスケ君も律儀やな…」

「別にアイツの約束なんて無視してもいいのによ…」

「まあ あそこのケーキとかも美味しいみたいだからさ、行ってみようよヴィータ」

「ケ、ケーキ！？…ま、まあ仕方ねーな！！」

「あはは、やっぱヴィータは食いしん坊さんやな」

「じゃあ行くのが2人とも？」

「うん！！」

## 翠屋

カランカラン

「いらっしや…あ、キョウスケ君！いらっしやいな」

僕らが店に入ると、なのはがお店の手伝いでウェイトレスをしていた

…しかし、なのはのウェイトレス姿…白い半袖ワイシャツに黒いエプロン…妙に板についてるな

「ふえ！？キ、キョウスケ君…そんなに見つめられると…／＼」

おっと、つい見惚れて…

ギョウ！！

「痛っ！？な、なんでつねる？はやて・ヴィータ！？」

「…別に何でもあらへんよな〜ヴィータ」

「ああ、何でもねーよ」

二人とも目が完全に逆三角になってますが…？

「なのは〜お客さん？…あら？なのはのお友達かしら？いらっしや  
い」

奥から桃子さんがやってきた…そーいや会うのは久しぶりだな〜

「はい、八神はやて言います。このコはヴィータです」

「…ども、ヴィータです」

…はやてはともかくヴィータは微妙に人見知りだからな〜

「…あら、君は…」

…？ああ、今認識障害メガネかけてないから解らないのか

「あ、お母さん！キョウスケ君だよ」

「えっ！？キョウスケ…君？なんか雰囲気変わったわね？」

…まあなのは達は既に家族には魔法関係を説明してたと思うし…

「あ、すみません…今までは諸事情で認識障害魔法使っていたんで

す 今のが素顔ですよ」

「えっ！？君も魔法使いなの？」

「ええ、ついではやてとヴィータも関係者ですから話しても大丈夫ですから」

「へへ 魔法つて本当に凄いわね」

直ぐに順応する桃子さんも凄いですが…

「あ、ごめんなさいね　なのは、キョウスケ君達を席に案内してあげてね。」

「はい！　じゃあお客様、お席にご案内しまーすなの」

なのはに席に案内され席に着くき

「じゃあなのは、オススメケーキセットを3つお願いな？」

「うん、すぐ持って来るから」

オーダーを受け、なのはは厨房へ消えていった

…と、その時

「…ハッ！！殺気！？」

ヒュン！

ダン！！

「あぶね！？」

「きゃー！！」

「うわっ！？な、何だ！？」

僕たちが座った席のテーブルにフォークが突き刺さっていた…あれ？これって僕を狙っていた？

「…貴様か…なのはに傷をつけたのは…」

カウンターの裏から現れたのは…

「…誰や？」

あゝ…はやては面識ないんだっけ？

「…なのはの兄の恭也だ」

「テ、テメー！！危ねーじゃねーか！！はやてに刺さったらどうすんだー！！」

確かにヴィータの言う通りだ！あと数センチズレてたら…が、

「そんなへマはしないさ…ちゃんとソイツに狙いを付けていた…」

って僕狙いかい！？

「…で、僕に何の怨みがあった…」

と言つと、さらに殺気が増してきた…！

「…なのはに…しかもなのはの肌を汚したヤツは…消す…！」

つて既に抹殺予定かよ…！！…つか明らかに原因はキスマークだよな…

「…キ、キョウスケ君…」

はやてはあのバカ兄の殺気に当てられ涙目になっていた…あんにゃる…

「…ヴィータ、はやてを頼む…」

「お、おう！分かった…！…恭介はどうすんだ？」

決まってるじゃないか…

「…はやてを泣かせた罪を償ってもらっただけさ…恭也さん…」  
「…じやお店に迷惑がかかるので…道場で…」

「…ああ、いいだろう…ついてこい…！」

回想終了

とまあ、そーゆー訳で今あのシスコンと対峙してるんだが…ああ、

今思うと冷静さを欠いていたな…

何とか復活したはやてとヴィータが応援に駆け付け、さらに途中で経緯を聞き付けたなのも僕側で応援してるし…  
向こうのボルテージはMAXだ…

「…いくぞ…！」

ヒュ…！！

な！？消えた！！？

…ッ…！！

ガキッ…！！

僕は直感で何とか相手の一撃を木刀で受け止め…

「ッ…て、いきなりです…かつ…！」

ドン…！！

「くっ…！」

シスコンの腹に蹴りを入れて吹っ飛ばした！

…そーいやこのシスコン、小太刀二刀流…だったか？そんな流派の技を使うという裏設定があったんだよな…今のは…オイオイ…神速か！？子供相手に使う技ぢゃねーだろ！？



「…少しは出来るようだな…が、次は手加減せん!!」

…ダメだコイツ…

さて…どうすつかな　戦闘民族高町家とはいえ、魔法は使えない

一般人…

そんな相手に魔法使ったのは…

別に怨みは…

…あるなあ…

よくよく考えたら、前から僕に殺気向けてくるわ…今回ははやてを泣かすし…

「…止めだ!!」

ヒュン!!

シスコンがまた姿を消した…だが、もう僕には迷いが無い!!（笑）

「…オートプレッシャー」

ドオン!!

「カハツ!?か、身体が…重…い!?!」

僕の周囲に範囲を絞ったオートプレッシャーを放つ…別に神速は姿が見えないだけで、居なくなった訳ではない。なら…超重力の結果

モドキを僕の周囲に展開すれば…勝手に突っ込んで自滅してくれる…

「…さてお兄さん、魔法については聞いてますよね？これもその魔法の一種なんで」

「な…貴様…卑怯な…」

「…子供相手に奥義を使ってくる大人に言われたくありません…それに別に剣術のみの勝負とは誰も言ってませんよ？ただ木刀を構えただけで剣術だけと思っ込んだ貴方が悪い…」

「くっ…」

「…さて、貴方には罪があります…僕の家族であるはやてを泣かしたという罪が…ああ、大丈夫ですよ。骨が折れようが内蔵が破裂しようが回復魔法で治して差し上げますから…とっとと潰れて下さいね。出力Up」

グオン…!

「ぐあああ…!」

Side Out

はやてSide

「キヨウスケ君…めっちゃ怒つとるな」

キヨウスケ君…どす黒いオーラ全開や!!  
これは…まさに黒い断罪者やな

「…ああ…ああなつた恭介は止めらんねな」

「キヨウスケ君って…怒ると…こつなるの？」

「まあ…まだマシな方やで？ちゃんと治療はしてくれるんやし…」

「もっとも直した後にもた漬すみてーだが…」

「にははは…まあお兄ちゃんの自業自得だし…」

グオン!!

「あ、また漬れたみてーだな。まっ、はやてを泣かした報いだ!!」

「てか、なのはちゃん…お兄さん心配やないん？」

「ふえ!?!ううん、お兄ちゃんにはいい薬なの!!」

せつかくキヨウスケ君が家に来てくれたのに…殺気立ってキヨウスケ君に襲いかかるんだし」

まあ…悪いお兄さんではないんやろつけど…度が過ぎるつちゆう事やな…

グオン!!

でも…キヨウスケ君が私の為にあんなに怒ってくれて…お兄さんに  
は悪いんやけど…嬉しいな… / /

お兄さん…迷わず成仏してな？

S i d e O u t

意外と知らない設定が…

前回までのあらすじ…

キヨウスケはシスコン恭也と対決！！

結果は…

キヨウスケSide

「ごめんなさいねキヨウスケ君、ウチの恭也のせいで…」

「いえいえ、ちゃんと話し合ったら恭也さんも分かってくれましたよ」

「……ウ、ウソや（だ）（なの）……！！」「」

変な電波が聞こえましたが…ゴホン！

あの後、潰す 回復 潰す 回復という工程を数回繰り返している  
と流石にはやてに止められた…まあ本人が許すと言っているから…  
仕方ないか。

…ん？シスコンはどうなったって？ちゃんと回復させましたよ？  
…ちゃんと心を折った後に  
その結果…

「…スミマセンスミマセンスミマセンスミマセン生きててスミマセ  
ン生きててスミマセン生きててスミマセン…」

と、僕の顔を見ると土下座しながらそう呟くようになりましたが…  
何か問題が？

桃子さんは初め不思議がっていましたが、事の経緯を話したら

「この位しないと妹離れ出来ないから調度いいくらいよ」

と笑って言っていました

「やあ、済まないねキョウスケ君…息子が迷惑をかけてしまって…」

それと、何処に隠れていたのか父親の土郎さんが現れ謝罪してくれ  
た…出て来る時に、持っていた木刀を慌てて離して隠していたのは  
…気のせいだろうか？

「いえ…今回は僕もちょっとカッとなってしまうって…」

「…あ…あれでちょっとなんだ…」

なのは・はやて・ヴィータが若干引き攣った笑顔をしていたが…だからなぜ？

「はやてちゃんもヴィータちゃんも御免なさいね 貴女達まで恐い  
思いさせちゃって…」

「い、いえ…私は気にしてませんから…」

「…まあ私は、はやてが良いって言うなら…」

とまあ高町家の方々と和解？したのでした

桃子さんからは、

「お詫びに今日は夕飯食べていかない？美由希が買物から帰ってくるし、ご馳走作っちゃうわよ？」

と、誘われましたが 家に残ったシャマルや別荘に残った人達も気になるので丁重に遠慮しました

…なのはは残念そうな顔をしていたが

で、帰宅しよう和高町家を出ようとしたら桃子さんが…

「あ、キョウスケ君 私の事はお義母さんって呼んでね？」

と爆弾発言しやがりました…

その瞬間、土郎さんからは殺気が溢れ始めたので早々に轉移魔法で  
帰りました…ったく、リンディさんといい桃子さんといい…似た者  
同士だな…

八神家

ガチャ

「……ただいまー」

「あ、お帰りなさい」

「シャマル、シグナム達は帰ってきた？」

「キョウスケ君、それが皆まだなのよ」

別荘内時間だと……そろそろ1週間くらいだが……

シュン！

と、噂をすれば……

「主、ただ今戻りました」

「おかえりーシグナム」

「……………」

「ザフィーラもお帰りな」



…あれ？

「なあシグナム、クロノ達は？」

帰って来たのはシグナムとザフィーラの2人だけだが…

「…クロノ達はまだ書類整理をしていたようだが」

「ふーん…まあ その内帰ってくるか」

「はやて〜…腹減った〜…」

…ヴィータ、翠屋であんだけケーキ食べたのに！？

「甘い物は別腹なんだよ！！」

あ〜…ですか

「ふふ、じゃあ急いで夕飯つからなアカンな〜

ヴィータ、何かリクエストあるん？」

「鍋がいい！鍋！！」

「鍋か…はやて、材料は沢山あるから大丈夫そうだな」

あれだけ買い込んだんだ 荷物持ったのは僕だけど…

「じゃ今日はお鍋パーティーや！！」

「おー！！！！」

ヴィータはかなりはしゃいでいた

「じゃあ僕とはやてで下ごしらえするから…他の皆はシャマルを確保しといてくれー！」

「ちょ、ちょっとキョウス「うつしゃ！！問答無用だ！！バインドおー！！」ってヴィータちゃん！？」

シャマルはヴィータのバインドで確保された。食事が絡むと行動が早いつすね

「シャマル、悪いが大人しくしてくれ…レヴァンティンの錆になりたくなければ…」

「ちょ！？シグナムっ！？」

シグナムもシャマルが作る料理は遠慮したかったのか、率先して手伝ってくれた

ま、シャマルの事はシグナム達に任せて…

「さ、はやて 僕たちは調理の支度をしようか？」

「せやな」

僕とはやてはそのままキッチンへ…

暫くしてリビングから…

「は、放してー！私だって料理の腕は…」

「グラーフアイゼン！！」

《Ja》

ズドン！！…グシャ！！

「……………」

「な、なあキョウスケ君…今の音…」

…何かが潰れた音がしたけど…

「はやく…気にしたら負けだよ？」

「せ、せやな…」

という具合に2人してスルーした…

で、鍋が完成！

今日は鳥鍋にしました…

「いただきまーす！！」×多数

「モグモグ…はやてと恭介の料理は相変わらずギガうまだな！！」

「モグモグ…うむ、流石主に神代だ！」

ヴィータとシグナムには好評だ

「……………私だつて材料切る位は…シクシク」

…シヤマルは泣きながら食べていたが…無事だったのか

「モグモグ…ホントに美味しいわ〜いいお婿さん& a m p ・お嫁さんになるわよ〜」

「モグモグ…はやてはともかく、キョウスケが料理得意とは…意外だな」

「モグモグ…うん、なのはもキョウスケの料理は美味しいって言うてたし…」

「…つか、何ナチュラルに食事に混じってんだ！？クロノ・ユーノ・エイミイさん！？」

いつの間にか3人が食卓に座っているし！？

「や〜、ちょうど私達もお腹空いちゃって…」

「ゴホン！…ま、まあ…その…なんだ…」

「…はは」

「まあまあキヨウスケ君、ご飯は大勢の方が楽しいんやし」

「はあ…別にいいけどさ…で、クロノ ココに居るって事は書類は大丈夫なのか？」

「ああ、お蔭さまでな。」

「そりゃ〜ね〜 私やユーノ君の手まで借りてやっというて【出来てません】じゃカツコつかないしね〜」

…人の手を借りている時点でカツコつかないのでは？僕からも別荘借りてるし…

「わ、悪かったな！！…モグモグ」

「あっ！！クロノ！！肉ばっか食ってんじゃねー！！私が狙ってたヤツじゃねーか！！」

「もう…クロノ君！！野菜とかも食べないと栄養バランス悪いんだよ！？ だから年齢の割に身長が伸びないんだよ？」

「そ、それは関係ないだろ！？」

「年齢の割に…って僕とクロノって背は大差ないし…」

この年齢なら平均では？

「あ〜…キヨウスケ君、クロノ君と同じ年だと思ってた？」

「えっ！？違うんですか？」

「…僕は14歳だ」

……………へ？

「……………ええええええー！！！！？」

本人とエイミイさん&amp;ザフィーラを除いた全員が驚いた！！

作：えええええっ！！？

って作者もかよ！？

作：なのはType見て知った…orz

さいですか…

「あ…クロノ…色々スマン」

「謝るな！！寧ろそっちの方がダメージがっ！！」

「…クロノ…僕より年上だったんだ…」

「…そーゆーユーノは…何歳だ？」

「僕は9歳だよー！！」

…ふう標準か…

「悪かったな！！チビで！！」

あゝあゝクロノがすねちゃったよ

「…なあ恭介、コイツに年齢詐称薬、分けた方がいいのか？」

流石に哀れに思ったのか、ヴィータが気を利かた事を

「クロノ…さん？飲んでみる？」

「いやいい…飲んでみて背が変わらなかつたら…立ち直れないし…」

…ま、まあStrikersではそれなりに成長してたし…希望はある…よな？

その後の食卓は、微妙な空気だったのは言うまでもないか…

「じゃあ僕たちはそろそろアースラに戻るよ」

あの微妙な夕食後、結構な時間になった為クロノ達は帰る事になりました

「…そうそう、キョウスケ」

「なんだ？」

「今度本局に来る日にちだが…こちらの時間で1月4日でいいか？」

…すっかり忘れてたな…

「ま…別に構わないが…」

学校も冬休みだしな

「ほんなら私達もその日でええか？クロノ君？」

「ああ、そうしてくれると助かる。」

「クロノ君へ行くよ」

「ほら、エイミーさんが呼んでるぞ？」

「ああ、キョウスケ　今回は助かったよ

この借りは必ず…」

「ま、期待せずに待ってるよ」

「フツ　じゃあ…」

「はやてちゃん！！今日はご馳走様〜！！」

そう言い残し、3人は転移していった…エイミーさん、一応僕も料理作っただんですが？



「さ、明日は大晦日や！紅白楽しみやな」

「…なあ恭介、おおみそかとかこうはくって何だ？」

「あ、そか ヴィータ達は知らないんだよな 大晦日ってのは……」

僕はヴォルケンス達に大晦日や紅白、正月の事を説明した…

「…お祭りみたいなモンか？」

「ま、概ねそうだよ」

…間違っていないよな？

「あ、キョウスケ君！！」

「どうした？はやて？」

「はい！！」

はやてが僕に渡してきたのは…

「…雑誌？」

…前にもあったデジャヴが…

「これで私や皆の着物作ってな？それで正月に皆で着るんや！！」

「あはは…ま、いいけど…」

…その後、はやて達女性陣の着物×4を魔力で創ったが…予想以上に時間がかかり徹夜になってしまった…

「着物って…難しい…orz」

S i d e O u t

大晦日と新年と…

八神家・リビング

キョウスケSide

「見てみ！キョウスケ君！！水樹奈々ちゃんが歌ってるで！！」

「う、うん…そだね…」

今日は大晦日、僕たちは紅白をしています…

というか、こつちの世界にも水樹奈々さん居たんですね…今年は【Silent Bible】みたいだ

「ん？…この声…テストロッサに似ているな」

シグナムさん！！それは禁則事項ですから触れないで！！

「なあ！！放課後ティータイムは出ねーのか！？」

ヴィータちゃん先生！それ微妙にネタですよね！？

「みんな〜お茶が入ったわよ」

シヤマルは皆にお茶を入れて…なっ!?

「…シヤマル…お前が入れたのか？」

「…飲めんのか…それ？」

「シグナムにヴィータッチャん酷いわ!!わ、私だっってお茶を入れる位は…」

しかし僕は見た…そのお茶は緑茶や玄米茶とかの色ではなく…

「…紫色のお茶なんて…あつたか？」

色がとてもポイズンクッキング的な色なんだが…

「あら?おかしいわね〜? 緑茶入れた筈なんだけど…やっぱりヤモリの粉末入れたのがいけなかったのかしら？」

……………ヲイ

「…お茶にんなもん入れんな!!」

リンデイ茶よりタッチが悪いわ!!

なにそれ!?!クハ? スハドリンクなのか!?

「な、なあシヤマル…普通にお茶…いれよな？」

流石にはやても顔を引き攣らせながらシヤマルを注意してた…ヤモ

リは…ねえ…

「…分かりました。あ、でもザフィーラは喜びの余り失神していましたけど…」

「……いや！それ絶対ちがうから！！」「……」

つかザフィーラの命が！！

後にザフィーラは痙攣しながら倒れている所を発見…一命は取り留めた…

恐るべし！！シャルドリンク！！

「……ご馳走様でした」「……」

大晦日恒例の年越しそばを食べ、リビングでまったりしています

あ、ちなみに蕎麦は僕とはやてが作りましたから

「もう今年も終わりやな〜」

「後半は特に内容が濃かったけどね」

バトルとか…バトルとかバトルとか…

「私は…家族が増えた事がめっちゃ嬉しかったで…」

「主…」

「はやて…」

「はやてちゃん…」

「……………」

「…リインフォースも一緒やったらもつと嬉しかったんやけどな…」

ギクツ！ す、すみません…リインフォースは現在調整中です…  
はやてにはせめてツヴァイが生まれるまでは秘密にしないとな…

「…と…ごめんな皆…湿っぽくなってもうたな」

うっ…場の空気が！？話題を変えないと！！

「そ、そういえばさ…この後初詣に行くんだろ？はやて」

「うん！もちろんや！！なんたって夜中に外出出来る大義名分がで  
きる日なんやしな！！」

…まあ基本フリーダムな生活って気もするけど

「なあなあはやて！！屋台とかもあるんだろ！？私焼きそば食べて

「！後リンゴ飴も食べてーな」

…だからヴィータ、まだ食べるのか!?

「屋台は別腹だから大丈夫だ!！」

何そのスイーツ感覚は!?

「…私は文化フライという物に興味が…」

シグナム…それはもうないんだ…orz

作者も嘆いていたが…

今なら確実にB級グルメグランプリ取れただろうに…

と、考えていると…

ゴオオオン!

除夜の鐘が鳴り響いた

「明けましておめでとう!」

「おめでとさん」

「はやてちゃん、それは?」

…あゝシャル達は知らないか

「新しい年になって初めての挨拶や」

…間違つてはいないが…まあいいか

「そうなんですか。じゃあ…はやてちゃんキョウスケ君、明けましておめでとう！」

「おめでとう！はやて、恭介！」

「おめでとうございます。主はやて、神代」

「……………お、おめでとうございます」

と皆が挨拶をしてきている時、

ピンポーン！

「ん？新年早々お客さんやな？」

「あ、はやて 僕が出るよ」

「ほなお願いな？キョウスケ君」

僕は玄関に向かって行き…

ガチャ

「はい、どちら様…」

「「明けましておめでとう」なの」「



なのはとフェイトが立っていた

「あ、キヨウスケ君 誰やつ…ってなのはちゃんとフェイトちゃん  
!？」

「にやはは、 はやてちゃん 明けましておめでとうなの」

「おめでとう、 はやて」

「あ、これは「丁寧」…ってちゃうわ!」

はやてはノリツッコミを発動!!効果はイマイチだった…

「なんやて!？くっ…もつと精進せえへんと!」

…まあ頑張れはやて!…

と、なのは達の事忘れそうだった

「二人とも家族と過ごすとってたけど…?」

「…アースラじゃ正月はあまり関係ないみたいだったから…」

…ま、まあ アースラというかミッドチルダに正月とかの風習ある  
か不明だからな

「私は…その…新年の挨拶はキヨウスケ君に1番にしたかったから…来ちゃった／＼」

うつ…ちよつとグツときたかも／＼

「残念やったな／＼なのはちゃん。キヨウスケ君への1番の挨拶は私が済ませてもうたで」

「ふえ！？お…遅かった！？」

…いやなのは、普通一緒に居たんだから1番最初に挨拶するのは一緒に居た人じゃ？

「アリサやすずかも来たがってたんだけど…家の人と新年の挨拶で、海外に行かないといけなくなったって連絡が…」

「そうなのか？まあ二人ともお嬢様だから新年とか社交的なイベントがあるんじゃない？」

「あ！そーいえば、お兄ちゃんが忍さんの護衛？とかで一緒に行ってたんだよ」

…復活したのか、あのシスコンは

「しかし護衛とは…穏やかじゃないな」

「にやはは、でも忍さんに強引に連れていかれた感もあるんだよ」

「あ…そーゆー事か」

一応2人は恋人同士だし…一緒に居たかったって訳ね…

「海外か〜ええな〜。なあ、なのはちゃん？アリサちゃんとすずかちゃんは海外って何処に行ったん？」

「えっと…たしか二人とも【ハッピーニューイヤール島】って言うってたような…」

…なにその1年中新年みたいな島は！？

「詳しい場所は企業秘密なんだって〜だけど…どこかのお金持ちの人が、新年を過ごす為だけに島ごと買ったんだって〜 アリサちゃんやすずかちゃんも驚いてたよ」

「ははは…そら驚くわ〜…」

流石のはやても苦笑いしてるな

「何処の金持ちが買ったんだよ、んな島」

ヴィータも事の非常識に口を引き攣らせながら聞いてみてるし

「たしか…【乃木坂家】っていう日本人の財閥が買ったって…」

…乃木坂？

「はやてえ…知ってるか？」

「う〜ん、聞いた事ないな〜 ま、私らと住む世界がちゃうしな〜」

…乃木坂ねえ…まさか、な

「それで、キョウスケ達はこれから初詣に？」

「そうだけど…フェイト、地球の風習に詳しくなったな？」

「うん／＼…キョウスケといつでも一緒に居たくて…勉強したんだ  
／／」

何この可愛い生き物！？

「そ、そか／＼ありがとうフェイト（ニコッ）」

僕はフェイトにお礼を言うと…

ボンッ！

フェイトの顔が真っ赤に？…風邪？

「あうう…／＼は、反則だよ…／／」

…えつと、何かした？僕？

「…キョウスケ君、はよ準備せえな？」

「あ、ああ…」

はやてさんは、あからさまな不機嫌オーラ全開だ！？

「あ、キヨウスケ君！私も初詣…一緒に行ってもいいかな？」

「…ハツ！？キ、キヨウスケ！！私も一緒に！！」

なのはと復活したフェイトが勢いよく手を挙げた！

まあ…何となく予想はしたけど…

「ま、せっかく来てくれたんだし…行くか？」

「「うん！！」」

なのはとフェイトは嬉しそうにうなずいたが…

「むう~~~~~」

「ちっ…」

…はやてとヴィータが若干ご機嫌斜めだった

「ほら、二人ともそんな顔しないで 折角の可愛い顔が台なしだよ  
？」

「ふえ！？か、可愛い！？／＼」

「なっ！？／＼いいいいいきなり何言うんだよ恭介っ！？／＼」

二人とも…かなり動揺しているけど…？

「あらあら 2人とも真っ赤になっちゃって」

「う、うるせーぞシヤマル!! / /」

「うう… / / 不意打ちはズルいでキヨウスケ君 / /」

不意打ちって…?

まあとりあえず不機嫌オーラは消えたが…

ゴゴゴゴゴ…

…だが今度は背後から不機嫌オーラ絶賛解放中だ…

「え〜と、じ、じゃあ行こうか?」

「…うん…逝こうかキヨウスケ君…」

「…大丈夫だよ、キヨウスケ…後で、ね?」

ちよ!?!なのはさん!!字が違う!!フェイトさんも後で何を  
気なんでしょうか!?

「「ふふふ…」」

怖っ!?!な、何!?!?

「じゃあ皆、早よう行こか?」

「あ、ああ…」

若干この後が怖いんですが…

「主、外は寒いのでこのコートを」

「ありがとなシグナム」

「さ 早く屋台いこーぜ」

「ヴィータちゃん…屋台じゃなくて初詣よ」

こうして僕たちは屋台に…じゃなく！  
初詣に向かったのだが…

このメンバー…まだ嵐の予感が…

つづく…

「ってやっぱ続くんかい!？」

『諦めましょうマスター』

くっ…





女難続きにまた一難!?

キヨウスケSide

僕たち八神家+なのは&amp;フェイト一行は初詣に行く為に夜中の町を歩いているんですが…

「さ、寒い…」

この前降った雪がまだ残っているので…かなり寒いです…

「まったく…神代も騎士なのだからシャンとしたらどうだ?」

ってシグナムさん!?僕は別に騎士ぢやないっすよ?

「寒いものは寒いって…つか、ベルカの騎士のシグナムは完全防寒してるぢやん!？」

言った本人はマフラー&amp;コート&amp;手袋までしっかり装備してるし!?

「ま、まあ…コホン…これはこれだノノ」

強引にごまかした!?

「あはは、しゃあないな」キョウスケ君は…えいっ／＼」

ギョ!

「うわっ!?!は、はやて?」

はやてが僕の腕に抱き着いてきた!?

「むう…キョウスケ君!こんな可愛いコが抱き着いて来たのに…私と腕組むの…嫌なん?」

「い、いや…別に嫌いって訳じゃないけど…」

はやての涙目+上目使いコンボを喰らっていると…

ギョ!

今度は反対側の腕にヴィータがしがみついていた!?

「へへっ／＼これで恭介も寒くないだろ?」

ま、まあそうだけど…ハッ!?

ゴトゴトゴト…

「えーっと…はやて・ヴィータ」

「なんや?キョウスケ君?」

「なんだ？恭介？」

…二人はニコニコ顔をして尋ねてくるが…背後の気配に気付いてない！？

「あ…こうして密着状態で初詣に行くのは非常に危険というか…既に背後が危険というか…」

そう！背後から感じる黒くドロっドロなプレッシャーが…！

「だってキョウスケ君寒いんやろ？」

私等は状況を判断し、綿密に計算を重ねた上での最善作や…こうしとると暖かくなるんやし…な？」

な？って…そんなご満悦な顔で…くっ、可愛いじゃねーか／＼

「で、こうすれば…もっと温かくなるで」

ギョツ！

はやては更に密着してきた！？

ギョツ！

ってヴィータも！？

「どーだ恭介 暖かいだろ？」

う…／＼二人の甘い香りが…

と、

「ねえ二人とも…そんなにくっついてると歩きづらくないかな？」

「そっだよ？キヨウスケ君だって歩きづらそうなの！」

ドロっドロなプレッシャーの発信源…目が笑っていない笑顔でフェイトとなのはが割って入ってきた

「ん？別に問題ないで？なっヴィータ？」

「ああ、全っ然問題ね〜」

「「うー…」」

しかし、なのはとフェイトの指摘もカウンターで返された！

「さ、はよ行こか？キヨウスケ君」

ギョッ

はやては僕の手を握りながら僕に密着してくる。しかも指と指を絡めあつ…まあ、世間一般でいう恋人握りな訳で…

ギョッ

…ってヴィータさんも！？

「早くいこ〜ぜ恭介」

「あ…うん、そだね…」

二人とも激甘えモードだな…うつ！？

背中に刺すような視線が…

」「ぐぎゅっっ…」「

後からなにやら「ばかっ」という怨念が籠った視線が…

「あらあら、新年早々賑やかねっ」

何楽しそつに傍観してるんです！？シヤマルさん！？

「…神代、まあ…なんだ…頑張れ」

シグナムっ！？何を頑張ればいいのさ！？

神社

…とりあえず何とか神社に到着し、皆でお参りをしたのだが…

」「」「……」「」「」

なのフェイとはやヴィタ達は、物凄いプレッシャーを放ちながら何やら超集中しながら拜んでいるが…何を願掛けしてるのだろう？

「……キョ……ケ……私……物……（ボソツ）」「」「」

ゾクッ！

…な、何だろう…寒気が！？

「恭介！！向こうにタコ焼きあんぞ！！買っていいか？」

「キョウスケ君、向こうに綿菓子もあるぞ？」

「あゝ！見て見てキョウスケ君！！焼きトウモロコシなの〜！！」

「ねえキョウスケ、向こうのお店で金魚すくい…一緒にやってみない？」

という具合に皆は屋台の夜店に目移り中だ…

「な、なぜ…」

「ん？どうしたシグナム？拳を震わせて？」

「なぜ…文化フライがないんだー！ー！！？」

「ってまだこだわってたんかい！？」

「なあ恭介！！タコ焼き買ってきたぞ！」

「早っ！？いつの間に！？」

「ふーふー…ほら恭介、あーん 熱いから気をつけるよ？」

「あ、さんきゅヴィータ…あ〜ん。もぐもぐ…」

「じゃあ私も…もぐもぐ…」

「あ、ヴィータ！頬つぺたにソースがついてんぞ…ほら動くなよ？」  
ヴィータの頬つぺたに付いたソースをハンカチで拭き…

「あ…ありがとうな…恭介ノノ」

「ムツ…キョウスケ君！！焼きトウモロコシもあるんだよ！！あ〜んして！」

「なのは！？ちよっ…むぐっ！？」

「なのはさん！？トウモロコシを口に突っ込まないでくれ！！芯は食べないっすよ！？」

「ほなキョウスケ君！食後のデザートや…あ、あ〜んしてな？ノノ」

「ゲホツゲホツ…すまないはやて、その前にそのジュース一口くれないか？喉が…」

僕は、はやてはさつき買ったジュースを貰い一口…

「ゴクツ…プハア！ありがとはやて、助かったよ」

なのはが強引に口の中にトウモロコシ丸ごと入れるから…ん？

「どうしたはやて？顔が赤いが？」

「な、何でもあらへんよ！？／＼」

…そか？

Side Out

はやてSide

キヨウスケ君が私の飲んどったジュースを…／＼しかもピンポイントで私が口付けた場所に…／＼  
やっぱこーゆーんは照れるな／＼

「キヨウスケ君、綿菓子も一口食べてみる？」

「ん…じゃあせつかくだし、一口貰おうかな」



「そか？じゃあ口開けて」

私は綿菓子を指でちぎって…

「は、はい、あ〜ん／＼」

さっきヴィータもやっとなげたけど…け、結構恥ずかしいな／＼

「あ、ああ…あ〜ん。パクッ」

うっ／＼綿菓子と一緒に私の指までキョウスケ君の口の中に／＼

「ど、どう／＼？美味しい？」

「うん、甘くて美味しいよ」

…もしかして私の指効果？なんてな〜／＼

「じ、じゃあもう一口…はい、あーん」

な、なんかこーゆーの…ぞくぞくしてきて…／＼癖になりそうやな〜

Side Out

キョウスケSide

はやてが綿菓子をつまんで あ〜ん とやってくるのはいいんだが…

「…キヨウスケ君ノ／もう一口どや？」

はやては指に付いた綿菓子をペロリと舐めながらそんな事を言ってきた

…なんかはやての目がとろんとしているんだが…

…な、なんか色々とヤバくないか？

「「はやて（ちゃん）！！さつきからズルイよ（の）！！」」

なのはとフェイトがはやての手を取り止めに入った！  
とりあえず、はやては正気に戻ったようだ…よかった…

「キヨウスケ、今度は私が食べさせてあげるよ？／／」

「フェイトちゃん！！次は私だよ！？」

「なのははさつき食べさせてたよね？次は私だよ？」

「うっ…あ、あれはノーカンなの…！！」

…訂正、よかったじゃないかも…

と、その時、

〃  
〃？

「あ、着信だ…すずかからだ」

「えっ！？すずかちゃんから？なんやる？」

「まあ あけおめの挨拶じゃないか？別にメールでもいいんだが」  
とりあえず出るか

ピッ

「もしもしすずか？明けまし《キヨウスケ君助けて！！アリサちゃん  
んと春香ちゃんが！！》ってすずか？落ち着いて！」

すずか…随分慌てているけど…

「キヨウスケ君…すずかちゃんどうしたの？」

「まさか…すずかの身に何か？」

「ちょっと待って…すずか、何があったんだ？」

すずかを落ち着かせて話しを聞いてみると…

《アリサちゃんとお友達の春香ちゃんが…変な恰好した人に誘拐さ  
れたの！！》

……え

「キョウスケ君…すずかちゃん何やって？」

「あ…アリサとその友達が誘拐されたと」

ピシッ！

あ…やっぱり凍りつくか…

「『『『『『えっ…えええええー！！！！！！！！！！？』』』』』」

夜中の神社に叫び声が響いた

こ…これは…新年から大変な事になったな…

海外出張！…ここはどこ？

前回までのあらすじ…

はやて達と初詣で夜店巡りしていたら、すずかからの電話…

「アリサちゃんとお友達の春香ちゃんが…変な恰好した人に誘拐されたのー！」

つてSOSが僕にきたのだった…

某国・某所

さて、僕は今すすが達が来ていた海外…【ハッピーニューイヤール島】  
つて場所に来ています…

「なあ恭介、すずかとの待ち合わせ場所ってここなのか？」

「ああ、確か指定された場所はここだけど…なのは、すずかから何

か連絡は？」

「…ううん、まだ何にも…アリサちゃん…大丈夫かな？」

アリサ誘拐の一報を受け、当初全員で助けに行こうとなったのだが…

「誘拐事件だから慎重にいかないと…」

という事でとりあえず先発隊として僕となのはとヴィータですずかとの待ち合わせ場所に來たのだが…

「あつ來たみたいだよキョウスケ君！」

僕たちの目の前に一台の車（ロールスロイスか！？）が止まり中からは…

「キョウスケ君！なのはちゃん！ヴィータちゃん！来てくれてありがとう！！」

すずかが中から出てきた

「すずかちゃん！大丈夫？」

「うん…私は大丈夫だけど…アリサちゃん達が…」

「すずか、悪いが何があったか詳しく説明してくれないか？」

「うん…ここじゃ何だから皆車に乗って。私達が宿泊しているホテルに部屋を用意したから…」

「ああ、ありがとう」

僕たちはホテルに向かう車内の中で事の詳細を聞いていた

…すずかの話しを要約すると、パーティー中にいきなり妙な恰好をした犯人グループが侵入してきてアリサと友達になった女の子が掠られたの事…あれ？

「なあすずか、恭也さんが護衛に付いていたんだよな？」

たしか一緒に行ったって聞いたし…

「…っ、うん…」

そう言うと、すずかはなのはの方をチラチラ見て…

「…？どうしたのすずかちゃん？もしかしてお兄ちゃんに何かあったの！？」

さすがに兄の事が心配なのか、なのははすずかに詰め寄った

「…えっとね…恭也さん…真っ先に犯人の人達に向かっていったんだけど…負けちゃって…」

詳しく聞くと、恭也さんは木刀で犯人に向かって一撃を加えたらしいのだが…相手には全くダメージがなく、動揺したスキを付かれ逆にやられてしまったようだ…

「そ、それでお兄ちゃんは大丈夫なの！？」

「うん…怪我也大した事なかったし…今お姉ちゃんが看病してるの…」

「どうやら命に別状はないみたいだ…しっかし、何やってるんですか  
シスコン兄さん!？」

「…なあ恭介、それって役立たずって事なんじゃねーか？」

「ヴィータさん!そんな身も蓋も無い事を!？」

「…ま、まあ…その…あはは…」

「流石にフォローが思いつかないや…」

「…不甲斐ない兄でごめんなの…すずかちゃん」

「流石になのはも申し訳なく思ったのか、すずかに深々と謝罪した

「う、ううん!恭也さんは…頑張ってくれたよ…多分」

「うう…お兄ちゃん…後で零距离スターライトブレイカーなの…」

「…まあ僕には被害ないからいいけど」

「それでね、今アリサちゃんの家の人と春香ちゃんの家の人が捜索  
隊を結成して犯人を探してるの…」

「なあすずか、誘拐された友達って…」



「えっと…今回のパーティーを主催した乃木坂財閥の長女で春香ちゃんって…私達と同じ歳で仲良くなったのに…」

……乃木坂……春香!?

ま、まさか…ま、まあ同姓同名だと思うが…

「…その犯人の目的って…やっぱり身代金かな？何かそーゆー電話とかあったのか？」

「…それが解らないの…お父さんに聞いても、子供の私には「心配ないから」って言うだけで…」

ま、普通はそうだよな

「…状況は分かった…とりあえずホテルに付いたら僕の探索魔法でアリサ達の居場所を特定して救出に向かうよ」

「あ、ありがとう！キョウスケ君!!」

「うっしや!!犯人のヤローをとっとブツ潰してはやてのおせち料理？やお雑煮ってのを食べようぜ!!」

「アリサちゃん…もう少し待っててなの…」

「あ、気合い入っている所悪いが…二人は留守番な」

「「なっ!?!なんでだ(なの) 恭介(キョウスケ君)!!?!」」

…いや…なんでって…

「今回は隠密性が重視されるから…二人ともそーゆー魔法ある？」

僕はプリズムファントムで姿消せるが

「「「うっ…」」」

…どうやらないようだ…

「それに万が一に備えて二人にはホテルの護衛…というかすすか達の護衛を頼みたいんだ…また奇襲がないとは限らないしね」

「うっ…わ、解ったの…」

「ちっ…仕方ねーな」

…それに少し気になる事があるしな…

恭也さんはアレだけど…一応達人の域に達しているにも関わらず、その一撃が効かない相手って…

キキッ！

と、思考の海に浸っているとホテルに着いたようだ

ホテル・個室

ホテルに入ると、流石に慌ただしい様子で人が行き交っていたな…  
その中の一人のマフィア風の人が…

「必ず犯人を見つけ出し春香を保護した後、犯人を始末しろ！！行  
け！！黒犬【ヘルハウンド】！！」

…という怒鳴り声がロビーで響いていた…どっかで見たようなマフ  
イアだが…春香って事は…関係者か？

深く追求せず、その横をスルーしなからずかに個室に案内しても  
らい…

「さて、インフィニティ！ Set Up！！」

ピカッ！！

徐々にB」纏った気がするな

「インフィニティ、ハイパースキャン！！」

ハイパースキャン…忘れていた方もいるかもしれないので…広域  
探索魔法です

「ど、どうだ恭介？」

「アリサちゃん…見つかった？」

「……………見つけた！！って、なっ！！？」

「ど、どうしたの？キョウスケ君！？」

「キョウスケ君見つけたの？」

「…見つけたけど…」

なんというか…

「何処にいやがった？」

「……………」

「えっ！？こいつて…」

「……………正確には……………この地下……………」

「……………はあ！！？」

まさか犯人が足元にいるとはな…

とりあえずアリサの居場所が解つたので救出に行く…前に

「さすが、恭也さんはどの部屋に？」

「えっと…向かいの部屋にお姉ちゃんと一緒にいると」

「…なのはも一応兄の安否は確認したいだろ？」

「うん…」

という訳で向かいの部屋へ…

コンコン

「失礼します…」

ガチャ

中に入ると…ベットで横になっているシスコンとすずかに似た女性が居た

「すずかに…なのはちゃん！？どうしてここに？」

「えっと…キョウスケ君に付いて来て…それにお兄ちゃんが怪我したって…」

その声に反応したのか、ベットから上半身を起こし

「な、なのは！？何でここにいるんだ！？」

「…僕が連れてきましたよ…恭也さん」

つか僕には気付かなかったのかよ…

「ひっ!？」

…をいをい…なんだよ、人の顔を見るなり悲鳴あげやがって…

「…あなたがキヨウスケ君?初めましてになるのかな?さすがの姉の忍です…噂はずかから聞いているわ」

…噂?魔法関係とか?まあ別にいいけど…

「はあ…どうも。なのはは知ってますよね…こっちはヴィータ  
つていいいます」

僕が紹介するとヴィータは軽くお辞儀をした

「お姉ちゃん、アリサちゃん達が何処にいるかわかったんだよ」

つていきなりバラすか!?

「ホントに!?!でもどうやって…?」

…仕方ないな

「…僕の探索魔法で見つけました」

「そう…話しには聞いていたけど…魔法って実在するのね」

やっぱり魔法については聞いていたか…ま、吸血鬼がいるんだし魔法使いが居ても不思議じゃないと思うが…

「場所は解りましたからこれから僕が潜入してアリサ達を助けに行

きます」

「あなた一人で!?だ、大丈夫?」

まあ端から見たら子供一人で向かいようにしか見えないしな…

「お姉ちゃん、キヨウスケ君なら大丈夫だよ。」

「うん、なんたってキヨウスケ君はお兄ちゃんに圧勝したし」

なのはの【圧勝】の単語に反応して、恭也さんはベットで精神的ダメージを受けていた…

「ま、とりあえず僕なら大丈夫ですから。後、護衛になのはとヴィータを付けますんで二人の側を離れないで下さいね」

「え、ええ…なのはちゃん達も魔法使いなのよね…」

「はい、ヴィータちゃん共々頑張ります!!」

「ま、まあ恭介の頼みだしな…それにすぐかまで何かあると…はやても悲しむしな」

「…さて、オレも一緒に「却下」って何故だ!?!」

言わないと解らないのかな…

「…お兄ちゃん、キヨウスケ君の足手まといになりそうだし…」

グサツ!

「うっ！」

「つか、手も足も出ずにボロ負けだったんだろ？」

グサグサッ！

「ぐふっ！！！」

「ぶっちやけ邪魔ですから」

グサグサッグサッ！！

「ぐふおっ！！！！？」

なのは・ヴィータ・トドメに僕のトリプルコンボで恭也さんは撃沈した

「き、恭也！？大丈夫！？」

「…さ、3人とも…容赦なしだね…」

「」「事実だ（なの）（だしな）！！！」

「あはは…」

月村姉妹は渴いた笑いを浮かべていた…

だから優しさ？で黙っていたんだけどな〜



『マスター…それは微妙ですよ?』

…やっぱ?

## 影の残照

前回までのあらすじ…

シスコン恭也に戦力外通知を勧告した

キヨウスケSide

なのはとヴィータをすずか達の護衛に残し、僕はプリズムファントムを展開！

アリサ達が監禁されているホテルの地下に向かっているのだが…

「…なんか妙な気配が…」

地下に下りていくにつれて妙な感覚が…

『マスター、前方の扉の向こうに人間の生命反応が3つ…1つはアリサ嬢のですね…その隣に1つ…離れた場所に1つ…大きさから成人…こちらが犯人のようですね。』

「ん？…犯人は1人なのか？」

『…その他にも反応があるのですが…人であって人でないような…判断しかねますが中に12つ反応が…』

…結構多いな、面倒な

「つか正体不明か…さしずめ目の前のドアはパンドラの箱か…」

…とりあえずアリサ達の保護を最優先にしないとな

「…いくぞ、インフィニティ」

『はい…油断禁物ですよ？…後分かっていると思いますが、ここは地下ですからあまり派手な魔法は控えて下さい…潰れますよ？』

解ってるさ…さて…と！

ガチャ！

僕はドアを開けると同時に瞬動でアリサ達の元へ…って!？

「なっ!？」

中に入っただけですか言っていた変な格好の誘拐犯の正体…一目見てすぐ解ったが…どうして？

「…侵入者ハツケン…廃除スル…」

なっ！？プリズムファントムで姿を消しているのに！？

ダダダダンッ！

相手からマシンガンで発砲があとだが、直ぐさま回避！！

「ん？どうしたの？サツでもきたかしら？」

奥から主犯格と思われる女が現れた

「…侵入者…数1……応戦中……」

「あら…ちょうどいいわ、退屈していた所だったの。人形ども！そいつを捕まえて私の前に連れてきなさい！」

「……任務…リョウカイ……」

「……侵入者……捕縛モードに……移行…」

……どうやら犯人には僕の姿は見えてないようだ…

しかし……何でアイツらが此処に存在するんだ？

……量産型Wシリーズ…

ダダダンッ！

キーン！

バキィー！！

「…これで…最後の1体っ！！」

ザンッ！！…バタン！！

『敵残存戦力…ゼロですマスター』

まつ…当然と言えば当然か…

Wシリーズ…ナンバーズならともかく、量産型なら問題なく倒せるし…

「な、なんなの！？何なのアンタ！？タダのガキじゃないの！？」

後は首謀者らしき犯人だけか…だがコイツには聞かなくてはいけない事が…

「…アンタ、このW…コイツらをどこで手に入れた？」

カツ…カツ…

僕は犯人に問い質しながら近付いていき…

「ひっ！？く、来るんじゃないよ！？ひ、人質がどうなってもいいのかい！？」

犯人の女性は、縛られたアリサ達にナイフを突き付け…ってオイオイ…

「こ、こいつの命が惜しかったら武器を捨てな…！」

「んー！！んんー！！」

アリサは口を塞がれていて、ナイフを突き付けられ叫んでいた

…はあ…一応フェミニストで通しているんだけど…仕方ないな

キュッ！ダッ！！

「えっ！？消え…？」

僕は瞬動で一気に詰め寄り…

バキッ！！

「！？グフッ！！」

ドカツ！！

相手を体当たりでぶっ飛ばした

…いや、ちゃんと加減はしたよ？

「…アリサ、大丈夫かい？」

「ん〜！んっんん〜！！」

…とりあえず無事のようにだ

そつえばもう1人居たんだよ…な…

「……………（ウルウル）」

……………あれ？何この視線？

…つか小さい？？

そこに居たのは、アリサと同じ位の年齢っぽい少女。しかし…見た目がアノ【乃木坂春香】さんなんです…

ま、まさか…時間系列的には原作開始前の乃木坂さんですか！？

「うっ…」

おっと、とりあえず犯人を無力化してふん縛らないと

バインド…は、流石に引き渡しの時にごまかせないから魔力で物質創造したロープで縛って…と、

「…さて、もう一度聞きますが…何処であの人形を手に入れたのですか？…正直に答えてくれれば…」

カチャ

「これ以上手荒な真似はしなくて済むんですが…」

手に持った剣を向け説得（という名の脅迫？）を誠意を込めつつ尋ねると…

「し、知らないわよ！！コイツらいきなり目の前に現れてきたんだから！！しかも私の命令に忠実だったから使ってやったのよ！！」

…拾い物を使うなよ…

「次に…彼女たちを誘拐して、貴女の目的は身代金ですか？」

「ハッ！！それもあるけど、私をクビにした会社に復讐するためよ！！」

…あゝ大体の事件の概要は見えてきたな…

「とりあえずアレの出所は判らないみたいですね…解りました…マテリアセット【まどわす】コンフュ！【ぶっじる】セット！スリプル」

シュパッ！

「うっ…」

バタッ

僕は混乱魔法を強めにかけて後に睡眠魔法をかけ眠らせる



…こつすれば引き渡した後に目が覚めても混乱状態が残ってるはずなので、警察は錯乱状態と判断してくれるハズ…後に混乱状態が解けて僕の事が供述に出ても錯乱していた故の妄想と判断してくれるだろう…

まっ、物的証拠がないんだし大丈夫だろ。

「んー！！んんっんー！！！」

あ、いけね…アリサ達まだ簀巻き状態だった

「ぶはあ！ アンタ！！助けるならもっと早く来なさいよ！！！」

「仕方ないだろ、こつちも色々都合があるんだし…」

これでも急いで来たんだし…

ガシッ！

ってアリサがしがみついて…って？

「…ア、アタシがつ…！…どれだけ…どれだけ不安だったか…ひっく…」

あゝ…やっぱり怖かった…

「…ゴメンなアリサ…怖かったろ？」

「べっ…別に怖くなんて…ひっく…」

ギョツ！

僕は泣きそうなアリサを抱きしめ…

「無事でよかった…」

「キョウスケ…うっ…うわあああんっ！！」

アリサは堰をきったように泣き出した

数分後

「…落ち着いた？アリサ？」

「……………うん／＼」

おもいつきり泣いて漸く落ち着いたみたいだ…

「わ、悪かったわね…その…服濡らしちゃって…」

「別にいいよ…ところでアリサ…」

「何？キョウスケ？」

「…そちらの方が放心状態みたいだから…」

僕は助け出したもう1人の女の子の方を指差す

「あ…そそそうだったわ！／＼」

「…アリサ…忘れてたね？」

「うっ…う、うるさいわね！男がそんな細かい事気にしないでよね  
！！」

うわー！？理不尽女王様降臨や！！

「えっと…」

僕が少女に話し掛けようとする時…

「あっ…あの…助けて頂いて…ありがとうございます」

「あゝ…いや、大した事じゃなかったし…えっと」

「あっ、私【乃木坂春香】っていいいます」

や、やっぱりその名前でしたか！？

「？どうかしましたか？」

「いや…何でもないよ、僕はアリサの友達の神代恭介っていいいます  
…それで乃木坂さん、お願いがあるんだけど…」

「はい？何でしょうか？」

「ちよつとアンタ!?!まさか春香に何変な事頼もつとしてないでしようね!?!」

「そ、そんな訳ないじゃんか!?!」

乃木坂さんに魔法見られたから…その事を秘密にしてほしただけだよ!?!」

そう、助け出しす為とはいえ…彼女の前で魔法やら人間離れた動きをしてたからな

「えつと…わ、わかりました。やっぱりあなたは正義の魔法使いさんなんですな?」

…別に正義つて訳でもないが…

「わ、私感動しました!!魔法つてホントにあるんですね!!あ、もしかしてお知り合いにドジツ娘アキちゃんとかいらっしやいますか?」

乃木坂さんは目をキラキラさせ期待に満ちた目を向けている…こ、これは既にあちらの主人公がイノセントスマイス譲渡済み?

「…あゝ…いや…残念ながら…」

「そ、そうですか…」

うわっ!?!目に見えてガツカリしていらっしやるし!?!

「ちよつとキョウスケ!何そのドジツ娘アキちゃんとかは?アンタ

またフラグ立てたの!？」

またって何さ!？人を無差別フラグメーカーな上条さんみたいに!？

『(マスター…貴方もそのカテゴリの人種に属している事に気付きましたよ…)』

「と、とにかくだ!乃木坂さん、僕の魔法の事は…」

「あ、はい わかりました 任せて下さい!私これでも口は固いんですよ?ばつちぐーです」

… が気になるが…大丈夫かな?

「あ、ありがとう乃木坂さん。

さて、皆が心配しているし早く戻ろっか?」

「そうね。行きましょ春香!」

「はい!」

さて、後は…

「ん?キョウスケ!何してんのよ?」

「ん?ああ、このダブル…犯人が使っていた人形を回収しよう」と

何でWシリーズがこんな場所にいるか気になるしな…

「…それにしてもよく出来たロボットよね」

正確には人造人間なんだが…

ガシヤ

「い、いま何か音がしませんでしたか？」

確かに…

「キ、キヨウスケ！あ、あそこのロボット！！まだ動いてるわよ！！」

「ちっ、まだ動けたか！！」

僕は剣を構えアリサ達を守るように構えると…

「コード…ATA………起動」

………なっ！？

コードATA！？自爆する気か！？

こんな所で自爆されたら…ホテルごと崩壊するじゃねーか！？

「クツ！させるかよ！！インフィニティ！！マテリア【りだつ】セツト！！デジョン！！」

グイーン！！

僕はデジョンを発動させ、Wシリーズを全て次元の狭間に送り込んだ…

「はあ…とりあえず助かったが…謎は謎のままか…」

「キヨウスケ…大丈夫なの？」

「キヨウスケさん…」

「おっと、二人に心配させちゃったかな？」

「…ああ、大丈夫。危うく自爆されそうだったけどな…」

「じ、自爆！！？ち、ちょっと！！シャレになってないわよ！！！」

「ああ…でも、もう大丈夫だから安心して」

「次元の狭間に捨てたからね」

「それにしても…何で新年早々こんな目に合わないといけないのよ！！！」

「はは…ま、苦情はこの犯人に言ってくれ。後は警察に突き出せば今回の事件は解決だし」

「…アリサも解ってると思うけど…」

「解ってるわよ！私達は誘拐されて、気付いたら助けられたって事にしておくから。春香もいい？」

「あ、はい。アリサちゃん」

「じゃあ…今度こそ戻ろうか？」

「うん！」

「はい」

さて…結局Wシリーズの事は分からなかったが…

何が起こっているんだろう…



マフィアと魔王、どちらが怖い？（前書き）

今年最後の投稿になります

年末年始って忙しいっす

（+  
|+  
）

マフィアと魔王、どちらが怖い？

前回までのあらすじ…

無事アリサと春香を救出するのに成功したのだった

キヨウスケSide

アリサ達を救出し、無事にそれぞれの家族の元に送り届けたのだが…

「貴様か！！貴様が春香を誘拐したのだな！？」

…とまあ、春香少女を送っていった途端に乃木坂さんの父親に絶賛  
威嚇&殺気をあてられています…

「お、お父様！違います！！この方は…」

乃木坂さんが誤解を解こうとしているのですが…

「春香はこっちに来るんだ…後は私が始末する…この死屍累々でな  
!！」

ちよ!?!?そんな始末つて物騒な!?!?

…と、その時!

「…あなた、少し落ち着いたらどうです?」

穏やかな声と共に現れたのは、小さな女の子を連れた女性…あれ?  
この人つて…

「お、お前…」

驚愕の表情で振り向くマフィ…ゴホン!…乃木坂父

「あ、あの…?」

とりあえず僕は、助けて?くれた女性に話しかけてみると…

「あら、ごめんなさい。はじめまして わたくし乃木坂秋穂…春香  
の母です で、このコが娘の美夏です。さ、美夏ご挨拶は?」

「はじめまして、おに〜ちゃん。乃木坂美夏だよ」

…無敵の最終兵器と爆弾娘が降臨した…

つか秋穂さん若っ!?

とても2児の母とは思えねー!?

…10代でも通用すんぢゃね?

「…つまり、春香を助けてくれた恩人にあなたは危害を加えようとしたのね…」

乃木坂さんが秋穂さんに事情を説明してくれたお陰で、どうやら僕の誤解は解けたようだ…

「うっ…すまない…」

「謝るのは私ではなくて彼の方には?」

…なんだろう…リンディさんの声が似ている秋穂さんから、同等の黒いナニカを感じるが…

「…済まなかった 春香の命の恩人である君に、恩を仇で返すような真似をしてしまって…」

乃木坂父はそう言い頭を深々と下げてきた!

クイツ

ん？裾を引つ張られて…って美夏ちゃんが！？いつの間に…

「ごめんね、おに〜ちゃん。お父さんってお姉ちゃんの事になると見境がなくなっちゃうの〜」

…親馬鹿もここまでくると迷惑な…

ま、こうして謝罪している事だし…

「い、いえ…気にしてませんから。後、僕が乃木坂さん達を助けた事は秘密にしてくれると助かるのですが…」

「あら？どうしてかしら？」

「まあ…余り目立つ事は控えたいんですよ」

…下手に警察に事情聞かれた日には面倒事確定だよな。

「まあ、春香の命の恩人ですからその位のお願いは…」

「ありがとうございます」

「それにしても…子供一人で誘拐犯に向かっていくのは関心しませんね…」

うっ…今度は秋穂さんからまさかの正論が！？

ま、まあ確かに普通子供がそんな真似するのは無謀というか…無茶だろうかなら〜。魔法があるから大丈夫とは言えんし…

「あ〜…まあ…その…」

僕が言い淀むと…

「…まあ、今後はあまり無茶はしないようにね？」

「は、はあ…善処します」

とりあえず秋穂さんからのお咎め無しとなったの…かな？

「じゃあ僕はこれで…」

僕が立ち去ろうとすると…

「待ってくれ！…君は一体何者なんだ？」

乃木坂父が僕を呼び止め、尋ねてきた  
何者って言われても…よし！ここは…

「Need not to know…」

僕は一言そう呟いた

「それは…」

乃木坂父は何か言いたそうだったがスルーして…

「じゃあ乃木坂さん、美夏ちゃん…元気だね（ニコッ）（ニコッ）」

乃木坂さん達に挨拶をして早々に立ち去った…

色々ツッコまれたらボロが出そうだからな

さて、なのは達と合流するか

Side Out

秋穂Side

春香を助けてくれた不思議なコ…何者なのかしらね

Need not to know…知る必要の無い事って彼は言  
っていたけど…

シユタ！

「…葉月さん」

「申し訳ありません秋穂様…私が春香様のお側に付いていながら…」

「まあ春香が無事でしたし…それでどうでした？」

「ハッ…犯人はウチの系列子会社の社員でしたが…横領が発覚し、  
解雇処分となっております…おそらく今回の件は解雇された乃木坂  
グループへの逆恨みかと…」

「そう…予想はしていたけど…バニングス家の方にはウチのゴタゴ

夕の巻き添えになってしまったようね…後で謝罪しないといけないわね…」

そう言えば…あのコ、バニングス家のアリサちゃんとも一緒だったわよね…知り合いなのかしら？

「ねえ春香？さっきの男の子、アリサちゃんとお友達だったのかしら…」

「あ、はい　アリサちゃんと親しげにお話してましたし…うらやましいです（ボソツ）」

あらあら、春香ったら本音がダダ漏れになってるわね

あの子の事が気に入ったのかしら…？

「ねえねえおか〜さん、またあのおに〜ちゃんに会えるかな？」

あら、美夏まで？

フフフ、かなりのフラグメーカーみたいね彼…

「大丈夫よ、またきつと会えるわよ」

彼…とっても面白そうだったし、今度バニングスさんに詳しく聞いてみましょう

S i d e O u t



ホテル個室

キョウスケSide

ブルツ！

な、なんか今…妙な寒気が…？

とりあえずなのは達がいる部屋へ…

ガチャ

「ただいまー」

「あ、恭介！ おかえり！」

「キョウスケ君！ おかえりなの！」

「キョウスケ君、お帰りなさい」

部屋にはヴィータ・なのは・月村姉妹に恭也さんが居た

「…あれ？アリサは一緒じゃないの？」

「アリサちゃんなら親御さんの所よ…さすがにあんな事があつた後

だし…ね」

忍さんが恭也さんの看護をしながら答えてくれた

「そうですか。まあとりあえず無事でなりよりです」

「ねえキヨウスケ君、これからどうするの？私とお姉ちゃん、これから警察に呼ばれているんだけど…」

そか、一応誘拐事件だからな」

警察も関係者から事情を聞くのも当たり前か…でも、そうなるか…

「じゃあ、僕たちは日本へ帰るよ」

「えっ！？帰っちゃうの！？…折角年初めからキヨウスケ君と一緒にいられると思ったんだけど…」

正月を海外でつのも悪くないんだけど…

「ごめんなすずか…でも、僕となのはやヴィータは…」

「3人が…ど、どうしたの？」

すずかが若干緊張した面持ちでいると…

「帰って私とイチャイチャするんだ（なの）！」「」

……つてオイ！！

「そ、そんなあ…orz」

「つか、すずかも真に受けるなよ!! ヴィータもなのはも何言ってるんだ!？」

「え〜っ!?!」

え〜っ!?! じゃありません!!

「おい、高町なのは… 恭介は私んだぞ!?!」

ヴィータも何問題発言を!？

「ヴィータちゃん… だからキヨウスケ君は別にヴィータちゃんの物じゃないよね?」

なのはは目をハイライトに変化させヴィータに近付いていく…

「うっ… キ、キスの回数なら私が1番多いんだから別にいいじゃないか!？」

… あ… 何か今… 色々と地雷踏んだかも…

「… ふ〜ん、ねえキヨウスケ君… ちなみにヴィータちゃんとは何回キスしたのかな? かな?」

… ヤバイ… なのはの変なスイッチが入ってしまった!!

「な、なのはさん? ちょっと落ち着こう! な?」

なのはの迫力に押され、後退りすると…

「…キョウスケ君、ヴィータちゃんとキスしてたんだ〜…そんな話し聞いてないけど…何で？」

いつの間にか背後に立っていたはずかに…って貴女も目が怖いんですが！？」

「い、いや…それは…あはは…」

「おい！神代恭介！！貴様、なのはを毒牙にかけただけでは飽き足らなず…他の子まで！！？」

「ちょ！？恭也さん！？」

シスコンめ…余計な事を…

「な、なのはちゃん…？キョウスケ君と何したの！？」

「ふえ！？えーと…一緒に寝たり、最近はキスしたりキスマーク付けあったり？」

…なのは、地雷爆発しても踏みつばなしなんですわね…

「ふっふっふ…なんだその位の事！私やはやてだつてしよっちゆうしてんぞ？」

……ヲイ

「えっ！？ホ、ホントなの？キョウスケ君…？」

うっ…すずかが捨てられそうな子犬みたいな目で訴えて!?

「あ…したというか…されたというか…」

『でも最近は確かに頻繁にキスしたりしてますよねっ マスター』

うっ おおおい!? インフィニティ!? 何いらん事を!?

「な…なのはちゃん達だけずるいよ!!! キョウスケ君!!! 私ともしてくれるよね!!! ね!!!?」

「ちよっ!?!? すずか、落ち着いて!?!」

「さあしよう キョウスケ君、んー/ /」

つてすずかは唇を近づけて…

ガシッ!

「…すずかちゃん…悪ふざけは程々に…しよつか?」

…バスケットボールを掴むように、なのははすずかの頭を掴んだ…

「な、なのはちゃん?」

「…ちよっ…隣の部屋に逝コウカ?」

メリメリ…

「い、痛い! 痛いよなのはちゃん!?!?」

「お、おい…高町なのは…さすがにやり過ぎじゃ…」

さすがのヴィータもなのはを止めようとするが…

「…ヴィータちゃんも逝く？」

その瞬間、ヴィータは高速で首を横に振り続けた…

「た、助けてキョウスケ君！！」

…すまないすずか…今のなのはは魔王だから無理っす…

「…キョウスケ君、今失礼な事…考えてなかった？」

ギクツ！

「い、いやだな…そんなわけナイヨ？」

「…まっいいか…じゃあ…すずかちゃん…O H A N A S H I  
しよっか…」

「い、いや…！！」

ガチャ…バタン！

なのはは、すずかを引きずりながら隣の部屋へ消えていった…

「…ハッ！ちょ！？ねえ！！キョウスケ君！！妹は…すずかは大丈夫なの！？」

ようやく再起動した忍さん

「……………命だけは多分」

「ちょっと！？何その物騒な表現は！？恭也！！恭也もなのはちゃんを止めて！！」

懇願する忍さんだったが…当の恭也さんは…

ガタガタガタガタカ…

「あれは魔王…魔王だ…いつもののはじゃないんだ…」

つて、布団被って震えてた！？

「恭也！？ちょっとしっかりして〜！！」

部屋中に忍さんの絶叫が響いた…

「な、なあ恭介…すずかは…」

「グイータ…僕らに出来るのは冥福を…じゃなかった 無事を祈るだけだ…」

「うつ…そ、そうだな…」

僕とヴィータはなのは達が消えた扉に向かってすすずかの無事を祈った…

『でも、助けには行かないんですね？』

「」  
「」  
「」

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t



パニパニック!? (前書き)

明けましておめでとうございませう！

今年の目標は…Strikersまで行けるように (笑)

パニパニック！？

キョウスケSide

「…じゃあ忍さん、僕たちはこれで…」

「え、ええ…」

誘拐事件が一段落し、僕たちは日本へ帰ろうと帰宅の準備をしているのですが…

「…なのは、やりすぎだろ…」

「…にはは…反省してるの」

「…つか、その反省の色なしだよ…」

すずかをつれさったなのは…扉から出て来て、僕たちが見たものは…

「フフ…フフフツ…光が…光があ…」

…絶賛ぶっ壊れ中のすずかだった…

「…ま、まあ流石にこのままって訳にもいかないし…」

僕は常備している万能薬を取り出し、すずかに飲ま「キョウスケ君…まさか口移しで飲ましたりしないよね？」…ゲフン…

「あゝ…忍さん、すずかにこの薬飲ませてあげて下さい！忍さんが飲ませて下さい！！」

「キ、キョウスケ君…2回も言わなくても」

…分かってますが、こうでもしないと背後からの視線が！！

「…ハッ！キョウスケ君…私、今まで何を…」

忍さんがすずかに万能薬を飲ますと、何とか再起動したすずか…僕はすずかに

「すずか…世の中には知らない方が幸せって事もあるんだよ…」

と、力説した

「う、うん…」

すずかは、とりあえず納得してくれたようだ…すまないすずか！なのはのアレは…トラウマ確実になるからな…覚えてないならそれに越した事はないよ

「…キヨウスケ君、また失礼な事考えてないかな？」

うっ…相変わらず鋭いな…

「いや…別に何も…」

「ふ~~~~ん…」

なのはがジト目で睨んでるよ!?

「そ、それより2人とも！そろそろ転移魔法で帰るぞ！忘れ物ないか？」

「ああ、大丈夫だぞ！」

「私も…あっ！ちょっと待ってキヨウスケ君！」

「ん？なのは、何か忘れ物か？」

「うん、ちょっと待ってて…」

ガチャ、バタン！

そう言うと、なのはは隣の部屋で寝たままの恭也さんの部屋に…兄妹のあいさつか何かかな？  
ん？部屋の中から声が…？

「なのは、どうしたんだ？」

「ちょっと忘れ物があつて…レイジングハート！」

「な、なのは!?!」

「…お兄ちゃん…忘れ物の…零距离スターライトブレイカー…」

《Starlight Breaker》

ズカアアアア!!

「……なあ、恭介…」

「…言うなヴィータ、言いたい事は物凄く解る…」

ガチャ、ボタン

「お待たせ、さ、行く」

部屋から出て来たなのはの肌はとてもツヤツヤしていたそいな…

「…忍さん、後でこれも恭也さんに…」

僕はさらに、忍さんにハイポーションを数本渡しておいた

「え、ええ…重ね重ねありがとうキョウスケ君…」

「いえ…じゃあなのはにヴィータ！僕の手を掴んで！」

「おう」

「うん」

二人は僕の手を掴み…って、二人とも、何でそんなに嬉しそうなんだ？

…ま、いいか

「じゃあすずか、アリサによろしくね。」

「うん、キヨウスケ君」

シュン！

こうして僕たちは日本に転移した…

## 八神家

「…とまあコレが向こうであつた事件の概要かな」

「は…キヨウスケ君、大変やったんやな」

帰宅後、家に着くとはやて達が出迎えてくれて…というか入口で速攻拉致られ、アリサ達がどうなったか尋問を受けてます…

「まあ 神代が行ったんだ。その位は余裕だろう」

…誘拐犯の拘束は簡単だったんだが…問題は…量産型Wシリーズ…

あれも闇の書のアインスト同様、この世界には存在しないんだが…？

「キヨウスケ君？どないしたん？」

「あ…いや、ちょっと時差ボケかなって」

…勿論、今の時点ではやて達にはその事は話していない…  
とりあえず、謎のロボット軍団（笑）って事にして話はボカして伝えてあります

「…ところではやて…今何時かな？」

「えっ？今夜中の3時過ぎやで？」

…だよなあ…

「んで、そんな夜遅くまで何でウチにいるんだ？なのは・フェイト？」

そう、事件解決で家に着いたのは2時前だったのだが…まだなのは & フェイトがウチに…

「ふえ？今日は皆でオールで騒ぐんだよ？」

「うん、アリサ誘拐事件解決の打ち上げも兼ねてだよ？」

何その決定事項的な！？

「まあ　私らは目が醒めてもってるから、別にお祭り騒ぎはええんやけど…なあ皆？」

「はい」

「まあ…はやてが良いって言うなら…」

「……………（コクッ）」

って皆さん賛成なんですね…ザフィーラ、喋らないと犬化するぞ？  
…あれ？

「そつえばシャマルは？」

いつの間にか居なくなっただが…

「えっ？シャマルさんならさつきキッチンに「シグナム！ヴィータ  
！！急いでシャマルを拘束！！急げ！！」「おう！！」「…  
ふえ！？ど、どうしたの！？」

あ…そついやなのは達は知らないんだっけ？

「なのは・フェイト、八神家には…シャマルをキッチンに入れるな  
という家訓があるんだ…」



「な、なんか凄い家訓だね…でもどうして？」

「…シャルルの料理は…」

「…料理は？」

「…一品料理で一個大団は殲滅可能な威力が…」

…いやマジで…！

「…そ、そうなんだ…」

「だから命が惜しかったシャルルには料理をさせない様にしないと…」

「恭介！！間一髪間に合ったぞ！！」

「…危うい所だった…」

ヴィータとシグナムがシャルルをバインドで何重にもかけて連れて来た

「ちょ、ちょっと皆！！私はまだ何も…」

「…してからじゃ遅いんだ！！！！」

「…は、はやてちゃん…皆がいぢめる…！！」

シャルルは涙目ではやてに訴えかけるが…

「…さて と、ほな料理の準備しないとな」 キヨウスケ君、手伝つてな？」

はやてはシャマルをスルーした！！

「あ、ああ…分か「ねえ！！スルーなの！？」った、夜中だから力ロリー控えめ「ちょ！？キヨウスケ君までスルーなの！？」な物でも作るか…」

…すまんシャマル、美味しい物が食べたいんだ！！

「…そういや、なのはやフェイトは家族の人達に外泊許可はとったのか？」

「「うん！」「」

…フェイトはともかく、なのはは父親の土郎さんがよく許可してくれたな？

「あ、お母さんがお父さんを物理的に説得するから大丈夫って言うてたの」

…今何か不穏な単語がなかったか！？

「私はリンディさんに言ったら二つ返事でOKだったよ…電話の後の方で、クロノが何か言っていたけど…何だったんだろうっ？」

うっ…それは養子の話しが進むにつれてシスコン化しつつあるのか！？

「まあ…それなら大丈夫か。それじゃ、ちょっと待っててな？」

「うん キョウスケ君の手料理って何か久しぶりなの〜」

「うん…そうだね。」

「はは、そう言ってくれと腕を振るい甲斐があるな。じゃあ待っててね」

僕とはやてはキッチンに…とその前に、

「シグナム・ヴィータ・ザフィーラ！シャマルの監視お願いな？」

「ああ！」

「任せとけ恭介！」

「……心得た！」

3人で見張っていれば…大丈夫だろう…？

Side Out

ヴィータSide

はやてと恭介はキッチンに向かつていった…後はシャマルを見張ってれば、2人のギガうま料理が食えるんだ

「み、皆!? 私の扱い最近酷くない!?!」

拘束されたシャマルが抗議してんが…

「はやてと恭介のギガうま料理の為だ!」

「…許せシャマル、私も食事は安全に食べたいのだ」

「…毒味役にはもうなりたくないのだ」

やっぱり皆も美味しい物が…ってシャマルのヤツ…ザフィーラに毒味役やらせてたのか!?

「よく生きていたな…ザフィーラ」

「……………お陰で三途の川も顔パスで渡れるようになったがな」

いやいやいや!?!その川渡ったらマズいだろ!?!?

「と、とにかくだ!恭介とはやてが料理作ってる間は、私らがシャマルを監視してんかな!」

「うう〜」

「ね、ねえヴィータちゃん…シャマルさんかわいそうだよ〜」

高町なのはが何か言ってるんが…はあ…コイツは分かかってねーな…

「ねえヴィータ、そんなにシャマルの料理って…その…」

「ああ、シャマルに任せたら…良くてヤモリやイモリの粉末入れる位だが…」

「よ、良くてイモリの粉末なの!？」

「で、最悪は…料理が毒そのものになって食卓に並ぶんだぞ!？」

つか、何で食べられる材料使って毒ができたよ!?!？

「そ…そうなんだ…」

「さ、さすがにそれは…ね」

「だから私らは、シャマルをキッチンに入れないようにしてんだよ!…前までは恭介やはやと一緒なら入ってもよかつたんだが…」

「えっ!?!前までは…って?」

「…シャマルが最近通販にハマって、怪しげな物を取り寄せては料理に混ぜようとしてな…神代や主が何とか気付いて止めさせたからよかつたもの…」

「ええ〜!?!シグナム〜 別に怪しげな物じゃないわよ?」

「たわけ!?!訳の解らぬ物ばかり買い込んでいるではないか!?!しかも以前パニなんて食材を買って、それを見た主が卒倒したではないか!?!」

「あ、あれは私も知らなかったのよ」

「ねえヴィータちゃん…パニって何？」

「うっっ…」

あ…あれは私も思い出したくもねー！！

「…恭介がアフリカ料理だって言ってたが…」

あれは…はやてが卒倒して当たり前だよな

「えっ？じゃあ現地料理としてちゃんとあるんだよね？はやてが卒倒したって…何で？」

「…ああ、そのパニって料理…栄養価は高いんだが…：蛾の幼虫、つまり芋虫料理なんだよ…」

「…いいいいっ！！芋虫料理ーっ！！？」

「あー！！思い出したくもねー！！鳥肌が！！ だからその一件以来、キッチン出入り禁止になってんだ！分かったか！？」

「…」

ん？2人の反応がねーな？

「…ヴィータ、2人とも気絶してるぞ」

「はあ！？つたく…仕方ねーな。

ザフィーラ、コイツらをソファアに寝かせるの手伝ってくれ」

「……………ああ」

まあ…気絶する気持ちもわからなくはねーけどな…

「……………確かヴィータも気絶したのだったな。後でキョウスケに看病されて嬉しそうだったが…」

「なっ！？う、うるせー／／」

変な事ばっか覚えてんじゃねーよ！！

…まあ確かに嬉しかったけどよ…／／

あゝ、早く恭介の料理出来ねーかな

S i d e O u t

## 2 度目の初詣…えっ？（前書き）

某サイト内の無料ゲーム 【萌えCanちゃんじー！】

アレで何とか、はやてやフェイトやヴィータ似を作成できるんじゃないかね  
？と思いつつ軽くハマってます（笑）



## 2度目の初詣…えっ？

キヨウスケSide

「ごちそうさまでしたー」×多数

「はい、お粗末さまでした」

僕とはやての合作ヘルシー料理を食べ、皆でリビングでくつろいでいます

…料理持ってきた時、なのはとフェイトの顔色が少し悪かったが…今は大丈夫みたいだな

…相変わらずシャルマルから暗く重いオーラが出ているが…

「さて、はやて 今日はどうするんだ？」

徹夜したから、まったり寝正月かな？

「んー？ 今日も初詣に行くで？」

……え〜と

「はやてさん…初詣は数時間前に行ったのは覚えてます?」

…途中アリサ誘拐事件が起こったが…

「いややな〜 ちゃんと覚えとるよ」

ぢゃあ何でさ…?

「そら着物来て行きたいからに決まっとるやんか〜」

「…だったら大晦日から着物着てれば…」

「ええ〜!! だつて夜中やったら暗くて…その…キヨウスケ君に着物ちゃんと見てもらえへんし…/」

…あゝ、でもはやて達の着物って僕が魔力固定化して作ったから…よく見ているんだけど?

つか、はやて達が着物カタログで指定してきたぢゃん!?

『…マスター、乙女心をもう少し勉強して下さい!!』

…???インファイから電波が?

「な、なら私も一回家に帰って着物着て来るの!!」

「あ、私も急いで帰って着物着てくるから…キヨウスケ…その…見  
てくれるかな?/」

なのはとフェイトが横から急に着物着てくると発言!?

これは…2回目の初詣(って初じゃないよな)確定か…はあ…

「ま、2人の着物姿か。楽しみにしてるよ」

「ホ、ホントに!!? / /」

「ああ、なのはもフェイトも可愛いんだしな(ニコッ)」

「か、可愛いって…あ…あうっ… / /」

「キ、キョウスケ君…その台詞にその笑顔…反則だよ… / /」

ん?二人とも急に顔を真っ赤にして…甘酒でも飲んでた?

『(はあ…だからマスターのせいなんですよ!?)』

また電波を受信した…ような?

「じゃあ…2人とも支度出来たら携帯に電話してな?現地集合でいいかな?」

「うん!!じゃあ行ってくるね!!!!」

ドタドタドタ、ボタン!!

って2人とも、物凄い勢いで出ていったな…しかし徹夜だったのに元気だな

「…あ、送っていけばよかったかな?」

朝方とはいえ、まだ外は薄暗いし…

「…別にいいんじゃないか？ アイツらなら、たいていの変質者なら返り討ちに出来んだろうしよ」

「…そやね、むしろ変質者の方が心配や…」

…あ、あれ？

「なあ、はやて・ヴィータ…何か機嫌悪くね？」

「「ベーツーにい〜〜！！」「」

…いや 確実に機嫌わるいぢゃん…

「それじゃ皆！私達は着物に着替えましょ」

…いつの間に復活したんだシャル！？

「そやね〜…あ、キョウスケ君」

「何だ？はやて？」

「別に私の着替え、覗いてもええよ」

「ぶっ！？な、何言ってるだはやて！？」

全く…この子狸は…！

「あ、私も見られても…つか言ってくれれば…いつでも…／＼」  
ヴ、ヴィータ!?

「私もキヨウスケ君なら問題ないわよ ついでに揉んでもOKよ」

…シヤマルに至っては発言危なくね!?つかドコをだよ!?!?

「あら、勿論胸よ」

…そして心を読まないでくれ…

「くっ…私だって、年齢詐称薬を飲めば胸は大きくなるん(だ)や!」「」

はやてもヴィータも触発されるな!!

「…はあ…シグナム、3人を別室に連れていってくれ…」

唯一暴走してないシグナムにお願いし…ん?何かシグナムの様子が…?

「あ、ああ…分かった。そ、それで神代…覗くのか?」

「だあああ!!あ、あのなあ…別に覗かないから安心して着替えてきてくれ」

シグナムもはやて達の言う事を真に受けなくても…

「む…いや…別に私も…見てくれても…(ボソッ)／＼」

「ん？何か言った？シグナム？」

「いいいや！！な、何でもないぞ！！？」

「ならいいけど……」

「で、では主！行きましようか？」

「ほなキヨウスケ君、私らの着物姿を楽しみに待っててな」

「じゃあちよつと行つてくるな……オラいくぞシヤマル！！」

「あゝん！！ヴ、ヴィータちゃん！！？引つ張らないで……！！」

は yet はシグナムに連れられ、シヤマルはヴィータに引きずりながら連れていかれた……

「……そういやザフィーラは初詣どうすんだ？人型用に紋付袴でも創るつか？」

「……いや、我はアルフ推奨の子狼モードで……」

「……もしかして、割と気に入ってる？」

「……燃費がいいのでな」

あ……そうですか

~~~~~

「あ、誰から電話…ってなのはから？…もしもし？」

「もしもし？キヨウスケ君？あなたの彼女さんののはだよ…」

ピッ！

「……………」

~~~~~

ピッ

「…もしもし？」

「キ、キヨウスケ君！？いきなり切るなんて酷いの〜ッ！！」

「…いや、何が幻聴が聞こえたんで…で、どうかしたのか？」

「あ、そうだった！あのね、着物の着付け終わったから連絡したの

」

早っ！？ ついさっきはやて達が着替えに行ったのに！？

「それはもう早くキヨウスケ君に着物姿見せたくて…にやはは／＼」

…携帯越しでも心は読めるんかい？

「それでね…キヨウスケ君、早く支度出来た事だし…その…よかつたら…先に私と2人つきりで…って!?ち、ちよつと!?フェイトちゃん!?!?私がキヨウスケ君と話してるんだよ!?!」

…ん?フェイトも一緒にいるのか?

「なのは!!そんなの抜け駆けはダメだよ!!ちよつとなのはの携帯貸して!!」

「ちよ!?!フェイトちゃん!!き、着物引つ張らないですよ…って、まってフェイト…ソーツ!?!」

な、なのは?

「あ、あの…「あ、もしも?キヨウスケ?」ってフェイトかな、何があったんだ?」

「ちよつとなのはの携帯借りただけだよ?決してバインドで何重もグルグル巻きなんかしてないから大丈夫!」

…ぜんっぜん大丈夫じゃねーよな?それ…

「ち、ちなみに何でフェイトもなのはの家に?」

「えっと…リンディさん達でも着物の着付け分かる人がいなくて…で、なのはのお母さんなら出来るって聞いたから私もお願いしたんだ」

「それで一緒なんだ…」



なのははおそらくバインド簀巻き状態だろうが…

「そ、それでねキヨウスケ…予定より早く着付け出来たから…予定少し早めでもいいかな？」

早くキヨウスケに…その…見てもらいたいし…ね／＼？」

「まあ…僕は別に構わないが…はやて達次第…」

ガチャ！

「キヨウスケ君！どや？私らの着物姿は？」

ドアが開かれ、はやて達が着物姿で立っていた…

「つか速っ！？着物の着付けってそんなに早く出来たっけ！？」

「キヨウスケ君…それは禁則事項や」

はやては某未来人の朝 奈さんの決めポーズをとって…ん？  
後ろの皆の様子が…

「…主にあんな技法があるとは…」

「…はやて…あれは反則すぎんだろ…」

「…というか…あの技は世に出したらマズいわよ…」

シグナム・ヴィータ・シャルが何かとても気になる事を言っているが…

「…はやて、一体どんな方法で…」

「フツ…それは乙女の秘密や」

…ま、それはさておき…

「…キヨウスケ君、スルーはあかんよ」

「…フェイト、はやて達も着物着替え終わったみたいだから8時位に待ち合わせでいいか？」

「うん、分かった それじゃまた後でねキヨウスケ」

ピッ

「ほんまにスルーなんやね…で、今の電話はフェイトちゃんからなんか？」

「ん？ああ、フェイト達も着付け早く終わったから早めに集合しようって」

「まあ…私らも着付けバツチリやし…で、キヨウスケ君？」

はやては何か期待にみちた瞳で訴えかけて…やっぱアレだよな

「…ああ、はやて・ヴィータ 着物姿可愛いね！とても似合ってるよ」

「ほ、ほんまか！？あ…ありがとなキヨウスケ君／／」

「うっ…あ、ありがとう…／＼」

はやてとヴィータはモジモジしているが…？

「シグナムもシャマルも綺麗だよ」

「そ、そうか／＼！？世辞でも悪い気はせんな…／＼」

「ふふ ありがとうキヨウスケ君

御礼に後で帯引つ張って脱がしていいわよ キヤ／＼」

…キヤ ぢゃねーだろ…あ！

「シャーマールーうう…！」

「は、はやてちゃん！？どうしたの」

あゝあ…シャマルのやつ、ちょっとふざけ過ぎたみたいだな

はやてが暴走したシャマルを止め「それは私が先にしてもらうんや

！！ええかシャマル！！主命令や！！」「…てはくれなかった

てかシャマルの案に便乗！？

ほ、僕はしないぞ！？

「はあ…とりあえず眠気覚ましにコーヒー飲も…」

つか、はやて達…よくテンション落ちずに騒げるな

あ、そーいや僕は紋付き袴にした方がいいのか!?

…ま、いいや かつたるいし…

S i d e  
O u t

初詣とおみくじと…？

前回までのあらすじ…

なぜか2度目の初詣に行く事に…

キヨウスケSide

僕たち八神一家は、なのはとフェイトと待ち合わせ場所の神社の入口近くの所で待っているのですが…

…考えてみて下さい。

八神一家…ぶっちゃけ美少女&美人軍団な訳で…

そんな軍団が入口付近で着物姿で立っていると…目立つわ目立つわ…結果…

「……何か視線が突き刺さるんですが……」

そう！通り過ぎる人々からの視線が…特に男からは僕に殺気混じりで！！

中にはシグナムやシャマルをナンパしようと近づく某芸人の藤風なチャラ男が近づくが…

「…失せる！」

とシグナム姉様が殺気を浴びせ撃退！

…まあレヴァンティンを構えないだけマシか…

「…にしても、おせーな…なあ恭介、アイツらとの待ち合わせ時間つてもう過ぎてねーか？」

「ん…まあもう少し待ってみようよヴィータ」

「でも…早くなのはちゃん達が来てくれないと…そのうちシグナムに斬られる人が出るかも」

う…っ…それは有り得る…

「人を何だと思っているシャマル！！」

ふう……どうやら分別はちゃんとあるみたいだ…

「私だってこんな往来でレヴァンティンを抜いたりはせん！！ちや

んと人目の付かぬ場所で刀の錆にしてくれる！」

…をい…結局斬るんかい!?

「……………ん？キヨウスケ、どうやら来たようだ」

「ほ、ほんとかザフィーラ!？」

「キヨースケく〜ん!！」

「おまたせーキヨースケ!！」

少し離れた場所に着物姿のなのはとフェイトが…って!…そ、そんな大声で叫ぶとまた…

「…あのガキ…何だ!？」

「チツ、ガキのクセに6股かよ…」

「あ、あんな年上まで毒牙をかけやがって…」

…ああ…通行人（男）の音が駄々漏れだよ…

なのはとフェイトが合流し、

「ごめんねキヨウスケ君、遅れちゃって」

「まあ…大して待ってないから大丈夫だよ」

実際は約30分位待ったが…

「なのはちゃんもフェイトちゃんも…何かあったん？」

「えと…ここに来る途中でクラスの男の子に会って…」

「それで…一緒に初詣行かないかって誘われたの！  
勿論断っただけ…しつこくって！」

あゝ…早い話しナンパされて断つたのにしつこく付き纏われて遅れたって事が…確かに二人ともスペック高いからな。学年…いや学園トップクラスだって前聞いたような…

「んな奴ら、とつとつブツ潰してくればいいじゃねーか！」

ヴィータ…一応僕のクラスメイト（らしい？）だから…あまり物騒な事は…

「にやはは…そうしたかったのは山々だけど…さすがに一般人を砲撃で吹っ飛ばす訳にはいかないよ…」

…危なかったな、名も知らぬクラスメイトよ

「それで…ねえキヨウスケ君…」



「ん？どうしたなの？」

何かモジモジと体をくねらせて？いるが…

「この晴れ着姿…どうかな？変じゃない？」

…ああ、なるほど

「そんな事ないよ、とても似合ってるよ（ニコッ）」

「ホ、ホント！？あ…ありがとうキョウスケ君…／／」

「あっ！なのは！抜け駆けはずるいよ！？」

キョウスケ！！わ、私のはどうかな？」

「うん、フェイトもとっても可愛いらしいよ」

「か、可愛い！？あ、あうう…／／」

なのはとフェイトの晴れ着姿を褒めた途端に顔を真っ赤に染めて…

ギョー！！

「痛っ！な、何！？はやて！？ヴィータ！！？」

二人が手の甲をつねってきた！？

「キョウスケ君…今鼻の下、伸びとったで…」

「ふん！！デレデレしてんじゃねーよ！！」

…何で怒ってるのさ？

「はあ…キヨウスケ君、はやてちゃんやヴィータちゃんの乙女心をもう少しは…」

シヤマルが小声で何か言っていたが？

「はあ…相変わらずの…まあええ

じゃあ皆、気分転換に皆でおみくじでも引いてみよか？」

「あ！そうだね〜夜中来た時は、夜店巡りしてて忘れちゃってたし」

まあ 何かとドタバタしてたしな〜

で、皆でクジを引いたのだが…

「皆、どやった？」

「はやてちゃんは？」

「ん？私は大吉や」

「いいな〜…私なんか未吉なの〜」

まあ、要約すると…

なのは…末吉

フェイト…中吉

はやて…大吉

ヴィータ…大吉

シャマル…吉

シグナム…凶

…って凶！？

「わ、私だけ…運勢が……」

うわっ！？シグナムめっちゃ落ち込んでるよ！？

「ま、まあ　あまり気にせん方がええよ…そ、そや！今年の始めの内に、悪い運を出しきったと思えば…」

「まっ！私は大吉だけどなっ」

「ぐはっ！」

ヴィータさんが何気に止めを刺してるよ…

あ、ちなみにザフィーラは子狼モードの為、おみくじは引いてませんよ？

「ね、ねえキョウスケはどうだった？」

「ん…僕は中吉だよ」

「あ、私と同じなんだね…な、何だかうれしいな…／＼ふふっ、キョウスケとお揃い」

僕はフェイトと同じ中吉…なのだが…内容が…

特に最後の待人の項目って何さ!?

【待人…既に現れている…が、後にも多数続々と来たる特に、ツンデレツインテール・青髪格闘姉妹・ロリっ子召喚師は確実でしょう】

…このピンポイントで狙ったような内容は…

しかも最後のはエリオへのフラグ立たなくなるの!?

「…キョウスケ?どうかしたの?」

「い、いや!?!?な、何でもないよ!?!?」

「そっ?ならいいんだけど…」

ま、まあコレはまだ未来の話だしな…よし!気を取り直して!!

「さて、じゃあこの後どこかで外食でもいいところか？」

「あ、たまにはええかな」

「なのはやフェイトも一緒にどう？僕がご馳走するからさ」

「ふえ！？で、でも…」

「何か悪いし…」

2人とも遠慮してるのかな？

「はあ、別に今更遠慮する仲じゃないだろ？」

「う、うん…／＼」

「あ、ありがとうキョウスケ…／＼」

さて、じゃあどっか開いている店に…

ギョー！

「…って、はやてさんヴィータさん…2人して僕の足を踏んでらっしゃるのは何故…」

「…べ〜つ〜にい〜） なあヴィータ？」

「…ああ、べ〜つ〜にい〜）…フン！」

グリグリッ！

「って痛いって!？」

な、なんなのさ一体!？

その後、開いていたファミレスにてご飯を食べました…

あ、ザフィーラは人型に戻ってますよ？ …初めの入店時に犬に間違われ、入店を遠慮された為に急遽人型になったのだが…

「……我は狼…気高き狼なのだ…決して犬では…しかし主は犬が欲しいと言っておられたしこのまま犬として…いやいや!!これでは守護獣としてのプライドが…」

…何かの葛藤と戦っていたザフィーラだった…

S i d e O u t

捧げられた生贄！？（笑）

## 時空管理局本局

キョウスケSide

僕は今、はやて達と共に時空管理局の本局へ来ています…

理由は…まあはやて達は闇の書事件の事後処理…というか罪の償いの為、管理局へ入局して罪を償うという選択をしたので入局手続き？で来たのだ

もっとも一応は試験や面接はあるようだが…

「みんなはこれから個人面接と第二試験やね」

「ですね」

「ついててあげられたらええねんけど…マスターは近くに居たらあかんそうやから…あかん！！大丈夫か心配や〜！！」

「は、はやてえ…少し過保護過ぎだよ」

「ええ〜！そないな事あらへんってキヨウスケ君〜」

そんな慌てている所見ると説得力ないんですが…

「別に初めてのお使いって訳じゃないんだし…な？」

「うう…そやけど…やっぱりそれでも心配や〜！！皆！ひとりで大丈夫なん！？」

「へ、平気だよはやて、ちゃんと真面目にやるからな」

「はい、任せて下さい主」

「はやてちゃんは心配性なんですから〜」

「……………（コクッ）」

「そ、そか… ええか皆…改めて言つとくけど、私らがしたこと…罪は罪や

私も含めて皆で背負って時間かけて償ってかなあかんことや…そやけど自分を責めすぎてもあかん！

ご迷惑かけた皆さんには背筋伸ばしてまっしぐ謝る」

「「「「はい「「「「

「で、後はお仕事一生懸命や！皆で一緒に居られるようつかんばろ！」

「うん！はやて…！」



「よしよし ええコやなヴィータは…がんばるな」

ナデナデ

「えへへ」

はやてに頭を撫でられて嬉しそうだなヴィータ…

「そーいえば、キヨウスケ君はヴィータ達とは別になるんやっけ？」

「ん？ああ、確かクロノが迎えに来てくれて…」

ゾクッ！

クロノの名前を出した瞬間、僕たちの背後から黒いオーラが…!？

「…神代」

「…シグナム、言いたい事はすっごく解るが…」

ガタガタガタガッ

場所的にオーラの発生源の1番近くにいたシャマルは涙目で震えてるし…

「…キ、キヨウスケ君」(泣)

「…きき恭介ええ」(泣)

はやてとヴィータは泣いてるし…はあ

「…いい加減落ち着け、なのは・フェイト」

オーラの発生源は…なのはとフェイトだった

「い、いやだな〜キヨウスケ君！私、落ち着いてるよ？ねっ？フェイトちゃん？」

「う、うん！そうだよキヨウスケ！！至って冷静だよ！？」

「…だったら殺気を消してくれ…はあ…」

さて、実は本局には僕たちの他になのはとフェイトも同行しているのです

…まあこの2人はほぼ私用で来ているんですが

その私用に実は僕やはやて達も絡んでいるのが実にお約束的な…

こうなった経緯は昨日まで遡り…

八神家、リビング

「2泊3日の温泉旅行？」

「うん！私の所とフェイトちゃん達での家族合同旅行なの」

「本当はアリサやすずかも誘いたかったんだけど…今海外だし…」

あゝ…まだ帰国してなかったんだ…まあ事が事だったし…

「でね、キョウスケ君達も参加でいいよね？」

「あゝ…あんなあ、なのはちゃん…」

「僕やはやて達は行かないぞ？」

ピシッ！！

あ、なのはとフェイトが凍り付いた

「な、なんでなの…!!？」

なんで…って

「キ、キョウスケ！！もしかして私に飽きたの！？飽きたから捨てるの!？」

「って！フェイト！変な事口走るんじゃない!!！」

誰だ！？フエイトに変な知識詰め込んでるのは！？

「…まあ、こう見えても私ら保護観察中やから…行動拘束はそないないんやけど、一応旅行とかは自粛せんと…真面目に罪を償っていかんとあかんし…」

「で、そーゆー訳ではやてが行かないのに僕らだけ行ける訳ないって事だな」

「別にキヨウスケ君は行つてもええんよ？私らは自粛しとるだけやし…」

「あのなあ…僕だつて蒐集には関わつてたんだし…それに、はやて達だけ留守番に残して僕だけ遊びに行ける訳ないじゃんか」

「せやけど…」

はやてはまだ何か言いたそうにしてるが…

「ねえ、キヨウスケ君…はやてちゃん達が来てくれればキヨウスケ君も参加してくれるの？」

「ん…まあ、な」

「でもはやては…」

「うん、ごめんな…なのはちゃんフエイトちゃん今回は…」

内心ははやても旅行行きたいんだろっな

今まで足が不自由で遠出なんてしてなかったから…出来る事なら旅

行に行かせたいが…本人が自粛って言っているからな…

「う〜くん…あ、そうだ!」

「どうしたの?なの?」

「クロノ君にはやてちゃんを説得してもらおうよ!」

…何故そこでクロノの名が!?

「だって、はやてちゃんの保護観察責任者ってクロノ君でしょ?」

…そうだったっけ?

まあ、おそらくクロノが書類上そうしたのかな?

…でも実際は保護観察なんかされてないんだろっけどね…

「そっか!じゃあクロノがはやてに旅行に行くように言ってくれ  
ば…」

「あ…あの〜、なのはちゃん?フェイトちゃん?」

さすがにはやても話の展開の早さに困惑しているが…

「安心してはやてちゃん!ちゃんとかクロノ君を説得してはやてち  
ゃん達も行けるようにするの!」

「うん!だから安心して私達にまかせて!」

何か微妙に話がズレてきてるし!?!別にクロノが旅行禁止にしてる

訳じゃ…

「あの… 私は自粛しとるだけやから…」

はやても同じ事を思ったらしく、2人の暴走を止めようとするが…

「…はやて、多分2人とも聞いてないよ…」

こう暴走した2人には正論は通じないさ…

「あはは…」

「フツ…フッフ…覚悟して(なの)クロノ(君)…」

この瞬間、クロノは理不尽な生贄となった…

回想終了

とまあ…そーゆー訳でなのはとフェイトも本局に居るクロノに会う  
為に、僕たちの出頭に付いて来たのだった…

「じゃあはやて、行ってくるよ」

「うん、しっかりなヴィータ！」

「それではまた後ほど」

「行ってきます はやてちゃん」

「……………」（コクッ）」

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラは面接がある為試験場に向かった

「はやて〜！ 恭介〜！ お昼には帰るからな〜！」

「ああ！ 皆しっかりな〜」

「う〜ん… ホンマ大丈夫やるか…」

「大丈夫だよはやて、シグナム達はしっかりしてるんだから」

「そつだよはやてちゃん！ 絶対ぜーったい皆受かるよー！！」

「うん… ありがとな フェイトちゃんなのはちゃん」

なのは達がはやてを励ましていたその時、

「おーいー！！」

こちらに手を振って向かってくる黒髪の少年… 生贄クロノが現れた  
！！

「お…おっ クロノ…」

「待たせたか？…どうしたキョウスケ…顔色が悪いが…？」

「…その理由はすぐ解るさ…クロノ、折れた線香の1本ぐらいは立ててやるから安心して成仏してくれ…」

「なんだそれは！？…ん？なのはにフェイトも一緒だっ…」

ゾクッ！

ああ…いきなり覇気を放出しましたか…

「…ねえクロノ君…お願いがあるんだけど…」

「…な…なんだ？お願いって…」

「…そのこの部屋…今使っていないみたいだから…そこで命を刈り取ってお話しよう？クロノ…」

「フ、フェイト！？…どうしたんだ！？…てか今物騒な単語を言いかけなかったか！？」

「フフッ…そんな事ないよ いやだな…クロノったら」

「お、おい！キョウスケ！！…なのはやフェイトに何があつたんだ！？…また君絡みか！？」

さすが執務官！いい読みしてるな

ガシッ！



「さあクロノ君…逝こうか？」

「ち…ちよつと待て！明らかに字が違うぞ！！？お、おい！キョウスケ！！助け！！」

ガチャ、バタン！

「…なあキョウスケ君…私のせいなんかな？」

「…いや…これは不幸な事故だよ…とりあえず…旅行には行くところか？」

クロノの供養にもなるし…

「せやね…クロノ君、迷わず成仏してな？」

そのすぐ後…管理局本局に大きな破壊音が響いたという…

S i d e O u t

振り返れば…何故そこに!?

前回までのあらすじ…

クロノが生贄に…ハッ!?

「クロノの効果発動!このクロノは闇属性モンスターを召喚する時、  
1体で2体分となる!!僕はクロノ1体生贄に…ブラックマジシヤ  
ンを召喚!!ブラックマジシヤンの攻撃!黒魔導!!」  
ブラックマジック

『…現実逃避は気がすみましたか?』

「……はい」

キョウスケSide

なのはとフェイトがクロノを拉致って数分後…

「…よく生きていたな…クロノ」

無事…かどつかは微妙なボロボロの姿のクロノがあった…

「……ああ、死ぬかと本気で思ったがな…」

そ、そんな攻撃受けてたんだ…

「つか2人とも…」

僕はジト目で実行犯の2人を見て…

「にははは〜 やり過ぎちゃったの」

「ちよつとだけ…やり過ぎちゃたかな？」

やり過ぎちゃ…って

「まったく…なのはもフェイトも…いつも言ってるだろ？クロノ相手には、ちゃんと半殺し程度にしとくように…！」

「うん、再起不能はマズイんだよね〜」

「私はちゃんと加減してるんだけど…」

「ちよ！？ちよつと待て！君はフェイト達にそんな事を言っているのか！？」

そう言いながら、クロノが何やら真つ青になって詰め寄ってきた

「ん？いや〜こう言っておかないと2人とも最初から全力全壊で瞬殺するからな〜」

勿論友達としてのやさしさからだよ？ちゃんと手加減するようにって言っているんだし

「……何故半殺しが前提なのか疑問だが…なら！僕を襲わないよう言えばいいじゃないか!？」

「……………あつ」

「お前!？今「あつ」って言ったな!？さては今思い付いたな!？というかその事に今まで気付かなかったのか!!？」

まくし立てるようにクロノが騒いでいるが…そっか〜 その選択肢はなかったな〜…

「…………クロノ君、それ以上キョウスケ君に乱暴な事したら…」

「…クロノに新しいマニユーパーの的になってもらうよ？フフ…初めてだから加減が効かないけど…」

「あ、それいいかもフェイトちゃん。

私も新しい集束魔法があるから試し打ちの的が欲しかったの〜」

…………… ああ、詰んだなクロノ…

「ちょ！？ま、待ってくれ2人とも！！？分かった！！もう彼には危害は加えないから！！だからデバイスを待機状態にしてくれ！！」

「「……………チツ」」

……………怖ッ！？

「あはは…なのはちゃんにフェイトちゃん…過激やなあ…」

はやて…君もそちら側の人ではなかったか！？

「…キヨウスケ君、また失礼な事考えとつたやろ？」

「い、いやだな…ソナコトナイヨ？」

相変わらず鋭いな…

「ゴホン、え…八神はやて なのは達からの要望であった旅行の件だが…こちらとしても、そこまで君の行動を拘束するつもりもないので行ってくれて構わない…というか行ってくれ！！でないと僕の命が危ない！？」

…クロノ…トラウマになったか…

「あはは…は、はい解りました」

はやても事の経緯を見た為、今度は断れないよな…

「よかったね！はやてちゃん！」

「これでキヨウスケも一緒に行ってくれるよね？」

「あ、ああ……」

まあ……これはこれでいいのかな？

「それではキヨウスケ、君をこれからダイテツ副元帥の元に案内するから……頼むから大人しくしていてくれよ……」

「あ……まあ善処しとくよ」

いよいよご対面か……

「ふ、不安だ……ああ、なのはにフェイト 君達ははやて一緒に帰っていいぞ？」

「ええ！？クロノ君！私達もキヨウスケ君と……」

「済まないが……ダイテツ副元帥の指示でキヨウスケ1人での面会なんだ……僕も部屋まで案内するだけだし」

何！？ますますあやしさ大爆発だな……

「そっか……それじゃ仕方ないよなのは……」

「フェイトちゃん……分かったよクロノ君」

まっ何かあった場合、僕1人の方が身軽だしな

「あ、そや！キョウスケ君 今日夕飯は何がええ？」

「ん〜…はやてに任せるよ はやての料理なら何でも美味しいしね」

「そ、そか！／＼ほんなら腕によりを掛けて美味しいの作って待つとるな？」

「ああ、楽しみにしてるよ はやて」

「は、はやてちゃん！？私もお料理手伝うよ！！」

「わ、私も手伝うよ！はやて！！」

急になのはとフェイトも料理を作ると言い出した！？

「で、キョウスケ（君）に私の手料理も食べて欲しい（の）！！」

…まあ美味しい物を食べられればいいけど…

「ほ〜…2人とも、それは私に対する挑戦なんやろか？ええで！！その勝負受けたったる！！！」

って！いつの間にか料理対決！？

「ほな【第1回誰の料理が1番おいしいか選手権大会】開催や！！！」

「「おおー！！！！！」」

段々妙に大事になっていくような…

「なら優勝者にはキョウスケを1日好きに出来る権なんてどうだ？」

「ってオイクロノ！？テーマ何言いやがる！？」

「フツ、何…いつものお礼（仕返し）さ」

「コイツ…さっきの事まだ根に持ってるな…」

「…クロノ（君）！グツジョブ（や）（なの）！！！！」

「…ああ、どうせ僕に拒否権なんてないだろうな…僕の人権とかって…」

「ほな急いで材料買わなあかな！」

「負けないよ！はやてちゃん！フェイトちゃん！」

「私だって負けないよ？」

「…3人とも…火花を散らしていらっしやるし…」

「キョウスケ君、楽しみにしててな？」

「美味しいお料理作って待ってるの！」

「キョウスケ！あの…私、頑張るね」

「タッタッタ…」

「そう言い残し、3人は転送ポートへ向かっていった…まあ、この戦



い…シャルルが参加してないだけよしとするか…

「じゃあキヨウスケ、副元帥がお待ちだ 行こうか？」

「…ああ」

いよいよ…ご対面か…一体何者なんだ？

クロノの案内で、とある部屋の前まで来た…

「ここだ、この部屋にダイテツ・ミナセ副元帥がいらっしやる…そうでもないようにな？」

「はあ…分かったよ」

原作には居ない存在…その正体がようやく解るのか…

コンコン！

「クロノ・ハラオウンです！神代恭介を連れて来ました」

「解りましたクロノ執務官、では彼に入って貰って下さい」

…ん？今の女性の声…どこかで聞いたような…？

「ではキョウスケ、ここから先は君1人で入ってくれ」

「ああ…とところでクロノ、今の声の人は？」

「今のは副元帥の専属秘書のレフィーナさんだ」

…レフィーナ　ねえ…

ま、部屋に入れば解るか…

「…神代恭介、入ります」

ガチャ

僕は意を決し部屋に入ると…1人の老人と若い女性が…

「…久しいのキョウスケよ」

「お久しぶり！キョウスケ君」

…僕の目の前に見知った顔が…

「…つて！あんたらかい！！？」

僕をこの世界に送った神とスクルドさんが居た…

なんでさ…

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

何気に世界の危機!?

前回までのあらすじ…

ドイツ副元帥と名乗る人物と面会すると…

なっ!?!? 神いいい!?!?!

キョウスケSide

…なんでさorz

「久しいしの〜 さくらを与えて以来じゃの〜」

いや!それ以前に!!

「とりあえず！何でここに！！？しかも副元帥って何さ！！！！？」  
と、ツツコミを入れてやった！

「ふおおおおお…それは、「それは神様が不祥事を起こしたからですよ！」…ス、スクルド君…そんなバツサリ言わなくても…」

「…不祥事？なんです？スクルドさん」

…何か聞くと不幸になりそうな気がするが…

「キヨウスケ君、この世界に来て何か…ぶっちゃけスパロボ的なイレギュラーな存在に会ったりしてないかしら？」

…イレギュラーって…

「…思いつきり心当たりが…闇の書のアインストや量産型Wシリーズとかですか？」

リリカルにスパロボのキャラが居るのは異常だよな

「…キヨウスケ君、その原因は…この駄神のせいなんですよ」

……………は？

「えっと…スクルドさん、どうゆう事ですか？」

「実は…神様があなたをこの世界に送った後…神様が暇潰しに【スパロボット大戦OGS】を下界から取り寄せて天界でプレイし

ていたんですけど…」

…ライ、その時点ですでにツツコミ所が満載だぞ!?

「…実はそのゲームデータの一部を…この神が誤って貴方のいるリカルなのは世界に落としてしまったのよ…」

なっ!?

「いやゝすまんすまん。お茶をこぼした拍子にのう…」

お茶って…つかコイツ、反省の色なし!?

…じゃあ何か?あのアインストやWシリーズ出現の原因は…コイツなのか!?

プチッ

「…インフィニティ、Set Up」

『オーライ、裏モード起動 コード【神殺し】』

ピカア!

「ふお!?!ま、待つんじゃない?!?とつかなんじゃ?!?その物騒なモードは!?!?」

「問答無用だあ!!!テメー!!!叩っ斬つてやる!!!」

「ぬお!?!ス、スクルド君!!!助けてくれ!!!」

「自業自得ですよ！！まったく」

「さあ…お前の罪の数を数えな！！」

「N~~~~~O!!!?!?」

ザンザンザンツ！バキガキドカツ！

「ぐふお…ふ、不幸じゃ…ガクツ」

「ふう…悪は滅びた…」

こうして僕は諸悪の根源を駆逐するのであ「ま、待つんじゃ…は、話を聞いてくれ…」

…チツ まだ生きていたか…

「で、話しとは何だ？」

一応話を聞く事になったので気を取り直して尋ねると…

「実はの…今回の件の影響で、ワシが管理しておるこの【リリカルなのは】の世界が崩壊する可能性があるのじゃ…」

いきなり色々ぶっ飛ばして崩壊発言!?

「つか崩壊って!?!?何でだよ!?!?」

「あの闇の書の暴走プログラムから生まれたアインストレジセイアじゃ…アレの能力は危険で未知数…しかも、闇の書の暴走プログラムの力まで取り込んでおるしの…」

た、たしかに…アインスト+闇の書暴走プログラムって…極悪なコンボだな…

「で、事態を收拾する為に…ワシは自分とスクルド君の分身をこの世界に割り込ませたのじゃ」

「なあ…元々ゲームデータだったんだから…だったら、そんなまどろっこしい手間をかけなくて…パパッとそのゲームデータとかを取り出したりは出来ないのか?一応神様なんだろ?その位は…」

神って言ったら全知全能だろ?

「キョウスケ君、我々神族はいかなる世界にも直接的な干渉は出来ないのですよ」 今回の事故という事で色々と便宜が計られています…

先程も言いましたが、この体も本体ではなく一種の人形に私達の思念体の一部を憑依させてる状態で…こういう仕様で力を制限して何とかこっちに干渉出来たのよ…まあホント裏技みたいな物ね」

裏技って…あれ?

「ちょ、ちょっと待て!?!? 神が直接干渉出来ないなら…どうやっ



て事態を收拾するんだ？」

もしかして… スクルドさんが！？

「ふおふお… その為の副元帥じゃよ。」

神のこの不気味な笑い… 嫌な予感しかしないのは気のせいか！？

「キヨウスケ、おぬしにはワシ… ダイテツミナセ副元帥直属の独立部隊所属となつともらつてイレギュラーに対応してもらいたいのじやよ…」

つて！それつてつまり僕に丸投げっすか！！？

「ワシらとしても心苦しいのじゃが… おぬしに動いてもらうしか手がないのが現状なんじゃ…」

「はあ…」

「勿論、ワシらも出来る限り協力はするぞい？何せ副元帥じゃから何かと融通が効くし…」

な、なんか微妙に危ない発言！？

「おぬしも薄々気付いておるかもしれんが… この世界は、原作とは似て非なる世界になりつつある… 何がきっかけで世界が崩壊するか…」

神様が何処で覚えたのか、碇ゲンドウ的なポーズで格好つけているが…

「つか、カツコつけてるがアンタのせいだよな!？」

「うぐっ…ま、まあの…」

まったく…本当に神か疑わしいな…

「…はあ、分かったよ 確かに世界の崩壊ってのはほっとけないし…今の僕には守りたい人達もいるしな」

こっちで出来た家族や友達とかな

「ふお!?!引き受けてくれるか!?!」

「仕方ないだろ…で、具体的にはどうするんだ?」

「とりあえず…まず入局テストは受けてくれんかの?」

「は!?!テスト?今更何でさ…」

「ちよつとした戦技テストよ」

大丈夫、テストといつても…ちよこつと本気で模擬戦してくれるだけでいいのよ?」

…ちよこつと本気、ねえ…

「時にキヨウスケよ…シンクロユニゾンはフェイトとしかしておらんのか?」

「えっ!?!まあそつだけど…いきなり何?」

「うむ…模擬戦には、シンクロユニゾンで行ってもらいたいのが…」

「えっ！？シンクロユニゾンを…？」

「実は…シンクロユニゾンは、こちらの【リリカルなのはの世界】以外の力に対抗する為に装備した物なのじゃよ…フェイトとシンクロユニゾンした時の武装などスパロボ系じゃったろ？」

あれは、スパロボ系の敵にはスパロボ系じゃ！と思つての（笑）」

（笑）って何！？

「まあ…確かにフェイトとのシンクロ時のバルデッシュユツて斬艦刀っぽかったし…でも今さくらはメンテナンス中だし…それにパートナーが…」

フェイトは地球に帰っているしな

「さくらの事なら心配無用じゃ…スクルド君」

「はい…」

呼ばれたスクルドさんは目を閉じ、何やら呟いている…

〔Gate Open〕

グオン！

スクルドさんが呪文らしき物を唱えると、空間に扉が現れた！？

「1」、これは？」

「これは異なる場所を繋ぐ扉なんです。」

え〜と…つまり…

「……どこでもド「キョウスケ君！それ以上は禁則事項です！！」  
そ、そうですか…」

僕の思考には、某青いタヌキの事が頭に過ぎったが…この事も口には出さない方がいいな…

「では神様、これからキョウスケ君の別荘でさくらちゃんをメンテ  
& a m p ; 改修してきます」

そう言うとスクルドさんは扉の中に消えていった…

「…えっと…スクルドさんがさくらをメンテナンスしてくれるのか  
？」

「うむ、元々シンクロユニゾンは後付けの機能じゃったしの…スク  
ルド君には専用プログラムを持たせたので、それをさくらにインス  
トールすれば大丈夫な筈じゃ…」

そ、そうか…何かご都合主義的な気もするが…

「ついでにリインフォース用のデバッグプログラムも持たせておる  
ぞ？」

…はは、ホントご都合主義や…

「まあその代わりと言っては何じゃが…勝手に新機能は付けさせてもらったがの(ボソツ)」

「…ん？何か言ったか？」

「い、いや 何も言っとらんぞ？」

…さて、さくらはスクルド君に任せて…次はシンクロユニゾンのパートナーじゃな…確かヴィータとシャルがまだ本局に居った筈…  
どれどれ」

そう言つと神はどこかに連絡をしているようだ…

「…ああそうじゃ、ヴォルケンリッター達の面接が終わつたらワシの所に…うむ、迎えにはクロノ執務官を向かわせる…後、第三訓練室を…うむ…」

…今思ったが…テストって今からなのか！？

「では頼んだぞ！」

「な、なあ…テストって…今すぐなのか？」

「ふむ…そうじゃが？」

善は急げというしの〜フオフオフオ」

…って事は、ヴィータかシャルとシンクロユニゾンするって事が…

…なのはやはやてが聞いたら暴れ出しそつだな…

s i d e O u t

## 模擬戦！キヨウスケVSクロノ

前回までのあらすじ…

神様のせいで世界の危機が迫っていた！！

「ワ、ワシのせい！？」

「当たり前だ！！」

## 第二訓練室

キヨウスケ side

あの後、面接を終えたシグナム達と合流して訳を説明（入局テストで模擬戦やる事になったから手を貸してくれと）し、この訓練室に

やってきました！

「悪いなヴィータ、僕のテストに付き合わせて」

「別にいいってことよ！ 私もあのメンドクサー面接でストレスが溜まってたんだ！！ここで憂さ晴らしさせてもらうぜ！！」

気合い入っているな、ヴィータは

…余談だが、シンクロユニゾンで模擬戦とすると話した時、ヴィータとシャルどちらがユニゾンするかで2人で話し合うように促した後、僕が一旦席を外して戻ってきたら…何故がシャルがヴィータを見ながら震えていたのは…何故？

ま、まあそれはともかく…この模擬戦のヤラレ役となった不幸な人物…

「クロノ！。骨は拾ってやるからな」

「き、君達には手加減という言葉は知っているのか！？」

若干テンパっていたクロノがそこに居た…

「えへへっ、キョウ君と久々のユニゾンだね」

そして、さくらも神族特製プログラムで完全復帰！絶賛売り出し中だ！

「ではキョウスケ君、ユニゾンして下さい」



スクルドさんのアナウンス訓練室に響き僕は…

「じゃあちくちく…」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！」」

ピカッ！

ちくちくとユニゾン！　ちくちく…

「いくぞ！ヴィータ！」

「おう！！」

「「シンクロ・イン！」」

ピカッ！！

ヴィータとのユニゾンでバリアジャケットは紅く、両肩には大型のプロテクター、髪も燃える用な紅に変わっていた…

「…ってこれ…アルトアイゼンかよ！？」

そう！その証拠に、右腕には特徴的な武装の杭打ち機…リボルビン  
グ・ステーク…？

あれ？よく見るとステーク本体にグラーフアイゼンのハンマー部分  
が融合している…？

「（キヨウ君、そのステーキにはグラーファイゼンとインフィニティ君が融合しているから）」

説明ありがとう！さくらさん

どうやらステーキのベースはグラーファイゼンのラケーテンフォルムのような……

「ヴィータ、初シンクロだけど……大丈夫か？」

『（……ワリイ、少し問題が……）』

えっ！？もしかして……融合事故！！？

『（なんつーか……き……）』

き……？

『（気持ち良すぎて……／＼）』

恭介と……ようやく1つになったと思ったら……んっ／＼（）』

……いや、これ18禁ぢゃないよ？（まだ）

とりあえず……しばらくほっとくか……

「クロノ！とりあえずこっちの準備はいいぞー！……」

「あ……ああ……」

ん？…何かクロノ…顔色悪くないか？

Side Out

クロノSide

僕はダイテツ副元帥の命令で、シンクロユニゾンしたキョウスケと模擬戦をする事になったのだが…な、なんだ！？あのデタラメな魔力は！？

闇の書最終決戦の時には気付かなかったが…こうやって対峙すると解る…

少なくともSSSクラスの魔力量だ！

…おそらく戦闘になれば更に跳ね上がるだろう…

というか…アイツ、ちゃんと非殺傷設定にしているんだろうな！？

…ああ父さん、僕を護ってください…

Side Out

キヨウスケSide

「…さて、じゃあ行くか！」

ブーッ！

〔戦闘開始〕

ダンッ！

開始合図と同時に僕はクロノに向かって突進！

「くっ！」

《Blaze cannon》

ズカアアアーン！！

クロノは砲撃で迎撃を計ってきたが…

ドカアアアーン！！

クロノの砲撃が直撃し、辺り一面に煙が立ち込めた

「…手応えはあったが…」

クロノが警戒しながら煙を見ている…

ヒュン！！

「なっ！？無傷！！？」

煙から無傷で現れた僕にクロノが驚いていた！

「…アルトの装甲、舐めるなよ！」

『（…つかムチャすんなよ恭介！！あの位余裕で回避できんだろ！？）』

「ワリイ、ヴィータ…でもこのアルトの特性を実感したかったからさ〜」

「（キョウ君、ダメージゼロ！マジックコート正常稼働中だよ！）」

ヴィータとのシンクロユニゾンの特性：装甲防御に特化！しかも魔法を防ぐバリア【マジックコート】常時展開のおまけ付き！

…なのはのスターライトブレイカーも防げるインチキ仕様だそうだ

…よかった！これでなのはの O H A N A S H I を防げる！！

## 八神家

「はくちゅん！！」

「なのは…風邪？」

「あかんで…なのはちゃん。明日から旅行なんやし…風邪うつさん

「といてな？」

「ふえ！？ち、ちなつよ〜…誰かが噂してるのかな〜？…あ！」

「どうしたの？なのは？」

「…何か今、すっごくスターライトブレイカーの威力上げたくなつたの…」

「えっ！？な、なんで？」

「今のままじゃダメだって…誰かが囁いて」

「なのはちゃん…でんぱ…なん？」

「ちょ！？何！？でんぱって〜！！？」

「いや〜、とつとつなのはちゃんが妖精さんと交信出来るようになつたのかな〜と」

「な、なのは？病院行こ？保険証持った？」

「ふえええ！？はやてちゃん！フェイトちゃん！ひどいよ〜！…！」

## 訓練室

「…何か今、なのはの魂の叫びが聞こえたような？」

『(はあ！？アイツの声なんて聞こえねーぞ？)』

…気のせいか？

「(キヨウ君！！来るよ！！)」

「食らえ！！！」

《Stinger Blade Execution shift》

クロノの周りに無数の魔力刃が浮かび…って!?

「クロノ！おまつ！？何の冗談だ!？」

あれは…シャレにならない数だぞ!？

「…君に手加減して勝てるとは思わないからな…悪いが本気で行かせてもらおう！！行けっ！！！」

ヒュン！ヒュン！！

つて、これ戦技を見る模擬戦だよな？アイツ…主旨忘れてねー？

「…だったらこっちも遠慮しねー！ヴィータ!!！」

『(おう！迎撃準備OKだ!!)』

こちらに向かってくる魔力刃…なら数には数だ!!！

「クレイモア!!」

ズガガガガッ!!

肩のプロテクターからベアリング弾…ではなく、魔力を高密度に圧縮した魔力弾を広範囲に打ち出した!

「なっ!?!」

まさか迎撃されるとは思っていなかったのか、クロノに一瞬のスキが!

ダンッ!

そのスキを付いて僕はクロノに突進!右腕を構え…

「くられ!ステーキ!!」

「くっ!!」

《Protection》

ガキッ!

とっさにクロノはプロテクションを張りステーキを受け止めるが…

「カートリッジ!!」

《Load Cartridge》



ドキュ！ドキュ！

カートリッジをロード！！

…普通ならカートリッジで瞬間的に魔力を高めるのだが…  
この状態でのカートリッジ使用…どうやら1発1発が、そのままス  
テークの破壊力に乗せられるようで…結果

バキイ！！ドカア！！

「ぐはっ！！」

バキイイイ！！

一発目のカートリッジでプロテクション破壊、二発目のカートリッ  
ジで勢いよくクロノにヒット！  
クロノは反対側の壁に激突してしまった…

『（……………あゝ…恭介…）』

「…非殺傷だから…多分大丈夫…かな？」

…バーストモード使っていたら逝ってたかもな…クロノ…

〔クロノ執務官、戦闘不能。勝者、神代恭介！〕

…とりあえず回復魔法位はかけてやるか

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

すっかりにも程がある!？

前回までのあらすじ…

クロノとの模擬戦で勝利した僕…クロノ、安らかに眠っ「おいっ！  
！勝手に殺すな!！」…あ、まだ生きていたか…

## 医務室

キョウスケSide

あの後、僕はクロノにケアルガをかけてたのだが…一応大事をとってクロノを医師に診てもらった…

「…まったく、死ぬかと思ったぞ!！」

そう文句を言う包帯をグルグル巻きにしているクロノ君!

「いや〜ワリイ、手加減間違えてさ〜」

悪気はないよ？ちょっとテンション上がっただけで〜

「いや〜ホント危なかったね〜クロノ君！

プロテクションどころかバリアジャケットまで貫いていたんだから〜」

いや〜、カートリッジであそこまで威力上がるとは…って!?

「エイミィさん!?!いつの間に!?!」

ホント神出鬼没だな…

「えっ?いや〜レフィーナがキョウスケ君とクロノ君が模擬戦やるから見に来てって言うからさ〜」

…ライ

「…エイミィさん、スクール…レフィーナさんとお知り合いで?」

「そうだよ〜 レフィーナとは最近知り合ったんだけど、何か意気投合しちやってさ〜

今じゃ親友だよ」

…いいのか?神族が原作キャラと親友って…

「へ、へ〜…そうなんですか…」

まあ…メインの主要キャラじゃないからいいのかな?

「って！ちよつと待てエイミー！バリアジャケットまで貫いていたって…本当なのか!？」

何やらクロノが顔を真つ青にして尋ねているが…

「えっ？ホントだよ」

いや、あの威力で非殺傷だっていうんだからビックリだよな」

…まあ、その主な原因はカートリッジだろうな。

使った本人もビックリだし

「そういや…回復魔法かける時、確かアバラが数本折れていたが…ま、気にするな」

ちゃんと治したんだし

「いや！！気にするに決まってる！！てか、それは既に非殺傷か疑わしいぞ！！！」

いやだな　正真正銘の非殺傷だったよ…多分

「まあ、とりあえず生きているんだから…何事も経験だぞ？」

「そんな生死をさ迷う経験なんかしたくない！」

…まあ、そらだろうな…

「さて、クロノの見舞いも終わったし…エイミーさん、後はお願いします

僕はレフィーナさんに呼ばれているので」

「OK まっかせなさい！！ちゃんとかクロノ君の事は弄んでおくからね」

さすがエイミーさん！解ってる（笑）

「おい！エイミー！！僕は一応ケガ人なんだが…」

「な〜に言ってるのクロノ君！ 殆どキョウスケ君が治してくれたんだし〜…クツクツク〜」

エイミーさんは、面白い玩具を見つけたような目でクロノを見て黒い笑いをしていた…

…ああ、エイミーさん…Sっ気全開だな〜

「…では、じゅっくり〜」

「なっ！！？お、おいキョウスケ！！助け…」

バタン！

クロノが何か言っていたような気がしたが…まあ、これがきっかけで2人の仲が進展するかもしれないし…結果オーライ…だよな？

待合室

ガチャ

「失礼します」

待合室に入ると、さくらとヴォルケンスが談話中だったが…

「あれ？レフィーナさんは…まだ来てないんだ」

ここに来るよう呼びだした本人がまだいなかった…

ちょうど近くにいたシグナムに尋ねると

「ん？いや、まだ誰も来ていないが…ちょうどいい、神代…実は頼みがあるのだが…」

シグナムが頼み事って珍しいな…

「頼み事って？」

「今度ぜひ模擬戦を…！」

…あ…そうだった、シグナムはこーゆー人種だった…

バトルマニア…

「…キョウ君、シグナムさんがシンクロユニゾンして戦ってほし

いって…」

さくらがお疲れ顔でダウンしていた…

「勿論さくらやヴィータの承諾は取ってある！！  
後は神代がいいと言ってくれば！！さあ！！神代！！私と心踊る  
戦いを！！！」

ち、ちょ！？シグナムさん！！目が恐いつす！！

つか、さくらやヴィータの承諾？？

僕は2人に視線を送ると…

「うつ……………（サツ）」

「にゃ……………（ササツ）」

2人に視線反らされた！？

「…をい、2人とも…」

「ご、ごめんなさいキョウ君！！だ、だってシグナムさんの迫力  
には…」

「…まあ…なんだ、その……………すまねえ…」

…シグナムの覇気に負けたんですね…

「…はあ、解ったよ…時間があつたらちゃんと模擬戦するから…そ  
れでいいかシグナム？」



ここで断つてもこのバトル狂は引き下がらないだろうしな…まあ！  
回戦えば気が済むと思うし…多分

「ホントだな!？」

フツフツ…あの素晴らしい力と戦える…血湧き肉踊る思いだ！  
!！」

…ヤバイ…完全に目がイッてる…

「…キョウスケ君、治療は私に任せて下さいね」

そうならない事を祈りたいよ…  
そう思っていると…

ガチャ

「やつほー キョウスケ君居る？」

スクルド…もとい、レフィーナさんが現れた  
しかもハイテンションで!？」

「…恭介、誰だ!？この年増は？」

いきなりレフィーナさんを睨みつけるんすか!？ヴィータさん!？

「…あ、ヴォルケンリッターの方も居たのをすっかり忘れてたわ…」

つて!？呼び出した本人が忘れんな!!

「…それに私はまだ14歳です！（設定は）」

…かなりサバよん「何か考え事かしら？キョウスケ君？」

「…イエ、ナニモ」

何やら凄い覇気が！？いや、神気か？

「…十分年増じゃねーか…私なんて（見た目年齢）まだ8歳だぞ？」

ピキッ！

あ…何かにヒビが入った音が…

「…あーら、総稼動年齢が数百年以上の貴女よりは若いわよ？」

…そこはあなたも変わらないんじゃないかね？

…とツツコミは入れないが…

「…んだと！？恭介！！コイツ誰だよ！？」

さて、これ以上はこの部屋が壊滅しかねないからな…

「グイータ、この人はこの副元帥の秘書をしているレフィーナさん…模擬戦の測定してくれてた人だよ」

「……………やけに恭介に馴れ馴れしかったな…知り合いか？」

…まあ…前世と来世の狭間で知り合ったんだけどね…

「んふふ〜 そりゃ〜ね〜 何せ今後、キヨウスケ君の部隊の補佐をするんだし〜」

「『『『部隊!?!?!』』』」

ヴォルケンズ達が驚いているが…まあそうだよな〜

入局してすぐ部隊持つって異常だし…

「キヨウスケ君はこれからダイテツミナセ副元帥直属独立部隊【F AITH】所属になります…勿論私もよ〜」

わ〜…あからさまに部隊名ってアレだよな? 種運命的な…

「…というか、入局決定?」

…まあ出来レースだよ〜と内心思っていたけどさ…

「あ、勿論文句なしの合格よ?」

だよな〜…

「あの〜…ちょっといいですか?」

シヤマルがおずおずと手を挙げた

「何かしら? シヤマルさん?」

「その独立部隊って…どんな任務を？」

「主な任務については機密です。ですが、独立部隊と名乗っている  
ので解ると思いますが…基本はキョウスケ君独自の判断で自由に行  
動できる権限があります。」

また通常の部隊指揮官より上位の権力を持ち、作戦立案及び実行の  
優先的な命令権もあります。」

しかも発言力も副元帥と同等の力があります。」

…うわっ！？どこかのロンド・ベル隊以上じゃね？

「……………それほどの権力を何故今、入局が決まったばかりのキョウ  
スケに？」

今度はザフィーラがツッコ…もとい、尋ねてきた

…まあ、端から見たらそうだよな…一般局員に成り立てのヤツが  
こんなトンデモ権限を…

「それは…キョウスケ君の力が必要だからです！あのアインストを  
倒す力が…」

…って！？

「ちょ！？レフィーナさん！！何サラツと機密バラしてんすか！！  
？」

「…あっ！？い、いつけな…い…つい……テヘッ」

テヘツ ぢゃねーよー!!

「…恭介、アインストって…何だ？」

「あゝ……その……」

ヤバイ…どうやって…まかすか？

Side Out

祝福の…あれ？

前回までのあらすじ…

スクルド「レフィーナがサラッとアインストの事を！？」

「てへっ ついっつかり（笑）」

機密の意味ねえ…！！そして反省の色がねえ…！！

キョウスケSide

「…恭介、アインストって何だ？」

ヴィータがこちらをジッと見つめ尋ねてくる…

…どうすっかな

「(ねえキヨウ君、皆にも話した方がいいんじゃないかな?)」

さくら…はあ、仕方ない

「…まあ、あなたがち無関係って訳じゃないからな…特にヴィータやシヤマルには…」

「なっ!?!おい神代!!私は無関係なのか!?!?」

「……………我も無関係か?」

シグナムは激昂し、ザフィーラは軽く落ち込んだ…

いや、だって…なあ?

「お、落ち着け!言い方が悪かった!!」

少なくとも仮契約者の協力が必要って意味だからさ!」

「む…そ、そうなのか?」

「……………なるほど」

はあ…とりあえず収まったか…

「実は…闇の書から生まれたあのアンノウン…アレの名称がアインストなんだ」

「何!?!あの時のヤツか!?!」

「そっだよヴィータ、さらにアインストには確認されただけで数種

類の個体が確認されている…」

「何だと！？あれ1体ではなかったのか！！？」

「もちろん僕たちが見た個体は現在あの1体しか確認されていないが、その下位クラスと思われるアインストが他の次元世界に現れているらしいんだ…」

…まあ、いつかは出現するんだし…あながち嘘じゃないよ…な？

「……………被害はどの位でているのだ？」

「えっと…とりあえず表だつての被害は微々たる物ないんだが…何を目的で行動してるかは現在不明なんだ」

後半のはホント！あのアインスト…何が目的なんだ…？

「…目的不明のアインスト…んなモン管理局総出で攻めりや倒せんだろ？」

「どうやらそう簡単な話しじゃないらしいんだ…」

一般局員ではおそらく下位クラスすら歯が立たないと思う…エースクラスでやつと互角とか相打ちか…」

「なっ！？…た、たしかにあの闇の書のアインストは膨大な力を感じたが…下位クラスでも凄まじいのだな…」

「だけど、僕の方やシンクロユニゾンなら…あの闇の書のアインストにも対抗できた…それで、今回の話しが来たんだ」



「なるほどな…恭介も大概チートだかな」

「……それは褒めてるのかな？ヴィータ？」

「…ま、まあ…それは置いといて、」

…置いとくんかい!?

「それなら私やはやてもその…【FAITH】ってのに入った方がいいのか？」

あゝ…どうだろう？将来的な事もあるし…ここでヴィータやシャマルはともかく、はやてもFAITHに入れたら機動六課フラグ無くなるか？

「…いや、当面は僕だけで大丈夫だよ」

「…でも…」

「ヴィータさん、FAITHに入隊するには…最低でも魔導士ランクSSSは必須条件です。残念ながら今の貴女では…」

そんな条件…あつたのか？

「…じゃあオメーはSSSなのかよ？」

…何だろう…ヴィータとレフィーナさんの視線の間に火花が散つてるようにみえるが…？

「私は副元帥に命令されて所属するので…問題ありません。それに、

私の仕事は情報収集はもちろんバックアップ等になりますから…基本非戦闘員です」

…スクルドさんならアインストにも対抗出来そうだけと…  
って、それ所じゃないな…

「まあヴィータ、まだ適性試験も受けてないんだろ？」

それに…はやてを入局早々危ない事には巻き込みたくないんだ…」

「恭介…」

「それに…皆の力が必要な時は、僕がFAITHの権限で召集かければ皆が何処の所属でもすぐ一緒に仕事できるし…そうでしょ？レ  
フィーナさん？」

それ位の権力…あるよね？

「ええ…最優先で出向という形になるわね」

「だから、ね？それに…はやてだって何かやりたい事があるだろうし…」

「……判ったよ……だけど！！何かあったらすぐに呼べよな！恭介！  
」

「ああ、頼りにしてるよヴィータ（ニコッ）」

「うえ！！？お、おうつ／＼！！」

とりあえず…機動六課フラグは大丈夫かな？

「でもこれでキョウスケ君とは別々になるんですね〜…淋しくなるわね…」

シヤマルはガツカリしているけど…

「シヤマル…家に帰れば一緒に居られるんだから…」

「「「「あ！」「」「」

…なにその「あ！」って!?

「…皆…まさかその事忘れてた？」

「そ、そんなことある訳ねーじゃねーか!?!な、な?シグナム!?!」

「う、うむ! 勿論失念などしとらんぞ!?!なあシヤマル!?!」

「ええ!?!は、はい! 勿論ですよ〜 ザフィーラも忘れてないわよね〜?」

「……………(コクコク)」

4人は否定しているが…完全に忘れていたな…

「じゃあキョウスケ君とさくらちゃんは、これから正式な辞令をダイテツ副元帥から受け取って下さいね。ヴォルケンリッターの方々は今日は帰宅してもらって大丈夫ですよ?」

「そか」

じゃあシグナム達も家に帰ったら旅行の準備しておいてくれないか？」

「ああ、わかった」

「へへっ 旅行 旅行っ」

「ヴィータちゃん、楽しそうね」

「おう！初めての旅行だかな！」

…うん、僕の別荘はカウントされないのかな？

「じゃあキヨウスケ君さくらちゃん、行きましようか？」

「はい」

僕たちは待合室を後にした

んで、今ダイテツ…まあ神様の居る部屋に来たのだが…

「…とりあえず、叩っ斬っていい？」

「ふお！？ま、まつのじゃ！？？」

僕たちが部屋に入ると神様は…W i iスポーツをやっていたのだ…

「こ、これはじゃな…そう！健康の為の運動じゃ！！決して遊んどつた訳ではないぞい！？」

はあ…ホントに神様が疑わしくなるよ

「ゴホン…その…何じゃ、スクルド君にF A I T Hの事は聞いたかの？」

強引に話題すり替えた！？

「…まあ、トンデモ権限つてのは聞いたよ…」

「うむ、それに伴いキョウスケにはこれを…」

そう言うと神様はバッチを差し出してきた

…僕の目がおかしくなければ…

「…まんまF A I T Hのバッチだな」

種運命と同じデザインのバッチだった…少しは捻れよ！？

「ぶつちやけデザイン考えるのも面倒ぢゃ！」

ホントに丸投げ気味だな！

「それと…これもやっと完成したぞ」

神様がさらに小さな箱を取り出した

「これは…?」

僕はその箱を開けてみると、はやてのシュベルクロイツの待機状態に似た十字架の形をしたデザインの指輪が1つ…

「まあ、物は試しじゃ。指輪を付けてみて魔力を送ってみるのじゃ」

「ああ、じゃあ…」

僕は指輪を付けて魔力を込めると…

キイイーン!

指輪が光り、辺りを照らし出した

光が収まると…そこに居たのは…

「…リインフォース?」

リインフォースがそこに浮かんでいた

「…魔力ライン再構築…確認しました

おはようございますマイマスターキョウスケ」

「あ、ああ リインフォース…なんだよな?」

「はい、そうです

…どうしたのですか?」

…どうしたって…これは…

「リインフォースさん…大人モードなのに…ちっちゃい？」

そう！さくらが言った通り、リインフォースは元？の姿なのだが…  
サイズがツヴァイの様にミニマムサイズなのだ！？」

「ああ、この体ですか。状況に応じて変化させる事が可能になりました。」

ピカッ！

そう言うとまたリインフォースが光に包まれ…現れた姿は元の大人モードのリインフォースだった

「どうですか？他にも今のマスターの姿に合わせた子供モードにもなれます」

は…多種多様に変身？出来る様になったんですね…

「んふふ」 驚いた？キョウスケ君？」

「えっ？スクルドさん？」

「リインフォースさんに、デバッグプログラムを使ってデータ整理したら…かなり容量が空いていたから、神様に言われた新機能の他にも色々機能追加しちゃった」

…今サラッとトンデモ発言してないか？

「つか新機能！？というか、リインフォース！体の方は大丈夫なのか！！？」

なんかバ神ーズのノリで色々変な事されてね！？

「はい、色々とマ改造…調整されましたが、身体の方は問題ありません…」

それと、貴方の事も神様に聞きました」

「えっ！？か、神様って…」

僕が神様達の方を向くと…

「ああ、彼女には我等の事を話したぞ？」

何その今更何を言ってる的な顔は！？

「ホント今更ですよ」キョウスケ君」

ば、僕に味方はいないのかあ！！！！？

S i d e O u t



おまけ

『…さくら、最近私の出番…ないですよね？』

「えっと…私だって最近まで出番なかったし…」

『その上リインフォースまでマスターのデバイスに…マ、マスイ！  
！このままでは本格的に出番が！！？』

「だ、大丈夫だよインフィ君！

…多分」

『クツ！これも作者が出番を増やさないからです！！  
大体作者は書きながら思い付きで書いているらしいですから無計画  
なんですよ！』

「イ、インフィ君…そんな事言ったら…作者さんだって頑張ってる  
んだから…」

『頑張ってるんだったら私の出番を増や…』

パキッ！

『……………』

「イ、インフィ君？」

作：うるさいからA Iダウンさせました

「たく、久々に口開いたら作者批判ですか…出番さらに削ってやる  
うか…」

「あはは…インフィ君、口は災いの元だよ？」

## 予兆

前回までのあらすじ…

インフィニティが創造主（作者）批判し怒りを買い、天に召さ『ちよ！？マ、マスター！！おまけ話しを真に受けなくて下さい！！』  
あ、無事だったんだ…

「えつと…リインフォースさんにも、私達と神様の関係がばれちゃったんだよね？キヨウ君」

ああ…そうだった…

キヨウスケSide

「えつと…リインフォース、神様って」

「はい、キヨウスケが転生して来た事もこの世界が…物語のとしてキヨウスケの世界で語られていた事も聞きました…正直驚きですが

…」

うわっ！！全部バレてーら…

「…をい、バラしてよかったのか？神様よ」

ジト目で神様を睨むと

「ま、まあ…リインフォースは今後お主専用デバイスとなるからの…それに我々の加護（マ改造）を受けたのじゃから話さん訳にはいかんじゃろ…」

今サラッと副音声でマ改造って認めたよな！？

「…まあ、別にいいんだけどさ…でだ！さっきリインフォースに変な機能付けたとか言ってたな？」

「ふお！？変な機能とは酷いの…  
何たいした機能ではないぞよ？」

「どんな機能なんだ？」

「まずの指輪じゃが…リインフォースは通常その中におるのじゃ…  
魔導書を持ち歩くのも不便じゃろ？」

…一応次元空間に収納スペースあるんだけど…？まあいいか

「次にじゃ！キョウスケも見た通り身体変化機能付きぢや！リインフォースの意味で子供く大人モードになれるのは勿論じゃが、ミニマムモードにもなれるのじゃ…！」

ミニマムモード以外は僕と同じか

僕も身体変化できるし

「さらにじゃ！リインフォースには…なんとえっちい事が出来る機能が追…」

スパーン！！

「へぶしっ！？」

「「何妙な機能つけてるんじゃない（ですか）！！」」

僕とスクール…この場はレフィーナさんか…は、どこから出したハリセンで神の頭をひっ叩いた！

「ぬおびお！？い、痛いではない…か…」

そしてレフィーナさんに至っては、さらに神様に黒いオーラを出しながら近付いて…って恐っ！？

何！？このドス黒さ！？

「…カミサマ？私二渡したアのプロぐラムにそんな機能入れてタンドスネ？」

…な、何か言語がめちゃくちゃなんですが…

「す、スクール君！？お、落ち着こうじゃないか！？」

「…こ…これが落ち着いていられますか！！タダでさえキヨウスケ君の貞操が危ないのに！！コレ以上何ライバル増やしてんですか！？」

な、なんかとんでもない事口走ってね？

「それに！！キヨウスケ君の貞操を奪うのは私です！！」

…そして自重しようねレフィーナさん…

数分後

何とか落ち着いてくれたレフィーナさん…

「こ、ごめんなさいノノ取り乱しちゃって…」

「い、いえ…」

錯乱していた時の事を思い出して真っ赤になってるレフィーナさん…

「あの…キヨウスケ。」

「あ、ああごめんリインフォース…何だい？」

話題の中心だったリインフォースも顔を赤らめ…赤らめ？…何で？

「あの…私は…そういう知識には疎いので…その…リードしていただければ…こ、今夜にでも…ノノ」

ピシッ！

その瞬間、現場の空気が凍てついた…

「だ、ダメー！ー！！」

いち早く回復したさくらが大声で叫んだ！？

「ダ、ダメー！絶対ゼータタイだめー！！」

キョウ君は…キョウ君の初めては私が貰うんだから！！」

ピシッピシッ！ー！！

さらに現場の空気が凍りついた…

つかさくら！？アンタまで何暴走してんだ！？

「…仕方ありません、なら私はさくらの次で構いません」

いや！？何か色々間違ってますから！？

「ふおおふお〜 さすがキョウウスケ、モテモテじゃの〜」

「こ、この騒ぎの張本人が何言ってるだー！！！！インフィニテ  
イ！！！！カートリッジ！！！！」

『Load Cartridge（よ、よかった！出番が！）』

ドキュー…ドキュー…

「さあ…神狩りの時間だ…」

「ひょ！？ち…ちよ！？」

「ブラスト…シグヴァーン！！」

ドガアアアン！！

こうして悪は滅びさった…

「ま…まだ生きとるわい…ガクッ」

ちっ…しぶとい…

余談だが、後ろでさくら・リインフォース・レフィーナさんが真っ青になって震えていたそう…

あの後始末を終えた後（結界があったので部屋自体には被害はなかった）何とか落ち着いたさくらとリインフォース…あとレフィーナさんも…



「よし、さくらにリインフォース！帰るぞ」

「Yes！My Master！！（ビシッ！）」

二人は直立不動で敬礼を…

「…別に敬礼はいいから…」

…ちょっとやり過ぎたかな？ あはは…

「じゃあスク…じゃなくレフィーナさん、僕たちは家に帰りますね…と、その前にリインフォースは指輪の中に戻っていてくれ」

「は、はい！解りました！！」

…いや、だからそんなに怯えなくても…

ピカッ

…と、そう思っている内にリインフォースは指輪の中に消えていった

「リインフォース、分かっていると思うけど…」

「（はい、主はやてや騎士達に悟られないようにします…）」

「…悪いな、最低でもツヴァイが出来るまでだから」

「（はい、私の後継機でしたね。楽しみです）」

後継機の割には性格が真逆なのが不思議なんだよな

「じゃあ…レフィーナさん、失礼します」

「ええ、気をつけてねキョウスケ君  
…何かあったらまた連絡するわね」

「はい、じゃあさくら　いくか」

「うん！」

ガチャ

こうして僕たちは管理局を後に「ちょっと待ってくれ！キョウスケ  
！」ん？

「なんだクロノ、まさかずっと待っていたのか？」

扉を開けたらそこにはクロノがいた…ストーカー？

「いや！激しく違うからな！！」

ちっ…こいつまで心読むスキルを…

「で、どうしたんだ？」

「実は君に頼みたい事があるんだが…」

「頼み？また別荘に入れてくれとかか？」

「実はまた報告書が山積みで…って違わないが違う!！」

「はいはい。で、何だ？」

「実は…アリアとロツテの事なんだが…」

…ん？ありあ？ろって？

「……………誰？」

ズコッ！

僕がそう答えるとクロノが何故かスツ転んだ！

「き、君は彼女達の事を忘れたのか!？」

ん〜…と言われても…

「さくら、知ってるか？」

「ほえ!？ん〜…ゴメン！解らないよ〜」

「君達は…グレアム元提督の使い魔だ!！」

「……………おお!！そーいや居たな〜 そんな名前のクズが」

「あつ!！はやてちゃんにひどい事した猫だよね!！」

いや〜 キレイさっぱり記憶から消去してたよ〜

「…で、その猫共がどうした？保健所にでも引き渡すのか？」

「…実は…彼女達を元に戻してほしいんだ…君の魔法でカエルになつたままで…」

「………おおー！そーいやハーデスでステータス異常フルコース&カエルの姿にしたんだっけ」

「彼女たちは僕の師匠でもあるし、色々世話になつたんだ…いくらなんでもあのままというのは不敏で…頼む！彼女たちを元に戻してくれないか？」

クロノは頭を下げ僕に頼んでいるが…

「……アイツらがはやてやヴィータ達にした事を忘れたか？命が有つただけ有り難く思え！！」

「…彼女達の話は許される事ではないのは十分解る…だが、それでも…頼む！」

「…うーん…どうすつかな…原作じゃあ後は出番なくグラムと隠居してたから…今後表舞台には出てこないだろうし…」

「…ねえキョウ君、クロノ君がこんなをお願いしてるんだし…」

さくら…はあ…仕方ない

「…一つ条件がある。元には戻すが魔力は人型を保つ程度に封印させてもらっぞ？」

念には念をいれないとな…逆恨みではやて達を襲ってこないように  
しとかないと…

「ああ！解った！」

「…はあ、ちよつと待ってる」

そう言い僕は収納空間から万能薬改を取り出し…

「…さらにちよつとアレンジして…と  
ほらクロノ！この薬を飲ませてみる。  
姿は元に戻る…が、その代わり魔力は二度と使えんがな…」

そう言いクロノに万能薬改+ を渡す

「ああ、有り難く使わせてもらつよ」

「じゃあ僕たちは家に帰るな  
いくぞさくら」

「うん！じゃあクロノ君、またね」

シュン！

こうして僕たちは八神家に帰った…のだが…

Side Out

「神様、キヨウスケ君にリインフォースの肝心の能力教えましたか？」

「……ひよ！？」

「忘れてましたね……全く……  
それにこの件の事もキヨウスケ君に話してないですよね？」

「……まあ……この件に関してはまだ未確定じゃからの……  
暫くは様子見じゃの」

「……まあ私も原作は余り詳しくないのでもしかしたら実際にあつた事かもしれないが……時期が……それにこれは不自然ですし」

「うむ……」

パサッ

神様の手にした書類にはこう書かれていた……

12月24日

ミッドチルダにて次元航行船が謎の爆発事故…

原因は現在調査中…

生存者一名

生存者名…

ティアナ・ランスター





第1次スーパー料理大戦！？ 前編

前回までのあらすじ…

管理局で神様がいて、FAITHに入隊して…リインフォースがマ  
改造されて…ヴィータともシンクロしたし…ああ！後クロノに泣き  
落としてもされたな…

で、色々あって家に帰ってきたのだが…

八神家

キヨウスケSide

「…で、何故こうなった？」

みなさんこんにちは、神代恭介です

状況が解らないよ？という人に説明すると…

「さあキヨウスケ君！！誰が1番か決めてな？」

「私が1番だよな？」

「私だよな？キヨウスケ？」

「私だろ？恭介！！」

「私だよな？キヨウ君」

「私」「私」「私」シャルは論外や（なの）（です）（だ）（ですよ）  
！！」「」「…うう…ひ、酷いわ！！」

…という口論をなのは達がしているのです…

何故こうなったかというと…

数時間前

ガチャ

「ただいまー！」

「ただいま」

僕とさくらが玄関を開けると…

「ん？ ねえキヨウ君、何かいい匂いしない？」

「…そうだな、キッチンからだけど…夕飯の支度？  
今日の当番は僕だったと思っただけ…」

はやてが気を利かせて作ってるのかな？

ガチャ

で、リビングを覗いてみると…

「…シグナム、とりあえず状況説明を…」

「ん？神代、今帰って来たのか」

「ああ。で、何このカオスは？」

僕の目の前では、キッチンで料理しているはやて・なのは・フェイト・ヴィータ・シャル…ってシャルが料理い！！？

「我らが帰って来た時に、主達が神代に食べてもらう料理を作っていたのだが…1番おいしい料理を作った者は、神代を好きに出来る権力があると聞いた途端…その…ヴィータやシャルも参加して…スマン神代。ヴィータはともかく、シャルを止める事が出来な

った…」

…という事は…

『シヤマル女史の料理を食べるんですね？マスター』

「…シグナム、僕は今から旅に出るん」あ、キョウスケ君！お帰りなの〜 という訳でバインド」なっ!？」

ガチィ!

「駄目だよキョウスケ君、今日の主役（景品）が居てくれないと…」

「あはは…や、やあ皆…ただいま〜」

「あ、キョウスケ君お帰り〜 ちょ待っててな？もう少しで出来るから」

「キョウスケの為に一生懸命作ったんだよ 楽しみにしててね？」

「待ってよる恭介！ギガうまな料理を作るかな！」

なのはやはやて、フェイトとヴィータ…正直な話し… 4人の料理の味は問題ないだろう…だが!!

「待ってて下さいねキョウスケ君 美味しいお料理作りますから」

シヤマル！その手元の鍋の中のグツグツに煮えたぎっている緑色の液体は何さ!!？

「…キヨウ君、胃薬持ってくる？」

…いや、胃薬効かんだろ…アレは…

という訳で…

『第1回！誰の料理が1番おいしいか選手権大会！開催です！なお、解説は私マスターのインテリジェンスデバイス・インフィニティと…』

「えっと…キヨウ君のユニゾンデバイスのさくらでお送りします」

…えらく楽しそうですね…ウチのデバイスズ達は…

『今まで出番が少なかった分、いい仕事しますよ』

いやいやいや！お前の仕事それじゃねーだろ！？

『さあ！まず1番手は…』

つかマスターの事は無視なんですね〜

『ゴボン！気を取り直して…1番手は天然美少女フェイト嬢！』

「イ、インフィニティ…私天然じゃないよ!？」

…いや…十二分に天然でしょう？しかも美少女は否定しないんです

ね…まあ確かに美少女だけどさ…

『フェイト嬢が手にしているのは…カルボナーラ！！濃厚なソースが食欲を刺激しますね〜 どうでしょう？さくらさん？』

「ほえ！？ え、えつと…キヨウ君はパスタ系は5本の指に入る好物だから…フェイトちゃんポイント高いです…こんなカンジのコメントでいいのかな？インフィ君？」

『はい、ありがとうございます  
ではマスター！熱いうちにどうぞー！』

…いや、どうぞー と言われても…

「…バインドが見えんのか？インフィニティ？」

さっきから桃色の魔王特製バインドで身動きが取れないんだが…

『おつと失礼 ではフェイト嬢、ここはマスターに伝説の【あーん】をしてあげてください』

なっ！？何口走ってんですくあああ！？

「え、えつと…ノノじゃあ…キヨウスケ…はい、あーんノノ」

フェイトは迷いなくフォークにパスタを絡ませて、僕の口に運んでくる…つかバインド解除すればいいだけだろ！？

…そう思い、魔お…なのはに視線を移すと…

「フフ…キヨウスケ君に…あーんが出来る…ノノ

そ、その為なら…多少の犠牲は目をつぶるの…／＼」

つかその犠牲って主に僕だよね!?

だ、駄目だ…目がイッてやがる…しかも他の奴らも何を妄想しているのか自分の世界に浸ってるし!?

「キョウスケノノはい、あーんノノ」

くっ…し、仕方ない…ここはさっさとサクッと済ませよう…

「あ、あーん…パクッ」

もぐもぐ…

「ど、どうかな?」

フェイトは不安げに尋ねてくるが…

「…うん、美味いよ!ちゃんとアルデンテになってるし、味付けもバッチリだ」

思った以上の出来だった いやマジで!

「よ、よかった〜…頑張って勉強してたんだよ?」

そっか…頑張ってるんだなフェイト…

『おおっと!フェイト嬢のカルボナーラの評価はかなり高いようです!これはいきなり優勝決定か〜!?!?』

「ち、ちよつと待つてなの！！つ、次は私の番だよ！」

『おおつと！2番手には翠屋の看板娘、高町なのは嬢が名乗りを挙げたあー！！』

…ほんつとノリノリだなコイツ…

「なのはちゃんは…ハンバーグだね

あ、しかもチーズが乗っている」

これはポイントかなり高いよ？キヨウ君はチーズが好物だから」

確かにチーズは好きだが…さくらに教えたいっけ？

「あ、作者さんに教えてもらったんだよ？」

…ああ、さいですか…

「な、なんやて…？私かて知らなかつた事を…クツ！料理の選択間違ごつた…orz」

「チーズか…よ、よかつた…一応私の料理には入ってんかな」

はやてはガツカリ、ヴィータはホツとしていた…

「はい、じゃあキヨウスケ君」

そう言うと、なのははハンバーグを一口サイズに切つて…な、なのはサン？何故そのフォークに刺さつたハンバーグをご自分の口元に…？



「フーフー…はい！あーんの／＼」

な…な…何なさってらっしやるんです！？アレですか！？あーんに  
加えフーフーまで！？」

「し、しまった…その手を忘れてた…orz」

横目でフェイトを見るとorzの姿が…

「もう、キョウスケ君ってば…よそ見しないで…はやくう」

なのははそりや楽しそうにフォークをこちらに向けて…クツ！仕方  
ない…

「あーん…パクツ」

もぐもぐ…

腹をくくって食べてみたが…これは…

「ど、どう…かなあ？」

「…うん、美味しい 肉汁も口の中で溢れだして…焼き具合もバツ  
チリだよ！」

「えへへ／＼お母さん直伝のハンバーグなんだよ」

へ…何だかんだでも料理の勉強とかはしてるんだ…この情熱をも  
っと違う事に向けてくれれば…

「勿論向けてるよ？主に…その…キ、キヨウスケ君に／＼（ゴニヨゴニヨ）」

最後の方が聞き取れなかったが…？

『さあ！なのは嬢のハンバーグも高ポイント！！では次の料理は誰だ！？』

「クツ…次は私の番や！！」

『3番手は八神家のエセ関西人、はやて嬢の登場です！！』

「ちょ！？インフイニテイ！？エセって何や！？」

…はやてはああ言っているが…

「そこも！！何変な事考えとるんや！！」

だから皆して心読むなよ…何か？魔導師は読心術が必須スキルなのか！？」

「えつと…キヨウ君、考え事はもういいかな？」

つてさくらさん！？あなたも読心術を！？

「…途中から声出てたよ？」

な、なんだって！？う、迂闊だった…

『さくらさん…マスターはスルーして先に進んじゃって下さい。』

酷っ!?!?

「えーと…はやてちゃんの料理は…和食の定番、肉じゃがだね」

『これははやて嬢、計算高い!!世の男性を落とす伝家の宝刀を抜いて来ましたあー!!』

この味に心揺さぶられる男はいないです!!』

「フーフー…はい、キョウスケ君 あーん」

…もはや何も言うまい…

はやてが箸でじゃがいもを僕の口元に持ってきて…

「パクツ…もぐもぐ…」

「ど、どやっ」

「うん、流石はやてだね!とっても美味しい」

はやては元から料理上手いからね

「これならいいお嫁さんになれそうだね」

「ふえ!?!おおお嫁さんっノノ!?!?!」

ピシッ!?!

…ん？はやてが顔を真っ赤に？

それに…何だろう…？空気が凍り付いたような…？

『おおっと！！これは驚きましたー！！マスターがまさかのプロポーズ発言ー！！』

…プロポーズ…？

ポクポクポク…チーン！

「ハッ！？い、いや！そーゆー意味で言った訳では…ハッ！！？」

…背後からどす黒い気配が…

恐る恐る振り向くと…

「…キヨウスケ君、久々にちよーっとO H A N A S H I…  
しよつか？」

「…フフフ…キヨウスケ、大丈夫だよ？途中から気持ち良くなるから…」

なのははホント久々に目をハイライトにしてレイ八さんを構えていた…

つかフェイト！？その発言色々ヤバイから！？

『さあではここで一端休憩に入りますー』

なっ！？テメー！！何言いやがる！？

「…ちようどいいね…さあキヨウスケ君、逝コウカ？」

ガシッ！

「…なのは、私の分もとっておいてね？」

「お、おい！？ちよ…マ、マジで助け…」

「「問答無用なの（だよ）！！」「」

ふ…不幸だああああ！！！！

ガチャ、バタン！！

Side Out

「キヨウ君…プロポーズ発言は駄目だよ…」

その後1時間は戻って来なかったとか…

ちなみに…

「ぐふふふ…キヨウスケ君にプププロポーズされてもった…ノノこ、

「これはもう初夜に突入せな…／＼」

「は、はやてえ…！しっかりしてくれー…！」

「は、はやてちゃん…ヨダレが」

「あ、主…！」

はやてはしばらく妄想の世界にドップリ浸かっていたそつな…

続く…

「つ、続くんかい!？」

## 第1次スーパー料理大戦！？後編

前回までのあらすじ…

『マスターの身体を賭けた第1回！誰の料理がおいしいか選手権！ただ今フェイト嬢・なのは嬢・はやて嬢の料理を食べ、折り返し地点へとやってまいりましたー！！』

「ほ、本当にノリノリだね インフィ君…」

『そりゃそうですよ！！ギャグパートとは言え、メインMCなんですから！』

「あはは…」

キヨウスケSide

なのはとフェイトのO H A…止めよう、思い出すだけで震えが…  
ガクガク…

で、リビングに帰ってきたのだが…

「さ、キョウ君 早く座って」

何故がエプロン姿のさくらが…しかも結構似合ってる!?

「さくらさん…何故にエプロン姿に？」

「えっと…飛び入り参加？かな」

飛び入り参加って…何故？

「つか、さくらって…料理出来たっけ？」

「むー!!酷いんだ!!私も料理位出来るんだよ？」

さくらは頬を膨らませて怒ってます的な仕草をしていた…

…ちょっとドキッとしたのは内緒だ…

『さあ景品…じゃなく、マスターが戻って来たので後半戦いきまし  
よー!…!』

今確実に景品って言ったよな!?!…コイツやっぱバラしてマリアナ  
海溝辺りに沈めてやるっか…



『なお、アシスタントのさくらが急遽飛び入り参加したので…解説はシグナム卿にお願いいたしました!』

「…何で私がこんな…」

『すみません、他に頼める方が居なかったので…ザフィーラ氏は…』

「…まあ、アレの犠牲にならなかったのだ…文句は言うまい…」

えっ!?!何か話しを聞くとザフィーラに何かあったようだけど…?

「…ザフィーラは…シャマルに料理の味見を(強制的に)頼まれてな…」

…は?マジ?そついやザフィーラの姿が見えないが…

つか、その料理を僕は食べさせられるのか…!?

『…彼の尊い犠牲に敬意を表し…さあ!後半戦スタートです!…!』

うわっ!?!ザフィーラの事、軽く流しやがった!?

『ではヴィータ嬢!お願いします!』

「お、おう!…」

ヴィータは緊張した面持ちで料理を僕の目の前に運んで来た

『さあ!ヴィータ嬢の料理は…カレーのようです!』

おや?カレーに何か入っていますね?』

「…なるほど、ヴィータはカレーにチーズを入れたようだな」

『ほう…チーズカレーですか』

「チーズはマスターの好物ですからね。しかも全人類が好物なカレーとのコラボ…！これは対マスター用の最強の組み合わせだ…！」

「いや、まあカレー好きだけど…そこまで大袈裟に言う？」

「ほ、ほら 恭介ノ、あ、あーんノ」

「…っ…！そういやまだ魔王のバインドがあつたんだ…！？」

「い、いやヴィータ ちょっと待って…おい！なのは…！いい加減バインドを「わ、私のあーんは…嫌なのか？」ってヴィータさん！？」

「そ、そんな今にも泣き出しそうな顔しなくても…ええい！！」

「た、食べさせて頂きます…」

「ああ…NOと言える日本人になりたい…」

「じ、じゃあ…いくぞ？…あ、あーんノ」

「ヴィータはスプーンにカレーを盛り付け僕の口元に運んで来る」

「…あー「あ！ま、まだカレー熱いかもな…フーフーノ」って！？」

ヴィータはスプーンの方に顔を近付けてカレーを冷ましている…つかヴィータ…！顔…！顔が近い…！！

うっ…ヴィータの息がかかる距離だ…その距離約10センチ…！

「ちょ…？ヴィータちゃん…！顔近いよ…！」

「ヴィータ…？それは反則や…！」

「…み、みんな…私以上の匠の技を…」

なのはとはやては猛講義、フェイトは相変わらずorzと膝を折っていた…

「（…ちっ、はやてに言われたら仕方ねーか…）あ、ワリイ恭介」

…今舌打ちしなかったか？

「気のせいだ…！さあ恭介…！あーん…！」

サラッと心を読まれた気もするが…

「あ、あーん…パクッ」

モグモグ…

「ど、どうだ？美味しい…か？」

「…うん！美味しいよヴィータ！また腕を上げたね！」

ヴィータの作ったカレーはチーズのまるやかさで辛さを包み込み、  
ちょうどいい具合になっていた

「ほ、ホントか！？ホントに本ツ当に美味しいか！？」

「あ、ああ…だから落ち着こうな？ヴィータ」

つか顔近いつて…

『ヴィータ嬢のチーズカレーも好評価のようですよ！』

「うむ、あれでヴィータは負けず嫌いだからな 並々ならぬ努力をしたのだろう」

『そういえば…シグナム卿の料理の腕はいかがですか？』

「ブツ！？な！？、いや…それはだな…そ、そう！私は主はやての  
剣な訳であつてだな…」

『…食べる専門ですか…』

「うぐつ！…そ、そんな事より次だ！！次の選手は誰だ！？」

『無理矢理話題変えましたか…まあこの件に関しては今は置いとき  
ましよう…』

…シグナムを手玉に取るデバイス…侮れないな…

「さあ次は私の番で『次は特別参加のさくらさん！どうぞー！…！』  
つてちよつと！？インフィ君！？順番的に私じゃないの！？」

『あ、いえ シャマル女史は最後にした方がいいかと…（オチ担当ですし）』

それに最後ならマスターが倒れても問題ありませんし。』

こ、コイツ…やっぱりAIを粒子レベルまで分解したるか…

「じゃあ私の番だね ハイ、キョウ君！！」

さくらが手にしているのは、チーズの香りとトマトソースの匂いが食欲をそそるイタリアン料理の一つ…

『さくら選手の料理は…ピッツアだー！！』

「ほう…しかしトマトソースとチーズだけのシンプルな料理だが…」

『…おおっと？ただ今入った情報ですと、マスターの1番の好物はどうやらそのピッツアのようです！！これはさくら選手！！ある意味ズルイ！！独自の情報をフル活用！！ガチで勝ちにきています！！…！』

「そ、そうだよ！さくらちゃん！！ずるいよ！！ピッツアなら私だつて前にピザ ットさんのタイアップの時に色々勉強したから得意なんだよ！！」

「それ以前に、私達キョウスケがチーズ好きとかも知らなかったし…」

「あまつさえ何や！？キョウスケ君の好物をどストレートで出してくきよって…！？」

「べ、別にずるくないもん!!」  
そ、それにキヨウ君の好物とかなのはちゃん達に聞かれなかったし…  
そ、それに!私だってキヨウ君と…イチャイチャしたいんだもん!  
!」

さ、さくらさん?それって爆弾投下っすか?

それとなのは…サラッと宣伝してないか?

「劇場版A'sの時もお世話になるの」

…実際ありそうだし…

「さ、キヨウ君 あーん」

さくらはピザを1ピース手に取り、僕に食べさせようと口元に運んで…まあもっこのままで来たら諦めよう…

「あ、あーん…」

だがここで気付くべきだった…

さくらは素手でピザを持っている…となると…

パクッ

「あっ… / / もう…キヨウ君ったら」

「「「「ああああー!」」」」

…ピザと一緒に…その…さくらの指も口の中に入れてしまった訳で…  
…うっ！？ものすごい殺気が！！？

「で…キヨウ君…その…おいしいかな？」

「あ、うん…美味しいかった…ヒツ！？」

さらになのは達からの黒いナニカが噴き出した！？

「…ふーん…さくらちゃんの指も美味しかったのかあ？キヨウスケクン？私の指も味見してなの…フッフ」

「…キヨウスケ、指だったら私の方が綺麗だよ？タベテミル？フ…フッフ…」

「キヨウスケ君、そないな小娘共の指じゃなく…私の指や身体も舐めてええんよ？…フッフッフ」

「…恭介、ついさっき私ら身も心も1つになったんだ…え、遠慮しな〜で言ってくれりゃ…いつでもいいぞ〜」

つか皆さん！？ば、暴走すか！？

ヴィータに至っては何かとてつもない誤解を招きそうな発言を！！？

『さあ！マスターも生命の危機を向かえ…ここでダメ押しと逝きましよう！！最後の選手…シャル女史です！！どうぞー！！』

こ…こいつ絶対バラして粉々に砕いてやる！！

「はい お待たせしました。 はい キョウスケ君」

…ああ…とうとう来たか…この時が…ん？あれ？

「…シャルルの料理…だよな？」

「当たり前ですよキョウスケ君。 私だって本気を出せばこの位は」

『おおつと！！これは意外！！シャルル女史の料理が何時もと違い  
マトモだあ！！』

「ふむ…これは天変地異の前触れか？」

…さすがに僕も今回はインフィとシグナムの意見に同意するな…  
シャルルが作った？クリームシチューがマトモに見えるんだが…

「さ、キョウスケ君 あーんしてください」

シャルルはシチューをスプーンですくい上げ、僕の口元に運んできた

「…じ、じゃあ…あーん…パクッ」

…だがこの時僕は2つのミスを犯していた…

1つはザフィーラの犠牲…

もう1つは…シャルルが使ったであろうキッチン周りに…定規や絵  
の具が散乱していた事を…

モグモグ…



「どうかしら？キョウスケ君？」

「……………グッ!？」

ボタンー!

「キ、キョウスケ君!？どうしたの!？」

「ちょ!？シャマルどきい!！」

「キ、キョウスケの口から白いナニカが!？」

「おい!！シャマルてめー!！恭介に何食わしやがった!？」

「えっ!？わ、私はただ…見栄え良く作ろうとして…」

「あー!！!？シ、シャマルさんが使っていたキッチンに絵の具やボンドが!？」

「な、なんやて!？シャマル…まさか料理に使った何て言わへんよ…な?」「

「えっと…なかなかいい色が出ないんで…その…隠し(色)味に

ピシッ!！」

「…シャマルさん…キョウスケ君に何してくれてるのかな?…レイジングハート…」

「な、なのはちゃん！？何でデバイスを起動しているの！？」

「…勿論シャマルさんを消し炭にする為なの」

「な…何で恐い事サラつと言ってるの！？は、はやてちゃん助けて  
…！」

「…なのはちゃん、さすがに家が壊れてもうから…別荘で思う存分  
やったるな？」

「は、はやてちゃん酷っ！？」

「………シャマル（さん）に言われたくないで（ねー）です（  
「「「」

「そ、そんなあ…シグナム助けて…！」

「…シャマル、今後一切料理禁止だ」

「…さあシャマルさん…逝こう？」

「さくらちゃんはキョウスケ君の治療お願いな？」

「うん！任せてはやてちゃん…！」

「おら！さっさとときやがれ…！アイゼンの錆にしてやる…！」

「ヴィータ、私の分も残しておいてね？」

「い、いやー…！」

ガチャ…ボタン…!

『…えーと、これは審査所ではないですね』

「…まったく、同じヴォルケンリッターとして恥ずかしい!」

『まあ 皆さんがシャマル女史の説教が終わるまで最低でも1時間掛かりますから…マスターの蘇生の手助けでもしますか』

「そうだった!!のんびり解説などしていられん!!さくら!私に出来る事は何かないか!？」

こうして…僕は蘇生されるまで気を失っていた訳で…

…しかし治療にラストエリクサー5本使ったとさくらから聞いた時には…今回のシャマルの料理の殺傷力はすぎました…

で、数時間後…

ガチャ

「あ、キョウスケ君!!もう大丈夫なの?」

「ああ…今回はマジでやばかったけど…シヤマルは？」

「シヤマルなら何とか原型は留めてるよ…チッ」

…フェイトさんが何か恐い事言っていたような…原型って…

「恭介… 仇は取ってやったぞ」

「勘忍な〜キヨウスケ君、主の監督不行きやったわ…でもちゃんとシヤマルには言い聞かせといたんで大丈夫や」

…何が大丈夫とか言うより…シヤマルは無事なんだろうか!?

『さあ! ! 皆さんが戻って来た所で…マスター、誰の料理が1番美味しかったですか?』

…うっ、そうだった…それがまだ残っていたか…このままうやむやに出来ると思ったのに…

回想終了

と、まあ…それで前回の話の冒頭に戻るのだが…

シヤマルも何気に復活早かったな…

「キヨウスケ君!! 誰の料理が1番!!!!!!?」  
「」

…「…これはどうすつか…」

そ、そうだ！

「…ん、皆（シヤマル以外）美味しくて甲乙つけがたい…という事で…全員（シヤマル以外）全員優勝！…ってのは？」

これなら皆【な、なんでくずるい！？】とか言っただタバタ騒動的に終わらせられるはず！！

…だったが…

「しゃあないな、じゃあキヨウスケ君を自由に出来る権力も全員って事でええか？勿論キヨウスケ君には拒否権あらへんで？」

な、なんだって！？

何その予想斜め上いく展開は！？

「あ、ちなみにキヨウスケ君に何してもらっから別荘内で皆で話あったんだよ」

…って事は…こうなる事は予想済みっすか！？

「そんな無茶な事じゃねーから大丈夫だって恭介」

「そ、そうなのか…？因みにどんな？」

「えっと…明日皆で旅行行った時なんだけど…はうう／／」

はうう…ってフェイトが顔を真っ赤に？な、なんか嫌な予感かし

ないんだが…

「キヨウスケ君には温泉で私らと一緒に入って貰うだけやぐひひ…裸の付き合いやで」

はやてが獲物を捉らえる野獣の目つきを…って！

「な、何だよそれ！？む、無理矢「拒否権は無いつて言ったやんか」それとも…シヤマル特製シチューお代わりする？」…うぐっ

そ、それは勘弁してくれ…

「なら決まりやな」

「やったー！！キヨウスケ君と一緒に入れるの」

「キヨウスケと…裸の付き合い…／／」

「恭介恭介！背中流しっこしよーなも、もちろん…その…ま、前の流しっこでもいいんだけどさ…／／」

「…キヨウ君と一緒に…はにゃーん／／」

み、みなさんご自分の世界に浸っているが…こ、これはヤバイ！色んな意味でヤバイかも…

「~~~~~」  
「~~~~~」  
「~~~~~」

…ふ、不幸だ…

Side Out

ちなみに…

ザフィーラは全身真っ白に燃え付きて発見された…

シャマルは…

「…どうせ私なんか…私なんか…ブツブツ…」

部屋の片隅でもいっきりイジケていた…

温泉つて憩いの場…なんだよね？普通… byキヨウスケ

キヨウスケSide

皆さん、こんにちは 神代恭介です…

前回の料理対決でとんでもない約束をさせられたまま僕たち高町＆八神＆アースラ（というかフェイト＆アルフ＆エイミー）達である旅館に来たのですが…

「土郎さん、まさか旅館丸ごと貸し切りとは…」

僕たちが旅館に着いたら…旅館従業員全員でお出迎えされ、あまつさえ【歓迎！・高町家＆ハラオウン家＆八神家御一行様】と横断幕的な物を…

「いや…普通に予約入れた筈なんだが…」

土郎さんも困惑している様子

「…何かの手違いとか？とりあえず旅館の人に聞いてみましょう」



「そうだな…桃子達はちょっと待っていないさい」

「ええ、解ったわ」

「桃子さん、すみませんがはやくはやく達の事もお願いします」

「大丈夫よキヨウスケ君、ね？はやくはやくちゃん？」

「あ、はい 私の事は大丈夫やで？」

「ん、そうか じゃあ行きましようか士郎さん」

「ああ、」

という訳で僕と士郎さんが代表で聞きに行ったのだが…

### 旅館、受付

「…マジで士郎さん名義で貸し切りだったとは…しかも料金まで既に支払われているって…」

旅館の女将さんに事情を聞いた所、旅館全体貸し切りで予約されていて、しかも料金まで支払われていたという奇妙な状態だった…

「一体誰が…？」

「土郎さんの知り合い…とかではないですよ？」

「ああ、今回の旅行の事は他の人には話していないしね…魔法関係者って事もあったし」

「ですよ〜 まあ考えていても仕方ない…」

「とりあえずチェックインしましょうか？何かあったら僕が料金支払いますし」

「いや、それでは大人の立場が…料金の事は我々大人に任せてくれ…お金に関しては以前神様が国歌予算並に口座に入れてくれたから大丈夫なんだが…まあ最終手段って事にするか」

「じゃあ僕は皆を呼んで来ますんで土郎さんは手続きお願いしますね」

「ああ、解った」

僕は早速はやて達が待っている所まで向かったのだが…

「…敢えて聞こう、何故ここに居る!？」

「アンタ達が私達に黙って旅行行くからよ!！」

「ア、アリサちゃん…私達だってようやく日本に帰って来たんだし…いきなりケンカは…」

僕がはやて達が待つている場所に行くと…アリサ・すずかが！いつの間に！？

「にしてもよ！！なのは！フェイト！はやて！何で私達に教えなかつたのよ！！！？」

「ふええ！？れ、連絡しようにもアリサちゃん達海外だったし…」

「うん…そうだね」

「というか、すずかちゃん達は何で私らが今日旅行に行く事が解ったん？」

…そうだよな　僕とはやてなんかはギリギリまで行く予定なかったんだし…

「そんなの私のパパに頼んで調べてもらったのよ！！」

うわっ…これだから金持ちは…

「ア、アリサちゃんつたら…キヨウスケ君、アリサちゃんはこんな事言っているけど…本当はちょっと違うの…」

「違う？」

「うん、キヨウスケ君…今日泊まる旅館で変な事なかった？」

変な事…？おもいつきりありましたよ？

「ああ…何か旅館が貸し切りで、しかも料金が既に支払われ…って！？まさかアリサかすずかが？」

それなら納得できるな〜 2人とも世界屈指のお嬢だし…

「うっん…私達じゃないの…」

「私達じゃ…って何か誰がやったか知ってるような口ぶりだね…」

「ねえすずかちゃん、一体何があつたの？」

「うん…実「あら皆さんこんにちは」あ…秋穂さん!？」

はっ!？秋穂さん!？

声が聞こえた方を見ると…

「久しぶりねキョウスケ君」

またまた登場!？乃木坂秋穂さん!！？

「い、こんにちは…奇遇ですね」

「あら、奇遇じゃないわよ？」

はっ!？それって…？

「前回、春香を助けてくれた御礼をしようと貴方の事をバニングス

家の人に聞いて…そしたらたまたま貴方が旅行に行くって事が解つて…それで調べたらなんと！たまたま乃木坂家系列の旅館に泊まるって解つたからおもてなしをと…」

…何か、たまたまが不自然な程出てきてませんか？

「それでね〜キョウスケ君、ついでに私達も正月旅行にこの旅行に泊まるのよ〜」

「はあ…ん？私達…？」

そう疑問に思っていると…

「やつほー おにーちゃん 久しぶりだねっ！」

「あ…その…お久しぶりです…神代さん／＼」

…気が付けば美夏&春香さんまでいらっしやる！？

「や、やあ…2人とも久しぶ…ッ!？」

僕が挨拶をしようとしたその時!？

「…キョウスケ君、またO H A N A S H Iしよつか…」

「…つかキョウスケ君、誰や？その子ら…？」

「…キョウスケ、またフラグ立てたの？私の体だけじゃ飽きたらず…」

「…恭介がロリ趣味…こ、これは喜んでいいのか？」

「むーっ…キョウ君、とうとう年下にまで…私だってなろうと思えば年下設定に…」

皆さんからは黒いオーラが…約何名かが微妙な発言をしたが…

「あゝ、なのはとヴィータは前のアリサ誘拐事件で会った事あった事あるよね？」

「ないよー!!」

「ああ、ねーなー!!」

…あるえ？

「あ、あの…神代さん…私モアリサちゃんとすずかちゃん以外初対面なんです…」

…………おおーそついやあの時はなのは達は留守番してたし…会ってなかったかゝ

「あ…その、こちらは前に誘拐されたアリサ共々助け出した御令嬢です」

「初めまして…乃木坂春香です」

「妹の美夏です！」

「で、こっちが僕の家族&友達とその家族だ」

と、簡潔に説明したのだが…

「ややな〜 キョウスケ君、夫婦やなんて」

…いや、んな事一言も言つてねーぞ！

「はやてちゃん…キョウスケ君との夫婦は私だよ？」

「なのはもはやても違つよ！！キョウスケは私と夫婦だよ？」

「てめーら！恭介は私とはやての物だつて言つてんだろ！？」

「…ヴィータちゃん、出来たらそこに私も入れてほしいんですけど」

…ただの自己紹介で何だ！？この混沌つぷりは！？

「「……………」」

流石に免疫がない乃木坂姉妹はどん引きしてるよ！？

「ち、ちよつとアンタ達！？いつの間にキョウスケがあんたらの物になつたのよ！！？」

「キョウスケ君…もう誰かの物になつちやつたの？」

さらにアリサもあの混沌にダイブしていくし…

すずかは涙目で僕の方を見てくるし…

「あらあら、キヨウスケ君 モテモテなのね」

秋穂さんは面白いそうに笑っていやがるし!!

「は〜おにーちゃん、凄いハーレム状態だね」

美夏も凄い物を見るようになるのは達を見ている…まあ、実際凄いな  
だが…

「面白そうだから…私達も参戦しようか？お姉ちゃん」

「み、美夏！？な、ななな何を言ってるんですか／＼！？」

「え〜、だつてお姉ちゃんもおにーちゃんの事好「わーわーわー！  
！！なななな何で事を言うの／＼！？」「…お姉ちゃん動揺し  
ぎだよ…」

…何か乃木坂姉妹が漫才をしていたが…？

「と、とにかくだ！こんな所じゃ何だし…早く皆部屋に行こうか？」

「おー！！！」「x多数

…はあ、全然旅行に来ている気がしないな…

「所でキヨウスケ、アンタの隣に居る女は誰よ！？」

「えっ！？隣に…さくらの事？」



「ほえええ！？わ、私！？」

「へえええ…さくらって言うんだ…で、アンタの何！？」

「私も聞きたいな…キョウスケ君とどうゆう関係？」

「え、えっと…2人とも初対面だったっけ？」

「「うん、そっだよ！！」」

「うわ…2人とも凄く素敵なお顔ですね…」

### 旅館内、鳳凰の間

アリサとすずかの恐怖の質問タイムをくぐり抜けて…とりあえず高町家、アースラ・アリス組、八神家と部屋割りをし、僕らはやて達と同じ鳳凰の間に居る…

ちなみに乃木坂家の皆さんはVIPルームに泊まるらしい…

一応乃木坂家傘下の旅館だから当然か…

「なあなあ恭介！！見ろよ！！すげーいい眺めだぜ！！」

「ズズズ…うむ、流石一流旅館 いいお茶を使っているな」

「シグナム」何か発言がおばちゃん臭いで？シグナムはまだ若いんやから」

「くすつ、そうよシグナム そんな事言っているとすぐ気持ちが悪くなるよ」

「ぐつ…わ、我々は別に年は取らん！！  
最悪取っても神代が何とかする！！」

「って僕かよ!？」

「あ、だったら美容系のポジション作ってみる？キョウ君ならすぐ出来ると思うし…」

「…まあ…不可能じゃないけどさ…」

「それはともかく…キョウスケ君、約束忘れてへんよな？」

「ギクッ！」

「…ナンノコ」男やったらいい加減腹括ったらどうや？」「クッ…ただかアリサやすずかもいる事だし…」

「それなら大丈夫や！既に2人には了承済みや」

「な、何だつて!?!いつの間に!?!？」

「キョウスケ君が先に旅館に行った時や！推理力が足らんよ」ワト

ソン君」

…さいですか。ったく、こーゆー事は仕事早いな…

「さあキョウスケ君、という訳で温泉へGOや!」

「はっ!?!い、いや…まだ昼過ぎだし…」

「んふふ…まずは家族水入らずで親睦を深めよな」 ヴィータ!シ  
ヤマル!」

「おっっ!?!」

「はいつ!?!」

ガキツガチツ!?!

「なっ!?!? バインド!?!」

「こ、こここまでするか!?!」

「これで準備OKや!?!さあ行くで」

「「おー!?!」」

「シグナムも行くで!?!ザフィーラはなのはちゃん達を監視しとい  
てな?」

「は、はい!?!」

「……………（コクツ）」

な、何シグナムも普通に入ろうとしてるんですか！？さ…最後の希望があああ！？

しかもザフィーラ（コクツ）って…はやて！？絶対守護騎士の使い方間違ってるから！！

「ふっふっふ…キヨウスケ君、体の隅々まで洗ったげるで」

「は、はやて…私もいいか／＼？」

「勿論ええで」

「あ、2人だけずるいよ！？私もキヨウ君の体洗いたいよ／＼！！」

や、やめて！！男として何かが終わりそうな！

つか、確実に何かを失う！？

「さあキヨウ君 早く行こ」

さ、さくらもかよ…ぼ、僕に味方はいないのかあああ…！？

Side Out

時空管理局

???Side

「ん？」

「どうかされましたか？」

「いや、フラグメーカーの叫びが聞こえただけじゃ。気にするな」

「は、はあ…それではこちらに彼を派遣してほしいのですが…」

「…うむ、既にそちらにも出現したか」

「何とかゲートはこちらで封鎖出来ましたが、数体こちらに侵入してしまい…対抗出来る者が居ないので…彼女たちも頑張っているのですが」

「確かそちらは転生者は居ないのじゃったな…解った、早急に彼をそちらに送ろう…」

「お願いします。こちらで彼が行動しやすいよう調整しますので…  
それでは」

プッッ

「…ふう、スクルド君 彼は確か今…」

「はい、現在温泉旅行中です」

「一緒にいる彼女らには悪いが…彼に連絡を」

「はい、分かりました」

S i d e O u t

混浴は何歳まで？

キョウスケSide

だ、誰か助けてくれっ！！

…えっ！？いきなりじゃ分からない？

あゝ…今僕は温泉に入っているんです

…しかし…

「おにーちゃん！いいお湯だね」

…何故かツインテール娘…乃木坂さんの妹の美夏と一緒に2人で入っているのです…

…なんですか？

## 回想

はやて達が僕を拉致って、今まさに温泉に強制連行されている真っ最中…

「さあキョウスケ君、もうすぐ混浴風呂に到着や…じゅるり！」

な、何はやてのキャラ変わってねーか!?

「な、なあ皆…考え直さないか？」

「何言うとるん!!ここまで来て引き返えますかい!？」

「う…シグナム達も何か言っ「まあ、諦める神代…一応料理対決の結果なのだ」つか、その料理対決すら元々僕の知らぬ間にそんな流れになったんだろ!？」

くそっ!…ならさくらに助けを…

「ご、ごめんキョウ君…私もキョウ君と一緒に入りたいな…なんて…てへ」

てへ ぢゃねー!!

「ええい!!諦めの悪い男やな…ヴィータ、バインドでキョウスケ君の口も塞ぎい」

「なっ!?!お、お…ムグツ!?!」



ガチッ！

瞬く間にヴィータのバインドが僕の口元を塞いだ！？

「わ、ワリイな恭介…でも…わ、私も一緒に入りてーし…／／」

くっ！？本格的にマズイ！？

…仕方ない…本気で逃げるか…

まずは…バインドを無効化しないと…

僕ははやて達にバレないように異空間に閉まってある一降りの刀を  
コッソリ取り出し…

ザンッ！

「……………なっ！？」「……………」

僕は【細雪】をバインドに触れさせ霧散させた

「悪いはやて…だが、男として守らなきゃならない物があるんだー  
ー！！！」

という訳で戦略的撤退！！

キュッ、ダン！！

僕は瞬動で脇道に一気に駆け込んだ！！

…何？能力の無駄遣い？ええい！こっちはいろいろヤバイんだ！！  
いい加減理性とかが！！！！

Side Out

はやてSide

「ま、待たんかい！！！！」

くっ！バインドでグルグル巻きにしとった分、油断しとったわ！！  
つか細雪まで使うんかい！！！！？

にしても…あの根性ナシはああ！！！！  
いい加減私らを食って…ゴ、ゴホン！  
あかんあかん、危うく18禁になる所やった

「ええい！シグナム！ヴィータ！！シャマル！！さくらちゃん！！  
！キヨウスケ君を捕まえるで！！！！」

「「「おー！！！！！！！！」」」

ぐふふ…逃いーがさへんでえ！！！！

この時の様子を（一応）冷静に見ていたシグナムは後に、

「み、皆の目つきが肉食獣並になってる…」

と語ったそうなの…

S i d e O u t

キョウスケ S i d e

くっ!! いい加減このまま走っていても埒があかないな…

と、その時!

ガラッ! ガチッ!

「ぐをお!?!」

突如部屋の扉が開き、そこからのびた腕が僕を掴かみ…

「はいはい 1名様ご案内です」

と強引に部屋に引きずりこまれた!?

…この声…はやて!?! バ、バカなの…はやてとはかなり距離が開いて

いたはず!?

「はやて!?!いつの間…って、あれ?」

振り返ってみると…そこにいたのは…はやてではなく…

「貴方がキヨウスケ君ですね　お話は美夏様からから聞いてますよ」

メイドさんが現れた!?

…ぢゃなくて!?

「あ…あの〜」

「あ、これは失礼しました〜　乃木坂家メイド隊序列三位の七城那波と申します〜　…というわけで、失礼しまーす」

「へっ…おわっ!?!?」

メイドさん…那波さんは有無を言わさぬ手際の良さで僕の服を脱がし始め…ってあっという間に脱がされた!?

「では美夏様がお待ちですのでこちらへどうぞ〜…あ、こちらがタオルですので」

「ちょ!?!ま、まって下さい!?!何が何だが…」

「ほらほら〜　いい子はお姉さんの言う事を聞いてくださいね〜」

那波さんは有無を言わずにそう言つと、奥の扉に手を掛け…

ガラッ

「えい」

バシャーン！！

強引に僕を中に押し込んだあ！？

「きゃ！？」

…ん？今女の子の声が…そっぴやさっき美夏様がお待ちとか言っていたような…

「お、おにーちゃん！温泉は静かに入る物なんだよ？」

温泉の中に、バスタオルを巻いた美夏が居た…

回想終了

「おにーちゃん、ごめんね」 那波さんがちよーっと強引な事しちやっつて「

…あれがちよつとか！？つかあの時僕は瞬動で逃げていたんだけど…まったく、乃木坂家メイド隊は化け物か！？

「で、一体こんな事までして…というか僕と美夏ちゃんって接点な

いよね!？」

あの誘拐事件の時に一言二言交わしただけだよ…？

「ん〜…今の所はね〜 所でおにーちゃんに聞きたい事があるんだけど…」

「な、何を？」

キヨウスケは美夏に背中を向けて話しています

「おねーちゃんの事…どう思ってる？」

…はっ!？おねーちゃん…って春香だよな？

「どづつ…って言われても…何でそんな事を急に？」

全くもって脈絡が解らないんだが…

「あのおねーちゃんが初めてお父さん以外の男の人に興味持ったんだよ!!! 大事件だよ!!!」

へ〜…原作開始前の幼少期にそんなイベントあったのか〜

「って! 興味持ったのっておにーちゃんの事だよ!？」

なっ!？美夏にも心読まれ…って僕!？

「そ、そんな訳ないんじゃない? 彼女ともそんな接点ないし…」

「接点ならあるよ！おにーちゃん、おねーちゃんの事助けてくれたんだよね？それだけでも十分過ぎてお釣りが利息付きで返ってくるよ？」

…むう…そうなのか？

「それに、おねーちゃんの憧れの魔法使いなんだし」

ああ…確かこの頃からアニメ好きだったようだし……………あれ？今聞き逃したらいけない単語なかったか！？

「……………美夏ちゃん？今ナンテ？」

「だーかーらー！おにーちゃん魔法使いなんでしょ？」

ピシッ

をいをい…何でバレてんだ？

「おねーちゃん、あの事件の後「私も魔法少女になる」って部屋で叫んでた」

…さいですか…

「で、それとなくおねーちゃんに聞いてみたら「べ、別に助けくれた神代さんが魔法使いだったから私も、もしかしたら魔法が使えるかも…」とか思っていなくて」って独り言を大声で言ってたし…おねーちゃんが嘘言う訳ないし半信半疑だったんだけど…その反応を見ると…ホントにおにーちゃん魔法使えるみたいだね？」

…は、春香さん！？おもいつきり秘密ダダ洩れっす…

「あ…その…」

どうする？どうごまかす！？

「あ、大丈夫だよ。今の所、知ってるのは私と那波さんと葉月さんにおかーさん位だから」

って秋穂さんまで知ってるんかい！？

「おかーさんも別に魔法自体にはそんなに感心は持ってないから、どちらかと言うと…おねーちゃんの気になる男の子って意味合いで興味があるみたい」

…そ、それはそれで厄介な…

「で、美夏ちゃんはそれを聞きたくて温泉に僕を引きずりこんだの？」

「えっ？だっておにーちゃんの周りに何時もあのおねーちゃん達がいるから…話しかけようとしても…怖くて…」

…た、確かにそこは否定できんかも…

「でね、おにーちゃんにはウチのおねーちゃんの事どう思ってるのを聞くついでに…その魔法を見せてほしいな…なんて」

…はあ…まあここまでバレたんなら別にいいけどさ…

こっちには魔法バレたらオコジョになるとかのペナルティーはない



し…

「まあ、魔法つていつても色々あるんだけど…」

とりあえず僕は指先に魔力弾を精製！

「うわぁ…これが魔法………」

美夏は目をキラキラさせながら魔法弾を見ている…

と その時…

ブォン！

「キョウスケ君！緊急の仕事…ってあら？お取り込み中？」

空中に突如ウィンドウが現れ通信が入った！

「えっ！？だ、誰！？」

まあ当然いきなり現れたウィンドウに美夏はビックリしてますが…

「ああ、キョウスケ君がロリコン趣味でも大丈夫ですよ？」

いや…何が大丈夫なんです？

「で、緊急の仕事って何です？」

「えっと…FAITHのお仕事なんだけど…」

…という事はインストール絡みか…はあ、せっかく温泉に来たのに骨休めも出来ないとは…

…もつともはやて達が暴走中だから休めないだろうが…

「解りました、詳細なデータをインフィニティに転送して下さい」

…さて、こつからは仕事モードだな

「ごめん、美夏ちゃん…どうやら急用が入ったみたいだから」

「そ、そんなあ…はあ、お仕事じゃ仕方ないか」

美夏は残念そうな顔を浮かべているが…

「せっかくこの後おねーちゃんと3人で一緒に入ろうと思ったのに…」

…あ、危なかった…

そんな事がまかり間違い、なのははやて達の耳に入った日には…

『マスター、美夏お嬢と一緒に入った時点でアウトですよ?』

うぐっ!?

「み、美夏ちゃん?僕と一緒に温泉入った事はナイショにしてくれるかな?」

じゃないと主に僕の身が危険だ!?

「ん〜…じゃあ美夏のお願ひ聞いてくれたらいいよ」

「お願ひ…？ムチャなのじゃなければ…」

「じゃあね〜 おにーちゃん携帯番号教えて？」

えっ！？そ、そんなんでいいの？

「うん 二つしとけば何時でもおにーちゃんと話せるし〜」

ま、まあその位なら問題ないからいいけど…

「いいよ 携帯は脱衣所の服に入っているから」

「やったー！ じゃあ携帯持って、入口で待ち合わせね」

そう言つと美夏は脱衣所（女）に向かつて行つた

「さて…「キョ〜ウスケく〜ん…」ってスクルドさん？な、なんでそんなに怖い顔を！？」

「いーえ！！怒つてません！！早く現場に向かつて下さい！！以上通信終わり！！」

ブチッ！

…確実に怒つてるぢゃんか…なんでさ？ ……ってそれ所じゃないか

「インフィニティ、任務内容と場所は？」

地球の東京とかだったら…ちょっと厄介かな？

『…マスター、これは…何といたしますか…』

ん？インフィにしては歯切れが悪いな？

「ちょっと内容見せてくれ……………はっ！？なんじゃこりゃ！？」

この任務場所って…こりゃ皆には言わないで行った方がいいな…付いて来た場合かなり問題が…

「あ…じゃあ、シンクロユニゾンどうしょ？」

### 任務内容

【平行世界】の一つにアインストが侵入。

FAITH部隊は現地に急行し、現地協力者と共にこれを殲滅せよ

目的地…

もうひとつの【リリカルなのはの世界】…

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

平行世界によつこそ？

前回までのあらすじ…

温泉に来ている時、突如としてアインスト出現の一報！！

ただ…出現した世界が…こことは違うリリカルなのは世界とは…

キョウスケSide

とりあえず美夏とは電話番号を交換して（かなり喜んでいたが）、  
僕は人気のいない屋上に来ています…

「キョウ君、初任務だよね！がんばろう？」

勿論さくらも、はやて達にバレないように念話でここに来るように  
指示した…

余談だが、さくらに聞いた話だと…はやてが…かなりカオスって  
たらしい…怖っ…!

「しかし…まさか平行世界までアインスト退治に行くとは思わな  
ったけどな」

いきなり世界の枠を飛び越えてだからな…

「あはは…それでキヨウ君、シンクロユニゾンはどうしよっか？」

「ん…まあ資料によると下級アインストだけだから大丈夫とは思  
うけど…万が一の時はリインフォースとシンクロユニゾンするか…」

ん？リインフォース居るのか？って？

いますよ？

今は指輪の中で待機中だけど…それにちゃんとリインフォースとの  
仮契約カードもありますし…

『マスター、時間です。ゲート開きます』

今回、平行世界の移動には神様が手助けしてくれるので楽だな

グオン！

すると、僕の目の前には門…というかドーナツ状のワッカが現れ…  
って!?

「…これも神の趣味か…クロスゲート…」

スパロボネタでゲート作ったのか…

ま、まさかアストラ ガンとか出て来ないよ…な？

「…じゃあ行くぞ！」

「うん！」

グオン、グオン…グオン！

こうして僕とさくらはゲートをくぐった…

背後からもう一人、付いて来た事も気付かずに…

平行世界、地球

グオン、グオン！

「っと…到着っと！」

「…これが…もうひとつの…？」



うん…平行世界って言っても僕の居た世界と変わらないな

「さて、先ずは…」

現地協力者と合流…と言おうとしたその時！

グオン！

「きゃああー！」

「へっ！？」

ゲートから聞き覚えのある声が！？

「えっ！？キ、キョウ君…」

さくらも驚いている…そりゃそうか…僕だってビックリしてるし…  
はあ…

「…何でここに居るんだ？…なのは？」

ゲートから出てきたのは…なのはだった…

「にははは、キョウスケ君！来ちゃったの」

「来ちゃったの じゃねー！！」

「はっ！…はっ！めんなさい…」

まったく…

「で、何でここに居るんだ？」

「…キヨウスケ君を探してホテルの屋上に来たら…さくらちゃんと一緒にどこかに行こうとしているのが見えたから…」

「…それでコツソリ付いて来た…と？」

「う、うん…2人つきりでどこかに行っちゃうと思って…」

…別に遊びに行く訳じゃないんだから…

「なのは、僕とさくらは極秘任務で来た訳だから…別に遊びに来た訳じゃないぞ？」

「極秘…任務??」

「ああ、だか「キヨウ君、ゲートが消えちゃったよ?」って何!？」

「なのはには戻ってもらおうとしたのだが…あ、ホントだ…消えてー  
ら…」

「……………」

「どうしようか考えていると…」

「…ねえ、キヨウスケ君…その極秘任務?私にもお手伝い出来ないかな?」

「は？なのは…何言って…」

「足手まといになるかもしれないけど…私も…私だってキョウスケ君の力になりたいの！！」

…うん…ゲートは閉じちゃったし…

何より…こうなったなのはテコでも動かないからな

仕方ないか…

「…ちゃんと僕の指示に従ってくれよ？」

「えっ！？お手伝いしていいの？」

「ま、ゲートも閉じちゃったし…今更戻れとも言えないしな」

「あ、ありがとう！！キョウスケ君」

さて…今回のパーティーになのが加わった事で…まずしなくてはいけない事が…

「とりあえずなのは、まず髪型変えてくれ。そうだな…ポニーテールにでもしてくれ」

「ふえ！？ど、どうして？…で、でもキョウスケ君の好みがポニーテールなら…よ、喜んで変えるの／／」

「…キョウスケ君ってポニーテールが好きなんだ…私も伸ばそうなか？」

…何か話しが違つ方向に？

「はあ…なのは、僕は別にポニーテール好きとかではないぞ？」

「えっ！？そ、そうなの？」

ああ、残念ながらポニーテール属性はないぞ？

「じゃあ何でキヨウ君はポニーテール何て急に言ったの？」

…いや、さくら…貴女は少なくとも理解していないと…

「…なのは、ちなみに此処がどこか解るか？」

「え？ここつて…あれ？海鳴市…だよな？」

「半分は正解かな？ さくら、答えは？」

「ほえ！？えつと…平行世界の…あつ！そっか！！だから見分けが  
付くようになのはちゃんの髪型を！！！」

ようやくさくらは気付いたようだな

「ま、そーゆー事だ。正解したさくらにはご褒美として頭を撫でて  
あげよう」

ナデナデ

あ、何か久々の感触だな　和む

「はにゃん／＼ん／＼」

さくらは…ちよつと人様には見せられない顔をしている…はっ!?

「むーっ！キョウスケ君!!そんなご褒美あるなんて聞いてないの!」

まあ…思い付きで行動したからね(笑)

「ま、冗談はさておき…なのは、此処は【僕たち】が住んでいる海鳴市ではないんだ  
リリ…ゲフン!…  
平行世界の海鳴市なんだよ?」

「……………ふえ?」

…まあ いきなり言われてもピンとこないか

「あ…つまりだな、この世界には【if】の世界…まあ僕が居なかつたらどうなっていたかって世界…かな?」

僕はイレギュラーだからね

「え?え?それって…ええええええ!!!??」

予想道理、混乱したか?

「落ち着け、なのは!」

ピシッ!

「あつう!」

とりあえずなのはにはデコピンをして落ち着かせた

「でだ、この世界は平行世界…つまりこちら側のフェイトやはやて…勿論なのはも居るんだ」

「ふええ!？わ、私がもう1人いるの!？」

「うん、だからキヨウ君はこちら側のなのはちゃんと見分けが付くように髪型を変える様に言ったんだよ…ね？」

まあね〜

「そ、そっか…うん、解つたの!じゃあ髪型変えるね」

そう言い、なのはは髪型をポニーテールに…

ん？サイドポニーではないですよ？一応…

「それでキヨウスケ君、これからどうするの？」

「ん？ああ、こちら側の協力者にコンタクトを…」

と、その時…!

キイイイン…!

「えっ!？結界!？」

突如として、あたり一面結界に覆われた!!

「…はあ、イキナリ戦闘しないといけないのか…インフィニティ!」

『…ここから北に向かった所に魔力反応が…近くにアインストの反応もあります』

ここから北…町のど真ん中かよ!!

「ちっ…いくぞ!なのは、さくら!」

「うん!」

「インフィニティ…」

「レイジングハート…」

「セットアップ!」

さてと…チャッチャと片付けますか!

Side Out

市街地

クロノSide

くっ！！何なんだコイツ！！  
こんな奴見た事ないぞ！？

ズカアアアン！！

「きゃあああ！！！！」

「！？大丈夫か！？なのは！フェイト！」

「う…うん、何とか…」

「私も…大丈夫…」

口ではああ言っているが…2人とも満身創痍だ…

「クツ！！たった1体に僕たちがここまで…」

大体、僕らの魔法攻撃が半減されるって！？しかも遠距離砲撃を放  
つわ妙な触手で攻撃するわ…

せめて…はやく達が居てくれれば…

「（クロノ！！大丈夫か！？）」



「（大丈夫…と言いたいが…かなりピンチだな…それよりユーノ、結界の維持頼むぞ!）」

「（ああ、わかつ…ツ!?クロノ!!結界の外から魔力反応が!!）」

…本局からの増援?…いや、それにしても対応が早過ぎる…

「（見えて来た!!…えっ!?な、なんで…）」

「（ユーノ!どうした!?)」

「（そ…そんな…だって…え?ちょ…うわあああ!?)」

「（おい!どうした!応答しろ!淫獣!!）」

くそっ!念話が繋がらなくなった…

「クロノ君…?どうしたの?」

「…ユーノとの念話が途絶えた…」

「ええ!?ユーノ君が!!?」

「大丈夫なの?クロノ…」

「…結界がまだ存在しているから大丈夫とは思っが…」

ユーノのあの慌てよう…まさか新たなアンノウンか!?

くそっ！！せつかく闇の書事件が解決したばかりだというのに！！

ブォン！

「クロノ！聞こえるか！？というか無事か！？」

「ギ、ギリアム少将！？」

少将自ら通信！？何で！？

「今そちらに援軍が向かっているのが…」

という事は…やはりさっきのは援軍なのか？

ならユーノは一体どうして…？ん？

「あの…どうかしましたか？少将？」

何か言いづらそうなカンジ？

「まあ…何だ、驚くなよ？ちなみに援軍は独立部隊FAITHだ」

FAITH…？そんな部隊あったか？

「クロノ！危ない！！」

「ッ！！」

ッ！？しまった！！アンノウンから高エネルギー反応！？マズイ！

！こちらに攻撃を！？

ズガアアアン！

…攻撃をされる前に、桃色の砲撃がアンノウンに直撃した！

…なのはか？まったく少ない魔力で無茶して…

「すまないなのは…助か…」クロノ君、私はこっちだよ？「何！？」

た、確かに…砲撃が放たれた方向とは逆の位置になのはは居る……じやあ誰が！？

「…大丈夫？クロノ君？」

「まったく…いきなりスターライトぶっ放すか」

「あはは…なのはちゃん…容赦ナシだね」

…そこに現れたのは、見た事がない男女と…

「な…なのはが…2人？」

もう1人のなのはが現れた…

S i d e O u t



## 平行世界での出会い

前回までのあらすじ…

平行世界に来たのだが…なのはが着いて来てしまった!?

…はあ、無事にアインスト退治できればいいが…

### 回想・遡る事数分前

キョウスケSide

僕となのはとさくらはバリアジャケットを纏い、アインストの反応がある地点へ向かっています

「あの結界って…ユーノ君の結界だよな?」

「ああ、この魔力色はユーノだろうな…」

ユーノは結界魔法とかが得意だったからな

「あ、キヨウ君！噂をすればあそこにユーノ君がいるよ!!」

ん?…あ、確かに!

どうやら結界強化に専念しているようだが…よし!

「なのは・さくら!時間がないからこのまま突っ込むぞ!」

そのまま僕は異空間から細雪を取り出した!

「ほえ!?!」

「キ、キヨウスケ君?突っ込むって…ユーノ君にちゃんと話せば…」

「その話す時間すら惜しいからな!!とりあえず結界をぶった切る  
!!」

「「ええー!?!?!」」

「2人とも!!僕の後ろに!!…いくぞ!!」

僕は細雪を構え…結界に突っ込んだ!!

…何かユーノがなのはを指差して慌てていたようだが…まあ些細な  
事だ!!

ザシュ!!…シユウウウ…

細雪を一線すると…結界の一部は消滅!!僕たちは結界内部に侵入

した

「…キヨウスケ君ってこんな突撃思考だったっけ？」

「あゝ…キヨウ君は…その、たまに…あははゝ…」

「「はあ…」「」

何でそこでため息を!?

「「自覚なし!?!」「」

…だから何がさ

で、結界内部に侵入した僕たち…ん？あれは…

『マスター！前方にアインストが!!』

ああ、見えてるよ…あれは確か…アインストグリード…だったかな？  
見た目植物っぽい…って!?

「キヨウ君！あそこにクロノ君が！！」

さくらの指差す方を見ると、アインストの砲撃がチャージされ、クロノを狙ってる場面だった！！

「チツ、間に合うか！？インフ「任せて！キヨウスケ君！！」ってなのは？」

なのはが構えたレイジングハートに魔力が集束され…えっ！？いきなりそれぶつ放す…？

「スターライトお…ブレイカー…！！」

《Starlight Breaker》

ズカアアアン！！

なのはから放たれた魔砲撃はアインストに命中！…って、あれ？

「なのは…スターライトの破壊力が上がってね？」

「うん この前発射シーケンスを少し変えて威力上げてみたの」

そりゃ…なんというか…

O H A N A S H I には気をつけないと…

回想終了



という訳で、何とか間一髪？クロノを助けたんだが…

「…大丈夫？クロノ君？」

「まったく…いきなりスターライトぶつ放すか？」

「あはは…なのはちゃん…容赦ナシだね」

しかし…よくクロノをスターライトに巻き込まなかった…ん？

「な…なのはが…2人？」

クロノが何か驚いて…ああ、そっか！なのはが2人いればそりゃ驚くか？

「な、なのはがもう1人…？」

「え？ええっ！？な、何で私があそこに…！！？」

こちら側のフェイトやなのはも驚いているし…って！？

「なのは！フェイト！KY！何ほつけてる！早くソイツから離れろ  
！！！」

あの位で倒せるなら苦労しないし…！！

「…！！」

案の定というか…砲撃の煙の中から現れた…！！

シユルシユル!!

アインストの触手が近くに居るフェイト達に向かって延びた!

「きゃああああ!」

ッ!させるかよ!!

ギユツ…タツ!!

僕は瞬動で一気にアインストとの間合いを詰め…

「クロツクマネージャー!!」

相手の時間そのものを一定時間止める能力でアインストの動きを止めた!

「ふう…大丈夫か?2人とも?」

「あ…はい、助けてくれてありがとうございます」

「おかげで…助かりました」

「なに、これも任「武器を捨てて手を挙げる!!」…は?」

振り向くと、デュランダルをこちらに向けいるクロノがいた…はあ、こつちの世界でもクロノはKYかあ…

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ!君達には聞きたい事が

ある！！武器を捨ててこちらの指示に従ってもらおうか？」

…訂正、こっちのクロノの方がさらにムカツク

「クロノ君！？この人は私達を助けてくれたんだよ？悪い人じゃないよ！！」

「そうだよクロノ！！この人が居なかつたら…今頃クロノは…」

まあ、確実に消されてたな

「それは…だ、だが！！彼らが怪しい人物なのは確かだ！！特にあのなのは似た人物とか！！」

「ふ、ふえ！？わ、私のせい！？」

急に話しを振られたのはは驚いていた…

そりゃ〜助けた相手から名指して怪しいとか言われればな

「…キョウ君、こっちのクロノ君って性格最悪だね…」

それは僕も同意するぞ！さくら

「…はあ、こちらの執務官の質もたかがしれてるな」

「ッ！！なんだと貴様！！」

おー！クロノが凄い目つきで睨んでるよ！！

ま、このままじゃ埒があかないな

「…時空管理局独立部隊FAITH所属 神代恭介だ…ちなみに階級はないが権限等は副元帥と同等だぞ？」

ピシッ

その瞬間、空気が凍りついた…

「な、なななななななな！！！！？」

案の定クロノが真っ青になってガタガタ震えている…ざまあ！

「で、出鱈目いうな！！大体僕はFAITHなんて部隊知らないぞ！！！」

お、思ったより早く再起動したな

ブオン

「いえ、彼の言っている事は本当です。クロノ執務管」

通信ウィンドウがクロノの前に開かれ…あれ？あの容姿って…

「ギ、ギリアム少将！？で、ではアイツ…彼が少將がおっしゃって  
いた援軍…ですか？」

…なんか、クロノが凄くイヤそうな顔をした…あんちくしょう…後  
で模擬戦で潰したるか！？

「…部下の非礼を許してくれ」

そして、ウインドウの中には…うん、容姿完璧ギリウムさんですね！  
ていう事は…

「…貴方がこちら側の…ですか？」

勿論、神族って意味を込めて聞いてみた

「フツ、君にはこの顔を見せれば通じると君の上司が言っていたぞ」

ああ、あの全ての元凶のゲーマー駄神か

「はあ、それで僕の事はクロノ等には…」

「一応援軍が行くと伝えたのだが…クロノ執務官、彼等は信用に足る人物だ。それは私が保証しよう

それと彼等の経緯については後ほど話す…いいかな？」

「は、はい！解りました！！」

…とりあえず…話しは着いたかな？

「とりあえず…マテリア【かいふく】 + 【ぜんたいか】セツト！！  
ケアルガ！！」

ピカアアア！！

ダメージを受けてボロボロなのはとフェイトを回復させた…なの  
はとフェイトのみを（笑）

「ふえ！？痛みが…なくなったの！！」

「うん…今までのケガが嘘みたいだ…」

よし、これで2人は大丈夫「あ、あの…」ん？

「どうした？ダメダメKY執務官？」

「ッ！あ、あの…僕も…その…回復させて貰えると助かるのです  
が…」

こちら側の上司に注意された為か、さつきよりは高圧的な態度は消えたが…ふむ…

「ん？助けた恩人にいきなりデバイス突き付け攻撃しようとした…  
そんな恩を仇で返す人間を回復しろと？」

「うっ……………」

流石にバツが悪いのか、目を反らしたな〜クロノ

「あ…あの〜、神代君…」

ん？こちら側のなののか？

「どつしました？」

すると、なのははいきなり頭を下げ…えっ!？

「お願いします！クロノ君の事も治してあげて下さい！」

「わ、私からもお願いします！クロノも決して悪気があった訳ではなくて…その…」

つてフェイトまで頭を下げて!?

「ねえキヨウスケ君、そんな意地悪しないで治してあげようよ…」

つてこつちのなのはもか!?

「キヨウ君…」

クツ!!これじゃ僕が悪者みたいじゃないか!?

「…ハア…判ったよ…クロノ、皆に感謝するんだな…【ケアルラ】」

ピカアアア

これでクロノも回復した訳で…まあ使った魔法のランクが前より低いのは気のせいだ!

「まあ、戦力は少しでもあつた方がいいしな」

「…「戦力???」「」」

こちら側のなのは達が不思議がつてるが…だって僕はまだクロックマネージャーでアインストの動きを一定時間止めただけだし…そろそろ…

「……！」

って言ってる側から再起動しやがったな……！」

「ふえええ……！！？ま、まだ動けたの……！」

「そんな……？倒したんじゃないの……！」

なのはとフェイトが驚いているが……

「だって……僕は相手の動きを一定時間だけ止めただけだし……！」

「なっ……！？なんだって……！」

それを聞いたクロノも驚いた……

「大丈夫……！さくら……！！ユニゾンだ……！！！」

「うん……！！！」

「……ユニゾン……イン……！！！」

ピカッ……！

僕はさくらとユニゾン……！！

「……えええっ……！！？が、合体しちゃった……！！？」

「これは……失われた古代ベルカのユニゾンデバイス……！！？」



こちら側のメンバーは初見なのか驚いてるな

「よし！なのは！シンクロユニゾンだ！！」

「えっ！？う…うん！！」

なのはは懐から仮契約カードを取り出して唱えた…

「シンクロ・イン！！」

ピカッ

僕となのはは1つになった…

『マスターとなのは嬢がそんな関係に…とうとう大人の階段を…』

…はっ！？いやいやいや！！！！

普通にユニゾンしただけだから勘違いしないでくれよっ！！？

Side Out

To Be continued



## 白騎士降臨

前回までのあらすじ…

平行世界に來た途端、速攻アインストとの戦闘になってしまった…

ふ、不幸だ…

キョウスケSide

「「シンクロ・イン!!」「」

ピカッ!

僕となのははアインストに対抗する為シンクロユニゾンをした

髪はなのとは同じ茶髪っぽくなり、バリアジャケットは白を基調とした姿…まあ、なのはのバリアジャケットを男性用に感じただ…

「なのとは初シンクロだけど…大丈夫か？」

『(…………… / / )』

……………あれ？返事がない？？

もしかして…ミスった？

「さ、さくら！！ユニゾン事故ったか！？」

「(えっと…ううん、シンクロユニゾンは問題ないけど…?)」

大丈夫…？なら何でなのはから応答がないんだ？

『(キ…キョウスケ君……ん / / )』

「な、なのは！？大丈夫か！？返事がないから心配したが…」

…何か妙に声が艶っぽいが…？

『(こ…これ…す…凄く気持ちいい…あん / / )』

……………はぁ！？

『(あんっ／＼ら、らめえ／＼!!／＼)』

……前々から思っていたが…フェイトやヴィータもシンクロユニゾンすると毎回コレだよな…

何かあるのか!?!シンクロユニゾン!?!?

「まあ、とりあえず…レイジングハート!インフィニティ!!コネクト!」

カチッ!ピカッ!!

光に包まれた合成されていくレイジングハートとインフィニティ…  
光が収まり、現れたのは…

「(インフィニット)レイジング!!」

と命名したランチャータイプのデバイス…ってこれは…

「オクスタンランチャー…だよな?て事は、ヴァイスリッター?」

どうやらなのはとのシンクロはヴァイスリッター系になるようだ…

言い得て妙だな…白銀の墮天使って所が実になのはらしいというか…

『(キョウスケ君!今何か失礼な事考えてなかった?)』

「イ、イエ!?ソナナ事アリマセンヨ?」

…あぶね／＼え、相変わらずの読心術っぷりだな…

「「「……………」」」

ん？ 何か平行世界Sideのなのは達がア然としているが…何かあった？

「（キヨウ君…多分ユニゾンが珍しいからじゃないかな？）」

…そうなのか？

「 …… ツ！！」

つて、それ所じゃねーな！！  
アインストが本格的に攻撃体制に！？

「3人とも！！ボサツとしてないで散開しろ！！狙われるぞ！！」

「…ハツ！？そ、そうだ！！」

なのは！フェイト！君達は左右に分かれて攻撃を！！」

「「う、うん！！」」

ふうん…一応は執務官と言った所か…

『（キヨウスケ君！私達は？）』

ふっ…勿論…

「派手にぶっ放す！！」

「(…ああ、なのはちゃんの影響か…キョウ君が変なテンションにっ!!)」

『(ふええ!!?わ、私のせい!?)』

…いや、そんなに感染されてない…と思うよ?…多分?

「…さくら、フェアリースフィアを」

「(う、うん!!スフィア展開!!)」

ヒュン!ヒュン!

…とりあえず性格汚染の事は後で検討するとして…

さくらの制御の元に僕の周りにスフィアを…

「…つかスフィアの数多くね?」

普段は6つ位のスフィアの数か…何か倍以上あるように見えますが…

「(えっ!?!?これでも少な目だよ?それと…(ゴニョゴニョ)…な事も出来るよ?)」

…ハア、ホントにシンクロって反則ばいよな…

「ま、まあ折角だし…試してみるか…フェアリー!」

ヒュンヒュン!ヒュン!!

現れたスフィアを操作して、僕の周囲に配置する！

「3人とも一端引け！！巻き込まれるぞ！！」

「うん！！（判った！！）」

僕の声に反応して、アインストに攻撃していたクロノ達は一端距離をとった

「よし、なのは！」

『（…スフィア同調率…70…80…90…100%…いつでもOKだよキョウスケ君！！）』

「いくぞ！！」

カチャ！

僕は レイジングをアインストに向け魔力を集束していき…

「スターダスト…」

《Load Cartridge》

ドキュ…ドキュ…！！

「ブレイカー！！」

《Stardust Breaker》



ズガアアアア！！ズガズガアアアア……

レイジングがら放たれた集束砲撃……基本的にはスターライトブレイカーの強化版なのだが……スフィアからもスターライトブレイカーが放たれた！！

……まっ、簡潔に説明すると……スフィアと同調させる事で、僕が放つ砲撃系魔法をそのまま同威力で放てるらしい……

……つかスフィアの数をもっと増やしてスターライトぶっ放したら……あれ？少なくとも惑星破壊可能？

《マスター、目標に着弾確認しました  
……というか既に跡形もなく消えています……まああれだけオーバーキルすれば当然ですが……》

インフィニティからの説明でアインストが居た場所を見ると……

「………(。；)「「「

クロノ達に変な顔を……あれ？街のど真ん中にクレーターなんてあったっけ？

「「「や、やりすぎだー！！(だよー！！)(なのー！！)「「「

うお！？こちら側のメンバーからツッコまれた！？

「ま、まあ……あはは……」

僕は渴いた笑いしか出来なかった…

Side Out

その頃…

## 旅館

はやてSide

キョウスケ君が居なくなつて、皆で旅館を家捜ししとると…レフィ  
ーナさんから通信が入つたんやけど…

「なっ!?!なんやて!?!?!?も1回言つてみい!?!?!?」

「で、ですから…キョウスケ君は緊急の任務である世界に言つても  
らつたので…」

「そこやない!!その後や!!」

「ヒツ!?…え、えっと…なのはちゃんもキヨウスケ君の後をこっそり着いて行って…」

パリン!!

「あ、主はやて…ゆ、湯呑み茶碗が…」

「は、はやて…握り潰してる…」

「で、でもちゃんと魔力で強化してケガしないようにしている所が…まあ、はやてちゃんらしいというか…」

「フフツ…なのは、また抜け駆けしてるんだね…しょうがないな…徹底的に話し合わないといけないね…」

「…なあ、レフィーナさん…キヨウスケ君らは何処に向かったんかな?…というか何処や!!今から後追い掛けな!!あんの魔王、ほつといたらキヨウスケ君に何するかわからへん!!」

「そ、そうだ!!あの高町なのはの事だ!!恭介に寝ている部屋にこっそり忍び込んで…ヤ、ヤベー!!はやて!早く追いかけてねーと…!」

ヴィータの言う通りや!!それに…キヨウスケ君の貞操を奪うんは私が先や!!

「…あの…キヨウスケ君が行った場所は…ぶつちやけザックリ言うとパラレルワールドだから簡単には行けないのよ?」

……………へ?

「……な、なんだって（やて）……！！」「」

パ、パラレルワールドって!？

「だから残念ながらはやてちゃん達は行けないのよ…それにパラレルワールドの移動にはキョウスケ君のデバイス【インフィニティ】の高速演算処理能力が必要だから…」

「つまり…最低でもインフィがないと…パラレルワールドには行けないん?」

「それだけじゃないんですけど…まあそう思ってくれていいです」  
な、なんやて!？

あのインフィが…唯のお笑いデバイスじゃなかったんか…それにしても…

「……フフ…フ…」

「は、はやて?どーした?」

「…ヴィータ…いやな、キョウスケ君はお仕事やから仕方ないんやろうけど…なのはちゃんはな…ちょーっとお仕置きが必要やなと…なあシグナム」

「は、はい!何でしょう?」

「すずかちゃんに頼んで…アイアンメイデン用意してもらってな？」

「「「「「………は？」「」「」」」」」

「だからアイアンメイデンをすずかちゃん家から借りて来てほしいんよ…確かすずかちゃんが家の地下にあるって言っとったし…フフッ」

「「「「「（な、なんですか（ちゃん）の家の地下にそんな拷問器具が…！…！？）」「」「」」」」」

それに…万が一、2人にナニがあったら…キョウスケ君もお仕置きや…」

S i d e O u t

おまけ

ゾクッ!?

な、なんだ！？今とてつもない寒気が！？

「キ、キヨウスケ君…何か今悪寒が…」

「な、なのはもか？」

一体何か…風邪？？

おまけ2

ゾクツ！？

「ツ！？」

「な、なのは？どうしたの？」

「う、うん…何か分からないけど…妙な寒気が…」

平行世界のなのにも影響を与えていた…

## インターミッション(前書き)

みなさん今晩は  
ヨシユキです。

今回の地震で私の地区は無事でした

こんな中、更新するのはどうかと思いましたが…  
このような小説でも皆様の疲れた心を癒やせるなら幸いです

## インターミッション

前回までのあらすじ…

アインストグリートを撃破した僕たち…  
オーバーキル

その後、平行世界側のクロノ達とアースラに向かったのだった…

アースラ

キヨウスケSide

「…平行世界…俄かには信じられないわね…」

僕たちはフリーフィングルームでクロノ達とリンディさん達を加え、  
現状を説明中…



「ですが事実ですよリンディ提督」

ディスプレイには…この世界の神らしい人がリンディさんと話し合っている

「…まあ、ギリアム少将がおっしゃるなら…それに…ねえ」

ため息混じりで僕の隣に座るなのは目をやって…

「ふえ！？リ、リンディさん…？私の顔に何か付いてますか？」

…まあ、なのはが2人居て…簡易検査とはいえDNAや魔力パターンが完全一致で同一人物って結果出ればな…

「しかしギリアム少将、何故わざわざ平行世界から彼等を？そもそも少将は平行世界に干渉が出来るのですか？」

クロノは何気に核心を付いてくるし…

「…後者の質問に関しては…出来ると言えるが…何故彼等を…また、どうやって等は極秘事項にあたるので…すまないな」

ま、神様同士の繋がりです！とかは言えないよな…しかもこっちにアインストが現れた原因が…神様のせいとも…

「それで…ギリアム少将でしたか？僕はこれから残り2体のアインストを撃退すればいいのですか？」

資料によると、現れたアインストは【クノッヘン】【グリート】【ゲミュート】の3体…グリートは撃破したから残り2体か…

「いや、残りアインストは1体だ」

……は？

「残り1体…ですか？こちらの情報とは違うようですが…？」

「…それは僕から説明しよう…」

と、クロノが手を挙げた

「君が来る数日前…1体目のアインストが現れたんだ…  
それに対応したのが…八神はやてとヴォルケンリッター達だ」

「なっ！？そ、そっぴや…こっちに来てからはやて達を見かけなかつたが…」

はやて達がアインストと戦闘って無茶苦茶な…ハッ！？

「おい！！はやて達は無事なのか！？」

僕は興奮のあまりクロノに掴みかかった！

「お、落ち着け！神代恭介！！」

…はやてとヴォルケンリッター達は無事だ！」

「そ、そうか…「ただ…」ってオイ！？」

「ク、クロノ君…はやてちゃん達どうなったの…？」

なのはも平行世界とはいえ心配して泣きそうな顔をしてる…

「はやて達はアインストを倒す事が出来たが…5人がかりでも相打ちがやつとだった…今は集中治療室に…」

「そ…そんな…」

「…オイ、クロノ…はやて達が戦っている間、お前達は何をしていた？」

「少なくとも、アースラチームで対応していれば…勝てなくても逃げる位は出来たろ!？」

「…済まない…アンノウンの反応があつた地域に偵察任務ではやて達だけを送つたのは僕のミスだ…気付いた時にはもう…」

「クロノ…貴方だけのせいではないわ…私達にも落ち度はあつたのだし…」

「…母さん…」

クソツ！僕がもっと早く来ていれば…!!

「…はやて達の容態は？」

「はやて達はダメージが深く…何とか一命は取り留めたが…いつ目を覚ますが…」

思った以上に深刻なダメージって事か…

「…ギリアム少将、はやて達の治療の許可を」

僕が持っている回復薬や回復魔法なら…助ける事が出来るかも！！

「…そうか、君の力なら…いいだろう。それに元々FAITHの権限は私以上だ。君の判断で行動してくれ」

「…こちら側でもFAITHの権限は通用するのですか？」

FAITHなんて僕の世界にしかないと思うんだが…

「なに、その点は心配しなくていい…あの伝説の3提督も承認済みだ…勿論、君の事も知った上でなので気にしなくていい」

「そ、そうですか…」

…何か、結構簡単に認めるんだな…伝説の老人会の方々って

「ならクロノ、はやて達の所に案内を…ってどうした？リンディさんも…？」

2人とも驚いた顔しているけど…？

「…あなたって…はあ…いえ、何でもありません…クロノ、彼等を丁寧に案内してあげて」

「…は、はい母さ…リンディ提督…」

「そつだ、なのはもさくらも付いてくるだろ？」

「「勿論だよ！！」」

とりあえず…まずははやて達の治療が優先だな…

と言う訳で、治療の為ははやて達の病室に向かっているのですが…

「なあクロノ、何でさっきリンディさん共々あんな呆れ顔してたんだ？」

「…君は…ハア、FAITHだったか？あの3提督がその権限を認めたという事は…君は実質管理局のNo.2と同等になったのだ…非常識を通り越して呆れるに決まってるだろ！！」

…ああ、なるほどね

「まあ…ホラ、アレだ…僕は平行世界の住人だし、一時的な措置だろ？」

アインストを退治したら元の世界に戻るんだし

「…にしても非常識な…おっ、着いたぞ」

「ここか…」

プシュ

僕が病室の扉を開けると…

「…あ、クロノ君」

「……クロノ……」

中にはこちら側のなのはとフェイトが居た

「なのは！フェイト！君達はまだ治療中のはずだ！！」

「大丈夫だよクロノ君…この位かすり傷だよ…」

「…それより…はやてやシグナム達の方が…あ…君達は…」

フェイトが僕らの存在に気付いたようだ

「やあフェイト、はじめまして…と言うのも少し変かな？」

「えっ！？どこかで会った事ありますか？」

「いや、こちら側ではないよ」

まあ戦闘中はドタバタしてたからな…

「…本当にフェイトちゃん、キヨウスケ君の事知らないんだ」

僕の背後に居たこっちのなのはが顔を出してきた

「えっ！？な、なのは！？で、でもこっちにもなのはが！？え？」

「わ、私が…じゃあ貴方達がさっきの人達？」

「そうだよなのは…僕たちは平行世界から来たんだ」

クロノ説明中

「という訳なんだ…」

「平行世界の私…」

「うん、何か不思議な感じだね」

「キョウスケ、じゃあ平行世界にも私は居るのかな？」

「ああ、フェイトは勿論はやて達も…っと、そうだった！はやて達の治療をしないと…」

「えっ！？はやてちゃん達の治療！？」

「はやて達は…助かるの？」

「そうだよ2人とも、キョウ君ならきつと何とかしてくれるよ！絶対大丈夫だから安心して…ね？」

「まあ…さくらの言う通り大丈夫だよ…その前に…」

ガサゴソ

僕は空間からエリクサーを取り出し

「まずは2人の怪我を治さないとな 2人ともコレを飲んでみて」

2人にエリクサーを渡す

「これは…？」

「…栄養ドリンク？」

…ライライ

「いや…まあ見た目はともかく…中身は最高ランクの回復薬だから！ケガは勿論、体力魔力完全回復するからさ」

「ホ、ホント？…じ、じゃあ…ゴクゴク」

「う、うん…私も…ゴクゴク…」

ピカア！

2人がエリクサーを飲むと、傷がみるみる回復していく…

「あ…痛みが全然なくなったの…！」

「ほ、ホントだ…身体も魔力も回復しているのが解る…す…凄い…」



「このリポ タン…じゃなく、エリクサーをはやて達に飲ませれば大丈夫な筈だよ？ほら、はやて達の分！」

さらにエリクサーをなのは達に渡した…大量生産しといてよかったな

「そ、そっか！！じゃあ私ははやてちゃん達に飲ませてくるの！！」

「ま、まってなのは！！私も手伝うよ！！」

なのはとフェイトはエリクサーを受け取ると、はやて達が居る奥の部屋へと向かった

「さて、これでははやて達は大丈夫だろ…《キョウスケ…》ん？」

この声は…リインフォース？

「（どうした？リインフォース？）」

《（ありがとうキョウスケ…平行世界とはいえ、私の大切な人…愛する騎士達を救ってくれて…）》

「（ただ僕は…出来る事をしたただけだよ？）」

《（それでも…ありがとう…）》

「（フツ、どういたしまして）」

リインフォースも律儀だな…そういやこちら側のリインフォースってどうなったんだろ？

…やはり原作道理か…？

「…ヨ…ス…キヨウスケ君ってば…！」

「うわっ！な、何だなのはか…脅かすなよ…」

「何だ…ってヒドイ！！私、何度も呼んだのに…キヨウスケ君つたら上の空なんだし…！」

…ああ、リインフォースとの念話に集中し過ぎたか？

「ゴメンなのは！ちょっと考え事してたんで…それで何かな？」

「…もう…キヨウスケ君、これからアインストを倒しに行くの？」

「ああ、そーいや話しの途中だったな…クロノ、残り1体のアインストは見つかっているのか？」

「…いや、まだ発見されていない…」

…じゃあ見つかるか手掛かりが出て来るまで待機だな…

「…済まないクロノ、僕となのはとさくら…アインストを退治するまで滞在するのだが…アースラの個室を貸してくれないか？」

確か向こうのアースラも個室けっこう空いていたと思ったから…こつちも空いていると思うが…

「ああ、それは構わない 部屋もかなり空いているしな」

やっぱり同じか？

「じゃあ暫くお世話になるよクロノ」

「ああ、」

こうして暫くはアースラ常駐という事が決まった……のだが……

なぜああなった？

Side Out

変わらぬ？日常…か？

前回までのあらすじ…

平行世界で暴れていたアインストを倒す為、僕とさくら（勝手に付いてきたなのは）

とりあえずアースラに滞在して最後の一体のアインストの行方を追っているのだが…

キョウスケSide

ど…どつしてこつなつた？

ん？いきなりどつしたと？

それは…

## 八神家

「キヨウスケ君らの面倒は私がまとめて見てあげるな」

「あゝ…いや、はやてさん？僕らはアースラに厄介になってるから…」

「何言うとるん！！キヨウスケ君は私らの命の恩人や！！  
その恩は返さなあかん！！」

…とまあ、エリクサーで完全回復したはやてが僕らに家に住むようにと絶賛興奮中です…

「そつだ神代！我らや主を救ってくれたのに、その恩を返せないのは騎士の名折れだ！！」

「ま、まあ…別に助けてくれって頼んだ覚えはねーんだけどよ…はやてを助けてくれた事は感謝してるし…お礼位はしねーとな」

「ヴィータちゃんったら素直じゃないんだから、キヨウスケ君、こんな事を言ってるけど…私達皆、貴方に感謝しているのよ？ねっ  
ヴィータちゃん？」

「なっ！？シ、シャマル！！テメー何いい加減な事言うんだよノノ

「!」

「あら、だってホントの事じゃない。ね ザフィーラ？」

「……………（コクツ）」

とまあ…ヴォルケンス達からも感謝されっぱなしなのである…

「にやはは、キヨウスケ君の回復薬って効き目抜群だもんね」

「その気になつたらキヨウ君って…死者蘇生も出来るんじゃない？」

うっ…それは微妙に否定出来ないかも… 何気にフェニックスの尾もあるし…

「しかし…平行世界のなのはちゃんか… 髪型以外ほとんど見分けつかへんなあ」

「うん、こつちのはやてちゃんも向こうのはやてちゃんと変わらな  
いよ？」

「へ…なあ、なのはちゃん？向こうの私ってキヨウスケ君とはど  
んな感じや？」

「えっ!??ど、どうって…にやはは…さくらちゃん、どうかな？」

「ほええ!??わ、私に丸投げ!？」

え…えっと…基本的には仲はいいよ?ただ…」

「ただ…何や？」

「そ、その…ね…」

チラッチラッ

…何か、さくらの視線を感じるのは…気のせい？

「…も、もしかして…向こうの私って…やっぱり…／＼」

さらにはやての視線まで追加されて…あれ？何かはやての視線が熱っぽい？

「えっと、実は…はやてちゃんだけじゃなく…なのはちゃんやフェイトちゃん…ついでに言うとヴィータちゃんシャルさんシグナムさん…は微妙かな？（それと私も…／＼）」

ピシッ

ん？空気が変わった？てか凍りついた？

「な、なんや！？その天元突破的な超弩級究極リア充状態は！？」

「にやはは…ついでに言うとアリサちゃんとすずかちゃんもなんだよ…ホント毎回 O H A N A S H I してるのにライバル増やしてるの…（ボンッ）」

な、何か寒気が！？

「な…ハア…そこまで行くと、逆に清々しいな…しかしキョウスケ君、いつか後ろから刺されるぞ？」

なんでさ！？僕が一体何をしたって！？

「…これは重症やな…向こうの私も苦勞しとるんやな」

しかも、こちらのはやても何気に心読むし！？

「…なあはやて、その【何とかりあじゅう】…って何だ？」

「あんなヴィータ…それは私らがキヨウスケ君に（ゴニョゴニョ）なんやって」

はやてがヴィータに耳打ちで何か話した瞬間、

「なっ！！？ななななななな／＼！！！？」

ヴィータは真つ赤になって僕を指差した…だから何故？

「…って何だヴィータ？僕の顔に何か？」

「…ッ！！／＼な、何でもねーっ！！な、何で向こうの私がコイツと…／＼べ、別にイヤツて訳じゃねーけどよ…」（ゴニョゴニョ）

後半が聞き取れなかったが…とりあえず、おもいつきり動揺してるよな？

「と、とにかくや！！キヨウスケ君らは家に泊まってもらうのは決定事項や！！リンディさんも（面白がつて）了承済みやから拒否権はないで…！！」



「ちよつと待てはやて!?!今変な単語が隠れてなかったか!?!」

「そこは気にしたら負けや」

クツ!こつちに来ても扱いは同じかよ!?!

「まあキヨウ君、むこうでもはやてちゃんの家に住んでるんだし…!」

ちよ!?!さ、さくらさん!?!今それを言うんすか!?!?

「…へっ!?!さ、さくらちゃん?今何て言ったん?」

「ほえ?キヨウ君がはやてちゃんと一緒に住ん「だあ!?!ちよ、ちよつと待て!?!」むー!?!」

あわててさくらの口を押さえたが…

「…えつと…キヨウスケ君、私ら同棲しとつたんノノ?私ら既にそんな進んだ関係に…ノノ」

何かはやてさんは、間違つた方向に勘違いなさってるし!?!

力チヤ!

「…神代、どついう事だ?」

シグナムがレヴァンティンを構え…つて!?!

「ちよ…ま、待て待て待て!?!落ち着けシグナム!?!」

ガチャ！

「…オメー、はやてに何しやがった？」

ヴィータさんもグラーファイゼンを構えてらっしゃるし！！？

「いや…だ、だから…確かにはやての家に厄介になっているが…ただ下宿させてもらってるだけだよ！！」

うん！凄く正しく事実を伝えたよな！？

「では主はやてには何もしていないのだな？」

ギクツ！

「……モ、モチロンナニモ…シテマセンヨ？」

「何故片言になっている？」

ぐっ…ヤバイ…何としても最重要機密だけは『おや、はやて嬢とキスしてませんでしたっけ？』ってオイ！？

「イ、インフィニティ！？テメー！今まで沈黙してたのに！？」

毎回ここぞという場面で爆弾投下しやがって…ハッ！？

「…ほう、神代…詳しく説明してもらおうか？」

「テメー！！はやてに『ついでに言つとヴィータ嬢、貴女もマスタ

「とキスしてますよ」んなっ!?!?!」

「イ、インフィニティ!!!お前!何空気読まない発言を!!!?」

「...キヨウスケ君、私という者が居ながらヴィータともなん?向こう側の事とはいえ...浮気は関心せんわ...」

「こ、こちら側のはやてさんも凄く素敵なお顔でどす黒いオーラを出してますね...」

「テテテテメー!?!どーゆー事だ!?!?私にまでキッ.../キスしただとおー...!?!?」

「いや、正確にはされた方なんです...って、冷静にツツコミ入れている場合じゃねー!!!」

「だ、だから今説明「言い訳無用だ!!!男なら責任取って腹を切れ!!!」ってシグナム!!!」

「安心しろ、恩人のお前の為に介錯位はしてやる」

「全っ然安心できねー!!!」

「な、なのは!!!さくら!!!助け「テメー今すぐブツ潰してやる!!!/」って!!!ヴィータ!!!落ち着け!!!」

「こ、これじゃ元の世界と変わらねー!!!」

Side Out

さくらSide

「あゝあ…ねえなのはちゃん、そろそろキヨウ君の事助けないと…」

「ん…キヨウスケ君なら2人相手でも大丈夫だろうけど…お家壊れちゃうのはマズイよね…」

キヨウ君の心配じゃないんだ!!?

「だってキヨウスケ君は無敵だもん」

信頼してるんだな…なのはちゃん…

そっくだよね！何たってキヨウ君なんだから何があっても絶対大丈夫！！

「ち、ちよい待ち！シグナム！ヴィータ！そんなデバイス振り回したら家が壊れてまう！！」

あゝ…でも、はやてちゃん…さすがにお家崩壊の危機感があったみたい…

あ！そっくだ！！

「あの！シヤマルさん！！とりあえず結界張ってもらえますか？」

それなら何とかかなりそうだし…私も結界魔法覚えようかな？

「そうね、はやてちゃんのお家が壊れちゃうのは困っちゃうし…  
えい！」

ブオン！

「これでよし！っ…」

シヤマルさんに結界を張ってもらったから…これで大丈夫！！

…と思つたら

「シヤマルでかした！！これでおもいつきりぶつ潰せるぜ！！おら  
！！逃げんな恭介！！わ、私のキス返しやがれー！！」

ズカーン！！

……あれ？

「…もしかして…悪化してるかな？なのはちゃん…」

「えっと…にやはは〜…」

…キョウ君、ごめんなさい…でもでもお家は守られたよ？

「ふ、不幸だー！ー！！」

Side Out

その頃…

## 旅館

すずかSide

「ええー！おにーちゃん居ないの！！」

「そうなのよ！！全くアイツは！！せつかく温泉に来たのに！！！」  
居なくなったキョウスケ君の事を探しに来た美夏ちゃん…  
ホント何処に行ったんだろっ…？

「ア、アリサちゃん…キョウスケ君も何か用事があったのかもしれないし…」

「ハア…すずか、アンタ本当にいいお嫁さんになりそうね…」

「そ、そうかな？／＼えへへ」

キョウスケ君のお嫁さん…ふふっ／＼やっぱり結婚式はウエディン

グドレスがいいな

「はぁ…改めて思うけど…おねーちゃんのライバル多すぎだよ」

「チツ…やっぱり春香もキョウスケの事を…」

「ア、アリサおねーちゃん…何気に舌打ち!？」

「まあいいわ!誰が来ようがキョウスケは渡さないんだから!！」

「アリサちゃん…それはこっちの台詞だよ??」

「ふん!!いくらすずかだって…こればかりは譲れないんだから  
!!」

勿論なのはやフェイトやはやてやヴィータにも!!」

フッフ…でもねアリサちゃん…私だってキョウスケ君は譲らないよ?

…万が一の場合は愛人でもいいかな?

「そーいえば、おにーちゃんに今一番近い人って誰なの?」

「そ…それは…」

…そーいえば…誰だろう?

ガラッ

「失礼する」

そう考えていたら…シグナムさんが慌てて入って来た

「あれ？シグナムさん？どうしたんですか？」

「月村、すまないのだが…主がある物を貸してほしいといっているのだ…貸してはくれないだろうか？」

「はやてちゃんが？何をです？」

「……その…何だ……アイアン…メイデンだ……」

「」「………は？」「」

アイアンメイデンって…

「シグナムさん…それってアレですか？トゲトゲが付いた…鋼鉄の乙女的な？」

「ああ、そうだ」

「ちょー！ちょーと待った！何ではやてがそんな物を！？というか、すずかが持っている訳が……」

「実は…神代が急な仕事で出掛けてしまってな…しかも高町がその仕事と一緒に付いていってしまった事に主は腹を立てて……」

ピシッ！

「…解りましたシグナムさん…すぐこちらに取り寄せます！…」



…なのはちゃん…抜け駆けは…だめだよね？

「つか持ってるんかい！？てかすずか！！何でアンタそんな物騒な物をフツーに持ってるのよ！？」

「えっ？うーん…嫁入り道具？」

「「こ」…怖ッ！！？」

「えっ？怖くないよー いやだなーアリサちゃんも美夏ちゃんもー  
…フフ…フッフフ…」

…なのはちゃんの血…美味しそうだから楽しみだなー…

「で、では頼んだぞ？」

ガラッバタン！！

「ちょ！？ちよっと！！！？シグナムさん！！この雰囲気どうしてくれるのよ！！！？」

「フッフフ…フッフフ…」

「すずかおねーちゃん…壊れちゃってるしー！！！？」

「2人トモ？わたしはぶっつダヨ？」

「「目を単色にしている人が言う台詞かー！！！？」

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

あれ？何気に禁断の？フラグ！？

前回までのあらすじ…

シグナム&ヴィータの O H A N A S H I で半死半生状態の僕…

い、一体僕が何をしたー！！？

で、次の日…

アースラ

キョウスケ Side

「…で、クロノ…アインストの反応はあったか？」

「いや…まだ反応はないが…というか…どうしたキヨウスケ!? 1日でかなり寝れてないか!？」

「…ハハハ、詳しくは前話を読んでくれ…」

なんとかシグナムとヴィータの説得には成功したが…ライフポイントがガリガリに削られたよ…

「???…ところで…そっちのなのは今日はどうしたんだ?」

「ん?なのは今朝こちら側のなのはが来て翠屋に連れていった…僕は遠慮して、代わりにさくらに行ってもらったが…」

…翠屋で何が起こっているか容易に想像できるな

おそらく…こちら側のなのはが士郎さん達に紹介してるんだろうな…知らない人が見たら双子だよな…

その頃、翠屋

さくらside

私となのはちゃんは、こちら側のなのはちゃんとフェイトちゃんに連れられて翠屋さんに来ているんだけど…

「じゃあ2人とも、ちょっと待っててね 行こうフェイトちゃん」

「う、うん…なのは、楽しそうだね？」

「にははは、だってお父さんやお母さん達の驚く顔が見られるんだもん」

…「こちら側のなのはちゃんも…やっぱりちょっと黒いみたい…」

「…さくらちゃん、今すつごく失礼な事考えてなかったかな？かな」？

うつ…「こつち側のなのはちゃんに気付かれた!？」

「ほえええ!？そ、そんなことないよ…」

「そつ?ならいいんだけど…」

ふう…「危ない危ない…キョウ君の気持ちが少し解ったかも…」

「じゃあ2人はまってるなの」

そう言つと、扉に手をかけて…

カランカラン

「たっだいま〜!」

「あ…お邪魔します」

元気よく先にこちら側の2人が翠屋に入っていった…

「お帰りなのは、フエイトちゃんもいらっしやい」

「ねえお父さん！お母さん！新しいお友達が2人居るんだけど…入ってもらっていいかな？」

「あら、なのはのお友達なら大歓迎よ」

「ああ、入ってもらいなさい」

「ふふふ、お父さんもお母さんも驚かないでね？  
入っていいよー！さくらちゃん、なのはちゃん！」

「「な、なのはちゃん！！？」「」

あ、やっぱり同じ名前だから反応したみたい…というか同一人物な  
んだけどね…

「お、おじゃましまーす…」

まずは私が先に入り…

「えっと…こ、こんにちは？になるのかなあ？」

私の後ろからなのはちゃんが続いて入る…

「「……………な、なのはが…2人！？」」

うん、やっぱりそういう反応になるよね…

「にやはは、やっぱりお父さんもお母さんも驚いたよね」

「な、なのは…彼女は一体…？」

「どうみても…他人の空似…には見えないのよねえ…」

平行世界とはいえ、娘には変わらないもんね

「へへっ、実はね…」

なのは説明、時々フェイトがフォロー中

「へ、平行世界!？」

「うん! そうなんだよね、なのはちゃん」

「にやはは…」

「私も初めて見た時はビックリしました」

「…やはり魔法というのは何でもアリだな…」

うん…魔法と言っても万能じゃないんだけど…キョウ君のは別格…  
…というか桁外れ? 寧ろ時々神様にすらケンカ売ったりするからな…

「それにしても…なのはそっくりね」

あ、平行世界だから当たり前ね」

「ところでなのは、そちらのお嬢さんは？」

あ、私のこと？

「えっと、はじめまして

キョウ君のユニゾンデバイスのさくらです」

「キョウ君？？」

「ユニゾンデバイス??」

…あれ、なのはちゃんのお父さんとお母さんが？顔だけど？

「あ！お母さん、ユニゾンデバイスって言うのは、私のレイジングハートの人型版だと思ってくれればいいよ？」

こっち側のなのはちゃんがフォローしてくれた…そっか、ユニゾンデバイスって珍しいってキョウ君も言っていたっけ？

「…なのは、キョウ君って言うのは誰だい？」

「へっ？えっと…なのはちゃんと一緒に来た平行世界の男の子だよ？ねっ？なのはちゃん」

「うん！それでね…なのはの恋人なの」

ピシッ！



な、なのはちゃん！！キヨウ君はなのはちゃんの恋人じゃないよー！！

というか…今、空気が変わったような…？

「ほ、ほう…平行世界のなのはの恋人か…これは後で挨拶をしないとイケないなあ…」

あゝ…空気が変わったのはお父さんのせいかゝ

ドドドドドツッ！！

ん？な、何が外から凄い音が！？

ボタン！！！！

「な、なのはに恋人だとおおおお！！！！！！！！」

ほ、ほええええ！！？

な、何か凄い勢いで男の人が入ってきた！！？  
…ってあれ？確かこの人は？

「「あ、お兄ちゃん！お帰りなさいなの」「

確かなのはちゃんのお兄さんの恭也さんだっけ？前にキヨウ君がフルボッコにしたって言っていた…

「ああ、ただいまなの……は……」

あれあれ？お兄さんがなのはちゃんを見て固まってる？

「…疲れているのか？…なのはが2人いるような…」

あっ！お兄さんにはまだ説明してなかった！

「えっと…なのはのお兄さん、実は…」

フェイトちゃん説明中

「……という訳なんです」

フェイトちゃんがお兄さんに説明してくれたので、大体は理解してくれました

「…ねえさくら、何か私…さっきからフォローとか説明とかしか出番がないような…」

そ、そこは気にしちゃダメだよフェイトちゃん！

「平行世界のなのは…なのか？」

「…そっだよお兄ちゃん (ニッコ)」

「グハッ!？」

バタン!!

ツインなのはちゃんの精神攻撃?を受けたお兄さんは…鼻血を出して倒れちゃった!?

「お、お兄ちゃん！ん！？？」

なのはちゃんsが慌てて駆け寄ってお兄さんを揺さぶっているけど… たぶん逆効果だよ？

「…な、なのはが2人… ツインとポ、ポニーテール… 萌え… グ  
フツ！！」

な、何か血を吐きながら危ない発言してなかった！？

あ… 確かなのはちゃんのお兄さん… シスコンだって前キョウ君が言  
つてた！！

と、とりあえず… なのはちゃん達をお兄さんに近付けちゃいけない  
ようにしないと…

「えっと… さくら、こーゆー場合どうしたら？」

「… フェイトちゃん、多分トドメを刺した方がいいんだけど… 一応  
なのはちゃんのお兄さんだから… 助ける？」

「な、何で疑問形！？ というかトドメって…」

多分それが世の中の女の子の為だ！ ってキョウ君なら言うからだよ  
？（笑）

Side Out

キヨウスケSide

ん？何かさくから電波があつたような…？

「どうしたキヨウスケ？」

「いや、何でもない…」

「そうか、確か今日はフェイトも朝からなのは所に行ったのだが…」

「フェイトも？」

「ああ、君のくれた薬で傷が回復したので…てっきり僕との日課の模擬戦でもするのかと思つたのだが…」

「…クロノ、こっちのフェイトもバトルマニアか？」

「………というと、そちら側のフェイトもか？」

「…まあ、まだ病的な程じゃないんだけどな…」

「「………ハア」「」

もうため息しか出ないや…

「あ、2人とも〜！そんな深いため息つくと幸せが逃げちゃうよ〜  
！！」

と、明るい声でいきなりエイミイさんが現れた！！

…待ち伏せ？

「エイミイ…ため息もつきたくなるさ…毎日毎日フェイトの模擬戦に付き合ってるんだから…」

…毎回模擬戦してたのか！？そりゃクロノも大変だな…

…でも毎回模擬戦している割には…クロノの戦闘スキルってあんまり高くないような…

まあ武士の情けで口には出さないが…

「あ、キョウスケ君！いらっしや〜い」

こちらのエイミイさんもテンション高いな！？

「お邪魔しますエイミイさん」

「ねーねー！！キョウスケ君！！向こう側の私ってどんな感じかな  
〜？

やっぱり美人で知的でパーフェクトな感じ？」

…訂正、バカッぽさが増してるかも…

「…なーんか失礼な事考えてない？」

「い、いえ！そんな事ないですよー！！」

だから何で心読まれるかなあ？

「平行世界と言っても、そんなに変わってないですよ？」

美人で知的でパーフェクトかどうかは…まあ…ねえ？

「所でエイミー、こんな所でどうしたんだ？」

「あっ！いつけなーい！！キョウスケ君、アインストの反応があつたよー！！」

「そうですか、アインストの反応があっ……………」

……………なっ！！！？

「そ、それを早く言えー！！！！！！」

のんびり世間話している場合じゃないだろー！？

「だつて…………、私もキョウスケ君と親睦を深めたかつたんだもん！！！！」

だもん…ってエイミーさん…

「それにキョウスケ君は今じゃアースラ女子局員の1番人気なんだよ？」

かなりのイケメンで将来性アリ！即ファンクラブが出来る位だし…

こーゆー機会がないと話し掛けるなんて恐れ多くて…」

な、何だそりゃ!?

「…はあ、色々ツツコミたい所ですが…今はアインストの反応が優先ですね…ブリッジに急ぎましよう」

「あ、ああ…エイミィ!いくぞ!」

「あーん!?ま、まってよキョウスケ君!クロノ君!」

しかし…アインストより僕との話しが優先って…仕事してくれよエイミィさん…

Side Out

おまけ

「…所でエイミィ、君はまさか…キョウスケのファンクラブに入っていたりしないだろうな…?」

「いやだな…クロノ君!!私がファンクラブに入るなんて…」

「そ、そうか？そうだよ」だって私がファンクラブ設立したんだから元からに決まってるよ / / 「なん…だと！？というか何故顔を赤らめる！！？」

「んふふ／／」

……とりあえずスルーしよ……



はやてVSHイミイ！？前哨戦…？

前回までのあらすじ…

『マスターのファンクラブ創設者、こちら側のエイミイ史にマスターがフラグを立て「立ててねー！！」つかそこはスルーってんだろ！！？』…チツ、つまらない…』

だからどうやったらデバイスが舌打ち出来るのさ！？

と、とりあえず最後のアインストが発見されました！！  
本編どうぞ！！

『で、マスター的にKYからエイミイ史を略奪してハーレムに加える…と』

…コイツ…まさかこのネタひっぱるつもりか…！？

アースラブブリッジ

キョウスケSide

プシュ!

「リンディ提督!アインストの反応があつたつて聞きましたか?」

僕はブリッジに入りリンディさんに確認…しようとしたら

「遅いで!キョウスケ君!」

…何故かはやてやヴォルケンリッター達が先に来ていた!?

「は、はやて?それに皆も…何でここに?」

「勿論キョウスケ君のお手伝いをする為や!」

いや…お手伝いって…全回復したとはいえ病み上がりじゃなか!?

「それに…やられっぱなしは私の主義じゃねーしな!」

「ああ…我々を苦しめたアインスト…今度は後れはとらん!」

ヴィータとシグナムがえらいやる気満々だよ…リベンジに燃えてるな

「フフツ、2人ともキョウスケ君の力になりたいって言ってなかつ

たかしら？」

「「なあっ！！？ななな何を言ってる（んだ）シャマルツ！！？」

「あら？違ったかしら？フフツ」

「いやっ！！ま、まあ…違わなくもないが…／／」

「私は！は、はやてがコイツの手伝いしたいって言うからっ！し、仕方なく力を貸してやるーと…／／」

「こっちのシャマルさん…シグナムやヴィータを手玉に取りまくりだな…」

「……………フツ、神代…前にも言ったが我々は主を救ってくれたお前に恩返しをしたいのだ…まあ若干2人ほど素直ではないがな」

「ザ、ザフィーラ…よ、ようやく長台詞が言えたんだね…こっちのザフィーラは空気にはならなかったようだ…」

「……………今、我が言った事が台無しにされた気がするのは気のせいかな？」

「…うつ、鋭いな…」

「あはは…ありがとう…」

でも病み上がりだから無理はしないでほしいな…平行世界とはいえ家族なんだし…」

「それでリンディ提督、アインストの反応に間違いないのですか？」

「ええ、このパターンは以前と同じ反応です…おそらく…」

「そうですか…それで反応があつた場所は何処です？」

「ちょっとまって…ユーノさん？」

「はい…反応は…海鳴臨海公園付近です」

オペレーターのユーノが答え…つて!？」

「ユーノ!？お前いつからアースラのオペレーターになつたんだ!？」

無限書庫の司書はどうした!？」

「…エイミィさんに押し付けられて(頼まれて)…」

ユ、ユーノ…本音と建前が逆になつてるぞ？」

「…君が神代恭介君ですか？話しはなのは達から聞いています」

…あ、そーいやこつちのユーノとは結界破壊以来か」

「ああ、以前はすまなかつた…」

改めて…時空管理局独立部隊FAITH所属、神代恭介だ」

「僕はユーノ・スクライアです…と言っても、向こう側の僕の事は

「ご存知ですよね？」

まあ…淫獣とか淫獣とか淫獣で…

「……………ああ、（一応）友達……………かな？」

「何でそこは疑問形なんです!？」

いや〜よく考えたらあまり仲は良くないような気が…

プシュ!

「ハア…ハア…キヨ、キヨウスケ君!走るの早いよ〜!」

「エイミイ、君はただ単に運動不足なだけだ!」

遅れて来たエイミイさんとクロノがブリッジに入って来た…

「エイミイ、早くユーノさんと変わりなさい!〜まったく…」

「はーい!〜わかりました艦長!〜!」

…ホントにエイミイさん…無駄にテンション高いな!?

「…なあクロノ、こっちのエイミイさんって…いつもこんなカンジか?」

「…ああ、確かに何時もテンション高いが…今回は特にだな」

今回は?…何かいいことあったからか?

「おい！キョースケくん！！おねーさんの仕事っぷりをしっかり見ててね」

「は、はあ……」

ちゃんと仕事してくれるなら問題ないん……ん？

ジイイイ……

な、何か隣のKYから穴が空くほどの視線を感じるんだが……

「……な、何だクロノ？」

「……別に何でも……」

いや！？何かあるだろ！！その態度！？

ゴゴゴゴゴオ……

な、何か黒いオーラが背後から感じる！？

「へええ……キョウスケ君、エイミイさんと仲ええんやなあ……」

「……オメーはやてや私って者が居ながら浮気か……！」

な、何でこっちははやてやヴィータが黒いオーラを！？

「……何かイラツときたからや……それとヴィータ、【はやてや私って者が居ながら】って……ヴィータは別にキョウスケ君の事は何とも

思っていないんやなかったか？」

「うっ…そ、それは…その…ノノむ、向こう側とは言え…ゴニョゴニョ…」

はやての猛攻（ツッコミにたじろぐヴィータ…あれ？このケンカの原因って…僕？

「…まあええわ、それにキヨウスケ君があんな年増で胸も中途半端な女に興味あるとも思えへんしな」

…は、はやてが…黒さ増量してる!？」

「…はやてちゃん？中途半端は酷いんじゃないかな？」

私って結構着痩せするタイプだから…脱いたら凄いんだよ」

エイミーさんもコンピュータから目を話さず、黒いオーラを放ちながらはやてに対抗してるし!？」

「…っ」

「どっした？クロノ？」

何か鼻を押さえて上を向いているが…？

「い、いや…何でもない（エイミーの……を想像したら、何て言えない…）」

「それに、はやてちゃんなんかペタンコじゃないのかな？」

「いややな〜エイミーさん…私にはまだ有望な未来があるで？…これからバーンとおつきくなる予定や

それに比べて…エイミーさんはもう成長打ち止めとちゃうん？」

…何このカオスっぷりは？

「…コホン！エイミー！！至急分析お願いね！」

「は、はい艦長！！さーて、気を取り直して！このエイミーさんの実力見てちゃうよ〜！！！」

リンディさんの一喝で何とかなったが…解析に少し時間かかりそうだな…

「（あ、あの！ちょっといいですか？）」

…これはユーノからの念話？

「（ん？何だい？ユーノ）」

「（…えっと…あの、神代さん…向こう側では…その…なのはとはどういう関係なんですか？）」

……………何？

「（どうい関係…とは？）」

「（…神代さんと一緒に来たのは…さんを見てると…とても仲が良さそうだったので…）」



…まあ、仲は良いとは思いますが…

「（まあ…なのはとはパートナー（仮契約とかで）…かな？）」

「（パ、パートナー（恋人）ですか！？）」

…何でそんなに驚く？

「（…そうなんですか……そうですね…貴方みたいな人がなのは隣の居るんなら…僕は…）」

な、何かユーノが段々と闇に沈んでいくような…！？

「（…なあキヨウスケ）」

今度はクロノからの念話？

「（どうした？クロノ？）」

「（前々から聞いたかったんだが…君は向こう側ではフェイトとはどういう関係なんだ？）」

クロノからも似たような話し！？…あ、クロノの義理の妹になるんだから気になるのか？

「（ああ、ユーノにもなのはとの関係を聞かされたけど…なのはとフェイトは僕のパートナー（仮契約的な）だぞ？）」

ピシッ！

ん？何か空気が凍り付いた効果音が聞こえたが？

「…き、君はフェイトとなのは…2股かけているのか!？」

……え…

「えっ!?!?2股!?!？」

か、神代さん…貴方がそんな人だったなんて…」

ユ一ノも何そんな軽蔑するような目で見るとだ!?!？」

「ち、ちよつと待て!?!?何か勘違いしてないか!?!?なのはとフェイトは仲間上のパートナーだって意味だ!?!！」

「そ、そうなんですか?はは、勿論分かっていましたよ?。」

「あ、ああ…僕は始めから分かっていたがな…」

……お前ら…絶対疑ってたら!?!？」

『(…まあ、そう思っているのはマスターだけで…皆さんはマスターの貞操を狙ってますけどね…」

ま、こちら側のKYや淫獣に話しても…男相手ならマスターは武力行使で黙らせてしまつて面白くないですから黙ってますが…(…」

…何だろう、今スツゴクこのインフィニティを握り潰したくなつたこの衝動は…?」

「つかはやてにヴィータ!?!?何故にそんな殺気をこちらに飛ばしてるんです!?!？」

さつきから殺気が刺さって痛いんですが!?

「べつついにいい……」

明らかに不機嫌っすよね!?

「シ、シャルルさん?はやて達は何で不機嫌なんです?」

「キヨウスケ君、年頃の女の子には色々あるのよ」

さ、さいですか……

「はい!解析終了!艦長、目標地点の空間の歪みが徐々に拡大中!後1時間ほどで最大になります!」

「解りました:キヨウスケ君、後は君に指揮権を委ねる事になりますが:よろしいですか?」

まあアインスト相手なら僕が作戦指揮権を持った方がいいのかな?

「では:目標地点にの周囲に広域結界展開の準備をお願いします:それから現場には僕とさくらとこちら側のなのはが向かいます」

さくらとなのはとのシンクロユニゾンで一気に殲滅出来ると思うが:残ったアインストゲミュートって:無駄に装甲硬いからな

「キヨウスケ君!私らは?」

「まさかこのまま置いていこうなど言うまいな?」

「私らだってオメーの力になれるんだかな!!」

「そうね、私はサポートしか出来ないけど」

「…弾避け位には努めてみせる!」

…皆やる気満々だな…正直置いていこうと思ったけど…仕方ない…

「…僕の指示には従ってもらおう…これが絶対条件だ…いいか?」

「「「「うん(おう)(はい)!!」「」「」」

ま、何とかなるかな?

「クロノとユーノは封鎖結界の方を頼む。なるべく強固なヤツで頼む」

下手したら結界破壊とか有り得るからな…

「ああ、任せてくれ!」

「結界は僕の専売特許だからね!」

さて…多少の編成があったが…最後のアインスト…仕留めに行くか  
!!

Side Out



## 凶鳥の眷属

### 海鳴臨海公園

キョウスケSide

僕は今、アインストの反応があつた公園に到着している…のだが…

「なあさくら…なのは…何でこの2人もいるんでしょうか？」

「えっと…てへ」

「じゃはは…」

笑つてごまかすなよ！！

「ご、ごめんなさいキョウ君…一応危ないからって止めたんだけど…ね、なのはちゃん？」

「うん…だけど2人頑固で…さすが私って感じかな？」

「一応自分が頑固とは認識してるんだ…」

「…で、何で居るんだ？なのは、フェイト？」

「そう、こちら側のなのはとフェイト（オマケのアルフ）が戦闘モードで来てたんですよ！？」

「わたしやオマケかい！？」

「…あ、平行世界のアルフ初登場だな…」

「…はやてちゃん達も戦うのに…私だって黙っていられないよ！！！」

「うん、私も友達が戦うのに…黙ってなんかいられない！！！」

「こりゃ…止めても無駄なパターンすか！？」

「神代、テストロツサ達も生半可な気持ちでここに居るのではない…気持ちを汲んでやってくれ」

「汲んでくれて…ハア、仕方ない」

「…2人とも、はやて達にも言ったが…僕の指示には従ってもらおうから…これが守れないならアースラに強制転送だからな？」

「…うん！！！」

「…ホントに分かってるかな…？」

「特になのはが！！！」

「それでキヨウスケ君、これからどないするんや？」

「まずはアインストが現れた瞬間に結界を展開してアインストを結界内に閉じ込める…準備は大丈夫か？クロノにユーノ？」

「（ああ、問題ない。各員所定の位置で待機中だ）」

「（こちらは大丈夫です！いつでもいけます！）」

結界チームは大丈夫そうだな

「で、次にシヤマルとザフィーラとアルフでアインストにバインドを掛けて動きを止めてくれ」

「はい、任せて下さい！」

「…心得た！」

「任せておくれ！！ビシッと止めとくよ！」

「それで残りは…アインストに一斉攻撃を！」

「……分かった（の）（で）」

…これで倒せば簡単なんだがな…

1時間後



「……現れんな」

「……現れねーな」

はい、そうですね〜…って何故!?

「エイミーさん、そちらのサーチャーには何か反応ありますか?」

「う〜ん…空間が歪んでいるのは観測さるてるんだけど…1時間前と大差ないのよ〜…」

まさか…アインストがこちらを警戒して…?

「とりあえず現状維持を…皆、気を抜かないよ……………」

パリン!!

突如として空間にヒビが入り、そこから現れたのは…!!

「　　ッ!!」

アインストが現れた!!

「ちっ、皆!! 散か…」

僕が皆に指示を出そうとするが…

グオオオオオン!!

アインストが現れた亀裂に物凄い勢いで引っ張られた！

「なっ！？吸い込まれる！？」

「くっ…な、何て力なの！？」

クソツッ！油断した！！このままじゃ皆吸い込まれてしまうっ！！

せめて皆だけでも！！

しかし…

「きゃあああ！！？」

「は、はやて！！！？」

「はやてちゃん！？」

「はやてえ————！！！？」

はやてか耐えられず亀裂に吸い込まれてしまった！！

「この…ヤロオオ！！」

僕は、はやてを追い掛け亀裂の中に飛び込んだ！

「お前もいい加減…引っ込め！！」

《Load Cartridge》

ドキュ！ドキュ！

「ブラスト…シグヴァーン！！」

《Ignition》

ズガアアア！！

亀裂に居たアインストを押し込めて亀裂に突入した！！

「キヨウスケ君！！」

「キヨウスケ！！」

「恭介ー！！」

「神代ツ！！」

「皆！！必ずはやてを連れて帰る！！それまで亀裂の維持を頼む！！」

僕そのままアインスト共々亀裂の中の異空間に突入した！！

恐らくこの空間は…規模は小さいがアインスト空間の可能性が高い…その中に入って出入り口を塞がれたら…帰還可能性が低くなるかもしれない…

「！！」

ツ！？コイツ！？ブラストシグヴァンが効いてない！？…いや、効

いてはいるが装甲が硬いのか!?  
さすがは鎧の姿をしてるだけはあるな…

「だが…このまま切り裂く!?!」

《Explosion》

ズガアアン!!

「!?!」

僕はアインストを上下に切り裂いた!!

Side Out

さくらside

キ、キョウ君が亀裂の中に吸い込まれちゃった!?!?  
ど、どつしよつ!?!?

「さくらちゃん!!キョウスケ君が吸い込まれた亀裂が小さくなっ  
ていくの…!」

ほええええ！？そ、それじゃキヨウ君が…キヨウ君達が戻って来られる可能性が！？

「み、皆！！力を貸して！！皆の魔力をぶつけて、何とか亀裂を維持しないと…キヨウ君達が戻って来れなくなっちゃう！！」

「ええっ！？」

「な、なら私達もキヨウスケ達を探しに行った方が！！」

「ダ、ダメだよ！！この中の空間はどうなっているか解らないんだよ！？」

「キヨウ君なら何とかなるかもしれないけど…私達じゃ迷って永久に出てこれなくなるよ！！」

「そ、そんな…」

「じ、じゃあはやてはどうなんだよ！？」

「落ち着けヴィータ！！」

「落ち着いていられっか！！私だけでも探しに行…」

「パァン！！」

錯乱状態だったヴィータちゃんにシグナムさんがビンタをした！？

…っわぁ…痛そう…

「落ち着けと言っているだろヴィータ！！」

「シ、シグナム…」

「ヴィータちゃん…はやてちゃんの事はキヨウスケ君に任せましょ？  
キヨウスケ君も言っていたでしょ？【必ずはやてを連れて帰る】って  
…今は彼を信じて待ちましょ…ね？」

「…シヤマル」

「…それに神代は向こう側のお前や主が好意を持つ程の男だ…こ  
ちらのお前も信じてやったらどうだ？」

「なっ！？ななな何言ってるんだザフィーラノノ！！？」

…ヴィータちゃん？何でこっち側のあなたが顔を赤くするのかなあ…

「ち、ちよつと皆…！」

「O H A N A S H I 中の所悪いんだけ…ど…！」

「シグナム！私となのは達だけじゃ…この亀裂の維持が…キツイ！  
？」

あ…今亀裂に魔力ぶつけてるのってなのはちゃんs達とフェイトち  
やんだけだった！？

…というより…なのはちゃん？お話の字がちがうよ…！？

「あっ！？わりい！ホラいくぞ！シグナム・シヤマル・ザフィーラ  
…！」

「フッ、ああ！」

「そうね、キョウスケ君を信じて……」

「我らの出来る事を……！」

皆キョウ君を信じて待つてるんだから……必ず戻って来てね……

「……さくら、皆私の事……忘れてないかい？」

……あ、アルフさんの事忘れてた！？

「ほえ！？そ、そんな事ないですよ？……多分」

「な、何でそんなに自信なさげに!？」

「ホ、ホラ!! 私達も早く皆のお手伝いに行きましょう!……」

「あ……ああ……」

あはは……でも、ホントに無事に帰って来てね……キョウ君……

S i d e O u t

キョウスケSide

「はあ…はあ…は、はやては!？」

僕は辺りを確認するが…

「…見当たらない…クツ！諦めるか!!インフィニティ!【ハイパースキャン!!】」

ヴォン!!

ハイパースキャンで広域探索を掛けてみる…

「インフィニティ!はやての反応は!？」

『…反応ありました!マスターの頭上です!』

つて上かよ!？ホント灯台下って事が…

「はやては…居た!!」

僕の遙か上空にはやてが浮かんでいた!

タツ!!

僕は虚空瞬動ではやての下に駆け付けた

《キョウスケ、主はやては!?!》



僕の隣に半透明の姿で現れたリインフォース…

「…大丈夫、気を失っているだけだから」

《そうですね…よかった》

「…う…う…うん…」

おっ？はやてが目を覚ましそうだな

「リインフォース…」

《はい、解りました》

そう言うとリインフォースの姿は消えた

「う…うん…あ、キョウスケ…君？」

「お目覚めですか？お姫様<sup>ニッコ</sup>」

「ッ／＼！？ね、寝起きにそんな破壊力抜群な笑顔は…反則や…／  
」

…はやての顔から煙が…？

「ハッ！？そ、そうや！！私は何か変な空間に吸い込まれて…ここ  
は…？」

お、再起動したみたいだな

「多分ここは…アインスト空間（の縮小版みたいな）だと思う…」  
空間全体が紅いからそうだとは思うが…

「…キヨウスケ君、私ら…帰れるんやろか…」

はやては不安げな表情を浮かべてるけど…

「ん〜…ま、大丈夫だろ？」

「軽っ！？な、何でそんなに落ち着いていられるん！？」

何でって…

「僕らが吸い込まれた出入口は、多分さくら達が維持しているだろっし…万が一閉じられても空間破か…空間移動の術はいくつかあるし」

「ちよい待ち！！今空間破壊って物騒な単語を言いかけてへんかったか！！？」

…ちっ、鋭いな まあこの程度の劣化版アインスト空間なら破壊して脱出は可能だが…帰還する座標が特定出来ないから何処に出るかが解らないんだよな…

「ま、まあ それは置いといて「置いとくんかい！？」「…「ホン…とりあえずは出入口に向かって行こうか  
はやて、飛べるかい？」

「あ、うん…何か…」

…とりあえず外傷はないようだな…

「じゃあはやて、向こうの『マスター』！後方から高エネルギー反応！』何ッ!？」

後ろを振り向くと…

「……セイジャク…ミダス…ハイジヨ…」

ガシッ!ガシッ!…ビュンビュン!…!

倒した筈のアイনストゲミュートの鎧が迫ってくる!?

「ちっ!…はやて!…離れろ!…」

ドン!…!

「きゃ!？」

僕ははやてを突き飛ばした!…!

…多少手荒に扱ってしまったが…ごめん、はやて…

そして…

ドオオオオオ!!!

Side Out

はやてSide

「きゃ!?!」

後ろからキヨウスケ君に突き飛ばされてもった私…文句を言つたら  
うと振り向くと…

ドオオオオオ!!!

……………えっ?

何が…起こつたんや……………?

キヨウスケ君が居た筈の場所に…あのインストの鎧の残骸がぶつ  
かって…

「……………キヨウスケ…くん…?」

う…嘘…やる…?

なあ…キヨウスケ君?

「キヨウスケ君……ッ！！！！」

…わ…私のせいや！！私が…私がキヨウスケ君の足を引つ張ったせいでッ！！

私が愕然としとつた次の瞬間…

《Divide Zero》

………えっ？今の声…

…リイン…フォース？

ドゴオオオオン！！

キヨウスケ君を押し潰していたアインストの残骸が…1発の砲撃で一瞬で木っ端微塵に！？

そして……

「…キヨウスケ…君？」

目の前に居たのは…銀髪にエメラルドグリーンの瞳…何時もと違う黒いバリアジャケットに…ナイフの形の銃身をした銃を持った…キヨウスケ君やった……

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

## 平行世界での再会

前回までのあらすじ…

倒したと思ったアインストが背後から攻撃してきた！！  
はやてを巻き込まないよう何とか逃がす事はできたが…

少し遡り…

キヨウスケSide

ガシッ！ガシッ！！…ビュンビュン！！！！

倒した筈のアインストゲミュートの鎧が迫ってくる！？

「ちっ！！はやて！！離れる！！」

ドン！！

「きゃ！？」

僕ははやてを突き飛ばした！！

…多少手荒に扱ってしまったが…ごめん、はやて…

そして…

《キョウスケ！！緊急ユニゾン！！》

ピカッ！！

い、今の声…リインフォースか！？

気がつくと僕はリインフォースとユニゾンしていた

「リ、リインフォース？これは一体…？」

シンクロユニゾンならともかく…普通にユニゾンって出来たのか！？

《説明は後です！キョウスケ、スタート・アップと唱えて下さい！  
！》

「あ、ああ！スタート・アップ！！」



《Start up》

バシユ!

僕の手に現れたのは…銃に大ぶりなサバイバルナイフを融合させた  
ような武器が…って!?

「…EC…デバイダー…だと!？」

ナンバーは刻印されていないが…間違いなく【あの】デバイダー  
だ…

《キョウスケ!今は目の前の敵を!!》

ちっ…ツッコミ所満載だが…仕方ない!!

カチャ

目の前に迫ってくるアインストの鎧に照準を合わせ…って間に合わ  
ない!?

《私が護ります!!》

ブウン!!

僕の目の前に一冊の魔導書が現れ…あれ?あれって天空の書…?い  
や、細部のデザインが違うが…

バサバサバサツ!!

魔導書からページが飛び散り僕を守るよう周りに展開された

そして…

ドオオオオオ！！！

アインストゲミュートの鎧突撃？を魔導書のページが防いでくれた  
！！

《キヨウスケ！今です！！》

この能力…やはり…アレなのか…？だとしたら…いや、今は…

「…デイバイド・ゼロ」

《Divide Zero》

ドオオオオオ！！！！

僕の一撃で、アインストゲミュートの鎧を吹き飛ばした！！

回想終了

とりあえずアインストを今度こそ撃破した…

「…リインフォース、これは一体…？」

ECデイバイダー…これは確かForceで出て来る武器…

《キヨウスケ、これは神が私にくれた新たな力…らしいです》

…またあの神が絡んでるのかよ…

《この力を使った時にキヨウスケに伝えてほしいと神からの伝言があるのですが…》

「…伝言…？何だ？」

《ええ、【お主が考えてるECウイルスや病化・暴走などはないぞ？形や力を再現しただけじゃから安心せい】

だそうです…》

…とりあえずEC感染はないようだ…

つか、さらにチート街道まっしぐらだよな…まあ今更か

とにかく流石に精神と生命を維持するために、人を殺し続ける必要があるってのは…なあ…

《…キヨウスケ、ECウイルスとか病化とは何です？》

…ユニゾンした本人が知らないのか？

「ああ、それ…」

「キヨウスケ君…！」

リインフォースに説明しようとしたら…はやてが突進してき…えっ？突進？？

ドゴツ！！

「グハツ！？」

はやての突進が僕のお腹にクリーンヒット?!…ここ、効果はばつぐんだ…

「キ、キヨウスケ君ー！！」

無事で…無事でよかった…キヨウスケ君に何かあったら…私…私っ…グスッ！！」

「ゲホツ…は、はやて…うん、心配かけてごめん…」

はやてが涙目で抱き着いて来た…ホント心配かけちゃったな…

「キヨウスケ君、ケガとかはないん!？」

「……………大丈夫だよ？」

「……………何で微妙な間を開けたん？」

う……だって、はやての突進がお腹を直撃したから…昼間食べたパスタがにゆるって出てくる所だったし…

『マスター、感動のシーンが台なしです!…!』

《そうです…もう少しムードというものを…》

デバイス二人に思考読まれた!?

「ッ!!そうや!!今の声!!リインフォースやないん!？」

……………あ

「…………キノセ「気のせいやあらへん!!主だった私がリインフォースの声を聞き間違っ訳ないで!!」「……」

……………うん…………こりゃごまかしきれない?

まあ…………まだこちら側のはやてだし…………話しても大丈夫…………かな?

「…………はやて、これから話す事ははやての心の中だけに留めて置いてくれよ?」

「…………うん…………解った」

「…………リインフォース、ユニゾンアウト!!」

ピカッ!!

僕の身体が一瞬光り…………

「…………お久しぶりです、主はやて…………」

リインフォースが僕達の前に現れた

「…ほんまに…リイン…フォースなんか？」

「…はい、正確には【向こう側】なのですが…」

「えっ…向こう側…？」

リインフォース説明中

「…という訳で私はキョウスケに救われたのです」

リインフォースの説明を真剣な表情で聞いているはやては…

「…そっか…」

そう呟いた

…やっぱりこちら側のリインフォースじゃないから…ガツカリさせ  
ちゃったかな？

「…ごめん、はやて…ぬか喜びさせちゃって」

「うっん、そんな事ないで！！」

それにちゃんとリインフォースが救われた世界があるんやな…って  
思うとっただけや！！」

「主はやて…」

「リインフォース、今のマスターはキョウスケ君やろ？なら私の事

は【はやて】でええで！」

「で、ですが…」

「ダメや！！これは決定事項や！！聞く耳もたへんで！！あーあー聞こえへーん！！！」

まるで駄々っ子だな

「…ぷっ、リインフォース 諦めろ

こうなったはやてはテコでも動かないぞ？」

「…はあ、解りました は…はやて…？」

「うん リインフォース」

はやては嬉しそうに笑っていた…

やっぱりはやてには笑顔でいてほしいな…

「…ところでキョウスケ君、向こう側の私やなのはちゃん達やリインフォースが無事なのは知ってるん？」

…うっ…やっぱりこの質問が来たか…

「あ…実は知らないんだ…あはは」

ヤバッ…ど、どうしよう？

「…へっ？何でや？向こう側の私に秘密って…？」

「それ』それは、はやて嬢に二代目リインフォースを生み出してもらう為です』ってインフィニティ!?!?」

何サラっと言ってるんですか!?!?

「二代目?そ、そら私もこっちのリインフォースとの約束で…新しい家族を創ろう思うとっただけど…」

『ですが…向こう側のはやて嬢にリインフォースが無事な事を伝えると、二代目リインフォースが生まれない可能性があります。だから、それまでは向こう側のみなさんには秘密にしているのです』

「うーん…何かインフィ君の説明やと…何か私が二代目リインフォースを創らな困るって聞こえるんやけど…?」

まあ実際困るんだけど…

「はやて、本来私は消えてしまっ筈でしたが…キョウスケのお陰で今こうしていられます

ですが、私が贈った言葉…【はやてがいつか手にする新たな魔導の器に私の名を】とお願ひしたのを覚えてますか?

本来新たに生まれる二代目祝福の風が、私の存在している事で居なくなるのは悲しい事です…

ですからせめて…その二代目祝福の風が生まれるまでは私の事はまだ秘密にしているのです」

リインフォースもフォローしてくれたが…ちょっと無理があるような…さすがにはやても納得は…



「…解った！リインフォースがそう言うなら私も黙っとくな！」

しちゃったよ！？あの結構穴だらけの説得に！？

「あ、いや…正確には、向こう側のなのは黙っててもらえれば…」

向こう側のなのはバレたら…万が一向こう側のはやてにバレたら…まずO H A N A S H Iになるし…

「じゃあこっちの皆には話してもええの？」

「…まあ、出来たら僕らが元の世界に帰った後に…」

その方が確実だしな…

「あ……そっか、キョウスケ君…帰ってしまっくんやったな…」

「まあ一応アインストは倒したしね」

「……………」

ん？はやて…？

『…所でマスター、長話もいいですが…そろそろこの空間が消滅しますよ？』

……………あ

「やっべー忘れてた！…はやて、急いで脱出するぞ…！」

「えっ！？ち、ちょ！？」

「リインフォースも指輪に待機してくれ！」

「は、はい でははやて…」

ピカッ

リインフォースを戻してつと…

「急ぐぞ！はやて…！」

ヒュン…！！

僕ははやての手を引つ張り瞬動を発動した

…結果…

「ちょ！キヨウスケくーん…！！？ス、スピード…！スピード出し過ぎやあああ…！！！」

まあ…慣れない人には瞬動レベルの加速はキツかったようだ…

S i d e O u t

その頃……

## 旅館

はやてSide

私は今…猛烈に不機嫌や…  
ん？理由？…そんなん決まっとるやる！！

「……………キヨウスケ君が居なくなつて丸1日……」

…キヨウスケ君がお仕事で出掛けたんは理解出来るで？

…ただ…

「しかも高町なのはと一緒……」

ヴィータの言う通り…あの魔王と一緒になんが気に食わん！！

ガチャ

「おまたせ！はやてちゃん！！例の物が届いたよ」

「ホンマかすずかちゃん！？」

…フッフッフ これで準備万端や!!

「すぐセツティングするからね…フッフ、なのはちゃん…血の貯蔵は十分かしら…?」

これで準備は調ったで!!

さあ魔王!!キョウスケ君と2人つきりて過ごした罪を償ってもら  
うで!!

「…なあ、シヤマル 神代は確かさくらも一緒に連れていったの  
だと思ったが…」

「はやてちゃん、さくらちゃんねの存在…すっかり忘れちゃってるわ  
ね…」

「……………主達を止めなくていいのか?」

「「止められると思う(か)?」」

「……………すまん」

「「フッフッフ…アーハッハッハ!!」」

…部屋の中にはやて・ヴィータ・すずかの笑い声が響いていたとか…

「「「アーハッハッ…ゲホッ!ゲホッ!!」」」

…むせたのはまた別の話し…

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

宴会開始！？

前回までのあらすじ…

アインスト空間に吸い込まれたはやてを救出！（まあ…こちら側のはやてにはリインフォースの事がバレたのは些細な事だ）

そして、アインスト空間から脱出すると…

キョウスケSide

「つと…何とか間に合ったな…皆、ありがとう」

亀裂から脱出すると同時に皆が倒れ込んだ…やっぱり無茶させちゃったかな…

「ハア…ハア…キ、キョウ君…よ、よかった…無事で」

「つ…疲れた〜 でも、無事でよかったの」

「うん…2人とも無事でよかった…」

「でもさあ…もうちょっと早く帰って来てほしかったもんだねえ〜。  
フェイトも私も…もう限界だよ」

「はは…悪いなアルフ」

リインフォースの事ではやてと話しこんじゃったからな〜

「ごめんな皆、ありがとな…」

はやても皆に感謝してお礼を言った

「いえ…我々は主が無事ならそれで満足です…神代、ありがとう…」

「ああ、はやてが無事なら私は満足だ!!」

「ふう…何とかなるものね〜」

「……………」

ヴォルケンス達も流石に魔力が底をついちゃったようだな…よし!

「インファイ、インフィニットレイヤー発動!!」

ピカッ!!

発動させた光が皆を優しく包み込むと…

「…あ、魔力が…」

「回復していく!？」

インフィニットレイヤー（魔力回復効果）を使い、皆を回復させた

「…スゲー!! あっという間に回復してんぞ!!」

「…信じられない…こんな一瞬で魔力を回復させるなんて…」

ヴィータとシャマルは驚いているな

「にははは、キョウスケ君のこの魔法には私も助けられたんだよ  
お陰でリンカーコアの回復もすぐだったの」

…ああ、蒐集の時のことか…ん？

「どうしたシグナム？何か顔が引き攣っているけど…?」

「…い、いや…高町、もしかしてそれは…いや、すまん…何でもな  
い…」

…ああ、こっち側でも同じ事あったから心当たりがあってバツが  
悪いのか…

一応原作のイベントだからな…

「キョウスケ君!! 聞こえる!?! というか無事!?!」

…と…アースラからエイミーさんからの通信が…



「聞こえます、こちら神代 若干の作戦変更はありましたが…アイ  
ンストの撃破に成功しました  
隊員は軽傷ではありますが全員無事です」

一応、作戦指揮官だからね…報告はちゃんとしないと

「よ…よかったあゝ キョウスケ君に何かあったら…」

あ…エイミイさんにも心配か「何かあったら愛を確かめ合えなくな  
っちゃうと思って心配したよ」…仕事しろよ…とツッコミたいが  
…とりあえず聞かなかった事にしよう…うん

「えっ！？ちょよ！？か、艦長！！？な、何ですそのお茶…えっ！？  
今飲め？艦長命令！！？い、いやー！！？」

プッソ

エイミイさんが映っていたディスプレイは悲鳴と共に消え……………  
…な、何があった！？

ピッ

「…ごめんなさいねキョウスケ君、報告は聞きました  
後はこちらの局員がしばらく監視していますので皆さんは一旦アー  
スラに帰還して下さい」

「は、はあ…分かりました」

通信はサウンドオンリーに変わって、リンディさんが対応してくれ

たが…

「な、なあキョウスケ君…エイミィさんはどないしたんや？」

「……はやて、世の中には知らない方がいい事もあるんだよ？」

恐らくは…リンディ茶の餌食になっただけだろう…

「う…うん…」

はやても納得してくれたようだ

「さ、皆 アースラに帰ろう…！」

「おー…！！！」x9

さて、転送の準備を…あれ？何か忘れてたいるような…？

「…なあユーノ」

「…何だいクロノ？」

「…僕たちに何か連絡はあったか？」

「……………ないよ」

結局、結界の出番が無かった為…忘れられていた2人だった…

アースラ

「…という訳で、こちら側に来たアインストは撃破出来ました」

「…そうか…すまないなキョウスケ君、こちら側の面倒をかけてしまった」

とりあえず帰還した後解散し、僕はこちら側担当の神族のギリアムさんに報告をしていた

「それで今回の任務は終了ですね」

「ああ、この後君はすぐに元の世界に帰るのかな？」

「あ…いえ、皆が明日送別会を開いてくれるとの事で、もう一日は滞在予定です」

「そうか…寂しくなるな。君みたいな人材がこちらに居てくれれば助かるのだが…」

「はは、まあまた何かあつたら連絡下さい」

「フツ…まあ そうならない事が1番なんだが…（少女達はそうな  
ってほしいと思ってそうだがな）それではゲートを開く時はまた連  
絡してくれ…では」

プツン

さて、と…

『マスター、これからどちらへ？』

「送別会の時間までは…余裕があるからな」

送別会の会場は、はやての家で行う事になったのだ

「…まあ料理は、はやて達が任せてと言つてたし…僕はスイーツ位  
作るかな…」

今回は時間がないから、あまり手の込んだ物は作れないが…うん…

「…ま、とりあえず買い出しに行くか」

そうして僕はスーパーへと買い出しに向かった

翌日

八神家

「えー、それでは…カンパニー!!」

つていきなり脈絡もなく乾杯すか!?リンディさん!?

「あら、いいじゃない 無礼講って事で」

…まあ いいけどね…

今回の送別会、八神家には僕と面識があつたメンバーのみで行われた

「キョウスケ君!!これ私となのはちゃん達で作つた料理なんよ  
沢山食べてな」

「にははは、向こうの私にキョウスケ君の好きな物とか聞いて作つてみたの」

「うん、私も頑張つたんだよ」

「こつちのフェイトちゃん、手つきが危なっかしくてハラハラしちやつたけど」

「うっ…さくらあ…どうせ私は向こう側と違って、料理の経験少ないから…」

「もう、だめだよ〜さくらちゃん！ フェイトちゃん、大丈夫だよ？ちゃんと上手に出来たから」

「な、なのはあ…やっぱり向こう側のなのはも優しいんだね」

とまあ、僕の目の前にはやて達が作った料理が並べられていた

「どれどれ…モグモグ…うん、美味しいよ！」

「あ、それ…私が作ったやつや 男の子に食べて貰うんは初めてやから…照れるなあ／＼」

「まつ、はや「はやての料理はギガうまだかな！だろ？ヴィータ？」って人の台詞取るんじゃないー！！」

「はは、ごめんごめん」

「料理で思い出したけど…なあキヨウスケ君、向こうのヴィータって料理出来るって聞いたんやけど…ホンマなん？」

「ん？ああ、ヴィータの料理もはやてに劣らぬ腕だったよ？」

ヴィータの料理は何度が食べたが…結構美味しかったのは事実だ

「ホー…そうなんか〜 こっちのヴィータにも料理スキルはあるのかな？」

ん？

「…って事はこっちのヴィータは料理は…」

「う、うるせー!!べ、別にいいじゃねーかよ!!はやてが作ってくれた方がギガうまなんだしょ!」

…食べる専門か…何か勿体ないな

「しかし神代、こつ言うのは何だが…このヴィータが料理とは…想像がつかんのだが…本当なのか?」

「…何かヒデエ言われようだなオイ…」

ヴィータはシグナムを睨みながら突っ込んだ

「本当だよシグナム、…そついや何でもこつ側のヴィータは料理に目覚めたんだろ??」

原作でもそんなシーンなかったよな?

『(…まあマスターが気付かない事は気付いてましたが…あまりにもヴィータ嬢が不憫ですねえ)』

…??何か電波が?

「…ところで、あえて視界に入れないようにしていたんだが…」

はやて達が作ってくれた料理…どれも美味しいんだが…テーブルの端にある緑色の物体Xがチラチラ目につくんだよな…

「…言つな神代…我々もどう処理していいか困っているのだ」

ですよ〜…平行世界だから微かな違いを望んでいたのだが…

「…恭介、やっぱ向こうのシャマルも…ああなのか？」

「……最近は更に磨きが掛かっているがな…」

「磨き？どんなんや？」

聞くと不幸になるぞ？はやて…

「…ついちょっと前までは目の前にあるような未知の物体を作っていたのだが…それでも！それでもまあ一応、原材料は基本食べられる物を使っていたのだが…最近は見た目にこだわって…色合いを求め絵の具を…形を整えるのに接着剤とか使いだしたからな…」

もはや工作のカテゴリーに入るよな…

「……私らのシャマルの方がまだマシなんやな…」

「……上には上がいたな…」

「……つか、そっち側のシャマルは何処に行こうとしてんだよ…」

それはこっちが聞きたいよ…

「……まあお前も苦労しているのだな」

ザフィーラは励ましてくれるけど…



「あゝ…ザフィーラ…他人事みたいに言っているが、高確率で向こうのザフィーラが犠牲になってるぞ？」

ザッフィーがまず毒味役に定着してたからな…

「……………シャマルに少し話しが出来た…失礼する」

そう言うとザフィーラはシャマルが居る方に向かって行った…

「…？何だったんだろう？」

「さあな…それより飯だ飯！！早くしねーと無くなっちまう！！」

「…ヴィータ、程々にな　後で僕が作ったスイーツ出すから」

「ふえっ？キョウスケ君って料理出来たの？」

こちら側のなのはが驚いた顔をしているが…

「って…ああそうか、こっちのなのはは知らないんだっけ？」

「あのね、キョウ君の作るスイーツはすっごく美味しいんだよ！  
」！  
」！

「うん、そうなの　キョウスケ君の作るスイーツ…翠家に匹敵する  
美味しさなの　」

さくらとむこう側のなのはには好評だが…別に普通に作ったただけだから味も普通だぞ？

「キヨウスケ君！！あの味を普通って言っちゃうと…全世界のスイーツ大半が普通以下の味になっちゃうよ！！」

う…そうなのか？

「へへ、キヨウスケ君お手製のスイーツか　楽しみやな」

「スイーツがあんのか　し、仕方ねーな　食べてやっか」

「キヨウスケが作ったスイーツか…楽しみだね、なのは？」

「うん、向こうの私が絶賛してる位だから楽しみなの」

…何か何気にハードル上がってね？

「…ま、まあその…何だ…折角だから私も頂くとするか」

シ、シグナムすらスイーツに期待を！？

こ、こりゃプレッシャーだな…

Side Out

おまけ

「あら、ザフィーラ?どうしたの?」

「……………シャマル、少し高町式のオハナシをしようか?」

「…えっ!?!?な、なのはちゃん…って…えっ!?!?な、何!?!?その獲物を狙う目つきは!?!? しかもグルル…って!?!?ま、待って!?!?」

その後シャマルがどうなったかは…別の話し…



スイーツのお披露目となつたのだが…

「…期待度が高まつてるのに何だが…そんなに大した物じゃないぞ？」

「前置きはいいから早く食おーぜー!!」

…ヴィータさん？貴女はさっきあんなに食べたのに何故そんなに食べ気満々なんですか!？」

「甘い物は別腹だかな」

…だから何で皆、心を読めるんだよ…

「ん〜…なんだか甘い匂いがあるの〜」

ま、勿体つけるのも何だしな…

「じゃあ…はい!!」

僕が作ったスイーツ…それは…

「……………おおー！！！！ロールケーキだ（なの）（や）  
（だね）……………」

そう！ロールケーキ、しかも3種類！！

「キヨウスケ君キヨウスケ君！！これは？」

「えっと…プレインのロールケーキにティラミスロールケーキ、そ

れに苺ロールケーキだよ」

時間がなかったから3本しか作れなかったけどね」

「凄く美味しそうやな」

「……これ、キヨウスケ君が作ったんだよね？」

わ、私より上手に……いつもお店のお手伝いしている私より……orz」

こちら側のなのはがえらい落ち込んでるな……

「にははは……やっぱりこっち側の私もショックだよな」

……なのは？何かショックなんだ？

「なっ！なっ！早く食べようぜ！！」

「焦らなくても大丈夫だよヴィータ、今切り分けるから……えーと」

とりあえず一口サイズに切っていくか……

「あら、美味しそうなロールケーキね」

と、そこへリンディさんがやってきた！

……さすが甘党！体は砂糖で出来ているというか……

「……何かバカにされたような気がするのには気のせいかしら？」

しかもこの人まで読心術のスキルもってるんかい！？

「あはは…リンディさんもいかがです？」

「一応リンディさんにも薦めてみるが…」

ジイイイイ…

うっ…僕の後ろで複数の【オイテメー！分け前減るだろ！？】的な視線が刺さったが…いや、ロールケーキ位でそんな殺気立たなくても…

「じゃあ…お言葉に甘えちゃおうかしら」

リンディさんも殺気に気付かないのかスルーしてるのかマイペースですし

「はい…ところで…あそこの木の後ろに張り付いて、隠れながらこつちをガン見しているストーカーは何です？」

遠くからでもハアハア言っているのが解る位危ないんですが…

「…あら、やっぱり気付いちゃった？」

あれで気付かん方がおかしいぞ！？

「まあ…大丈夫よ エイミイにはちゃんとキョウスケ君に危害を加えないように調きよ…」  
「ホン…説得したから」

「そうですか？ならいいんですが…あ、コラ！ヴィータ！ケーキは1人3つまでだぞ？」

「うっ…いいいじゃねーか…（ウルウル）」

クッ!? こちらのヴィータが涙目+上目で訴えてくるのか!?!?

「こらっ! ヴィータあ! キョウスケ君を困らせたらアカンよ?」

「うっ…はやてえ〜…」

はやてが注意してくれた

「そっだよヴィータちゃん、皆だっぺ食べたいんだから」

「…何かオメーに正論言われるとムカつくな…」

「ふええ!?! な、何でなの!?!」

「何でもだ!?!」

「り、理不尽なのー!?!」

こちら側のなのはとほ…まあ、仲があまり…

はあ…こりゃ人数分はちゃんと切り分けないと…

「…というかキョウスケ君、何気に調教っぺ台詞をスルーされると

…ちよっぺ淋しいんだけど」

…ん?何か言いましたか?



さて…人数分を切り分けて、

「「「「「いただきまーす！！！！」「」「」「」

皆がロールケーキを食べた…まあ 若干切ったロールケーキが薄目なのはカンベンしてくれ…

「お、美味しい！！」

「うん…思ったたより…凄く美味しい」

「でしょ？キョウ君の手作りスイーツは世界一だよ！」

「う…うめえ…（はやて以上かもしんねー…）」

「……うむ、甘さも見た目よりは控え目で…苺の酸味がいいアクセントになっているな」

「ま…負けた…私の負けや…これは匠の…いや！神の技や！！キョウスケ君！君にはゴッド・オブ・パティシエの称号を与えなアカンな〜」

何そのキグ・オブ・ートみたいな恥ずかしい称号は！？

「ハア…ハア…キョウスケたんの手作り…じゅるり…」

…エイミイさん アンタもう帰れや…

「って…そういやクロノやユーノは？」

そっぴや今日は見かけてないな…

「ユーノ君？ん…そういえば見てないの」

「クロノも朝から見かけないね…アルフ知ってる？」

「ガツガツガツっ…えっ？何だいフェイト？」

「…うん…何でもない」

なのはもフェイトも…興味が無いようだ…哀れすぎるぞ！？KY&  
amp・淫獣コンビ…！

「……………そういえば…」

「何やザフィーラ？2人が何処に居るか知つとるんか？」

「……………先程シャマルの所に行った時に…その時、2人がシャマルの  
近くで顔を青くして転がっていたような…」

「……………」

……………あ…うん、アレだ……………

「とりあえず…聞かなかった事にしよう」

「……………そ、そだね……………」

2人は僕らの心の中に生き続けてるさ…！

『…マスターって……たまに酷いですよね？』

何を言うんだ？こんな善人を捕まえて？

「キョウ君…！ケーキおかわり…！」

「あつ…！さくらズリーぞ…！恭介…！私も…！」

…しっかしよく食べるな…

「はやく達はどうする？まだ若干だけど残ってるが…」

このままだと…この2人にすべて食べられるぞ？

「う…ん…食べたいのは山々なんやけど…なあ」

「にはは…ちょっとカロリーが…」

「うん…ちょっと食べ過ぎちゃったかな？」

…別に小学生からカロリー気にする事はないんじゃないか…

「…乙女にとって1グラムの増減は死活問題や（なの）（だよ）

！…！…」

「は、はい!! すみません!!」

…こ、怖ええ…

「…じゃあこのケーキは」

「私らが貰っても問題ね〜な？」

さくらとヴィータが満面の笑みを浮かべてケーキに手を付けようとする…

「「「う…や、やっぱりダメー!!!!」」」

はやて達が光の早さでロールケーキを掴み取った!!

「うう…やっぱりこの極上ケーキの誘惑には勝てへん…何て物を作ってもうたんや!! キョウスケ君!!」

「そ、そうだよ!! これはある意味犯罪なの!!」

「せ、責任取ってよ…ね? キョウスケ」

…ケーキつでえらい言われようだな…つかフェイト!? 責任って何!?

「えっ!?! そ…それは…はうう／＼」

「フッフツ…おやおや〜? フェイト、顔が赤いよ〜?」

「なっ!?ア、アルフ!?な、なな何言っているの!?別にキョウスケにそんな...」

フェイトは顔を赤くしてアルフに慌てて何か言っているけど...何か僕の名前が出てきたような...?

「...むう」

「.....」

ん?

「どうした?はやてになのは?急に黙って...?」

あんだけ騒いでいたのに...急に不機嫌?なオーラ出してる...よな?

「別に...何でもないで(フェイトちゃん...あの反応...もしかして?)」

「...うん、何でもないよ?(...何でだろう?...?フェイトちゃんを見ていたら...何でかイラッてるの...)」

.....そうなのか?

「(...はあ、キョウ君...こんな所まで来てフラグ立てるなんて...)」

「(ううん...平行世界の私だから...やっぱりキョウスケ君に...それにはやてちゃんやフェイトちゃんも間違いなく...何だかライバルがもう1セット出来た気がするの...)」

「…どうしたさくら？なのは？」

何か2人も複雑そうな顔をしてるし？

「…キョウ君、もう少し乙女心が分かるようになろうよ」

「…さくらちゃん、それが出来ていたら私達も苦労しないよ……」

失礼な！それなりに理解してるぞ？…多分

「「……はぁ……」」

な、何でそこで深いため息をつくんですか!？

「…神代…流石の私でもそれは理解できるぞ？」

何かシグナムにまでツツコまれるし…

な、何だよ乙女心ってー！ー!？

Side Out

おまけ

「フフ…フツフツ…キョウスケ君が…私に…私だけに作ってくれた…  
…ケーキ…こ、これはもはやプロポーズ…！んふふふ…」

「…さ、流石にそろそろエイミィを止めないとマズイかしら…あら、  
これは…？」

リンディが見つけた物…それは…

「エイミィ、こっちにも手作り料理があるわよ…食べる？」

「フツフツ…えっ！？も、勿論です…！あーん」

「はい、あーん」

パクッ

リンディがエイミィに【手作り料理】を食べさせた！

「モグモグ…！！！？グフツ！？」

バタン！

エイミィは顔を真っ青を通り越した顔色で倒れた！

「一口で…まさに一撃必殺…恐ろしいわね…シャマルさん特製物体  
X…」

…人知れず撃墜されたエイミィであった…

「「ぼ、僕たちの……出番……は？」」

作：あ、ごめん 忘れてた

「「ひ……酷い……ガクッ」」

君達の犠牲は忘れないよ！！

多分？



最凶の魔法…？

前回までのあらすじ…

エイミィさんが天に召された後「ち、ちよつと…！まだ生きてるよ  
」…！」「…チツ、元の世界に帰るまで出番無ければよかったのに…

「酷っ！？…あ、あれかあゝ 好きな女の子に意地悪したくなるっ  
ていう小学生特有の…ってキョウスケ君！？な、何でデバイスを構  
えて…？しかも何発カートリッジロードしてるの！？あ…ちよ…！？  
ひいひいひい…！？」

ズガアアアアア…！！

…ふっ 悪は滅びた…

『マ、マスター…！？キャラ変わってません！？』

キヨウスケSide

僕の送別会から一晩明け…今日は僕が元の世界に帰る日になったのですが…

「……………うっ／＼」

「……………はう／＼」

「…ねえキヨウスケ君、何ではやてちゃんと目を合わすと2人して顔が紅くなるのかな?かな?」

……………うぐっ!?!な、なのはのやつ…鋭い…

「…キヨウ君、2人して顔を真っ赤にしてるのに…鋭いも何もないよ…」

グハッ!?!し、しまった!?!

「…ねえはやて…キヨウスケと何かあったの?」

「…2人して見つめ合って…何なの?」

「えっ!?!えっとな…」

こゝ、こちらのフェイトとなのはも目をハイライト化してはやてに詰め寄ってる?!?!?

マ、マズイ!?!はやて!?!今朝の事はばらさないでくれ!?!?

回想

数時間前・朝

チュンチュン…

「…………ふあゝ 朝か…」

しっかし、昨日は大変だったなゝ

結局、送別会2次会に突入して騒ぎまくってカラオケ大会になって  
…よく皆あのテンション維持できたよな…

「…とりあえず…起きよ…」

僕がベットから出ようとすると…

フニヤ!

…………あれ? 布団ってこんな感触だったっけ?

…まるで人肌みたいな…………

「…………んんっ…………」

あれ？最近のベットって触ると音声が出るんだっけ？

……分かってる！ああ分かってるさ！！

伊達に同じ経験は積んでないさ！！！！

バサッ！！

僕が勢いよく布団をめくると……

「……んん……あ、おはようさんキョウスケ君……／／」

はやてが布団に潜り込んでいた……

なんでさ……というかテジャブ？

「あ……とりあえずツツコミたい所は多々あるが……なんで僕の布団に居るんだ？」

昨晚ちゃんとはやてを部屋に送っていった筈なのに！？

「えへっ 来ちゃった／／」

来ちゃった ぢゃねー！？

………ん？

僕はその時、布団の中にあった【ある物】を見た……

…あるえ〜…??アレは確かに僕が所有している物だが…微妙に違う…?マ、マサカ…

「ハヤテさん、ソレハ？」

嫌な予感しかしなかったが…一応はやてに尋ねると…

「えっ? ああ、これか?何やキヨウスケ君とキスしたら出てきたんやけど…ノノ」

………

「はやて、どうやら僕の耳がおかしくなったみたいだ…すまないがもう一回言ってくれないか？」

この歳で幻聴が聞こえるとは…ハハハ…

「せやから!! 昨日キヨウスケ君が寝とった際にキスしたら、このカードが出てきたんよ」

………何だろっ…この歴史は繰り返す的な感覚…orz

「っか、はやて?何でそんな事を!？」

こっちのはやてとは会ってまだ数日しか経っていないのに…色々すっ飛ばして、いきなりキスって…!？」

「そんなんキヨウスケ君が好きやからに決まっつとるやないかノノ!」

即答!?

「す、好き…って…/ /」

な、なんでこうなったんだ!?

「だって…キョウスケ君は…キョウスケ君は私にとって初恋なんや  
!!」

こんな気持ち初めてやし…それにキョウスケ君は今日帰ってまうん  
やろ…?

そう考えたら頭の中グチャグチャになってもうて…気がついたらキョウ  
スケ君の部屋の前に居て…せめてキョウスケ君との思い出が欲し  
い思て…その…部屋の中に…/ /」

「はやて……」

…僕のせいではやてがこんなに悩ん…で、中に入ったらインフィ君  
が『あ、はやて嬢! マスターとキスすれば繋がりが出来ますよ』っ  
て「ッておおおおい!!? ちょっと待ていいいい!!?」

アイツか!?! またアイツが絡んでいたのか!?!

『いや〜 このままサヨナラっていうのもはやて嬢が不憫で…(そ  
れに面白そうですし)』

…決めた! コイツ帰ったらぜってー速攻AI破壊する!!

…しかし…こちら側のはやてと仮契約カード…どこかの百合っ娘剣  
士と同じ…向こうのはやてとは絵柄も別バージョンだな…

「…キヨウスケ君…怒つとる？」

はやては涙を浮かべながら僕を見ている…だから捨てられそうな子犬みたいな目はやめてー！ー！！？

「…別に怒ってないよ」

『そうですよ！向こう側のはやて嬢とはそれはそれは濃厚なキスをしまくっ…』

ベキッ！！

キヨウスケはシャ ニングファイ ガーを発動！！  
何かが碎ける音がした！！

「キ、キヨウスケ君！？い、インファイ君が折れてへん！？」

「ん？インファイ？ナニソレ？オイシイノ??」

「……………えっと…うん、私の気のせいやな。うんきつとそうや」

「そうだよ、はやて……………別に怒ってないよ」

「（今の間、編集点なん！？）そ、そか…よかった…」

…はやてさん？何で顔が引き攣ってらっしやるんで？

その後僕は仮契約カードを分割し、カードの機能の説明をした…

余談だが、カードに備わった通信機能…はやての願望がそうさせた

のか、平行世界の壁を飛び越えて可能（まあ精度は落ちるが）と分かった時のはやての喜びようは凄かった…

### 回想終了

という事があったので…はやて！！特にむこう側のなのは黙っててくれ！！

「えっと…キヨウスケ君と2人だけの秘密や」

ピシッ

な、何！？今の凍り付くような効果音は！？

「……キヨウスケくーん……」

ちょー！？何！？その地を這いつくばるような低い声は！？

「キヨウスケ君…こっちははやてちゃんと何があったノカナ？」

「そうだよ…私達には言えない事なの？」

「駄目だよキヨウスケ…秘密はいけない事だよ…？」

「…おめー、はやてにだけ何したんだ！？」

上からなのは・こちら側のなのは、フェイト・ヴィータと凄い勢いで迫ってきた！？



「ちょ…ちょっと待て！？僕は別に…」「キヨウ君…」って…さ、さくら…」

「キヨウ君…こっちはやてちゃんと仮契約しちゃったんだよね…」  
な、何でさくらが知ってるんだ！？

「…忘れちゃったの？私が仮契約の管理しているって事…」

…あつ！？そ、そーいえばそんな事言っていたような…

「ええっ！？キヨウスケ君！？こっちはやてちゃんとも仮契約をしちゃったの！？」

「…ん？おい！むこう側の高町なのは、仮契約って…何だ？」

「…キヨウスケ君とキスすると仮契約っていうのが出来て、その証にこーゆーカードが現れるの…」  
…というかキヨウスケ君…はやてちゃんとキスしたんだ…フフ…  
フフフ…」

な、なのはさん？何やら黒い瘴気が出てますが…

「へ…キスねえ……ってオイ！！…て事は…恭介とはやてがキスしただと！？」

「ええっ！？ほ、ホントなの！？キヨウスケ！！？」

「あ…いや…それは…」

キスした記憶はないが…カードがあつたって事は…

ジャキ…!

…はい? ジャキ…って…

「シ、シグナムさん!？」

シグナムがレヴァンティンを僕の喉元に…って軽く刺さってるよ!?

「神代…貴様あ…!主の唇を奪つただと!？」

鬼が居たよ…ピンクの鬼が!?!?

「えっと…だからそれは…」

ガチイ!!

ガチイ!?!?こ、今度は…

「恭介!オメーとうとう…むこうの私やはやてだけじゃなく、こっちの私らにまで…」

グラーファイゼンを起動されているヴィータ様がガ イー のように…って!?

だ、だから誤解だつて!?!しかも微妙に自分もキスされたような表現になつてるし!?!?

「ま、まで!?!は、話せば」「キョウスケ君、帰る前にO H A N A S H I…だね?」「…って!?!?な、なのはさんs!?!?2人

して既にスタライ発射体制!？」

「ま、待て高町!?!その位置では!?!」

「私らも巻き添えじゃねーか!?!」

僕にデバイスを突き付けていたシグナムとヴィータ…

ちなみにさくらやフェイトは既に射線上からちゃっかり退避済み…

「ちょ!?!なのはちゃん!?!それは家が壊れてまう!?!シャマル!  
!結界や!?!」

「は、はいつ!?!」

キイン!?!

…つかはやて…出来れば僕らを助けてほしいんだが!?!

「「スターライト…ブレイカー!?!?!?!?!」」

《《Starlight Breaker》》

ズガアアアアアン!?!!

S i t e O u t

ク ロ ノ S i t e

「…結界反応があったから急いで来てみれば…」

「「「にやはは〜」

…まったく何処と戦争する気だ！！

「…なのはちゃん達…やり過ぎや」

「うっ…」

「うっ、ごめんなさい…」

「…2人分のスターライトブレイカー…2人が同一人物だからブレイカー同士が共鳴し、相乗効果で威力を高めた…と、まさか結界を破壊ではなく跡形もなく粉々に粉碎させるとは…未恐ろしいな…」

正直この破壊力…アルカンシエルと同等じゃないかと思えるぞ！？

「ククロノ、周囲に被害はないんだけど…キヨウスケ達が…」

ハア…胃が痛む…

「…とりあえずユーノ、シグナムとヴィータはシャマルに任せて君はキヨウスケの治療をしてくれ…」

「う、うん！」

…しかし、よく生きていたな…

「ク、クロノ…勝手に殺すな…」

「まあ…その位悪態をつけるなら大丈夫そうだな」

「…こ、これが大丈夫に見えるなら…眼科に行け…というかお前もWスターライト受けてみるか…？」

う……そ、それは…

「…遠慮しておく」

僕もまだ生きていたいしな…

S i t e O u t

ちなみにこれが元で、

元の世界に帰る時間が数時間延びたのだった…



## 帰還

前回までのあらすじや…

えっと…みなさんこんにちは、八神はやてです

え、何で私がここに？

キヨウスケ君は…まあ何や…なのはちゃんsらのWスタライを食ら  
つてもうて…あはは…

…まあ御蔭で、ちょこつとだけやけど…キヨウスケ君とまだ一緒に  
居られるんやから…なのはちゃんらには感謝やな

でも…やっぱり別れの時が近づくんやな…

では、魔法少女リリカルなのは…始まります…

『は、はやて嬢がシリアスモード！？ふ、不吉な！？』

…なんやインフィ君…失礼な…私かて、たまにはシリアスになるん  
や…！

『でもこの小説、ギャグが大半ですから…シリアスも霞みますよ？』  
…くっ！？こらー！！作者！！たまにはシリアスな話書かんかい！？

作：無理！！

即答かい！？

キヨウスケSite

なのは達のギガスレイブ並の魔砲撃を受けたおかげで…大幅に帰る時間を過ぎてしまった…

「大丈夫？キヨウスケ君？」

なのはが心配そうに僕を見ている…が！！

「魔法ぶっ放した張本人に言われたくないんだけど…」

「うっ…！っ、ごめんなさい…」

「まあキヨウ君、なのはちゃんも悪気があった訳じゃないんだし…」



あつたら尚更悪いわ!!

「まあ何はともあれ、これで君ともお別れか…淋しくなるな」

クロ「んー!!んぐーっ!?!」…ハア、あえてスルーしていたが…

「……でだ、クロノ…アレは何だ?」

妙な声の発生元を指差す僕…

「……ああでもしないと君の後を追い掛けかねなくてな」

「……あゝ…うん、そだね」

指差す先には…グルグル巻きにバインドを掛けられ、口にもバインドされたエイミイさんがいた…  
つか付いてくる気満々!?

「ね、ねえクロノ…何でエイミイがあんな恰好に…?」

「それ「あら、フェイトさん…それはクロノの趣味だからよ」「つて母さん!?!」

「……えっ!?!」「」「」

リンディさんが面白い事を言った…つかいつの間居たんです?

「ちょ!?!母さん!?!?何を!?!?…というか皆!?!?なんでそんなに距離を取るんだ!?!?」

そりゃあ…ねえ…

「クロノ君…（軽蔑の眼差し）」

「こっちのクロノ君にはそんな趣味が…ま、まさかむこうのクロノ君にも!？」

「…クロノ…最低だね…」

「クロノ君…それはないわあ〜ドン引きや」

「クロノ君にそーゆー趣味があつたんだ」

「……執務官も地に墮ちたな…嘆かわしい」

「テメー!! はやてに近付いてみる!?! ぶっ潰してやる!!」

「わ、私も…その趣味にはちょっと…」

「……………男の風上は勿論、風下にも置けんな」

「フェイトにも近付くんじやないよ!!」

「クロノ…君ってやつは…」

クロノは皆からこれでもかという位冷たい目で見られた…

「ちょ…僕はそんな趣味はない!! おい!! キョウスケ!! 君から

も何か「あ、ごめん無理！」「ドちくしょよよよう！」「！」

あ、クロノが血の涙を流しながら逃げたした！？

「あら、ちょっとからかい過ぎたかしら…！」

分かっててもやる人なんですよね…

「では準備はいいかな？」

「はい、お願いしますギリアム少将」

ギリアム少将はゲートを開く力をもっている（神族）ので、通信を繋いでくれていた…

クイツ

ん？服の裾を引っ張られる…？

「はやて？？」

「キョウスケ君…もう行ってまうんやね…！」

「うん…この数日ありがとう、はやて」

何だかんだでお世話になったしな

「…キョウスケ君、さよならは言わへんよ！また絶対会おうな？約束や！」

「ああ…と言うか、仮契約カードのメール機能使えば連絡とれるし…」

カードに隠された機能…まさかメール機能まであったとは…解った時は携帯電話かよ！？ってツツコんだしな

「それに私はキョウスケ君に身も心を捧げたんや 貰ってくれへんと困るしな」

……………なに？

「ちょ！？はや「キョウスケ君…」な、なんですか？なのはサン？」

「はやてちゃんに身も心もって…ドウイウコトカナ？カナ？」

ちょ！？なのは！？目がとても濁った瞳になってますよ！？

「恭介っ！！オメーやっぱりはやてと！？何しやがった！？」

「ま、まてヴィータ！！何もしてないぞ！！」

「嘘つけ！！はやてにした事…私にもしやがれ！！！」

そして軽く暴走！？

「あ、ずるいよヴィータちゃん！！なら私もしてもらいたいの！！」

「えっ！？なのはも！？だ、だったら…私も…その…してほしいかな…／／」

こちら側のなのはやフェイトも連鎖的に暴走かい！？

「く、ユーノ！！クロノ！！ボサツと見てないで止めてくれ！！」

近くに居る淫獣と変態の方を向くと…

「…な、なのはが…なのはが…orz」

「…ふ、フェイトがあゝ 義妹のフェイトがあんな男に…orz」

つて！？何二人して絶望の淵に沈んでるんだよ！？

「シグナム！シャマル！ザフィーラ！！何とかしてくれ！！」

僅かな望みを賭けてまだまともそうなる3人（シャマルは微妙だが）に声を掛けるが…

「神代、もはやこうなったら…責任を取れ！！」

「キョウスケ君ならハーレムの100人や1000位大丈夫よ？」

「……………諦める」

見捨てられた！？つか女性2人は発言おかしくね！？

「主が最も幸せな道を選んだだけだ…決して私が、模擬戦の相手に事欠かなくなるから等と私的な打算とかはないぞ!？」

むしろそつちが本音かい!？

つかそろそろ本気でヤバイ…色んな意味で!!

「ギリアム少将!!ゲートを!!早く!!急がないと何かが奪われる!!!？」

いやマジでそう思うッス!

「あ、ああ…では…ゲートオープン!アポロン!！」

何気にネタ!？

ヴォン

よ、よし!…とにかくゲートが開いた!!

「先にいくぞ!さくら!なのは!！」

「ほええ!?!き、キヨウ君!？」

「にゃあ!?!ま、待ってよキヨウスケ君!？」

「じゃあはやて、皆!?!またな!！」

ヴォン!

「あー！もう…いごう！なのはちゃん！！」

「う、うん！じゃあ皆！お世話になりました！」

ヴォーン！ヴォーン！

こうして僕たちは元の世界へと帰っていった…

Side Out

はやくSide

「…行ってもうたな…」

「主…よかったですか？あんな別れ方で？」

「いいんよ…湿っぽくなったら…キヨウスケ君が困るし…それにな  
シグナム…1つ間違ごうとるで！」

「は…？」

「これが今生の別れって訳やないで！またいつか…いや、絶対！またキヨウスケ君に会える思うとるんよ！キヨウスケ君も【またな】  
言うとなしな」

「…はあ、はやてえ…アイツの事そんなに気に入ってんのかよ…」  
「なんや？ヴィータだってキヨウスケ君の事、満更じゃなかったやろ？」

「なっ！！？わわ私はべべ別にそんなんじゃねーよ／＼！！？」

「ふふ…ヴィータちゃん？お顔が真っ赤じゃ説得力ないわよ？」

「う、うるせーぞシヤマル／＼！！」

「…確か向こうのヴィータは神代とは…かなり仲がよかつたんだっ  
たな？唇を許す間柄だったとか」

「なっ／＼！？シグナム！！テメー！！それにアレは私じゃね…」  
その話…詳しく聞かせてくれるかな？かな？」っておわっ！？」

「た、高町？どうし…シグナムもその話…詳しく聞かせてくれるよ  
ね？」ツ！？テ、テストロッサ！？」

な、なのはちゃんとフェイトちゃんの目がハイライトや…こ、これ  
はアカン！！魔王降臨や！？」

…ヴィータ、シグナム…2人の犠牲は無駄にせんよ？

…今のうちに逃げな…

【しかし、なのは達に回り込まれた】

って何や！？この RPGによくあるテロップは！？



「…ああ、勿論はやてちゃんにも…」

「聞きたい事があるんだよ？…身も心もってドウイウコトカナア…？」

「あはは…えっと…禁則事項や ってのはダメ…なんやろつなあ？」

「「勿論なの(だよ)」」

…キ、キョウスケ君！早速私を助けに戻って来てー！ー！！

Side Out

キョウスケSide

ヴォーン！

「…ふう、どうやら無事に着いたな」お帰りなさい！キョウスケ君  
！…「ってはやて！…？」

ゲートから出た瞬間、はやてが居た…ん？

「ああ…ただいまはやて、それで何で皆がそんな微妙な顔をしてるんだ？」

はやての後ろにフェイト達が勢揃いしているんだけど…何か…可哀相な子を見るような視線が…？

「なあキヨウスケ君、なのはちゃんはドコや？」

「え？なのは？もうすぐゲートから出て来ると思っけど…」

ヴォーン！ヴォーン！

つと、噂をすれば…

「ただいまなの〜」

「ただいま〜！」

なのはとさくらがゲートから現れた

「おかえり、なのはちゃん」

「あ、すずかちゃん！ただいま〜」

すずかがなのはに微笑みながら

ガチッ！！

…ガチツ？

「ふ、ふえ！？す、すずかちゃん！？何で手錠なんかかけるの！？」

「ふふ、なのはちゃん…3日もキョウスケ君を1人占めして…お仕置きが必要だよ…ねえ、はやてちゃん？」

「そやね…シグナム、ザフィーラ！例の物を！！」

「ハッ！！」

奥からシグナムとザフィーラが何かを運んで…えっ！？

「な、なあすずか…それって…」

「うん、アイアンメイデンだよ」

だよ…って…何でそんな物を！？

「この中になのはちゃんをぶち込む為に決まってるよ」

な、何にこやかに物騒な事言ってますか！！

「ま、待ってさすがちゃん！！話せば解るよ！！とゆーか、この中って刺々的な針がびっしり！？」

「ああ、大丈夫だよなのはちゃん…この針の9割はゴム製のダミーだから」

「そ、そっか…って！！残りの1割は！？」

「…大丈夫や！運がよかったら臓器は避けて刺さるらしいで」

「それ全然大丈夫じゃないの!？」

「「さあ…逝コウカ…」」

「に、にやああああ!?!？」

ギイイ…バターン!!

その後…なのはがどうなっ「あ、次はキョウスケ君の尋問やからな  
」なっ!？」

「ち、ちよつと待て!?!何でそうなる!?!」

「黙って旅行抜けた罰や!!しかも帰って来るんが帰宅日ってどう  
ゆう事がキツチリ説明してもらわんとな」

「…それにねキョウスケ君、むこうでなのはちゃんと何があったの  
か…説明してくれるとうれしいな」

ふ、2人ともエンジェルスマイルだが…どう見ても怖いんですが何  
故!?!？」

「あはは、はは…」

こりゃ…もう笑っしかないな…

ちなみにこの一連のやりとりを遠くから見ているフェイト達は…

「「「「こ、怖っ！！！？」」「」「」

と震えていたそうな…

Side Out

おまけ

「し、シヤマルさん！？これって公開処刑！？」

「美夏ちゃん…え〜っと…違うと言いつれない所が怖いわね…」

「言い切れないの！？」

「…ああなつたすすか達は…誰も止められないわ…」

「あ、アリサおねーちゃん…何気に冷静なんだね…」

「馴れれば問題ないわー！」

「あはは…」



スクールパニック！！

八神家

キョウスケSide

旅行中では…まあ、色々あったが…それは置いておいて…

「キョウスケ君！！はよせんと学校遅刻するで！！！」

「あ、もうこんな時間か！！！」

今日は新学期の初登校日！

…実は管理局の面倒ごと…仕事があるから学校辞めようとはやてに話したら…

「あかん！！小学中退なんてシャレにならんで！！却下や！！…それに折角…（ボソツ）」

と言つ意見で却下された

…最後の方が声が小さく聞き取れなかったが…まあいいか

…何故か辞める事を却下になったと聞いたヴィータはガツカリしていたな

…ああ、僕と遊べる時間が増えると思っていたからかな？

『（…まあ、微妙に正解ですけど…）』

？何か言ったか？インファイ？

…ま、何はともあれ…

「じゃあはやて！行ってくるね！！」

「ほなら…行ってきますのチューを」

「…行ってきます」

「ううゝ スルーするんかい！？」

…つか朝っぱらから何してんだ！？

「えっ？新婚さんの朝の情事や」

…また変な昼ドラに影響されたな…

「…とりあえず今日は午前中には帰って来るから」

「うん！解った！じゃあ【後で】な キョウスケ君！」



「ああ、じゃあ行つてきます」

ボタン！

さーて、学校行くのも久しぶりだな

…この時の僕は、学校であんな事があるとは思ひもしなかった…

Side Out

はやてSide

「…フッフ…さあ私も早く準備せな！」

この日の為にキョウスケ君には内緒で進めてたオペレーションD発動や…！

「はやてちゃん、制服の準備出来ました」

「おっ、ありがとなシャマル」

「…はやてちゃん、やっぱり私も一緒に行きましようか？  
はやてちゃん1人じゃ心配で…」

「はは、シャマルは心配性さんやな。大丈夫やて！足だつてもう完治しとるし」

これもキヨウスケ君のエリクサーとか言う薬のおかげやな

「シャマルは皆の事見とつてな。皆の朝ごはんはテーブルに置いてあるで」

「はい、任せて下さい！！お昼ご飯は私が頑張っ「あ、お昼はええよ！！私かキヨウスケ君が作る…というかシャマルはキッチン出入り禁止中や言つたる！？」「…ううう…わ、分かりましたあ…シクシク…」

いや、嘘泣きバレバレやで！？

…さて、と 私も急がな遅刻してまうな　キヨウスケ君の驚く顔  
…今から楽しみやな

S i d e O u t

学校

キヨウスケSide

さて、久々の学校だな…何か数ヶ月振りという感覚があるが…気のせいかな？

作：気のせいです！

…何か妖精さんからの電波が聞こえたような…？

ま、いいか

ガラッ！

僕は教室に入り…

「おはよー」

何時通り挨拶をして教室に入っ…ん？

「……………」

な、何！？この静けさ&amp;視線は！？

「……………誰！？」

グハッ！？な、何それ！？確かに学校じゃ目立たない様にしていたけど…

皆…僕の事忘れてる！？

「というか何！？新手のいじめ！？嫌がらせ！？このまま学期崩壊まっしぐらスカ！？」

ガラッ

「おはよー、あ、キョウスケ君 おはよーなの」

「おはよう、キョウスケ君」

「アンタがこんなに早く来るなんて珍しいわね」

後ろからなのは・すずか・アリサが教室に入ってきた

…つかアリサ…何か失礼な発言してなかったか！？

「………キ、キョウスケ……！！！！？」

おわっ！？な、何だいきなり…？

「ね、ねえ高町さん…キョウスケ君…って神代君…の事だよな？」

「にゃ！？そっだよ？」

「………彼が神代…君…？」

「当たり前じゃない！？コイツ以外にキョウスケって居る！？」

何やらクラスメートがなのは達に僕の事聞いているけど…

そ、そんなに影が薄かったのか！？

…結構シヨックなんですが…

「だ、だって……」

「……」「神代君、休み前と全然見た目違うし……!?!?」「……」

……なに?

「……あゝ……なるほどね」

「アリサちゃん?何がなるほどのなの?」

「……コイツ冬休み前までメガネ……というか認識障害の魔法使っていたから……(ボソツ)」

「あつ!?そつか……今メガネしてないから皆分からなかったんだ(ボソツ)」

……ああああ!?!?そ、そつか!!

今は認識障害メガネしてないから皆分からなくなったのか!!

「(キ、キョウスケ君!?!どうしよう!?!?)」

なのはが念話で僕に話かけてきた

「(どうしよう……って……ごまかすしかないだろ?)」

「(でもでも!?!どうやって!?!?)」

「(まあ……とりあえず僕にまかせてくれ!)」

…最悪、皆の記憶消去する…かな？

「あ…皆、アレだよ…休み明けだからイメチェンしてみたんだ  
アハハ」

「…そ、それは無理があるんじゃない？」

なのは達からのツッコミが…し、仕方ないじゃんか！！  
それとも整形したと言った方がいいか！？

「…なるほど」

「…納得するの！？」

ほら、皆は納得してくれたろ？

「な、何か納得出来ないのー！！？」

何だよ！？何か不満でもあるのか？

「なのは…もう気にしたら負けよ」

「何たってキョウスケ君なんだし」

…何かすごく馬鹿にされている気がするんだけど？

ガラッ

「あ、キョウスケおはよー…ってどうかしたの？」

「…フェイト…いや、何でもない」

「????」

朝のドタバタは解決？したのだが…

気のせいかな視線をアチコチから感じるんだが…

「キョウスケ君、前の時もカッコよかったけど…今もさらにカッコイイよね／＼？」

「うん…何か凄く大人っぽいというか…／＼」

「私、アタックしようかな？キャ／＼」

「ちょっと！！先に神代君に告白するのは私よ！？」

という女子達の会話が密かに行われていたなどこの時の僕は気付かなかった

ガラッ

お、先生が来たみたいだ

「皆さんおはようございます 今日皆に新しいお友達を紹介します」

…転入生か？

「それじゃ八神さん、入って来て」

八神？ はやてと同じ名字だな

まあ、そんなに珍しい名字でもないし…

ガラッ

「ふえ！？」

「えっ！？」

「なっ！？」

「ええっ！？」

4人娘が驚いている…そりゃそうだろう？  
だって…

「皆さんはじめまして、八神はやてです。長い間病気の為休学して  
ましたが復学する事になりました。これからヨロシクお願いします」

「……は、はやて（ちゃん）！！？」

我らのよく知っているはやてだったから…って！？何でいるんだ？

「あら、八神さん？高町さん達とお知り合いなの？」



「はい、なのはちゃん達とはお友達ですライバル」

…ん？何かお友達のイントネーションが微妙に違ったような？

「じゃあ八神さんの席は高町さん達の近く「あつ先生、私の席は神代君の隣がええんですけど…？」あら？神代君ともお友達だったの？」

はやては何故か僕の席の隣を希望しているが…まあ確かに隣の席は空いているけど…

「神し…キョウスケ君とは結婚を前提にお付き合いしてますんで…ちなみに既に同棲中や」

ピシッ！！

…なっ！？

「……な、何だつて…！！！！？」

クラス中が悲鳴を上げた…つかうるせー！！

「おい！神代！！テメー！クラス…いや！！聖祥4大美少女の高町さん達だけじゃなく…あんな美少女も毒牙にかけたのか！？」

ど、毒牙つて…人聞きの悪いぞ？名も知らぬ男子クラスメートA

「イケメン…イケメンは全人類の敵じゃあああ！！」

「いやあああ！！！！神代君が…神代君があああ！！！！」

「告白する前にフラれるなんて…」

「こ、こうなったら体を使って略奪するまで!!」

「神代君が他人の物になるなら…いつそ私の手で…フッフ…」

お、男からも凄い殺気だが…女子がそれ以上に怖いんですが!?

特に最後の2人!?!?

それ絶対アウトだから!?!?

「じ、じゃあ八神さんは神代君の隣の席に…(さ、最近の小学生は進んでるわね…)」

「はい」

嬉しそうに返事をしたはやては、僕の隣の席に座り…

「驚いたか?キョウスケ君」

…いや、まあ驚いたけどさ…

「復学するならするって言ってくれれば…」

「そないな事言うたら…ドッキリにならんよ!」

「さ、さいですか…つか、さっきの結婚前提って何!?!」

その発言のせいで、未だにクラスの男女から絶賛睨まれ中なんです

が!?

…つか先生…HRなんだから注意してくれよ…

「そんなん、これ以上キョウスケ君に悪い害虫が着かん様にする為に決まっとる!！」

はやてがそう断言し僕を指差した…いや、害虫って…

「ちなみに今日は一緒に帰るな？」

帰り途中どっか寄り道して…制服デートってのもええな〜 ショッ  
ピングしたり、ゲームセンターでプリクラ撮ったり…」

は、はやてさん…?別に制服デートはいいんですが…

「……はやて(ちゃん)!!!!抜け駆けはズルイ(よ)(の)(  
わよ)!!!!」「」「」

…声がダダ漏れだから…案の定、なのは達が噛み付いてきたよ…

…ハア、無事に家に帰れるが心配だ…

Side Out

「や、八神さん…出来たら寄り道せずに帰って欲しいんだけど…」

先生…多分はやてには聞こえてませんよ…

## 騒々しい日常

前回までのあらすじ…

学校新学期！

足が完治したはやては学校に復学した

…だが、今更だが主要キャラを1つのクラスに纏め過ぎぢやね？  
どっかの葱的なクラスに段々近付いていくような…

学校

キヨウスケSide

キーンコーンカーンコーン

よし、今日のお勤め終了…っ

ま、始業式だからすぐ終わったん「キヨウスケ君！急いで帰るで！」っ…

「はやて、別にそんなに急がなくても…」

「急に決まっとするやないか！！また【あんな事】になったらこっちの身が持たん！！」

いや…持たん！っ…それに【あんな事】っ…？

「…「キヨウスケ（君）！！」「」」

…っ…？なのは達が…もう帰る準備万端で僕の席に集まって来た！

「キヨウスケ君！早く学校から脱出するの！！」

「そっだよ！キヨウスケ！！この学校はもう…」

な、なんかなのはとフェイトまで壊れ気味に慌てるよな…

「アンタねえ…今自分が置かれている状況って理解してる！？」

…状況って…？

「…気付いてないんだね…キヨウスケ君…はあ」

す、すずかまで！？しかもため息付きで！？

「…あんな、キヨウスケ君…今日キヨウスケ君の身に何かあったか  
覚えとる?」

ん〜ん〜…変わった事は特に…

しいていえば…

### 回想中

ケース1

休み時間に、他のクラスの女の子に体育館裏に呼び出された僕…

「えつと…僕に何か用かな?」

「あ、あの…／＼」

呼び出した女の子は、顔を真っ赤にして俯き…そして意を決し…

「か、神代君! あ、あの! 私、神「ちよつと待ったああああ!」!  
!」「ヒッ!?!」「

女の子の言葉を遮り、大声をだして現れたのは…

「は、はちやて?」「

はやてが凄い勢いで走って現れた!?

…あ、足は大丈夫なのか？

「ゼエ…ゼエ…すう…」

「あ、あの…はやて？大丈夫「キョウスケ君は黙っとって!!」は、はい!」

な、何か僕の直感が今のはやてに逆らったらダメだって警告してる!?

「八神さん…何ですか？」

だが、僕を呼び出した女の子はお構いなしにはやてに向かって行った…

ゆ、勇者だ！勇者が居るよ!?

「アンタ!!言っとくけどな!!キョウスケ君に手え出そうもんなら…容赦せえへんで!!」

はやてから凄い覇気が噴出した!?

…気のせいかな？そのはやての背後に一尾の守鶴（狸？）が見えるよ  
うな!?

「キヤアア!!」

やはりその守鶴？の殺気に勝てる訳もなく…少女は泣きながら走り



去って行った…

…結局何の用だったんだろう…？

ケース2

「せ、先輩！ちょっとだけ…時間、いいですか？」

人気がない廊下を歩いていると、下級生？が僕を呼び止めた

「は、はあ…何だい？」

「あ、あああ、あの…その…//」

何か凄く怯えているような…？

僕…何かしたかな？

「あ、あの神代先輩…！」

「は、はい！？」

女の子は意を決したのか、強い意志を宿した瞳で僕を見つめ…

「先輩の事…ずっと前から好…ねえ、ちょっといいかな？かな？  
えっ？」

女の子が背後から声を掛けられ振り向くと…

「な、なのは？」

なのはが無表情で立っていた！？

「…ねえ、貴女…向こうで少し O H A N A S H I、シヨウカ？」

「た、高町先輩！？い、いえ！わ、わわ私は…」

「…遠慮シナクテイイヨ？スグ終ワルカラ…」

な、何で片言が混じってるんだ！？

「えっ！？ちよっ！？い、いやああ！！？」

なのはが女の子を引きずって行ってしまった…

…だ、だから用件は？

ケース3

「ねえ神代君、ちよっといいいかな？」

「ん？何だい？」

教室の席に座っていたらクラスメートの女の子が話し掛けて来た…

えっと…

「愛原さん…だっけ？」

たしかそんな名前だったような…

「あ、私の事は香織でいいわよ」

「は、はあ…それで僕に何か？」

「今度の日曜日ヒマ？よかったら一緒に遊」あ！キ、キョウスケ  
！」「チッ…」

何やら舌打ちが聞こえたような…

「ちょっと！テストタロツサさん…私が神代君と話しているのに…邪  
魔しないでく…れ…」

愛原さんがフェイトに突っ掛かって行ったが…

ゴゴゴゴゴオ…

な！？フ、フェイトの髪が重力に逆らって揺れ始めた！？

「…キョウスケはこれから大切な用があるから…あなたは遠慮して  
ほしいんだけど…いいかな？」

フ、フェイトさん？

目が狂気に染まってませんか！？

「…じゃないと…フフツ…」

フフツ…って何だ！？こ、怖っ!？

「あ…えつと…し、失礼しましたああ!！」

フェイトの笑みを見て、真っ青になった愛原さん？は逃げるようにその場を去った…

だ、だから用件はちゃんと行っていけよー!!

回想終了

「……という具合に、女の子から話し掛けられた位で…ってどんど  
うした？」

皆、目が点になっているが…

「…なんや…この微妙な心境は？」

「う、うん…(告白を)阻止出来たのはいいんだけど…」

「な、何だか…我が身のような…」

「…というかコイツの鈍感さは治らないのかしら…ハア」

「キョウスケ君らしい…のかなあ？」

な、何か僕が悪い事したのか？

「…あゝ…何か知らないが…すまん」

「「「「「…はあ」「」「」」

なっ…！？み、皆そろってため息って！？

とりあえずあの後なのは達に（強制）連行され学校を出たのだが…

「…どうすつか…この手紙の山…」

下駄箱に大量の手紙が入っていたのだ！！さらに！！

「…なあ、何で皆して僕の周りを？」

その手紙の山を見たなのは達は、SPのように僕に張り付いて周りを威嚇しながら…って、何で威嚇してんだ！？

「（こちらホワイトラビット！前方異常なしなの！！）」

「（こちらブラックラビット！こっちも異常ないよ！はや…ブル  
ーラビットは？）」

「（こちらは…あ、3時の方向に不審な女狐集団発見や！！）（アリ

「サちゃん、すずかちゃん！」

「了解！！」

「な、何が解なんだ！？つて突っ込む間もない位のスピードでアリスとすずかはどこかに行ってしまった…」

「な、なあはやて…アリス達は何処に？」

「い、いや〜 2人の知り合いを見かけたんでそれを教えたら、ちよつと【挨拶】に行くって言っとなら？」

「ふーん…まあいい「ギャアアアア！」な、何だ！？今の悲鳴は！？」

「悲鳴が聞こえた方向…アリス達が向かった場所！？」

「ま、まさか2人の身に何か！？」

「2人とも誘拐され易い体質？だから…」

「あ、大丈夫だよキョウスケ」

「うん、あーほら！アリスちゃんとすずかちゃんがこっち来たよ！」

「あ、ホントだ…何故か2人とも清々しい顔をしているが…良い事でもあったのかな？」

「おまたせ皆！」

「さ、行きましょー!!」

… 2人の制服に赤い染みが僅かに着いているが… うん、多分ソレ気にしたら負けだな…

「ところでキヨウスケ、この後の予定はあるの?」

「ん?この後は… 僕とはやてとシグナム達は管理局に行くんだっけ?」

「せや!私やシグナム達は囑託魔導師の手続きをしに行くんや」

この前の面接は皆問題なく通過し、はやては囑託として… 後々正式に入局なんだろうな」

「あ、キヨウスケ君達も本局に行くんだ?」

「達も?じゃあなのはも?」

「うん!フェイトちゃんと一緒に!」

「今度私となのはは、3ヶ月の短期だけど武装隊の陸士訓練校に行くんだ。それでその手続きに」

「3ヶ月も!?じゃあその間こっちの学校は…」

「うっん、こっちの学校にもちゃんと行くよ！でも当分は訓練校優先になっちゃうかな」

「そうなんだ」

「はやてちゃんもその訓練校に行くの？」

「ん〜…まだ詳しい事は決まっとらんよ〜…私的にはキョウスケ君と同じ部隊のFAITHに入りたかったんやけど…」

「ああ、あそこは最低魔力SSSランク必須だからな」

ま、FAITHはぶっちゃけ神が責任者という非常識な部隊だからな

SSSなんて一握りしかいないから…言い方を変えれば暗に【入れる気がない!!】って言っているのと同じだし

…まあ、なのは達なら別に入れてもいいんだけど…殆ど対アインスト部隊だから危険だし…うっん…

「キョウスケ？どうしたの？難しい顔して…心配事？」

「フェイト…いや、何でもないよ」

ちよっと考え込んでて、フェイトに心配かけちゃったみたいだ…

「私に出来る事があつたら何でも言つて…ね？」

「うっ／＼…あ、ああ」



くっ！！ちょっとドキッとしてしまった…／＼

「「「「……ムッ」「」」」」

ん？…何かなのは達が不機嫌な顔をしているが…？？

「キョウスケは、はやての付き添いで本局に行くの？」

「まあね、それに何かさくらは連れて来てくれって。なあはやて？」

まあ、さくらはどっちにしろ付いて来そうだが…

「そや！何やマリエルさんって人が、さくらちゃんを見てみたいって騒い…じゃなく、言うとなつたってエイミィさんが苦笑しながら言うとなつたで」

マリエル…はて、どこかで聞いたような…まあいいか

「じゃあ、準備があるから僕たちは先に行くね。行くのははやて」

「ほなまた後でな！なのはちゃん フェイトちゃん」

「うん、また後でねキョウスケ君！はやてちゃん！」

「シグナム達にもよろしくね」

「…まあお仕事なら仕方ないけど…たまには私達にも付き合いなさいよ…！」

「またね！キョウスケ君、はやてちゃん」

僕は人目がない事を確認して、転送魔法を発動させた！

シュン！

S i d e O u t

「エイミィさんの悪徳…?」

## 時空管理局本局

キョウスケSide

あの後、なのは達と再び合流し…やってきました管理局本局!!

今回ははやての付き添いで来たけど…一応神様も常勤?しているらしいから挨拶位は行くか…つか仕事してんのか!?

リアルにゲームしている姿しかイメージ出来ないんだが…

「おーい!!みんな〜!!」

「あ、エイミィさんや!!」

「エイミィ!!」

「……………ッ!？」

やって来たエイミィさんにはやてとフェイトは手を振って、なのは

はレイジングハートを起動させ…あれ？起動！させた！？なぜ？？

「……………エイミーさん…これ以上キョウスケ君に近付いたら」

や、ヤバイ！？目が霸王化してる！！？

「ち、ちょっと待て！なのは！！」

「な、なのは！？どうしたの！！？」

「なのはちゃん！？どうしたんや！？と、とりあえず落ち着こ？な  
？」

この後なのはの説得にしばらく掛かった…

てか何でエイミーさんに……………あっ！？も、もしかして…

「な、なのは…こつちのエイミーさんは大丈夫だから」

「……………ホント？キョウスケ君を危ない目で見て狙ってないの？」

「ああ、こつちのエイミーさんは無害だから…落ち着こっ？」

「…うん、分かったの…」

納得してくれたなのは、レイジングハートを待機状態にして落ち着いてくれた

「…あゝ…キョウスケ君、助けてくれたのは有り難いんだけど…何

「気に酷い事言っただけだ！？」

あ……

「えっと…実はですね…」

説明中

「…という訳で平行世界のエイミーさんとこっちのエイミーさんと勘違いしちゃったんですよ」

「なのはエイミーさんにレイジングハートを向けた原因…それは以前に行つた平行世界のエイミーさんが原因だった…」

「…まあ確かに危ない人だったよな…」

「へ、平行世界の私って一体…」

「話を聞いたエイミーさんがorzと手を付いて落ち込んでいた…」

「あ…確かにそんなあぶねー奴…コイツもレイジングハート構える訳だな…」

「ヴィータ言い過ぎ…でもないなあ…激しく同意だな」

「え、エイミー…その…ドンマイ…」

「ま、まあエイミーさん…僕は気にしてませんから…」

「キ、キヨウスケ君…今はその優しさが…残酷だよ…」

この後、エイミイさんの再起動に全員総出で慰めた…

「さあ気を取り直して行こうか!！」

つか切り替え早!？」

女性は過去を引きずらないってどこかの文献でみた事あるが…

「それじゃなのはちゃんとフェイトちゃんは私に着いて来てね」

「はい!！」

「あ、エイミイさん 私らは?」

「はやてちゃん達は…あ、来た来た!！」

エイミイさんが見ていた方向から眼鏡をかけた1人の女性が来た

「す、すみません!遅れちゃいました!！」

「しょうがないなあ」

「あの…エイミイさん?その人は?」

「あ、初対面の人が多数だったね！この子は…」

「はじめまして、マリエル・アテンザです。マリーって呼んで下さい」

あゝ…この人がさくらと会いたいって言っていた人？

「って…貴女は…」

「ほえ！？な、何ですか？」

早速さくらに気付き凝視しているが…

「あ、貴女がさくらちゃん！？あの古代ベルカの失われた技術で作られた融合型デバイスの！？」

…まあ以前クロノに話し時はベルカのノウハウをって言ったけど…  
まあ実際は違っただよな…

「えっと…た、確かに私はキョウ君のユニゾンデバイスですけど…」

さくらはマリーさんの迫力に押されっぱなしで後退りしていた…

「わ、私初めて見ました！！凄いです！！うわ〜！握手して下さい  
！！！」

…何かさくらがアイドル扱い！？

「エイミィさん…彼女は…？」

「あはは〜…彼女メカニックマイスターの資格を持っててね〜  
本局でもデバイスの整備とかしてるんだけど…デバイスの事となる  
と…ねえ？」

ねえ？って言われても…

「ちなみになのはちゃんとフェイトちゃんのデバイスにカートリッ  
ジシステムを組み込んでくれたのも彼女よ」

「えっ！？そうなんですか！」

「じゃあ…お礼、言わないとね」

なのはとフェイトはそう言っていたが…

「うわっ〜！！す、凄いです！！これぞ人類の英知の結晶！！この  
可愛さ…反則です！！」

…マリーさんはそれどころではなかった…

「ほ、ほええええ！！」

「落ち着いた？マリー？」



「は、はい…すみません先輩…」

何とか正気に戻ったマリーさん…

メカニックマイスターじゃなくミハーメカニックヲタクなのか？

「あ、あの…神代君…」

と考えていたら腐女子に話しかけられた

「何ですか？」

「実は…今度はやてちゃんの融合型デバイスを創るんですが…」

あゝツヴァイの事かな？

「そうなのか？はやて？」

「うん…リインフォースの名を受け継ぐ子は、私の手で創った融合型デバイスがええかな って

消えてもまたリインフォースもその方が喜んでくれる思うてな」

「（…だそうだぞ？リインフォース？）」

はやて達にはバレないように念話で待機状態のリインフォースに話し掛けると

《（…主はやて…お気遣いありがとうございます）》

…リインフォースも嬉しそうだな

「そんでな？その事を前にエイミィさんに話したら…」

「そーゆー事にうってつけな人物がいる！って事で紹介したのがマリーなんだよ！」

なるほどね〜…ん？

「あれ？だったら何でさくらのも連れて来てくれなんて？」

「じ、実は私もユニゾンデバイスなんて初めてで…そしたら神代君のユニゾンデバイスのさくらちゃんのをエイミィ先輩に聞いたんです。それなら是非この目で見てみたいな〜って」

「えっと…要約すると【ユニゾンデバイス創る為にさくらを参考にさせてくれ！】って事？」

「え、ええ…まあ、ぶつちやけるとそんな感じですよ…ダメ…ですか？」

「ええっ！？ダメなんか？キョウスケ君…？」

…そーゆー事なら協力はしたいんだけど…

「ちなみに…マリーさん、どのようにしてユニゾンデバイスを創るか聞いていいですか？」

「あ、はい！まずはマスターになるはやてちゃんのリンカーコアをコピーして、それを基にさくらちゃんを参考に得た技術を組み込んで行こうかと…これなら短時間で完成できる筈です」

「…さくら、どうする？」

「え、えっと…私ははやてちゃんに協力してもいいかな…って思っているけど…ねえ？」

あ、さくらもあの事に気付いたか

「そうだよな…協力はしてもいいんだが…」

「神代？何かマズい事でもあるのか？」

シグナムが僕の曖昧な態度に気付いたのか不思議そうに尋ねてきた  
「…まあとりあえず協力自体はいいんですが…（口で言うより自分の目を見た方が納得するか）さくら、悪いけど…」

「うん、分かったよキョウ君！」

「じゃあ、いいんですか？」

「ええ…とりあえず協力します」

でも…おそらく結果は…

「じ、じゃあ急いでラボに行きましょう…！さ、はやてちゃん…さくらちゃん…！行きますよー…！」

「えっ！？ちょー…！マリーさん…！？」

「じゃあああ!？」

哀れ…はやてとさくらはマリーさんに引きずられて行ってしまった…

「さっ、私達も行くわよ!なのはちゃん!フエイトちゃん!」

「は、はい…あはは…」

なのは達も若干マリーさんの行動に引きつつエイミィさんの後に付いて行った…

「…そーいやヴィータ達はどうすんだ?」

何か唾然てしている間にはやてが拉致られていったが…

「…あ、ああ…どうすつか…恭介はどうすんだ?」

「僕は一応、自分の部隊の方へ行こうかと…」

何か新しいインスタ情報が入っているかもしれないしな

「そつか…な、なあ恭介…私も付いてつてもいいか?」

…まあ、部隊部屋にも接客室があったから…ヴィータにそこで待っててもらえば大丈夫かな?

「いいよ」

僕が二つ返事で了承すると…

「よっしやー!!」

と、ヴィータがガッツポーズで喜んだ…別にそんなに面白くないと思っけど…

「なら私達は主と行動を共にしよう…シャマル・ザフィーラはどうする?」

「私もはやてちゃんの様子が気になるから一緒に行くわ」

「……………我也主の元へ」

「じゃあ急いで行かないとはやて達…見失っちゃうぞ?」

「そうだな…それではまた後でな」

「それじゃ後でねキョウスケ君!ヴィータちゃん」

「……………後で合流しよう」

そう言い残し、シグナム達はマリーさん達の後を追って行った

「さ、僕らも行くところか?ヴィータ?」

「お、おおおうノ!!」

…ん?

「どうしたヴィータ?顔が真っ赤だぞ?」

「ななななんでもねーぞ／＼！！（ひ、久々に恭介と2人つきり…ヤ、ヤベー！！何か緊張してきた／＼）」

「?まあいいか、じゃあ行こうか」

「あ、ああ…／／」

こうして僕たちも移動したのだが…

「く　く?／／」

と、移動中ずっと上機嫌だったヴィータ

いい事でもあったのかな？

Side Out

おまけ

《（…インフィニティ…解ってはいたのですが…彼は何時もこんなのですか？）》

『（まあ…概ねそうですね…）』

《（主はやてや鉄槌の騎士も苦労してますね…）》

『（なのは嬢やフェイト嬢も苦労してますよ…）』

『《（（……………ハア））》』

F a t e / L y r i c a l I n i g h t ……って違ひして…？

前回までのあらすじ…

はやて達と本局にやってきました！

で、とりあえず僕はヴィータと一緒にダイエット（神）がいるFAI  
THの部署の扉を開けたのだが…

キョウスケSide

プシュ

僕が扉を開けると、そこに居たのは…

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d

《我が骨子は捻れ狂う》

「



…は？

「カラドボルケ  
偽・螺旋剣！！」

シュツ！タン！！

「おお！！見たかねスクルド君！！ど真ん中に当たったぞい！！」

「……はあ」

…そこにはWiissポーツのアーチェリーをプレイしていた神様と、それを呆れて見ていたスクルドさんがいた…

「……あら、キヨウスケ君…とオマケが1人？」

「テメー！！誰がオマケだ！！」

…ヴィータとスクルドさんって…相変わらず仲が悪いな

それはともかく…

カチャ

「…それでダイテツ副元帥…あなたは何やってるんですか？」

僕はインフィニティを構えて神様に尋ねると…

「ふお！？キ、キヨウスケ！！？あ、あのじゃな…暇だったので…  
Wiiss使ってアーチャーごっこ？てへ」

ブチッ！

「…OK分かった…解毒薬の貯蔵は十分か…？」

「い、いや！？ま、待つんじゃない！！と言っか何故解毒薬なんじ」…  
「バイオ」ぎゃああああ！！ど、毒！？毒があああ！！？」

まったく…仕事しないで遊んでるからだ…反省してろ！！

「……い、いいのか恭介…？一応は偉い人なんだろ？」

「大丈夫だ。問題ない」

一応アレでも神だからな

「い、いや！？大丈夫じゃないぞ！！？わ、ワシが悪かったから…  
げ、解毒ををををを！！！！？」

あの後、仕方なく…ホント仕方なく【エスナ】を掛けて回復させた神様は…

「ふう…えらい目にあっただわい…」

…反省してるのか…コイツ？

「大体、前から聞こうと思っただが…何でここにWiiがあるんだ？」

まさか任 堂が次元世界進出！…って事もないだろうし

「ん？Amazon で注文したんじゃよ？」

いや〜最近ネット通販とかあつて便利じゃの〜」

…マテヤオイコラ！！何で Amazon で注文した商品がミッド周辺まで配達されんだ！？

「そこは気にしたら負けじゃよ ふおふおふお」

…コイツに【デス】掛けたるか！！

…後にこのWiiが本局の娯楽施設に置かれ大人気に！！

噂を聞いたミッドチルダの各メーカーが地球のゲームメーカーと秘密に提携し、ミッドでも販売され大人気になり…数年後、ノリノリ狸の一声で何故か後の機動六課に標準装備になるに至る事になるのは…少し未来の話だ…

「…もういいや、ツッコミ疲れた…」

「ま、まあ恭介…元気だせよ…な？」

うう……ヴィータの優しさが身に染みるよ…

「所でキョウスケ君、今日はどうしたの？こちらに来る予定はなかったと思っただけど？」

「今日ははやての付き添いで…といかなのはもフェイトも一緒ですが、それで本局に来たんですよ。」

で、ついでにアインストの新情報が入ったかなと思って来たんですが…」

まさか仕事そつちのけでゲームしてるとは…予想は出来たが…本当にしてるとはな…

「そうですか…残念ながら今の所、新しい情報は…」

「そうですか…」

やっぱりそうそう簡単に見つからないか…

「のうキョウスケ、折角来たんじゃ！次はWiiボーリングで対戦じゃ…！」

…空気読めよ…というか仕事しろよな…

「そうじゃ、ヴィータ嬢ちゃんもやらんか？」

神様はヴィータにゲームで対戦を求めるが…

「めんどいからパス…！」

ヴィータにバツサリ切られた！

「そうじゃの…ゲームでワシに勝てたら、そなたを特別にFAI THに入る事を許可するぞい？」

…何かまたトンデモない事言ってね？

まあでも、ヴィータがそんな事で釣られ…

「よし！勝負だじーさん！！さつさと始めんぞ！！！」

釣られた！？しかも割と速攻で！？

「では、ボーリングで勝負じゃ！！！」

「へっ！！鉄槌の騎士にボーリングで挑んでくんのか？」

いや、そこ鉄槌は関係ないし！？

「ぬおおおお！！！」

ガコン！

「おりゃああああ！！！」

ガコン！！

…あ、2人とも熱中してら…

「やるのお…なら！！これでびびりじゃ！！！」

ガコン！！！！

お、ストライク出した！

「甘めーよ！！私だって鉄球の扱いは得意なんだかな！！おりゃー！！！」

ガコン！！

…いや、ヴィータ…それTVゲームだから…今はそれ関係ないんじゃない？

…まあヴィータもストライク取ったから何とも言えないけど…

結果、ボーリング勝負は神様が勝ったのは…まあどうでもいいや

「うう…ま、負け…私が負けなんて…orz」

「ヴ、ヴィータは頑張ったよ！？」

僕は勝負に負け、うなだれているヴィータを慰めた…

つか初心者のヴィータにハンデなしの超本気出すのって…神としてどうよ？

「勝てば官軍じゃ」

…あ、頭が痛い…

神々の戯れの後、

「次やる時はぜってー勝つからな!!」

と言うヴィータの捨て台詞と共に僕らは部屋を出たのだった

…一体僕は何しに行ったのだろうか？

ま、まあそれで時間があつたので…管理局内のカフェコーナーでヴィータとお茶をしてはやて達を待っていた…

「ちつくしょう…せつかくFAITHに入れると思つたのに…あー!!思い出すだけで腹立つ!!」

ヴィータはまだ引きずっているのかご機嫌斜めだ…

「まあ落ち着けて…ホラ、注文した飲み物が来たぞ」

ウェイトレスの人が持ってきたのはコーヒーとオレンジジュース

当然僕がコーヒーでヴィータがオレンジジュースなのだが…あれ？

「お待たせしました〜。ご注文のアメリカンとオレンジジュース（カップル仕様）です」

ウェイトレスの人がテーブルに飲み物を置いてくれたが…何か変な単語言ってなかったか！？

「…なあヴィータ、何でジュースにストローが2本付いてんだ？」

1人で2本使って飲むとか？

「も、もちろん恭介と…その…あの…い、一緒に…飲みたくてさ…  
／／」

…なんですと！？

「あの〜…僕はコー「い、嫌なのかよ…？」ヒ…い、いただきます  
…」

だから上目づかい+涙目コンボは止めてくれ！！

良心という名のライフポイントが一気に削られるから！？

「じ、じゃあ…せーので飲むかな／／！？」

「あ、ああ…」

しかも…何か周りの局員達の生温かい視線が痛いんですが！？



「…せー」…何だか面白い事してるんだね…キョウスケ君、ヴィー  
ーたちちゃん…？」な、なのは！？」

いきなり魔王が現れた！？

「キョウスケ君、私カタート山脈にいきなり現れたシャ　ラニド  
ウじゃないんだから！いきなりは現れないよ！！」

何でなのはそのネタを！？つか何時からいたんだ！？

「…キョウスケがいただきますって言った辺りからだよ？」

フ、フェイトまでいたのか！？

「それで…キョウスケはヴィータと何をしようとしていたねかなあ  
？」

「そうだよ…キョウスケ君：O　H　A　N　A　S　H　I　シヨウカ…？」

「い、いや！？その…「あ、いたいた！！キョウスケ君！！」あ、  
はやて！！」

いいタイミングではやて達が帰って来た…あれ？マリーさんも一緒  
なんだが…うなだれてる？？

「「チツ…タイミング逃した（の…）」」

…ホントにヤバかった…はやて達に感謝だな

「(クッソー!!後ちよつとで恭介と間接キス出来たのに…  
最近、恭介とキスしてねーから恭介成分が足んねーし…何とか手を  
打たねーとな。…はやてと相談すつか…?)」

ゾクッ!

な、何か今…身の危険を感じたが…気のせいかな?

S i d e O u t

## ツヴァイ誕生！準備編

前回までのあらすじ…

なのはに封印されていた赤眼の魔王ルビーターシャブラ「だーかーらー！！そんな物騒な物、封印されてないの！！」

「というかそのネタまだ引きずるの！？」「ってなのは！？何でこのコナーに来てるんだ！？」

「何か作者さんの使いつていう後ろ姿が黒光りするGに似た謎の神官？さんが来て教えてくれたの！！」

ちっ…作者も余計な事を…

まあネタ発言だから別にいいか…

まっ、とりあえず本編をどうぞ！

キョウスケSide

合流したはやて達もテーブルに着き、僕らは平和的に…そう…！平和的にティータイムを楽しんでいる…！

（大事な所だから2度言っただけだ…！）

「ゴホン…！それではやて、デバイスの方はどうなった？」

「それが…杖シュベルトクロイツの方は問題ないんやけどな…」

「ん？何か問題でもあったのか？」

「問題…というかそれ以前の問題やな」

…まあ何となく予想は出来るけど…

「…キョウスケ君、何なんですか！？あのさくらちゃんは！？」

どう調べても解析不能とエラーのオンパレード！？

管理局の最新解析装置でも解析出来ないって…一体どこオーバーなテクノロジーですか！？」

どんより雰囲気で落ち込んでいたマリーさんは、興奮気味にテンパっていた

…まあ、こうなる事は予想出来ただけ…

ユニゾンデバイスのさくらの製作者は表向きは僕だが…実際は、あのゲーマー（神）だからな〜  
そりゃ一般局員が解析出来る訳ないのは道理…

「キョウスケ君！！さくらちゃんを創ったのはあなたですよ〜  
！？どうやって製作したのですか！！？」

…うん…上手くごまかすか

「えっと…さくらは僕の出身世界の技術をベースに、こっちで発見したベルカの技術をハイブリットさせたユニゾンデバイスなんですよ」

「純粋なベルカ式じゃないんですね…キョウスケ君って次元漂流者でしたよね？元の世界が分からないって聞きましたし…というか異なる技術のハイブリットっていうのも凄いですが…ちなみにキョウスケ君、その時のデータとかって？」

「いや〜、製作過程で色々アドリブで調整しながら創ったので…さくらの正確な製作データはないんですよ〜」

「そ、そうなんですか…あつ！？なら、そのこっちで発見したベルカのデータは？」

「…ベルカのデータと言っても、一般閲覧可能な情報程度ですよ？より詳細なデータが見たいなら…ユーノに依頼したらどうですか？確か彼は管理局の無限書庫の司書に就職したはずですし…彼の探索技術ならそれこそ詳細なデータを抽出してくれると思いますよ？」

僕はユーノを生け贄に（笑）何とかごまかす！！

ま、これで一応話しの筋は通ったかな？

「そうですか…はあ、やっぱり地道に製作しないとダメなんですね」

「まあ、出来る範囲であれば僕も製作には協力しますよ？  
何たってはやての家族が増えるんだし…だろ？はやて？」

ま、僕が手を貸さなくても完成するだろうけど…

「そや！八神家の末っ子が産まれるんやから…キヨウスケ君にも子作り協力してもらわんとな」

そうそう子作りを…って！？ヲイ！！ちょっと待て！！

「「ちょ、ちょっとまった（なの）————！！！！」」

軽く混乱している所に、なのはとフェイトの絶叫が響いた！！

「は、はやてちゃん！？…こ、子作りって…／＼」

「そっだよはやて！？キ、キヨウスケとこの、子作り行為は私が先…はうう／＼」

なのはが顔を真っ赤にし猛抗議！！

…フェイトは何を想像したのかオーバーヒートしているし…

…というか…

「はやて…そーゆーギャグはいいから…なのはもフェイトも真に受けられない!!」

「えっ!?じ、冗談…?」

「ハッ!?じゃあキヨウスケはまだ純真まっさらなままなんだね?」

…フェイトさん?何か純真まっさらなのはツッコまないが…

…何か複雑な気分だな…

「…チツ、キヨウスケ君、ノリが悪いでえ〜…せつかくの既成事実が〜」

はいそこ!!アブナイ事言っつてふて腐れないで!!

「しゃあないな〜…じゃあキヨウスケ君には技術面で協力してもらおう!ちゅう事でええか?」

「まあそれなら…と言うか、それが普通なんだけど…」

まったくこの狸は…

「なあなあはやて!!そいつ何時会えるんだ?」

ヴィータ嬉しそだな〜 まあ感覚的には妹が出来るような物だからな〜

「ん〜…直ぐにつて訳にもいかんしなあ…」

そんなに急がなくても確実に完成するんだし…

「あ〜…」

すると、今まで黙っていたシャマルが怖ず怖ずと手を挙げた

「ん？何やシャマル？」

「あのですね、はやてちゃん…時間的な事なら、キヨウスケ君の別荘を使ったらどうでしょう？」

……………あ

「そ、それや〜！〜！」

そ〜いやその手があつたな〜…

「そや！！なあキヨウスケ君、別荘使つてユニゾンデバイスつて創れへんか？」

う〜ん…

「まあ、設備的には可能だけど？」

「なら決まりや！！ユニゾンデバイスはキヨウスケ君の別荘で製作し「ち、ちよつと待つて！はやてちゃん！！」つて、何やエリーさん…折角盛り上がったのに…クロノ君のKYが染つたんちゃ



うか？」

何気に酷い事をサラっと言ってないか？

「わ、私だつて空気位読めますよ〜！！  
クロノ執務官と一緒にしないで下さい〜！！」

…マリーさんも人畜無害なカンジなのに酷い事を…というかクロノ  
！！あいつは局内でどんな評価なんだ！？

「つて！？そうじゃなくて！その別荘つて何ですか？と言うか、話  
しを聞くとキョウスケ君の別荘には少なくとも管理局と同等の設備  
があるように聞こえるんですが？」

「ん？まあ同等かどうかは別として…それなりの施設はありますよ  
？」

基本さくらのメンテとか趣味のハッキングとかで必要だからな〜

ん？ハッキングは犯罪？

大丈夫、ばれなければ問題ないさ！

「それに恭介の別荘は一種の隔離結界で、中の1日が外の1時間だ  
かな〜！！どうだ？スゲーだろ〜！！」

ヴィータが胸を張って自慢しているけど…何故アナタが自慢するん？

…別にいいけど…

「そ、そんな結界まであるんですか…キョウスケ君つて…何でもあ

りのバグキャラですか？」

別に何でも…ってバグは酷くない！？

「じゃあそれで決まりやな！

なのはちゃん、悪いんやけどユーノ君にユニゾンデバイスに関する資料集めてくれるように頼んでくれるか？

なのはちゃんから頼んだった方が効果的やろうしな」

効果的って…な、何かはやて黒くないか！？

「うん、分かったの」

「で、マリーさんは必要なデータを纏めといてな シャマル、マリーさんのお手伝いお願いな？」

「はい、はやてちゃん」

「えっ！？それってもうキョウスケ君の別荘でデバイス創る事決定！？」

「そやでマリーさん 折角の別荘や！使わな損や！！」

損や！！って…

「なあはやて…今更だけど、管理局員って言っても公務員みたいな物だから…色々上司とかに許可貰わないとマズいんじや…」

管理局も基本縦社会だからな」

「キヨウスケ君が許可すればええんちゃう？」

FAITHのキヨウスケ君って副元帥並の権限あるんやろ？だった  
ら問題まったく無しや！！」

…あゝ、そついやそんな権限あつたような…よく覚えてたな

「ええつ！！？キ、キヨウスケ君って…そんな偉い人だったんです  
か！！？」

マリーさん、えらく驚いているが…知らなかったのか？

てつきりエイミィさんかクロノから聞いていると思つたが…

「き、聞いてないですよ！？わ、私そんな人を君付けで読んじやつ  
たの！！？」

「あゝ…別にそこは気にしなくていいですよ？副元帥なんてオマケ  
みたいな肩書ですし」

「は、はあ…オマケですか…ははは」

何か疲れきつた顔のマリーさんだが…どうしたんだ？

「シグナムは一応クロノ君やリンディさんに話しを通しといてな？  
一応私らの保護責任者やから」

「ハッ！判りました主はやて」

「あ、シグナム！私も一緒に行きます」

「すまんなテストロッサ」

…しかし、こうして見ると…はやてって指揮官適性高いって感じるな

さすが未来の起動六課の部隊長だな

…ただ、職権乱用しまくりそんな感が否めないが…

「ほな私らは先に帰って別荘の準備や！！最近使ってなかったからホコリ積もってそうやしな」

…あの、一応あの別荘って僕のなんですけど…何かはやての所有物的なニュアンスに聞こえるのは気のせい？

「ね、ねえキヨウ君…はやてちゃん何かはりきってるね…？」

「まあ…はやて的には、リインフォースの想いを受け継ぐ子を自分の手で創れるんだし…うれしいんだろ？」

もっともリインフォースは健在なんだが…

『（私の後継機…私も会うのが楽しみです）』

リインフォースとツヴァイ…何か腹違いの姉妹って感じかな？

「キヨウスケ君！！何しとるん？家に戻って準備するで！！」

「早く行こーぜ！！恭介！！」

はやてとヴィータ、もう転送ポートに向かっているし！？

「ああ！今行くよ！！」

別荘使つてツヴァイの製作か…完全に原作前倒しだよな

まあ別に問題ないか！

S i d e O u t

おまけ

「お会計4980円です」

「……………キヨウスケ、支払いは我なのか？」

……………あ、ザフィーラの事忘れてた！！



ツヴァイ誕生!...あれ?(前書き)

風邪ひいて更新おくれました...

ツヴァイ誕生！…あれ？

みなさんこんにちは。神代恭介です

話しの流れで、僕の別荘のラボでリインフォース・ツヴァイを製作する事になりました…

それに同行した技術者のマリーさんは…

「こ、これは…まだ局でも導入していない演算装置！？」

ああ！…こ、こっちは見た事のない機材が！？」

…という具合に興奮気味だったのは記憶に新しいな…

それからユーノからもユニゾンデバイスの資料が届き（資料を受け取る時、「なのはが！なのはが僕を頼ってくれたんだ！！」と嬉しそうに語っていたが…それ、はやて経緯でなのはが頼んだだけだから…哀れユーノ！！）マリーさん中心で製作チームが結成（僕とはやてが補佐でマリーさんがメイン）され、デバイス製作が別荘内で開始された

ただ途中、



「フッフ…これだけの施設があれば…最強無敵のデバイスが…」

と呟いていたような…まさか…隠れマッドか!?

ゴ、ゴホン!

とりあえず餅は餅屋につて事で、マリーさんにユニゾンデバイスの製作を丸投…任せて、僕らはサポートに徹した

ちなみに暫くしてから僕とはやては別荘から出て、数時間置きにマリーさんの様子を見に行く程度にした…

ん?なんで積極的に手伝いをしないのかと?

だって…見た事のない技術を使えるつて事で、マリーさんはスーパーハイテンション状態!

そんな狂科学者モード全開のマリーさんに近付くほど僕等も命知らずではないんです…いやマジで…!

その結果、マリーさんは…その貪欲な探求心で休息なしの突貫作業を続け…

そして…

別荘内

キヨウスケSide

あれから数日経ち…マリーさんからデバイスの完成の知らせを聞き、  
八神家御一行で別荘にやってきた！

…ちなみになのはとフェイトは訓練校に行っている為、留守だった  
りする

…そーいや訓練校って何すんだろ？

やっぱりサバイバル訓練かな？

「み、みんなあゝ…」

掠れた声で僕らを呼ぶ声が聞こえたのでそちらを見ると…えっ！？

「…なあキヨウスケ君、私…目えおかしくなつたんかな？」

「…安心しろはやて…多分僕も目がおかしくなってるから」

「…ってオイ！？何2人して現実逃避してんだよ！？」

「…まあ、主達の気持ちも解らんでもないが…」

だって…僕らの目の前には…明らかに真っ白に燃え尽きた？とツツ  
コミたくなるほどボロボロになったマリーさん…らしい人が居たの  
だ…

「って！？そんな事言ってる場合じゃありません！！」

…っとならうだった！

「は〜や〜て〜ちゃ〜ん…完成しました〜あ…最高の…デバ…  
…グフツ！？」

バタン！

って言い終る前に倒れた！？

「マ、マリーさん！？あかん！！シヤマル！！急いでマリーさんの  
容態を！！！！」

「は、はい！！」

「わ、私のマイスター人生に…一片の…く、悔いなし…ガクッ」

マリーさん…貴女の事は生涯忘れません！！

「あ〜…キョウスケ君？彼女、一応まだ生きてますよ？」

あ…そうなんだ

「…神代、何気に酷いな…」

「ゴホン！ま、まあそれはそれで置いておいて…」「置いとくんかい！？」…「だって、はやてだって早く見たいだろ？自分のユニゾンデバイスを…」

「…うっ…その誘惑には勝てへんなあ…」

…よし！マリーさんの供養を兼ねて今から見に行こか？」

「…はやても何気にヒデーな…ま、私は別にいいけどな」

はやてもヴィータも何気に酷いな…」

というか、みんな基本自分に正直というか何と云うか…

「…キョウスケ君（恭介）の影響やから（だかん）な…！」

…って僕のせい！？

## 別荘内・研究所

マリーさんはとりあえず医務室に連れて行き、とりあえずシャマルに付き添いを頼んだ

…まあ、アレでも後の六課の医務官なんだし…大丈夫だろう…多分

とりあえず僕は研究室の前に来ています

ガチャ

扉を開けるとそこには…

「あ、キョウ君！それに皆〜！！」

中には白衣に眼鏡をかけたさくらが居た

…ちよつとグツときたのは内緒だ…！

「さくら、はやてのデバイスが完成したってマリーさんから聞いたんだが…？」

「うん！出来てるよ〜 後は起動するだけだよ」

さくらの前には…カプセルの中で眠ったようにしているリインフォースツヴァイが居た…

うん、見た目も完璧に原作どおりだよかった

…また、さくらみたいなケース（途中で路線変更的な）な事も有り得たからな…

「じゃあ早速起動したいんだけど…スイッチは、はやてが押した方がいいかな？」

「えっ！？ええの！？」

「当たり前じゃんか！　これから生まれるデバイスは、はやての為に生まれるんだしね」

「キヨウスケ君…ありがとな」

「じゃあはやてちゃん、こっちの起動ボタンを押してくれる？」

「う、うん…何や緊張してきた…」

「主はやて！頑張ってください！！」

「はやて！！ファイトだ！！」

「……………（コクッ）！！」

…いや、皆さん？ただボタン押すだけなんですけど…？

「……………ほな…新たな祝福の風よ！今こそ目覚めよ！！」

そう言うと、はやてはボタンを…

ガシャー！！

…ガラスカバー位は外して押してくれよ…　どっかのウサ耳オペレーターみたいなプログラムドライバー！！じゃないんだから…

プシュ

と、とにかくはやてが起動ボタンを押して、目の前のカプセルが開き…

「……ふああ、よく寝ました〜あ」

…何だろつ……すぐ聞いた事のある台詞…

「……………か……………」

…か？蚊でも居たのか？

「かわええええー！ー！ー！ー！！！！！！」

はやてが暴走した！？

「……………」

ほら見る！！シグナム達も軽く引いてるし！！

しかし…何だろつ……？この光景も前にあったような？？

「えつと…マスターはやてちゃんですね？」

「私の事ははやてでええよ〜」

や〜ん！何やこの凶悪な可愛さは〜」

「く、苦しいですう〜！！！！」

はやてはリインを掴み？頬すりしまくってるし……まったく…

「あゝコホン！和んでいる所悪いけど…この子の最終チェックしていいかな？」

「ハッ！？こ、ごめんなキョウスケ君！もう少しで引き返せない世界に足を踏み込んでたわ…」

我に帰ったはやてがやっとリインを手放した

…つか、ホントにヤバかったんだな…止めてよかった

「はわわ…た、助かりました〜！」

…それに大丈夫かなリインは？トラウマにならなければいいが…

「じゃあ…えっと、これから2、3質問するけど…これは起動テストなので解ってるかもしれないけど気を悪くしないでね？」

「は、はいです…！」

復活したリインは緊張した顔でこちらを見ている…

「じゃあ自分の名前は言えるかな？」

「はい！マイスター…じゃなく、はやてちゃんから頂いていた名前は【リインフォースツヴァイ】です！リインって呼んで下さい！ダ  
ーリン」

………

「…じゃあ次は「ちょ！？ちょい待ち（待て）！！！」って顔



「顔が近い！？2人とも！！」

はやてとヴィータが物凄い形相で詰め寄ってきたから…

「ふえええ！？こ、怖いです〜！！」

ラインが脅えてるじゃないか！！

…まあ確かに問題発言があつたけどさ…

「な、なあライン？何でキョウスケ君をダーリン何て呼ぶん？」

いきなり核心聞きますか！？

「ええつとですね〜…なんというか〜…ラインの心がそう望んでい  
るんです〜」

「…って言っているけどよ…意味解るか？恭介？」

って言われてもな…

「ん〜…さくら、育成プログラムに問題は？」

「ほえ！？勿論問題ないよ？」

だよな〜

「神代、育成プログラムとは？」

「ああ、説明してなかったっけ？」

僕はインテリジェントデバイスの感情面から育てる方針なんだ」

…失敗例があつたからな…それにイレギュラーがある可能性があるし、細心の注意をしながらラインのメンタルを構築したんだよな

「感情の安定が確立してからの方が、デバイス自信が学ぶ意志を持っているから成長が早いんだけど…」

ダーリンは予想外だったな…色々な過程すつ飛ばしてるし…学び過ぎたか？

「あつ！！キョウ君、もしかして…」

「どうしたさくら？何か心当たりでも？」

「…リンちゃんは、はやてちゃんのリンカーコアをコピーして作製したから…それが原因じゃ…」

…ま、まさかそれは…

…思いっきりありえるぞ？

「ええ！？わ、私のせいなん！？そ、そんな事ない筈や！そうやるシグナム？ウィータ？ザフィーラ？」

いきなりお鉢が回ってきたはやては、否定しようとシグナム達に助けを求め視線を送るが…

「……うっ！……（サッ）」

「あゝ……その……（サッ）」

「……………（サッ）」

3人は目を反らした!?

「な、何で目反らすんや!?!うがー!?!?」

「お、落ち着けはやて!あくまでも可能性の話しだから!」

「そ、そつだよはやてちゃん!（可能性はとてつもなく高いけど）  
もしかしての話しだから…ね?」

「ちょ!?!さくらちゃん!?!副音声で何サラっと言ったん!?!」

「ほえええ!?!な、ナンノコトカナ?」

「ぐすつ…ええんやええんや…どーせウチなんか…」

ああああ!?!は、はやてがm s o o化してイジけてる!?!

「…ヴィーたちちゃん?さくらお姉様って…結構どSキャラなんです  
か?」

「なっ!?!おいリン!?!お前そんな言葉どこで覚えたんだよ!?!」

「えっ？ん〜：マリーさんが教えてくれました〜」

…あの人は何を教えてるんだ!?

「…悪い恭介、ちよっくら医務室行ってトドメ刺してくる…」

「…私も付き合っぞヴィータ…」

ガチャ：ボタン！

そう言いヴィータとシグナムは部屋を出ていった…

…マリーさん、自業自得ですが…ご愁傷様です

「あれ？シグナムとヴィータちゃんはどこに行ったんですかあ？」

「…リイン、とりあえずマリーさんから教わった事は忘れようね？」

「???何だかよくわかりませんが…ダーリンが言っならそっしますね」

…リイン、素直なのは良いが…ダーリンは止めようよ…

Side Out

おまけ

《…キヨウスケ、あの子の将来がとてつもなく不安なのですが…  
？》

…そりゃリインフォースも不安になるよな

…まあ、まだ成長期だから何とかなる…かな？

## シグナムさんの悩み

前回までのあらすじ…

ラインが無事に…かどかは微妙だが…とりあえず起動は成功しました  
ちなみにマリーさんはあの後どうなったのかは…うん、断末魔的な  
悲鳴が聞こえたのは気のせいだな。

…ただ帰って来たシグナムとヴィータは、何かやり切った感の笑顔  
をしていたな…

あ、ちなみにラインのメンタル面の育成をさくらに任せ（消去法で、  
このメンバーの中で1番マトモだった為）しばらく別荘内で平和的  
に過ごしていた…

…いた筈なんだけどな…

別荘内

キヨウスケSide

「ん〜！こんなにのんびり出来たのは久しぶりだな〜」

別荘内に設置してあるオープンテラスで、1人コーヒーを飲みながらまったりとしていると、そこへ…

「神代…」

「どうしたんだシグナム？」

シグナムが難しい顔をしてやってきた！

「…少し相談…といか頼みがあるのだが…」

シグナムからの頼み…ハッ!?

「…あ〜…模擬戦なら次の機会がいいんだが…」

せっかく久々にのんびり過ごしているんだから…ねえ？

「むっ…そうか…仕方ない…ではない!!」

「あれ？違ったのか？」

シグナムの頼み〓模擬戦の公式しか浮かばないんだが…

「コホン！ま、まあ模擬戦も確かに後ほど頼みに入るが…今回はだな…その…／／」

結局模擬戦かよ！？

だが…何だ？言いたい事は結構ズバツと言うシグナムが…顔を真っ赤にして俯いている！？

…こ、これはかなりレアな表情なのでは？

「か、神代！！わ、私と…こ、恋人になつてくれ／／！！」

……………はい？

…いや、また幻聴が聞こえるのは気のせいかな？

ズドドドドドド！！！！

「ちよつと待ったー！！！！！！！！」

どこから聞き付けたのか、はやてとヴィータが現れた！？

「おい！シグナム！！オメー何一人抜け駆けしてんだよ！！」

「…シグナム？そー言うんは、先ず正妻の私の許可を得てからにしてくれへんか？」



い、いきなり現れて何かとんでもない事言ってますか!?

「ヴ、ヴィータ!?それに主はやてまで!?!い、いえ!?!これは…  
/ /」

「私かて鬼やないんや!シグナムなら、シャマルに代わって3号に昇格してもかまへんし!…」

「まあ、もちろん不動の2号は私だかな!」

な、何か本人の意思とは関係なく…とんでもない発言してね…?

Side Out

### 医務室

シャマル・マリーSide

ピキーン!

「…ハッ!?!」

「………どうかしましたか?シャマルさん?」

「何かしら…?今、物凄く何かに負けたような…」

「はあ…」

「ま、気のせいだと思うし…じゃあマリーさん、シャマル印の特製お粥です！」

「これを食べて早く元気になって下さいね」

「シ、シャマルさん…ありがとうございます！！本当にシャマルさんにはお世話になりっぱなしで…先程もシャマルさんに回復魔法掛けてもらわなかったら…」

「いえ、医者を目指す者として当然です。でも、シグナムもヴィータちゃんも…部屋に入ってくるなりいきなり襲ってくるなんて…マリーさん？何かしましたか？」

「い、いえ…まったく心当たりがなく…」

「そうですか…あ、冷めちゃわない内に食べちゃって下さいね」

「あ、はい！いただきます…パクッ」

……………この後、医務室で起きたさらなる惨劇は…想像にお任せします…

Side Out

キョウスケSide

はやてもヴィータも何かトンデモ発言していたが…

「ま、待って下さい!?!?ご、誤解です!主もヴィータも落ち着いて下さい!?!?」

「誤解!?!?!?」

ん?!?誤解って?

「…どう言う事や?説明してくれるんやろ?」

「は、はい…実は…私が通っていた剣道道場の師範代の息子が…ど  
ういう訳か私と付き合いたいと言い出してきたのです…勿論私は断  
りましたが…ん?」

「「「……………」」」

「あの…主はやて?どうかしましたか?」

「…いやな、シグナムからそんな恋バナが聞けるなんて意外やな  
って」

「…ああ、色恋沙汰に1番遠そうなシグナムからそんな話しが聞け  
るって…明日は槍が降んな…」

確かに意外だけど…言い過ぎなんじゃ？

「はは、まあはやてもヴィータも…シグナムだって魅力的な女性なんだから。そーゆー話しが出てもおかしくないだろ？」

シグナムもかなりの美人だからな  
世の男もほっとかないのも頷けるし…

「なっ／＼！？な、何を言っている！？か、からかうな神代！！？」

「えっ？別にからかってない…い…」

ジイイイ…

な、何か背後からエクスカリバーで突き刺すような視線が…！？

「ど、どうした？はやてにヴィータ？」

「「……………やっぱキヨウスケ君（恭介）は胸かなん！？」

……………な、何でそんな話しになる！？

「こっとなつたら…ヴィータ！！私らも巨乳になって対抗するで！！  
年齢詐称薬を！！」

「おう！！了解だ！はやて！！」

って！？だから何でそーなるんだ！！？

つかまだ年齢詐称薬持っていたのか！？

「ふっふっふっ…待っててなキヨウスケ君…すぐにヴィータと一緒に巨乳になって、18禁小説みたいなお奉仕を…」

「って！？何だそのアブナイ発言！？」

「…恭介、大丈夫だ…はやてに教わった通り噛んだりしねーから…  
／／」

「おい！はやて！？ヴィータに何を教えた！？」

「というかそーゆー知識はどこから仕入れるんだ！？」

「シヤマルがこっそり買った雑誌や…いや〜アレは刺激的なレポリユーションやった…／／」

「シヤ〜マ〜ル〜ル〜ル〜！！」

「後でキツチリなのは式 O H A N A S H I してやる！！」

「つか！！それより先ずはシグナムの相談だろ！！」

「…チツ」

「何故に舌打ち！？」

「とつかそつちが本題だろ！？」

「ゴホン！…それではシグナム、続きを聞かせてくれるかな？」

話しの腰を折ったから…何とか修正しないと…

「あ、ああ…その相手が断っても付き纏って困っているのだ…」

「なんだあ？そんな事なら何時もみてーにぶった切れればいいじゃねーか？」

「こらヴィータ、そんな血い見るような物騒な事言ったらアカンよ？  
…それにここは、シャマルの料理を相手に食べさせれば平和的に  
発や…！」

…いや、どこが平和的か聞きたいんですが…

「…ヴィータ、何時私がそんな事をした？というか私はお前の中で  
どんなイメージなんだ！！？」

「んとだな、イメージとしちゃ…【桃色デストロイヤー】【炎のバ  
ーサーカー】【蝶のように舞い蜂のようにブツ刺す】そしてブルド  
ーザーの様に通った後はペンペン草1本残さない】後は…」

「なんだ！？そのどこかの花の名前の紅い女性型SPロボットみた  
いな通り名は！？」

…シグナム、何でそのコアなマニアにしか解らないネタを知ってい

る!?

「と、とりあえず!話しが進まないから苦情は後で...で、シグナム続きを...」

「う、うむ...私としてはお世話になった人の息子という手前、穩便に事を運ぼうと思ひ...その...既に心に決めた人が居ると伝えたのだが...相手がその男に合わせてほしいと言ひ出して...」

...あゝ...なるほどなゝ

「つまり、僕にその恋人のフリをしてほしいと?」

「あ、ああ...そうしないと相手も諦めてはくれんしな...」

ま、そーゆー事なら...

「分かった、そーゆー事なら協力するよ」

「そ、そうか?恩に着る...//」

...ん?シグナム、少し...?

「...何やシグナム、嬉しそやな...?」

はやてが鋭くツッコミ入れたなゝ  
確かにシグナム嬉しそやだ...

「い、いえ!?!こ、これは...そう!これはようやく相手を何とか出来るからでして...決して神代と恋人になれるからという訳では...//」

／  
」

「…オイシグナム、あくまでも恋人のフリなんだかな!? 恭介に変なマネすんなよ?」

…ヴィータも敏感に察知し殺気混じりで確認しているが…  
あくまでもフリなんだし…それに変なマネって…

「も、もももちろんだ!!! 騎士の名に掛けて変な事…うう／／

…いや、そんな事に騎士の名を掛けられても…ねえ?

「(……あ、あやしい…これは…)」

「ん? どうしたはやて? ヴィータ?」

何やら2人、難しい顔で考え込んでいるが?

「い、いや!? 何でもないで? なぁヴィータ?」

「あ、ああ! 何でもねーぞ?」

…気のせいだったか?

「じゃあシグナム、僕は何時その人に会えばいいのかな? 色々打ち合わせしとかないといけないし…」

前もって打ち合わせはしないとな

「ああ、日取りの方は…」



こうして僕はシグナムとの打ち合わせをしたのだった…

Side Out

「…ヴェータ、分かつとるな？」

「…勿論だはやて…」

「」「」っその後を尾行する（んや（！！）」」「」

知らない事は不幸の始まり!?

前回までのあらすじ…

シグナムに言い寄っている男を何とかしてほしいと頼まれ、僕はシグナムの恋人のフリをして会う事になりました…

キョウスケSide

そして決戦?当日、僕はシグナムと共に(僕は年齢変化済)男と待ち合わせた場所の喫茶店に向かった…

「…済まないな神代、面倒をかけてしまって…」

「まあ、気にしないでいいよシグナム…お、ここか」

談笑している内に喫茶店に着いたようだ…

「神代、先ずは私1人で行く…」

「ん…わかった。じゃあ待っているから出番が来たら呼んでくれな  
？」

「ああ…」

ガチャ

「いらっしやいませー」

…シグナム、えらい気合い入ってるな…まあストーカー1歩手前の  
相手だったからな…

一般人だから下手な真似は……ま、バレなきゃ問題ないか？

「（神代、済まないが来てくれ）」

おっと、早速出番か…

ガチャ

「いらっしやいませー。お1人様ですか？」

「あ、すみません 知り合いと待ち合わせしているので…あ、あそ  
こです」

指差す席には…シグナムと例のストーカー男がいた…さて、こっからが本場だな…

Side Out

??? Side

キョウスケ君らからは離れる事、数メートル…今私たちはキョウスケ君らにバレへんように尾行中や!

「…はやて、2人とも中に入ってたぞ?」

ふむ…ここまでは予想どおりやな…

「私も中に潜入するで!」

その前にヴィータ!例の年齢詐称薬を!これで変装は完璧や!」

「あの…はやてちゃん…?年齢詐称薬で成長しても…キョウスケ君はその姿は既に知っているのでは…」

「その点は抜かりなしや!その為に…じゃーん!どや?これを装備すればもう完璧にバレないで〜!」

私に取り出した装備…それは…

「は、はやてちゃん！？そ、それは！？」

「そつやシヤマル！！かつてシヤマルが愛用していた…変装用サン  
グラスや！！」

「おお！！何よくわかんねーケド…すげーな、はやて！！」

「そやる？もつと褒めてええよ ちゃんと人数分あるから安心せえ  
な」

「…あの…私が言うのも何ですが…何でサングラスなんですか？は  
やてちゃんの年齢なら、もつとオシヤレなメガネの方が似合うのに  
…」

「そんなん決まっとするやないか？変装にはサングラスをつてのが八  
神家の伝統やからや！」

「そ、そんな伝統いつ出来たんですか！？」

「いや、前に石田先生にシヤマルがサングラス掛けて怪しさ大爆  
発の変装しとつたて聞いてからや」

「私のせい！？あの黒歴史が！？」

「いや、シヤマルは分かっとなるな 主として誇りに思うで」

「そ、そんな事に誇らないで下さい…それにあれは緊急だったので  
…つう、今考えると恥ずかしいです…／／」

恥ずかしがりやさんやな〜シャマルは〜

「所でさくらお姉様、ダーリンとシグナムは何してるんですかあ？」

「えつとね…シグナムさんに迷惑かけている人に注意しに行ったんだよ？」

「ええー！！人に迷惑かけたらダメですのにー！！何でそんな事するんでしょっ？」

な、なんや！？この純粋な生き物は！？

「うっ…リン！ピユアや！ピユアピユア過ぎるでー！！  
薄汚れた私には眩し過ぎるでー！！」

「だ、大丈夫だ！はやてだつて十分ピユアだかなー！！」

「うっ…ありがとなヴィータ…」

「…ところではやてちゃん？お店の中には入らないの？」

……………ハッ！？し、しまった！？スツポリ抜け落ちてもつてた！！

「さくらちゃん！それ早よう言つてな！！こっしちやおられへん！！  
！早速入るで！！」

そうと決まれば先ずは詐称薬を…ゴクツ！

ポオンー！！

「うわあ！！はやてちゃん、大人です〜」

「どや？リイン？このナイスバディーは？」

「はい！はやてちゃんおっぱい大きいです〜」

「ええ子やな〜リインは あ、リインは私の胸の谷間に隠れとつてな？」

「はいです！！」

「ほええ！？は、はやてちゃん…大胆なんだね…」

「いや〜、ホントはキョウスケ君のを挟みたいんやけどな〜／＼」

あ〜、早くキョウスケ君と大人な関係に…／＼

やつぱ外掘りから埋めて行くんが効果的やな…

「はやてちゃん？ダーリンは挟むと喜ぶんですか？だったらリインも挟みたいです」

「そかそか じゃあリインも一緒にキョウスケ君にしてあげよな〜」  
リインにも年齢詐称薬飲ませれば…フッフッフ…今回の事でシグナムも本格的に加入して…八神家総攻撃でキョウスケ君を攻めれば…  
確実に墜ちるで！！

「フッフッフ…アーハッハッハ！！」

これで…そうこれでは…新世界の神になるんやー!!

「ほえええ!?!」

は、はやてちゃん!?!?それD A T N O Eみたいな立てたら  
ダメなフラグだよ!?!?それより早くキョウ君の後を!?!」

…っと、そやった!!

「コ、コホン!じゃあ…急いでこっそり突入や!?!」

「「「「「おー!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」」」」」

S i d e O u t

「なあリイン?私の胸はどうだ?」

「はい!ヴィータちゃんもとっても大きいです!」

「そ、そか!よし!大丈夫!私も大きいんだ!?!」

…何かを確認し確かな自信を持つヴィータだった…



キョウスケSide

さて、先ず思う事は…ナニコイツ？

「彼がシグナムさんの彼氏…ですか？」

「そうだ…これで納得してくれたか？私には貴方の思いには答えられない」

シグナムはこれでもかとバツサリ切り捨てたのだが…

「いや、シグナムさんにお笑いのセンスがあるとは

…ただ、僕は関西系のお笑いはちよつと…」

つてオイ！？僕がシグナムの彼氏だとお笑いなのか！？

…ん？今何か…はやての「関西のお笑いバカにしくさつてー！！」  
つて電波が聞こえたようか…？

「（なあシグナム、この男…本当に剣道道場の師範の息子なのか？  
…言っちゃ何だが…チャラくね？）」

そう！とてもじゃないが…剣道に取り組んでいる人には見えない！  
！というか、礼節のカケラも見当たらない！？

「（…残念ながら確かに師範の息子だ…ただ聞いた話だと、幼い頃は剣道に打ち込んでいたのだが…いつしか剣道を辞め、道場の後

を継ぐのも拒んだらしい…今は何かの会社を経営しているらしいが…師範も自分の代で道場がなくなるのかと嘆いていたな…ただ剣道の實力はかなり高いらしい…もっとも一般的なレベルだが…」

詳しい解説ありがとうシグナム！

…ま、とりあえず…

「…あの、これ以上シグナムに付き纏うのは止めていただけますか？彼女は迷惑しているので」

平和的に話してみると…

「…フン！ガキが大人の話しに口出しするなよ！！あああ？」

…何か脅されているんですが？

…確かに年齢変化しても何故か18〜20歳位しかなかった…で、相手の男も20代半ば…

見た目年齢的には…僕<シグナム<男って年齢順になるのだが…

…よし、とにかく殺ろう！！

「さあシグナムさん！こんなガキは放って置いて、僕と…」

男の手がシグナムに触れようとする寸前で！！

バシッ！！

僕はその男の手を払いのけた！！

「…おい、小僧…いい度胸しているな…」

居るんだよね〜　こーゆーバカな人種…

「…シグナムさんから聞いていると思うが…僕は幼少から剣道の英才教育を受けていてね…君みたいな雑魚なんて簡単に潰せるんだ…」

「…ふーん…で？」

脅しているんだろうが…当然、はっきり言って全く怖くない！！

「ほう…痛い目を見ないと分からないようだな…いいだろう！！君がシグナムさんに相応しくない事を教え「ん？君はキョウスケか？」って誰だ！！」

勘違いダメンズの戯言を遮って声を掛けてきた人物…それは…

「恭也さん！？それに忍さん！？」

バカップルが現れた！？

「へえ…キョウスケ君のその姿が、前になのはちゃんが言っていた…」

…そーいや忍さんにはこの姿は初見なんだが…よく分かったな？

「あらキヨウスケ君、そんなの女の勘よ」

勘かよ!?

「…それより何かお取り込み中かしら?」

「え、ええ…まあ、忍さん達は何で此処に?」

「あら、喫茶店に来ているんだからお茶に決まってるじゃない? ねえ? 恭也?」

「ああ…」

つまりデート中ですか

「おい! テメーら! 人を無視すんじゃない!」

あ、まだ居たのか?

「キヨウスケ、彼は君の知り合いか?」

「いや、シグナムのストーカー。ちょうど僕に痛い目を見せてくれるって言った所」

勿論返り討ち確定だけどね

「そ、それは…何と無謀な…」

おい…どっちの味方だよ!?

「ちょっと待つて恭也！その前にストーカー！？」

「ええ、平和的にこれ以上シグナムに付き纏わないようにお話して  
いたんですが…」

こーゆー輩はホント黒光りするG以下だよな

「待つててシグナムさん！今、月村家の総力でその最低男を社会的に抹殺するから！！」

…社会的につて…まあ別にいいか

「こ、小娘！！てめえ…黙って聞いてりゃ好き勝手いいやがって！  
！第一お前みたいなお娘に何が出来る！！」

うわっ！？コイツ終わったな…というか、一応会社経営してるんだ  
から…有名な月村の名前位知らないのか？

ブチッ！

ん？何かがキレる音が…？

「貴様…忍に向かつてのその罵倒…キョウスケ！構わん！コイツを  
物理的に潰せ！！」

お、落ち着いて下さい！？恭也さん！！

「ほう…こんなガキにやられる程、剣の腕は鈍ってないんでね…い  
いだろう！お前に剣道をの厳しさを教えてやるよ…実践でな」

ああ…舌なめずりなんかして…三流以下だな…こんなヤツに付き纏われて…シグナムも不幸というか…

「なら場所はウチの道場を使うといい!」

…にしても恭也さん?何か勝手に話し進めてません?

「ん?お前の家も剣道やっていたのか?まあどうせ大したことない流派だろうがな」

…コイツ本当に終わったな…

しかも高町家の道場でって事は…御神流の使い手の士朗さんも居るんだよね…

「か、神代…何か話しが妙な方向に進んでないか?」

「まあ、結果的にはフルボッコにするつもりだったし…いいんじゃない?」

「…全然穩便ではないのだが…仕方ないか…師範には後日謝罪するか…」

そーいや全然穩便じゃないな…ごめんシグナム…でも後悔はしてないが…!

まあ、多少予定と違ったが…こうして何故か高町家の道場で、このストーリーカー男と決闘する事になってしまった…

「キョウスケ君!!とりあえず後始末は任せて思う存分に殺ってい

いわよ 最終的には戸籍すら消しちゃうから問題ナシよ」

…こえーなオイ…

Side Out

おまけ

一部始終を見守っていたはやて達はというと…

「いや〜 これは思わぬ展開やな〜」

「ふん！恭介があんな奴に負けつかよ！！寧ろ勝負にすらなんねーし！！」

「まあキヨウスケ君だから手加減は…しないわね〜」

「キヨウ君って身内には甘々だからね〜。その身内に何かあった時のキレっぷりは…」

「あ〜そやな〜 前にそれで恭也さんが犠牲になったんやっ たな…」

「あ、はやてちゃん！…ダーリンがお店を出ますです！…」

「おっと！…ごうしちゃんおられへん！…場所は分かったんやから先回りや…！」

「」「」「おー…！…！」」「」

チーン

「お会計4280円になります」

「」「」「」「い、意外に高っ！…！？」」「」



知らない事は不幸の始まり!?(後書き)

とうとう…とうとうこの日がきた (。。(

「どうしたんですか?作者さん?」

お、これは最近新加入しかリインさん!

実は…

「…ゴクリ…じ、実は…?」

第2次スーパーロボット大戦OGの発売が決定したんですよー!!

いや〜 どれだけこの日を待ち望んだか!!

「そうですか〜、よかったですね 作者さんが嬉しいとリインも嬉しいですー!」

ありがとうリイン!ー!いや〜 PS2の準備をしないと…

「…あれあれ?この【すうばあるぼつとたいせん】って…Play Station3専用って書いてあるですよ?」

…なん…だと…!?

「もちろん作者さんは持って…っでど、どうしたんですか！？作者さん…!?」

……も、持ってない……orz

「はづう…？そ、そうなんですか！？えっと…そ、そうです…！リインにゲームを差し込めば!?」

いやいや!?ファミ通連載していたTERA-Oじゃないんだから!?

…はあ発売までまだ日にちあるし…どうするか考えるか…

「リインもお手伝いしますから一緒にがんばりましょう…！おーです…！」

はは…そつだねリイン

我がネタ技に自重なし!?

前回までのあらすじ…

シグナムに付き纏うストーカーと対決することに!?

…あれ? なんてこうなった?

## 高町家・道場

キョウスケSide

さて、現状を皆さんに伝えると…

「さあハンデをやろう!どこからでもかかって来たまえ!」

…えーと、木刀を持ったピエロが僕を挑発しています…

ちなみに審判は恭也さん、ギャラリーにシグナムとカメラを持った忍さ…えっ？

「…あの、忍さん？何故にカメラを？」

「えっ！？勿論ずかのコレクションに加えてあげようなかって  
」

何かサラッと怪しげな事言ってなかったか！？

つかコレクションって事は…複数はあるって事だよな…はあ…僕に肖像権…ないよな

「お喋りとは余裕だね…それとも馬鹿にされてるのかな？」

…そりゃ両方だな。コイツ相手は余裕だし馬鹿にもしてるし

さて…勝てる事は確定しているが…アレでも一応は…嫌なことに一応、一般人だから魔法は控えた方がいいよな…剣撃だけで再起不能にしないと

…となると…

「さあ！どこからでもかかって来たまえ！！」

あっそ…じゃあ遠慮なく…

「…それでは…ハッ！！」

ダンッ！！

僕は一気に加速…といっても瞬動ほどではないが…間合いを詰め…

バキッ！！

「なっ！？」

相手が構えていた木刀を弾いた！！

…よし！ここぞで…！

「…飛天御剣流…」

グンッ！！

僕は弾いた勢いそのまま身体を一回転させて…

「…龍巻閃！！」

ドカッ！！

遠心力によって威力を倍増させた一撃を懐に叩き込んだ！！

「ぐは…っ…！！」

…一応、手加減してんだから…まだ倒れるなよ？

「飛天御剣流…奥義…」

「ま、まてっ…まいつ…」

相手が何かを言っているようだが…ここは敢えてスルー!!

…僕と出会った事を…地獄で後悔しやがれ!!

「…九頭龍閃っ!!」

ドカアアッ!!!

「ぐはあ!!!」

神速の斬撃を9つ同時に叩き込む!!!…そして…

ダーンッ!!!バタッ!!

相手は壁に吹っ飛び、崩れ落ちるように倒れ込んだ…

…ん?戦闘シーンが少ない?

だって…ねえ…多少腕が立つとはいえ…モブキャラ相手だからね  
サクッと倒さないと

「…ハッ!?し、勝者!神代!!」

ア然としていた恭也さんが再起動し、勝ち名乗りを挙げてくれた…

「お、おい!確かに潰せとは言ったが…アレは生きているのか?」

…ん?そりゃあ…

「安心して下さい恭也さん…みね打ちですから」

それに死なないようにネタ技を使ったんだし…

「神代…木刀では…みね打ちと言っるのは意味がないのでは？」

……………おお！！気付かなかったな

「ん…ま、粉碎骨折程度だから大丈夫でしょ？」

「いやいや！粉碎骨折はダメだろ！？…ハア…師範には菓子折りでも持って行った方がいいな」

「あはは…ま、まあでも…これでもうシグナムに付き纏うって事はしなくなると思っよ？」

「ん？なぜだ？」

「そりゃこれだけ身体も心もスタボロにしてやったんだが…今後シグナムに付き纏わったら…またこうなるって恐怖心でトラウマは確実だな」

「うっ…それはそうだな…明らかにオーバーキルだろうが…」

そんな事ないぞ？止めの天翔龍閃を使わなかったんだし

「あら、開始数秒で完全決着…あゝあ、もう少し遊んであげてもよかったんじゃない？」

「あ…忍さん？何か不機嫌ですか？」

「そりゃ〜ね…何たってコレクション用の画像数が少なすぎて…」

うん…早めに決着つけてよかったな…

「まったく…これじゃすずかの夜のオカ…じゃなくて！コレクションがあまり増えないわ…」

…ヲイ…今あきらかにスルーしちゃダメな爆弾落としかけなかったか！？

〜  
〜

と、忍さんの携帯が鳴った！

「もしもし…ええ、例の件ね…そう 判ったわ じゃあ」

例の件…って…何か聞いたらいけないような気「忍、例の件って何だ？」って恭也さん！？何サラつと聞いてるんです！？  
怖い物知らずもイトコだな…

「え？そこに転がってるゴミの会社をウチが吸収して、速攻でソレを解任してクビにしたのよ？」

…乗っ取り！？この短時間で！！？

…恐るべき月村家の影響力！！

「まあ武士の情けで戸籍は残しておいたけど…」



…さ、さすがに自重したのか？…乗っ取りって時点でやり過ぎじゃね？って思うのは僕だけ？

「しかし、流石にやり過ぎだったのでは…」

あ、よかった！シグナムもそう思っていたか…

「あら、ちゃんと許可は貰っているから大丈夫よ？」

…へ？許可…？誰から…？

「あ、そうそう！シグナムさん」

「は、はい！？何でしょう？」

「後であなたの通っていた道場の師範の人が正式に謝罪するって言うていたわよ？」

「なっ！？師範が！？」

「ええ、何でも前から息子の素行の悪さが目に余るって事で何とかしようとした所に私がシグナムさんの事を話して…」

…っていつの間に！？つか許可ってもしかして…

「それで『会社乗っ取っていいですか？』って聞いたら『おお！！遠慮はいらん！存分にやっして下さい！』って」

…な、なんというか…

「シグナム…お世話になった師範って…」

「…真面目で礼節を重んじる人…だった…はず…?」

…その人、何と言うか…まあいいや…

「…とりあえず、菓子折りは別にいいかも…逆に息子のお詫びで何か貰いそうだし…」

「…ああ」

さて、後は…転がってるコレはどうすつか？

「ああ、後始末は私達がしておくから2人は帰っていいわよ？」

後始末って…いいや…考えたら負けな気がするし…

「じゃあお言葉に甘えて…行こうかシグナム？」

「あ、ああ…」

シグナムも何か微妙な表情してるけど…多分命だけは保証…出来るよな？

「とにかく…僕らはこれで失礼します…」

「またねキョウスケ君 今度は家に遊びに来てね？すずかも喜ぶし…何ならお泊りもOKよ？」

「あはは…か、考えておきま」行くぞ神代!!!グズグズするな!!!」

って痛くて！！ちょ！？引っ張らなくても分かってるから！！」

急にシグナムが僕の腕を強引に掴んで（かなりの握力で！！）引っ張ってる！？

「…フン！！」

…しかも何故か機嫌悪い？

まあ、こうして僕とシグナムは高町家道場を後にした…

後日、師範がシグナムに菓子折りを持って来て…

「息子を1から鍛え直し、あの腐り曲がった根性を叩き直しておる所じゃ！！！！！！」

と豪快に笑いながら言っていた…

ま…息子の再教育と後継ぎが出来そうで結果オーライ…か？

「所で…息子を鍛えようと竹刀を持たせると…えらく錯乱し暴れるので鍛えるのも一苦労なんじゃが…何か知っておるかの？」

…あ…やはりトラウマになったか？

道場からシグナムに引っ張られるように出てきた僕たち…

「さて、シグナム…これからどうしよっか？」

当初の目的は達成されたからな

「そうだな…」

シグナムも考え込んでるが…あ、そうだ！！

「せっかくだから…このまま遊びに行こうか？考えてみたらシグナムと一緒に遊んだ事とかないし…」

いや、模擬戦は…ノーカンだよな？

「わ、私とか！？」

「そうだけど…嫌だったら別に「いや！！全く問題ないぞ！！！」って…そ、そうか…というかシグナム…顔が近いって…」

その距離約数センチ！？

「うっ…す、スマン…／＼」

まあ別にいいけど…何でシグナム顔が赤いんだろう…？

「で、どこか行きたい所とかあるかい？」

シグナムのリクエストがあるなら叶えてあげないとな

「そうだな…だったら一つお願いが…」

「ん？何だい？」

「あゝ…その…何だ…ぷ…／／」

…ぷ？

「…ぷりくら…というのを…一緒に撮ってはくれまいか／／？」

……よもやシグナムからプリクラという単語が出て来るとは予想外だ…

「…何やらバカにされているのは気のせいか？」

「そ、そんな事ないよ！！？だ、だから街中でレヴァンティン抜こうとしないで！！？」

…シグナムも読心術出来たんだっけ？

…つかつな事は考えないようにしないと…

「ま、まあとにかくプリクラならゲームセンターに行こうか？」

「あ、ああ…そうだな…／／」

…???だから何で顔を赤くしてるのさ？

…風邪？

Side Out

??? Side

いや〜…私もビックリや!!

まさかあのシグナムからまさかのプリクラ撮ろう発言!!

「…あ、そういえば…」

「どないしたん？シャマル？」

「確か…前に読んでいた雑誌の占いに【異性と一緒に撮ったプリクラを持っていると両想いになる】って書いてあって…」

なっ!?!それは初耳やで!?!

「…まさかシグナムのヤツ…それを狙って…あのやろっ…もう当初の目的は済ましてんだろっが!!」

「ヴ、ヴィータちゃん!!?」

…ん?そういえば…

「なあ皆…キヨウスケ君と2ショット写真って…持つとる？」

「「「「」………あ「「「「」

という事は…

「キ、キヨウスケ君との初の2ショット写真Get出来るんは…シ  
グナムううう！！？」

クツ…盲点やった！！ キヨウスケ君とのあらゆる初めては私が奪  
う予定やったのに！！

「さくらお姉様もダーリンとの写真持ってないんですか？」

「ほえ！？うーん…考えてみたら持ってないかな？

いつも一緒に居るから」

…それはそれで羨ましいで！！さくらちゃん！！

くっ…今日ほどデバイスになりたいと思ったことはないで！！！！

「あ、はやてちゃん！！キヨウスケ君達が移動するわよ！！」

…本来なら乱入して阻止したい所やけど…後々の事を考えたら…う  
う…

「考えててもしやあない！！皆！！尾行続行や！！！！」

「「「「」おー！！！！！！！！「「「「」

…シグナム、帰ったらO H A N A S H Iや…

S i d e O u t



## ジューンブライド(仮)の誘い

前回までのあらすじ…

シグナムにストーカー紛いの真似をしていた奴をボッコボコにし、余った時間でシグナムとプリクラを撮ろうって話しになりました…

まあ…後にこれがあんな展開に発展するとは…orz

キョウスケSide

早速シグナムとプリクラを撮る為にゲームセンターに来た僕たち

「ゲームセンターという所は…色々とあるのだな…」

と、初めて見る光景に驚いているシグナム!

「まあ、ここは結構最新機種とかすぐ入るからね」

あ、ちなみにこのゲームセンター、はやてとヴィータと一緒に来た

事があるから。」

2人とモクレーンゲームによくハマってるよ。」

なんとな〜く自分に良く似た魔砲少女系のキャラクターを見つけては…それを狙って数千円掛けてたからな…資金提供は僕なんだけど…

「そ、そうなのか!? 主はやてはともかく…ヴィータがこーゆー場所に来るとは…」

まあ…ヴィータってイメージ的にアウトドアってカンジするからね〜

「ま、とにかく早速撮ろうか?」

「あ、ああ…よろしく頼む…/」

さてと…プリクラは何処にあるんだ…あれ?

「どうした神代?」

「ん? ああ、プリクラはどうやら別館に有るみたいだ…奥の方に通路があるから行ってみよう!」

しかし…何でプリクラだけ別館なんだろ?

と、いう訳でプリクラ機が置いてある別館にやってきたのだが…ドアには看板が…

「え…何々【当プリクラコーナーは女性専用となっております。つてそうなん!?!?」

まさかここに来て女性専用コーナーとは…どつりで中は女性客ばかりなんだ…しかし、これだとシグナムとプリクラは撮れないな…

「仕方ない、違う店に行こうか？」

少し遠いが…まあ仕方ないよな

「さて神代、まだ続きが書いてあるぞ？」

えっ？あ、ホントだ…えつと…

「【なお、男性の方はカップル限定で入店可です】……………」

な、なんじゃそりゃー!!?!

「なるほど…なら我々は問題ないなノノかかか…カップルのように振る舞えばいいのだし…ノノ」

ちよ!?!?シグナムさん!?!?

「べ、別にここにこだわらなくても別のゲーセンに行けば普通に撮

れ「…私とカップルの振りは不服なのか？」い、いえ！？わ、分かったから殺気を抑えて！！」

…はやてやヴィータと違い、涙目コンボじゃなくストレートに殺気飛ばすって…まあらしいと言えはらしいが…しかし…中を見た感じ、他のカップルも居ないようなんだが…

…この男率0の女の子だらけの空間に男の僕が1人が入るの？

「で、では行くぞ！！」

そう言うとシグナムは僕の腕を組んで…つて／＼！！？

う、腕にとてつもなくて柔らかい感触がああ！！？  
し、しかも腕が谷間に挟まってええええ！？

「ちょ！？し、シグナムさん！？む、む…」

胸が当たってるを通り越してとんでもない状態になってるんですが  
！？

「…こ、こうするの…そのだな…神代と…恋人同士のように見えるの…／＼」

な、何この何時もと違うシグナムは！？

「ま、まあ…そうだけどさ…／＼」

「なら問題ないな！」

いやいやいや！？かなり問題あるぞ！！？

ジイイイ…

…ん？何かゲイボルグで串刺すような…妙な視線を感じるが…

ああ！やっぱりシグナムみたいな美人な人は目立つのか…？

「さあ！いざ決戦の場へ！！」

…今更だけど…シグナム？プリクラってちゃんと何か分かってるよな？

S i d e O u t

???? (はやて) S i d e

…キヨウスケ君達が、私らがよくデート(はやて個人の主張)に使うゲームセンターに入っていた…あれ？そーいえばあのお店ってプリクラの機械置いてへんかったような…？

「あ、はやてちゃん！！キヨウ君とシグナムさんが奥の方へ行っちゃうよ！？」

「奥の方？…なあヴィータ？あのゲーセンって奥に何があったん？」  
私とヴィータは、主に出入口付近にあるクレイニングゲームに熱中し  
るからなあ…

「…そーいや奥に行った事ねーな…」

…まあヴィータも私と行動範囲は同じやからな

後はキヨウスケ君がドリフトが売りな頭文字がDなレーシングゲー  
ムをやつとるのを見とる位やし…

そーいえば…そのレーシングゲーム中のキヨウスケ君を見とる時の  
ヴィータの顔色が微妙で「…イナーシャル…リフティング…」って  
口元を引き攣らせて呟いたけど…何でやる？

「あ、はやてちゃん！どうやら奥にある別館にプリクラ専用ブー  
スがあるみたいですよ」

は… 別館丸々プリクラ専用に使つとるんか… えらい力の入れ  
ようやな

「よっしゃ！私らも行くでー！」

「「「「おーー！…！」」」」

と言う訳でキヨウスケ君らの後をついていき別館入口についたんや  
けど…

「……なあヴィータ？私の目えおかしくなったんかなあ…シグナムの胸にキヨウスケ君の腕がこれでもかという位に挟まっとなるように見えるんは…？」

「……大丈夫だはやて…私も同じように見えるから…」

「そっか…見間違えでもなく幻想でもなく、やっぱりそうなんや…」

…シグナム？そーゆーんは先ずは主であり正妻である私の許可を取ってからやる…？

「…よし、その幻想、私がぶち壊したる…！」

私が某不幸少年みたいな台詞を言つとると…

「あらあら…シグナムも大胆ね。私もシグナム程じゃないけど形と張りはいいから…キヨウスケ君にしてみようかしら」

「…うう…いいなあシャルさん…私は…あんまりだし…はうう！  
！」

「さ、さくらお姉様！元気出して下さい…！」

「くそっ！あの牛子子女は…！わ、私だって今の姿ならあの位は出来んだぞ…！／＼」

…シャル…確かにええ乳しとつけど…今の私かて…十分ええおっぱいしとるんや…！

…さくらちゃん…後で慰めてあげな…

「ん？なあはやて、恭介達に誰か話しかけてんぞ？」

なんやて！？

ホンマや…何や大人な女性やけど…ま、まさか逆ナン！？

…まあそれならシグナムが瞬殺するやろ…なあ

「あつ！？はやてちゃん！！ダーリン達がお店に入らないであの知らない女の人の後を付いていつてるです！！」

ちょ！？プリクラはどうしたんや！？

…こつなったらまたまた尾行続行や！！

S i d e O u t

遡る事数分前…

キヨウスケ S i d e



僕とシグナムがお店に入ろうとすると…

「あの〜…ちょっといいですか？」

「はい？」

声を掛けて来たのは…20代前半位の女性だが…誰？

「何でしょうか？」

「あのですね…私こういう者なんです…」

女性が名刺を出して来たので受け取って見てみると…

「…【ブライダル専門店 フェアフォーチュン】？」

…ブライダルって事は結婚式関係のお店の人…？

そんな人が僕らに一体…

「えっと…いきなりで不躰なのは十分に分かってるんですが…実はお願いがあるんです…」

…ホントいきなりだな…

「実はウチのお店に飾る写真を今から撮る予定だったんだけど…新郎新婦役のモデルが急に来れなくなって…しかも写真を撮る機材やカメラマンの人も今日しか都合がつかなくて…どうしようか途方に暮れて居た時に貴方達を見つけて…」

…この話しの展開…何か嫌な予感しかしないんだが…

「お願いします！！写真のモデルになつてくれないかな？ あ、勿論バイト代は出すわよ？お店もすぐ近くだし…貴方達みたいな美男美女のカップル、滅多に見つからないし…というか、頼んだモデル以上のクオリティなのよ！！」

…やっぱり…そーゆー流れか…

「…神代、新郎新婦と言うのは…結婚した男女の事を言っただったのだな？」

「えっ！？ま、まあそうだけど？」

何を当たり前な事を確認してるんだ？

「…あの、私と神代がモデルという事は…神代が新郎で…わ、私が新婦に…？／／」

「え？ええ、そうよ

…ウェディングドレス着れるわよ？」

着れるわよ？…ベルカの騎士であるシグナムがウェディングドレスで釣られる訳…

「この話、お受けしましょう…！！」

…って釣れた！？しかも結構あっさり！？

「あ…ありがとう！！助かるわ…！！」

「ちょ！？僕の意見は！！？」

「なに、同じ写真なら専門家に撮ってもらった方が得ではないか？」

なにそのMOTTAINAI精神に似た考え！？

「（そ、それに…神代と…一時とはいえ結婚気分を味わえるのも…  
／／）」

…というか…モデルって事は…

「…ちなみに撮った写真はどうするんですか？」

「えっ？勿論店頭飾るわよ？」

大丈夫、貴方達ならベストカップル賞だって狙えるわよ？」

別に狙いたくもないんだが…じゃなく！！飾るう！！！！？」

…マ、マズイ…もしそんな写真がはやてに発見されたら…いや、この場合はなのの方がヤバさ100倍だ…アイツなら「乙女は黙って…スターライトブレイカー」って濁った目をしながらぶっ放しそ  
うだし…

よし、ここは丁重にお断りし「さあ行きましょう！！もうスタッフも準備万端だしね」って！？」

「ま、待って下」はい、では参りましょう！！」ってシグナム！？

「ん？何だ神代？早くいくぞ！！」

ってこれは…既に外堀は埋められた!?

《(マスター、諦めが肝心ですよ?)》

…インフィ、久々の登場だと思ったら速攻で死刑宣告!?

《(…作者が本気で忘れていたんですよ…まったく私が居ないし間にまた新しくリインフォースの後継機が出来たようですが…ますます私の出番が…ブツブツ…)》

い、インフィニティ…何気に苦労してんだな…

「神代!では行くぞ!」

「じゃあ着いて来て下さい」

僕はシグナムに引っ張られるように強制連行されてしまった…

ヤバイ…今はこっちの危機を何とかしないと!?

S i d e O u t

花嫁はシグナム！？

前回までのあらすじ…

僕とシグナムはプリクラを撮りにゲームセンターに向かったんだが…  
…何故かブライダル店に飾る写真を撮る羽目に…

ブライダル店フェアフォーチュン・店内

キヨウスケSide

僕たちがお店に来て…

「店長〜！〜とびっきりのモデルをスカウトしてきました〜」

と、僕らを連れて来た女性店員が上機嫌で店に入って行った

「お帰りなさい！いい人材…は………」

そして店長らしい女性は…こちらを見てフリーズした！？

…何で？

「…で…」

…で？

「でかしたあああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

いきなり絶叫！？

「愛美ちゃん！貴女スカウトの才能あるわー！！」

「ありがとうございますテンチョー！！ボーナスお願いしますね」

僕らを連れて来た女の人は愛美って名前なのか

…とりあえずツツコムか…

「あの〜…」

「あら御免なさいね」

…フムフム…これは2人ともかなりのハイスペックね…田中さん  
「！」

「あ、はい」

店の奥でショーケースを磨いていた別の店員さん（田中さん）が呼ばれてこちらに来た

「何ですか？テンチョー？」

「悪いんだけど彼女の着替え、手伝ってあげてくれる？ドレスとかのチョイスは任せるわ」

「分かりました、テンチョー！！」

えらくノリが軽いと言うか…

「おっ、これはかなりデキる女性って感じですね。これはやり甲斐があるってもんですな。…じゅるり…」

…若干アブナイ発言が混じっていたが…と、とにかく田中さん？から見たシグナムの感想はそんな感じだった

…まあ確かにシグナムは仕事バリバリ出来るキャリアウーマンって言われても違和感ないよな

…意外とスーツ姿も似合いそうだし

「さ、じゃあ奥でフィッティングしようか？」

「よ、よろしく願います…」

…若干シグナムが口を引き攣らせている…まあ気持ちは分かるが…

シグナムはドレスを着る為に別室に移動し、

「じゃあ貴方も着替えましょうか？」

「あ…はい」

という訳で、僕も写真を撮る為にタキシードを着る事となった…

数分後

何はともあれ…僕はタキシードに着替えると…

「おお…こ、これは…彼氏、なかなかのクオリティね… / /」

そう言いながら、店長さんは何故か顔を赤くしてこちらをジッと見つめてる…？

「そ、そうですか？」

まあタキシードなんて初めてきたからな

つかこの人、僕とシグナムを恋人同士と勘違いしているのかな？

…まあ一応そのように振る舞って女性専用（男はカップルのみ入店可）プリクラ館に入ろうとしてたから仕方ないか…

「それで、シグナムは？」



「ん〜、女の子は準備に相当な時間がかかるのよ〜。彼女って素材が良いから田中さんも気合い入りまくりで…」

…まあ、はやて達も支度にはえらい時間をかけてるからな…

「そーゆー訳で、ちょっとお茶しましょうか？」

…そういえば喉が渴いた事だし…

「そうですね、いただきます」

厚意は素直に受けとかないと逆に失礼だしな〜

「ホント！？じ、じゃあ今すぐお茶を持って来るわね！！」

店長さんはそう言つと、慌てて部屋を出て行…

ガチャ！！

「お待たせ〜！！」

戻るの早っ！？部屋を出て数秒で持つてきた！？

「ハア…ハア…（こ、こんなイケメンとお茶出来る機会なんて滅多にないんだし！！この際彼女持ちだろうが関係ないわ！！）」

…何だろっ…何か物凄く寒気がしたけど…？

とりあえず、シグナムが着替え終るまで僕は店長さん（名前は真樹

さんだそつだ」と談笑しながら一時を過ごした…

…ただ、「私の事は真樹って呼んでね？」とか「彼女とは長いの？」とか「彼女に満足してる？」と聞いてきて、終いには「……大人のテクニクに興味ないかしらあ／＼？」等とアブナイ発言をしていて困ったが…

青少年をからかうのもいい加減にしてほしいっす…

『（マ、マスター！？何故彼女がマジだと気付かないんでしょう！！？）』

…ん？何かインファイから電波が出てた？

と、

ガチャ

「テンチヨー！！準備出来ました〜！！」

田中さんが部屋に入ってきた

入ってきた田中さんの何か物凄くやり切った感の満足げな顔をしていた

「いや〜、彼女美人な上に巨乳だからサイズがなかなかなくて〜！！」

…えらくストレートな物言いだな…

「それでは…シグナムさん！どうぞー！！！」

ガチャ

扉からウエディングドレスを着たシグナムが……

「……………」

「か、神代…／／」

…思わず見とれてしまった…

純白のウエディングドレスを身にまとい、ヴェールに包まれた顔を赤らめるシグナム…

「や、やはり私には似合わないか…」

「い、いやいや！！そんな事ないぞ！？ちょっと驚いただけ、似合ってると思うぞ！？」

「なっ…／／！？」

…いや、そんなに僕の言葉が予想外だったか？

シグナムがさらに真っ赤になりながら驚いているけど…

「し、社交辞令ならいらんぞ！？」

「えっ！？お世辞じゃなくホントに似合ってるって！綺麗だよシグナム」

「ききき…／＼！！？」

…？何やらシグナムがエライ慌てっぷりだが…ああ！何時もは動き易い服装とは真逆なドレス姿だから落ち着かないのか？

《（…：キヨウスケ…世間に疎い私でも分かるのに…烈火の将…同情します）》

…ん？今度はリインフォースから電波が聞こえたような…？

「さ、じゃあさっさと写真を撮りましょうか…愛美ちゃん、カメラマンさんに来てもらって」

「はい！！」

…何でか店長さんが少し不機嫌っぽいけど…どうしたんだろう？

『《（）はあ…いつか絶対に女性に刺される…！！（）》』

そしてカメラマン（女性）が来て写真を撮ってもらった事になったのだが…

「じゃあ2人も並んで」

パシャ

「はい、じゃあこつち向いて笑って〜…ん〜まだ何か固いな〜 固いのは夜に取っておいてね〜」

…セクハラ発言全開だった…

「……………／／／」

シグナムもさつきから真っ赤になって固まってるし…

「あ、じゃあ彼氏！彼女をお姫様抱っこしててみようか？」

…は、はあ！？

「その方が絵になるしね〜」

いや…絵になるってそんな突拍子もない事を…

「ホラホラ〜、恥ずかしがらずに〜」

…こ、これはやらないと終わらせません的なオーラが場を支配しているし！？

「…し、仕方ない…シグナム…シグナム？」

何かシグナムの反応がないが…ん？何やらブツブツ呟いているな？

僕はシグナムに耳を傾けてみると…

「…わ、私が…キレイ…キレイ…フフツ…／／／」

…って！？何かシグナムが壊れてる！？

「仕方ない…シグナムごめん…！」

ちよつと強引だったか、シグナムを後ろから抱き抱えて持ち上げ…  
つまり伝説の【お姫様抱っこ】をするよ

「なっ！！？か、神代！！？何をする／＼！！？」

おっ？意外と軽い…じゃなく、壊れてたシグナムが再起動した！

「は、離せ神代！！…い、いや…離さなくて…じゃなく…！」

…やっぱ壊れたままか？えらく混乱中だし

『（だからマスターのせいでシグナム卿は混乱しているのがわからないんでしょか？）』

「おっ、彼女は何か初々しい反応だね…はい2人ともそのままそのまま…」

パシヤ

「ん…じゃあ最後にそのままキスしてみようか」

ピシッ！

…何か世界が凍り付き音を聞いたような…

「「なっ!? キ、キス!!!?」」

僕とシグナムの声が重なりシンクロツツコミを入れた!!

「あら、恋人同士なんだから問題ないでしょ?」

…ヤバイ…ここに来て恋人同士のフリをしていたツケがこう返ってくるとは…

…仕方がない、ここは正直に僕とシグナムが恋人じゃないと言って断  
「「ちよつとまったー!!!」」って!?!?こ、この声は  
!?!?

S i d e O u t

少し時間を遡り…

はやてS i d e

キョウスケ君らが入っていったお店…なになに?ブライダル専門店…

「はやてちゃん、【ぶらいだる】って何ですか？」

「ブライダルって言うのはな、結婚式のサポートをし……て……」

……えっと……キヨウスケ君とシグナムが入った店　ブライダル専門店　結婚……なっ!?!?

「……な、なんやて(だつて)……!?!?」「……」

そ、そんな話し聞いてないで!?!?

「な、な……シグナムと恭介が結婚だと!?!?」

「そんな!?!?キヨウ君が……」

まさか……シグナムがこんな迅速に事を運んでいたとは……

「……フフツ……フフツ……」

「は、はやてちゃん?」

「……しいぐうなあムううう……主を差し置いてキヨウスケ君と結婚やて……?」

ウィータ!シャマル!……さくらちゃん!……!」

「……は、はい!?!?!?」「……」

「シグナムを狩りに行くで……!」

……ついでにキヨウスケ君にも、正妻を差し置いて3号と先に結婚式



挙げようとする根性…叩き直したるで…!!」

フツツ…待つとれシグナム…主としてちゃんんと調教したるで…

「はやてちゃん!私はどうしたらいいですかー?」

「あ、リインはそのまま私の胸の谷間で待機や!」

「分かりました」

リインにはまだ早い話しやしなあ…まあ将来的には神代ハーレムの一員になるやろうし…まあ先ずは…

「…今すぐ突入して…シグナムとじーっくり24時間耐久で0  
H A N A S H Iやな…」

さあシグナム…己の罪の数を数えて待ってな…

「さあ!!行くで!!突貫…!!」

「」「お…!!」

かくして…微妙な誤解から生まれた魔女裁判の幕が開かれたのだっ  
た…

S i d e O u t



修羅場、再び！？（前書き）

明日は近所で祭があります

特殊な事情により…不幸だ…

修羅場、再び!?

前回までのあらす「そないな悠長な事言つてられるかー!!」…  
つて…は、はやて!?

いや、ここはまだ本編じゃないからさ…

「そんな無理を通して道理を蹴飛ばすで!!」

いやいやいや!?!?!このグレンな兄貴の名言を言われても!?

と、とにかくシグナムと写真を撮っていたら思わぬ珍入者が!?

『…というか既にネタバレしているのでは?』

…っ…

僕とシグナムが写真を撮っていると…

「「「ちよつと待ったー！ー！！」」」

と、叫びながら乱入してきたのは…

「は、はやて！？それにヴァイターにさくら！？」

「私もいますよ〜」

「（はい、私もいるですよ！ダーリン）」

シヤマルとリインまで居るのか…リインは空気を読んで念話だし…

というか…前者の3人がえらい形相でこちらを睨んでるんですが…

「あの…貴女たちは？」

流石に不信人物を見るように店長さんが尋ねると…

「「「キヨウスケ君の妻だです！！！！」」」

…うん、だから何で皆して問題発言するのさ？

「私は愛人でもいいんだけど〜」

「（リインも【あいじん】ってのでもいいですよ〜      とじろで【あいじん】って何ですか？）」

…シャマルも変な発言しないでくれ!!

…リインも変に影響されちゃってるし!?

「え、えっと…皆さんキヨウスケ君の…お知り合「」だから妻<sup>だ</sup>です!!!」「」…キ、キヨウスケ君…?」

て、店長さん!?!その救いを求めるような目で見られても…

「…すみません、皆僕の家族です…」

…「」言うしかないよな」

「と言うか…何ではやて達がここに?確か留守番している筈じゃ…  
(しかも何で年齢詐称薬まで飲んで来てるんだ!?)」

後半は念話でツツコんでみると…

「そ、それは…なあヴィータ」

「わ、私か!?!えっと…さくらパス!」

「ほえええ!?!わ、私に!?!えっと…シャマルさん?」

…何で他に丸投げしてるんだよ…

「えっとねキヨウスケ君、皆キヨウスケ君とシグナムの事が気にな  
って後をつけてたのよ」

「「サラつとバラした!!?」」

…つて後を付けていたああ!!?い、何時から!?

「もちろん初めからよ、それでシグナムがプリクラ撮りたいって所で知らない人がキヨウスケ君達を連れていつちやって着いた場所がブライダル専門店だったから…はやてちゃん達大慌てで」

「「さらに全てゲロツた!!?」」

…はやて達…女の子なんだから、不適切な表現は控え…つて初めからだつて!!?」

「それにしても…シグナムのウェディングドレス姿…綺麗ねえ  
フッフ」

「ツ~~~~ノノ!!?」

…シヤマルがからかうように言うからシグナムが真っ赤になって俯  
いてるし…

そついやシグナム、さっきから黙ったままだけ…ど……

「……ちえ……」

ゾクッ

な、何かシグナムから純白のドレスと真逆なドスっ黒いオーラが立ち上ってるんですが!?

「チエストオオオオオ！！！！」

いきなりシグナムがレヴァンティンを振り回した！？

「どわあ！？お、落ち着けシグナム！！」

「シヤマル！大人しく斬られる！！」

ピンポイントでシヤマルにターゲットを絞ったようだ…

「って私だけなの！？」

…ま、まあとりあえずゲロツた本人だからな

「「「（よ、よかった…茶化さないで…）」」」

…はやて達、おもいつきり安堵した表情してるな…

「キヤーーー！！！？ま、待ってシグナム！？ちよつとしたお茶目じゃない！！！」

「も、問答無用だーっ！！」

…つか暴れ過ぎだろ！？

仕方ない、止めるか…

「シ、シグナム！！気持ちは解「そこを退け神代！！」って…」

シヤマルとの間に入って止めようとしたが、もはやバーサーカーモードに突入して周りが見えてない！？



…と、その時！！

ガシャ！！

「ぬぁ！？」

「へっ！？」

シグナムが照明のコードを足に引っ掛けてしまった！！

普段のシグナムならすぐ体制を整える…というか足を引っ掛ける事  
すらしないのだが…

「あぶなっ！？」

バランスを崩し、倒れそうなシグナムを支え…んぐっ！？！？

チュッ

「「「なっ！！！！！？」」」

「あら…」

…勢いよく倒れて来たシグナムを支えようとしたのだが…思いの外  
に加速かついて…距離感がその…若干ズレて…／／

「……………ん／／」

ピカッ！！

…僕の唇がシグナムの唇と触れ合って…あ、シグナムの…いい香りが…／／

「…「な・な・何してる（んや）（の）んだー！ー！ー！ー！？」」

はやく達の絶叫で正気に戻り…って！？な、何してるんだ僕は！？

「！！？…すすすすすまない神代…／／」

再起動したシグナムも顔を真っ赤にしながらも慌てて離れた…

「い、いや…こっちもごめ…ツ！！？」

シグナムに謝っていると、ある方向から一方通行アクセラレーター顔負けのベクトル変化が！？

「…あ、主はやく！？それにヴィータもさ、さくらまで！？」

…うん、流石のシグナムでも顔を引き攣らせるのも分かるよ…

「…ほお、私の許可なくキスするとは…ええ度胸やなあ…」

「…シグナム、オメー騎士の誇りに誓って何もしねーって言うってたよな…」

「…キヨウ君もキヨウ君だよ…何も私の前でしなくても…」

「ちがつ！？いや！これは事故です！！」

「そ、そうだよ!!これは事故だから!」

何とかはやて達の怒りを抑えないと思ひ、説得するが…

「…その割にはシグナム?キョウスケ君に舌、入れとつたなあ…」

はやてのカウンターが決まった!?

…た、たしかにちよつと舌が絡まったというか…/ /

「恭介!!オメー何も何顔を真つ赤にしてんだよ!!こ、こーなつたら…はやて!!」

…ヴィータさん?何をやる気ですか!?

「…そやな…シグナムだけつちゆうのは不公平やし…それに最近はお無沙汰やつたしな…」

…な、何!?物凄くこの後の展開が予想出来るんですが!?

「」「私達にもキスして…!!」「」

な、何だつて…!!?」

「いや!?ちょ!!?な、何でそんな「問答無用や!!」ってせめて最後まで言わせる…!!?」

「いいじゃねーか どちらにしるするんだからよ」

「そーゆー意味じ…んんっ!？」

チュツ

言い切る前にヴィータに…キ、キスを!?!？

「くちゅ…ん…／／」

「あ、こらヴィータ!!ズルイで!!次は私や!!」

「ぷはぁ…／／あ、うん…／／」

…ハッ!?!いけない!!意識が飛んでいた!!

「だ、だから落ち着…んぐっ!？」

チュツ

こ、今度は…は、はやてと／／!!？

「んちゅ…ん…ん…／／」

は、はやてとの深いキス…はやてが唇を割って舌を絡ま…せ…／／

「は、はやてちゃん!!交代だよ!!」

「んんっ…はぁ…／／仕方あらへんなぁ…／／」

…ハッ!?!だからまた意識がかなり飛んでいた!？

「…………キヨウ君とのキスって…考えたら初めてだよね…／／」

ちよー!? さ、さくらさん!?

「…………キヨウ君…………ん…………」

チュッ

…さくらとの初めてのキス…／／

ピカッ!

「…………ん／／」

…唇に感じる柔らかい感触…そして優しい石鹸の香りが…………／／

「…………んっ…私のファーストキスだよ／／」

…うう…ちよつとカワイイって思っしまったじゃないか／／!!

「さ、次は私のば「シャマルは却下や!!」「ん…って何で!?! はやてちゃん!!?!」

「そら…何かの元凶っぽいからや!!」

「何です! その曖昧で未確定な理由は!?! というか私はドコの元凶でもありません!!」

…何故かはやての理由に説得力を感じるのは気のせいか…?!

ツンツン

ん？誰かが突いてくるけど…って!？

「さ、さくら… / /」

突いて来たのはさくらだった…や、ヤバイ!!まだ顔が赤い / /!!

「キョウ君… / /はいこれ」

さくらが差し出したのは…あ!？

「か、仮契約カード…しかも2枚!？」

「うん / /シグナムさんと…わ、私のカードだよ / /」

…さくらとも仮契約が成立するんだ…しかしいきなり2枚とは…

「ちゃんと大切に…してね?…で、出来れば…その…わ…私の…とか… / /」

「あ、ああ… / /」

そんな潤んだ目でみられたらハイとしか言えないじゃんか!?!…まあ、元々皆のカードは大切にしているけど…

「…なあゝに2人だけでイチャついてんだよ…」

「ヴ、ヴィータ?!いや!!別にイチャついてないって!?!」

「ふ〜ん…ま、別にいいけどな…おりゃ!」

ムニユ

っていきなりヴィータが腕に抱き着いてきた!?

「へへへ／＼久々にこの姿になったんだしな!」

ってヴィータさん!?!む…胸が!!

「当ててるに決まってるだろ!?!…何なら…触つか／＼?」

心読まれた!?

「ちょ!?!ヴィータちゃん!?!キョウ君に何してるの!?!」

「ん?胸当てて触って貰おうと」

何か堂々とトンデモ発言してないか!?

「どーだ!?!さくらには出来ねーだろ!?!」

「むううう…」

ちょ!?!何挑発してるんです!?!?

…そりゃ…さくらはヴィータに比べると…小さいが…

「…キョウ君、今とても失礼な事を考えてなかった?」

「イ、イエ！？ソナコトナイヨ！！？」

さ、さくらかも読心術使えたんだっけ…どうして僕の周りの人達は読心術を標準装備してんだよ！？

「ふ、ふんだ！！わ、私だって出来るよ！！えい！！」

ムニユ

さくらかもヴィータとは反対側の腕に抱き着いて…じゃなく！！

「どう…かな？気持ちいい／＼？」

た…確かにさくらかもそれなりに膨らみが…じゃなく！！

「ふ、2人とも落ち着い」「恭介（キョウ君）！！どっちが気持ちいい？？」て！！だから人の話を聞いてくれー！！！！」

だ、だから何でこうなるんだ！！？

Side Out

「て、テンチョー…何ですか？このカオスというかハーレムは…？」

「…知らないわ…というか…リアルにハーレムって存在したのね…」



…」

「……あはは、しかも皆美少女ですし…下手な芸能事務所よりハイレベルですよね…」

「……こうなればもうヤケよ!!田中さん!!ここに居る全員分のドレスの手配をして!!これだけの逸材、放っておく手はないわ!」

「は、はい!!」

「て、テンチヨー!?!」

「ここに居る全員を撮影よ!!カメラマンさんもいいですね!?!」

「ハイ!!まさかリアルハーレムを撮影出来る日が来るなんて…いい修羅場も撮れそうね」

「フフ…こうなったら…皆まとめて面倒みちやる!!…アーハツハツハ!!」

「テンチヨーが壊れた!?!」

結婚行進曲…か？（前書き）

ようやく地デジテレビを購入しました。　　というか気付けばアナログ放送のカウンtdownが消えてた！？

…なんだろう…この微妙な敗北感は…？

結婚行進曲…か？

みなさんこんばんは…神代恭介です。

あの後テンチヨーさんの鶴の一声で、はやて達とも写真を撮り事に…

…しかし、若干そのテンチヨーさんがイラついていたのは…気のせい  
いか？

「…まったく、まさかハーレム持ちとは…何か世の中、間違ってる  
わよね…

ああ、どこかにいい男居ないかしら…ハア」

…うん、何やら凄く哀愁が漂ってるな…

そっとしておいてあげよう…

『(その要因の一端を担っていると気付かないマスターもすごいですが…(』

キヨウスケSide

…あの異様な黒歴史が過ぎ去り…

「じゃあ皆さん、こちらに来て下さいね」

「……は……い……!!」「」「」

はやて達もウエディングドレスに着替える為、田中さんと部屋を出ていった…この場に残っているのは僕とシグナムのみ…い、いかな…!!まださっきの事が…/ /

「し、しかし結局皆と撮る事になるとはなあ…」

それとなくシグナムに話しかけるが…

「…………… / /」

…返事がない？

ん？何かブツブツ呟いているな？

僕はそつとシグナムに近づき聞いてみると…

「…神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス… / /」

シグナムは仮契約カードを見つめながら呪詛のように呟いていた

…うん、聞かなかつた事にしよう！！その方が誰も傷つかないし！！

「はあ…シグナムも見事な壊れっぷりですね」

ホントだよな…って誰！？

「ねえ、ダーリン！！リインも【かりけいやく】をしてカードが欲しいです！！」

ってリ、リイン！！？

「リイン！？誰かに見られたら…」

リインは現在普通？の小人モードだから…誰かに見つかったらマズイ！？

「あ、大丈夫です！【すてるすもーど】って言うのを使っていますからエッヘン」

す、ステルスモード！？そんな機能付けた記憶が…

「マリーさんが色々とリインに付けてくれたんですよ！」

マリーさんが！？…何だろう…何か言いよつのない不安が…

「…なあリイン、ちなみに他の機能とかマリーさんに付けられたりしたか？」

「はいです！たしか…【あつとふれーむ】とか…」

ふむ、たしか燃費が悪くなるが見た目を今のはやて位に出来るモードか…原作と同じ…

「【おっぱいがばーんって大きくなるモード】とか【ダーリンとえつちな事】ってちよつと待て！！？」が…え！？な、何ですか？？」

今明らかに原作とは違うスルーしちゃいけない機能がなかったか！？

「リイン、後半2つは…マリーさんが付けた機能なんだよね？」

「はいです」

…あんのデバイスヲタクは…人のデバイス（はやてのだけど）何付けとるんじゃない！？

ガチャ

「おまたせー…ってどないしたん？キョウスケ君？？」

僕が頭を痛めていると誰かが部屋に…ってこの声は！

「ああ、はや…って…？」

そこに居たはやては…ウエディングドレスを着ている為か…その…とても綺麗で…／／

「……………／／」

「ん？どないしたん？…あ！もしかして見とれとった？」

「い、いやっ！？そんな事は…／／」

「ほんまかあゝ？？」

は、はやてさん！？そう屈んで下から僕を覗き込むようにすると…  
その…角度的に胸元が…／／

「…すみません、正直見とれてました…／／」

「うん、素直でよろしい」

…どうやら胸元に視線が（ちょっとだけ）行ったのは気付かれなかつたようだ…

「ちなみにキョウスケ君、言ってくれば何時でも見てええんよ？  
ホラ」

そう言うとはやては指で胸元を広げ…ってバレてる！？

「ちょ！？は、はやて／／」

何とかはやてを止めるが…

ハア…やっぱりこの大人バージョンになると、どうも思春期真っ盛りの精神状態に…やっぱ魂が肉体に引っ張られているみたいだ…気をつけないと…色々…

「遠慮せんでもええのに〜」

…ホント色々とヤバイから勘弁して…理性がけっこうギリギリだよ…

「はやてちゃん、とつても綺麗です!」

「ありがとなリイン!所でリインは何しとつたん?」

「はい、ダーリンに【かりけいやく】をおねだりしてたです!皆も同じカードもっているのにリインだけ持ってないのはズルイです〜!」

いや、ズルイって言われても…

「ん〜…リインにはまだ早いで〜」

なっ!?!あのはやてがリインを説得している!?

「…なんやバカにされたような気がするんやけど…」

…あ、そして相変わらずの読心術っぷりだな…

「えええ〜!?!」

「でも大丈夫やリイン!後でシャルル監修の【誰でも解る!保険体  
育の神秘】第1巻でお勉強した後でキョウスケ君にしてもらおな?」

な、何だその怪しげな本は!?

「はいです!?!お勉強がんばります!?!」



…というか僕の意味はスルーすか!?

ガチャ

「…なんかスー・スーすんな、この服」

「ヴ、ヴィータちゃん!?!そんなに裾を上げると見えちゃうよ!?!」

「ヴィータちゃんもさくらちゃんも…お化粧のノリが良くていいわね〜 ハア」

同じくウエディングドレス姿のヴィータ・さくら・シャマルが部屋に入ってきた!?

「ど、どうだ? 恭介…変じゃねーよな…?」

「キョウ君? ど、どうかな?」

「私のドレス姿もなかなかでしょ」

皆、タイプの違うドレスで…ノノ

「う、うん…皆とっても綺麗だよ…ノノ」

…はやてもそうだが、ヴィータもさくらも普段していない化粧しているのか…何か新鮮というか…ノノ

ガチャ

「はい！皆準備できたわね！これから順番に撮影していくわよ」  
つと、テンチヨーさんが来た…そーいや…

「所で撮影って…皆一緒に撮るんですか？」

集合写真的な感じで？

「フッフ…そんな勿体ない事しないわよ！！」

も、勿体ないって何が！？

「勿論キヨウスケ君との2ショットよ！！これだけの美男美女なんだし…全員分撮ったら全部店頭に飾る予定よ！！これなら広告効果は絶大よ！！」

ちよ！？それってつまり…

「キヨウスケ君には悪いけど、1人休憩ナシの強行撮影会よ！！」

…マジ！？

「あ、あの〜」

「八神さん…だっけ？何かしら？」

「その撮影した写真は…頂けるんですか？」

「え？ええ、それは構わないわよ？」

「よっしゃー!!」

はやてはガッツポーズをして喜んでいる…まあ一応記念になるからかな…?

「……是非私たちにも!!!!」「」「」

そしてはやてに便乗して、ヴィータ達も凄い勢いでテンチョーさんに詰め寄り、写真を希望した!!!?

…つかみんな…そんなに危機迫る勢いで詰め寄ると…

「え、ええ…(ガクガク)」

…ほら見る!テンチョーさんが怯えてるじゃないか!

で、先ずはやてとの撮影から始まり…

「はい、じゃあ撮りますよー!  $35 \times 51 \div 24$  は?」

ってベタに  $1 + 1$  じゃないの!?

「えっと…インフィ君、こーゆー時の演算機能や!! 答えは何や?」

確かにこの程度の計算なら簡単に…

『……………えっと…』

って解らないんかい!?! ホントにデバイス!?!?

「ぶー！！正解は74・375でしたー」

しかも答えが2でなかった!?

とまあ…若干の悶着はあったがその後、ヴィータ・さくら・シャマルの順番で2ショットの撮影をした…

ん？シグナムはどうしたって??

…それは…

「…フフフ…神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス…／／」

と控え室の隅でトリップ中…って!?!?まだ呪詛を唱えてたんかい!?

「…しよーがねーな…叩けば治つか?アイゼン!」

《Ja》

ち、ちょ!?!?ヴィータさん!?!?アイゼンを起動してどっしよつと…

「いい加減…目え覚ませー!?!?!?!」

ドカアア!?!?!

「グハツ!?!い、いきなり何をするヴィータ!?!?」

アイゼンの一撃でようやく正気に戻ったか…

「ほらな！やっぱ叩けば治ったな！！」

…って古いテレビじゃあるまいし…

と、とにかくシグナムとも無事？に写真を撮り終えた…

「皆、お疲れ様！良い写真が撮れたわ！」

…所用時間3時間…つ、疲れた…

「とりあえずコレが出来た写真よ！ハイ！」

「」「」「」「ありがとうございます！！！！！！」」「」「」「

愛美さんが皆に仕上がった写真を配っていた

しかし…みんな元気だね！

「キヨウ君、大丈夫？」

「さくら…まあちょっと疲れたかな」

ホントに休憩ナシとは…

「お疲れ様キヨウスケ君 それにしても今日はええ収穫やったな」  
「」

そう言いながらはやては写真を大事そうに何度も見て…

「…今度は本番で着せてな？キヨウスケ君」

「あ、はやて！！その時は私も一緒にいい！！」

「あ、ずるいよ！はやてちゃんにヴィータちゃん！！  
私もキヨウ君に本番で着せてもらつ予定なんだよ！？」

…何か凄く盛り上がっているが…

「別に着せるのはいいが…」

「」「えっ！！？い、いいの！！？」「」

…何で驚いてるんだ？

「そりゃ…デザインがあればドレスでも魔力物質化の要領で創れ…  
つてどうした！？」

何故かはやて達がガツクリうなだれているけど…

「」「そんな事だろうと思ったよ……………」

…???

「なあシヤマル、何ではやて達は落ち込んでるんだ？服創ってあげるって言っているのに…？」

「…キヨウスケ君てわざとやっているんじゃないかって思う時があるわよね…ハア」

な、なんだそれ！？

「そついや…シグナムはどうした？」

さっきから見掛けてないが…

「シグナムなら…あそこ」

シヤマルが指差した方向では…

「頼む！！ぜひこの写真のネガを譲ってくれ！！」

「こ、困ります！！」

この後写真を拡大して店頭に飾る予定なんですし…」

「何！？拡大も出来るのか！？た、頼む！！その拡大した写真も是非とも譲ってくれ！！！！」

…何やってんだ？シグナムは…

こうしてシグナムのストーカー被害から始まった事件？はこうして幕を閉じたのだった

そして後日、店頭に僕たちの写真が飾られた…

その写真が好評で、さらに個別に撮った写真をプロマイドにして販売した所、飛ぶように売れ大きな利益を出したとか…  
というか肖像権はどうした!?

S i d e O u t

おまけ…

数日後…

あれだけ噂になった写真…当然なのは達も目撃し…

「はやてちゃん達ばかりずるいのー!!!!」

「…キョウスケ? 勿論、私達とも写真撮ってくれるよ…ね?」



魔王と夜叉が同時降臨しました…

さらし…

「ちょっとキョウスケ！！アンタ私とも撮りなさいよ！！！」

「…私とも撮ってくれると嬉しいな」

お嬢2人も参加してきたのだった…

リベンジ？ キョウスケVSクロノ！！前編

時空管理局・訓練室

キョウスケSide

「と言う訳で「ちょっと待て！！」「…って何だ【的】？」

「誰がだ誰が！！僕はクロノだっ！！」

呼ばれて来てみればいきなり模擬戦とはどういう事だ！！？」

「どついう…って、それはシグナムに聞いてくれ」

「うむ、実は……」

さて、みなさんこんにちは 神代恭介です

今回はクロノと再び模擬戦をする事になりました

何故かという事……

## 回想

「えっ！？模擬戦をしたい？」

あゝ…確かにシグナムと模擬戦するとは約束したが…バトルマニア相手だと疲労がなあ…

「実は新たな力、シンクロユニゾンを体験したいのだが…」

…そーいやこの前、事故とはいえ仮契約したから可能になったんだよな…それにシンクロユニゾンならシグナム相手にしなくていいし…

「そうだな…じゃあ相手は…クロノにでも頼むか」

ヴィータの時も相手になってくれたし、今回も快く受けてくれるだろう…インフィ、とりあえずクロノのスケジュールと管理局の訓練室の使用許可を最優先で押さえてくれ」

『解りました、管理コンピュータにハッキング& amp ;強制割り込みを掛けますね』

「ああ、よろし」ち、ちょっと待て！！」「ん？どうしたシグナム？」

「…か、神代：今インフィニティが聞き捨てならぬ事を言ってなか

「ったか？ハッキングとか…」

「えっ？言ってたけど…何か問題でも？」

「いやいやいや！？大問題だぞ！！？機械に疎い私でもハッキングは犯罪と知っているぞ！？」

「バレなきゃ問題ないよ？万が一に、このIDがバレない様に識別コードは巧妙に擬装してるし」

元々ハッキングはよく日常生活の一部って感覚でしてるから、それこそ今更ってカンジだな

…特に暇潰しに何度も無限書庫のデータベースにも行っているし（そのせいで、ユーノの仕事が多少増えたらしいが些細な事だ）

それに…基本管理局のコンピュータってどうも管理が甘すぎてすぐハッキングできるから機密駄々漏れってカンジだよ？…大丈夫か管理局？

「…ハア、神代だから仕方ないか…」

…何か失礼な意味が込められてなかったか？

『マスター、クロノ執務官のスケジュール及び訓練室の使用許可押さえました。すぐに使用出来ます』

「了解…じゃ早速行こうか？シグナム？」

「あ…ああ…」

回想終了

「…という訳だ」

「な…!？」

ん？クロノ？何そんな面白い顔をしているんだ？

「…じゃあ急に僕のスケジュールが急に変更になったのは…」

「ん？僕が書き換えたから」

「サラッと犯罪発言するな——!!!!」

「うるさいな、だったら僕も突破できないセキュリティを構築しろ!!」

「う…」

痛い所を突かれたのか、クロノが苦虫を噛むような表情をしていた

「キョウ君、ダメだよ、クロノ君が可哀相だよ」

「さくら…まあちょっと言い過ぎ、クロノ君弱いんだから弱い者いじめはダメだよ?」「…ってトドメさしたな…さくら」

「ほええ!?!と、トドメって?」

「クロノの方をしてみる」

僕が指差した先には…

「…よ…弱い…？ ボ、ボクガ？…ハハハ…ハハハ……………」

Orzになったクロノがぶっ壊れた中だった

「ほらみる、さくらがホントの事言うから…」

「ほええええ！？ご、ごめんなさいクロノ君！！つい本当の事を…」

さくらの会心の一撃！！！！

「グハツ！！！！」

クロノに342ポイントのダメージ！！！！

…クロノ…ご愁傷様…

「か、神代もさくらも…い、いや 何でもない…」

シグナムが引き攣った表情しているけど…何で？

Side Out

訓練室・モニタールーム

はやてSide

キヨウスケ君とさくらちゃんとシグナムが、クロノ君相手に模擬戦するっちゅう事で私らは見学に来たんやけど…

「クロノ君、何遊んどるんやろ？」

「うっくん…フェイトちゃん解る？」

「クロノは自分は余裕だって言いたいのかな？」

「アホかアイツは！？恭介とシグナム相手に余裕かましてる場合か？」

「正確にはキヨウスケ君とさくらちゃんとシグナムだけだね」  
「確かシグナムとのシンクロユニゾンをテストするって聞いたけど…」

「【しんくろゆにぞん】って初めて見ますから楽しみですよ」

シンクロユニゾンか、シグナムとのシンクロっちゅう事は…剣を主体にしたタイプになるんやろか？

「…そーいえば私とはやてちゃんってまだキヨウスケ君とシンクロ

ユニゾンした事ないわよね?」

…そうや! シヤマルの言う通りや!?

なのはちゃんにフェイトちゃん、ヴィータもした事あるっちゅうのに!!

「…そこん所どうなんや? 作者さん??」

作:そ、そこで作者にフリますか!?

「その方が手っ取り早いんや!で、どうなんや?」

作:まあ…はやてさんとのシンクロユニゾンのネタは出来てますから大丈夫なんですが…

「何や、私のは構想済みやったんか?ならお披露目も間近っちゅう事やな」

作:(まあ出番はまだ未定ですが)

「あの…作者さん?私のシンクロユニゾンはどうなんでしょう?」

作:ギクツ!?

「ちょ!?!今ギクツって…どう言う事ですか!?!」

作:い、いや…その…シヤマルさんのユニゾンのネタが難航して…



「それはつまり…シャマルの存在が地味やから思いつかないっちなう事なん？」

作：…ノーコメントで

…それは肯定と同じやで？

「…どーせ私は地味ですよ…魔法もサポート主体ですし…くすん

作：だ、大丈夫！すぐ考えてますから！

「ま、気長に待つとこな？シャマル？」

「は、はい……」

「あ、はやてちゃん！クロノ君が復活したよ？」

お、ホンマや！クロノ君も復活が早うなってきたな

…ハア、私もシンクロユニゾンして気持ち良うなりたい…

作：何か論点ずれてません！？

激しく気のせいや

S i d e O u t

キョウスケSide

「じゃあ…さくら…！」

「うん…！行くよ…！」

「ユニゾン・イン…！」

ピカッ…！

僕はさくらと（久々の）ユニゾンをした！

「久々のユニゾンだけど…さくら、どうだ？」

《（ん…大丈夫だよキョウ君！）》

「じゃあシグナム、準備はいい？」

「ああ、こちらは問題ない…始めるぞ神代…！」

シグナムと僕は仮契約カードを掲げ…そして…

「シンクロ・イン…！」

ピカッ！！！

光に包まれ、僕とシグナムは一つになり…光から現れた僕の姿は、髪は漆黒に変化しておりバリアジャケットは青色に…腰には1回り大きな剣が…そして特徴的なのは少しポロポロになった赤いマントを…あ、この姿って…

「…ヴァイサーガか…さくら、シグナム 何か問題あるか？」

「（大丈夫だよキョウ君！）」

「シグナムはどうだ？」

『（……………ダメだ…あっ！／／）』

いきなりダメ発言！？

「どうしたシグナム！？な、何かトラブルか！？」

ヤバイ！！もしそうならシンクロアウトで解除しないと…

『（…ヴ、ヴィータに前もって…んあ！？…聞いていたが……き／／）』

……………き…？

『（気持ち良く…／／だ、ダメだ神代！？そ、そんな動いたら…ああっ／／！！？）』

…あ…シグナムまで謎の副作用？に…

「（…私は大丈夫なんだけど…何でかな？）」

…それはこっちが聞きたいよ…ハア

数分後…

『（す、すまない神代…大分落ち着いたので大丈夫だ…／＼）』

「そ、そうか…／＼」

《…マスター？顔が赤いですよ？》

「な、何でもない！！」

…まったく…数分とは言え、シグナムのあんな声聞いていたら…色々ヤバかった…

「…おい、キョウスケ…準備はいいのか？」

あ…クロノを放置していたのをすっかり忘れてた…

「…あ、ああ 待たせたな」

「…僕にとっては前回のリベンジだ…前のようにいかないぞ!!」  
えらい気合い入ってるな」

「（そう言えば…前はキョウ君のアルトのステーキでバリア貫通してジャケット破損で致命傷寸前だったんだよね？）」

「ぐはあ!!!!」

クロノが血を吐いた!?

…さくらさん？確かにそうだけど…何かクロノに怨みでもあるのか？

「くっ…確かにそれは認めよう…だが!!僕だってあれから強くなつたんだあー!!!!」

…クロノってこんなに熱血タイプだったかな？

「ま、いいか…じゃあクロノ…いくぞ!!」

カチャ

僕は腰にある大剣…五大剣と変化したインフィニティ（…）を構え…

「今度こそ…絶対勝つ!!」

「まあ…程々にいくぞー!!」

【神代恭介VSクロノ・ハラウン…試合開始!!】

S i d e  
O u t

リベンジ？ キョウスケVSクロノ 後編

前回までのあらすじ…

僕とシグナムのシンクロユニゾンでクロノと2度目の模擬戦を開始した…

医務室

キョウスケSide

「……すまないクロノ…まさかこんな事になるとは…」

「キョウスケは悪くないよ！！これは…不幸な事故だったんだよ！」

「！」

「そつだよ！！まさかこんな事になるなんて誰にも分からないよ！」

「…フェイト…なのは…」

「クロノ君も全力を出せたんやし…本望やったやろ…もうゆっくり眠らせたる…な？」

「…はやて…そつだな…クロノ、ゆっくり休んでくれ…」

「僕はベットに横たわるクロノ…おい、何だその人が亡くなったような言い方は！？」「…あ…」

「い、いや〜 ちょっとシャレッツ気を…それにあなたが間違いないだろ？」

「現在クロノは、包帯でグルグル巻きのミイラ化していた…」

「プツ…も、もうダメだ！！あはははははは！！！！！」

「ヴ、ヴィータ！笑ってはハラオウン執務官に悪…プツ！！！」

「シ、シグナムだって笑いを堪えてるじゃねーか！！！」

「…ヴィータとシグナムは大爆笑だ…」

「クツ…笑いたければ笑え！！！」



「ク、クロノ君 そう自棄にならんで…コリア、ヴィータにシグナム！！笑ったらアカンやる！！」

「は、はい！！」

…まあグルグル巻きのクロノを見たら…笑うなって言う方が酷だよな

「で、シャマル…クロノの容態は？」

「とりあえず骨には異常はないみたいですけど…やっぱり最後の【一矢】のダメージがキツかったみたいで…全身火傷ですね」

「ダーリンとっても強かったです」

…いやあ、アレは予想外の威力だったしな

ガチャ

「クロノ！！怪我したんです……プツ！！」

リンディさんが入室してクロノを見た途端…吹き出した！？

「か、母さんまで……」

実の母親に笑われるって…可哀相なクロノ君！！

…ん？何でクロノが医務室でミイラ化しているのかって？

それは…

回想

「いくぞ！！ファイアッ！！」

ドンドンッ！！

クロノはいきなり魔力弾を放って来た！

「…というか…単純な魔力弾が効くか…よ！！」

ザンッ！！

僕は剣を一線すると…魔力弾はキレイに真っ二つになった

「その位、想定内だ！！これならどうだ！！」

《Blaze cannon》

ドオン！！

「なら…ハッ！！」

バチッ！！

僕は剣を上段から地面に叩きつけ、魔力エネルギーを発生・停滞させ…

「地斬…疾空刀ッ！！！」

ドカアア！！

停滞していた魔力エネルギーを剣で打ち出した！！

ドカアアア！！

打ち出した二つの魔力がぶつかり合い、僕らの攻撃魔法は相殺しあった

「…そのフォーム、剣撃特化型かと思っていたが…相変わらず無茶苦茶っぷりだな…」

むっ…無茶苦茶って失礼な！ちゃんとした技だろ？

『…しかし、さすが執務官と言った所か…実際このシンクロフォルムの遠距離攻撃系はあまりない…神代、どうする？』

…そりゃ〜決まってる！！

「じゃあ…クロノのお望み道理、剣撃特化型の心髓を見せてやるか…！」

「（ぶっ…それでこそ神代だ！！）」

《マ、マスターもバトルマニアに…》

「(き、キョウくん!! そっちの世界は危ないよ!!?)」

…いや、バトルマニアになってませんから!!

「よし!! いくぞ!!」

僕は剣を構え…

タツ!!

一気にクロノとの距離を…

ジャキイイ!!

…はい?

「なっ!!? バインド!?!」

詰めようとしたら…いきなり現れたバインドによって僕は拘束された!?

「フフフ…かかったなキョウスケ!!」

「クロノ…いつの間にバインドを!?!」

「初手の魔力弾を放った時にさ…君が僕の魔力弾を切った時にディレイドバインドを設置させてもらったのさ…」

…と言う事は…

『あの魔力弾はバインドを設置するのを隠す目くらましだったという事か…』

「（む）…何かズルイ…！」

まあ、戦略なんだからズルイって訳でもないんだけど…さくらには不評だなあ…

「と、とにかくだ！！これでチェックメイトだ！！デュランダル！！」

《Ok boos》

…えっ？それって…

「凍てつけ！！」

《E t e r n a l c o f f i n》

ちょ！？対人でそれ使う！？

パキッピキッ！！

デュランダルから放たれる凍結魔法…エターナルコフィンが僕の身体を凍りつかせた…

「や、やった…とうとう…とうとうキョウスケに勝っ…」

パリッ…

「何！？氷にヒビが！？」

ドォーーン！！

「な、何…だと！？」

「…悪いが仮にも烈火の将と呼ばれるシグナムとユニゾンしてるんだ…その程度の氷は…効かない！！」

僕は氷を内側から炎を使い脱出したのだ！！

「（キョウ君！！またバインドが設置されてるかもしれないから、遠距離攻撃に切り替えよう！！）」

さくらは心配性だな

…というか遠距離攻撃に？また地斬疾空刀を？

《（マスター、このシンクロフォームの能力は…）》

インフィに能力の説明を聞くが…何その一粒で二度美味しい的な能力！？

「クッ…なら！！遠距離からありったけの砲撃を放って近付けさせるか！！」

クロノごめん…その作戦、効かないや…だって…

「フォームチェンジ!!」

『(Cord Angel)』

ピカッ!!

再び僕の身体が光りに包まれ…

バサッ!!

光の中から現れた僕の姿は…髪はシグナムに似た桃色に変化しており、バリアジャケットも白を基調としピンクのラインが入った物に…何より特徴的なのは、背中からは純白の翼を羽ばたかせた姿…

「フォームチェンジ、アンジュルグ!!」

「なっ!?!姿が変わったと!?!」

これがシグナムとのシンクロユニゾンの効果…ヴァイサーガとアンジュルグの2つを使い分ける事が出来るのだ!!

…もしかして…中の人ネタか?

「(キョウ君…それは禁則事項だよ?)」

…ま、まあ…それはともかく…

「…さっきのお返しだ!!」

僕の手の中に魔力光の玉が現れ…その光を物質化！

僕はアンジュルグ最大の武器である弓を具現化した！

「…コード入力」

「（コード確認！！インフィ君！カートリッジ！！）」

《Load Cartridge》

ドキュ！！ドキュ！！

カートリッジをロード…僕が弓を引くと…高出力の光の矢が現れた

「何！？え、遠距離攻撃だと！？」

驚いているクロノに狙いを定め…

「舞え！鳳凰！！」

キイイイン！！

魔力が集束され…って！？あれ？コレって集束系なの！！？…まあいいか

『（リミット解除…コード…ファントムフェニックス！！）』

ドゴオオオ！！



撃ち出した光の矢は、フェニックス鳳凰の姿となりクロノに襲いかかった!!

「なっ!? シ、シールド!!」

《Round shield》

クロノはとっさにシールドを張ったが…

パリン!!

「なっ!? バリアを抜け…ぐわあああ!!?」

ドカアアアアン!!

クロノのシールドを軽く無視するように貫いて…クロノは炎に包まれ…って!

「…あ」

み、見間違えかな? クロノが火だるまになっているような…

『…完全に燃えているな…ふむ、手加減を間違えたか…』

って冷静に分析してる場合!?

「(キ、キヨウ君!! 流石にアレはちょっとまずいよ!!)」

「っとそうだった!!」

とりあえず模擬戦の結果は僕の勝利となり、急いでクロノを救出し

たのだったのだが…

『…私としてはダメ押しで…ヴァイサーガモードの光刃閃をトドメに使いたかったが…』

いやいやいや！？それは流石にオーバーキル過ぎっす…

回想終了

…という事があって慌てて医務室に駆け込み、シャマルに看てもらって現在に至るのです

「しかし、最後のアノ技…フロントムフェニックスだったか？  
バリアを紙みてーに貫通してたよな…」

「ああ、あの技はバリア貫通能力が付加されてるみたいで…あの場合は避けた方が正解なんだが…」

「…バ、バリア貫通って…どんな反則だよ…」

…まあ…ヴィータの気持ちも解るが…

「大体そんな事分かるか！！しかも初見だぞ！！」

そ、そんなに興奮すると傷が開くぞ？

「でも…クロノのゲガが大した事なくてよかった」

「…フェイト…僕のゲガは十分に大した事だと思っぞ…」

「クロノ君…男がそないな細かい事、ごちゃごちゃ言っるとるんやないで！！」

「そうだよクロノ君、キョウスケ君が手加減してくれたからその程度で済んだのに…」

「ちよつて待て！そこは僕が責められるのか！？」

…どうやらここにはクロノの味方は…あ、リンディさんが居たか！？

「まったく…他の女性局員にチャホヤされて気を抜いているからこんな大怪我するのよ！」

「なっ！？何言ってるんです母さん！？」

「あら、私が知らないだけでも？ 最近クロノが多数の女性局員とお茶しているって目撃情報が入ってるのよ？」

へ…クロノがねえ… まあ別にクロノはモテると思うが…ケッ、これだからイケメンは…絶滅すればいいのに…

『(…マスター、貴方もそのカテゴリーに入るのですよ？それもかなりの上位に)』

…またインフィから電波を感じたような…？

「大体それは、キョウスケの事を聞かれたからだ!!」

へっ？僕の事？…なんでさ？

「…知らないのか？女性局員の間で君のファンクラブがあるんだぞ？」

な…何！？初耳だぞ!？

「何でも君のプライベートについて教えてほしいか…どんな女性が好みとか聞か…れ……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオ…

な、何か凄い威圧感が!？

「…へエ…ソウナンド…ふあんくらぶナンテアるンダ…」

「…クロノ？ 勿論教えてないよね？ 個人情報保護法と言っ言葉は知ってるんだよね？」

…魔王と夜叉が召喚されましたよ…

「あ…いや…それは…「教えてもつたんか？」…ハ、ハイ!!すみません!!…!」

…そして砂の一尾も現れた!?

「…オイ!誰に話した…今からぶっ潰しに行くぞ!!」

ガ、ガオガ ガーまでファイナルフュージョン済み!?

「…さあクロノ君?」

「誰に話したのか…」

「とつとと話さんかい!!」

「ま、まで!おいキョウスケ!!何とかしろ!!」

クロノはへびに睨まれたカエルのような目で助けを求めてくるけど…

「……大丈夫だクロノ、君は僕の心の中で生き続けるから!」

「ちょ!?!それ答えになってないぞ!?!?というか全然大丈夫でもないし!!」

「黙れ負け犬!とつとと吐きやがれ!!」

「ヴ、ヴィータちゃん…病室ではグラーフアイゼン起動しないで…!!」

シヤマルの願いも虚しく…クロノは…いや…ご想像にお任せします…

ただ…この後、女性局員の悲鳴が聞こえたとか…

Side Out

《ちなみにマスターの好みの女性と聞かれ、何と答えたんですか？》

「もちろん…胸が大きい女性と答えたぞ？」

《クロノ執務官、正解です》

…とりあえずクロノにはトドメ刺すか…

「…ところで神代、ハラオウン執務官のケガだが…」

「ん？ああ、待っててくれシグナム…今からさらに不幸な事故が起きるから…クロノには永遠の休養が必要だからな…フッフッフ…」

「そ、そうなのか…ま、まあ程々にな…」

進路はよく考えよう？

キョウスケSide

さて、クロノの公開処け…じゃなく！模擬戦から時が経ち…

管理局本局

「ど、どうかな？この制服…？」

「その…似合ってるかな？」

なのはとフェイトの訓練校研修&いつの間にかの仮配属期間も無事終了し、現在管理局の制服を着ている…

…というか管理局よ…いくら人手不足だからと短期研修にも程がある早さだろ！？」

「……に、似合わないかなあ（ウルウル）」

「……キョウスケの趣味じゃないならすぐ脱ぐよ？」

…つと、考え事してついボーってしてしまった！

「あ、いや 2人とも似合ってるよ」

「ホ、ホント！？ホントにホント！？」

「よ、よかつた」

2人とも喜んで…あれ？

「フェイト？髪下ろしたんだ？」

「う、うん／＼どうかな…？」

「うん、何だかぐっと大人っぽくなった感じだね。綺麗だよ」

「そ、そうかな…／＼ありがとうキョウスケ」

「どういたしまして」

女の子って…髪型変えるだけでかなり雰囲気変わるからある意味スゴイよね

「…むう…私も髪、伸ばそうかな…（ボソッ）」

ん…なのはが何か不機嫌みただけ…??

「ねえ、キョウスケ君…キョウスケ君は髪長い女の子が好みなの？」



なのはが変な爆弾を投下した!?

「ぶっ!!な、何をいきなり言うんだ!?!」

「だって…フェイトちゃんばかり褒めるから…その…//」

あゝ…フェイトばかり褒めたから、むくれたのかな?

「…心配しなくても、なのはも十分可愛いよ?」

ナデナデ

「ふえ//!!?!」

僕はなのはの頭を撫でてあげると…

「はうう…//」

なのはは一瞬驚いたが…気持ち良さそうに目を閉じて幸せそうな顔をしていた

…これで機嫌は直ったかな?

…結局なのは達は正式に管理局に入局、なのはは武装隊候補生、フ  
エイトは執務官候補生と…まあ原作道理になったんだよな

…出来る事ならなのはの戦技教導隊入りは遠慮してほしかったが…

え？だって…教導隊入りで魔王化が促進されるのが目に見えてるからな〜…いつそFAITHに入れるか？

と、考えていると

「おーい！キヨウスケ君！なのはちゃん！フェイトちゃん！」

「あ、エイミーさん」

「おー！！ちゃんと着替え出来たみたいだね〜」

わざわざなのは達の制服姿を見に来たのですか？

「だって早く見たかったんだよ〜」

…もはや普通に心読むんスね〜

「ところでキヨウスケ君、何故になのはちゃんの頭を撫でてるのかな？」

おっと…つついっ撫で続けてしまった

「あ、いえ ちょっと話しの流れで…」

僕がなのはの頭から手を離すと…

「…あ」

名残惜しそうな顔でこちらを見てくるのは…別に僕の手からマイナスイオンは出てないんだが…

「…なのはだけズルイ…（ボソッ）」

「ん？何か言ったかフェイト？」

「う、ううん！…何でもないよッ！…？」

…フェイトが何か言ったような気がしたが…気のせいだったみたいだな…

ガチャ

「おまたせ！キョウスケ君」

「着替え終わったよ」

「あ、はやくにさくら」

はやく達も制服に着替え、部屋から出てきた

「あ、エイメイさんもおったんや」

「いんにちは」

「おー！…はやくちゃんもさくらちゃんもバッチリ似合ってるね」

「あはは、どーもです」

「ありがとうございます」

はやては特別捜査官候補生として…まあ指揮官適正も高い筈だから後の機動六課の隊長なんだよな

…さくらは当然、僕のユニゾンデバイスなので常に行動を共にする…というか、知らない間にFAITHに隊員としても登録されてたし!?

「あ、キヨウスケ君もその新しい制服似合っとするで」

「ん…?ああ、これ?」

実は僕の部隊…FAITH用に新たに制服が作られたのだ!

ちなみに僕とさくらが着ているFAITHの制服は…某ブランドの赤服…ではなく、オーブの方の白と青の軍服が採用されたのだ

…その結果

「にやはは、何だかキヨウスケ君と私の制服って似てるね」

…まあ確かに教導隊の制服と色彩は似ているよな

「な、やんやて…私かてパールツクにはまだ手え出してへんのに…」

…をい、まだって…いつかするつもりだったのか!?

「…キヨウスケとパールツク…」

エイミィ!!!私、武装隊志望に変更する!いいよね?ね!?ねっ!」

「そや！その手があったんや！！私もそっちに志願するで！！」

しかも何やらフェイトとはやてが無茶苦茶言っているし…

「ちょ！？ふ、2人とも！！無茶言わないでよー！！？」

…まあ…何だ、エイミーさん頑張れ！

「み、みんな〜！！」

私のはキヨウ君と全く同じ制服だから…私こそが正真正銘のペアルックだよー！！？」

…さくら、多分誰も聞いてないぞ？

その後、はやてとフェイトの説得？も何とか成功し落ち着かせ…

「エイミーさん、フェイトちゃんはアースラ勤務になったんですよ〜？」

「そーだよ 艦長、ホントはなのはちゃんも欲しかったみたいなんだけど…さすがにAAA級3人は保持させてもらえないって〜」

そうなのだ

フェイトはアースラチームと一緒にだけど、なのはやはやてとは別々になっちゃうんだよね〜

…というかAAA級ってアースラに居たのか？

「キ、キヨウスケ君？多分だけどウチにAAAクラス居たのか？って考えてない？」

な！？またエイミーさんに心読まれた！？

「いやいやいや！思いつきり顔に出てるって…一応クロノ君がAAA級なんだよ？」

「ええっ！？」

「いや、そこ驚く所！？」

…いや、だって…クロノって活躍した記憶がないし…あの戦闘力でAAA？というか、やらねキャラの間違いぢや？

「…ま、まあキヨウスケ君と比べたらクロノ君が可哀相だけど…」

「にやはは〜、クロノ君ってキヨウスケ君にボロ雑巾のように連敗だもんね〜」

…なのは、本人の前でそれは言わない方がいいぞ？

…言ったら多分、無限書庫に引きこもりそうだし…

「いや〜、そんなお義兄ちゃんと一緒によかったな〜 フェイトち

ちゃん

「…う、うん…一応ありがとう…はやて」

さすがのフェイトもちょっと嫌だったのか微妙な反応だし…そういや、つい先日フェイトは正式にハラオウン家に養女として引き取られたんだっけ…

…はあ、これでクロノのシスコンが覚醒するのか…？

「私も基本的にはうちのコたちと一緒にやし…管理局は人情人事をしてくれたんやね〜」

…あ…この話題って…

「…あれ？はやてちゃん、キョウスケ君から聞いてないの？」

「えっ！？キョウスケ君からって??？」

「…本当はヴォルケンリッターの皆と、はやてちゃんは別々の配属にするって一部の人達が騒いでいたんだけど…」

「ちょ！？エイミイさん!!」

慌ててエイミイさんを制止するが…遅かったか…

「えっ！？…もしかして…内緒だった？」

はやてを心配させないよいにしていたのに…

「…キヨウスケ君？何があつたんや？」

「あゝ…一部の高官たちが「闇の書の主と守護騎士を一緒にし、もし管理局に反旗を翻した場合を考えろ！！別々に配属するのが普通だろ！！」って暴言を吐いていたんだけど…それで、ちよつと僕が【説得】して一緒に居られるようにしただけだよ？」

うん、間違つた事は言つてないよ？

…説得した後、何人が鬱状態になつていたけど大した事じゃないよな？

「な、何や【説得】の所を妙に強調しとる所が激しく気になんやけど…そこは触れたらアカンような気が…」

『（はやて嬢、正解です！あれは…確実に放送コードに引つ掛かります！相手の命があつたのが不思議な位ですし）』

…何かまたインフィにツッコまれた気がするが…

「とにかく、はやては何も心配しなくてもいいよ？はやては僕が守るからさ」

「「なつ！！？」」

…ん？なのはとフェイトがビックリしたような表情しているけど…何か変な事言つた…かなあ？

「んふふ〜 キヨウスケく〜ん！それって、はやてちゃんに告は…ひいひい！！？」



エイミーさんが何か言いかけたその時！

「…エイミーサン？ナニカイイマシタカ？」

「…エイミー？妄想は程々に…ね？」

「じゃないと…うっかり手を滑らして…バルデッシュで切り刻んじやうかも？」

「なのはとフェイトからのどす黒いオーラの前に震えだした！？つかフェイト！？凄く物騒な事を言ってますか！？？」

「…ごめんなさ…い！…お願いだから…い、命だけは…！  
！…」

「エイミーさんも必死で謝ってるし…どんだけ怖がらせるんだよ！？」

「…ハア、キョウ君が原因って分かってるのかなあ…」

「ええっ！？僕の！？何でさ！？？」

「…はあ…」

「さらに溜息！？」

「…さあエイミーさん…」

「…大丈夫…ちょっと脳に電氣的な刺激与えて…もう変な事を思いつかないようにするだけだから…」

「いやいやいや！！？それ医学的にもダメだから！？」

…エイミーさん、貴女の事は忘れません！

「キ、キョウスケ君！！諦めないで助けてよー！ーっ！！！！！」

…教訓、不用意な発言は控えよう…

「ちよ…ま、まつ…キヤアアア！！！！？」

バチバチバチッ！！！！

…あ、逝ったか…

『まあ 毎度のギャグ補正で次回には復活してるでしょうが』

…ネタバレは程々にな…インフィ

S i d e O u t

「キヨウスケ君にプロポーズされてもうたキヨウスケ君にプロポーズされてもうたキヨウスケ君にプロポーズされてもうたキヨウスケ君にプロポーズされてもうた…／＼キヨウスケ君！私はいつでもOKや！！これはもう結婚式なんて悠長な事は後回しで、早速初夜に向かってベットへGOや！！！！…じゅるり／＼」

…は、はやてさん？な、何その肉食獣みたいな目は！？

お、落ち着いてー！ー！！？

模擬戦…なんだよね？

前回までのあらすじ…

エイミーさんが、なのは達にボッコボコにされてた…合掌！

「ちょっとー！！まだ生きてるよ！？」

…あ、無事だったのか…

キョウスケSide

エイミーさんの復活を待っていると…

「主はやて、こちらでしたか」

「はやて」

「はやてちゃん」

「あ、みんな」

シグナム達もこちらにやって来た

…ちなみにシグナム達は武装隊に所属しているが、基本はやての補佐である

「って、あれ？シグナムとヴィータの制服って…」

シグナムとヴィータが着ている服は、局の制服…ではないよな？

「ああ、これは武装隊甲冑のアンダースーツだ 局の女子制服は窮屈でいかん」

「まつ、こっちの方が楽だかな」

…まあ、この2人は…らしいっちゃらしいか

「…って！…そんな事よか、何でさくらが恭介と同じ制服着てんだよ！？」

「ほえ！？だ、だって私はキョウ君と同じFAITH所属になったから…」

「なっ！？聞いてねーぞ！？」

聞いてねーって言われても…ねえ？

「落ち着けヴィータ、全く神代の事となると落ち着かない奴だ…」

「うつせー！！恭介の事で騒がないで、いつ騒ぐんだ！？」

…ええ！？それって僕のせいなの！！？

「ま、まあヴィータ…さくらは僕の融合デバイスって事で同じ部隊になったんだから…」

…まあ、違う部隊に入れる気もないが…下手な所に配属になって…何かされたら大変だしな…

《（…キョウスケは身内には甘いですからね）》

べ、別にそんな事はないぞ！？リインフォース！！？

《（そう思っているのは本人だけです…これがツンデレと言う物ですか？）》

な、何でリインフォースからツンデレなんて単語が！？

《（インフィニティから聞きましたが…何か？）》

…よし、アイツバラそう！！そりゃもう、1つ1つ真心込めて解体してやる…！！

「ど、どうした恭介？何かこえー顔してっけど…？」

おっと！ついインフィニティの公開解体ショーを考え『（ちよ！？

ま、待つて下さいマスター！！？私が悪かったですから…ど、どうか解体だけはああああ！！？」…ちつ、仕方ない…なのはSRBの的で許してやるか…

『(ちょー！？それ破壊が確定されてません！？)』

…運が良ければ大丈夫ダヨ？

…そーいや、デバイスにも非殺傷設定つて効くのかなあ…？

『(い…いやああああ！！！？)』

…フツ、リインフォースに変な事を吹き込んだ罪だ…つとそれより…

「いや、何でもないよ？ごめんね、ヴィータ」

ちゃんとヴィータには謝っておかないとね

「…ま、まあ恭介に言われたらしゃあねーな…こ、今度…その…付き合つてくれたら許してやるよ／＼」

…付き合う？

ポクポクポク…チーン！！

ああ！！そんな事か！！

「まあ」「ちよー！？ヴィータ(ちゃん)！！ドサマギで何言つてる( )の( )んや！！？」ら…つて！？」

僕が答える前に、はやて・なのは・フェイトが詰め寄つて来た！？

「ヴィータちゃん…？相変わらずの抜け駆けっぷりだね？」

「ず、ずるいよ…私だって…その…キヨウスケと付き合いたいのに…／／」

「ヴィータ？別に付き合うんはええんやけど…私が常に最優先やで！？」

「お、おう！？（ガクガクガクツ！）」

…み、みなさん？そんなに殺気全開で詰め寄るからヴィータが怖がつてるじゃないか！！

「ああ〜！！皆ばつかりズルイです〜！！リインもダーリンとお付き合いたいです〜！」

「ん〜…キヨウスケ君とは大人のお付き合いがしたいわよね〜…そう思わない？シグナム？」

「なっ！？ななななぜ私にそんな事を聞く／／！！？」

「じゃあ…シグナムはキヨウスケ君と付き合いたくないのかしら〜？」

「い、いや…そ、それはだな…うう…／／」

…な、何だか皆…好き勝手に騒いでいるけど…

「あの、別に付き合う位いいよ？」



「……………へっ!?!」「……」

いや、なに皆してそんなに驚いてんだ?

「別に…買い物位、いつでも付き合っけど?」

「……………」

…あれ?時が止まった?

「……………」

…そ?…そうめん??

「……………」そんな事だろうと思ったよ——!!?!?!?!?!?」「……」

ええっ!?!?な、何か変な事言ったか?

《(き、キヨウスケ…鈍さに磨きがかかっていますよ…)》

…リインフォースにまで突っ込まれた!?

『(…まあ鈍感さは、どこのハイスピードバトルの主人公…織

一夏並の域に達してますよね)』

…いや、だからネタ発言は分からない人もいるから!?

何だかんだである後、結局なのは達とは買い物に行く約束をして…

「そういえば、シャマルさんは局の制服と…それはもしかして？」

「ふふ…なのはちゃん、やっと気付いてくれた？医療班は白衣もセツトで着てるんですよ」

ふ〜ん…世界が違えど、医療と言えば白衣は全世界共通なんだな〜

「と言う事でキョウスケ君？後で保健室でイイ事しましょうか？」

…いや、だから何がと言う訳なんだよ…

「…しゃ〜ま〜るうううう…」

ど、どこからか怨念を込めまくった声が…！！？

「あ、あら？はやてちゃん??地を這うような声を出して…ど、ど  
うしたのかしら〜？」

シャマルは動揺しまくりだな…

「私を差し置いて…保健室でナニしようとするんやー！…！！」

パシイイイイ！…！！

「い、い、ごめんなさ〜い…！！」

はやてがどこから取り出したハリセンでシャマルに突っ込み…っ  
てハリセンなんて何処から!?

「そら私の谷間からに決まっとするやないか?」

…いやいやいや!?!何当たり前の様に言ってるんです!?!?

…第一、今はやてにはまだ谷間なん…て…:…:…はっ!?!?

「キョウスケ君?何処を見とるんや?…キョウスケ君はえっちな  
」

「い、いや!?!その…:/」

…ついつい、はやての胸を…凝視してまった!?!?

「仕方あらへんなあ。…じゃあ続きは体育館倉庫で…:/」

はやてが僕の手を掴…

パシッ!?!

…掴む前に誰かの手ははやての手を払った!?!?

「…はやてちゃん?キョウスケ君を何処に連れ込む気かなあ…?」

「…はやて、第一ここには体育館倉庫なんてないよ?」

僕とはやての間に、なのはとフェイトが割って入って…な、なんか

凄いプレッシャーなんですが…

「…何や2人して…これからキヨウスケ君とイイコトする所なんやから…」

「…ふん…」

…ちょ!?!な、何か空気が重くなって…さなには険悪な雰囲気になつてないか!?!

「さ、3人とも落ち着いて!!シグナム達も見えてないで止めるの手伝って!?!」

何故から解らないが、一触即発の3人を止める為にシグナム達に助けを求めるが…

「…済まない神代…私では荷が重過ぎる…」

「…その中に入るのは…ねえ…」

「…つか、流石にあの中に飛び込む勇氣は…」

まさかの諦め!?!

「リンちゃんは危ないから私と一緒にいようね?」

「はいです さくらお姉様」

だ、誰も止めないのかよ!?!

《(キヨウスケが止めないのでですか?)》

…いや、リインフォースさん？流石にあの中に1人で入るのは…

「「「……………殺る?」「」」

つてオイ!?いよいよ物騒な事言い出してないか!?

唯一の救いは…確かなのは達のデバイスって今整備中だったんだよな…

よかった〜!!万が一、手元にデバイスがあるう物なら…今頃…

と考えていると!?

「あ、皆さんここに居たんですか〜…つて!?!?な、何ですか!?!?この浮気現場を彼女に見つかったような状況は!?!?」

マリーさんがこちらにやってきた!?

「あ、マリーさん…ちょっとした喧嘩…かな?」

「あ〜…またキヨウスケ君絡みですか?」

ぐっ!?!?否定できないのが悲しい…

「ところでマリーさん、何か?」

「あ、はやてちゃんの杖【シュベルトクロイツ】のVer8が試作機が出来たから、後でテストお願いしたようと捜していたんですよ」

…ちょよ！？今そんな話ししたら！！？

「…ほんまですか？喜んで試させてもらいます…ちよつど動くのも  
2つここに…フフフフフ」

は、はやてが黒ッ！？

「マ、マリー（さん）！？私のバルデッシュ（レイジングハート）  
は…！？」

「え、ええ…レイジングハートとバルデッシュも補強調整も終わっ  
たから…デバイスルームに…」

「今すぐ取りにいきますッ…！！」

ダッ！！

なのはとフェイトが瞬間加速イグニッションブーストの如く、デバイスルームに一直線に向  
かって…つか早っ！？

「…シグナム！ヴィータ！シャマル…！！」

「…は、はい…！？」

「今から…なのはちゃん達と模擬戦（争）や…！…もちろん景品は  
キョウスケ君やから気合い入れるで…！！」

なっ！？ちよつと待て…！？何で僕が景品なんだ？というか今、1文

字変な言葉が入ってなかったか!?

「な、なあはやて…少し落ち着いて…」

「負けられない闘いが…ここにあるんやー!?!」

って話し聞いてないし!? というかネタが微妙に古い!?!?

「…まあ何だ…神代よ、主もいつもの事だ…諦める」

「それかもう慣れるしかないわよ?」

「まあ心配しなくても私らが勝つから大丈夫だ!あの魔王コンビに  
恭介は渡さねーかな!?!」

…うわ…こっちもこっちでいつも道理た…何気にヴィータさ  
んもはやて並に気合い入ってるし!?!?

「ね、ねえキョウスケ君…これって私のせいなのかな?」

「……………マリーさん…恨みますよ」

「ええっ!?!?そ、そんなあ…!?!?」

…ハア…とりあえず…ケガだけはしないように…

Side Out





模擬戦争開始！！

管理局・戦闘訓練室

クロノ Side

僕は…何でこんな所に居るんだろう…？

あれはたしか…ユーノに資料を頼む為に無限書庫に行ったら…なのはが居て…そして急に拉致られて…って！？拉致って確か犯罪じゃないか！？

「えー、とゆー訳で…久しぶりの集団戦です」

「つて、ちょっと待てはやて！？色々とツツコム所があるんだが…とりあえず、何で僕までその模擬戦に参加させられているんだ！？いや！それ以前に、確か君達の今日のスケジュールには模擬戦なんてなかった筈だが…」

「うん…ザックリ説明すると…キヨウスケ君を賭けた闘いや！」

…な、何だ！？その人身売買に引つ掛かりそんな理由は！？

「…というか、またキヨウスケが原因か…」

あいつが絡むとロクな事がないな…うつ！胃が痛む…

「…ね、ねえはやて…そのキヨウスケは今何処にいるの?」

隣に居た…というか一緒に拉致られたユーノがはやてに尋ねると…

「あ、ユーノ君！キヨウスケ君は賞品だから観戦室にいるんだよ？」

代わりになのはが答えてくれたが…

「…なのは、君が参加するの?」

「もちろんだよ!!キヨウスケ君が賭かった大事な一戦なの!!だから…同じチームで協力してね?クロノ君にユーノ君ニッコ」

「うつ…ノノま、まかせてなのは!!」

…ユーノ、君はまだなのはに…はあ

「クロノ…今回はチーム戦だから…」

「フェイトも…参加していたのか…」

最近、僕の義妹になったフェイト…くっ!!あんな奴にフェイトを渡す位なら…わざと負けてはやて達にキヨウスケを…

「…クロノ?余計な事は考えないでね?でないと…うつかり背後か

ら攻撃しちゃうかも…だから…ね？」

…うん、やっぱり正々堂々と不正はしないでがんばろう！！

「それではルールを説明するで！

ルールは（一応）局の戦闘訓練準拠で、攻撃は（一応）非殺傷設定は言っに及ばず

武器持ちの子は相手のバリアジャケットを（一応）抜かんようちやんと威力設定してな」

…なんだろう…所々に不穏な単語が隠れていたような…

「リーダーは…ミッドチームはクロノ君！で、ベルカチームは私…八神はやてや！！」

…ああ、しかも僕がなし崩し的に僕がリーダーかあ…

…とにかく死人が出ない様にしないと…ああ、また胃が痛みだした…

Side Out

訓練室・モニタールーム

キョウスケSide

今回、僕は脇役かあ…

「キョウ君？キョウ君は脇役じゃなくて景品だよ？」

…ああ、現実に戻してくれてありがとう…

「貴方が神代君ね？噂は聞いているわ」

モニター室にリンディさんと一緒にいた女性…

「えっと…」

…誰だっけ？

「自己紹介がまだだったわね…レティ・ロウラン、これでも提督よ？よろしくね」

…ああ、確かはやてをゲットしたっていう提督だっけ？

「初めまして、独立部隊FAITH所属、神代恭介です…で、こっちが」

「キ、キョウ君のパートナーのさくらですッ！」

…ってさくら、緊張しているのか？

「貴方達の事はリンディに色々と聞いてるわ…まあ、管理局でも有名なだけど…」

「はあ…？」

そんなに目立つ事…したのかなあ？

「闇の書事件の実質的な功労者、管理局に入局すると同時にダイテツ副元帥直属部隊、対アインスト部隊FAITHに任命され、さらに副元帥と同等の階級って有名にならない方がおかしいわ」

「まあ、改めて聞くと…本当にとんでもないわよねえ」

リンディさん、言われなくても十分解ってます…

「…でも気をつけた方がいいわよ？一部では快く思っていない人もいるから」

…まあ、組織だからな…いきなり大出世なんて反感しか買わないからな…

「まあまあ…キヨウスケ君も十分気をつけてるから大丈夫よ？」

「…そうね、彼の實力なら簡単に返り討ちにするでしょうし…」

…まあ、確かにそこは否定しませんが…

「まあ…それ以前に神代君に何かあったら、局の【神代恭介ファンクラブ（仮）】の女性局員が総力を挙げて、手を出した人物に報復するでしょうね」

……は？

「ちょ！？待つて下さい！！？何です？その危ない過激派は！？」

……確かに以前にクロノからファンクラブがあるとは聞いていたが…

(本人未公認)

「あら？そんなに過激かしら？」

まあ…確かにその気になったら、キヨウスケ君の一声で女性局員全員で本局位は軽く制圧しちゃうかしら？」

「そうねえ…否定できないのが怖いわね」

そこは否定してくださいよ！？

「あ！キヨウ君！！はやてちゃん達、始めたみたいだよ？」

はあ…まあ、気を取り直して…

僕がモニターに視線を移すと…

バキツ！！ドカツ！！ドコオオオオ！！！！

……なあ、アレってホントに模擬戦？

「くっ！？大人し的に…なるの！！！」

ドカアアアア！！！！

「アホか！？そつちこそ…ブツ潰れやがれー！ー！ー！ー！」

バキィイツ！！

「隙あり！！バルデッシュ！！！」

ザンツ！！

「甘い！？甘いでフェイトちゃん！！砂糖に練乳かけて食べる位に甘々やー！！」

ドコオオオオオ！！！！

通信機から聞こえる声…うん、絶対に模擬戦のレベル越えてるな…  
というかアレ非殺傷設定か！？

見る！あのバトルマニアのシグナムだってドン引きしてるし！？

「はわぁ…はやてちゃん達、凄いですね〜」

…というかやり過ぎだろ…って！？

「リイン！？いつの間に！？」

全然気付かなかった…

「リインはまだ経験不足で危ないから、はやてちゃんに見学するよ  
うに言われたです！」

…まあ確かにリインは経験値が足りないからな〜

「まー…何と言うか…若い子達は元気ねえ」

「いやいや！あれは元気というか、何か殺伐としていませんか！？」

「そうねえ…仕事でもトレーニングはしてるでしょうに」

「今が伸び盛りだから技術向上が楽しいんでしょうね」

「…それにしても、闇の書事件って第1級ロストログア関連事件なのに…終わってみれば死者0名

おまけにレア能力付きの魔導騎士と即戦力レベルの配下4名までゲツトして…極め付けに、一気に管理局高官にまで駆け上がる人材が1名…」

「リンディさんとレイさんがモニターの戦闘を見ながら話しているけど…最後のは確実に僕の事だよな…」

「リンディ提督は一体どんな奇跡を使ったんだって噂になってるわよ?」

「あらまあ…奇跡かどうかかわからないけど、あの子達はなんとも頼もしいわ…」

「あの子達があつと大きくなって、部下とか教え子を引き連れて一緒に事件や捜査に向かって行くようになったら…世界はきっともう少し平和で安全になるかもね」

「…子供を戦場に立たせて得られる平和…か…」

「まあ、それはともかく」



「…お二人とも…それはいいんですけど…今現在の訓練室がちょっと…というか、かなり危険度絶賛上昇中ですよ？」

「「えっ!?!」」

…ありやく訓練室の結界持つか？

S i d e O u t

## 訓練室

はやく S i d e

「…はあ…はあ…」

よ、予想はできつつたが…なのはちゃんとフェイトちゃん、連携攻撃がかなり出来とるなあ…

私らも何とか対抗しとるが…くっ!?!?

「さっきから邪魔やー!?!?!何やこのディレイドバインドの山は!?!?!」

動く度に発動しおつて!?! …… こんないやらしい設置の仕方するんは…ムツツリスケベのKYしかおらん!?!」

「だっ!?! 誰がムツツリだ! 誰が!?!」

「ありや!?! 何で考えてた事がクロノ君にバレとるんや!?!」

「…………… 主よ、途中から声が出ていました……………」

しまった!?!? つい心の声がダダ漏れに!?!? …… というか、ザフィーラ…………… 居たんや……………」

《Stand by ready charge set》

なんて漫才しとつたらレイジングハートから不穏な声が!?!?!

し、しもつた!?!? バインドに気を取られすぎてもつた!?!!

「…………… フィールド形成! 発動準備完了ツ!?!」

あかん…………… なのはちゃんの一撃が…………… 来る!?!?

「お待たせしました…………… おっきいのいきますっ!?! フェイトちゃん!?!」

「…………… 二つちもOKだよ! なのは!?!」

つて2人掛かりで合体技かい!?!?

キイイイイイン！！

「N&amp;F中距離コンビネーション！！空間攻撃ブラスト  
カラミティツ！！」

…確かにあの2人の合体魔法は強力やろうけど…！

「どっこい、こっちも既に詠唱完了や！！こっちにも広域攻撃Sラ  
ンクの意地があるんやで！！」

「全力…全開ツ！！」

「疾風迅雷ツ！！」

「響け！！終焉の笛…ラグナロク…」

「…ブラスト…シューー…トツツ…！！」

ドコオオオオオ！！！！！！

「うわあああ！！！！」

Side Out

キヨウスケSide

ドコオオオオオ!!!

「うわっ!？」

「け、結構揺れたな!？」

「あわわわわ」

「リインちゃん!？大丈夫!？」

「ら、らいじょうぶです」

「今、訓練室が大爆発してなかったか!？  
というか…生きているのか!？」

「リンディ提督!レティ提督!僕、急いで救助に行きます!！」

「えっ!？えっと…こついう場合は…」

「リンディ!！落ち着きなさい!！神代君、お願いします!！」

「大丈夫とは思うけど…急がないと!！」

「ま、まってキヨウ君!！私も!！」

「リ、リインも一緒に行くです!！」

「分かった！！2人とも手に掴まって！！」

僕は2人の手を掴み、訓練室に直接転移した！！

シュン！！

## 訓練室

シュン！！

「皆！！無事…かあ！？」

ボロボロになつた訓練室の中で僕が見た物は…

「私の攻撃が決まつたから私の勝ちなの！！」

「ちょ！？な、なのは！？私との連携攻撃なんだから…なのはが勝ちなら私も勝ちだよ！？」

「何言つとるんや2人とも！？私の攻撃が2人の攻撃を押し返して決まつたから私の勝ちや！！」

…あ、あんなに派手にやらかしたのに…まだあんな元気あるんかい

!?

「…キ、キヨウスケ君…」

「シ、シヤマル!?大丈夫か!?というかバリアジャケットがボロボロじゃないか!？」

「さ、3人の攻撃を抑えようと結界を張ったんですけど…」

…予想を超える威力に結界が持たなかったんだね…

「そついえばユーノやクロノは?あの2人…というかユーノは結界魔法が得意な筈だから…」

シヤマルと2人なら防げたと思うんだけど…

「…ユーノ君達は…真つ先になのはちゃん達の攻撃がぶつかった余波で吹っ飛んじやいました…」

そ、そついえば…何やらなのは達の攻撃がぶつかった時に悲鳴が聞こえたような…というか、クロノ&ユーノ…もう少し頑張れよ…既にやられキャラになってないか!?

「…恭介え…」

「グイータ!?大丈夫か?」

「も、もうダメかも…」

ちよ!?!い、急いで回復魔法をかけ…

「た、頼む恭介…だ、抱きしめてくれ…／＼」

「わ、分かった!」

ギョツ!!

「…んん／＼」

…あれ?何で回復魔法をかけようとして…ヴィータを抱きしめてるんだ?

ゴゴゴゴゴゴゴゴオ…

…な、何か僕の背後から…物凄い勢いで魔力が上昇しているのが解るんですが…

「…キョウスケ君?ヴィータちゃん?何舐めた事してるのかあ?」

「…フフフ…2人とも…ダメだよ?そんな事しちゃ…」

「…ええ度胸やなあ…私らが戦ってる間に抜け駆けしてそんな…羨ましい事を?…覚悟はええか?2人とも?」

…ああ、とても素敵な笑顔で恐ろしい事を…

「つて!?!ま、まで!?!3人とも!?!そ、それはマジでシャレにならないぞ!?!」

3人がデバイス片手に魔力を高めてるんだ!!!あ、あんなのを食ら

つたら…

「ああ…／＼我が人生に悔いも後悔もね…／／」

いやいやいや！？そこは後悔しようよ！？つか逃げない！？

…ガチッ！！

「へっ！？バインド？いや…これは風！？」

風が僕とヴィータを拘束して…ま、まさかこれは！？

「…キョウ君、私も抱きしめてもらった事ないのに…ヴィータちゃん…ヴィータちゃん…」

…さくらの風ウインド！？

「…キョウ君には少しお仕置きが必要だね（ニコッ）」

…ああ、さくらの性格が段々なのは達に似て来ているのは気のせい  
か…？

「」「」…フッフ…トリプル…ブレイカーアアア…！！」「」「」

ドカアアアアア…！！

…この後、どうなったか僕の記憶にはまったく無く、気がついたら…



病室

『…しかしマスター、よく生きてましたね〜』

《…さすがに今回はダメかと思いましたが…》

………僕もそう思うよ…

僕はベッドの上で目を醒まし…

「はい、キヨウスケ君 あーん」

「キヨウスケ、こっちのプリンの方がおいしいよ？はい、あーん」

「2人とも！キヨウスケ君の看護は私が1人でやる言つたやろ！？」

あ、キヨウスケ君 あーんや」

…なのは・フェイト・はやてに看病されてます…

「おいこら！！はやて以外は恭介にあーんすんじゃねー！！！！」

「大人しくしているヴィータ！…まったく…」

「そつよヴィータちゃん…非殺傷設定だったとはいえ魔力ダメージがまだ残ってるんですから…」

「………尤も、そのダメージは自業自得のような物だがな…」

…ちなみにもう一人の被害者？ヴィータは僕と同じ病室で隣のベッドで暴れていた…いや、安静にしようよ？

「くっそー！！体が動けば…私だって…私だってあーん出来んのにー！！！！？」

…いや、だから安静に…

ガラッ！！

「あー！！！！！！3人とも！！キヨウ君の看病は私達がするっていったよね！？」

「そうです！！ダーリンの看病は、さくらお姉様とラインがするです！！！！」

…何か知らない間に誰が僕を看病するかもめている？

「それになのはちゃん達はこれから訓練室の修復のお手伝いでしょ！？」

「クッ………そ、そうだった…orz」「」

後で聞いた話によると、訓練室を大破させた直接的な原因の3人に修復をさせていたらしい…

「…なのはちゃんが手加減せえへんかったからや」

「にゃあ！？は、はやてちゃんだって手加減してなかったの！！」

「…私は2人が手加減してなかったせいだと思うよ？」

「…フェイトちゃんだって手加減してなかったの（やる）！！？」

…というか、手加減抜き攻撃を僕にぶっ放したんかい！？

ガラッ

「来るのが遅いと思ったたら…随分元気が有り余ってるようだな…」

「…ク、クロノ（君）！！？」

かなり不機嫌そうな顔でクロノが部屋に入ってきた

…そーいやクロノってあの模擬戦で無事だったのか？

「…真っ先に彼女達に吹っ飛ばされたのが幸いして、それほどダメージを受けなかったんだ…」

…何か嫌な助かり方だな…

「ねえクロノ！？何でヴィータがキョウスケと同じ病室なの！？」

「そ、そうだよクロノ君！？そんなのズル…じゃなくおかしいよ！

「！

…フェイトとなのは何かクロノに詰め寄っているけど…

ピシッ

あ、クロノの不機嫌度が増した!?

「君達が放った攻撃で、一般局員にも被害が出てな…その一般局員を搬送して病室が殆ど埋まってしまつて…というか君達のせいであつたということをおぼろげに覚えてほしいんだが…(怒)」

「「「うっ…(汗)」」」

…ああ、巻き添いになつた局員のみなさん…何かごめんなさい…

「さあ、母さ…リンディ提督も待つているんだ…いくぞ!」

「うっ…」

「し、仕方ないよ…なのは」

「こつなつたら…速攻で直してアイシャルリターンや!」

「待つてねキョウスケ君!すぐ戻ってくるからね!」

そう言つと、なのは達は急いで部屋を出ていった…

「では神代、私達も一度帰宅する」

「キョウスケ君?ヴィータちゃん?今日一日安静にしてくださいね?」

「……………ではリンにさくら、キョウスケとヴィータの事、頼んだぞ?」

「うん！まかせて！！」

「リインにおまかせです！！」

シグナム達も帰っていった…まあケガと言っても大事をとって一日入院だからな…

「じゃありインちゃん、クロノ君からお見舞いで貰った果物でも切るうか？」

…へえ、クロノがお見舞い持ってきたんだ…珍しい

「あ、でも果物ナイフがないです…」

「じゃあ…キッチンから借りてこようか？」

「はいです…」

「キヨウ君、ヴィータちゃん！ちょっと待っててね？行くつりインちゃん」

「はい」

ガラッ

…ふう…さっきは賑やかだったのに…急に静かになったな

「…き、恭介…」

「ん？何だヴィー…って！？な、何やってるんだ！？」

まともに動けない筈のヴィータが、何を思ったかベットから起きてフラつきながら僕のベットまで歩いてきた！？

「無茶すんなよヴィータ！？まだ体が動かないんだろ？」

「ち、ちよつと位なら大丈夫だ…そ、それより…／／」

そう言つとヴィータは先程までなのは達が持っていたプリンを手に取り…

「ほら…恭介…あ、アーン…／／」

つて！？わざわざアーンする為に無茶したのか！？

「やっぱ…はやて達がやっている所見てんと…その…我慢できなくなつてな…／／そ、そんな事よりホラ！！早く食べるよ！！」

まったく…ヴィータは…

「あ、ああ…じゃあ…アーン…」

パクッ

ガラッ！！

「「ああああー！！！！？」」

食べると同時に扉が開き…って病室なんだから静かに！

「ヴ、ヴィータちゃん…それは…リインがやりたかったのですのに〜  
〜!!!!」

「ヴィータちゃんもケガ人なんだから安静にしてないと!!!!という  
か、私もキョウ君にあーんってしたいのに〜〜!!!!」

…しかし、何で皆はあーんがしたがるのかな？

「さくらお姉様！リイン、突貫します!!」

……へ？

「行くですよ？ダーリン!!」

そう言うリインは先端に果物が刺さったフォークを担ぎ…ってちよ  
つと待て!?!突貫ってまさか…

「とおりやあああ!!」

やっぱし飛んで突っ込んで来た…!!!!?!

ガキン!!

な、何とか見切って歯でフォークを受け止める事に成功!!

「どうですかダーリン？おいしいですか？」

「ひ、ひいんしゃん!!はふなひふあらひゅっふひ…」

「…恭介…何言ってるかわからねーぞ？」





…僕とヴィータの入院期間が延びたのだった…

ちなみにこの後、病院の方で被害がでないようにと完全隔離をされて静かな1週間をおくったのだった…

S i d e O u t

瞳の先に映るものは…

管理外世界

キョウスケSide

「（キョウ君！！右に5体接近！！）」

「ああ！食らえ…メテオザッパー！！！！」

「『『『『『』』』』』』」

ドカアアアア！！

「……………ふう、これで最後か…」

「（お疲れ様、キョウ君）」

みなさんこんにちは 神代恭介です

今回はとある任務…FAITH本来の職務であるアインスト討伐の

為、無人世界に來ています

「（でも、折角今日はキョウ君達の中学校の入学式だったのに…）」

「ま、別にいいさ…入学式なんて転生前に経験済みだし…それに、それを言ったらなのはもそうだろう？」

「（うーん…なのはちゃんも可愛そうだよ…もう！！管理局の人は何考えてるの！？）」

…ま、どうせ上は何も考えてないんじゃない？

…ん？読者の方には話しがイマイチ見えない？

そうだな…あれは数時間前…

## 回想

今日は僕らの中等部の入学式！

まあ、僕にとっては2度目の中学生活が始まるんだが…

「…で、はやて…何で僕と腕を組んでいるんだ？」

はやてと家を出た途端に僕の腕を取り、それなりに發育した胸の谷間に…って!?

「もちろんキヨウスケ君と腕を組みたいからに決まっとなるやる?」

だから何その【そこに山があるから登るんだ!】的な理論!?

「それにキヨウスケ君も気持ちええやる」

…た、確かに腕に柔らかい感触が…って!?

「そ、そんなことナイジヤナイデスカノ!?!」

「…なあ〜んで片言になっとなるんやろ〜なあ〜?」

…いや、もうホント勘弁して下さい…朝から理性がああ…

『（…マスターの肉体年齢を考えれば…そろそろ思春期に突入ですね…クツクツク…）』

…あ、今何か無性にインフィニティを解体したくなっ たな…

「あ、なのはちゃん達や!なのはちゃん!!フェイトちゃん!」  
「!」

「「あ、おは…よ……………」」

待ち合わせをしていたなのは達と合流し…ん?なのはとフェイトがこちらを向いてフリーズしているけど…???

「……ねえ、はやてちゃん…朝っぱらから何してるのかなあ…?」

「え?見ての通り、キヨウスケ君に私の胸を堪能してもらってるんや」

ち…ちよ!?!はやてさん!?!何サラつと問題発言してるんですか!?!

『(でも事実は間違ってますよね?マスター?)』

…くっ!?!反論出来ない自分が憎いイイ!!

「キヨウスケ…その…私の方が…はやてより胸大きいから…言ってくれば…その…ね?ノノ」

フェイトさん!?!貴方もかなりの問題発言してませんか!?!

「あー!!抜け駆けはズルイよフェイトちゃん!!私だつてはやてちゃんよりは発育してるの!?!」

…前々から思っていたんだが、僕の前でガールズトークするのは何故ですか!?!

「…くっ!?!わ、私かてまだまだ成長期なんや!?!いずれは2人を追い抜いてやるで!?!」

…いや、多分原作的に無理なんじゃあ…?

「…ナニカユウタカナ?キヨウスケくん?」

「い、いえ！？いやだな！何も言っていないヨ？はやて」

…あつぶねー！！危うく死亡フラグ立てる所だった…

「と、ところで…アリサとすずかはどうしたんだ？確か待ち合わせで行こうって言った張本人の筈なのに？」

何とか強引に話題を変えて、なのはに聞いてみると

「にやはは…アリサちゃん達は…あ、来たみたい！」

なのはの視線の先には…黒い車体のリムジンが走って来た…つか無駄に長っ！？

「おはよー！なのは・フェイト・はやて…とついでにキョウスケも！」

…って僕はついでかい！？

「アリサちゃんったら…ごめんねみんな、遅くなっちゃって」

確かにアリサはともかく、すずかが時間に遅れるって珍しいな…

「アリサちゃんったら、髪型が上手くいかないって何度も直してたから…キョウスケ君に笑わ「ちょ！？すずか！？なななななななに言ってるかなあ！？」あ、アリサちゃん！？わ、解ったから頭！頭を揺らさないでーえ！！？」

何やら慌てたアリサが、すずかの頭を派手に揺らして脳みそシェイクしてますが…すずかの脳細胞が混ざるからやめてやれ…

「…ハア…ハア…と、所でキヨウスケ！！何でアンタは、はやてとくつついてるのよ！？」

…あ、そーいやまだはやてに密着されてたんだっけ！？

「あ…いや、はやてが「キヨウスケ君がおっぱい触りたい言うからこうしてくつついてるんよ」「って！？何テキトーに捏造してるんだ！？はやて！！」

プチッ！！

あ…何かキレた音が聞こえたよ…

「ぬあああんですつてええええ！！！！！」

…修羅だ！修羅神がいるよ！？

「「キヨウスケ（君）！！私のも触って！！（なの）！！」」

って！？2人とも！？何ブレザー脱いで迫って来てるんですか！？

「……………うつつ…私はちよつと…まだ…くすん…」

すずかは何やら一人落ち込んでいるけど…今はこの危機的状況を何とかしないと！？

このままじゃご近所中に僕が変質者と認識されてしまう！？

と、考えていたその時！

ピッピッピッピッ

『マスター、FAITHより緊急通信です!』

緊急通信?ま、まあとりあえず助かった!!

「……チツ、仕事か」

…アリサさん…舌打ちは女性としてどうかと思っが…

ピッピッピッピッ

「ふえ!?!私も!?!」

…なのはレイジングハートからも緊急通信の呼出しが…ま、とりあえず出るか

「はい、こちらアサルト1」

…ちなみにアサルト1はFAITHにおける僕のコールサインだったりする…ちなみにアサルト2はさくらだ…

「キョウスケ君!こちらスクルド!」

…いや、スクルドさん?サラッと真名バラしてません?

「…コホン!こちらレフィーナ!緊急事態よ!無人世界にアインスト反応が現れたわ!!」



…サラッと無かったようにスルー…ってアインスト!!!??

「本当にアインストなんですか!??」

「ええ、識別はアインストクノツヘンが多数…今も数を増やしているわ!」

…クノツヘンか…下位クラスなら数は問題ないが…面倒だなあ…

「分かりました。座標データをインフィニティに転送して下さい」

「了解よ!さくらちゃ…アサルト2は先行して現場に向かっているから合流して」

…クノツヘンなら、さくらだけでも十分対応できるからな

「了解!」

さて…と

「キョウスケ君…アインストが現れたんか?」

「ん?ああ…」

「私も一緒に行こか?」

「大丈夫だよ、さくらも先行しているし…それにはやてはこれから入学式だろ?」

「それを言ったらキヨウスケ君もそやる？」

「ま、僕は正式な仕事だからね。はやては気にせず学校に行つてほしいな。」

せつかく足が完治したんだし…はやてには今までの分を取り返すと  
言う意味で色んなイベント事には参加してほしいんだよな…

「…キヨウスケ君…分かったけど、何かあつたらすぐに呼んでな？  
超特急で駆け付けるで！！」

「フツ…その時は頼むよ。」

「ツノノ！！？ま、まかしときノノ！！（キ、キヨウスケ君…カツ  
コエエ…ノノ）」

…ん？はやての顔が真っ赤だけど…風邪？

「……解りました！すぐに現地に向かいます。」

つと、なのはの方も仕事か？

「なのはも出動か？」

「うん、ヴィータちゃんと合流してロストログリア反応があつた場所  
の調査を…」

…なのはさん？部署が違うのに任務内容を話していいのか？…ま、  
いいか…

それより…

「そっか…じゃあなのは、毎度の事だけどコレを忘れずに」

僕はなのはに液体の入った小瓶を渡した…中身は…

「にははは、ありがとうキヨウスケ君」

「ねえなのは、キヨウスケから何貰ったの？」

「えっ？これはキヨウスケ君特製の回復薬だよアリサちゃん」

「私らもキヨウスケ君からはちよくちよく貰ってるで、なあフェイトちゃん？」

「うん…どんなケガも魔力も回復してくれるから助かってるんだよ」

…中身はラストエリクサーなんだけどね！

一応、皆にも何本か持たせているが…本命は、なのはの墜落事件対策なんだよね」

…そもそもアレは、なのはの無茶なオーバーワークが原因だが…ラストエリクサーを飲んでいれば体力的には万全になるし、最悪エリクサーがあれば直ぐさま回復できるしな…

一応ヴィータにもそれとなくなのはの事は注意して見ていてくれと言っているが…（その際にヴィータに「何でだ！まさか浮気か！？」と問い詰められたが…ま、今度買い物に付き合っつて事で納得して

くれたが…）幸い、それらしいイベントは発生せずにいるが…何とか回避できたのかなあ？

「ふうん…相変わらずの過保護っぷりね…（いいなあ…なのは達魔導師組は…私も…魔法が使えるば…キョウスケも…）」

…ん？

「どうしたアリサ？何か暗い顔をして…」

「なっ！？何でもないわよ！！アンタこれから仕事なんですよ！？早く行きなさいよ！！」

「あ、ああ…じゃあはやて・フェイト・すすか、行ってくるよ」

「気をつけてな？」

「行ってらっしゃい キョウスケ」

「無理はしないでね？キョウスケ君」

「にゃあああ！！？ま、待ってよ…キョウスケ君！！途中まで一緒に行くよ…！！」

回想終了

と、まあそんな感じで後はさくらと合流・ユニゾンして、アインストの群れを討伐したのだが…

『ッ！？マスター！！前方に空間の歪みが！！』

えええ…まだアインストが出て来るの！？

ザザッ　　ザッ

「（キヨウ君！！ヴィータちゃんから通信が！！）」

ヴィータから？何だろう？

「…どうしたヴィータ？」

「恭……………大……………なの……………赤……………！！」

…通信状況が悪い？

《キヨウスケ…どうやらこの辺り一帯の空間が歪んで通信機能が正常に働かないみたいです》

「リインフォース、原因は解るか？」

《…いえ…ッ！！キヨウスケ！！前方の歪みから魔力反応が！！パタンからアインストと思われるが…未確認の反応です！」

…未確認…アインストアイゼンか！？

グオオオオオオオ…

『マスター…来ます!!』

そして空間から現れたのは…

「……………なるほど、レジセイアモドキも現れたんだから…アレも現れる可能性もあった訳か…」

現れた者…それは真っ赤な鎧に身を包み、その両肩には特徴的な鬼の面を携えた…

「……………ペルゼイン・リヒカイト…か」

…僕の中学生生活は、この波瀾から幕開けしたのだった…

S i d e O u t

T o B e c o n t i n u e d

## 変化する未来

前回までのあらすじ…

中学生生活が始まろうとした矢先、任務で管理外世界に発生したアイ  
ンストを討伐に来た僕達…

そこに突如として現れた者は…

キョウスケSide

ペルゼイン・リヒカイト…

いや、アインストが現れている時点で予感がなかった訳じゃないが…

「（キ、キョウ君！？あれってまさか…）」

「…ああ、上位クラスの相手だな…」

…ん？でも何か違和感が…？

「……………」

「……………ん？」

…しかも一行に動く気配がない？

『…動きませんね？』

「…でかい図体で動けないとか？」

いや、まさかそれはないよな

《（…でかい？キョウスケ、相手はキョウスケと同じ位ですが？）》

そっか、僕と同じ位ならけっこうな大き…って！？

「えええっ！？」

改めて見ると…あ、ホントだ！ 実物大じゃないんだ…

「……………キョウスケ…見つけましたの…」

ツ！？ペルゼインから声が！？

「（キョウ君！？今の声ってあの赤い人から！？）」



…どうやらサイズ的には多少の違いはあるが…意思はあるようだな…  
…ん？ちよつと待て！？

今の声って…ケロリン…じゃなく！水谷ボイスじゃなかったような…

『（また一部にしか分からないネタを…）』

…インフィはスルーして…

『ちよ！？またスルーですか！？』

…ゴホン！

しかし、あのペルゼインから聞こえた声…どこかで聞いたような…  
ああ！…思い出せない！？

「…キョウスケ…私の…気になる人…ようやく見つけましたの…」

またペルゼインから声が…って何！？

いやいやいや！？少なくとも初対面ですよね！？

「（…キョウ君…また何処でフラグを…）」

《（…一体いくつ立てれば…）》

『…と言うかアインスト相手にフラグですか…もはや何でもありですか？』

だ、だから知らないって！？

「おい！？その機体！！変な事言うな！！てか初対面だろ！！？  
っ！か何者だ！？」

「…ああ、この姿じゃ分からないですね…今、バリアジャケット  
を解除しますの」

…つかそれバリアジャケットだったのかよ！？

「はい、フルスキン全身装甲型ですよ？」

…しかも何気に心読むし！？

ピカッ！！

ペルゼインから光が溢れ、その光の中から現れた姿は…

「…えっ…？」

僕の予想をとは違い…水色の髪はそのままだが、その顔立ちは紛れ  
も無く…

「……………ティアナ…ナ…？」

年齢的に僕と同じ位の姿をしたティアナ・ランスターがいた…

S i d e O u t

管理外世界

ヴィータSide

クソ！クソッ！！クソッ！！クソッ！！！！！！

何で…何でこんな事になっちまったんだっ！！！！

「……から……だい……じょうぶ……」

私の腕の中で…白のバリアジャケットを血で真っ赤に染めたのはが…ッ！！

「しっかりしろ！！なのは！！！！」

「…ゴメン…ヴィータ…ちゃん…油断…しちゃった…ゴホッ！！」

「なのはッ！！！！」

ちきしょう…あのお面ヤロー！！！！

クソッ！恭介に貰った薬が残ってれば…！！！！

恭介ならこんなケガ直ぐさま治すのに…私は…何で無力なんだ…

「医療班っ!!何やってんだよっ!!早くしてくれよ!!じゃねーとコイツが…!!」

…ちきしょう…恭介との念話も急に切れちまうし…念話?までよ?前に恭介が…

## 回想

## 八神家

「……つと送信と」

「???なあ恭介、はやての仮契約カードで何してんだ?」

「ん?ああ、これははやてにメールを送ってるんだよ」

「メール?はやてだったらキッチンに居るじゃねーか?」

「…ああ、これは平行世界のはやてに送ったんだよ」

「平行世界って…前に高町なのはと行ったっていう…」

ガチャ!

「そ、そうだけど…ヴィータ?何でアイゼンを構えてるんだ?」

「いや、何となく高町なのはって聞いてイラッとしたからだ　気にすんな」

「気にすんな…って、あきらかにソレを振り下ろそうとしていた人に言われても…」

「ま、それよか何でメールなんだ？カードの通信機能使えばメールなんてまどろっこしい事しないで直に話せんじゃ…ま、まさか！？向こうのはやてにエロ写メくれとか言ってたのか！？」

「いやいやいや！？違うから！？違うからアイゼンをラケーテンに変形させないで…！？」

「じゃあ…何でなんだ？」

「この仮契約カードの通信機能は世界の壁を越える程強力なんだけど…さすがに通話は難しいんだよ…まあ平行世界とかとんでもない場所じゃなければ、何処に居ようが通話妨害とか圏外とかなく通話可能なんだけどね」

「ふうん…まあ私らには念話があんだしあんま使わねー機能かもな」

「まあ…それを言ったら身も蓋も無いけどね」

「キヨウスケ君〜ヴィータ〜ご飯やで〜」

「お、じゃあ行くっか？」

「おうー！ご飯！ご飯」

回想終了

…仮契約カードの機能ならもしかして…

「恭介っ！！聞こえるか！！恭介！！頼む！応答してくれ！！」

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

「…な、何でティアナが…」

「（キヨウ君…あの子って…確か原作キャラの…）」

「…ああ、ティアナ・ランスター…だけど、彼女はまだこの時間系列では出てこない…というか年齢的に僕と同じなんで有り得ない…」

ティアナは僕よりは年下になるなら…今、僕の前に居るティアナの姿は…それにあの髪の色…どうなってるんだ！？

「…ふふふ…キヨウスケ…そんなに見つめられると…テレますの／＼」

…って何赤くなってるんすか!?

「（…キヨウ君…とても初対面には見えない反応なんだけど…身に覚えはないのかなあ？）」

いや!?!マジで無いって!!

「…キヨウスケ…今日はご挨拶にまいりましたの…やっと動けるようになりましたので…」

「…とりあえず君の名前とか聞かせてくれるのかな?」

何にせよ、情報は手に入れないと…

「…忘れてしまったのですか?…ああ、こちらが忘れてましたの…今はこちら側で私の基となった人の姿でしたの…私はアルフェミイと申しますですよ…」

…やはりアルフェミイ…しかし、何か前から僕の事を知ってる口ぶり…

…ん?ちょっと待て!?

今、何かとんでもない事をサラっと言ってなかったか!?

たしか…今の姿は…こちら側の基になっ…た…って!?

…確かゲームのアルフェミイは…エクセレンの…ま、まさか…

「……アルフェミィ…ティアナに何をした？」

まさか…ティアナの身に…

「…ふふふ、それは秘密ですことよ？キョウスケ…」

…そうそう切り札は切らない…か

「…あくまでだんまりか…なら…力づくで聞き出すだけだ！…インフィニティ！！」

《Load Cartridge》

ドキュ…！

僕はカードリッジを使い臨戦体制に！

「あら…短気は損気ですよ？」

「言ってる…！」

アルフェミィの動きを注意しつつ、インフィニティを構え何時でも仕掛けられるようにしていると…

「ふふふ…でも残念ながら今の私は動く事が精一杯…出来る事は不意打ち位です…」

…ブラフか？油断させようか？



「…不意打ちを喰らう程油断しないさ…」

「…ふふ、そうですね…先程の魔導師とは違い、スキがないのです…流石キヨウスケ…」

「先程？…どういう意味だ？」

「フフフ…こういう意味ですよ？」

カチャ

アルフェミイがそう言うと言った手にした血に染まった刀を構えて…血！  
？誰か襲われたのか！！？

「恭介っ！！聞こえるか！！恭介！！頼む！応答してくれ！！」

ヴィータからの通信！？それにこれは…かなり慌てているけど？

「（…ヴィータ、どうした？）」

「キヨウスケ！？繋がった！！た、大変なんだ！！なのはが！なのはがッ！！」

「（…落ち着けヴィータ！！なのはがどうしたんだ？）」

「なのはが…大怪我しちゃった！！」

…ッ！！まさかそれって…原作のアレか！？回避は無理だったか…

「（落ち着け、万が一にって渡してあったラストエリクサーを使えば大丈夫だから）」

…とはいえ、万が一がホントになるとは…

「（そ、それがよ…なのはのやつ、先発隊と合流した時に見かけた重傷者に全部使っちゃまって…）」

…え

「なのはの奴…自分は大丈夫とかいいながら使っちゃまって…その後遺跡を調査してたら変なアンノウンが出て来て、何とかそいつらは全部ブツ潰したんだけど…その後に現れたお面ヤローが…なのはの背後に急に現れて…なのはが…ヤツの刀に切られちゃった…すまねえ 恭介…護れなかった…」

…何だって…？

「…ヴィータ、お面ヤローって…両肩に般若の面がある赤い姿をした奴か？」

「あ、ああ…って何で恭介が知ってんだ!？」

「…インフィニティ」

『はい…スキャンした結果…あの刀に付着した血のDNAパターンが…なのは嬢と一致しました…』

…ッ!…嫌な予感的中しちゃったな…

「…アルフェミィ…貴様…なのはを…」

「…なのは？…ああ、あの魔導師の事ですか？お仕事のジヤマでしたのでご退場願いましたの…」

…じゃあ何か？アンノウン（ガジェット）に襲われ大怪我するイベントは回避できたが、イレギュラーな介入…アルフェミィに襲われたって事か！？

「ッ！？恭介！！なのはがまた血を！！」

くっ…現状はアルフェミィよりなのはの治療を優先しないと…その前に…

「…アルフェミィ！！お前の目的は何だ！！？」

「…ふふふ…それは……残念ながらクライアントから早く帰還するように言われましたの…早く手に入れた品が見たいそうですの…」

「クライアントだと！？」

アインストが雇われてるとでも言うのか！？

「はいですの…名残惜しいですけど…これで失礼しますの…」

「（キョウ君！！また空間に歪みが！！）」

アルフェミィの姿が歪みの中に消え…

「…そうそう…キョウスケ…これから末永いお付き合いになりそうですの…」  
「きげんよう…ですの」

ブォン…!

アルフェミィは謎の言葉を残し消えていった…結局収穫はなし…いや…カギはティアナか…

『マスター…!今は早くなのは嬢の所に…!』

「っと、そうだ!急がないと…!さくら…!ヴィータのカードの位置を特定して転移を…!」

「(もうやってるよ…!…見つけた…!キョウ君…!)」

「サポートは任せる…!…ん…!」

シュン…!

そして僕はなのは達の所に向かったのだった…

Side Out

???

「ただ今帰りましたの…」

「やあ、アルフェミィ ご苦労様…早速で悪いんだけど…」

「はいですの…ご要望の【レリック】ですの…」

「流石だねえ…しかし、出来れば寄り道はしないでほしかったのがね…」

「探していた人がいましたので…」

「…まあ、君達アインストには世話になっているからね その位は大目に見よう」

「それはこちらと同じですよ…大破したペルゼインのデバイス化…助かりましたの…」

「いやいや、こちらも未知の技術に触れたのだしね…尤も、私めまだ完全に把握できていないがね…実に面白い」

「…それではまた何かありましたら…」

「ああ、また頼むよアルフェミィ」

????

「」

「はいですの…：多少のイレギュラーはありましたが概ね順調ですの…」

「」

「はい…：完全覚醒にはまだまだ時がかかりますの…」

「！」

「…：大丈夫ですの…：アレが手に入れば…」

「？」

「白き魔王…：それに匹敵する力は確実に…」

「」

「はいですの…ですの…今は力を蓄える時期ですの…」

「」

「…はい、必ず…静寂な世界を…」

折れた翼…は意外に頑丈！？

キヨウスケSide

…その後、ヴィータの元に駆け付けた時…

「恭介…すまねえ…私は…私は…」

ヴィータは泣きながら何度も謝って…

なのはは…真っ白なバリアジャケットが…見るも無残に切り裂かれ、  
真っ赤に染めていた…

何とか僕が【フルケア】と手持ちのエリクサーで何とか傷や魔力は  
回復させたが…流石に失った血まではどうにもできず、急いで病院  
に運んだのだった…

病院



なのはを搬送した後、僕とヴィータは待合室でなのはの処置や検査が終わるのを待っているのだが…

「……………」

「……………」

…く、空気が重い!?

「…………私のせいだ…………」

…ん?

「私が…油断しなければ…なのはがあんな目に遭うことはなかったんだ…全部…私の…………」

…………ヴィータ…………

スッ

ヴィータの手に僕の手を重ね…………

「…そんな事ないよ…ヴィータはしっかりやってくれたよ…………」

「…でも!…でもよ!…!?!?」

「…それになのはだってそんな風に思っていないと思うよ?逆に「私のせいで心配かけてごめんなさい」って言いそうだし…………」

…普段はアレだが…根は優しい子…の筈？

「……何か今、自信なさ気に言っただけだったか？」

「い、いやあ…あはは…」

相変わらず鋭いな…と考えると、

タツタツタツ

「キョウスケ！！」

「ヴィータ！！」

フェイトとはやてが息を切らしながら走って来た

「はあ…はあ…キ、キョウスケ！！なのはが大怪我して入院したって聞いたんだけど…なのは…なのは容体はどうなの！？」

「そ、そうや！！聞いた話しやと…両手両足をポッキリ骨折して、苦しくてうずくまるとる所に横綱がドスンとのしかかる位な酷いケガやって…」

…はやてさん？何そのYOKOSHIMA的な例え？

「えっ！？ちがうんか？エイミーさんがそう言っただけだから…」

あの人は…何がしたいんだ！？

「あゝ、とりあえず命に別状はないからそこは安心してくれ」

「ほ、ホント！？ホントにホントだよね！？」

とりあえず落ち着こうか…フェイトさん？

「ああ…今は処置や検査を…って、どうやら終わったみたいだな」

気付くと処置中のランプが消えていた

プシュ

すると、中から先生が出てきた

「あ、先生…なのはの容態はどうですか？」

「ええ…内蔵器官もリンカーコアも無事で、傷も綺麗に消えています  
今は輸血して落ち着いています…とりあえず様子を見ましようか」

「そうですか…後遺症とかの心配は？」

「その可能性はないでしょう…」

ここに運ばれる時には既に傷は完治に近かったですから…いやはや、  
まさか噂の回復薬は本当にあっただんですなあ」

…噂の？って何？

「おや？ご存知ないのですか？ 神代さんは、あきらかに医者にケ  
ン力売っているって程に強力かつ非常識な回復薬を持っている…と」

…ま、まあ…間違っていないなら反応に困るが…

「あはは…ま、まあそれはFAITHの機密事項って事で…」

…実は医療機関から何度も問い合わせがあつたらしいのだが…本来この世界にないマジックアイテムを一般的に公表するのは…という理由でレフィーナさんが断つたらしいのだが…これでフェニックスの尾なんて出したら…完全にロストログアになりそうだな…

「それにしても…なのはちゃんが無事でなりよりや」

「うん…でね…キョウスケ、何でキョウスケはヴィータの手を握ってるのかなあ…？」

えっ!?!…あっ!?!…さっきヴィータを慰めてた時に…ッ!?!殺気!?!  
!?!?

ザンツ!?!

「ってフェイト!?!?何いきなりバルデッシュで切り掛かってくるんだ!?!?」

「もちろん…繋いだ手を離させる為だよ…フフ」

「だったら口で言え!?!あぶねーだろ!?!」

まったく…とヴィータと繋いだ手を離すと…

「……………あ」

「ん？どうしたヴィータ？」

「い、いや…何でもねえ…」

何かヴィータは繋いでいた手をじっと見つめているけど…

あつー！もしかして僕の汗がヴィータの手に付いちゃった！？

《……………ハア》

って何でそこでため息するかなあ？インフィは

「ねえキヨウスケ…なのはを襲ったアンノウンってキヨウスケの所にも現れたんだよね？何か分からないかな？」

やっぱり気になるのかな？

「えっと…あの赤いお面…どうやら新種のアインストみたいなんだ」

「なっ！？あいつもアインストなのか！？にしちゃ…なんつうか…  
意思みたいなのを感じただけだよ…」

…ヴィータさん、鋭いですね〜

中にはアルフェミイが居たから…しかもティアナ似の…

「フェイト、この事件はアインストが関わってるからFAITHの  
担当になると思うから…」

基本FAITHの仕事は、こちらから協力要請しない限り他の部署  
は不可侵って事になってるからな〜

しかも今回はティアナ似つてのが後々の事を考えると…下手したらティアナ本人が拘束されかねないし…

…そーいや、さくらとリインフォースにティアナの資料を出来るだけ集めるように頼んだんだけど…そろそろ集まったかな？

「うう…確かにアインストに関しては専門機関のFAITHに一任つて事になってるけど…私…私達だつて何か出来る筈だよ？」

「そうだ！！それにあのヤローに1発食らわせねーと気が済まねーッ！！」

…まあ、やっぱこつゆつ反応するよな

「ま、まあ…とりあえず今解っているのは、あの赤いのが新たなアインストだつて位で…まだ詳しい事は解らないんだよ…情報がなくちゃまだ動けないだろ？」

「だったら！私も調べ「はい、ストップ」ってな、何？キョウスケ？」

「フェイト…近々執務官試験あるんだろ？」

「ええ！？な、何で知ってるの！！？」

原作知識です…とは言えないしな…

「そりゃ前からフェイトが執務官目指してるって聞いたからね」

「そ…そつか… / / 覚えててくれたんだ… / /」

…フェイトは、なのは撃墜のショックや不安が原因…？の一端で2回落ちていたけど……今回、なのはは軽傷（刀で切られるのが軽傷かは微妙だが）で済んだから精神的には大丈夫…だよな？

「フェイトは今、大事な時期なんだから…そつちに集中しないとなのはに自分のせいで試験落ちたって思わせたくないだろ？」

「う、うん…分かった」

…こう言っておけば落ちる心配はないと思うが…いや、フェイトは成績優秀だし大丈夫！！…天然だけど…

「うーん…せやけど何でアインストはなのはちゃんを襲ったんやろ？」

…そついやアルフェミイは仕事の邪魔だったって言っていたけど…

「…そーいやヴィータ、確か遺跡内にロストロギア反応があったから調査に向かったんだよな？」

「ん…ああ、そうだけだよ…」

「…ちなみにロストロギアって…どんなのだったんだ？」

「……………あ」

ちよー！？何！？その【あ】って！？

「…ヴィータ？まさかとは思っんやけど…忘れとった？」

「……………ごめん、はやて」

マジすか〜…まあそれ所じゃなかったし…

「…確か、その遺跡からはもうロストログリア反応は無かったってク  
ロノから聞いたけど…」

「状況から判断して…そのアインストが遺跡にあったロストログリア  
を回収しに来たらヴィータ達が居て、邪魔だったから襲った…って  
いうのが妥当かな…しかしどんなロストログリアか解らないのは痛い  
な…」

ロストログリアって言っても、おマヌケアイテム〜世界崩壊レベルの  
アイテムまであるし…

「…それによ、あのアインストが現れる前に現れたアンノウンは何  
だったんだ？明らかにアインストとは別系統だったしよ…」

「それはこっちで調査してるってクロノが言ってたよ？…残骸が粉  
々で苦労するって言ってもいたけどね」

「うう…度々すまねえ…」

「ま、まあ…とりあえず現状は手掛かりなし…か」

…ティアナっていうファクター以外は

「ちて、と…」



「キヨウスケ君?どこ行くんや?」

「えっ?とりあえずなのはお見舞いの品でも買ってこようかと  
ついでに今回の件について神様に色々と聞かないとな…流石に何か  
知ってるだろうし」

「あゝ…私らも何か持ってきた方がええのかな?」

「…急いで来たから何も持ってきてないよね…」

「…私も何も無え…」

「あはは、じゃあ皆の分も一緒って事にしておくよ」

…ま、無難に果物詰め合わせでいいかな?

「あははは…おおきにな〜キヨウスケ君」

「ありがとうキヨウスケ」

「あゝ…なんか悪いな恭介…」

「ん…まあ気にしなくていいよ じゃ(キヨウ君!!キヨウ君!!  
!)(…ん???)」

さくらからの…念話?

「(さくら?)どうした?」

(ティアナちゃんの事で分かった事があるの!!それにあのティアナちゃん似のアルフェミイが何でキヨウ君の事を知っていたかも!)

…何か一気に謎が解明された!?

(まったくもうツ!!何でこの人は…)

何だか…さくら怒ってる?

「(で、今どこに居るんだ?)」

(今神様の所だよ…今なのはちゃん式OHANASHI中だけど…)

…あゝ…それってやっぱり今回の件に関して、おもいつきり神様絡んでるって事ですね…

ま、元々アインスト事件は神様がミスったのが原因だし…でも何でアルフェミイが僕の事を探していたんだろ? キヨウスケ繋がり??

「…くん!…キヨ…ん!!…キヨースケクー…ん!!」

「うわっ!?!な、なんだはやて?急に大声出して!?!」

「急やないで?さっきから呼んだのに…どないしたん?」

「あ、いや…何でもないよ?」

「ならえんやけど…」

「じ、じゃあはやて、後はよろしくね？」

「うん…氣いつけてな？」

はやては心配性だな… さて、僕も神様にOHANASHIしいとな…

Side Out

1番のトラブルメーカーってコイツじゃね？bYキヨウスケ(前書き)

あるえ？ シリアス風に書いていたのに…???

1番のトラブルメーカーってコイツじゃね？byキョウスケ

キョウスケSide

さて、さくらからの連絡でティアナとアルフェミィについて何か解ったと連絡があり神様が居る…まあFAITHの部署なんだけど…その部屋の扉を開けると…

プシュ

…うん、僕は何も見なかった…

プシュ

「キョウ君？どうしたの？急に出ていっちゃって…」

さくらが部屋から出て来たけど…だって…ねえ？

「あ……さくらさん？中で何をしていらっしやるのでしょっか？」

「えっ？神様とOHANASHIだよ？」

…アレが？

それもその筈！！

…だって僕が部屋の中で見た物は…

「ぬおおお！！？いだだだだだ！！痛い痛い痛いーッ！！」

…三角型のギザギサの板の上に正座させられ、膝の上に石畳を何枚も乗せられた神様がいましたよ…

「あれは石抱きって言う江戸時代にあったOHANASHI方法なんだよ？」

…何だか妙にシツクリして納得してしまう自分が居るんですが…

と言うか、明らかに拷問だよね！？

「一部ではそうとも言ってみただね」

心読まれた！？つか、爽やかな笑顔で肯定したよ！？

「あ、キョウスケ君！！」

しかも中に居たスクール…この場ではレフィーナさんか…がにこやかに石畳を積み上げながらこちらに話しかけたよ…

「…とりあえず…何があつたのでしょうか？」

「ちよ！？儂のことはスルー！？」

「…神様？少し黙ってて下さいね」

ドスン！

「ぐふぬおおお！?!?!?」

レフィーナさん…楽しそうに石畳を更に追加したよ…ありゃ30キ  
口あるんじゃない…

「コホン…キョウスケ君、アルフェミイについてなんですが…まず、  
何でキョウスケ君の事を知っていたか…それは実はこの事が原因な  
んです…」

そう言いながらレフィーナさんが僕に見せたのは…

「これって…スーパーロボット大戦OGのソフト…ですよね？」

アインスト発生の原因となったゲーム…と何かもう一つあるけど？

「…アクションリプレイ集（神Ver）??」

アクションリプレイ集ってアレだよな？経験値とかお金をMAXと  
か出来るゲームの改造ツール…まあ僕は前世でも使った事はないけ  
ど…

「実はこの神様…この改造ツールを使って…主人公をキョウスケ君

に書き換えていたんですよ！」

………はい？

「…えっと…状況が飲み込めないんですが？」

「まあ論より証拠…さくらちゃん！セッティングは出来ましたか？」

「はい！PS2接続出来ました〜！！」

さくら…いつの間に！？

「後はこのメモリーカードを…っと！じゃあスタート！！」

レフィーナさんが持っていたゲーム機と改造ツールをセットして起動！

「…後はOPTION画面で…キャラクター図鑑…キョウスケ・ナンブをクリックすると…ホラッ！！」

「………はあ！？」

驚くのも当然だー！！

だって…キャラクター図鑑に載っていたがメッシュ入りの男性キャラ、キョウスケ・ナンブではなく…

「な、何で僕に変わってるんですか！？」

……うん、どっからどう見ても僕だよね…



「…カミサマ？ドワイウコトデシヨウ？」

「あ、あのじゃな…改造ツールで数値を弄ぶついでに…キャラクタ  
ーもお主に変えた方が面白…」レフィーナさん、石…追加…」ま、  
待つんじゃ！？話せば分か…ぐぎあああああ！！！！」

じゃあ何か！？話をまとめると…

神様が改造ツールでキョウスケ・ナンブを神代恭介に変更した為に  
ゲーム内ではアルフェイミは変更後の僕を【キョウスケ】と認識…  
で、更にそのままデータ流出でリリなのの世界に具現化して今に至  
る…ってありえねえ…orz

「ごめんなさいキョウスケ君…秘書としてもつとしっかり監視して  
いれば…」

「あ…いえ、悪いのは改造に手を出したアレですから…」

「ま、待つんじゃ！？改造は仕方なかったんじゃ！！忙しい大人  
には経験値稼ぎや資金稼ぎの時間がないんじゃ！！だから改造ツ  
ールに頼るし…」さくら、更に石追加！！」「はい」「ぬぐぎああ  
あああああ！！！！？」

大体誰のせいで、この世界が現在進行系でピンチになってるんだ！  
！？

プシュ

「キョウスケ…ここに居まし…何ですか？この状況は？」

「あ、リインフォース？」

神様とOHANASHIしていたら、リインフォースが部屋に入っ  
て…って!？」

「ちょ!？リインフォース!?!？何フツーに実体化してんだ!？」

リインフォースは公式上は消えた事になってるんだから…誰かに見  
られたらマズイだろ!？」

「大丈夫ですよキヨウスケ…妹のリインに見習い【ステルスモード】  
を展開していますから」

リインフォース…いつの間にそんな事が出来るように!？」

「それでキヨウスケ…頼まれたティアナ・ランスターにおける資料  
なのですが…」

リインフォースの手には【マル秘】とかかれた封筒が…ん？何やら  
リインフォースがそわそわしているような…？

「どれどれ…」

「……………」

僕はリインフォースから資料を受け取り、読み進めていくと……………  
え!？」

「…次元船大破事件…原因不明…生存者1名…ティアナ・ランスタ  
ー!？」

何この原作に無かったイベントは!?

「キヨウスケ君…実はその事故…私たちの見解ではアインストが関わっているのではないかと推測しているんですよ」

「えっ!?!レフィーナさん?それって…前から知っていたんですか!?!」

「ええ…実はキヨウスケ君があ闇の書のアインストと戦った後に起こっているの…」

戦った後って…僕が逃がした後か…

「…全ては私のせいです…」

あゝ…もしかして、自分のせいだと思ってさっきから落ち着きがなかったのか…

「いや、リインフォースのせいじゃないよ…」

でも…レフィーナさん?これだけじゃ…その事故…アインスト関係って結び付けるのは早計じゃ…」

いくらこの小説が都合主義とはいえ…

「…しかもその事故で救出されたティアナさんは…大事故だったのにケガはおろか衣服にも焦げ目一つなく発見されたらしいの…」

…うわぁ…そりゃエクセ姉様ままだな…ゲーム知っている人ならすぐ結び付ける内容だ…

「それと…これは発表されてないのですが…当時その事故についてティアナさんに事情聴取をした局員が…行方不明になっているんです…」

「行方…不明？というかティアナに事情聴取ですか？」

…なんで？

「当時はティアナさんに爆破テロの容疑は掛かり…その局員が取り調べを担当したのですが…」

「どうやら子供相手に行き過ぎた取り調べをしていたらしく…その時は駆け付けた彼女の兄…ティード・ランスターがその局員ともみ合いになり…まあ何とか事なきを得たのですが…その数日後、取り調べをした局員が行方不明になっていたんです…」

…うん、ティードさんの暴走っぷりが目に浮かぶよ…

「…表向きには、その行き過ぎた取り調べがバレ、立場を悪くしたのが原因で姿を消した…という事になっているのですが…」

ん？…何か歯切れが悪いような…？

「…何か、あつたんですか？」

「ええ…彼との連絡がつかなくなって、局員が彼の部屋を訪れたんですが…部屋の中で局員が目にしたのは…」

部屋ビッシリに埋め尽くされた植物のツタと…

部屋の真ん中に存在した不気味に光る紅い珠だったんです…」

「続きはワシが説明しよう…」

あ、神様…復活したんだ？

「いつまでもギャグキャラではおれんからのお…」

…いや、そう言っている時点でギャグキャラでは？

「ゴホン…！勿論儂らはその後、その部屋のツタやら珠を調べたのじゃが…」

あ、珍しく真面目な顔付きに…

「それで…何か解ったんですか？」

「…うむ、ツタの方はアインストと酷似しとった…」

…マジか…

「それと紅い珠の方じゃが…」

…嫌な予感しかしないんだけど…

「…紅い珠の方にはリンカーコアの反応があったんじゃないよ…その行方不明の局員と同一のがのお…」

ハア…やっぱり…嫌な予感的中か…

紅い珠にリンカーコア反応…しかも局員と同じ…それから導き出される答えは…

「キョウスケ…それはもしかして…」

先程まで黙って聞いていたリインフォース…まあそこまで言われれば流石に予想はつ…

「うつうつう…ね、ねえキョウ君…複雑過ぎて話しがよく解らないんだけど…」

…あ、予感がつかなかった子がココにいたわ…

「ほええええええ！！！！？じ、じゃあ…その人がそうなっちゃったの！？」

何とかさくらに親切丁寧に説明した結果…何とか理解してくれた

「キヨウ君…それって…ティアナちゃんがやったの？」

そこが問題なんだよな…

「確かに…アインストについてある程度知っている僕らから見れば…つじつまは合うんだけど…

実際問題どうなんですか？レフィーナさん？」

「…少なくともティアナさんとアインストに何かしらの接触はあったと思います…でなければアルフェミイがあそこまでティアナさんに似ているなんてありえませんし…」

だよなあ…

「僕も彼女の事は気にかけておるんじや…もし本当にアインストに何かされておつたら…僕らの責任じゃ…」

そつだよな…んん！？僕等の…？

「「「いや、アンタだけの責任だろ（です）（だよ）！！」「」」

何シリアスな空気で責任を分散させようとしてんだ！？

「そ、そこはスルーしていいんじゃないかのお…」

何か言っているみたいだけど無視無視!!

「ティアナさんを調べようにも…彼女はまだ一般人…いきなり管理局が【貴女の身体を調べさせてくれ】って言う訳にもいかないですし…」

それって、聞きようによつてはアブナイ発言だよな…

「そこでじゃ…!」

…あ、もう復活したのか…タフだな

「…儂、泣いていいかのお…」

…あゝ ハイハイ話し進まないから続けてくれ…

「激しくバカにされておるような…」

とにかくじゃ!現状は彼女は一般人…じゃが後数年で彼女は少なくとも訓練校に入る筈じゃ!!」

まあ…原作どおりなら、だけどな…しかし、言い方変えれば中学生で警察学校に入るって…つくづく異常だな…

「そこでじゃ!!…そこで行われるであろう身体測定で彼女の身体データを入手するのじゃ!!…どうじゃ?完璧じゃろっ?」

「「「「「……………」」」」」」



…僕を含め、レフィーナさん・さくら・リインフォースも開いた口が塞がらないというか…

「…いや、それ多分普通に犯罪じゃね？というか性犯罪に入りそうかな…」

「ふお！？な、何故そうなるんじゃ！？」

気付いてないのかい！？

「キョウ君…やっぱり石、たくさん乗せた方がいいかな？」

「…そうですね、さくら…私もお手伝いします…」

「…自分の上司が…ロ…ロ…ロリコンだったなんて…」

「ま、待つんじゃない？僕は決してそのような…」

「」「」問答無用です！！この女の敵！！」「」

…その後、この部屋に神様の悲鳴が響きわたったそうなの…

…あ、ちゃんと防音しないとな

《マスターも何気に酷いですねえ…》

…インフィ君？君もあのカオスの中に入りたいのかい？

《すつ、すみませんでしたあああああああ！！！！！！！そ、それだけは許してくださいいいいい！！！！！！》

分かればいいのだよ…フツフツフ

《（マ、マスター…何て恐ろしい御人なんだ……………）》

「ぎゃあああああああああ！！！！！！！わ、ワシが悪かったー！ー！！！！だ、だから…そ、それだけは…ぐぶあは！？」

あ、防音 防音

S i d e O u t

病院では静かにしようね      b y さくら (前書き)

今回はとある作品からゲストが登場しています (笑)

病院では静かにしようね

by さくら

前回までのあらすじ…

あ、何かこれ久しぶりだな

「キョウ君キョウ君、それより早くあらすじを…」（コソッ）」

ああ、そうだった！

え〜っと…確かロリコンという名の犯罪者を捕まえたんだっけ？

「うん、そうだよ！　これで全国の小学生の女の子は安心だね」

ああ、これで「わ、僕は無実じゃあああああ！！！！べ、弁護士を  
ををををを！！！！」…まだ居たか性犯罪者…

「うわぁ」

さくらもドン引きで見てるよ…

神様？僕が付き添ってあげるから警察に行こうか？

「な、何でこーゆー時だけ優しいんぢゃあああ！?!？」

《…キヨウスケ さくら…話が進みませんから犯罪者は放ってお  
きましよう》

ん…ま、そだな

「…儂…何かしたか？」

「」「そりゃ色々と…!」「」

「くっ…当たっているだけに何も言えん…じゃが弁護士は呼んでく  
れいいいっ!?!?!」

《…はあ、とりあえずみなさんは本編どうぞ…》

キヨウスケSide

神様とOHA…相談した結果、しばらくティアナはレフィーナさん  
の使い魔を使って護衛兼監視という事に落ち着いた…

…ただ…レフィーナさんが…

「キヨウスケ君は確か年齢を任意で変化させられるんですよね？  
まあ…3歳位なら見た目は変わらないですから大した問題ないですよね？」

…と言う、フラグ感満載の台詞を残していたような…うん、聞かなかった事にしよう…

「あ、お待ちせキヨウ君！」

頼まれたなのはちゃんのお見舞いの品、買ってきたよ」

「お、サンキューさくら」

さくらにお見舞い用の果物詰め合わせや菓子折りetc…はやて達の分も買ってきてもらい再びなのはの病室へ向かい…

「なのはちゃん、大丈夫だよね？」

「ん？まあ原作よりは酷くはないから…」

と、さくらと談笑しながら病室に向かうと…

「あれ？はやて達…？」

なのはの病室のドアの前にはやて達が立っている？

「あ、おかえりキヨウスケ君」

「ああ、ただいま…で、何で皆は中に入らないんだ？」

別に面会謝絶ではないんだが…

「あのねキョウスケ…今なのはのご家族が来て…」

……………へ？

「フ、フェイトさん？今…戦闘民族高町家御一行が来てるって言ったの？」

「えっ！？戦闘民族って…なのはの家族は普通だよ？」

「いやいやいや！？あのオレより強い奴に会いに行く的な戦闘狂の家族の何処が普通なんだ！？」

「どうしたんやキョウスケ君？顔が引き攣つとるけど…」

そ、そりゃ引き攣りもするよ！！

なのはが…治療して完治しているとはいえ大怪我したんだ！！その事実だけであの面倒くさいシスコンが黙っている訳が…」

ガラッ

「ほお…よく分かっているじゃないか」

「き、恭也さん！？」

久々のシスコン兄が現れた！？

「あゝ…お久しぶりです…それで、何が分かっていると？」

「…なのは傷物にしてタダでは済まないって事だ」

「ですよ〜…というか何で僕が考えている事が分かったんだ!？」

「キョウスケ…途中から声が出たよ…」

「えっ!?!マジすかフェイトさん!？」

「あはは…そ、それでなのはは?」

「…今さっき目を覚まして父さん達と話している」

「あ、とりあえず意識は回復したんだ…」

「よかったなフェイトちゃん!なのはちゃん目え覚まして」

「うん…よかった」

「へ、へっ!!アイツがそんな簡単にくたばる訳ねえって分かってたけどな!!」

「フッフ…なんやヴィータ?さっきまで泣きそつな顔しとつたのに」

「ぬあっ!!…そそそそんな訳ねーって!!…!!」

「まあ、何だかんだで1番ヴィータが気にしていたからな」

「そ、そんな事よか恭介!!何か美味そつなの持つてんな!?!」



「ん？ああ、一応なのはお見舞いの品を買いに行ってたんだっけ… 恭也さん、これ僕ら全員からのお見舞いの品です」

勿論はやて達の分も一緒に渡したぞ？

… お金出したのは僕だが…

「ああ、有り難く貰っておく… だがキョウスケ、なのはを傷物にした罪は償ってもらおうぞ！！」

別に僕が傷物にした… って訳じゃないんだかな… この人に通用する訳ないか…

「ちょ！？ま、まてよ！！キョウスケは何も悪くねーぞ！！むしろなのはの体調を気にかけてくれたり、ケガだって治してくれだんだ！！

それを言うなら悪いのは… 私の… 私のせいだ！！！！」

「ヴィータ…」

シスコ… 恭也さんと僕の間割って入ってきたヴィータが弁明してくれているけど…

「ありがとうヴィータ… その気持ちだけで十分だよ」

なのはが大怪我するって事は前から知っていたのに… イレギュラーがあつたとは言え、防げなかったのは僕の落ち度だし…

「き、恭介え…」

「それで… 僕は何をすればいいんですか？」

正直サンドバックにされる事を覚悟していたが…

「…責任を取ってなのはと結婚しろ」

……

……

……

……へ？

「「「「「……はああああ！！？」「」「」

予想を超えろと言うか、ワームホール通過してとんでもない角度から…って、

ちよつと待ていいいい！！？

けけけけけけっこん！！？

けっこんって…あの事件現場にある血のあとの事！！？

『（マスター、それは血痕です…しかし第1婦人がなのは嬢とは…私的にははやて嬢かと思ってましたが…）』

「ちょー！？何冷静にツッコミ入れてんだ！？」

「というか第1って何さ！？あからさまにそれ以降ありますって言うてねー！！？」

「ちょー！？な、何でそんな話しになるんやー！！？」

「そ、そうだよ！？それに恭也はキヨウスケの事嫌ってたよね！？なのになにでー！！？」

「というか恭介は私の嫁だー！！！！！！」

「ヴィータちゃん！？それを言うなら婿だよ…って、そうじゃないよー！！キヨウ君は私のマスターなんだから私のだよー！！？」

「…何このカオスは…恭也さん、どうしてくれるんだ…」

「それとヴィータ、その台詞は銀髪眼帯軍人さんの専売特許だから！？」

「その頃…」

「某I 学園・某所」

「…むっ？？」

「…どづじたの？ラウラ？？」

「いや…何やら何処か遠い世界で呼ばれたような…まあ気のせいだろ」

「そ、そうなんだ…」

「それより早く嫁を誘って食堂に行くとしよう」

「はあ…だからそれを言うなら婿だって…というか、一夏はラウラの嫁じゃないからね!？」

「…しかしシャルロット、我々の出番はこれだけか？」

「え、え〜と…どうなんだろうね〜。あはは…」

「オレとしても甚だ不本意だが…キヨウスケならなのはを任せてもいいだろうと家族会議で決定してな…」

「いや！だからそんな迷惑な会議、本人不在でいつの間に開いたんだ！？」

「『『『ぜ、絶対に反対だ（や）（だよ）（なんだから）！！！！』』』」

「当然、女性陣は猛反発！！」

「ま、まあ別に今すぐと言う訳ではない…」

流石にこの迫力には怯んだか？

「というか、僕としては何でそんな話しになったか疑問しかないんですが…」

まったく話しが見えないんですが…てか中学生同士が結婚出来る訳ないだろ？

「ああ、それはだな…」

ガラッ

「それは私から説明しよう」

恭也さんの台詞を遮るよう病室から出てきたのは…

「士郎さん!？」

「久しぶりだねキヨウスケ君…ふむ、また一段と腕を上げたね」

わ、判るんですか!？流石は戦闘民族…スカウター要らずか…

「あ、あの!!」

「ん?君は確かなのはの友達のはやてちゃんだったね」

「はい…それで、何でキヨウスケ君がなのはちゃんと結婚せなあか  
んのです…」

……というか、キヨウスケ君とは私が結婚するんで手え出さんとい  
てくれます?ちなみに側室はヴィータとシグナム…まあ一応シヤマ  
ルも居ますし、控えてリイン居ますけど何か問題でも?」

…いや、突っ込む所が多すぎて問題しかないんだが…

《(勿論、私も側室で構いませんよ?)》

…何やらリインフォーから電波が出ていたような?

「待つてはやて!」

キヨウスケとは…その…わ、私が…結婚するんだから!そうだよね  
!？キヨウスケ!??」

「何寝言を言つてんだ!？恭介とは私らとはやてが結婚すんだから  
オメーはすっこんでろ!!」

「ま、待ってよ皆！！キョウ君とは私が未来永劫一緒に居るんだからねっ！ー！」

…うん、とりあえず皆落ち着いて考えてから喋ろっね？

『（…しかし…ここまで言われてもウチのマスターは何故みなさんの好意に気付かないんでしょう…）』

《（…恐らく好意（友情、または友愛としては）は感じているでしょうが…好意（恋愛）までは…）》

『《（（………………ハア））》』

今、確実にデバイスに馬鹿にされた電波が出た…気がする！？

「それで理由だが…」

「……………理由は……………」

ゴクリ…

「…桃子のOHANASHIを受けて…」

…おいおい、

「ちょ！？御神流の剣士が、なに奥さんのOHANASHIに屈してるんやー！ー！ー！」

スパーン！！

はやては取り出した伝説の武器【血染めのハリセン（偽）】を取り出し士郎さんにツツコンだ…というかはやてさん？何処から取り出した！？

「い、いやーはやてちゃんは筋がいいね〜どうだい？御神流を習ってみるかい？美由希といい勝負になりそうだ」

士郎さんも何勧誘してんですか！？

「と、父さん！！母さんのアレは…お、思い出させないでくれ！！ま、まだ膝が震えて…」

…桃子さんが原因でトラウマ！？てか士郎さん！？桃子さんのOH ANASHIって…ハッ！？

ま、まさか…アレって高町家の女性だけに受け継がれている一子相伝の奥義とか！！？

ガラッ

「あら、キョウスケ君？何か変な事考えてないかしら？」

噂をすれば…桃子さん…？

「い、いや！？ソナコトナイデスッテ？」

…だから何で皆は心読めるんだよ！？デフォルトで装備してるんじゃないかって本気で思うよ…



「あつっ！！桃子さん！！」

「あら、なあに？フエイトちゃん？」

「あの…何でなのはとキヨウスケが…け、結婚しなくちゃいけないんですか？」

「フフ、それはね…」

「…「そ、それは…」」

「おもし…キヨウスケ君なら、なのはを任せられる男の子からよ…」

「ちよつと待てい！？今面白そうって言いかけたよな！？」

「気のせいよ キヨウスケ君

「大体、面白そうだからなんて理由は8割位しか思っていないから」

「ってほとんどじゃねーか！？」

「…で、残りの2割はどー思ってたよ？」

「ヴィータも半ばジト目で尋ねると…」

「キヨウスケ君みたいな男の子が息子に欲しいかな…って テヘッ  
」

「テヘッ じゃねー！！ 殆どロクな理由じゃねー！！？」

「桃子さん…第一本人の意識つての「あら、なのはだつたら問題ないわよ？ほら」「へっ？」

ガラッ

桃子さんが病室の扉を開けると…

「いい？なのは…キヨウスケ君を落とすには手段を選んじゃダメよ？」

「わかつたの！！お姉ちゃん！！！」

何普通に気合い入れてるんですか！？しかも若干恐い事言ってるね？

「その意気よ！！ふふふ…これでキヨウスケ君が義弟に………それで義姉の権限でキヨウスケ君にスカートを……キヨウスケ君って美形だからきつと……グフツ！？」

「お、お姉ちゃん！？は、鼻！！鼻から何か赤い何かができるの！！？」

…うん、なのはが元気になったのはいいんだが…話している内容が色々ダメな気がする！？

「……も、もちろんスカートは絶対領域で……」

「お、お姉ちゃんーん！！？それ以上は妄想しちゃ命に関わるの！！！」

…いや、むしろアンタはそのまま入院してくれ…じゃないと身の危

険が…

「…キヨウスケ君のスカート姿…うん、それはそれでアリだな」

「うん…お化粧とかすれば…いいかも／＼」

「うん、キヨウ君って肌が綺麗だから絶対似合うよ」

…背後ではやて・フェイト・さくらが何か言っているのがしつかり  
聞こえたが…記憶から削除しよう…うん、そうしよう

「???なあ、何で恭介にスカートはかせんだ??」

ヴィータさん…貴女だけは変な世界の扉を開かないで下さい…いや、  
マジで!?!?

S i d e O u t

なのはデパートとコリアケマと!?! いち!

キョウスケSide

「…はあ、酷い目にあつたよ…」

「まったくもう!! キョウ君には私という者がついているのにつ!  
!」

…あの後、何とか高町家とはやて達の魔手をかわし(特に美由希さんのあの熱気を帯びた目が怖かったが…)脱出に成功!!

ちなみになのはは、今日中に退院できるらしい…ま、あれだけ暴れ…つか動ければ問題ないだろう…

「さて、これからどうす「キョウスケ君ー!?!」ってなのは!?!」

噂をすれば何とやらだな…

「なのはちゃん!?!そんなに動いて大丈夫なの!?!?」

「うん、もう大丈夫なの!?!」

…大怪我負ったその日に退院…さすがエリクサーだな…

「そ、それでねキョウスケ君…その…お願いがあるんだけど…」

「ん？何？」

「あの…明日…買い物に付き合ってほしいんだけど…いいかなあ？」

…さっきまでベットのの上に居た人の台詞とは思えない発言だなオイ…

「ま、まあ明日は予定はな……って、さくらさん？何で僕の足を踏んでいらっしやるんでしょう？」

踏まれると地味に痛いんですが…

「ふんっだ!!」

いや、何で不機嫌になってるのでしょうか？

「どうしたの？キョウスケ君？…もしかしてダメ、だった？」

うっ、そんな泣きそうな顔で迫られると何か凄く罪悪感が!？

「…い、いや大丈夫。何でもないから」

「本当!？よかった〜 じゃあ明日一緒にお出かけしようね(ニ)」  
「ッ」

「(ドキッ)あ、ああ…/」

うっ…なのは笑顔ってこんなに可愛かった…ヒッ!?

「…キョーウくくくん…何で顔が赤いのかなああああ?？」

「い、いや!? ナンデモナイデスヨ!？」

さくらが…さくらからも凄い武装色の覇気を感じるんですが!?

「じゃあ明日10時に駅前で待ち合わせねっ 忘れないでね絶対だよー!…」

タッタッタッ

そう言い残し、なのは去っていった…

トントントントント...

「……………(怒)」

「いや、さくらさん? だから何で睨んでるんです?」

「…睨んでないです…こーゆー目つきなんだよ…」

いや、さくらはもっと可愛いらしかったぞ!? つか何処かで聞いたような台詞!?

「…まったく、何も私の目の前でデートの約束しなくても…(ボンッ)」

「???何か言ったか？」

「乙女心が解らない人は、縮退砲に撃たれてブラックホールに吸い込まれちゃえ!!!」

…いや、それかなり恐い内容ですよね？

…はあ…

で、翌日

駅前

現在の時間… 10:30

「………遅い」

約束の時間から既に30分オーバー!!!

まあ、女の子は支度とか色々あるって事で時間がかかるってのは解るし、その位は許容しよう!!!

…ただ…

「（ヒソヒソ）わ、あの人可愛くてカッコイイ〜!!」

「（ヒソヒソ）彼って一人なのしら？」

「（ヒソヒソ）ちょっとアンタ声かけてみなさいよ」

「（ヒソヒソ）ええ!?は、恥ずかしいよ〜」

「（ヒソヒソ）年下美少年…じゅるり」

…周りからの雰囲気めっさ怖いんですが!?

と、身の危険を感じていると…

タッタッタッタ!!

「い、ごめん!!キョウスケ君!!遅くなっちゃったの!!!!」

ようやくなのはがやってきた!!

「まったく…遅かったな」

「うぐっ!!そ、そこは【僕も今来た所だよマイハニー】って言う所だよ〜!？」

「誰がマイハニーだ!誰が!? 大方、出掛ける前に着て行く服が今履いているミュールに合ってなくて慌てて部屋に戻って着替えて、いつの間にかこんな時間になったんだろ？」



「に、にゃああー!!? な、何でそんなピンポイントでしかも正確に解るの!!!?」

…いや、テキトーに言ったただけだったんだが…

「…ま、まあ何だ 何時もなのは事を見ているから…何となくかな?」

ま、大体女の子の遅刻の理由ベスト3には入ると思うし…

「そ、そうなんだ… / / にゃはは…何だか照れるな… / /」

…??? 何で照れてるんだ???

「ま、とりあえず行こうか?」

「う、うん / /」

こうして僕たちは電車でショッピングモールへと向かった…

…背後から尾行されているのも気付かずに…

## ショッピングモール

「へー こんな所にこんなショッピングモールが出来てたんだな」

「うん、最近リニューアルオープンしたみたいなんだよ?」

へ〜…しっかし、結構人が多いな〜

「あ、あの…キヨウスケ君…………… / /」

「ん?何だ?」

何やらなのがモジモジしながら手を差し出して…

「手…繋いでもいいかなあ / /?」

…ああ、こんな人込みじゃ確かにはぐれちゃうかもしれないしな

「ああ、いいよ」

ギョッ

僕はなのはを手を繋「ち、違うよキヨウスケ君!!」っえ?

「こっつ繋ぐんだよ… / /」

なのはが僕の左手を自分の右手で絡めるように繋いで…っこれは  
いわゆる恋人繋ぎっすか!?

「にゃははノノさ、行こ キョウスケ君」

…ま、別にいいんですけど…

Side Out

キョウスケ達から数メートル後方…

???Side

前日…さくらちゃんからの緊急連絡で、キョウスケ君とあのドS魔王がデートするっちゆう話を聞いて…こっつして尾行しとるんやけど…

「……なあヴィータ」

「……何だ？はやて？」

「……あれ、手繋いでるように見えんのは気のせいやるか？」

「……大丈夫だ…私にもそう見えてっから…」

「………そか、やっぱそうなんや…見間違いや幻覚でものうて、やっぱそうなんやなあ… ……よっしゃ！！今すぐあんな幻想ブツ潰したるで！！！」

「ちょ！？ま、待ってはやて！！？こんな街中じゃ危ないよ！？」

「止めても無駄やフェイトちゃん！！それに、そんな結界張れば問題無しや！！！」

「あわわわわ！！？は、はやてちゃんが壊れたですー！！っ！！！！？」

「大丈夫やよ？リイン…スグニオウルカラナア…」

「目をハイライトにしている人が言っても全然説得力がないです！！？」

「いくでえ！！私のこの手が光って唸るううう！！！」

「…ってはやて！？？イマジ的なブレイカーじゃなくてそっち！？？」

フフフ…それはな、物理的に潰さんと収まりつかないんや！！！」

「ちよつとはやてちゃん落ち着いて!!あ!!キヨウ君達が行つちやうよ!?!」

「なつ!?!ホンマや!?!」

チィ!!見失つたらシャレにならん!!

「急いで尾行続行や!?!」

「「「「おーーーーー!!!!!!」」」」

キヨウスケ君の貞操は……私が守るんやーっ!!

Side Out

「……なあシヤマル……」

「なあに?シグナム?」

「ついて来た我らが言うのも何だが…主達を止めなくてよいのか?」

「……逆に聞くけど…今のはやてちゃん達を止められる?」

「……無理だな」

「……………せめて一般人には被害が行かないようにしましょう」

「……………ああ」

キョウスケSide

「で、なのはは何を買いだいたいんだ？」

予想としては新作の服とかアクセサリーかと思うのだが…

「えっと…あそこなんだけど…」

なのはが指差す先には……………

「……………帰っていいか？」

「ふえ！？な、何でなの！？」

そこを何でと聞く君の頭の中が何で？と聞きたいんだが…

「どこの世界に男を連れて、女性下着売り場に連れていく人が「此

処にいるよ」「ああそうでしたねコンチキショーーーー！！！！」

そう…なのはが僕を連れて行こうとしたのは…ランジェリーショッ  
プだった…orz

「大体何でそんな所に!？」

「え〜と、最近ブラがキツくなっちゃって…」

って買いに行く理由じゃなくて、そんな場所に僕を連れていく理由  
を聞いているんだアアアアア！！！！

「にははは 折角だからキョウスケ君の好みのブラジャーにしよう  
かな〜って」

「…と言うか、あの場所に入った瞬間に僕は確実に捕まるんですが  
!？」

「大丈夫だよ！今はカップルで一緒に買いに行く人が結構いるから  
」

それはカップルだから何とか許されるんだろ!？

店舗によりお断りする場合があります。よい子は気をつけよう！

「だから大丈夫だよ〜 カップルって事で行けばいいんだし〜」

「だからって行けるかー！！！！ そんなんなら水着売場の方がま  
だマシだぁあ！！！！」

「……………(ニヤツ)」

な、何だ！？なのはが今一瞬…新世界の神のように笑った？

「フフフ…じゃあ水着売場ならいいんだね？さあ行こう！！すぐ行こう！！直ちに行こうキョウスケ君」

「なのは何を…ハツ！！？ま、まさか…本命はそっち！？」

「フフフフ…キョウスケ君はなかなかそーゆー場所に一緒に行ってくれないから…」

それに、男の子が一度言ったことを撤回しないよね？」

これは…始めは断れて当然のハードル高い条件を定時した後、断ったそのハードルを下げた条件を相手に飲ませ…ってソレって値切り交渉のテクの応用じゃねーのか！！？

「言質はちゃんとレイジングハートに録音してあるから…ねっ？レイジングハート？」

《Yes my master》

くっ！？デバイスの高性能さが憎いいい！！？

「さ、行こう キョウスケ君」

「いや…ま、まで！？」

「待たないよ」 (フッフッフ…これでキョウスケ君を悩殺するの



」

こうして僕はなのはに引きずられるように強制連行された…  
ああ、ドナドナが聞こえる…

S i d e O u t

似た者同士だった主人公S!?

前回までのあらすじ…

なのはの策略に嵌まり、水着売場に強制連行されてしまった…

つか、もはや嫌な予感しかしないんですが!?

キョウスケSide

「……………僕達は…どうしてこんな所まで来てしまったんだろう…」

僕は、某フリーダムなパイロットの台詞を呟いてみたが…

「どっしって…水着買うからなの!」

はい、真っ当な返事が返ってきました

「…というか、水着ならフェイトやはやてと一緒にの方がよかったんじゃない?」

女性水着なんて僕じゃよく分からないし…

「…キヨウスケ君?

一緒にいる女の子の前で他の女の子の名前言うなんて失礼なんだよ!」

…他のつて…なのはさん?友達だろ!?

「あ、ああ…ごめん…つてなのは!?!その手に持った大量の水着…まさか全部買うのか?」

…明らかに数十着はあるよな?

「にやはは、だって可愛い水着が沢山あってどれにするか迷っちゃうよ〜」

…まあ、なのはは可愛いから何着ても似合うと思うけどな

ボンツ!

「にににににやあああノノ!!!!?!?!?!?」

「ど、どうしたなのは!?!いきなり奇声なんか発して!?!」

しかも顔が真っ赤になってるし!?!

「キ、キヨウスケ君が変な言を言うからだよ!?!?!もううううう／／」  
ええっ!?!?変な事って、何か言ったかな??

「な、何でもないので／／!!(途中から声が出てたのに気付いてないし…)  
じ、じゃあ私コレ試着してみるね!?!すみませーん!?!」

なのはは定員さんに声をかけると、そのままフィッティングルームへ消えていった…

で、結局何だったんだろう???

「おまたせー キヨウスケ君」

しばらくして、フィッティングルームからなのはの声が…

余談だが待っている間、周りの視線が痛かった…

「ど、どうかな／／?変じゃない?」

なのはが着ているのは、ピンクのビキニタイプで2段フリルスカート姿…

「……………／／」

「???キヨウスケ君？」

「あ、ああ…」

ヤバイ…つい見とれてしまった…／／

「この水着…変じゃないなあ／／」

「い、いや！？似合ってると思うぞ!？」

「ホ、ホント!?!にやははは、な、何だか照れるね／／」

…というか、中学生にしたら胸元がかなり…／／

「キ、キヨウスケ君…／／あの…そんなに見られるとさすがに恥ずかしいかな…／／」

「ぐぐぐぐめんツツ!!!」

いかんいかん!!!つい凝視してしまった／／

「じゃあ次の水着に着替えるね…／／」

そう言い、再びフィッティングルームになのはは消えていった…

…こ、これはかなり精神的にヤバイ!？

Side Out

なのはSide

フフフ…確かにキヨウスケ君が胸が好きとは知っていたし、意図的に胸元が強調される水着を選んだんだけど…あの反応は、少なからず私の事…その…ちゃんと女の子として意識しているんだよね

よーしっ!!この調子でガンガン攻めるの!!!

そ、それで…今夜はキヨウスケ君と…/ / うん、ちゃんと勝負下着も万端なの!!

Side Out

ゾクッ!!

「…な、何だが不穏な気配が…それに寒気も……風邪ひいたか？」

シグナムSide

私達は主はやてと共に神代達の尾行を続けていたのだが…

「……………ヴィータ」

「……………何だはやて？」

「………でディアボリック放つても聖戦つて事で罪にはならんよなあ………」

「ああ、私のアイゼンをブン回しても同様に罪はならねーよな………」

「………よし、殺るか………」

主はやて達が物騒な事を言い出した………？

「殺るか………じゃありません！？はやてちゃん！？ヴィータちゃん………？それ普通に犯罪ですから………！」

「………ちつ………シャマルの癖に………」

「シ、シグナム………！！はやてちゃんとヴィータちゃんが不良になつちやっただ………あ………！！！」

「いや………不良とかそれ以前の問題では………というか、主はやても落ちて着いて下さい………！！ヴィータも騎士なら少しは冷静になれ………！！」

全く…2人とも神代の事になると見境がなくなるのは困ったものだ…

「せやかてシグナム…なのはちゃんの水着姿見たキヨウスケ君のあの表情…許せるか？」

…ま、まあ確かに私も少し神代や高町を見てみると…イラッとくるが…

「…あンやるー…病み上がりの癖に恭介に色目使いやがって…あの時いつそ止めを刺してやればよかつたな…」

…いや、それは流石にマズイだろう！？

「はぁ…ん？そついえばテストアロツサやさくら達の姿が見えないが…」

普段ならこの騒ぎに参加している筈なのだが…??

「ああ、フェイトちゃん達なら…あそこよ」

シヤマルが教えてくれた場所を見ると…

「こ、これが水着！？ほとんどヒモしかないよね！？で、でも…これならキヨウスケも襲ってくれるかな…／＼」

「…この水着ならキヨウ君も…でも…胸が……はぁ、パット何枚必要かな？」

「リ、ラインに合うサイズがないですー！！！！？」



あちらはあちらで大騒ぎだったか…

「……………まあ、あちらは平和でよかった」

「平和……………なのかしら？明らかに色んな問題が先送りになってないかしら？？」

…そこは否定できんな…

「……………さて、私も水着をかうとしようか」

折角このような場所に来たのだ。

1着位は持っけていても損はなからう

それに…まあ神代にも私のその…水着姿を見てもらいし……………／／

「あら、シグナムもキョウスケ君の誘惑用水着をかうの？」

「なっ！？何を言うシヤマル！！！？わわわ私は別にそのような考えは……………／／」

「ふふっ、顔を真っ赤にして否定しても説得力がないわよ？」

「くっ……そ、そう言うお前はどうかのだ！？」

「あら、当然キョウスケ君を魅了する水着をかうわよ」

……たまに思うが、シヤマルのこの堂々とした行動力がうらやましいな…

「さうとと、どの水着が1番脱がされ易い」「ちよつと待て!?!」「つて何かしら? シグナム??」

「何故脱がし易いを基準で水着を選ぶ!?!」

「それは勿論、キョウスケ君と岩場の影でもすぐ出来るようによ」

…何が出来るのだ!?!…とツツコンではいけないような気がするの  
は私だけだろうか?

聞くべきかどうか思案した結果…

「……………まあ神代には頑張ってもらおうか」

色んな意味で丸投げする事にした

神代ならどちらに転んでも大丈夫だろう

…その時は…わ、私も混ぜて貰えれば……………//

S i d e O u t

キヨウスケSide

あれからなのは水着ファッションショーが1時間ほど続き…

「…うん…どれにしよう…」

なのははまだ迷っていた…

女の子の買い物は長いつて解ってはいたが…キツイ…主に現状の環境に……

女性水着売場に1時間も男がいるのに、警察に通報されないのが不思議だ…

「ねえキヨウスケ君、どっちの水着が好み？」

どうやら最終選考に残った2着を…って!?

「僕の好み基準かよ!？」

「えゝ せっかくだからキヨウスケ君の好みの水着にしたいの!」

…と言われてもなゝ 僕自身のセンスは、そんなに悪くないとは思いたい…

「…まあ、最初のピンクのがいいかな?全体的な雰囲気といい、なのはのイメージ(魔力光)とピッタリ合うし…」

なのはだっ たら可愛さを全面に出した方がいいと思うし…

「にゃはは…そ、そうなか／＼じゃあこっちの方にするの」

「…別に僕の意見はそんなに気にしなくて、なのはが気に入ったのを買った方がいいんじゃない？」

「ううん！キョウスケ君が気に入ったのが私の気に入ったのだからいいんだよ？」

…まあ、本人がいいって言うてるんだからいいか

「じゃあ買ってくるからちょっとまってね」

そう言うとなのはレジに一直線に向かっていった…

なのはの買い物が終わった後…

「あ、なのは！ちょっと本屋に寄っていいか？」

「えっ？うん、勿論」

という訳で僕は某本屋【むよ】に来ています

「キョウスケ君、どんな本を買うの？」

「ん〜…つと、確か新刊で今日発売の…あ、これだ」

僕が手に取った本はライトノベルで…女性にしか動かせない機械の万能服の登場で女尊男卑の世界の中、唯一男で動かしてしまつた為に女の子だらけの機械の万能服の養成学校に通う羽目になつたというハーレム的な男性主人公の物語の本だ

「へ〜、ねえ！これってどんなお話なの？」

…ちよつとお話つて単語に寒気を感じたが…

「えつと…この主人公、周りの女の子から好意を向けられているのにまったく気付かない唐変木で、しかも鈍感スキルの持ち主なので…フツーあんだだけアピールされれば気付くだろ！？空気読めつて言いたくなるよな〜…つて、どうしたなの？」

僕つて説明下手だから分からなかつたかな？

「あはは…はあ…（キョウスケ君だけには言われたくないだろうな）…その主人公さんも…」

苦笑いしているのはだつた…つか何故！？

Side Out

おまけ1

某 S 学園

「は…はつくしよん…！」

「何だ一夏？風邪か？」

「まあそれは大変です…！一夏さん、すぐお休みにならないと…！  
看病は私にお任せ下さいな」

「待ちなさいよ…！何サラっと二人っきりになるうとしてるのよ…  
？」

「あら鈴さん？病人を労るのは当たり前前の事ではなくて？」

「だーかーらー…！何でセシリアが看病しなきゃいけないのよ…！  
一夏は私が看病するからアンタはすっこんでなさい…！」

「待てお前達…！さっきから聞いていれば好き勝手いっているが…  
一夏は私が看病するに決まっているだろう…！」

「なっ…！？ほ、篤さん？貴女も随分好き勝手いっているではありませんか…！？」

「何を言う…！私は一夏の幼なじみなのだから当然であろう…！」

「だったら私も一夏の幼なじみなんだから問題ないわよね!？」

「何を言う!?! 私は一夏のファースト幼なじみなのだから私が1番に決まっているだろう!?!」

「付き合いは私の方が長いんだから、私の方が一夏も安心するに決まってるわよ!?!」

「さあ一夏さん、おバカ2人は放っておいて行きましょう? 風邪はこじらせてはいけませんわよ?」

「ちよつと待てー!?!?! 何ドサクサ紛れにやってる!?!?!」

「…ちつ、気付かれましたか…」

「こつなつたら…」

「ええ…力づくで…」

「決めてやるうじやないの!?!」

「<sup>アルーナ</sup>表に出るー!?!?!」

「あゝ…別に俺は風邪じゃないから…って聞いてねえし…こりゃまた千冬姉の出席簿が飛んでくるな…はあ…」

…今日も平和なI 学園だった…

おまけ2

「キョウスケ君らは何処や!？」

「確かなのはこの本屋に入って行ったのは見えたんだけど…」

「この本屋…無駄に広すぎてるよな…恭介は何処だよ？」

「…ハッ!？もしかあそこか!？」

「はやて!？心辺りがあるのか!？」

「大有りや!？行くで!！」

ダッ!!

「キョウスケ君ここにおる!？」

「…つかはやて、何の迷いもなくグラビアコーナーに来んのかよ…」



「そ、そうだよはやて!!いくらキョウスケでもグラビアコーナーには…」

「そうやな?…あ、もしや成人誌コーナーに…」

「いや、それ18禁だから!?!」

「…と言つが、高町と一緒になのだからそれはなかるつ?」

「そうねえ、それに雑誌に頼らなくてもキョウスケ君なら一声言つてくれれば…きゃ」

「シヤマル…少しは自重しろ」

「???さくらお姉様、その【セーじんざっし】って何なんですか?」

「ほえええ!?!そ、それは…その…うにゅ／＼／」

「さ、さくらお姉様!?!お顔が真っ赤ですう!?!」

その後、はやては店員さんに注意されたとか…

「な、何で私だけなんや!?!?!?!」



明日のスターは君…だっけ？

キョウスケSide

なのはとの買い物も一段落着いて、ショッピングモールをうろついていると…

「あれ？あそこにいるのは…」

何か見覚えがある人物が…

「どうしたの？キョウスケ君…ってあれ!？」

なのはも気付くって事は人違いじゃないよな…

「アリサちゃんにすすかちゃん!？しかも何か変な人に絡まれてるの!？」

…だよなあ　まあ、誘拐だったらシャレにならんし…助けに行くか  
「レイジングハー」ってオイ!？何フツーにデバイス起動させようとしてるんだ!？」ええっ!？で、でも早く助けないと!！」

…まあ魔法秘匿とか別にないっちゃあ無いからいいんだけど…

「とりあえず僕に任せて」

「う、うん!!」

さて…行くか!!

Side Out

アリサSide

…まったく、今日は特に最悪だわ…

「ですからぜひ一度…」

「結構です!! 私達そーゆうの興味ありませんから!!」

「そこを何とか…1番社長と会って頂くだけでも」

「結構です!!」

…この押し問答をさっきから繰り返して…すずかだって怯えて何も  
言えなくなっちゃったし…

「行きましょ、すすか」

「う、うん…」

私はすずかの手を掴んでその場を立ち去ろうとすると…

「ま、待って下さい！！考え直していただけませんか？」

私達の道を塞ぐように回り込んで…ホントにしつこいわねー！！

「アンタ…いい加減に「アリサ！すすか！！」ってその声は！？」

一瞬その声を聞いた瞬間、条件反射で胸の鼓動が跳ね上がったのが自分でも分かる…だってその声の主は…私の…

S i d e O u t

キヨウスケ S i d e

「アリサ！すすか！！」

「「キ、キヨウスケ（君）！？」」

いきなり声をかけたから驚いたかな？

まあ、先ずは…

「…僕の知り合いが何かしましたか？」

軽く睨むカンジでアリサ達に付き纏っていた男に話しかける…いや、殺気までは出してないから！

「い、いえ…その…」

「ナンパだったら他を当たって下さい…彼女達も迷惑していますし」

「い、いえ！！決してそのような…私はこういう者です…」

男が慌てて名刺を差し出してきたので見てみると…

「…… ×芸能プロダクション？」

「はい、以前からお誘いしているのですが…良いお返事がなかなか頂けなくて…」

「私達はその気はないって言ってるわよ！…」

「うん…私もその気はありませんから…」

なるほど…2人を芸能界にスカウトしているのか…

確かにすすかは可愛いし、アリサは……まあ…黙っていればレベル高いからな

「……アンタ今、すごく失礼な事考えてなかった？」

ヤバッ！アリサの読心スキルを忘れてた！？

「そ、そんな事より…アンタ！2人ともその気がないっていつてるぞ！」

「いえ…だから…それをこれからじっくり話し合おうとですね…」

「……まあ確かにこんだけ可愛い女の子2人もいれば必死になる貴方の気持ちも分からなくもないですが…」

「で、でしたら「だけどな!!」な、なんです!?!」

「…2人が嫌がっているのを無理矢理するのはどうですか…?本気でストーリーカーとして警察に通報しますよ?…なのは!!」

さつきから物影に隠れていたなのは…と言っても、実はいつでも警察に通報出来るように携帯片手に待機させてたんだけど

「うん!!…すぐにも通報できるよ!!」

後は…

ピリッ

僕は先程の名刺を破り捨て…

「…警察呼ばれたくなかったら諦めて他の子を探す事をお勧めしますよ?」

今度は軽く殺気を込めて丁寧にご退場を願った

「……ヒッ!？」

殺気が効果ばつぐんだったのか、男は慌てて逃げ出していった…

「2人とも、大丈夫…夫？」

「「……………/ /」」

2人も何か顔を真っ赤にしてポーツてしているけど…??

「おーい…2人とも？」

「…ッ!? キキキキヨウスケノ!!!?」

「…ふにあノノ!!!?」

何二人でそんなに慌ててるんだ？

「…とりあえず大丈夫そうだな？」

「う、うん…ありがとうキョウスケ君ノノ（キョウスケ君に可愛いつて言われたノノキョウスケ君に可愛いつて言われたノノノノキョウスケ君に可愛いつて言われたノノキョウスケ君に可愛いつて言われたノノノノ）」

「まあ…その…一応お礼は言っておくわ…ノノ（キョウスケが私の事可愛いつて…やっぱその…そういう対象として見ていてくれるって事よねノノ?）」

…何やら2人とも嬉しそうにしているけど…? ああ、しつこい人か



ら開放されたからかな??

「しかし、芸能事務所からのスカウトって凄いやな?」  
断ってよかったのか?」

こんなチャンス滅多にないと思うが…

「いいのよ!!あんな面倒なのは!!まったく、さっきの人も毎回  
毎回付き纏っていい迷惑よ!!」

「うん…何だか監視されてるみたいで怖かった…」

「ふうん…そういう物なのかねえ…」

…この時、自分がアリサ達の苦労を予想斜め上から味わう事になる  
とは思わなかったが…

「…………キョウスケくくん…私の事、忘れてないかなあ?」

「…………いや、忘れてないよ　なのは」

…「めん、ちょっと忘れてた

「…そーいやアンタ達2人で何してたの?」

…何やら急に重苦しい空気になったけど…アリサから黒いオーラが  
出てるように見えるのは幻覚だな…うん

「もちろんキヨウスケ君と2人つきりでデートなの」

「「なっ…!?!」」

「ちよ!?!なのは!?!僕たちはただ2人で買い物に來ただけだろ!?!」

「キヨウスケ君…解ってはいたけど…もう少し乙女心を勉強してなの…!?!」

ええっ!?!それなりに勉強はしてるんだけど…

「「(…ああ、いつもの鈍感王モードか…)」」

アリスもすずかも何か可哀相な子を見るような目で見てくるし…何さ!?!?

「あ、あのキヨウスケ君 立ち話も何だから…どこか入らない?助けてくれたお礼もしたいし…」

「そうね、せっかく会えたんだし…お茶でもしながらその【買い物】について詳しく聞きましょうか…ねえ、な…のは…あ!?!」

「ア、アリスちゃん…ちよっと怖いよ〜」

「フフフ…そうだね…なのはちゃんには特に、その辺りを詳しく丁寧に説明してもらいたいなあ…」

「すずかちゃんも目を単色にさせないでなの…!?!?」

おおっ！？魔王がシ ナとスノ に負けた！？

「ホラ！！アンタも下らない事考えてないで行くわよ！！」

「キヨウスケ君…あんまり遅いと…雪だるま的な物をたーくさん召喚しちゃっよ？」

つてM Rの人！？中身の人格が変わってません！？

ジ ナサ

そんな訳で某ファミレスでアリサとすずかに事の経緯を話している  
と…

「つて！？ちよつと待ちなさいよ！？なのは！！アンタ昨日そんな大怪我して今出歩いて大丈夫なの！？」

「にやはは うん、キヨウスケ君のお陰で全力全快なの」

「…はあ、キヨウスケと関わっている時点で私の常識が遠のいていくわ…」

何か失礼な事言ってね！？

「でもなのはちゃん…無理しちゃダメだよ」

「うん、ありがとっすずかちゃん」

「そっいえば、なのはどんな水着を買ったの？」

「えっと…ピンクのビキニタイプだよ キョウスケ君に選んでもら  
っの」

「…へへえ、前々から分かってはいたけど…アンタ本当にそーゆー  
の好きねえ…」

アリサはジト目でこちらを睨んで…って!?

「ちょ!?!ア、アリサ!?!そーゆーのって何だよ!?!」

「アンタの胸好きに決まってるじゃない!?!ビキニ選んでる時点で  
谷間見る気満々じゃない!?!」

なっ!?!何て言い掛かりな!?!?

「というか、前々から誤解があるようだが…僕は別に胸が好きとい  
う訳では…てかその噂はどこ発信だよ!?!」

「私ははやてから聞いたけど?」

「私も…」

「私はインフィ君だったかな」

…乳もみ魔とガラクタか…よし、先ずはインフィニティを握り潰し  
…って、あっ!?!そーいや今日はアイツ置いてきたんだっけ…チッ、

運がいいヤツ…

「ま、まあアンタがそんなに胸が好きなら……わ、私の……その……む、胸を見せてあげても……／＼」

「ん？悪いアリサ、考え事してて聞こえなかった……何て言ったんだ？」

「な……なんでもないわよっ／＼！！」

「（……アリサちゃん……大胆……ううん！！わ、私だってキョウスケ君の為だったら……／＼  
こ、今年は頑張ってビキニに挑戦……しようかな／＼？）」

「すずかもどうかした？急に黙り込んで……？」

「う、ううん！！何でもないよ！！？」

……まあ……とにかく変な噂が身内関係者に広まっているのは由々しき問題だな……

「まあいいわ、キョウスケ！！アンタ私の水着選びも手伝いなさいよ！！！」

いきなり何！？その暴君っぷりは！？

「私の水着も選んでくれると嬉しいな？」

貴女もですか！？すずかさん！？

「…2人と…キヨウスケ君に水着選んでもらえるのは…私だけなんだよ？」

…あ、魔王が復活した!？」

「な、何よ!？別にいいじゃない!！」

「そっだよー　なのはちゃんだけなんてズルイよ!！」

…と言うか僕が水着選ぶ事は確定すか!？」

「あの「「「キヨウスケ君は黙ってて!！」」「…は、はい!！」」

ヤバイ…何この状況!？」

「だいたいアンタ達魔導師組はいつつも一緒にいるんだから、たまにはこっちに融通きかせなさいよ!！」

「そ、それとこれとは別なの!！」

「さ、キヨウスケ君　2人つきりでお店にいこ」

「「すずか(ちゃん)!!何抜け駆け禁止!！」!！」」

「ちえ…もう少しだったのに…」

あの…お店の中なんだから…静かにしようよ…

「もうっ!2人共…いいかげんにしないと…呪うぞ!！」

いや！？なのは！！？それキャラ違っぞ！？

…その後、新たな乱入者によりお店が大騒ぎになり…

当然ながら店員さんに注意され出入り禁止になったのは言うまでもないか…不幸だ…

ん？乱入者って誰？

それは…

S i d e  
O u t

おまけ

「あかん……キョウスケ君…何処に行つたんやー！ー！ー！！！」

「完つ全に見失つちまつたな…」

「ど、どないしよヴィータ！？このままだとキョウスケ君が…あの魔王の毒牙に！？」

「クソツ！？ シャマル！！探索魔法でわかんねーのかよ！？」

「えっと…近くにいるのは確実なんだけど…待つて今正確な場…そないな悠長な事言つてられへんでヴィータ！！ここは女の勘で捜し当てるんや！！」つてはや「おう！！ぜつてー見つけてやる！！」ヴィータちゃんも落ち着いてー！！」

「…はやてちゃんもヴィータちゃんもテンパリ過ぎだよー！？」

「…ねえシグナム…探索魔法で正確な位置を捜してからの方が見つけるのが早いと思うのは間違ひかな？」

「普通はそうだが…言い出したヴィータすら慌てすぎてその事に気付かないとは…」

「…まあ、帰つて来たらキョウスケとなのはには尋問しないとね…フフフ」

「…もはやテストロッサはオブラートに包んで話す気はないのだな…」



「はやてちゃん、リインはもうお腹ペコペコですう……」

「…しゃあないな…あそこのファミレスで補給しながら作戦会議や  
…！」

ピキーン！！

「…はっ！？何か命の危険な予感が…」

「ちょっとキヨウスケ！！何ポーツとしてるのよ！！」

「アリサちゃん！！私の旦那様（キヨウスケ君）に何言ってるの！  
？」

…つか、なのはさん？もはや主音声と副音声が逆になってません！？

「ねえキヨウスケ君？アリサちゃん達は放っておいて一緒に水着買  
いに行こ？」

「…だから抜け駆けすんな（しないの）……！！！！」

…いつまで続くんだよ？

作…もうすぐ終わりますよ？

ほ、本当か！？作者よ！！？

作……無事でいるよ？主人公……

……へっ？

ピンポーン

「いらっしやませー」

そして……悪夢の扉は開かれた……

「は、はやて！？ヴィータ！？こ、これは……ってフェイトさん！？  
何で店内でバルデッシュを！？ ちよっ！？なのはもレイジングハ  
ート出して対抗しないでくれー！！？」

ドツゴオオオオ……

作：はたして主人公の生死は！？

「い、生きて……ガクッ」

作……まあ、次回には復活してるからいいか

「…何気に神より酷くないか!？」

作…いやあそれほどでも

「褒めてねーよ!…」

主人公の必須能力は…

学校

キョウスケSide

さて、今日は久々な感じがするが学校に来ています

…ん？学生なら学校に行くのは当たり前？

いや〜 何気にFAITHの任務が入ってたりしてね〜 まあ、  
のは達よりは出勤頻度は低いが…

と、言う訳で昼休み…

僕はいつものメンバー…まあ、なのは・フェイト・はやて・アリサ・  
すずかと一緒にお弁当を食べています

「キョウスケ？誰に話しかけてるの？」

「いや…まあフェイトさん…察して下さい」

「??？」

「そんな事よりキョウスケ君、今日のお弁当はどや？」

そんな事って…ま、まあその方がこちらも助かるけどさ…

「いつもながらはやての腕前は完璧だな」

「そ、そか／＼そう言ってもらえると作り甲斐があるってもんやな」

うん、はやての作るお弁当は美味し…ん？

「……ジイイイイ……」

いや、皆してそんなに凝視されてる…？

「あ、あの…そんなに睨まれると…食べにくいんですが…」

「…ねえ、はやてちゃん…何ではやてちゃんはキョウスケ君のお弁当を作ってくるの？」

「そら一緒の家に住んどるんやからお弁当作るのは当たり前やないか」

まあ、家事ははやてと分担してやっているからな…シグナムやヴイータも多少は手伝ってくれてるし…

シヤマルは……ま、まあキッチンにさえ入らなければ害はないし……  
ザフィーラは……ま、まあ管理局の仕事で活躍してもらおう……！  
うん……！

「（はやてちゃん……羨ましいの……）」

「（キヨウスケにお弁当……今度作ってこようかな……そ、そしたらキヨウスケも……／＼）」

「（……クツ、分かっていた事とはいえ……でもお弁当作るなんて私のキャラじゃないし……はあ）」

「（……はやてちゃんには……負けないんだから……！……）」

……何やら分からないが……凄いオーラがなのは達から出ているような……

「ところで次の時間ってLHRやる？何やるか聞いとる？」

「確か……今度やる大規模なイベントの準備……だったっけ？」

近々何やらイベントが開かれるらしいのだが……詳細はまったくもって分からないんだよな……何やら機密扱いとかで……

「ああ、私知ってるわよ？」

「私も知ってるよ？」

いきなり機密ダダ漏れ！？学校のセキュリティは大丈夫なのか！？

「本当！？アリサちゃん！？すずかちゃん……！！？」

「ええ、家の方にイベントに協力してくれって話しがあつたから」

「私の家の方にもあつたよ」

「…何だか衣装協力をしてほしいって」

「…衣装協力?!?!?」

衣装って…劇でもやんのか?

「アリサの方はどんな協力をしたんだ?」

「私の所も衣装協力よ」

「…というか…一体ウチの学校はそないに衣装集めて何する気や!?!?」

「アリサ達は知ってるんだよね?何なの?」

「うん…一応発表まで黙っててって言われてるし…」

「まあ少なくとも…私達には被害がないのが救いよね」

「ア、アリサちゃん!?被害って…そんな危なそうな事するの!?!?」

「ああ、大丈夫よ?なのはが考えてるような事じゃないから。

ただ…賞品獲得の確実性が無くなるのは痛いわね…」

…い、一体この学校で何が起ころうとしてるんだ!?!?

教室・LHR

その答えは割と早く判明したが…

「『『『『『ミ・ミスコンー！！？』『』『』『』」

「ええそうよ？全学年対抗の…ね」

中学でミスコンをするって…いいのか義務教育機関！？

「ってか、何でアリサがHR仕切ってたんだ！？」

「そんなの私がクラス委員だからに決まってるじゃない！？」

…ええ〜 そうだったっけ？

…確かに無駄にカリスマ性はあるけどさ〜…

「…何か文句でもあるの？アンタは！？」

「い、いえ…特には…」

相変わらず鋭いな〜

「ねえアリサ、ミスコンって具体的には？」



「各クラス代表1名を選抜して最終的には投票で1番を決めるのよ！」

…割と普通のルールだな

「ちなみに優勝したクラスには…学食のスイーツ年間優先& a m p ;  
無料パスよ！！」

「『『『『『おおおおー！！！！！！！！』』』』』」

クラスの女子ほぼ全員から歓喜の雄叫びが！？

ここの学食のスイーツ…最近になってかなりのレベルになり、女子学生は勿論女性教員からも絶大な人気で販売数分で全て完売になるのだ！！一番人気のショートケーキなど入手困難な程の伝説級の一品なのだ…

…まあ、実は僕が暇潰しに作ったスイーツなんだけど（笑）その為に数に限りがあり入手困難になってるんだよね

この事実を知っているのは・フェイト・はやてには別荘で何度か出しているので皆程は騒いでないようだ…

「ゆ、優先となると…あの入手困難な伝説のケーキも…」

「ああ…夢にまで見たホール食い…」

「あの至高のケーキを食べると…どんな願いも1つだけ叶うという…」

そんな大層な物でもないんだけどな。　　というか最後の人！！それ  
ドラゴン　ールだから！？

「だったらウチのクラスは優勝確実だよな。」

「ああ、何せ聖祥5大美少女がそろってんだ！誰が出ても優勝間違いないよな。」

ウチのクラスの男子生徒AとBがそんな事を言っているけど…

まあ確かにそこは否定はしないが…

「ああ、ちなみに私となのは・すずか・フェイト・はやては出場  
来ないから」

ピシッ！！

…あれ？何か空気にヒビが入った音が聞こえたような…

「「「「「な、なに————ツツツツツ！！！！？」」「」「」

ク、クラス全員からの絶叫がああああ！！！？こ、鼓膜があああ！！！？

「うるさ————い！！！！これは決定事項よ！！！」

「ね、ねえアリサちゃん…何で私達が出れないか説明位しないと…」

「ア、アリサ…なのはの言つとつりだぞ？下手したら暴動が起きる  
勢いだし…」

と言うか、特に男子生徒が殺気立って臨戦体制なんだけど!?

「はあ…学校側が「貴女たちが出場すると、優勝クラスがその時点で決まってしまう公平さが欠ける」って言うてきたのよ!」

…言われてみればそうだよな

全校チェックした訳じゃないけど…なのは達以上のルックスを持っている女生徒って居なかったし…

「という訳で、私達以外でクラス代表を選出しないといけないのよ!!分かった!?アンタ達!!!!」

「……は、はい………」

皆のテンションダダ下がりだな…まあ勝てる試合が無効試合になったような物だし…

「で、誰が立候補いる!?!」

シーーーーーン

つか、そこで立候補って普通は居ないんじゃないかね? 手を挙げたら自意識過剰って思われるだろ?

「なあアリサちゃん、ミスコンの出場資格ってどないなっとなるん?」

「えっと…参加資格は在学中の生徒なら誰でもOKって事になってるわよ?」

「…参加資格はホンマにそれだけなんか?」

「ええ、ルールブックにもちゃんと書いてあるし」

「……………だったらキョウスケ君を女装させてみるのはどや？」

……………へ？

「キョウスケを！？……………確かにルール上は問題ないし……実に面白そうね」

「待て待て待て！！！！何でそーなる！？」

「ついこの間そんな話が出とったしな〜 大丈夫やて、キョウスケ君には素質あるで」

ぜんっぜん嬉しくねー！！！！

「神代君に女装…面白そうね〜」

「そうね〜 確かにインパクトはあるわよね〜」

「男の娘…ああ、ご飯が進みそうな光景だわ…／／」

「神代が女装って笑えそうだよな〜」

「折角の機会だ、笑わせてもらおうぜ！！」

クラス中で既に決定みたいな流れになってね！？ つか真ん中は危ない発言してるし、後半男子生徒は悪意しか感じないよな！？

「じゃあ決定ね！」

「決定ね！じゃねー！！断固拒否するに決まってるだろーが！！！」

「往生際が悪いわね〜…なのは！フェイト！！すずか！！！」

「うん！！！！！！」

ガシッ！！

返事と同時に、3人が僕を羽交い締めにした！？

「な、なのは！！フェイトやすずかまで！？な、何の真似だ！？」

「決まってるの！キョウスケ君にこれからお化粧するんだよ？」

な、何恐い事をサラッと言ってるんだ！？

「ごめんねキョウスケ…私も…その…見てみたいな／＼」

「キョウスケ君なら素材がいいから可愛くなるよ〜」

だから全ツ然うれしかねーよ！！

「はやて！！例の物を！！」

「任せときアリサちゃん！！…ジャジャジャッジャジーン！！メイクセツッ〜」

何ドラ もん的な効果音でそんな物を！？つか何で持ってるんだ！？

「そら中学生には必須アイテムやからに決まっとるやろ?」

これだから近頃の中学生は…イカンイカン!? 発言が年長者的な物になってる!?

「さあキヨウスケ! ここまで来たら腹くくりなさい!」

「クツ…だ、大体僕が女装しても優勝なんて出来る訳ないだろ!」

「優勝?…フッフッフ…甘いわね!」

既に私達の行動理念は…キヨウスケに女装させてみたいになってるよ!…!」

つか既にミスコン一切関係ねーのかよ!?

「さあキヨウスケ君…お化粧タイムや」

「ちょ!?! は、はやてさん!?!…ま、待て!メイク話せば分かるわあああ!…!」

「あ、はやてちゃんが使ってるメーカーってマジヨリカ?」

「そやよ、なのはちゃんは?」

「私はマキアージュなの」

…「、こんな時にもガールズトークかよ!?

数分後

「…後はこれで…」

うつつ…結局僕は…汚れてしまった…orz

「…さあ!完成し…た…ツ!?!?」

へ???はやてが僕の顔を見るなりorz状態に!?

「は、はやてちゃん!?!どうしたの?」

「……なのはちゃん…私は…とんでもない物を…パンドラの箱を開けてもった……」

「とんでもない物って…ねえキョウスケ君、どうし…た…グハッ!?!?」

僕の顔を覗きこんだのはまで血を吐きながらorzに!?

「は、はやて!?!?なのは!?!?」

「2人ともどうしちゃったの!？」

「……キョウスケ君が……(チラッ)」

再び2人が僕の顔を見ると

「……ッ!?!？」

慌てて顔を背けてしまった!？」

「何なんだ?なあフェイト、すずか……どうなって……って、オイ!  
何で2人も人の顔見るなり顔を背けるんだ!？」

「う、ううん!?!な、何でもないから!!?!？」

「うん……大丈夫……夫……だから……」

明らかにおかしいよね!？」

「なあ皆……?？」

僕が振り向きクラス中を見回すと……

「……」(。°。;)「……」

つてなカンジで全員言葉を失なってる……やっぱ僕が女装なんかした  
からこんな変な空気になったんだよね　はあ……鬱だ……

ピッピッピッ



『(マスター、Ky:クロノ執務官からのエマージェンシーです…)  
』

クロノから?…皆の前だからエアディスプレイは表示できないから  
音声だけで…っつと

「(どうした?この時間は学校なんだが)」

「(す、すまない!緊急事態だ!!第12972世界でアインスト  
が現れた!!)」

…チツ、アインストか…

「(…状況は?)」

「(一体一体なら何とかまだ対処出来るのだが…数が多くて状況的  
にかなりマズイんだ!!クツ、フリーズブリット!!)」

状況はかなりマズイか…

「(分かった!先にさくらを向かわせる!僕もすぐそっちに合流す  
る!!それまで持たせるよ!!)」

「(なるべく早く頼む!!)」

…はあ、仕事ならしょうがないか…

「先生!!」

HRを見守っていた教職員に話しかけ…

「……………」

…話しかけたが呆けていた！！

「…はあ、アリサ…悪いが仕事が入ったから早退するな」

「…ハッ！？仕事って…！！？」

「クロノが絶賛ピンチ中らしいから…じゃあ後は頼んだ！！」

僕は後始末？をアリサに丸投げして急いで教室を後にした…

そう…急いで…だから頭からすっかり抜け落ちていたのだった…

自分の状況を……………

S i d e O u t

「ち、ちよつと！！！！？ ま、待ちなさいよキョウスケ！？この混  
乱を私に丸投げ！？」

余談だが…その時のクラスの女子はorz状態に…

男子は…全員目がハートマークだったとか…

「こ、こんなカオスの状態をどうしろって言うのー！！！！！！！！！！」

クラスの中心で叫んでいたアリサだった…

がんばれクラスいいんちよさん！！

現れた美少女!?

前回までのあらすじ…

アインストに襲われているとクロノからの緊急連絡で救助に行く事に!

まあ チャツチャと片付けるか

…しかし…ん…何か忘れているような…???

管理世界

クロノSide

クツ!!まさかこんな場所でアインストと遭遇するとは!!

「クロノ君!!私だけじゃ手が足りないよ!!」

先程さくらが先行してこちらに来てくれたが…彼女でもあの大群相手では焼石に水か…いや、対処できるだけで十分驚嘆に値するな…

悔しいが僕たちではもはや手も足も出ないのが現状だ…

「クツ…総員撤退だ!!怪我をした隊員を最優先に転送ポートに!!」

「クククク、了解ツ!!」「」「」

まったく…我ながら情けない!!

「もう!!手加減しないんだから!!ファイアリー《THE FI REY》!!」

ゴオオオオオ!!

「ククク　ツ!?!?」「」「」

さくらの魔法…先程とは威力が違う魔法でアインストを倒していく

…クソツ!僕等の魔法ではアインストには通用しないのか!!?

「　　ツ!?!?!」

バシユウウウ!!

「クロノ君!! 危ない!!」

…ッ!? しまった!! アインストグリートからの攻撃!? ダメだ!  
! 避けきれない!!

そう思ったその時!!

「ファイアーウォール!!」

ドカアアア!!

僕を庇うように間に入り、アインストの攻撃を防いでくれた…

「ふう… 何とか間に合ったか… 大丈夫かクロノ?」

僕を助けてくれた人が振り向き…

「き… 君は… / /」

僕の目の前に… 女神が舞い降りた瞬間だった…

S i d e O u t

少し遡り

キョウスケSide

シュンー！

ここがクロノが言っていた管理世界第…何番かは忘れたが…

「とりあえず…インフィニティ、バリアジャケットを！」

『はい、バリアジャケット…最適化』

ピカッ

…ん？何やら聞き慣れない単語が？  
とりあえずバリアジャケットを展開したのだが…

「…何か…下がスーサーするな」

『それはスカートだからですよマスター』

ああ、なるほど……つて！？

「ぬあ！？な、何で僕がスカートを！？」

て言うか、バリアジャケットも何時もの黒のロングコートタイプじゃなく、白をベースにハーフジャケットにスカート…なのはとやのバリアジャケットを足して割ったカンジの姿に!?

『そりゃ…今のマスターの姿に合わせたからですよ』

今の姿って……………あ!!

そ、そーいや…はやての策略で女装したまま…

「つか、髪の毛まで伸びてる!？」

気付けば、髪の毛までロングヘアに…これじゃまんま女の子ぢやねーか!？

『大丈夫、とても可愛いですよ?例えるなら【乙女はお姉さ に恋してる】の宮小 瑞穂のような』

おとボクかよ!?!つか何!?!その主人公の男性が女装して女子校に通う的な設定を僕に重ねさせたような感じは!?!

で、サラッと現在の僕の容姿の説明したし!?!?

『完璧なエルダー（お姉様）ですね。リインフォースもそう思いますよね?』

《ええ、とってもお似合いですキョウスケ》

さ、最後の砦のリインフォースまで……………絶望した!?!この世の全て



に絶望したっ……！！

「クツ……と、とにかく先ずはこの化粧を落とす……！」

『おや、別にそのままでもいいのでは？』

よくねーよ……！何か悲しゅうて、こんな姿で戦闘区域に行かないといけないんだ……！？

《……キヨウスケ、残念ながら時間がありません……今サーチしたのですが、さくらら1人で現在戦闘継続中です》

さ、さくらら1人……？いくらクロノ達が役立たずのエセエリートだとしても、援護位は………期待しても無理か………アインスト相手じゃ

「流石にさくらら1人じゃ危険だ………ホント不本意だが………とりあえずそちらを最優先する………インフ………いや、リインフォース………さくららの位置を捕捉して転移魔法を………！」

《既に完了しています》

さっすがリインフォース………！仕事が早いな………

「よし………！座標固定………転移………！」

シュン………！！

『あ、折角ですから変声機機能を使って今のマスターの声を堀江由衣ボイスに設定しましたから』

よ、余計な事をー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？

……このインフィニティのしでかした余計な設定（多数）のせいであんなややこしい事になるとは……

シユン……！

さくらの魔力反応を辿って転移し……

「っと、な、何だこのアインストの大群は……」

僕が見た光景は……あたり一面に広がるアインストの軍団だった……

「っと、こうしちゃいられない！！近くにさくらが居るはず……」

『マスター……！2時の方向に居ました！』

インフィニティが教えてくれた方角を確認すると……あ、居た……！近くにはクロノや武装局員も……ああ、さくらのやつ……派手にぶっ放し

てるな〜……つてオイオイ!!

《キョウスケ!!クロノ執務官がインストにロックされています  
!!》

「クツ!!間に合え!!」

キュツ…ダツツ!!

僕は虚空瞬動を使い、一気にクロノの前に回り込み…

「ファイアーウォール!!」

ドカアアア!!

何とかインストの攻撃を防いだ

「ふう…何とか間に合ったか…大丈夫かクロノ?」

僕が振り向きクロノに尋ねると…

「き…君は…」

と、言う訳で間一髪の所を助けたんだが…

「……………／／」

…何だか凄く寒気やら鳥肌が立ちまくりなんだが…何か身の危険が！？

「あ…クロノ、一応聞くが…どっかに頭でもぶつけたか？」

「…ッ！！？い、いや！！大丈夫ですッ！！」

そ、それよりここは危険ですから直ぐに避難して下さい！！！！」

避難…つてもねえ…

「助っ人を頼んでおいて、来た瞬間に避難しろって言われても…」

「えっ！？頼んだ…って…??？」

何言ってるんだ？つい数十分前に通信してきたじゃないかよ…

《（あの、キョウスケ…今のあなたの姿ではクロノ執務官殿は気付かないのでは？）》

…あ！！し、しまった！？　　そういや女装そのままだった…

…いや、しかし…ここでクロノに正体明かすと変態扱いを受けるのは必死！？

こ、ここはこのままごまか「あれ？キョウ君？何でそんな可愛い女の子の姿に??」って！！？

「サラっと思抜いてサラっと思抜いた!？」

流石僕のパートナーというか何と言つか…ハッ!？」

「……すまない ま、まさかとは思うが…キ、キョウスケなのか？」

クロノにバレた!？」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイいいいいいい!!!  
このままじゃクロノと同じ変態の仲間入りぢやねーか!？」

「……ヒ、ヒトチガイデス……」

「……何故片言なんですか？」

…だ、ダメだあ…いい言い訳が見当たらない!？  
し、仕方ない…腹括るか!

「……ああ、ちょっと学校ではやて達やインフィニティの策略には  
まり……」

とりあえず真実を話して…

「そう、か…いや、しかし…それは…ノノ……」

…あれ?てつきりバカにしたり、からかったりしたりすると思っ  
たんだが…何やら1人ブツブツ言ってる?

「キ、キョウ君!!お話し中悪いんだけどアインストが!!」

おっと…そうだった!!

「さくらが数を減らしてくれたおかげ…って言っても、まだけつこ  
う残ってるな…」

どうすっかな

「よし、ここは一気に「待ってくれ！ここは僕に任せてくれないか  
？」ってク、クロノ!？」

任せて…って、手に負えないから僕に助っ人頼んだんだろ？

「このまま君に任せっぱなしでは僕の…男としてのプライドに関わ  
るのでな！」

「は、はあ…」

まあ、本人がやる気なら別にいいんだけど…何かえらい気合い入っ  
てね？

「そ、それに…君に僕の実力を見てほしいし…／／」

…実力つても、既に対クロノ戦で常勝無敗なんだけど？

「クロノ執務官!!我々もお供いたします!!」

「そうです！勝利の女神の前でぶざまに撤退なんて出来ません!!」

勝利の女神…?さくらの事か？

「君達…よし!!全員我らの力を示す時だ!!そして必ず生き残れ

「…これは命令だ！…いくぞ！…！」

「「「「「おー！…！…！…！…！…！…！」

「…ほ、ホントに気合い入ってるな…」

「…うん…（こ、これはまさか…う、うん…いくら何でもそれはな  
いと…信じたいッ！…）」

「ん？さくら？どうした？」

何か心配事でも？

「ほえ！？な、何でもないよ！…？」

…ならいいんだけど…

結果として…クロノ達はアインストに勝利した…一体どっからそんな  
火事場のバカ力を…

つか、だったら僕の来る意味なかったんじゃない？

学校

シユン！

「ふう…結局何だったんだろう？」

何はともあれ、アインストを倒したクロノ達は…

「事後処理は僕らに任せて君は早く帰った方がいい。こんな血生臭い場所、君がいるような場所ではないしな…／＼」

…という訳で、クロノに任せて先に帰って来たんだが…

『どうかしましたか？』

「…いや、何だか局員達は勿論クロノまで妙に優しいと言うか何と  
いうか…」

普段だったらお前も手伝え！って言うてくるのに…何か悪い物でも  
食ったか？

それに何か視線が熱っぽかったような…

「ま、考えてても仕方ないか、バリアジャケットOFF」

シユウウウウ



さて…教室にカバン取りに行かないとな

## 教室

ガラッ

「ふう…つて、あれ？皆まだいたの…か？」

教室にはまだクラスメイト達が居たのだが…

「………（；）」「」「」「」

…何故か更に全員変な顔に！？

「ね、ねえアンタ…」

「ああ、アリサ…皆どうしたんだ？」

「…ッ！？その喋り方！！？声が変わってるけど…もしかしてキ、キョウスケなの！？」

…インフィニティ…変声機は切れよ…

「キ、キョウスケ君！？その髪の毛はどうしたの！？」

「なのは？その髪の毛って…ああ!？」

髪型もインフィニティに弄れたままじゃねーか!？」

「あ…なんと云うか…」

てか一般人の、それもクラスメイトの前で魔法とは言えないしなあ…

「な、なあキヨウスケ君…ちょっとウインクしてもらってええか？」

「え？なんで？」

「ええから！ちょっととした実験や!！」

実験って何だよ…まあウインク位いいけどさ

パチッ（キラリン ミ）

僕ははやてに言われたようにウインクすると…

「……グハッ!……!」「……」

ク、クラスの男子が血を吐いて倒れた!！？

「な、なんだよ!?!いくら僕が女装してるからって…血い吐く程気  
持ち悪いのかよ!?!」

…別に似合ってほしくもないけど…これはこれで何か凹むな…

「キヨウスケ君…たぶんそれ違うよ?」

「違っつて??ハツ!？」

気が付いたら女子に囲まれてる!？

「「「「「キヨウスケ君……………」」」」」

「な、何でしょう…?」

な、何このプレッシャー!？

「な、何でそんなに可愛いのに……………!……………!……………?」

……………は?

S i d e  
O u t



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8300k/>

---

魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

2011年10月26日03時01分発行